日本プロレタリア文学大系

序

三一書房

責任編集　平野謙　蔵原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

序

日本プロレタリア文学の母胎と生誕

明治三十年から大正五年まで

三一書房

序巻

「日本プロレタリア文学の母胎と生誕」

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

序巻目次

I 小説

第一部

第二部

II 評論

III 詩・短歌・俳句

詩

I　小説

第一部

兵燹中の天津

田岡嶺雲

苦なるものもとより多く、惨なるものもとより多し、而かも戦より苦なるもの惨なるもの亦少からん。我は昨天津に入るの途上に於て、天熱に喘ぎ、飢喝に迫り乍らも、猶銃を肩にして進み、終に路傍に倒るるの兵士を見今天津に入て、兵燹にかかれる居留地の光景を見て、我は寧ろ非戦を唱うるの人たらんと思えり、我は戦の、人なるもの世にあらん限りは避くべからざるものたるを知る、又我は戦なるものの時運を促進する上に於て利する所あるを知る。廿七八年役は縦令台湾を得ず、四億万の償金を得ざるも、猶世界をして我を認めしめたるとともに、島国根性の我国人をして其眼界を潤うして世界的となしたるの利はありたり。清国は其破れたる打撃は酷なりしも、猶為之に自強の努めざる可らざると風気革新の已むべからざるとを自覚したり（これがために清国の孱弱を暴露して、露独の野心を遂げしめ、東洋の時局を艱にしたるは、遼東還附によりて我国の怯を示し、我を侮らしめたるに由るものにして、寧ろ此役の罪にはあらず）故に我は一国の進運を促すものが革命たるが如く、世界の進運を促すものは国と国との戦なりと信じたりし也。而かも今目のあたり、戦の苦と惨とを睹るに於て、血を以て買わざるべからざる戦の利のあまりに高きを感じて、我は非戦論者たらんと欲するも能わざる也。

我は塘沽より火車中に於て、沿道の民家が悉く火を放たれ、無辜の民が恨を呑んで路傍に撃殺せられあるを見て、無惨の極と思えり。鉄道の開通を安全に防備する上に於て匪徒をして隠匿する所を失わしめんがためには、此策も亦已む可らざるものたるべしといえども、無告の良民が其財産を烏有にし、鋒刃にかかりて死し、然らざるも其妻孥は離散し田圃は蹈にじらるるの哀を想えば、誰か為之に憮然たるを禁じ得んや。況や軍事の防衛上に用なきもただその惨酷なる、血に飢えたる虎狼の心を飽かしめんがために此の種の惨事を行い、以て快とせるの跡を見るをや。我軍規の厳を以てするも、二十七八年役当時に於て猶いまわしき強姦掠奪は至る処に密に行われたりというにあらずや。況んや規律なく暴戻なる他国兵をや。此をしも殺伐なる戦時に於て不可避の事なりとせば、我は益々以て戦の非なるを決せざる能わず。

此思想は天津郊外の一村落が、方に烟焰につつまれある現状を目撃するに於て、益々堅くせられたり。我眼に先ず映じた事は、其村落のとりつきの家の戸前に人の黒く焦げ

てうつ伏に僵れたる也。家は全く焼落ちて、火に燻ぼれたる壁土の壊れたる上に、小き一個の木箱のガラス蓋をはれるに、内には紅き白き、さまざまの色の組糸の類、容れられて其箱もそのままに、糸の色も未だ鮮かなるが攫出されあり。此者の其死すべき刻下までも、此家の門前に露店して商い居れるものなるべし。あわれ彼、其日に終るべき命とも知らで口を糊う其日の活計に追われたりけん、養うべき親やありたる、妻子やありたる。此の如きは彼一人にはあらじ、沿道に僵れたりしもの、又火炎中に焼死ぬるもの、いずれか哀れの数にもれん。文明の戦は無辜を犯さずというも、戦というもの已に相犯す也。已に戦あれば其殺伐の気の溢るる所、勢無辜を害うに至らざるを得ず。故に我は若しありたりとするも二十七八年役に於ける旅順の虐殺を以て列国に対して愧ずるに足らずとし、又今次に於ける露兵が沿道の民を、老若男女の択なく殺したりというの風説をも、我は戦時に於てはあり得べき事恕す可き事なりとして、之と共に我は寧ろ此に至るべき戦なるものを根本的に非認せんと慾する也。

此村落は挙げて焼かれたり。多くは焼落ちて堆き灰燼のうちより烟猶上る。敗壁残墟の燃のこれるが黒く焦げて、昔のさまの名残をとどめるのみ。中に一寺の宏侚なるが、半やけて猶お火炎のうちにあり、やけ落つる物音凄じく、烟を捲き焔を噴き、紅の火影、暮早き後の森の蒼きを焦す。民は死ぬる乎、逃れたる乎、隻影もなければ、かかる巨刹をやくるに任せたるは無残なり。居留地に入れば最も安全なりしという我領事館の四辺すら家の砲弾に焼けたるもの多く、火事になれて驚かざるに、誰消さんとにもあらねば、三日前よりとの火の猶燃残りて焔を吐きつつ、雨もつ闇き夜の空に映る。燃落ちたるは、煉瓦の四壁のみ壊れたるままにやけ残りて巨人の髑骨のように凄し、支那人は其家を捨てて逃散し椅子卓子の類は委棄せられたるままに浪藉たり、其空屋の多くは兵の営舎となりて哨兵の剣いかめしく光れり、外人の家も皆堅く戸を閉じたり、時に戎装せるもののチラホラと往来う外は、路上寂として人の影稀なり、夜ゆけば哨兵に誰何せらる。支那人の外人に傭われたる徽号なきものは、二言ともいわず皆殺さるるべし、龍鐘たる一老婆の、六十を超えたるべきが、唯一人さまよえるが我に胸の十字架を指して危害なかるべきやの旨を手真似にて尋ねたる、恐れおののける様見る目にも、いじらしかりき。旧の開平鉱務局に在る我司令部に亦避難の清人あり、鉱務局の吏員の家族などにやらん、我見たるは一人の老嫗と、玉の如き小女の十才許なるが、奴僕の肩車にのりて、屋の一隅なる暗き窖の中に入るにてありき。

領事館にては胸壁を築かんとて羊毛の梱庭に堆く、門前の路には柵をゆい、胸壁用の毛梱の猶散乱せるは、敵の押寄するを決死して此処に喰止めて安全を万一に僥倖したるなるべし。当時敵の砲撃の激烈なりしも知るべく。我をして端なくユーゴーが、レ・ミザラーブルの末尾、仏の市民が市

街に胸壁を築きて官兵に反抗するの一節を想起さしめぬ。市街は皆店を閉じたり、ただ福利公司と及び一独商の窖の中に店を開けるあるのみ。これも時間を限りありて、砲弾来ること烈しき日は、全たく閉じて売らず、公園は精林鬱として茂り、蒼翠滴らんとするに、平時ならば士女涼を趁うて其間に翩翻すべきを、今は歩をいるる人もなし。敵よりの砲撃は寧日なし、砲弾は絶間なく我等は起臥する屋上を掠めて、膠々風を切るの音と同時に地響して爆発す。近きに落ちたるものは地震い屋蕩く、響の谺にのみ聞ゆるは我の放てるなるべし。彼我の応戦晨より夕に至ってやまず。砲声少しくゆるめば銃声ついで起る、潑々として急霰の物を撲つの音に似て、銃声ゆるめばまた砲声激し。銃といわず砲といわず、其爆発する時必ず人を殺し、物を損ず、我司令部の如き砲の発着点内にあり。営中の兵士此うちに起き、此うちに臥す。未だ戦に出でずして、此流弾に死するもの、すら亦ある也。而して戦ある毎に、営て船中に於て或は途上に於て相識れる将校士官の、或は僵れ或は傷く者ある也、之をきけば黯然として涙下らんとす、其面容猶眼に在りて、忽ち幽明相隔たるの人となる、仏家の所謂無常の感、陣中に於て殊に其深きを覚ゆ。我は蓮生が坊仏門に入れる動機を初めて此に悟り得る也。

（一八九九年七月六日太沽沖肥後丸にて）

東京の木賃宿

幸徳秋水

活地獄――木賃宿の異名――九千人のお客様一泊六銭――柏餅の雑居――雨の日の繁昌――三畳の家庭――千四百五十の世帯――擂鉢は車輪と廻る――二銭皿の餉――丼に落せし響――連込みの客――鬼一口――安宿ごろつき――良人ある身――夫婦喧嘩の統計――十年前の大家の嬢様――お湯は如何――屋根代の餌――丸裸の夫婦――是れにつきねど

野山長閑に春霞、立ちつづく道者笠は、農耕樵漁の暇ある折を、思い思いの阪東巡礼、四国遍路、肥後は熊本清正公、日向の生目八幡宮、信濃の善光寺、讃岐の金比羅、扨は伊勢参り、京見物の善男善女を送り迎うる、街道筋の木賃宿は、旅なれや恥は掻捨ての気散じを旨として、必ずしも貧民のみの巣窟ならぬは、世人の知る所也。同じ名なが

ら東京は、夫れとは趣き痛く異也。見るにも聞くにも、只々驚き恐るるの外はなき別世界、黄泉にも斯る活地獄の有るべしや。

東京にては木賃宿をば、一般に安宿或は安泊と呼び做せど、其客となる人々の社会にては、ヤキ又はドヤとも呼び、又アンパク、ボクチンなど云う言葉もあり。

ヤキとは宿屋のヤの字と木賃のキの字を続けしにて、ドヤとは宿を倒しまに読める也。アンパクは安泊、ボクチンは木賃を音読せるは云うまでもなし。労働に忙しき人々は其言葉も簡単にて響き強く聞ゆるを便とすれば斯る符牒を用ゆるが多し。

斯る怪しき符牒もて呼ばるる宿屋、昔は市内各所に散在せしが、去る明治二十二年の末、時の警視総監三島通庸は、市街の体面を保つが為めにと、其が営業の区域を限りて一定の場所に移らしめぬ。現在営業の場所と数とは、

浅草区浅草町……………………二十余戸
本所区花町、業平町………………七十余戸
深川区富川町………………………六十三戸
四谷区永住町………………………十八戸
芝区白金猿町(俗にエテ町)…………七戸
麻布区広尾町(俗に古川端)…………十一戸
本郷区駒込……………………………二戸

にて、其お客様をいえば歯代借の車夫、土方人足、植木人夫、其外種々の工夫人夫、荷車挽、縁日商人、立ン坊、下駄の歯入、雪駄直し、見世物師、料理屋の下流しなど、何れも其日稼ぎの貧民ならぬはなし。昨年末の調べにては是等の客人九千七百四十六人に及べりとぞ。扨も夥しき数なるかな。実に人の子は枕する所なしと云いけん、世界に家なき九千七百の人の子の為めには、二百の安泊は一夜の雨露を防ぐべき唯一の頼みぞかし。理りや、彼等は其宿料を木賃と云わずして、屋根代とぞ呼ぶ。

「御安宿、御一人前風呂付六銭、八銭、十銭、別間十八銭より二十銭まで」と記せる長方形の角行灯火影覚束なき軒端を潜れば、正面扨は横手の帳場に厳然と控うる、人足上りと見ゆる男は番頭なるべし。暮色蒼然として人顔わかずなる頃より、一人、二人、三人、五人、泥塗れの法被、破れし股引、切々の草鞋を穿ちて入来る客の今晩はの声も寒さに慄えて聞ゆめり。帳場の男、先ず客の住処、姓名年齢、職業と前夜の宿泊地を書取りて、「ヘイ屋根代を」と手を差出す。六銭の屋根代を受取れば立ちて四布蒲団一枚を小脇に抱え「大広間」に案内す。

木賃宿にての大広間とは、雑居の客を容るべき室をいう也。広さと室数とは家々にて異也。六畳と四畳半となるものあれば八畳一室なるもあり、八畳と十二畳の二つを備うるもあり。一泊六銭の客は皆な四布蒲団一枚を与えて、此処に追い込みて雑居せしむ。其定員は大抵一畳一人の割合也。

大広間には合宿の客の雑談興尽きて、昼の疲れに睡気ざ

せば、各々例の四布蒲団の「お柏」の中に潜る也。左れど漸く眠らんとすれば、後より入来る客の混雑に夢を破られ、稍や一騒ぎ治まりしと思えば、又もや、後の客の騒ぎは起る。斯くて物音の全く絶ゆるは、毎夜午前二時前後なるべし、況して此頃の寒空に、仕入物の蒲団の短ければ、足を伸せば爪先出で、膝を屈むれば「お柏」開き、隙洩肌に透りて堪うべくもあらず。寝覚がちなる夜の明放るれば、門口に備えし冷水の一檜杓を懇望し、儀式ばかりの手水を了えて、又も前夜の古法被、破れ股引、切草鞋！

斯る雑居の客をば、割込みという。割込みの屋根代は、六銭(四布又は五布蒲団一枚)、八銭（三布敷蒲団一枚と四布の掛蒲団一枚)、十銭(同上、但し蒲団の体裁少しく上等)、十二銭(三布敷蒲団一枚、四布又は五布掛蒲団二枚)。斯る定めなれど実際は百人の中八十五人までは普通六銭の柏餅にて八銭以上を出し得るものは僅かに百人中十四五人に過ぎずとぞ。

割込みの客にも、翌日も猶お滞在せるが有り。前夜の屋根代のみにて、其翌晩の蒲団を借るまでは、別に滞在費を要せず。但し昼間も蒲団を用ゆるものは別に損料を徴する也。

翌朝床上げの後に猶お蒲団を借るものは三布一枚に一銭五厘、四布又は五布一枚に二銭の割合の損料を払う也。

爰に注意すべきは雨の日の繁昌也。晴天の朝は早きは五時六時、遅きも七時八時には一同出払い、寂寞として大風の迹のようなれども、雨となればいずれも稼ぎの途なければ前夜のままに流連して濁酒、賭博、放歌、高論、泣く、笑う、四畳半、六畳の「大広間」の混雑譬えん方なし。偶々幾何かの銭余れるは、細暖簾に腹こしらえんとて出行けど、銭なければ終日食わずして寝。

一夜泊りの割込みの客を送り迎うるのみにては左ばかり驚き恐るべきにあらねど、安泊には大広間の外に多くの別間といえる室あり。学者よ、富豪よ、大臣よ、警視総監よ、更に進んで此別間の裡を窺い見よ、茲に我等の同胞と呼び国民と呼べる人類多くが、殆ど野獣にも均しき奇々怪々の生活を為し居れるを見るを得べし。

いずれの木賃宿にも、四個又は五個の「別間」というが有り。尋常ならば小座敷に数うる四畳半の狭きをも「大広間」と名づけて、割込みの客入るる木賃宿の、別間となれば皆二畳と三畳以下に限らるるも宜也。

別間は大抵夫婦者、偖は親子連の借切にて、永住なるが多く、旅宿と云わんよりは、棟割長屋の猶お下等なる生活也。窮屈なる一室の、前に後に高く低く、幾つとなく麁末なる棚しつらえて、右の柱に簓を吊す釘あれば、左の壁には手拭雑巾の掛れるあり。片隅に寄せたる膳椀の上に湯巻おしめの飜る中を、寝間也食堂也、仕事場也、彼等が為めには、一個の家庭の、天にも地にも唯一の慰藉の源ぞかし。中には親子五六人、或は六七人の一家族が、住めば住まるる三畳に重なり合いて、雀燕の巣だにも劣れる様、

憐れ也。

斯くて二年三年、甚しきは五六年、八九年の長きをも同じ木賃宿に世帯を持ちて殆ど我家の如き思いせるものあり。我が昨年十二月十一日より二十五日までの間に調査せる所にては、一戸の木賃宿にて斯る家族の住せる者多きは十二、少きも五を下らず、総計千四百五十有余の家族あるを知り得たり。左れば一戸の木賃宿に平均七個の家族即ち七個の世帯ある訳也。我れこの調査半ばにして止めたれば未だ全部に及ぶ能わざりしが、若し洩れなく調査せんには、更に驚くべき多数に達せしなるべし。

世帯持ちとはいえ、彼等の中に一通り日用の器具持てるはいと稀にして、多くは着のみ着のままなれば、鍋釜は愚か飯櫃、膳、椀、箸までも、入用の時のみ宿より借受くるを例とす。

我が調査にては前記の千四百五十有余の世帯持ちの中にて、不完全ながらも一通りの器具ありて、月々の用を足すもの、僅か三十有余に過ぎざりき。左れば百の世帯中僅か二戸のみ、残り九十八は無一物の割合也。

斯れば木賃宿の竈も釜も一切の炊事料理の道具は、常に数家族の共有となりて、毎朝台所の混雑は言語に絶す。

亭主が早出の準備にとて、三時から起きし車夫の女房ザクザクと米研ぎにかかれば、之に続くは立ン坊の嬶也。宵に仕掛けし竈の下を焼き付くる、一把一銭五厘の木片の火移り悪く、烟家中に漲れば、朝寝の山の神、嚏しながら目を擦り、燻すにも程がある、何でそんなに早くから騒ぐんだろう、時計を見るが善い、との雑言。負けては居らず、早く起きよと遅く起きようと此方の勝手だ、お前さんばかりが客じゃあるまい、とやり返す。何を生いきな、六女郎、寝惚奴と二言めには喧嘩也。後詰の加勢は亭主が出る。戦い将に酣ならんとする時、何だお前たちは、朝ぱらから碌でもねえことを聞くと仲裁の寝惚顔は、楊枝銜えしデーの老爺にて、肩に置いたる手拭は三年醤油で煮染めし如し。時刻移れば、一升足らずの南京米買って帰る下駄の歯入れの女房が、権さんのお神さん、貴女のお釜はあきませんかと尋ぬれば、一方には植木屋の女房が、其俎板が済んだら貸して下さいと催促す。私も俎板が入るのですと口を掛ける傍から、摺木を何処へやったと難詰する。いつ迄炊桶を使ってるんだろう、グズグズするじゃァないかと怒鳴るがあれば、此飯櫃の洗い様を見ろ、人間業じゃァねえ、亭主の寝伽をすりゃァ女の役が済むと思うのか、と中こすりの高声あたりに響く。数人の女豪傑の手から手に、一個の摺鉢、車輪と廻れば、一丁の庖丁電光と閃きて目覚しなんど云うばかりなし。一年三百六十五日、大抵朝は午前三時より七時頃まで毎日斯る混雑は繰返さるる也。

流し下の支度は朝のみにあらず、職業柄によりては朝よりも夜の方忙がし。殊に十四日と晦日の両日は多少に限らず、前借の残りを懐中にして帰れば、鮪の二銭皿に一把の大根、濁酒の二合も添え得んには、一家団欒の晩餐、これ

や彼等が極楽なるべし。其日稼ぎの労働者も同じく其日の労銀にて晩食済せ、残れる冷飯は翌日の弁当に詰めて出掛くれば、朝は至って無事なることあり。但だ夜は忙しくとも、銘々帰りの時刻の異なれば、朝の流し下の如き一斉射撃の戦にはあらず。

斯る家庭をつくれる価、即ち「別間」の屋根代を聞くに、十銭（二畳一室、四布蒲団一枚添う）十二銭（同上、三布蒲団一枚、四布蒲団一枚、合計二枚添う）十四銭（三畳一室、三布蒲団一枚、四布蒲団一枚、合計二枚添う）

こは何れの木賃宿にも行わるる長期貸切の定め也。此外、

十六銭、十八銭、二十銭、二十四銭の四種あり。是は一二泊の場合の屋根代也。其高下は蒲団の品柄、室の恰好、畳の良不良、出入の便不便等にて差ありと知るべし。又短期の宿泊には火鉢、土瓶、茶器の類を添えて貸渡し、此の外豆らんぷと称する小さき洋灯に石油をつぎて出すこともあり。別間の蒲団は貸切りなれば昼夜を問わず自由に使用し、人員の制限もなし。五人にても七人にても一家族と見做して同一の屋根代を徴す。左れど借受約束済みたる後に至りて人数増加すれば二銭又は二銭五厘の割増を取り立つることあり。

実に彼等は僅かに二畳の一室を、月三円より三円六十銭、三畳のを四円二十銭の賃出して借り居れるなり。一ヵ月に四円内外を払い得るならば、長屋の一戸は優に借受け得べきを、如何なれば斯る不自由不便の生活に高き屋根代を取立てらるるや。开は外ならず、彼等は唯だ一品の身につく物のなければ也。日用の家具だに新に求めんことの難ければ也。馬鹿馬鹿しと知りながら、一たび此境界に堕し来れば、井に落せし簪の永劫浮む瀬なきぞ哀しき。

恋せぬ里はなし。永住の夫婦親子のみならで木賃宿の、「別間」をば、変る枕の一夜妻が果敢なき契りの宿とすること近来の流行也。名づけて「連込み」又は「レコ附」という。連れし男を後に立たせて、今晩は、明間はありますかと訪う女の声聞くと等しく、それ来た、レコ附がと喜ぶ主人也。「連込み」「レコ附」は屋根代殊に高ければ也。

斯る客をば宿屋は頗る優遇して、蒲団なども多少の注意を加うより、屋根代も亦従って高く、大抵は二十銭より二十四銭を徴す。

連込みの客多きは浅草の木賃宿にて、之に次ぐは深川、四谷、本所也。麻布には左まで多からず。浅草なるは上野停車場、扨は浅草公園などに、遠近のたつきも知らず、漂泊える田舎娘が人悪き朦朧車夫に誘拐されて、鬼一口の憂目を見るが多く、深川、本所は遠国より来れる工女が生活の困しさに、折には堤の柳の露に濡れける内職の、是も進代歟か木賃宿に入込むもの多きに至れり。

此外裏店の車夫の女房が、同じ長屋の某と、小夜衣我妻ならぬ棲重ねあれば、昼は店頭の看板なる煙草屋の養女が、隣の職人の弟子に誘われ来るもあり。牛屋、安料理、

蕎麦屋の軽子、天場、銘酒屋の曖昧女、宵に合図の労働者と、思い思いの媾曳の種類は勝て数え難く、何処の家にも、毎夜二組三組の出来合い夫婦を見ざるは無し。

殊に目立つは二十四より三十前後の世馴れし女の木賃宿を渡り歩き、相夜の者と馴染みて女房気取の逗留せるを一般に安宿ごろつきと呼ぶ。

連込みの客の統計を聞くに、市内二百余戸の木賃宿にて、一昼夜に少くも八百組乃至千二三百組はあるべく、此外安宿ごろつきといえる婦人五六百人の多きに及べり。爰に哀れは夫ある身の情を鬻ぎて、其日の代の足とするものも尠からず。

本所板倉町辺に住む極貧者の妻は本所花町、業平町、深川の富川町、浅草の浅草町辺の木賃宿に出没し、去年九月の中頃より大晦日まで貧民の生活の尤も苦痛を感ぜし時に、是等の内職著しく増加して其数七十余人に及べりとぞ。斯くても彼等は僅に二十銭より五十銭位いを得るに過ぎずといえり。

恋と情の神聖も、金ありての上ぞかし。貧する身には唯だ一飯に饜かんが為めとて、二貫、三貫の端銭に切売の浅猿しさは、聞くさえ書くさえ忍びがたし。

扨又爰に去年一ヵ年の間、深川の或木賃宿にて作りし夫婦喧嘩の統計あり。

合計　五百三十一件

内訳

痴情……………………百四十二件
生活の困難……………二百九十四件
小児の処置……………七十五件
雑件……………………二十件

痴情の喧嘩は大抵年わかき男女なれど、生活の不如意より起れる喧嘩は、何れの夫婦も已むときなし。小児の処置といえるは連子なるに多く、又女の子よりも男の子なるに多し。去年中此宿屋に宿れる夫婦の数は、滞在と一二泊とを通じて二千五百九十三組なりしといえり。是等の夫婦朝にありては夕べに離れ、西東する浮草のそれよりも猶お定めなき生活也。

金殿の裏、玉楼の上にも、色に渇き慾に飢うる紳士はあり。校堂の中、塾舎の窓にも、情を弄び恋に溺るる才女あり。左れば浮世の楽しみは酒と賭博と唯だ是れのみの貧民窟に、いかで風紀の正しきを望み得べき。一たび木賃宿の閾を跨がん程の婦人は、忽ち其身の汚されざるなし。宿の亭主が相宿の客を媒介して一回の周旋料五十銭の塵も積れば、いと多額の利益となる也。

ああ世にも恥かしき禽獣の行いも、馴れては恥かしからぬ迄に堕落の道行、開けば生れながらの罪にはあらず。貧と不幸に身を攻められ、脅迫と誘惑とに心乱れて、泣きつ叫びつ悶え悶えし、末は拾撥の安宿ごろつき。これが十年前の大家の嬢様とは、いかなお釈迦様でも気が付き玉うまじ。

車夫、人足、立ン坊などの一日の労働に疲れ果てて帰り来る木賃宿の帳場にて「お湯は如何です」の声聞くは、天にも上る心地すべし。木賃宿にも亦風呂場あり。

普通の旅宿には大抵風呂あれど、下宿屋にて風呂あるは、十中の二三に過ぎず。左るを流石に労働者を客とする木賃宿には、麁末ながら風呂桶を備えて、隔日又は三日目位に客人を入浴せしむ。四谷永住町の十八戸の木賃宿にては、此入浴の便を与うること、殆ど競争の如くなれり。麻布の木賃宿も皆な隔日に風呂を沸かせり。本所、深川にも風附呂あり。浅草には多く見かけず。

左れど、一泊六銭の客には、是とても名のみに過ぎず。熱き時は熱鉄を溶せし如く、冷き時は殆ど水の如し。熱しとて加う水なく、水ありしとて後の客の為めにとて禁ぜらる。詮方なければ唯だ手拭を潤して、身軀と四肢を拭うて已むめり。

是は木賃宿の策略にて、湯熱くして全身を没し難ければ、おのずから長湯するものなし。左れば込合う客を待たしむることなく、次ぎ次ぎに入代らしむるに尤も必要なりとぞ。

斯く熱き湯も限りあるコークス、限りある薪の、尽くれば其儘冷ゆるに任せて省みず。

風呂の蓋開けば大抵午後六時頃にて、先登第一は宿屋の主人、続いて屋根代を納むる順序にて風呂場に案内す。是も屋根代徴収の一種の餌也。

麻布の或木賃宿にて一人の客人、さる規則に心づかず、直ちに風呂桶に飛込みたるに番頭追来りて、屋根代を入れて下さったかという。イエまだですと云えば、早く納めなさいと促す。風呂から上って納めますと、断るを屋根代を納めねば風呂に入ることは出来ませぬとて、強いて引出し宿料を取立てし後今度は公明なる案内にて入浴さしめたることあり。

去年の十二月半なりし、四谷永住町に宿泊せし一人の男の、三晩目に金なくなり屋根代の質にとて、半纏を脱ぎて帳場に預け、其儘風呂に入らんとせしに、コン畜生屋根代も払えぬ癖に、人間並に風呂に入りゃがると、番頭に罵られて面目なげに止めたるがありき。

屋根代の取立はいと厳重也。新なる客は入口にて受取り、滞在の客は午後六時より八時頃迄に取立つ。馴染ならざる客には如何なることありとも猶予せず。金なければ其所持品を預るを常とす。

職工其他常雇人夫の類にて、十四日と月末に労銀の支給を受くるものには特別の契約を為し、十四日と月末の二回に勘定すれど、是は少くも半年以上住居して、十分の信用あるものに限りて其例いと少し。

去年九月十三四の頃なりき。本所の木賃宿に三日の間、何事をも為し能わずして宿れる一組の若き夫婦、僅かの所持金を食い尽して、三日の屋根代積りて三十六銭を払い得ず、宿の主人は夫婦の浴衣、単物と帯一筋、捨売にしても

六七十銭の物はありしを無残にも剝取りて、男は襯衣一枚、女は襦袢と湯巻の儘にて逐出されしを見たり。是のみならず一日の屋根代滞りて逐出さるる者珍らしからず。
先頃二三の新聞に、貧民窟の棟割長屋、或は安宿の店賃、屋根代頻りに延滞せるより、家主は其督促に、てこずれる由伝えしも、是は事情に遠き話也。木賃宿の中には心寛きものなきにあらねど、其八九分はいずれも強慾にして屋根代を延滞せしむるなど思いも寄らず。男は裸にして逐出し、女は売淫をさせても之を取らずに置くことなし。
書くも憂し、書かぬも憂し、恐ろしく驚かるる別世界の生活の様には、是に尽きねど左までではとて。

（一九〇四年一月）

駅夫日記

白柳秀湖

一

私は十八歳、他人は一生の春という此若い盛りを、之はまた何として情ない姿だろう、頂垂れて凝と考えながら、多摩川砂利の敷いてある線路を私はプラットホームの方へ歩いたが、今更のように自分の着て居る小倉の洋服の脂垢に見る影もなく穢れたのが眼につく、私は今遠方シグナルの信号灯を懸けに行ってその戻りである。
目黒の停車場は、行人坂に近い夕日が岡を横に断ち切って、大崎村に出るまで狭い長い堀割になって居る。見上げるような両側の崖からは、芒と野萩が列車の窓を撫でるばかりに生い茂って、薊や、姫紫苑や、螢草や、草藤の花が目さむるばかりに咲き繚れて居る。
立秋とは名ばかり燬やように烈しい八月末の日は今崖の上の黒い白樫の森に落ちて、葎の葉ごしにもれて来る光が

青白く、うす穢い私の制服の上に、小さい波紋を描くのである。

涼しい、生き返るような風が一としきり長峰の方から吹き颪して、汗ばんだ顔を撫でるかと思うと、何処からともなく蜩の声が金鈴の雨を聴くように聞えて来る。

私は何故恁んなに彼女の事を思うのだろう、私は彼女に惚れて居るのであろうか、いやいやもう決して微塵もそんな事のありよう訳はない、私の見る影もない此姿、私は恁んなに自分で自分の身を羞じて居るではないか。

二

品川行の第二十七列車が出るまでにはまた半時間余もある。日は沈んだけれども容易に暮れようとはしない、洋灯は今しがた点けてしまったし、暫く用事もないので開け放した、窓に倚りかかってそれとはなしに深いもの思いに沈んだ。

風はピッタリ竭んで仕舞って、陰欝な圧しつけられるような夏雲に、夕照の色の胸苦しい夕ぐれであった。

出札掛の河合というのが、駅夫の岡田を相手に、樺色の夏菊の咲き綴れた、崖に近い柵の傍に椅子を持ち出して、上衣を脱いで風を入れながら、何やら頻りに笑い興じて居る。年頃廿四五の、色の白い眼の細い頭髪を油で綺麗に分けた、中々の洒落者である。

山の手線はまだ単線で客車の運転はホンの僅かなので、私達の労働は外から見るほど忙しくはない。それに会社は私営と来て居るので、官線の駅夫等が嘗るような規則攻めの苦しさは、私達にないので、何方かといえばマア呑気という程であった。

私はどうした機会か大槻芳雄という学生の事を思い浮べて、空想はとめどもなく私の胸に溢れて居た。大槻というのは此停車場から毎朝、新宿まで定期券を利用して何処やらの美術学校に通うて居る廿歳ばかりの青年である。丈はスラリとして痩型の色の白い、張の好い細目の男らしい、鼻の高い、私の眼からも惚々とするような、羨ましい程の美男子であった。

私は毎朝此青年の立派な姿を見る毎に、何ともいわれぬ羨ましさと、また身の羞しさとを覚えて、野鼠のように物蔭にかくれるのが常であった。永い間通って居るものと見えて、駅長とは特別懇意でよく駅長室へ来ては巻煙草を燻べながら、高らかに外国語の事などを語り会うて居るのを聞いた。

私の眼には立派な紳士の礼服姿よりも、軍人のいかめしい制服姿よりも、此青年の背広の服を着た書生姿が、云い知らず心を惹いて堪えられない苦痛であった。私は心から思うた、功名もいらない、富貴も用はない、けれども只一度脂垢の潤みた駅夫の服を脱いだ学校へ通うて見度い……噫私の盛りは恁んな事をして暮して仕舞うのか。

私は今ふと昔の小学校時代の事を想い出した。薄命な母と一処に叔父の宅に世話になって居た頃、私は小学校でいつでも首席を占めた、義務教育を終るまで、其地位を人に譲らなかったこと、将来は必然偉い者になるだろうというて人知れず可愛がって呉れた校長先生の事、世話になって居る叔父の息子の成績が悪いので、苦労性の母が、叔父の妻君に非常に遠慮をした事など、それからそれへと思い巡らして、追懐はいつしか昔の悲しい、いたましい母子の生活の上に遷ったのである。

忙然して居た私の室の入口の処に立つ人影に驚かされた。見上げるとそれは白地の浴衣に、黒い唐縮緬の兵児帯を締めた、大槻であった。

「君！　汽車は今日も遅れるだろうね」

「ええ十五分位……は」と私は答えた。山の手線はまだ世間一般によく知られて居ないので、客車は殆ど附属のような観があった、列車の遅刻は殆ど日常の事となって居た。

日はもういつしか暮れて蜩の声も何時の間にか消えて仕舞った。

大槻は一寸舌を鳴らしたが、改札の机から椅子を引き寄せて、応揚に腰を下した、出札の河合は上衣の袖を通しながら入って来たが、横眼で悪々しそうに大槻を睨まえながら、奥へ行って仕舞った。

「今から何方へ入らっしゃるのですか」私は何と思ってか大槻に問うた。

「日比谷まで……今夜、音楽があるんだ」と云い放ったが、白い華奢な足を動かして蚊を追うて居る。

三

「君！　僕一つ君に面白い事を尋ねて見ようか」

「軌道なしに走る汽車があるだろうか」

「そんな汽車が出来たのですか」

「日本に有るのさ」

「何処に」

「東京から青森まで行く間に丁度、一里十六町ばかり軌道なしで走る処があるね」と云い切ったが香の好い巻煙草の煙をフッと吹いた。

私は何だか自分が酷く馬鹿にされたような気がして憤然とした。陰欝な、沈みがちな私はまた時として非常に物に激し易い、率直な天性を具えて居る。

「冗談でしょう。僕はまた真面目にお話して居ましたよ」私は成人らしい少年だ、母と叔父の家に寄遇してから、それはもう随分気兼苦労の数をつくした。母は人にかくれてまだうら若い私の耳にいたましい浮世話を聞かせたので、私は小さな胸にはりさけるような悲哀を押しかくして、私かに薄命な母を惨んだ、私は今茲十八歳だけれども、私の顔を見た者は誰でも廿五六歳だろうという。

「君怒ったのか、よし、君がそんな事で怒る位ならば僕

も君に怒るぞ、若し青森までに軌道なしで走る処が一里十六町あったらどうするか」声は稍高かった。

「そんな事がありますか！」私は眼を視張て呼気をはずませた。

「いいか、君！　軌道と軌道の接続点に凡そ二分ばかりの間隙があるだろう、此間下壇の待合室で、あの工夫の頭に聞いたら一哩にあれが凡そ五十ばかりあるとね、それを青森までの哩数に当てて見給え丁度一里十六町になるよ、つまり一里十六町は汽車が軌道無しで走る訳じゃあないか。」

私はあまりの事に口も開けなかった、大槻が笑いながら何か云おうとした刹那、開塞の信号がけたたましく鳴り出した。

四

品川行のシグナルを処理して私は小走りに階壇を下りた。黄昏の暗さに大槻の浴衣を着た後姿は小憎らしい程あざやかに、細身の杖でプラットホームの木壇を叩いて居る。

私は何だか大槻に馬鹿にされた様な気がし、云いようのない不快の感が胸を衝いて堪え難いので筧の水を柄杓から一口グイと飲み干した。

筧の水というのは此崖から絞れて落つる玉のような清水を集めて、小さい素焼の瓶に受けたので棺物の柄杓が浮べてある。四辺は芒が生いて、月見草が自然に咲いて居る。之は今の駅長の足立熊太という人の趣向で、恁んな事の端にも人の心懸けはよく表われるもの、此駅長は余程上品な風流心に富んだ、恁ういう職業に埋れて行くには可惜しいような男である。長く務めて居るので、長峯界隈では評判の人望家という事、道楽は謡曲で、暇さえあれば社宅の黒板塀から謡いの声が漏れて居る。

やがて汽車が着いた。私は駅名を喚呼しなければならぬ、「目黒目黒」と二声ばかり戸を開けながら呼んで見たが、どうも羞しいような気がして咽喉がつまった。列車は前後が、三等室で、中央が一二等室、見ると後の三等室から、髪をマガレットに束ねた夕闇に雪を欺くような乙女の半身が現われた。今玉のような腕をさし伸べて戸の鍵をはずそうとして居る。

「高谷千代子！」私は思わず心に叫んだが胸は何となく安からぬ波に騒いだ。

大槻はツカツカと前へ進んだと思うと高谷の室の戸をグッと開けてやる。縫上げのたっぷりとした中形の浴衣に帯を小さく結んで、幅広のリボンを二段に束ねた千代子の小柄な姿が、プッラトホームに現われたが一寸大槻に笑釈して其儘階段の方に歩む。手には元禄模様の華美な袋にバイオリンを入れて、水色絹に琥珀の柄の付いた小形の洋傘を提げて居る。

大槻は直ぐ室に入ったが、今度はまた車窓から半身を出

して、自分で戸の鍵をかった。千代子は他の客に押されて私の立って居る横手を袖の触れる程にして行く、私はいたく身を羞じて一寸体軀を横にしたが其途端に千代子は星のような瞳を一寸私の方にうつした。

汽車は此時もう動いて居た、大槻の乗って居る三等室がプラットホームを歩いて居る千代子の前を横る時、千代子は其美しい顔をそむけて横を見た。

「マア大槻という奴は何というい け好かない男だろう」

私は恁う思いながら、忙然として佇むと、千代子の大理石のように白い素顔、露のこぼれるような瞳、口もとに云いようのない一種の愛嬌を漂えて大槻に笑釈した時のあでやかさ、其心象が瞭々と眼に映って私は恐ろしい底しられぬ嫉妬の谷に陥った。

「藤岡！　閉塞を忘れちゃあ困るよ、何を忙然として居るかね。」

駅長のおだやかな声が聞えた。私があわて振り向くと駅長はニッコリ笑って居た、私は若しや此人に私の浅猿しい心の底を見抜かれたのではあるまいかと思うと、もう堪らなくなってソコソコと階壇を駆け上って、シグナルを上げた。

権之助坂のあたり、夕暮の烟が低くこめて、若しやと思った其人の姿は影も見えない。

五

野にも岡にも、秋のけしきは満ち満ちて来た。

休暇の日の夕方、私は寂しさに堪えかねてそぞろに長峯の下宿を出たが足はいつの間にか権之助坂を下りて居た。虎杖の花の白く咲いた、荷車の砂塵のはげしい多摩川道を静かに何処という目的もなく物思いながらたどるのである。

私は権之助という侠客の物語を想うた、何時か駅長の使をしてやった時、駅長は遠慮する私を無理に引きとめて、南の椽で麦酒を飲みながら私に種々の話をして呉れた、目黒界隈はもと芝増上寺の寺領であったが何時の頃か悪僧共が共謀して、卑しい手段で恐ろしい厳しい取立てをした、その時村に権之助という侠客が居て、百姓の難渋を見て居る事が出来ないというので、死を決して増上寺から不正の升を掠めて町奉行に告訴した、権之助の為に増上寺の不法は廃められたけれども、彼れはそれが為に罪に問われて、とある夕ぐれの事であった、情知らぬ獄吏に導かれて村中引き廻しにされた上此岡の上で惨しい処刑にあうたということ。

噫、権之助の最後は恁んな夕ぐれであったろうか。

私は空想の翼を馳せて、色の浅黒い眼の大きい、骨骼の逞しい一個の壮漢の男らしい覚悟を想い浮べて見た。如何

に時代が違うとは云いながら昔の人は何故そんなに潔く自分の身を忘れて、世間の為に尽すというような事が出来たのであろう。

羞しいではないか、私のような爵性がまたと世にあるのであろうか、爵性というのも皆自分の身のことばかりクヨクヨ思うからだ、私が曽て自分の事を離れて物を思うた事があるであろうか、昼の夢、夜の夢、げに私は自分の事ばかりを思う。

いつの間にか私は目黒川の橋の上に佇んで欄干に凭れて居た。此川は夕日が岡と、目黒原の谷を流れて、大崎大井に落ちて、品川に注ぐので川幅は狭いけれども、流れは案外に早く、玉のような清水をたたえて居る、水蒸気を含んだ秋のしめやかな空気を透して遙かに水車の響が手にとるように聞えて来る、其水車の響がまた無声にまさる寂しさを誘うのであった。

人の橋を渡る気配がしたので、私はフト背後をふりかえると、高谷千代子と其乳母というのが今橋を渡って権之助の方へ行く処であった。私が其うしろ姿を見送ると二人も何か話の調子で一処に背後を見かえった、私と千代子の視線が会うと思いなしか千代子はニッコリ笑うたようであった。

私は俯伏して水を眺めた。其処には見る影もない私の顔が澄んだ秋の水鏡に映って居る。欄干の処に落ちて居た小石を其まま足で水に落すと、波紋は直ぐに私の象を消して仕舞うた。

波紋のみだれたように、私の思は掻き乱された。彼女はいま乳母と私に就て何事を語って行ったろう、彼女は何を笑ったのであろう、私の見すぼらしい姿を嘲笑ったのではあるまいか、私の穢くるしい顔を可笑しがって行ったのではあるまいか。

波紋は静まって水はまたもとの鏡にかえった、私は俯伏して、自分ながら嫌気のするような容貌をもう一度映しなおして見た、岸に咲きみだれた藤袴の花が、私の影にそうて優しい姿を水に投げて居る。

六

岡田の話では高谷千代子の家は橋を渡って突き当りに小学校がある、其学校の裏という事である。それを尋ねて見ようというのではないけれども、私は何時とはなしに大鳥神社の側を折れて、高谷千代子の家の垣根に沿うて足を運んだ。

遙かに火薬庫の煙筒は高く三田村の岡を抽いて黄昏の空に現れて居るけれども、黒蛇の様な煤煙はもう竭んで仕舞った。目黒川の対岸、一面の稲田には、白い靄が低く迷うて夕日が岡は宛然墨絵を見るようである。

私がさる人の世話で目黒の停車場に働く事になってからまだ半年には足らぬ程である。初めて出勤して其日から私

は千代子のあでやかな姿を見た。千代子は他に五六人の連と同伴に定期乗車券を利用して、高田村の「窮行女学院」に通って居るので、私は朝夕、プラットホームに立って彼女を送りまた迎えた。私は彼女の姿を見るにつけて朝毎に新しい美しさを覚えた。

世には美しい人もあればあるもの、何処の処女であるだろうと、私は深く心に思うて見たが流石に同職に聴いて見るのも気羞しいので其儘ふかく胸に秘めて、毎朝さまざまの空想をめぐらして居た。

或る日の事、フトした機会から出札の河合が、千代子の身の上に就て稍精しい話を自慢らしく話して居るのを聞いた。彼は定期乗車券の事で毎月彼女と親しく語を交すので長い間には自然いろいろな事を聞き込んで居るのであった。

千代子は今茲十七歳、横浜で有名な貿易商正木某の妾腹に出来たものだそうで、其妾というのは昔新橋で嬌名の高かった玉子とかいう芸妓で、千代子が生れた時に世間では、あれは正木の子ではない訥升という役者の子だという噂が高く一時は口の悪い新聞にまでも謳われた程であったが、正木は二つ返事で其子を引取った。千代子は其母の姓を名乗って居るのである。

千代子の通うて居る「窮行女学院」の校長望月貞子というのは宮内省では飛ぶ鳥も落すような勢力、才色兼備の女官として、また華族女学校の学監として、白雲遠き境までも其名を知らぬ者はない程の女である。けれども冷めたい西風は幾重の墻壁を越して、階前の梧葉にも凋落の秋を告げる。貞子の豪奢な生活にも浮世の黒い影は付き纏うて人知れず泣く涙は栄華の袖に乾く間もないという噂である。此貞子が世間に秘密で正木某から少からぬ金を借りた。其縁故で正木は千代子が成長するに連れて「窮行女学院」に入学させて、貞子に其教育を頼んだ。高谷千代子は「窮行女学院」の御客様にあたるのだ。

賤しい女の腹に出来たとはいうものの、生れ落ちると其儘いまの乳母の手に育てられて淋しい郊外に人となったので、天性器用な千代子はどこまでも上品で、学校の成績もよく画も音楽も人並優れて上手という、乳母の自慢を人の好い駅長なんかは時々聞かされると云う事であった。

私は始めて彼女のはかない運命を知った。自分等親子の寂しい生活と想いくらべて、稍冷めたい秋の夕を、思わず高谷の家の門のほとりに佇んだ。洒然とした門の戸は固く鎖されて、竹垣の根には優しい露草の花が咲いて居る。

七

次の日の朝、私は改札口で思わず千代子と顔を合わせた。私は千代子の眼に何んと知れぬ一種の思いの浮んだ事を見た。私は千代子のような美人が、何故私のような見すぼらしい駅夫風情に、あんな意味のありそうな眼付をする

のだろうと思うと共に今朝もまた千代子を限りなく美しい人と思うた。
今日は岡田が休んだので私は改札もしなければならないのだ。
客は皆階壇を下りた、私は、新宿行という札を懸け変えて、一二等の待合室を見廻りに行った。見ると待合のベンチの上に油絵を描き出した絵葉書が二枚置き忘れてある。
急いで取り上げて見たが、私はそれが千代子の忘れたものである事を直ぐに気付いた。改札口の重い戸を力まかせに閉めて、転ぶように階壇を飛び降りたが、其刹那、新宿行の列車は今高く汽笛を鳴らした。
「高谷さん!!　高谷さん!!」と私は呼んで何時もの三等室の前へ駆けつけて絵はがきを差出したけれども、どうしたものか今日に限って高谷は後背の室に居ない。
プラットホームに立って居た助役の磯というのが、私の手から奪うように葉書を取って、既に徐行を始めた列車を追うて、一二等室の前を駆け抜けたが、
「高谷さん！　お忘れもの！」と呼んで絵はがきを差出した。
掌中の玉を奪われたように忙然として佇んで居ると、千代子は車窓から半身を出して、サモ意外というたように夫を受取って一旦顔を引いたが、窓から此方を見て遥かに助役に会釈した。
平常から快からず思う磯助役の今日の仕打は何事であろう、あまり客に親切でもない癖に、美しい人と云えばあの通りだ。其癖自分はもう妻子もある身ではないか。
運転手は今馬力をかけたものと見えて、汽罐車は丁度巨人の喘ぐように、大きな音を立てて泥炭の煙を吐きながら渋谷の方へ進んで行く、高谷の乗って居る室が丁度遠方シグナルのあたりまで行った頃、思い出したように、鳥打帽子が窓から首を出して此方を見た。
それは大槻芳雄であった。
噫千代子は大槻と同じ室（クラス）に乗る為に常例の室をやめたのではあるまいか、千代子はフトすると大槻と恋に陥ったのかも知れない、千代子は大槻を恋して居るに違いない。私は恁う思って見たが、心の隅ではまさかそうでもあるまいと云う声がした。
俯向いて私は私の掌を見た。労働に疲れ雨にうたれて渋を塗ったような見苦しい私の掌には、ランプの油煙と、機械油とが染み込んで如何にも見苦しい、恁んな穢い手で私は高谷さんの絵葉書を持ったのか。
洗ったら少しは綺麗になるだろう。
かの筧の水のほとりには、もう野菊と紫苑とが咲き繚れて、穂に出た尾花の下には蟋蟀の歌が手にとるようである。私は屈んで柄杓の水を汲み出して、せめてもの思いやりに私の穢い手を洗った。
「おい藤岡！　あんまりめかしちゃあ好けないよ、高谷さんに思い付かれようたって無理だぜ。」

助役は別に深い意味で云うた訳でもなかったろうけれど、私にとっては非常に恐ろしい打撃であった。殆ど脳天から水を浴びせられたように愕然として見上げると磯は、皮肉な冷笑を浮べながら立って居た。

「お千代さんが宜敷って云ったぜ、どうも御親切に有難うって……」

「だって私は自分の………」

とまで云うたが、あとは唇が強張って、例えば夢の中で悶え苦しむ人のように、私は只助役の顔をジッと見つめた。

「君！　腹を立てたのか馬鹿な奴だ、そんな事で上役に怒って見た処で何になる」

私は怒った訳じゃなかったけれども、助役の語があまり烈しく私の胸に応えたので、それが只の冗談とは思われなかったからである。

私は初から助役を快よく思うて居なかったのが、此事以来、もう打ち消すことの出来ない心の隔てを覚えるようになったのである。

八

「ちょいと、マア御覧よ、今度は恁んな事が書いてあってよ」と一人が小さい紙切れを持ってベンチの隅に俯向すとやっと、十四五歳のを頭に四五人の子守女が低い足駄をガタつかせて、其上に重なりおうて各自に口のなかで紙切の仮名文字をおぼつかなく読んで見てはキャッキャッと笑う。

子守女というものの皆近処の長屋に住んで居る労働者の娘で、学校から帰って来ると直ぐ子供の守をさせられる。雨が降っても風が吹いても此子守女は停車場に来て乗客の噂をして居ない事は只の一日でもない、華やかに着飾った女の場合は猶更で、さも羨しそうに打眺めてはヒソヒソと語りあう。

季節の変り目に此平原によくある烈しい西風が、今日は朝から雨を誘うて、硝子窓に吹き付ける。沈欝な秋の日に乗客はほんの数えるばかり、出札の河合は徒然に東向の淡暗い電信取扱口から覗いては、例の子守女を相手に聞きぐるしい、恥しい事を語りおうて居たが、果ては流石に口へ出しては云い兼ねるものと見えて、小さい紙片に片仮名ばかりで何やら怪しい事を書き付けては渡してやる。

女はそれを拾い読みに読んでは娯んで居る、其云いしれぬ肉のおもいを含んだ笑声が、光の薄い湿っぽい待合室に鳴り渡って人の心を滅入らすような、戸外の景色に対べて何となく悲しいような気がして来る。

「あれ——河合さん嫌だよ、よう！」勘忍してよう！と賤しい婦人の媚びるような、男の心を激しく刺戟するような黄い声がするかと思うと、他の連中が、ワッと手をたたいて笑う。

「もう雷様が鳴らなけりゃあ離れない、雷様が」と河合

が圧しつけるような低い声で云う。「謝ったよう！　謝った」と女は泣くように叫ぶ。一番年量の、多分高谷の姿でも真似たつもりだろう髪を廂に結うて、間色のリボンを付けたのが、子を負った儘、腰を屈めて、愛嬌の深い丸顔を真赤にして頻りに謝って居る。

見ると女は何うしたものか火灯口から右の手を河合に取られて居る。河合は其手をギュッと握って掌へ筆で何か描こうとして居る。

「痛いじゃあないか謝ったからよう！　あれ――あんなものを書くよう……。」

雨はまた一としきり硝子窓を揆つ、淋しい秋の雨と風との間に猥りがましい子守女の声が絶えてはまた聞えて来る。

私の机の下の菰包の蔭では折ふし思い出したように虫の音がする。

ふと見ると便所の方に向いた窓の硝子に人影が射したので、私はツイと立って軒伝いに冷たい雨の頻吹を浴びながら裏の方に廻って見ると、青い栗の毬蕢が落ち散って、そこに十二三歳の少年が頭から雫のする麦藁帽子を被ってションギリとまだ実の入らぬ生栗を喰べて居る。

秋も稍闌けて目黒はもうそろそろ栗の季節である。

九

見れば根っから乞食の児でもないようであるのに、孤児ででもあるのか、何という哀れな姿だろう。

「おい、冷めたいだろう、そんなに濡れて傘はないのか。」

「傘なんか無い、食物だって無いんだもの」と未だ水々しい栗の渋皮をむくのに余念もない。

「そうか、目黒から来たのか、家は何処だい父親は居ないのか」

「父親なんかもう疾うに死んで仕舞ったい。母親だけは居たんだけれど、ついとう乃公を置いてけぼりにして何処かへ行って仕舞ったのさ、けども乃公ァその方が気楽で好いや、だって母親が居ようもんならそれこそ叱られ通しなんだもの。」

「母親は何をして居たんだい。」

「納豆売さ、毎朝麻布の十番まで行って仕入て来ちゃあ白金の方へ売りに行ったんだよ、けどももう家賃が払えなくなったもんだから、乃公ばっかり置いてけぼりにして何処かへ逃げ出して仕舞ったのさ。」

「母親一人でか？」

「小さい坊やもつれて！」

「何処に寝て居るのか。」

「昨夜はお鳥様へ寝た」と権之助坂の方を指さして見せた。

私はあまりの惨しさに、ポケットから白銅を取り出して

呉れてやると少年は無造作に受取って「有り難う」と云い放つと其儘雨を衝いて長峯のおでん屋の方に駆けて行って仕舞った。

見送って忙然と佇んで居ると足立駅長が洋服に蛇の目の傘をさして社宅から来かけたが廊下に立って凝と私の方を見て居た。雨垂の音にまぎれて気が付かなかったが、物の気配に振り向くと其処に駅長が微笑を含んで居た。

今の白銅は私が夕飯のお菜を買う為に持って居たので、考えて見ると自分の身に引き比べて何だか気羞しくなって来た。コソコソと室に入って椅子に凭ると同時に大崎から来た開塞の信号が湿っぽい空気に鳴り渡った。乗客は一人もない。

十

雨が竭むと快晴が来た。

シットリと濡れた尾花が、花やかな朝日に照りそうて、冷めたい秋風が一種云いしれぬ季節の香を送って来る。崖の上の櫨はもう充分に色づいて、何処からとなく聞えて来る百舌鳥の声が、何となく天気の続くのを告げるようである。

今日は日曜で、乗客が非常に多い。午後一時三十五分品川行の列車が汽笛を鳴らして運転を初めた頃、エビスビールあたりの帰りであろう面長の色の浅黒い会社員らしい立派な紳士が眼のあたりにポッと微醺を帯びて、杖洋（ステッキ）を持った手に二等の青切符を掴んで階壇を飛び降りて来た。

「危険！　最早お止しなさい!!!　駄目です駄目です！」

と私は一生懸命に制止した。

紳士は微酔機嫌で余程興奮して居るものと見えて、私のいう事を更に耳に入れない。行きなり疾走を初めた二等室に追いかけて飛び乗りをしようとする。私は此瞬間慥かに紳士の運命を死と認めた。

よし救え！　私は立処に大胆な決心をした。

将に紳士が走り出した汽車の窓に手を懸けようとした刹那、私は紳士のインバネスの上から背後ざまに組み付いた。

「な、な、何をするか！　失敬な!!!　此奴……。」

「お止しなさい、危険です!!!」

駅長も駆けつけた。

けれども此時紳士は男の力をこめて私を振り放したが、赫として向き返ると私の胸を突き飛ばした。私は突かれると其儘仰向に倒れたのでアッという間もなく、柱の角に後頭部をしたたか打つけた。

仮繃帯の下から生々しい血汐が潤み出して私はいう可からざる苦痛を覚えたが駅長の出して呉れた筧の水をグッと飲み干すと稍元気付いて来た。

汽車はもう遠く去ったけれども隧道の口にはまだ黒い煙が残って居る。見ると紳士の顔にもしたたか泥が付いて、

恐ろしい争闘(いさかい)でもした跡のよう、顔は青褪めて、唇には血の気の色もない、俯向いて極りが悪そうに萎れて居る。口髯の稍赤味を帯びたのが特長で、鼻の高い、口許に締りのある、一寸苦味走った男である。

紳士の前に痩身(やさぎす)の骨の引締った三十前後の男が茶縞の背広に脚絆という身軽な装束で突立ったまま眼を光らして居る。鳥打帽子の様子といい草鞋を穿いた処といい何処から見ても工夫の頭としか見えない。

「どうだ上まで歩かれるか、大丈夫だろう洗って見たら大した傷でもあるまい」と駅長が優しくいうので、私も気を取り直して柱を杖に立ち上った。

傷は浅いと見えて最早あまり眩暈もしない「最早大丈夫です」と答えると、駅長は一寸紳士の方を向いて、

「何うか一寸御話致したい事が御座居ますから」というと紳士は黙って諾いて、

「じゃあ君もね」と工夫頭の方を向いて駅長が促した。

其親しげなものの云い振りで私は始めて、二人が知己であるという事を知った。

駅長は親切に私をいたわって階壇を昇ると其後から紳士と工夫頭とが付いて来た。壇を昇り切ると岡田が駆けて来て、

「大槻様が今直ぐに参りますそうで」と駅長の前に呼吸を切りながら復命した。

十一

私は其儘駅長の社宅に連れて行かれて、南向の椽側に腰を下すと、駅長の細君が忙わしく立働いていろいろ親切に手を尽してくれる。

そこへ罷職軍医の大槻延貴(のぶかた)というのがやって来て、手当にかかる。私はジッと苦痛(くるしみ)を忍んだ。

手術は程なく済んで繃帯も出来た。傷は案外に浅くって一週間ばかりで全治するだろうという話、細君の汲んで来た茶を飲みながら大槻は傍に居た岡田を相手に、私が負傷した顛末を尋ねると細君も眉を顰めながら熱心に聞いて居たが、

「マア、ほんとうに危険いですね、――それにしても藤岡さんが居なけれゃあ、其人は今頃もう何うなって居るか分りませんね。」

「何にしろ、直ぐ隧道になるのですからね、どうしたって助る訳は無いです」と岡田が口を入れる。

「危険ですな！　汽車も慣れるとツイ無理をしたくなって困るのです。」

と大槻はいうたが、細君と顔を見合わせて、さて今迄忘れて居たように互に時候の挨拶をする。

大槻は年頃五十歳あまり、もと陸軍の医者で、職を罷めてからは目黒の三田村に遷り住んで静かに晩年を送ろうと

いう人、足立駅長とは謡曲の相手で四五年何来(このかた)の交際であるそうだ。

　大槻芳雄というのは延貴の独息子で、少からぬ恩給の下る上に遺産もあるので出来るだけ応鷹には育てたけれど、天性才気の鋭い方で、学校も出来る、それに水彩画がすきで若し才気に任せて邪道に踏み込まなかったならば天晴の名手となる事だろうと、さる先輩は嘆賞した。けれども此人の欠点といえばあまり画才に依頼しすぎて技術の修練をおろそかにする処にある。近頃大槻は或る連中と共に日比谷公園の表門に新設される血なまぐさいパノラマを描いたとかいうので朋友の間には、早くも此人の前途に失望して、やがては、女の浅猿しい心を惹く為に、呉服屋の看板でも描くだろうと云うような蔭口をきく者も有るそうである。

　岡田は暫くするうちに、停車場の方に呼ばれて行く、大槻軍医も辞し去って仕舞うた。後で駅長の妻君は語を尽して私を慰めて呉れた。妻君というのは年頃三十五六歳、美人という程ではないけれども丸顔の、何となく人好きのすると云うたような質である。

「下宿に居ちゃあ何かと困るでしょう、どうせ一週間ばかりなら宅に居て養生しても好いでしょう、ね、宅でも大変お前さんに見込を付けていろいろ御国の事情なんかも聞いて見たいなんて云うて居ましたよ。」

「え、有り難う、併し此分じゃあ大した傷でもないようですから夫にも及びますまい、奥様にお世話になるようでは反って恐れ入りますから。」

「何もお前さん、そんな遠慮には及ばないよ、些少も構やしないんだから気楽にしてお出でなさいよ。」妻君は一人で承知して居る。

　ブーンとものの羽音がしたかと思うとツイ眼の先の板塀で法師蟬が鳴き出した。コスモスの花に夕日がさして、三歩の庭にも秋の趣はみちみちて居る。

「オ!!! 奥様ですか、今日はとんだ事でしたね」と云う声を見ると、大槻が開け放して行った坪の戸から先刻プラットホームで見受けた工夫頭らしい男が、声をかけながら入って来たのであった。妻君は立ち上って

「マア小林さん、今日は……随分久しぶりでしたね」という口で座蒲団を出す。小林は一寸笑釈して私を繃帯の下から覗くようにして、「何うだい君！ 痛むかい、乱暴な奴もあるもんだね。」

「え、有り難う、何大した事も無いようです。」

「傷も案外浅くてね、医者も一週間ばかりで癒るだろうって云うんですよ」と妻君が口を添える。

「奥様、今日は僕も関係者(かかりあい)なんですよ。」

「エ！ 何うして？」とポッチリとした眼を視張る。

「あんまり乱暴な事を為やがるので、ツイ足が辷って野郎を蹴倒したんです。」と云うたが妻君の出した茶をグッと飲み干す。私は小耳を引立てて聴いて居る。

十二

「今度複線工事の事に就て一寸用事が出来て茲までやって来たのです。プラットホームで足立さんに会って挨拶をして居ると、今の一件です。駅長さんが飛び出したもんですから、私も直ぐ其後へ付いて行った。」「此児が」といいかけて一寸私の方を見て、「野郎に突き倒されるのを見ると、グッと癪に障って男の襟頸を引摑んで力任せに投げ出したんです、するとちょうど隧道に支えた黒煙が風の吹き廻しでパッと私達の額へかかったんで何うなったか一切夢中でしたけれども、眼を開いて見ると可愛そうに野郎インバネスを着たまま横倒しに砂利の上に這いつくばって居る……」

「マア……」と云うて人の好い奥様は眉を顰めた、私も敵ながら此話を聞いては、あんまり好い気もしなかった。

「それから足立さんと二人で、男を駅長室に連れ込んで談して見た処が、イヤどうも分らないの何のって、工学士と云えば、一通りの教育も有りながら、あんまり馬鹿気て居て、話にも何にもならないです。」

「悪かったとも何とも云わないのですか。」

「ヤレ駅夫が客に対してあんまり無法な事をするとか、ヤレ自分は工学士で汽車には慣れて居るから、大丈夫飛乗ぐらいは出来るとか、宛然酔漢を相手にして話すよりも分らないのです。何しろ柔和しい足立さんも今日は余程激して居たようでした。」

私は小林の談話を聴いて、云いしれぬ口惜しさを覚えた。自分の職務というよりも、私があの紳士を制止したのは紳士の生命をあやぶんでの事ではないか、私は弱き者の理由がかくして無下に蹂躙られて行くのを思うて思わず小さい拳を握った。

「柔和しい足立様の云う事が私には最早、間疲っこくなって来たもんですから、手厳しく談じ付けてやろうとすると足立様が待てというて制する。足立様はそれから静に理を分けて宛然三歳児に云い聞かすように談すと野郎も流石に理に落ちたのか、私の権幕に怖じたのか、駅夫の負傷は気の毒だから療治代は何程でも出すと抜すじゃあ有りませんか。」

私は思わず涙の頰に流れるのを禁じ得なかった、療治代は出してやる、私は熟々人の心の悲しさを知った。流石に人の好い妻君も「マア何という人でしょう！」というてホッと吐息を漏らした。

「処が驚くじゃあ有りませんか、私と足立様とが決して金を請求する為に態んな事を云うたのじゃあ無い、療治代を貰い度い為に話したのじゃあないと云うと、野郎怪訝な顔をして居るのです。それから何と云うかと思うと、乃公は日本鉄道の曽我とは非常に懇意の間だ、何か話しがあるならば曽我に挨拶しようと云う。私はもうグッと胸が塞っ

て来ましたから構う事はない最早遣付けて仕舞えと思ったのですけれども、足立様が連に止める。私も駅長の迷惑になるようではと思いかえして腕力だけはやめにして出て来たんです。」

話して居る処へ駅長が微笑を含んで入って来た。

「曽我祐準の名を余程我々が怖がるものと思うたのか、曽我曽我と云い通して腕車で逃げ出して仕舞うたよ」と云いながら駅長は制服の儘、小林と並んで椽側に腰を下したが、「どうも立派な顔はして居ても、話して見るとあんな紳士が多いのだからなあ」と云うたが思い出したように私の方を見て。

「傷はどうだい、あんまり大した事もあるまい、今、岡田に和服を取りに行って貰う事にした。」

短かい秋の日はもう暮れかけて、停車場では電鈴がさも忙しそうに鳴り出した。

十三

栗の林に秋の日の幽かな大槻医師の玄関に私はひとり物思いながら柱に倚って、薬の出来るのを待って居る。

「もう好いのよ……」何処かで聞き覚えのある、優しい処女の声が、患者控室に当てた玄関を距てて薬局に相対った部屋の中から漏れて来たが、廊下を歩く気配がして暫らくすると、中庭の木戸が開いた。

高谷千代子の美しい姿が其処へ現われた。何時にない髪を唐人髷に結うて、銘仙の着物に、浅黄色の繻子の帯の野暮なのも此人なればこそ好く似合う。小柄な躰軀をたおやかに、一寸鬱金色の薔薇釵を気にしながら振り向いて見る。

そこへ大槻が粋な鳥打帽子に、紬の飛白、唐縮緬の兵児帯を背後で結んで、細身の杖を小脇に挟んだ儘小走りに出て来たが、木戸の掛金を指すと二人肩を並べて、手を取るばかりに、門の方に出て行くのである。

千代子は小さい薬瓶を手巾に包んでそれに大槻の描いた水彩画であろう半紙を巻いたものを提げて居る。私はハッとしたが隠れるように頂垂れて、繃帯のした頬に片手を当てたが、流石にまた門の方を見返した。

私が見返した時、二人は丁度門を出る処であったが、一斉に玄関の方を振り向いたので、私とパッタリ視線が会うた。私は限りない羞しさに、俯向いたまま薬局の壁に身を寄せた。

きのうまで相知らなかった二人が何うして、あんな近附になったのであろう、千代子が大槻を訪ねたのか、イヤイヤそんな事はあるまい、私は信じなかったが世間の噂では大槻は非常に多情な男で、これまでにもう幾度も処女を弄んだ事があるという、爾う云えば此間も停車場で態々千代子の扉を開けてやった処など耻しげもなく、鉄面皮しいのを見れば大槻が千代子を誘惑したに相違ない。それにしても何と云うて云い寄ったろうか。

千代子が大槻の処へ何処か診察して貰いに行って、此玄関に待合して居る処へ大槻が奥から出て来て物を云いかけたに違いない、「マア此方へ来て画でも見て入らっしゃい」などと云う、大槻は好い男だし、それに彼の才気で口を切られた日には、千代子でなくとも迷わない者はあるまい。

佳人と才子の恋というのは之であろう、大槻が千代子を恋うるのが無理か、千代子が大槻を慕うのが無理か、たとえば絵そら言に見るような二人の姿に引きくらべて見て私は更に、「私が千代子を恋するのは、無理ではないだろうか」と、我と我心に尋ねて見たが、今迄私の思うた事のいつか恐ろしい嫉妬の邪道に踏み込んで居たのに気がつくと、私はもう堪えかねて繃帯の上から眼を蔽うて薬局の窓に俯伏した。

「藤岡さん、薬が出来ましたよ」と書生は薬を火灯口から差出して呉れたが、私の姿をあやぶんで

「まだ痛みますか、どうしたんです？」と窮屈そうに覗きながら尋ねる。

「いいえ、何うも致しません」と私は簡単に応えて大槻の家の門を出たが、水道の堀割に沿うて、紫苑の花の咲きみだれた三田村の道を停車場の方にたどるのである。

私は何故に千代子の事を想うて恁んなに苦しむのだろう、私はゆめ彼女を恋しては居ない、私が何時までも何時までも彼女の事を思うたにしてもそれは思うばかりで、それで竟極が何うしようと云うのでもない、恋しても居ない人の事を何故恁んなに気にするのだろう。

それとも之が恋というものであろうか。

私の耳には真昼の水の音が宛然ゆめのように聞えて、細い杉の木立から漏れて来る日の光が、宛然月夜の影のように思いなされた。

十四

私の傷はもう大かた癒えた、次の月曜日あたりから出勤しようと思うて、午後駅長の宅を訪ねて見た。細君が独で板塀の外で張物をして居たが、私が会釈するのを見て、

「今日は留守ですよ、非番でしたけれども本社の方から用があるというて来ましたので朝出かけた儘ですよ。」

「何んな御用でしょう、此間の事件(こと)ではないでしょうか。」

「サア、宅の人も爾う云うて居ましたがね、些少も心配する事はないと云うて出て行きましたよ」と去り気なく云うたけれども、私は細君の眉のあたり何となく晴れやらぬ憂いの雲を見た。

私は此好い細君が襷をあやどって甲斐甲斐しく立働きながらも、夫の首尾を気づこうて、憂を胸にかくして居る姿を見て、しみじみと奉職(つとめ)の悲しさを覚えて、私の為過(しすご)しから足立駅長のような善人が、不慮の災難を被る事かと思うと、身も世もあられぬような想いがした。

「心配な事はないでしょうか。」
「大丈夫でしょう。」と云うたが、顔を上げて、
「最早快いのですか。」
「ええ明後日あたりから出勤する事にしたいと思いまして……。」

其夜の月はいと明るかった。

駅長は夕方帰って来たが、きょうは好きな謡曲もやらないで、私の訪ねるのを待っていろいろ其日の首尾を話してくれた。要するに、私の心配した程でもなかったが、駅長は云う可らざる不快を含んで帰って来たらしい。

此間の工学士というのは品川に住んで居た東京市街鉄道会社の技師を勤めて居る蘆鉦次郎という男で、三十二年の卒業生であるそうだ、宮内省に勤めた父親の関係から、社長の曽我とも知己の間で此間の失敗を根に持って余程卑怯な申立をしたものと見えて、始は大分事が大袈裟であったのを、幸に足立駅長が非常に人望家であった為に、営業所長が力を尽して調停して呉れて辛と無事に済んだという事であった。

爾う云う首尾では駅長が不快に思うのも無理はない、私は非常に気の毒に思うて、私が悪いのだから、私が職を罷めたならば、上役の首尾も直るでしょうと云えば、駅長は直ぐ打消して、反って私を慰めた上に、いろいろ行末の事も親切に話して呉れた。

私は駅長の問うにまかせて、私の身の上話をした。月影のさす秋の夜に心ある夫婦の前で寂しい来しかたの物語をするのは私にとって、此上なき歓楽であった。

私の父は静岡の者で、母はもと彦根の町のさる町家の娘で、また禿の時分から井伊の城中に仕えてかの桜田事件の時には辛と十八歳の春であったという事、それから時世が変って、廃藩置県の行われた頃には井伊の老臣の池田某なるものに従うて、遠州浜松へ来た。

池田某が浜松の県令に選抜されたからで、母は桜田の騒動以来、此池田某に養われて居たのであった。

母は此処で縁があって父と結婚して、長い御殿奉公を止めて父と静岡に可なりの店を開いて、幸福に暮して居た。母の幸福な生活というのは実は此十年ばかりの夢に過ぎなかったので、私は想うて母の身の上に及ぶと、世に婦人の薄命というけれど、私の母ばかり不幸な人は多くはあるまいと思わぬ時はないのである。

父が死んでから、私達母子は叔父の家に寄遇して云うに云われぬ苦労をしたが、私は小学校を出て叔父の仕事の手伝をして居る間も深く自分の無学を羞じて、他人ならば学校盛りの年頃を、徒らに羞しい労働に埋れて行く事を悲しんだ。私が漸次年頃となるに連れて叔父との調和がむずかしく若い心の物狂わしきまで一向に、苦学――成功というような夢に憧れて、母の膝に嘆き伏した時は、苦労性の気の弱い母も竟に私の願望を容れて、下谷の清水町にわびし

く住んで居る遠縁の伯母をたよりに上京する事を許して呉れた。

去年の春下谷の伯母を訪ねて、其寡婦暮しの聞きしにまさる貧しさに驚かされた私は、三崎町の「苦学社」の募集広告を見て、天使の救いにおうたように、雀躍して喜んだ。私は功名の夢をみて苦学社に入った。

母の涙の記念として肌身離さず持って居た僅かの金を惜しげもなく抛げ出して入社した三崎町の苦学社を逃げ出して再び下谷の伯母の家に駆け込んだ時は、自分ながら生命のあったのを怪しんだ程である。私は初めて人間の生血を吸る、恐ろしい野獣の所為をまのあたり見た。

坂本町に住む伯母の知己の世話で私が目黒の駅に務める事になったのは、去年の夏の暮であった。私はもう食を得る事より外に差当りの目的はない。功名も、富貴も、それは皆若い私の夢であった。私はもう塵のような、煙のような未来の空想を捨てて、辛い、苦しい生存の途をたどらなければならないのだ。私の前には餓死と労働の二つの途があって私は只常暗の国に行く為に、其途の一つをたどらなければならないのだ。

駅長も妻君も少からぬ同情を以て私の話を聞いて呉れた。稍寒い秋の夜風が身にしみて坪の門には虫の声が雨のようである。

十五

其夜駅長は茶を啜りながら、此間プラットホームで菌工学士を突き倒した小林浩平の身の上話をして呉れた、私が只学問とか栄誉とかいう果敢ないうつし世の虚栄を慕うて現実の身を愧じ、世をすねる若い心をあわれと思ったからであろう。其話の大概は恁うであった。

小林というのは駅長の郷里で一番の旧家でまた有名な資産家であった、先代に男の子が無くて娘ばかり三人、総領のお幾というのが弥吉という婿を迎えて、あとの娘二人は夫々他所に嫁付いで仕舞うた。此弥吉とお幾との間に出来たのが彼の浩平で、駅長とは竹馬の友であった。

処がお幾は浩平を産むと兎角病身で、彼が漸と六歳の時に病死して仕舞うた。弥吉も未だ年齢は若いし、独身で暮す訳にも行かないので、小林の血統から後妻を迎えて和やかに暮して行くうちに後妻にも男の子が二人も生れた。

弥吉は性来義理固い男で、浩平は小林家の一粒種だというので、かりそめの病気にも非常に気を揉んで、後妻に出来た子等とは比較にならない程大切にする。妻も無教育な女にしては珍らしい心掛けの女で夫の処致を夢さら悪く思うような事なく、実子はさて措いて、浩平に尽すという風で、世間の評判も好く弥吉も妻の仕打を非常に満足に想うて居た。

処が浩平が成長して見ると誰の気質を受けたものか、余程の変物であった。頭が割合に大きいのに顋が疲けて愛嬌の少しも無い、云わば小児らしい処の少い、陰気な質であった。学友は何時しか彼を「辣韮」と呼びなして囃し立てたけれども、此陰欝な少年の眼には一種不敵の光が浮んで居た。

中学へ行ってからの事は駅長は少しも知らなかったそうだ。小林は軍人志願だろうと想像して居たが、彼は上京して東京専門学校で文学を修めた。卒業する時には誰でも恐ろしい乱暴者になったそうだ。此間駅長は鉄道学校に居て彼に関する消息は少しも知らなかったが、四年ばかり以前に日鉄労働者の大同盟罷工が行われた時、正気倶楽部の代表者として現われたのは、工夫あがりの小林浩平であった。

驚いて様子を聞いて見ると、彼は学校を出ると其儘、父親に手紙を遣って「小作人の汗と株券の利子とで生活するのは人間の最大罪悪だ、家産は弟にやる、自分はどうか自由に放任して置いて呉れ」という意味を書き送った。父親は非常に驚いて何か不平でもあるのか、家産を弟に譲っては小林家の先祖に対して申訳がない、殊に世間で親の仕打が悪いから何か不平があって、面当にする事と思われては困るというので、泣くようにして頼んで見たけれど浩平は頑として聞かなかった、百方手を尽して見たけれどもそれは全く無駄であった。

村では浩平が気が触れたのだという評判をする者さえ有ったそうだ。

幾万の家産を抛ち、義理ある父母を棄てた浩平は其儘工夫の群に姿を隠したが何時の間にか其前半生の歴史を暗まして仕舞うた。彼が野獣のような工夫の団結を見事に造り上げて、其陣頭に現われた時には社会に誰一人として彼の学歴を知って居るものは無かったのである。駅長は其頃中仙道大宮駅に奉職して居て、十幾年かぶりで小林に会見したのであったそうだ。

「君なんぞまだ若気の一途に、学問とか、名誉とかいう事ばかりを思うのも無理はないけれど、何もそんな思いをして学問をしなくっても人間の尽す道は吾々の生活の上にも充分あるではないか。

見給え学問をして態々工夫になった人さえあるでは無いか。君！　大いに自重しなくちゃ好けないよ若い者には元気が第一だ。」

「はい……。」と小さな声で応えたが、私は何とも知れぬ悲しさと嬉しさとが胸一ぱいになって、熱い涙がハラハラと頬を流れる。努めて一口応答しようと思うけれど、張りさけるような心臓の激動と、とめどなく流れる涙とに私は只啜り上げるばかりであった。

「小林はあれで立派な学者だ、此間の話では複線工事の監督に此処へ来るという事だから、君も気を付けて近附きになって置いたら何かと都合が好かろう。」

私の胸には暁の光を見るように、新しい勇気と、新しい希望とが湧いた。

十六

社宅を辞して戸外に出ると夜は更けて月の光は真昼のようである。私は長峯の下宿に帰らず、其儘夢のような大地を踏んで石壇道の雨に洗われて険しい行人坂を下りた。

故郷の母のこと、下谷の伯母のこと、それから三崎町の「苦学社」で嘗めた苦痛と恐怖とを想い浮べて連想は果てしもなく、功名の夢の破滅に驚きながら何時しか私は高谷千代子に対する愚かなる恋を思うた。私が之まで私の恋を思う度に、冷たい私の智恵は私の耳に囁やいて、恋ではない、恋ではないと我と我心を欺いて纔に良心の呵責を免れて居たが、今宵此月の光を浴びて来し方の詐欺に思い至ると、自分ながら自分の心の浅猿しさに驚かれる。

私は今改めて自白する、私の千代子に対する恋は、殆ど一年にわたる私の苦悩であった、煩悶であった。

そして私はいま又改めて此月に誓う、私は千代子に対する恋を捨てて新しい希望に向って、男らしく進まなければならない。丁度千代子が私に対するような冷さを、数限りなき私達の同輩は此社会から受けて居るではないか。私はもう決して高谷千代子の事なんか思わない。

決心につれて涙がこぼれる。立ち尽すと私は初めて荒漠な四辺の光景に驚かされた、幽かな深夜の風が玉蜀黍の枯葉に戦いで、蟋虫の声が絶え絶えに、行く秋のあわれをこめて聞えて来る。先刻、目黒の不動の門前を通った事だけは夢のように覚えて居るが、今気が付いて見ると私は桐ヵ谷から碑文谷に通う広い畑の中に佇んで居る。夜はもう二時を過ぎたろう、寂寞として宛然絶滅の時を見るようである。

人の髪の毛の焦げるような一種異様な臭気が何処からともなく身に迫って鼻を撲ったと思うと、慄然とするように物寂しい夜気が骨にまでも泌み渡る。

何だろう、何の臭気だろう。

おお、私は何時の間にか桐ヵ谷の火葬場の裏に立って居たのだ。森の梢には巨人が帽を脱いで首を出したように赤煉瓦の煙筒が見えて、縷々と一度高く静かな空に立ち上った煙は、また横に靉いて傾く月の光に葡萄鼠の色をした空を蛇窪村の方に横切って居る。

私は多摩川の丸子街道に出て、大崎に帰ろうとすると火葬場の門のあたりで四五人の群に行合うた。私は此人達が火葬場へ仏の骨を拾いに来たのだという事を知った。両傍に尾花の穂の白く枯れた田舎道を何か寂しそうにヒソヒソと語らいながら平塚村の方に行く後影を私は見送りながら佇んだ。

「おい兄や、どうして恁んな処へ来たんだい怪しいいな、狐に魅まれたんじゃあ無いの？」

私は少年の声に慄然として振り向きさま、月あかりにすかして見ると驚いた。此間雨の日に停車場で五銭の白銅を呉れてやった、彼の少年ではないか。

「君か、君こそ何うして恁んな処に来て居るのかい」と私はニタニタ笑って居る少年の顔を薄気味悪く覗きながら問い返した。

「乃公ァ当り前よ、此処のお客様に貰いに来て居るのじゃあ無いか、兄やこそ怪しいや！」と少年は頻りに笑って居る。

噫、少年は火葬場に骨拾いに来る人を待受けて施与を貰う為に、此物淋しい月の夜を恁んな処に彷徨いて居るのだ。

五位鷺が鳴いて夜は暁に近づいた。

十七

其年も暮れて私は十九歳の春を迎えた。

停車場では此頃鉄の火鉢に火を山のようにおこして、硝子窓を閉め切った狭い部屋の中で、駅長の影さえ見えなければ椅子を集めて高谷千代子と大槻芳雄の恋物語をする、駅長と大槻とは知己なので駅長の居る時は流石に一同遠慮して居るけれども、助役の当番の時なんぞは、殆ど終日其噂で持ち切るような有様である。乃公は彼処の森で二人の姿を見たというものがあれば、乃公は此処の野道で二人が手を取って歩いて居るのを見たという者がある。それから話の花が咲いて、有る事ない事、果ては聴くに忍びないような猥りがましい噂に落ちて、ドッと笑う。

最も之は停車場ばかりの噂ではなかった。長峯の下宿の女房も、権之助坂の団子屋の老婆も、私は至る処で千代子の恋の噂を耳にした、千代子は絶世の美人というのではないけれども、大理石のように緻やかな肌、愛嬌の滴るような口許、小鹿が母を慕うような優しい瞳は少くとも万人の眼を惹いて随分評判の高かった丈に世間の嫉妬も、亦恐ろしい。

嫉妬！　私は世間の嫉妬の恐ろしさを今初めて知った。憐れなる乙女は切なる初恋の盃に口づけする間もなく、身は何時の間にか此恐ろしい毒焔の渦きに、包まれて、身動きも出来ない讒謗の糸は幾重にも其いたいけな手足を縛めて居たのである。「何うして大槻という奴は有名な男地獄で、最早横浜に居た時分から婆芸妓なんかに可愛がられた事があって大変な玉なんだ」と誰やらが恁んな事をいうた。

「女だってそうよ、虫も殺さないような顔はして居ても、根が越後女だからな」私は恁んな誹謗の声を聞く度に云うに云われぬ辛い思をした。私の同情は無論純粋の清い美しい同情ではなかった。二人の運命を想いやる時には、いつでも羞しい我の影がつき纏うて、他人の幸福を呪うような浅猿しい根性も萌すのであった。

実際千代子の大槻に対する恋は優しい、はげしい、またいじらしい初恋のまじり無き真情であった。万事に甘い乳母を相手の生活は千代子に自由の時を与えたので、二人夕ぐれの逍遥(そぞろあるき)など、深き悲痛を包んだ私にとっては此上なく恨めしい事であった。

貧しき者は、忘れても人を恋するものでない。

恋――というも烏滸がましいが、私にとっては切なる恋、其恋のやぶれから、云いしれぬ深い悲哀がある上に、私は思いがけない同輩の憎悪を負わなければならない身となった。それは去年の秋の蔵工学士の事件から私は足立駅長に少からぬ信用を得て、時々夜など社宅に呼ばれる事がある。他の同輩はそれを非常に嫉に思うて居る。

私は性来の無口、それに人との交際が下手で一度隔った心は、いつ調和が附くという事も無く日に疎ましくなって行く磯助役を始同輩の者は此頃碌々口を聞く事も稀である。私は恁んなに同輩から疎まれると共に親しい一人の友が出来た、それはかの飄浪の少年であった。

此頃の寒空に吹き曝されて流石に堪え兼るのであろう。日あたりの好い停車場の廊下に来て、倨まっては例の子守女にからかわれて居る、雪の降る日氷雪の日、少年は人力車夫の待合に行って焚火にあたる事を許される。

少年は三日におかず来る、私は暇さえあれば此小さい飄浪者を相手にいろいろの話をして、辛くあたる同輩の刃のような口を避けた。私は何時か千代子と行き会ったかの橋の欄干(おばしま)に倚って、冬枯れの曠野にションボリと孤独の寂寥を心ゆくまでに味うことも幾度かであった。

十八

寂しい冬の日は暮れて、やわらかな春の光が又武蔵野にめぐって来た

丁度三月の末、麦酒会社の岡につづいた桜の莟が綻びそめた頃、私は白金の塾で大槻医師が転居するという噂を耳にした。塾というのは片山という基督教信者が開いて居るのでもとは学校の教師をして居たのが、文部省の忌憚に触れて、夫からは最早職を求めようともせず、白金今里町の森の中に小さい塾を開いて近処の貧乏人の子供を集めては気焔を吐いて居る。駅長とは年頃懇意にして居るので私は駅長の世話で去年の秋の暮あたりから休暇の日の午後を此片山の塾に通う事にした。

片山泉吉という年齢は五十ばかり、思想は古いけれども、明治十八年頃に洗礼を受けて、国粋保存主義とは随分はげしい衝突をして来たので、貧乏の中に、老いたけれども、気骨はなかなか青年を凌ぐ勢である。

私は此老夫子の感化で多少読書力も出来る。労働を卑しみ、無学を羞じて、世を果敢なみ、身をかねると云うような女々しい態度から小さいながら、弱いながらも胸の焔を吐いて、冷たい社会を燬きつくしてやろうと云うような男

男しい考も湧いて来た。
大槻が転居するという噂は、私にとって全然、他事のようには思われなかった、私はそれとなく駅長の細君に、聞いて見たが噂は全く事実であった。肌寒い春の夕がた私は停車場の柱によって千代子の悲愁を想いやった。思いなしか此頃其女の顔がどうやら憔れたようにも見える。
大槻の家族が巣鴨に転居してから、一週間ばかり、金曜の午後私が改札口に居ると大槻芳雄が来て小形の名刺を私に渡して小声で囁いた。
「高谷様に之を渡して呉れないか」率直に云えば私は大槻が嫌いだ、大槻が嫌いなのは私の嫉妬ではないと思う。けれども私が今これを拒むのは何となく嫉妬のように見えてそれは卑怯だという声が心の底で私を責める、私は黙って諾いた。
「有り難う！」と如何にも嬉しそうに云うたが、「君だから恁んな事頼むのよ、好いね詰度渡して呉れ給え！」と念を押すようにして、ニッコリ笑うた、何という美しい青年であろう、心憎いというのは恁う云う姿であろう。
何うしたものか其日千代子の学校の帰りは晩かった。何処でどうして私は之を千代子に渡そうかと思ったが、胸は何となく安からぬ思いに悩んだ、長い春の日も暮れて火ともし頃、なまめかしい廂髪に美人草の釵をさした千代子の姿がプラットホームに現われた。私は千代子の背後に従いて階壇を昇ったが、他に客は殆ど無い。

「高谷さん！」私は四辺を憚りながら呼びかけた。思いなしか千代子は小走に急ぐ、「高谷さん！」と呼ぶと、此度は中壇に立ち止って私の方を向いたが、怪訝な顔をして口許を手巾でおおいながら、鮮やかな眉根を一寸顰めて居る。
「何ですか大槻さんが之を貴女に上げて下さいってと……」
と私は名刺を差出した。
「ああ爾う」と虫の呼気のように応えたが、サモきまりが悪そうに受取って、淡暗い洋灯の光ですかして見たが、「どうも有り難う」と迷惑そうに笑釈する。私はこの千代子の冷胆な態度に、丁度、長い夢から醒めた人のように暫らくは忙然として立ち尽した。
辛い人の世の生存に敗れたものは、鳩のような処女の、繊弱い足の下にさえも蹂躙られなければならないのか。
翌日、千代子は化粧を凝らして停車場に来た。其夕、大槻は千代子を送ってプラットホームに降りたが、上野行の終列車で帰った。土曜、日曜の夕、其後私は幾度も大槻が千代子を送って目黒に来るのを見た。二人がひそひそと語らいながら、私の顔を見ては何事か笑い興ずるような時など、私は胸を刳って嬲殺にされるような思がした。
佳人と才子との恋は其後幾程もなく消え失せて大槻の姿は再び目黒階壇に見られなくなった。例えば曠野に吐き出した列車の煤煙のように、さしも烈しかった世間の噂も何

時とはなしに消えて、高谷千代子の姿はいま暮春の花と見るばかり独り、南郊の岡に咲きほこって居る。

十九

其春のくれ、夏の初から山の手線の複線工事が開始せられた。目黒停車場の堀割は全線を通じて最も大規模の難工事であった。小林浩平は数多の土方や工夫を監督する為に出張して、長峯に借家をする。一切の炊事は若い工夫が、交代に勤めて居る。私は初めて小林の勢力を眼のあたり見た。私は眼に多少の文字ある駅夫などが反って見苦しい虚栄に執着して妄想の奴隷となり、同輩互に排斥し合うて居るのに、野獣のような土方や、荒くれな工夫が、此首領の如何下に階級の感情があくまでも強められ、団結の精神の如何にもよく固められたのを見て、私は聊か羞しく思うた。あらぬ思に胸を焦して、罪もない人を嫉んだり、また悪しんだりした事の浅猿しさを私はつくづく情けなく思うた。

工事は真夏に入った。何しろ客車を運転しながら、溝のように狭い堀割の中で小山ほどもある崖を崩して行くので、仕事は容易に捗らぬ、一隊の工夫は恵比須麦酒の方から一隊の工夫は大崎の方から、目黒停車場を中心として、徐々と工事を進めて来る。

初めのうちは小さいトロッコで崖を崩して土を運搬して居たのが、工事の進行につれて一台の汽罐車を用うる事になった。たとえば溶炉の中で人を蒸し殺すばかりの暑さの日を悪魔の群れたような土方の一団が、各自に十字鍬や、ショーブルを持ちながら、苦しい汗を絞って、激烈な労働に服して居る処を見ると、私は何となく悲壮な感にうたれる。恵比須停車場の新設地まで泥土を運搬して行った土工列車が、本線に沿うて纔かに敷設された仮設軌道の上を徐行して来る。見ると涉を塗ったような頑丈な肌を、烈しい八月の日に曝して、赤裸体のもの、襯衣一枚のもの、赤い褌を占めたもの、鉢巻をしたもの、二三十人が各自に得物を提げて何処という事なしに乗込んで居る。汽罐の正面へ大の字に跨って居るのが有ると思えば、踏台へ片足かけて、躰軀を斜に宙に浮かせて居るのもある。何か頻りに罵り騒ぎながら、野獣のような眼をひからせて居る形相は所詮人間とは思われない。

余程のガラクタ汽鑵と見えて、空箱の運搬にも、馬力を苦しそうに喘がせて、泥煙をすさまじく突き揚げて居る、土工列車がプラットホーム近くで進行を止めた時、渋谷の方から客車が来た。堀割工事の処に入ると徐行して、今土工列車の傍を通る、土方は云い合せたように客車の中を覗き込んだが何か眼に付いたものと見えて、

「ハイカラ！　此処まで来い」

「締めてしまうぞ……脂が乗ってゃあがら」

「女学生！　ハイカラ！　生かしちゃあ置かねいぞ」

私は恐ろしい肉の叫喚をまのあたり聴いた。見ると三等

室の戸が開いて、高谷千代子が悠々とプラットホームに降りた。華奢な洋傘をパッと拡げて、別に紅い顔をするのでもなく薄い唇の固く結ぼれた口許に、泣くような笑うような一種冷やかな表情を浮べて階壇を登って行って仕舞うた、土方はもう顧る者もない、何時の間にかセッセと働いて居る。

私は何故に同じ労働者でありながら、彼の土方のように洒然として働けないのであろう。

土方が額に玉のような汗を流して、腕の力で自然に勝って、あらゆるものを破壊して行く間に、私達は、シグナルやポイントの番をして、機械に生血を吸い取られて行くのだ。私達の此痩せ衰えた亡者のような躰軀に比べて、私はあの逞しい土方の躰軀が羨しい、そして一口でも好いからあの美しい千代子の前に立ってあんな暴言が吐いて見たい。

私は片山先生と小林監督との感化で冬の氷に鎖されたような冷たい夢から醒めて、人を羨み身を羞るというような、気遅れ勝ちの卑しい根性を漸次に捨てて行く事が出来た。新しい希望に満されて、私は新しい秋を迎えた。

二十

「今日の社会は大かた今僕が話したような状態で、丁度また新しい昔の大名が出来たようなものだ。昔の大名は領土を持って居て、百姓から自分勝手に取立をして、立派な城廓を築いたり、また大勢の臣下(けらい)を抱えたりして居た。今話した富豪(かねもち)と云う奴が矢張り昔の大名と同じで、領土の代りに資本を持って居る大仕掛の機械を持って居る。資本と機械とがあればもう吾々労働者の生血を絞り取る事は容易なものだ。昔の祖先等(おじいさんたち)が土下座をして大名の行列を拝んで居る処へ行って、今から後には御大名だとか将軍様だとか云うものが無くなって、皆同等の人間として取扱われる時が来るという見た処で、其を信ずる者は一人も無かったに違いない。けれども時が来れば大名も無くなる、将軍も無くなる、今僕が玆で君に話したような事を、同輩に聞かして見た処で仕方がない。

いや僕にしてからが、之からの社会は何んなであろうとか、何時爾んな社会になるであろうと云うような事を深く考えるのは大嫌だ、また爾んな暇もないのだが、少くも現在自分等は朝から晩まで恁んな苦しい労働をしても何故浮ぶ瀬がないのか、何故恁んな世智辛い社会になったのか、また自分等と社会とは何ういう関係になって居るのかという事位は皆が知って居て呉れなくちゃあ困る、僕が先刻話したような事をだね。」

小林監督は私を非常に愛してくれる。今日も宵から親切に話し続けて今の社会の成立を殆ど一時間に亘って熱心に説明して呉れた。「先年大宮で同盟罷工があってから、一時社会では非常に彼の問題が喧しかったが、労働者は爾う世

間で云うように煽動て見た処で容易く動くものじゃあない、世間の学者なんと云う奴等が、同盟罷工と云えば宛然お祭騒でもして居るように花々しい事に思うのが第一気に喰わねい、好んで煽動たにしろ、また教唆したにしろ、君も知っての通り彼の無教育な連中が一個月なり二個月なり饑飢を忍んで団結すると云う事実の底には、どれ程の苦痛や悲哀があるのか知れたものではない。」窪んだ眼は今にも火を見るかと思われるばかり輝いて、彼の前にはもう何者もない、彼はもう去年プラットホームで私の為に工学士を突き飛ばした工夫頭ではなくて、立派な一角の学者だ、感にうたれ頂を垂れて聴きとれて居る私の姿が、彼にとっては百千の聴衆とも見えるようである。

「時の力というものは恐ろしいものだ。大宮一件以来もう十五年になる、僕達が非常な苦痛を嘗めて蒔いた種が此頃漸く芽を出しかけた。北海道にも、足尾にも、別子にも、長崎にも、僕達の思想は烟のように忍び込んで、労働者も非常な勢で覚醒めて来た。」

それから彼が、其火のような弁を続けて今にも暴風雨の来そうな世の状態を語った時には、私の若い燃えるような血潮は、脈管に溢れ渡って、何とも知れず涙の頬に流れるのを覚えなかったが、私の肩にソッと手を掛けて、「惜しいもんだ。学問でもさせたら嘸立派なものになるだろう……けれども行先の遠い身だ、其強い感情をやがて、世の下層に沈んで野獣の様にすさんで行く同輩の為に注いで呉れ給え、社会の事は総て根気だ、僕は一生工夫や土方を相手にして溝の埋草になって仕舞っても、君達のような青年があって、蒔いた種の収穫をして呉れるかと思えば安心して火の中にでも飛び込むよ。」

激しい男性の涙が止めどなく流れて、私は面を挙げて見る事が出来なかった。談話は尽きて小林監督は黙って五分芯の洋灯を見つめて居たが人気の少い寂寥とした室の夜気に、油を揚る幽かな音が秋のあわれをこめて、冷めたい壁には朦朧と墨絵の影が映って居る。

「君はもう知って居るか、足立が辞職するという事を」

此度は調子を変えて静かに落着いて云う。

「エ！　駅長様はもうやめるのですか！」と私は寝耳に水の驚きを覚えた。「何時止めるのでしょう、何うして……」と私の声がとぎれとぎれになる。

「此間遊びに行くと其話が出た、最も以前から其心はあったんだけれど、妻君が引止めて居たのさ。」

「駅長様が止めて仕舞っちゃあ……」と私は思わず口に出したが、此人の手前何となく気がとがめて口を噤んだ。

「其話もあった。駅長がいろいろ君の身の上話もして、助役との関係も蔭ながら聞いた。若し君さえ好ければ足立の去った跡は僕が及ばずながら世話をして上げよう。」

其夜私は何処までも小林に一身を任せ度い事、幸に一人前の人間ともなった暁には、及ばずながら身を粉に砕いても其事業の為に尽し度いという事などを、廻らぬ重い口で

固く盟って宿を辞した。
　長峯の下宿に帰ってから灯を消して床に入ったが虫の声が耳に付いて眠られない、私は暗のうちに眠ざめて、つくづく足立夫婦の親切を思い行く先の運命を種々に想いめぐらして、二時の時計を聴いた。

二十一

少からず私の心を痛めた、足立駅長の辞職問題は、かの営業所長の切なる忠告で、来年の七月まで思いとまると云う事になって私はホッと一息した。
　物思う身に秋は早くも暮れて櫟林に木枯しの寂しい冬は来た。昨日まで苦しい暑さを想いやった土方の仕事は、最早霜柱の冷たさをいたむ時となった。山の手線の複線工事も大略済んで、案の通り長峯の掘割が後に残った。此頃は日増しに土方の数を加えて、短い冬の日脚を、夕方から篝火を焚いて忙しそうに工事を急いで居る。灯の影に閃く得物の光、暗にうごめく黒い人影、罵り騒ぐ濁声、十字鍬やスクープや、ショーブルの乱れた処は、宛然戦争の後をまのあたり観るようである。
　大崎村の方から工事を進めて来た土方の一隊は長峯の旧の隧道に平行して、更に一個の隧道を穿とうとして居る丁度其隧道が半分程穿たれた頃の事であった。一夜霜が雪のように置き渡して、大地は宛然鉱石を踏むように冱てた朝、例の土方が各自に異様な打扮をして、零点以下の空気に白い呼気を吹きながら隧道の上の常例の処で焚火をしようと思ってやって来て見ると、土は一丈も堕ち窪んで、掘りかけた隧道は物の見事に破壊れて居る。
　「ヤァ、大変だぞ!!　こりゃあ危ない!!」と叫ぶものもあれば「人殺しい、ヤァ大変だ」と騒ぎ立てる者もある。
　「夜でマァ好かった、工事最中に恁んな事があろうものなら、夫こそ死人があったんだ。」「馬鹿ァ云え夜だから恁んな事が有ったんだ霜柱の故じゃあないか。」
　「生意気な事を云やがる、手前見たような奴だ、恁んな処で押し潰されるんは！　余り強吐張を云ゃあがると後生が無いぞ。」
　日がさして瓦屋根の霜の溶ける時分には近処の小売屋の女房も出て来れば、例の子守女も集まって喧しい騒ぎになって来た。監督の命令で崩れた土は直ぐ停車場前の広場に積み上げる、夜を日に次でも隧道工事を進めよというので、土方は朝から何時に無い働き振りである。
　霜日和の晴渡った其日は、午後から鳶色の靄が淡くこめて、風の和いだ静かな天気であった。午後四時に私は岡田と交代して改札口を出ると今朝大騒ぎのあった隧道の処にまた人が群立って何か事故ありげに騒いで居る。何うしたのだろう、又土が崩れたのではあるまいか、爾うだ夫に違いないと独で決めて見物人の肩越に覗いて見ると、土は今朝見たまま大かた掘出して丁度井戸のようになって居るば

かりで別に新しく崩れたという様子もない。「何うしたんだい誰か負傷でもしたの」と一人が聞くと、「人が出たんですとさ、人が！」と牛乳配達らしいのが眼を丸くして云う。私は事の意外に驚いたが、若しやと云う疑念が雷光のように閃いたので、無理に人を分けて前へ出て見た。

疑念というのは、土の崩れた中から出た死骸が、フト私の親んだ乞食の少年では無いだろうか、少年は土方の夜業をして捨てて行った燼にあたる為に隧道の上の菰掛の仮小屋に来て居たのを私は度々見た事があったからである。見ると死骸はもう蓆に包んで顔は見えないけれども、まだう ら若い少年の足が其菰の端から現われて居るので、私はそれが彼の少年にまぎれもない事を知った。

噫、可憐そうな事をした！

何処からともなく襲うて来た一種の恐怖が全身に痺れ渡って、私はもう再び其菰包を見る事すら出来なかった。昨日まであんなにして居たものを、人間の運命というものは実に分らないものだ。何という薄命な奴だろう、思うに昨夜の寒さを凌ぎかねて、焚火の燼の傍に菰を被ったまま倨って居た処を、急に崩れ落ちて、惩んな浅猿しい最後を遂げたに相違あるまい。

少年の事情はせめて小林監督にでも話してやろう、私は顔をあげて死骸の傍に突立って居る逞しい労働者の群を見た。薄い冬の夕日が、弱い光を其赤顔に投げて、猛悪な形相に一種いいしれぬ恐怖と不安の色が浮んで居る。たとえば猛獣が雷鳴を怖れて其鬣の地に敷くばかり頭を垂れた時のように、「巡査が来た！」

「大将も一処じゃあ無いか」「大将が来たぞ！」と土方は口々に囁く、やがて小林監督は駐在所の巡査を伴立ってやって来た。土方は云い合わせたように道をあける。

二十二

「好い成仏しろよ！」小林の差図で工夫の一人がショーブルで土を小さい棺桶の上に落した。私はせめてもの心やりに小石を拾って穴に入れる。黙って居た一人が此度は横合から盛り上げてある土をザラザラと落したので棺はもう大かた埋もれた。

小坊主が、人の喉を詰らせるような冷い空気に咽びながら、鈴を鳴らして読経を初めた。

小林は洋服の儘角灯を提げて立って居る。

私が変死した少年の事に就て小林に話すと、彼は非常に同情して、隧道の崩れたのは自分の監督が行き届かなかったからで、他に親類がないと云うならば、此儘村役場の手に渡すのも可憐そうだから乃公が引取って埋葬してやるというので、一切を引受けて三田村の寂しい法華寺の墓地の隅に葬る事となった。尤も此寺というのは例の足立駅長の世話があったのと、納豆売をして居た少年の母の事を寺の和尚が薄々知って居たのとで、案外早く話がついて、其夜

のうちに埋葬して仕舞う事になったのだ。
今夜は何時になく風が止んで、墓地と畑の境にそそり立った榛の梢が煙のように、冴え渡る月を抽いて物すごい光が寒竹の籔をあやしく隈どって居る。幾つとなく群立った古い石塔の暗く、また明く、人の立ったようなのを見越してなだらかな岡が見える。其岡の上に麦酒会社の建築物が現われて、黒い輪廓があざやかに、灰色の空を区劃った処など、何とはなしに外国の景色を見るようである。
咽ぶような絶え入るような小坊主の読経は、細くとぎれとぎれに続いた。小林監督は頂垂れて考え込んで居る。

「工事が済み次第行くつもりだ、暫らく彼方へ行って働いて見るのも面白かろう、同志は直ぐにも来てくれるように云うのだけれど今此処を外す事は出来ない、それに正軌倶楽部の方の整理も付けて行かなけりゃあ困るのだから、早くとも来年の三月末頃にはなるだろうな。」
「爾うなれば私も非常に嬉しいのです。停車場の方も此頃はつくづく嫌になりましたし、成るたけ早く願い度い方です」と私は心から嬉しく答えた。
「駅長も来年の七月までと云う事だし、それに彼地へ行けば、同志の者は僕を非常に待って居て呉れるのだから、君も今より少しは好い位置が得られるだろうと思う、旁々君の為にはマア幸福かも知れない。」
「足立様も満足して下さるでしょう。」

「彼の男も実に好人物だ、郷里の小学校に居た時分からの友達で、鉄道に勤めるようになってから最早二十年にもなるだろう、最早少し覇気があったなら相当な地位も得られたろうに、今辞職しちゃ細君も嘸困るだろう。」
二人は話しながら、月の光を浴びて櫟林の下を長峯の方にたどった。冬の夜は長くまだ十時を過ぎないけれども往来には人影が杜絶えて、軒灯の火も氷るばかりの寒さである。
長崎の水谷造船所と九州鉄道の労働者間に此度余程強固な独立の労働組合が組織されて、突然其組織が発表された事は二三日前の新聞紙に喧しく報導された。私は其組合の幹部が皆小林監督の同志であって、春を待って私達が其組合の事業を助ける為に門司に行かねばならぬという事は夢にも思わなかったが今夜小林監督に其話を聞いて私は非常に勇み立った。
実を云うと私が門司に行くのを喜んだのは一つには目黒を去ると云う事があるからである。私は此頃、馴染の乗客に顔を見られたり、また近処の人に遇ったりすると、何だか「彼奴も何時まで駅夫をして居るのか」と思われるような気がして限りなき羞恥を覚えるようになって来た。その羞しい顔を何時までも停車場にさらして人知れぬ苦悩を胸に包むよりも、人の生血の波濤を眼のあたり見るような、烈しい生存の渦中に身を投げて、心ゆくまで戦って戦って、戦い尽して見たいという悲壮な希望に満たされて居たから

である。
私は雨戸を締る為に窓の障子を開けた。月の光は霜に映って、宛然白銀の糸を引いたよう。裏の藪で狐が鳴いた。

二十三

二十歳の春は来た。
停車場も何時の間にか改築される、山の手線の複線工事も大略出来上って、一月の十五日から客車の運転は従来の三倍数になった。最早之までのように呑気な事も出来ない。私達の仕事は非常に忙しくなって来た。
鉄道国有案が議会を通過して、遠からず日鉄も官営になるという噂は、駅長の辞意を弥ょ固くした。
私は仕事の忙しくなった事を寧ろ歓んで迎えた。前途に期待のある身に取っては物思う暇のない程嬉しい事はない。一月も二月も夢のように過ぎて、南郊の春は早くも梅も鶯も共に老いた。
佳人の噂はとかく絶える間もない、高谷千代子は今年、「窮行女学院」を卒業すると直ぐ嫁に行くそうだという評判は出札の河合を中心として此頃停車場の問題である。
「女というものは処女のうちだけが花よ、学校に居れば又試験とか何とか云うて相応に苦労がある、マア学校を卒業して二三年親の処に居る間が女としては幸福な時だね、学校を卒業すると直ぐお嫁になるなんて乳母も乳母で、あんまり気が利かな過ぎるじゃあ無いか。」生意気な河合は丁度演説でもするように喋る。
「ヒヤヒヤ、二三年目黒に居て時々停車場へ遊びに来るようだと猶好いだろう。」と柳瀬という新しい駅夫が冷かすと、岡田が後へ付いて「柳瀬なんぞは知るまいが之には深い原因があるのだね、河合君は知って居るさ、ねえ君！」
「藤岡なんぞあれで一時大に鬱ぎ込んだからね」と私の方を見て冷笑する、私は思わず顔を赧らめた。
姿なり、打扮なり、婦人というものは成るたけ男の眼を惹きつけるように装うてそれでやがて男の力に依って生きようとするのだ。男の思を惹こうとする処に罪がある。それは婦人が男に依って生きねばならぬ社会の罪だ。罪は罪を生む。私達のように汚れた、疲れた、羞し青年は空しく思を惹かせられたばかりで、そこに嫉妬が起る、そこに、誹謗が起る、私は世の罪を思うた。

三月十八日は高谷千代子の卒業日、私は非番で終日長峯の下宿に寝て居る積りであったけれども、何となく気が欝いで遣瀬がないので、家を出ると其儘多摩川の二子の方に足を向けた。木瓜の花と菫の花とが櫟林の下に咲き乱れて居る。其疎な木立越しに麦の畑が遠く続いて、菜の花の上に黒ずんだ杉の林のあらわれた処など、景色も道も単調ではないけれど、静かな武蔵野の春に我知らず三里の道を行き尽して、多摩川の谷の一目に見渡される稲荷坂に出た。

稲荷坂というのは、旧布哇公使の別荘の横手にあって、坂の中程に小さい稲荷の祠がある。社頭から坂の両側に続いて桜が今を盛りと咲き乱れて居る。たまさかの休暇を私は春の錦という都に背いて思わぬ処で花を見た。祠の椽に腰をかけて、私は此処で「通俗巴里一揆物語」の読みかけを出して見たが、何となく気が散って一頁も読む事が出来なかった。私は静かに坂を下りて、岸に沿うた蛇籠の上に腰かけて静かに佳人の運命を思い、水の流れをながめた。

此一箇月ばかり千代子は何故あんなに欝いで居るのであろう、汽車を待つ間の椅子にも頂垂れて深き想に沈んで居る。千代子の苦悩は年頃の処女が嫁入前に悲しむという、其深き憂愁であろうか。

群を離れた河千鳥が汀に近く降り立った。其鳴き渡る声が、春深き霞に迷うて真昼の寂しさが身に泌みるようである。

二十四

四月一日私はいよいよ小林浩平に伴われて門司へ立つのだ。三月十五日限り私は停車場をやめて、種々旅の仕度に忙わしい。たとえば浮世絵の巻物を披げて見たように淡暗い硝子の窓に毎日毎日映って来た社会のあらゆる階級のさまざまな人達、別離と思えば恋も怨も皆夢で、残るのは只なつかしい想念ばかりである。森も岡も牧場も、水車小屋も、辛い追懐の種ばかり、見るに苦しい景色ではあるけれど、これも別離と云えばまた新しい執着を覚える。

旅の支度も大かた済んだ別離の心やみ難く私は三月二十八日の午後、権之助坂を下りてそれとはなしに大鳥神社の側の千代子の家の垣に沿うて、橘和屋という料理屋の傍から大崎の田圃に出た。

蓮華、鷺草、きんぽうげ、鍬形草、暮春の花は丁度絵具箱を投げ出したように、曲りくねった野路を飾って、久しい記念の夕日が岡は、遠く出島のように、メリヤス会社の処に尽きて居る。目黒川は其崎を繞って品川に落ちる。其水の淀んだ処を亀の子島という。

大崎停車場は軌道の枕木を黒く焼いて拵えた粗糙い柵で囲まれて居る、其柵の根には目覚むるような苜蓿の葉が青青と茂って、白い花が浮刻のように咲いて居る。私はいつか此苜蓿の上に横わって沈欝な灰色の空を見た。品川発電所の煤煙が黒蛇のように渦きながら、亀の子島の松をかすめて遠い空に消えて行く、私は其煙の末をつくづくと眺めやって、私の来し方の宛然煙のような事を思うた。

遠くけたたましい車輪の音がするので、振り返って見ると、目黒の方から幌をかけた人力車が十台ばかり、勢よく駆けて来る。雨雲の低く垂れた野中の道に白い砂塵が舞い揚って、青い麦の畑の上に消える。車は見る見る近づいて、やがて私の寝て居る苜蓿の原の踏切を越えた。何の気もなく見ると、中央の華奢な車に盛装した高谷千代子が居

る。地が雪のようなのに、化粧を凝したので顔の輪廓が分らない、一寸私の方を見たと思うと直ぐ顔をそむけて仕舞うた。

佳人の嫁婚！

油のような春雨がしとしとと降り出した。丁度一行の車が御殿山の森にかくれた頃の事である。

翌日私の下宿に配達して行った新聞の「花嫁花婿」という欄に、工学士蘆鉦次郎の写真と、高谷千代子の写真とが掲載されて、六号活字の説明に恁んな事が書いてあった。

工学士蘆鉦次郎氏(三十五)は望月貞子の媒酌にて窮行女学院今年の卒業生中才色兼備の噂高き高谷千代子(十九)と昨日品川の自宅にて結婚の式を挙げられたり、猶同氏は新たに長崎水谷造船所の技師長に聘せられ来る四月一日新婚旅行を兼ね一時郷里熊本に帰省せらるる由なり。

蘆鉦次郎——高谷千代子——水谷造船所——四月一日、私は暫時新聞を見つめた儘身動きも出来なかったが、私の身辺に何か目に見えない恐ろしい運命の糸が纏い付いて居るような気がして、我知らず手を伸べて頭の髪を物狂わしきまでに掻きむしると、其手で新聞をピリピリと引裂いて仕舞った。

二十五

品川の海はいま深い夜の靄に包まれて、愛宕山に傾きかけた幽かな月の光が、宛然夢のように水の面を照して居る。水脈を暼める赤いランターンは朦朧と四辺の靄に映って、また油のような水に落ちて居る。

四月一日午後十一時十二分品川発下の関直行の列車に乗る為に小林浩平と私は品川停車場プラットホームに、新橋から来る列車を待ちうけて居る。小林は午後三時新橋発の急行にしようと云うたのを、私は少し気がかりの事があったので、強いて此列車にして貰うた。

「最早十五分だ」と小林はポケットから時計を出して、角灯の光に透かして見たが、橋を渡る音がしてやがてプラットホームに一隊の男女が降りて来た。

私達の休んで居る待合の中央の入口から洋服の紳士が、靴音高く入って来た。得ならぬ物の馨がして、花やかな裾が灯影にゆらいだと思うと其背後から高谷千代子が現われた。

云うまでもなく男は蘆鉦次郎だ。

見送の者は室の外に立って居る、男は角灯の光に私達の顔を透して突立ったが、やがて思い出したと見えて身軽に振り向くとフイとプラットホームに出て仕舞った。

果して彼は私達を覚えて居た。

取りのこされた千代子は、稍うろたえたが一寸瞳を私にうつすと、其儘蘆の後を追ってこれもプラットホームに出る。佳人の素振りはかかる時にも、流石に巧みなものであ

つた。「見たか？」と小林はニッコリ笑って私の顔を覘いたが「睨んでやったぞ!!」と云う。私は流石に見苦しい敗卒であった。よもや薫が此列車に乗ろうとは思わなかった。此夜陰に何という新婚の旅行だろう、私は有らゆる妄念の執着を断ち切って、新しい将来の為に、花々しい戦闘の途に上る、其初陣の門出に迄も、怪しい運命の糸に付き纏われて、恨み散り行く花の精の抜け出したような、彼女の姿を、今茲で見るというのは何たる事であろう。

潮が満ちたのであろう、緩く石垣に打寄せる水の音、恐ろしい獣が深傷にうめくような低い工場の汽笛の声、さては電車の遠く去り近く来る轟きが、私の耳には今宛然夢のように聞えて、今見た千代子の姿が何となく幻影のように思い做された。

「おい、汽車が来たようだよ」という小林の声に私は急いで手荷物を纏めてプラットホームに出た。

何時の間に来たのか乗客は可なりにプラットホームに群て居る。薫の姿も千代子の姿も更に見えない、三等室に入って窓の際に小林と相対って座った。一時騒々しかったプラットホームもやがて、寂寞として、駅夫の靴の音のみ高く窓の外に響く、車掌は発車を命じた。

汽笛が鳴る……

煙の喘ぐ音、蒸汽の漏れる声、列車は徐々として進行を初めた。私はフト車窓から首を出して見た。前の二等室から夜目にも鮮やかな千代子の顔が見えて、髣かに私の視線と会うたと思うと、フト消えて仕舞った。

急いで窓を閉めて座に就くと、小林は旅行鞄の中から二個の小冊子を出して、其一部を黙って私に渡した。スカレット色の燃えるような表紙に黒い「総同盟罷工(ゼネラルストライキ)」という文字が鮮やかに読まれた。小林の知己で此頃政府から酷く睨まれて居る有名な某文学者の手になった翻訳である。一時京橋の或る書肆から発行されるという評判があって、其儘立消になったのが、どうしたのか今配布の小冊子になって小林の手にある。巻末には発行所も印刷所も書いてない。

汽車は今追懐(おもいで)の深い蛇窪村の踏切を走って居る。

（一九〇七年一二月「新小説」）

獄中生活

堺利彦

一　監獄は今が入り時

寒川鼠骨君には「新四人」の著がある。田岡嶺雲君には「下獄記」の著がある。文筆の人が監獄に入れば、必ずやおみやげとして一篇の文章を書く例である。予もまた何か書かずにいられぬ。

監獄は今が入り時という四月の二十一日午後一時、予は諸同人に送られて東京控訴院検事局に出頭した。一人の書記は予を導いてかの大建築の最下層に至った。薄暗い細い廊下の入口で見送りの諸君に別れ、予はひとり奥の一間に入れられた。この奥の一間には鉄柵の扉がついていて、中には両便のために小桶が二つおいてあるなど、すでに多少の獄味を示している。あとで聞けばこれが仮監というのであった。ここに待たされること一二時間の後、予は泥棒氏詐欺氏、賭博氏、放火氏などとともに、目かくし窓の狭くるしい馬車に乗せられた。乗せられたというよりは、むしろ豚のごとくに詰込まれた。手錠をはめられなんだだけがせめてものことであった。

ほどなく馬車は警視庁の門に入った。「お帰り！」「旦那のお帰り！」などと呼ぶ奴がある。「今に奥様が迎えに出るよ」などとサモ気楽げな奴もある。警視庁でまた二時間ばかり待たされて、夕飯の弁当を自費で食った。ここでは巡査達も打解けて「なぜ別に署名人をこしらえておかなかったのです」というのもあれば「そんなことをしないところが社会党じゃないか」というものもある。そんなことから暫くそこに社会主義の研究が開かれて盛に質問応答をやったのは愉快であった。

二　東京監獄

それからまた同じ馬車に乗せられて、（今度は巡査氏の厚意によってややらくな席に乗せられた）東京監獄に着いたのはちょうど夕暮で、それから種々薄気味の悪き身体検査、所持品検査等のあった後、夜具と膳椀とを渡されてある監房に入れられた。

監房は四畳半の一室で、チャンと畳が敷いてある。高い天井には電灯がともされている。室の一隅にはあだかも炉を切ったごとき便所がある。他の一隅には小さな三角形の板張りがあって、土瓶、小桶などが置いてある。こりゃな

かなかしゃれたものだと予は思うた。その夜はそのままフロックコートの丸寝をやった。

二十一日の朝、糒（ほしいい）のような挽割飯を二口三口食うたばかりでまた取調所に引出され、午前十時頃でもあったろうか、十五六人のものどもと一しょに二台の馬車に乗せられて、今度は巣鴨監獄へと送られた。

ここでチョット監獄署の種類別を説明しておかねばならぬ。まず東京監獄が未決監、市ガ谷監獄が初犯再犯などを入れるところ、巣鴨監獄が三犯以上の監獄人種および重罪犯などを入れるところの由。それから予らのごとき軽禁錮囚、および何か特別の扱いをうける分は、みな巣鴨に送られるのである。ついでに書いておくが女囚は八王子におかれ、未丁年囚は川越におかれる。

三　巣鴨監獄

巣鴨監獄に着いて、サアいよいよ奈落の底に落ちて来たのだと思うと、あまり気味がよくない。

まず玄関のような一室で素裸にせられて、それから次の室で、「口を開けい」「両手をあげい」「四ん這いになれい」などという命令の下に身体検査をうけて、そこで着物と帯と手拭と褌とを渡される。いずれも柿色染であるが、手拭と褌とは縦に濃淡の染分けになって、多少の美をなしているからおかしい。着物は綿入の筒袖で、衿に白布が縫いつけられて、それに番号が書いてある。この白布は後に金札に改められた。堺利彦はこれより千九百九十号というものになり了った。

この前後に姓名、年齢、原籍、罪名等について、それはそれは繁雑きわまる取調べがあった。薩摩なまり、東北なまり、茨城弁など、数多の看守が立ちかわり入れかわり、同じようなことを幾度となく聞きただしては手帳につけて行く。その混雑の有様、面白くもあれば、おかしくもある。中には「いつつかまった」と問うから、「つかまったことはありません」と答えると、不思議そうな顔をして解しかねているのもある。すべてが泥棒扱いだから堪らない。

褌、靴下、風呂敷、ハンケチ、銀貨入りの小袋、ボロボロの股引など、それはそれは明細なことで、人の頭の一つや二つぐらい平気で擲るくせに、事いやしくも財物に関するときは、一毫の微一塵の細といえども、決して決して疎略にはせぬのである。財産神聖の観念はずいぶん深くしみこんだものだ。瘤の一つ二つや血の二三滴より、葉書一枚、手拭一筋の方が余程彼等には重大に感ぜられると見える。

それから柿色の鼻緒のついた庭下駄をはかせられて外に出ると、「そこにシャガンで待ってろ」という命令が下る。暫く待っていると、今度は「立て」「進め」という命令が下る。二足三足進むと、「待て待て、帯の結びようが違う」と叱られる。謹んで承たまわるに、帯は蜻蛉に結ん

でそしてその輪の方を左に向けるのだとのこと。ヤットそれを直してまた行きかかると、「オイオイ手を振ってはイカン」とまた叱りつけられる。諸君試みにやってごらんなさい、手を少しも振らせずに歩くのは非常に困難なものであります。

行くこと半町ばかりにして、赤煉瓦の横長い建物の正面の入口に来た。鉄柵の扉に錠がおろしてある。サア来た、いよいよこれだなと思うていると、「新入が十五名」と呼びながら外の看守が我々同勢を内の看守に引渡した。我々は跣足になって鉄扉の中に入った。中はズウット長い石畳の廊下で、冷やりとした薄気味の悪い風がソヨリと吹く。「そこに坐る」といわれたのですぐ前を見ると、廊下の片側に薄い俎のようなものが幾つも並べてあって、その上に金椀だの木槽だのがおいてある。よく見れば杓子も茶碗もある。いうまでもなくこれが御膳部であるのだ。そして人の坐るところには、襤褸でこしらえた莚のようなものがズット敷きわたしてある。そこで十五名一列になって膳の前に坐ると、そこに突立っている看守から「礼!」という号令がかかる。それで一礼して箸をとる。予は僅に二箸三箸をつけたのみで、ほとんど何ものをも食い得なんだ。また、「礼!」という号令の下に一礼して立ちあがると、今度は右側の室の鉄の戸を開けて、七八人ずつ入れられた。

四　巣鴨監獄の構造

ここでチョット巣鴨監獄の大体の構造を説明しておかねばならぬ。

まず正面の突当りが事務所で、その左右に南監と北監とがある。両監とも手の指を拡げたような形になって五個ずつの監に分れている。すなわち合計十監あって、その一監が、二十幾房かに分れている。それから遥か後ろの方に、七個の工場が並んで立っている。そのほかには、病監、炊所(附、浴場)、洗濯工場などがアチコチに立っている。そしてそれらの建物の間には、綺麗な芝原だの、運動場だのいろいろの畑だのがつくられている。

さて、この監獄が日本第一たるはいうまでもなく、世界中でも何番目という完美を極めたものだそうな。さすが日本はエライもので、監獄までが欧米に劣らぬほど繁昌するのだ。それはともあれ、今の正上典獄というのは、いわゆる文明流のやり方で、この日本第一の監獄に着々として改良を試みているとのこと。

五　初日、二日目、教誨師

予の入れられたのは北監の第六監で、最初の日は懲役七八年の恐ろしい男どもと一しょに六七人である房にいた。

甚だおちつかぬ一夜を明して二日目になれば、まず呼出されて教誨師の説諭をうけた。教誨師というのは本願寺の僧侶で「平民新聞というのはタシカ非戦論でしたかな、もちろん宗教家などの立場から見ても、主戦論などということはドダイあるべきはずはないのです。しかしまた、その時節というものがありますからな、そこにはまたいろいろな議論もありましょうが、ドウです時節ということも少しお考えなさっては」というのが予に対する教誨であった。なかなか如才のないことをおっしゃる。午後には無雑作にグルグルと頭を刈られた。これでまず一人前の囚人になった。

六　監房、夜具、食物

監房は八畳ばかりの板張りで、一方の隅に井戸側のようなものがあって、その中が低く便所になっている。一方の隅には水の出るパイプがあって、その下にチョイとした手洗鉢がとりつけてある。天井は非常に高く、窓は外に向って一つ、廊下に向って一つ、いずれも手のとどかぬところにある。朝早くなど、その窓から僅かの光線の斜めに射し入るのが、何ともいわれぬほどうれしく感ぜられる。

夜具はかなりに広いのが一枚、それを柏餅にして木枕で寝るのだ。着物は夜も昼も同じものでただ寝るときには襦袢ばかり着て着物を上に掛けろと教えられた。役に就く人には別に短着と股引とがある。

食物はずいぶんひどい。飯は東京監獄と違って色が白い。東京監獄は挽割麦だが、こちらは南京米だ。このごろ麦の値が高くなって、南京米の方が安く上るのだそうな。何にせよ味の悪いことは無類で、最初はほとんど呑み下すことが出来なんだ。菜は朝が味噌汁といえば別に不足はないはずだが、その味噌汁たるや、あだかもそこらの溝のドブ泥をすくうて来たようなもので、そのまた木槽たるや、あだかも柄のぬけた古柄杓のようなもので、その縁には汁の実の昆布や菜の葉が引かかっているところなど、初めはずいぶん汚なく感じた。次の夕飯の菜は沢庵に胡麻塩、これはなかなかサッパリしてよい。時々は味噌菜もある。唐辛子など摺りこんで、これも案外うまくこしらえてある。昼が一番御馳走で毎日変っている。まず日曜が豆腐汁、それから油揚と菜、大根の切干、そら豆、うずら豆、馬肉、豚肉など大がい献立がきまっている。豚肉などといえば結構に聞ゆれど、実のところは菜か切干かの上に小さな肉の切が三つばかり乗っているまでのことだ。それでも豚だ豚だとみなが大喜びをする。昼の菜の中で予輩の一番閉口したのは、輪切大根と菜葉とのときで「ヤァ今日は輪大か」と嘆息するのが常であった。飲むものはヌルイ湯ばかり。

聞くところによれば、この三度の菜の代が、今年の初めまでは平均一銭七厘であったが、戦争の開始以後は五厘を減じて一銭二厘となったとのこと。戦争はヒドイところに

まで影響するものだ。

七　特別待遇

六監にいること十日ばかりの後、予は十一監に移された。この十一監は十個の本監のほかにある別監で、古風な木造の、チョット京都の三十三間堂を思い出させるような建物である。監房は片側に十個あるだけで、前は廊下を隔てて無双窓になっている。房内は十二畳ばかりで、前後は荒い格子になって、芝居の牢屋の面影がある。後の方の格子には障子が立てられて、その障子の内にタタキの流し元と便所とが並んでいる。便所のところには板でこしらえた小さい屛風のようなものが立ててある。すべてここは広々として、気が晴れて、窓や障子を開けたときには空も見える。木も見える、雀の飛ぶのも見える、猫の来るのも見える。煉瓦と石と鉄とでかこうた本監にくらべると、居心地のよいことは何倍か知れぬ。

ぅけたまわるに、この十一監は特別待遇の場所で、軽禁錮の者、重禁錮中の教育ある者(社会にて身分ありし者)、老衰の者などを集めてある。ほかに、モウ本刑を務めあげて、附加刑の罰金を軽禁錮に換えられた、いわゆる換刑の者もここに来ている。チョット申しておくが、世間ではヨク監獄内の通用語としてこの世の中のことを娑婆娑婆というう。けれども、実際、今ではソンナ言葉は用いられておらぬ。みな「社会」といっている。

予はこの監に来てから、最初一両日は換刑の者と一しょにおかれ、次に一週間ばかり独房におかれ、最後には他の軽禁錮の者とともに三人でおかれた。その同房の二人は衛戍監獄から来た軍人であった。その他、この監にいる者の中には、恐喝取財未遂の弁護士、詐欺取財の陸軍大佐、官吏侮辱の二六新報の署名人、犬姦事件の万朝報署名人、恐喝取財の日出新聞記者、自殺幇助(情死未遂)の少年、官文書偽造の中学校書記、教科書事件の師範学校長、同上高等女学校長、元警部某、馬蹄銀事件の某々らであった。軽禁錮二個月の我輩なんどは幅のきかぬこと夥だしい。

八　一日の生活

さて、ここに一日の生活を叙せんに、まず午後五時(六月以後は四時半)に鐘が鳴る。それを合図に飛び起きる。蚊帳をたたむ、布団をたたむ、板の間を掃く、雑巾をかける。そうする中に看守が「礼ッ!」をかける。皆々正坐して頭を下げる。「千九百九十号」「千八百五十三号」などと番号を呼び立てる。「ハイ」と返事をしながらシャッ面を上げる。それがすむと塩で歯を磨いて顔を洗う。塩は毎朝寝ている中に看守が各房に入れて歩く。水は本監ではパイプから出ることになっているが、ここでは当番の者が近所の井戸から汲んで来て配ることになっている。

しばらくすると飯になる。本監では廊下に出て、看守の突立った靴の前に坐って食うのだから、甚だ不愉快に感じたが、ここでは膳を房に入れるので、殊に房の床が廊下よりズット高くなっているので、その不愉快は少しもなかった。

食事がすむと小楊枝を使いながら正坐する。小楊枝は月に一二本ずつ渡される。正坐というのはチャンと膝をくずさず坐ることで、食後一時間は畏まっておらねばならぬ。板張りの上に莚を一枚敷いてその上に畏まるのだから、ずいぶん足が痛くなる。

食後一時間たつとみな胡坐をかく、これを安坐という。それから重禁錮の者は仕事にとりかかり、我々軽禁錮の者は本でも読む。しかし本という奴がソウソウ朝から晩まで読みづめにせられるものでもなし、退屈する、欠伸が出る。ヒソヒソ話をする、馬鹿口をたたく、悪戯をする、便所に行く、放屁をする、鼻唄を歌う、逆立ちをする、それはそれは様々なことで日を暮す。もちろん看守の目を忍んでやるので、時々は見つけられて叱られる。もっとも、これは我々軽禁錮および換刑の者のことで、役に就いている者はかえって日が暮しやすい。そこで軽禁錮の者でも、自ら願うて役に就くのが少なくない。永島永洲君からの見舞の端書に、「永き日を結跏の人の坐し足らず」という句があったが、我々凡夫、なかなかそんなわけに行かぬ。そこでいろいろな妄想空想で、僅に、自ら慰めることになる。

「チョイト、チョイト、旦那おあがんなさい。」「品川さん大森さん、川崎さん、おあがんなさいよ。」（これは自分達が赤い着物を着て格子の前に坐っているところから、自分達を女郎に見立ててのざれ言）

「ヘイ今日はよろし、魚源でござい、お肴は鯛に鰈に鮪の切身。」「ああそれじゃあ鯛を貰いましょう。片身おろしてお刺身にして下さい。しかし新しいかね、肴屋さん。」（これは後の障子と流し元の工合が、サモ台所口に似ているからの洒落）

「ああいい天気だな、今日はどこぞ遊びに行こうか。」「そうさなァ、上野から浅草にでも出かけようか。」「だが遠方に行くのは大儀だな。それよりかやっぱりあの桐の木の下でも散歩しようか。」「そうさ、それもいいな。じゃマア今日は出かけるのはよそう。」（これは午後の運動の事をいったので、後にわかる）

「あなた今夜のお菜は何にしましょう。」「なんぞサッパリしたものがいいなァ。」「じゃァやっぱりいつもの沢庵と胡麻塩にしておきましょうね。」

「ああ天ぷらが食いたい。」「おれはタッタ一つでいいから餅菓子が食いたい。」「何も贅沢はいわないが、湯豆腐か何かで二三杯やりたい。」

「これで碁盤の一つもあれば別に退屈はしないがなァ。」「そしてチョイとビールの一本も出て来るとなァ。」「そして林檎かビスケットでもあるとなァ。」「そしてお一つ召し

あがれなとか何とかいって美しいのが一人も現われて来りゃ申し分なしだろう。」「ハハハハハ、どこまで贅沢をいうか知れたものじゃない。」

こんな馬鹿なことをいっているうちに昼飯になる。昼の菜の当てっこをしたり、昼の菜の一覧表をつくったり、そんなことも消閑の一策になっている。昼飯は十一時で、天気がよければ十一時半から十二時まで運動がある。これは定役のない者、および監房にて役を執る者に限るので、工場に出て役を執る者には許されぬ。

運動は監の周囲にある桐の木の下だの、小松原の芝の上だのを歩くので、やっぱり厳重なる監督の下に、一列になってグルグルまわるのだが、それでも話のできぬことはなし、おりおりは立止って蟻の戦争など見物することもある。何にせよ運動は一日中の一大愉快で、雨の三日もつづいた揚句は殊にそうだ。

運動後はまた、馬鹿話やらいねむりやらで夕方になる。「もう何時だろう」「今の看守の交代が四時半だろう」「じゃあモウ三十分で飯だ」などという問答は、たいがい毎日同じように繰返される。それから「僕はあとがタッタ百三日だ。わけはない」「乃公は今日がちょうど絶頂だ、明日から下り坂だ。タワイない」「君はモウ一週間で出るのだな」などと、たいがい毎日刑期の勘定がある。

夕飯後にまた点検があって、安坐鈴が鳴る。薄暗い電灯がとぼる。それから二時間ばかりまた退屈すると、八時になって就寝鈴が鳴る。そら来た！と大騒ぎで柏餅がゴロゴロと並ぶことになる。これがまあザット一日の生活だ。ある夜、夜中に目がさめて左のごとき寝言ができた。

隣室の鼾に和して蛙鳴く
紫の桐花の下や朱衣の人
桐の花四人看守曽て見ず
行く春を牢の窓より惜しみけり
永き日を「御看守様」の立尽す
正坐しても安坐しても日の長き哉
永き日をコソコソ話安坐する
夕ざれば監房ごとの放屁かな
正坐して自慢の放屁連発す
寂しさに看守からかう奴もあり
看守殿退屈まぎれに叱る也
「本職」は昨日拝命したばかり
「本職」という時髯をひねる也
看守部長とかく岩永になりたがり
是はまた重忠張りの看守長
教誨師地獄で仏の格で行き
教誨師袈裟高帽のおん姿
教誨師お前さんはと仰せらる
其方はなどと看守の常陸弁
永き日を千九百九十の坐睡す

九　入浴、散髪、面会、手紙・

入浴はまた獄中生活の愉快の一つで、およそ一週間に一度、或は四五日ぶりに一度ずつ許される。

今日は入浴だというと、みな嬉しがってソワソワしている。時刻が来ると、いずれも手拭を帯にさげて、庭下駄をはいて監の前に出て、五人ずつ並んでシャがむ。「立て！進め！」で浴場に向って進む。浴場まではザット二町ばかりある。「列を乱してはイカン」「キョロキョロとよそ見をするでナイ」「話をしてはイカン」「手を振ってはイカン」などと絶えず叱られながら、とにかく浴場の前に着く。また並んでシャがむ。それから一列になって、二十人ばかりずつ二組になって浴場に入る。浴場は煉瓦作り、浴槽はタタキでかなりに大きい。湯は蒸気で湧かすことになって、寒暖計まで備えつけてある。我々はイツも一番にはいらせられるので、清潔な点においては申し分なかった。「脱衣！」「入浴！」などの不思議な号令の下に、五六人ずつ列をつくって一番、二番、三番、四番と、二十人あまり一しょにはいる。それから今度は、一方の壁にズット並んでとりつけてあるパイプの下に行って、銘々に頭と顔とを洗う。しかしその水は甚だ払底で、儀式ばかりのようなものではあるが、何にせよ、我輩らの住んでいる角筈あたりの湯に比べると結構なものだ。

散髪もまたチョットよい気ばらしになる。これは、たいがい二週間に一度ぐらいのようだ。床屋さんももとより囚人である。湯屋の三助も、医者の助手（看護夫）も、みなやはり囚人だからおかしい。

床屋がまわって来て廊下に陣をとると、一房から十房まで順々に出かけて刈ってもらう。バリカンでただグルグルとやるのだから雑作はない。もちろん顔も剃ってくれる。特に髭を蓄えることを願う者には許しておく。フケトリと鋏も、そこにおいてある。それで爪でも摘みながら見張の看守と話でもしているときには、獄中生活も存外趣味のあるものだ。

面会は囚人にとって非常に愉快のことであるが、あまり再々人が来ると一々には許されぬ。手紙は大概のものは見せられる。百穂君の絵葉書だけは一枚きりしか見せられなんだ。それから中村弥二郎君が予の無聊を慰めんとて、昔話を書いた葉書を寄こされたが、それは「不得要領につき不許」という附箋がついて、出獄のときに渡された。獄中ではただ無事（或は単調）に苦しむのであるから、手紙、面会、入浴、散髪、運動等、何でも少し変ったことがあれば非常に愉快に感ずる。

一〇　食事当番

今一つ気ばらしになったことは、四五日ぶりに一度ずつ

食事当番がある。他の監では役夫というものがあって、それが食事の世話やら掃除やらするのであるが、我々の監には無定役囚が多いので、別に役夫はおかずに、その無定役囚の中から、代り代り食事の当番を出すことになっていた。

当番は二人あるいは三人で、まず炊所から運んで来た飯や菜を盛りわけて膳立てをする。鐘が鳴るとそれを各房に配る。食事がすむとあと片づけをする。水を汲んで来て膳碗を洗う。洗物がすむと廊下を掃く。それを一日に三度繰返すのでなかなか風流なものです。まだそれから食事の世話のほかに、流し口の掃除、裏庭の草取りなど、やらせられるときもある。存外おもしろいものです。甚だしきは、みなの者を運動に出す世話をするために、草履箱から草履を出して各房の前に並べてやり、運動が終れば、またその草履を集めて箱に入れてやることもある。これらはズンと風流なものです。

二　眼鏡、書籍

最初予の一番困ったのは眼鏡をとられたことである。もっとも眼鏡がなくてはなんにも見えぬというほどでもないが、十一度ばかりの近眼で、十余年来寝るときのほか、かってはずしたことのない最親最愛の眼鏡であるから、いま忽然とそれと別れた不愉快は非常である。すぐあとで下げ渡してやるといわれた言葉を楽しみにしていたが、二三日たってヤット眼鏡下付願という手続ができた。モウ占めたと楽しんでいると、また二三日してやっと医者の視力検査があった。モウいよいよだと思うていると、また二三日してようやくのことで下げ渡された。

親子再会とでもいうべき情合で、ただ何となく嬉しく心にぎやかで、かけて見たりはずして見たり、息を吹きかけて拭いて見たりしているうち、どうも少し右の玉のゆがんでいるのが気に食わぬ。隣の人にもそれを見せて、ここを少しコウ曲げて、などといいながら、こわごわと撓めているとき、脆や、ポキリとまんなかの金が折れた。サアしまった！　こんな弱ったことはない。「見しやそれとも分かぬ間に、雲かくれにし夜半の月」「たまたま会いは会いながら、つれない嵐に吹きわけられ」失望落胆、真にたとえるにものがなかった。茶碗の破れたのすらつぎあわせて見るのが人情だから、いろいろとやっては見たが、金と金とのつぎ目の折れたのは、指先ばかりではどうにも仕様がない。それでも何とか法のないものかと、様々にいじっているうち、これを糸で結びつけてはという智慧が出た。それから着物の裾のシツケの糸をぬいて、それを二重によりあわせて、ともかくも結びつけた。鼻の上にかけてみると少々工合は変だけれど、物を見るに差支えはない。ああ真にこれで助かった！

眼鏡の待遠かったよりも、更に一層待遠かったのは書籍であった。初日、二日目、三日目、ようやく落つくと同時

に退屈する。欲しいほしいはただ書籍である。書籍は教誨師先生よしよしと受込んだきりで容易に運んでくれぬ。一週間あまりすぎてからヤット二冊だけ渡された。

書籍は同時に二冊以上は見せぬという定めだそうな。役のある人ならば、日曜のほかには一日に一二時間しか読書の暇はないのだから、二冊という制限もよいか知らぬが、朝から晩まで本ばかり読む人に、タッタ二冊とは情ない。しかしマア二冊にせよ本は来たし、こわれたにせよ眼鏡はある。モウ千人力だという心地がした。二冊の本は、

Hyndman: Economics of Socialism.

王陽明伝習録（第一巻）

まずハインドマン氏の「社会主義の経済学」を読みながら、飽いて来ればチョイチョイと伝習録を読んで、二日三日と愉快に暮したが四日目ぐらいにははや両方とも読んでしまう。仕方がないからまた繰返して初めから読む。そうしているうちにある日教務所長の武田教誨師というが見えて、暫く予の房に入って閑談せられた。

それで予は書籍のことを訴えたれば、丁度そのとき、予は独房におかれていたので、「独房の者には冊数の制限は入らぬ」とのことで、その翌朝早く、予の持って来た本を悉く下げ渡された。予はほとんどこおどりせんばかりに嬉しく感じた。モウ千人力どころではない、実に百万の味方を得た心地がした。予の持って来た本は前二冊のほか、左の七冊であった。

Encyclopedia of Social Reforms (Bliss).
Nuttall's English Dictionary.
Progress and Poverty (Henry George).
Truth (Zolla).
The Twenty Century New Testament.
王陽明伝習録（第二巻、第三巻）

予はまずゾラの「真理」を読んだ。これは予がさきに抄訳した「労働問題」「子孫繁昌の話」とともに、ゾラ最終の三大作をなすもので、主としてドレフュース事件を仕組み、仏国ローマ教の害毒を痛罵し、初等教育制度改善の必要を叫んだものである。このごろロイテル電報などが毎度報じて来る、仏国の宗教教育法のことなども、この書によって始めて十分の意味がわかるようになった。予はこの書に慰められて五六日をすごしたが、その間たいてい毎日一度ずつぐらいは、シミジミと泣かされた。

次に予はヘンリー・ジョージの「進歩と貧困」を読んだ。これまで拾い読みばかりしていたのを今度はじめて通読した。彼の文章の妙に至っては、ほとんど評する言葉を知らぬ。一面は文学的で、一面は科学的で、しかしてまた他の一面は宗教的である。勁抜の文、奇警の句、そのマルサス人口論を、論破するがごとき、痛快を極め鋭利を極めている。

次に予は新約の四福音書と使徒行伝の初めの方少しばかりとを読んだ。二十世紀訳は文章が今様になっているの

で我々素人には読みやすくて、まことによい。キリスト教に現われたる共産制度の面影等は殊に予の注意を惹いた。
　伝習録からはあまり得るところがあったとも思われぬ。ブリスの「社会改良百科字典」は、その題目の多きとその趣味の広きとにおいて、予の獄中生活を慰めてくれたこといくばくか知れぬ。殊に「犯罪学（クリミノロジー）」「刑罰学（ペノロジー）」などに関する多少の知識を、囚人として獄中に得たのは、深くこの書に謝せねばならぬ。
　ナッタルの字書の功労は今更いうにもおよぶまい。ある時のごときは退屈のあまり、この字書の挿画を初めから終まで一々ていねいに見てしまったことがある。

一二　役、労働時間、工賃

　予はみずから役に就かなんだので、役の実際はよくわからぬが、何にせよ、七個の工場で種々なる労働をやっている。鍛冶屋もあれば靴屋もある。寝台をこしらえているものもあれば、ズックの靴をこしらえているのもある。足袋の底を織っているのもあれば、麻縄をよっているものもある。馬鈴薯やソラ豆をつくっているのもあれば、洗濯をやっているのもある。便所掃除のごとき汚い役まわりもあれば、炊所係のごとき摘み食いのできる役廻りもある。いずれもその才能、性情等に応じて申し渡されるので、異存を申し立てることは決して相成らぬ。時間は最も長いときで十時間半、最も短かいときで八時間半であったかと記憶する。そして各囚人にはそれぞれ定まった課程があって、それだけの仕事は是非させられることになっている。就役中は話もできず、休むこともできず、便所に行きたい時には手を挙げて許可を請うのだそうな、それから役には工賃が定まっていて、その十分の二三ぐらいは本人の所得となる。それで長期の囚人は百円も二百円も持って出るのがあるとのこと。

一三　賞　罰

　囚人が反則をすればすぐに懲罰に附せられる。懲罰の第一は減食である。減食といえば食物の量を三分の一ぐらいに減じられて、数日の間、チャント正坐させられる。それがつらさに首を縊る者が折々ある。平気な奴でも体量の一貫目くらい忽ち減る。
　それから減食でもこたえぬ奴は暗室に入れる。重罪囚で手に合わぬ奴には鈦（だい）というものを施す。鈦とはすなわち足枷である。それでもまだこたえぬ奴には、一二貫目もある鉄丸を背負わせるとのこと。
　賞としては一週間に一度か二度か食事に別菜がつく。そのほかには、湯に先に入れる、着物の新しいのを貸す、月一度と極った手紙を二度出させるなどの時待があるばかり。

一四 理想郷

さて、かく獄中生活の荒ましを語った上で、予をして更に少しく監獄なるものの全体を観察せしめよ。

監獄はまずその建築が堅牢である。宏壮である。清潔である。棟割長室に住むものより見れば、実に大厦高楼の住居といわねばならぬ。衣服夜具のごときも、ほぼ整頓している。冬期においてはもちろん非常の寒さにも苦しむには相違ないが、さりとて常に襤褸をまとい、或はそれすらもまとい得ざるものより見れば、実にありがたき避寒所といわねばならぬ。食物も悪いには相違ないが、塵だめをあさる人間あることを思えば、必ずしも不平はいわれぬ。何にせよ、監獄は衣食住の平等と安全とにおいて、遥か社会より優っている。

監獄の住民はこの平等にして安全なる衣食住の間に、電灯鉄道蒸汽等種々なる文明の利器を利用して、各その才能性情に応ずる分業をなし、ほぼ共同自治の生活をなしている。況んや心身の疾病のためには、病院もあれば教会もある。ほとんど何不足なき別社会といわねばならぬ。

かく見来るときには、監獄は実に一種の理想郷である。予が休養のため理想郷に入るといったのも、またけっして嘘ではなかった。しかしながらまた、この理想郷を他の一面より見るときは全く別種の観が眼前に現われて来る。

一五 看守

監獄の住民は囚人ばかりではない。ほかに看守というものがある。看守は決して囚人を戒護する官吏であるが、その境遇の気の毒さは決して囚人に劣るものではない。ある老看守はかつて予に語っていわく、「午前三時に起きて、三時半に家を出て、四時に監獄に着いて、四時半から勤務しはじめて、一時間半ごとに三十分ずつ休憩して、午後六時半の閉監まで勤務して、それからあと仕舞をして家に帰ると七時半ぐらいになる。靴も脱がずに縁側に腰かけていると、ホンの暫くの間だけわが家の庭の景色を薄光に見ることができる。湯などにはめったにゆく暇がない、二週間に一度の休みはたいがい寝て暮します」と。しかして彼らの俸給は僅々十二円か十五円かにすぎぬのである。

看守と囚人とを別々に見れば、共に気の毒なる境遇の人々であるが、さてこの二人種の関係を考えて見れば、滑稽といおうか、馬鹿馬鹿しいといおうか、更にこれを悲惨といおうか、予はこれを評するに言葉を知らぬ。

一六 出獄前の一日

出獄の前日には満期房というのに移される。ここには明日自由の身となるべき窃盗氏、詐欺氏、カッパライ氏、恐

喝氏、持逃げ氏などが集まって来る。いよいよ今日きりの一昼一夜を暮しかね明しかねて、様々の妄想を逞うしながら馬鹿話に耽っている。

まず一人ずつ呼出されて教誨師の説諭をうける。教誨師も一向気の乗らぬ調子で役目柄だけのお茶をにごす。囚人はただハイハイとお辞儀をして、房に帰って舌を出す。そして何を話すかと聞いていれば、食いたい、飲みたい、遊びに行きたい、たいがいはまずそれである。最も良心の鋭敏な奴が「モウとても真人間にはなられない」と嘆息する。「これがドウしても止められないとは何たる因果な男だろう」とひとりで笑っているのもある。最も思慮分別ありげな奴の言葉を聞けば、「いっそヤルなら大きなことをやるか、それでなくちゃスッパリ止めるのだ。」多くの奴はテンデ止めるの止めないという問題は起しておらぬ。

予が最も趣味多く感じた一話がある。あるカッパライの大将いわく、「小僧の二人も内にかくまっておけば、その日その日に不自由をすることはないぜ、鰹節がなくなれば鰹節をさらって来るし、炭がなくなれば、炭をさらって来るし、ホントに便利なもんだ。それに彼奴ら義理が堅くてとッつかまってもめったにボロを出しゃしないや。いつやら兄さんも一しょに来い来いというからついて行って見ると、ある宮の境内にきて、兄さんはお酒が好きだから今にもって来てやる、ここに待っていろという。暫くするとビールを二本さげて来た。コップがないというと、またはしりだして今度はガラス屋からコップを一つさらって来た。ホントにおかしいように便利なもんだぜ。」

一七　獄中の音楽

囚人半月天を見ず。
四人半月地を踏まず。
されど自然の音楽は、
自由にここに入り来る。」
朝は朝日に雀鳴く。
わが妻来れ、チウチウチウ。
子らはいずこぞ、チュンチュンチュン。
ここに餌あり、チュクチュクチュク。」
夕は夕日に牛の鳴く。
永き日暮れぬ、モオオオオ。
務め終りぬ、モオモオモオ
いざや休まん、モオモオモオ。」
夜は夜もすがら蛙鳴く。
人は眠れり、ロクロクロク。
世はわが世なり、レキレキレキ。
歌えや歌え、カラコロコロ。」
晴には空に鳶の声、
笛吹くかとぞ思わるる。
羽衣の袖ふりはえて、

舞うや虚空の三千里。
舞いすまし、吹きすます。
ピーヒョロリ、ピーヒョロリ。」
雨には軒の玉水の、
鼓打つかと思わるる。
緒を引きしめて気を籠めて、
打つや手練の乱拍子。
打ちはやし、打ちはやす、
トウトウタラリ、ポポンポン。」
ああ面白ろの自然かな。
ああ面白ろの天地かな。」

一八 出獄雑記

六月二十日午前五時、秋水のいわゆる「鬼が島の城門のような」巣鴨監獄の大鉄門は、儼然として、その鉄扉を開き、身長わずかに五尺一寸の予を物々しげにこの社会に吐き出だした。

久しぶりの洋服の着ごころ甚だ変にて、左の手に重たき本包みをさげ、からだを右にかたむけながらキョロキョロとして立ちたる予は、この早朝の涼気のなかに、浮びて動かんとするがごとき満目の緑に対して、まず無限の愉快を感じた。

ようやく二三歩を運ぶとき、友人川村氏のひとり彼方より来るに遭うた。相見て一笑し、氏に導かれて茶店に入った。ああ、これで久しぶり天下晴れて話ができる。

間もなく杉村縦横君が自転車を走らせて来てくれた。つづいては筒袖の木下君、大光頭の斎藤君などを初めとして、平民社の諸君、社会主義協会の諸君などが二十人あまり押寄せた。最後に予の女児真柄が、一年五個月の覚束なき足取にて、隣家のおばさんなる福田英子氏と、親戚のおじさんなる小林助市氏とに、両手を引かれながらやって来た。予は初めて彼が地上を歩むを見た。そして彼はすでに全く予を見忘れていた。

かく親しき顔がそろうて見れば、その中に秋水の一人を欠くことが、予にとっては非常の心さびしさであった。彼はその病床より人に托して、一書を予に寄せた。「早く帰って僕のいくじなさを笑ってくれ」とある。笑うべき乎、泣くべき乎。一人は閉殺せられ、一人は忙殺せられ、而して二個月後の結果がすなわちこれであるのだ。

予はそれより諸友人に擁せられて野と畑との緑を分け、朝風に吹かれながら池袋の停車場に来た。プラットフォームに立ちて監獄を顧み、指点して諸友人と語るとき、何とはなしに深き勝利の感の胸中に湧くを覚えた。

新宿の停車場に降りれば、幸徳夫人が走り寄って予を迎えてくれた。停車場より予の家まで僅かに四五丁であるが、その道が妙に珍しく感じられる。加藤眠柳君から獄中に寄せられた俳句「君知るや既に若葉が青葉した」とあっ

たのがすなわちそれだ。わが家へ入ればまたわが家が妙に珍しく感じられる。門より庭に入りて立てば、木々の緑が滴るばかりに濃く見えるのだもの。
予の病妻は予の好める豆飯を炊いて待っていた。予は彼の如何に痩せたるかを見たる後、靴を脱せずして直ちに秋水を訪うた。秋水は、病床に半ば身を起して予の手を握った。彼は予の妻とともに甚だしく痩せていた。
歌のようなものが一首できていた。
いつしかに桐の花咲き花散りて葉かげ涼しくわれ獄を出ず
監獄の中で風情のある木は桐ばかりであったから。

一九　出獄当座の日記

六月二十日　出獄。終日家居、客とともに語りかつ食う。
二十一日　出社。社中諸君が多忙を極めている間に、予一人ただ茫然として少しも仕事が手につかず。
二十二日　同上。
二十三日　編輯終る。予は少々腹工合を悪くした。
二十四日　腹工合甚だ変也
二十五日　とうとう下痢をやりだした、よほど注意はしていたのだが。午後下剤を飲み、夜に入りて十数回の下痢があった。
二十六日　せっかくの出獄歓迎園遊会に出席はしたが、何分疲労が、甚だしいので、写真を取ったあとですぐに帰宅した。
二十七日　秋水の家に風がよく通すので、午後半日をそこで暮した。二個の病客が床を敷き並べて相顧みて憮然たるところ百穂君か芋銭君かに写してもらいたいような心地がした。
二十八日　ようやく下痢がとまった。粥を食い、刺身を食い、湯に入る、甚だ愉快。

（附）園遊会の記

六月二十六日午前九時より堺生の出獄歓迎を兼ねて園遊会が開かれた。……場所は、角筈十二社の池畔桜林亭である。……幸いに曇天で、……来会者は男女合せて百五十余名の多きに達した。……安部磯雄氏発起人総代として開会の趣旨を述べ、その中に「本日の会合はもとより堺氏出獄の歓迎を兼ねてでありますが、実をいえば、牢にはいるということは社会主義者にとりては普通のことでありますから、もしわが党の士のなかに出獄者あるごとに歓迎会を開くこととすれば、今後何百回ここで歓迎会を開かなければならぬかも知れぬ。で、私は今日の会も堺氏の出獄を期して、われら同志友人がここに一日の園遊会を開いたという風に思い」たいと語った。……
（発起人の一人）

（安部氏のこの意見は、当時としては、誠によく見透しのついた、適切な警告であつた。――堺生）

（一九一一年三月「楽天囚人」より）

廃兵救慰会

荒川義英

今度、陸軍予備歩兵中佐勝田勇三氏の郊外の新宅落成と同時に、その門に「廃兵救慰会本部」と云う大きな札が掛かった。

中佐は無口な方で、一文字に結んだ口と、黒白のくっきり交った髯とは、正しく彼が好勇将であった事を語るに足る。けれ共、勇将も奸臣のために退けられたのか、少佐を一期として名誉昇進の中佐として、予備役編入の命を蒙った。当時彼はあまり家中の者とも語り合わなかったが、次第にそれも改まって、元に似たような元気な顔に立ちかえった。

彼自身以外にも、彼の予備役編入を帝国陸軍のために憤ったものがあると云う。けれ共、それは自から語るが故に、彼の子供や妻が信じた事実であった。

それから二三年過ぎた頃、彼は旧友某のすすめによっ

て、恩給を担保として若干の金を調達して私かに期米に手を出してみた。所が最初よかった結果は忽ち破れて、彼は泣くにも泣けない姿で、書斎に閉じこもる事になった。(泣けない理由は彼は百卒の将として、千軍万馬の間を駈け廻った程の勇将であったからである。当時の戦時画報には、彼の抜刀敵に迫った勇姿が、画伯の筆で写真に代えられていた。)

けれ共、中佐はそんな事で勇気の挫けるような薄志な人ではなかった。彼はその後よく妻と子を携えて奮闘した。

十年は夢のように過ぎた。果して「闘う者を自然は見すてない」とか云う彼の常の信条に叛かず彼に運は向いて来た。

「是だからそう人を見くびるものではない、現役でいる奴等の妻はお前より何れだけ好いものを着ている？　え？　オイ」斯う云った。中佐の顔は円満であった。勿論細君はなお円満であった。然かも今度の彼の成功は、世のそれのごとく、浮薄な濡れ手で粟の掴み取り的なものではなかった。中佐のは堂々去る友人の財産を、世の需用者の希望に任せて貸し与える仲介という、全く正しい方策の結果であった。東西へと日々夜々奔走した努力の結晶であった。

すると、中佐はもう日々の余暇を些しでも徒費するのを惜んで、丁度好い時機として積年の理想が漸やく実現の歩に就く事になった。「武士は物の哀れを知」っていた。書斎に掛っている「仁者有勇勇者必不仁」と大書した六朝風の書額は、実に彼の人格の表現に外ならなかった。

で、彼はいよいよ積年の希望、幼なき頃より抱負たる廃兵救済の大義に赴いたのである。

「衣食足って礼節を知ると申しますな、いや私共も衣食が足りませんで、一向どうも不愉快な事を敢て――まあ敢てでありますな――して過して来たのです、まあ今日じゃ何うかこうか、ハハハハハハハ、それで私等が此の挙に出でたのは、別に賞すべき事では全然御座いません、まあ当然の事と思うてやるつもりであります。」

いよいよ「廃兵救慰会」の創立会のとき、食卓をとりまく四五の同志の前で、中佐は斯う云った。

いろいろな風采の人々が、本部の門をくぐった。片腕ないもの、片足ない者、唇に銃丸をうけて、一寸見ると口が耳まで裂けたようになった者、何れも皆、昔年の忠臣であり勇卒であった。そう云う人々が、次第に世の人々から忘れられるのは、中佐の云う通り全く憂うべき現象であった。自から進んで国民の犠牲となった人々の、此の哀れな状態を知らず顔の衆愚と比して、何処に中佐の先見を否定する者があろう。実に中佐自ら先見と云うに対して、嘲笑う者などはある筈がないのである。

玄関の横が立派な応接間だ。近在からわざわざ出て来た廃兵等は、皆その立派な邸宅と、その西洋間の飾りつけとに猜歎する。然かも中佐親しく其処に現れて、其処で応対した。「貴郎は何方から？」

中佐殿が一兵卒に向って、貴郎と云われるのである。その男は忽ち椅子をはなれて片足と腋杖とで直立した。

「はあッ。」

「足がお悪いようじゃな、いや立たんでも好い、立たんでも好い、もう此処は軍隊ではないからな。」

中佐は大きく笑った。

「手前は埼玉でございます、――得利寺の戦いに、へえ。」

「ははあ得利寺、大隊長は誰方じゃったな?」

「突貫少佐殿でありました。」

「突貫君なら士官学校での同期じゃ、戦争には無暗に強い男でな、ハハハハハハ。」

「左様でございます。」

斯うして中佐は、二十分近くも必ず対談される。そうしてその男が此の門を再び出たときは、白い看護服に、大黒帽に赤の十字の附いたのを冠り、大きな鞄を肩にしていた。そうして始めは、軽く両腋杖でスッスッと風を切って、両脚の満足な人よりも早く歩いた。中佐に命ぜられた通り、一軒の家へ入る。胸がおどる。

「御免下さいまし。」

中々人が出て来ない。

「御免下さいまし。」

「はい」と若い細君が現われた。

「何うも御たたせ致しまして失礼でございますが、私は日露役の時、得利寺に於きまして、足をとられました者でございます。御買い置きはございましょうが、何うぞ一つ何なりとお救い下さるおつもりで、お求め下さいまし。へい。薬種と化粧品でございます。」

細君は苦い顔して、云い終るのを待っていたが、

「ああ貴郎、そう出して並べて下さいますな、何方によらず、そう云うお方はお断わり申せと、宅が申して出ますのでございますから。」

廃兵は此処だと思って、

「其処はどうぞ一つ、貴女様のおぼしめしで、何なりと一つ。」

「失礼ですがお断わりします。」

出した薬をバッバッわるくしまって外へ出た。顔に火がつくようにほてる。「ああ、また此の次も、ああだったら何うしよう。」けれ共、若し中佐の言の如く行くなら、一年にして相当な貯金もできるわけだ。と、再び勇を鼓して歩き出した。

夕暮近く、男は中佐邸へ入った。足が棒のようになった。両腋が一足、一足、歩くたびに、皮がむけているかと思う程ピリピリする。売上高一円八十五銭。うち仁丹が四十銭。御園化粧品が八十銭、その他、割の好い無名の売薬は殆んど売れなかった。中佐自製にかかる軍国丸、救国散、富国歯みがきなどいうものは、一つとして売れていない。

「よう御苦労御苦労、時にどうじゃったな、ははあ一円八十五銭、それに御園や仁丹がそう多くては……」と中佐

は云って元気に笑った。事務員がパチパチと算盤をはじく。

「二十七銭。」

その声をきいて、男は泣きたくなった。と見ると、中佐の姿が其処には見えない。

「中佐殿は？」

「中佐殿か？」事務員は一寸笑って、

「御主人は奥へ行かれた。二十七銭ありゃ優に一夜を明かせる。△○町――通りへ出て左へ十丁程行くと直きわかる。其処が好いだろう。あんた達の仲間はたくさん泊っている筈だ。」

男は外へ出て茫然とした。今朝から出たとき着ていた着物の包みをかかえて、教えられた路を行った。今朝十五円持って出たのが、十円の保証金と、汽車賃雑費をさし引いて、残りが三円四十何銭、それに二十七銭を加えて計算してみた。又涙がにじんで来た。

中佐の慈善事業は着々と成功した。救われ慰められた多くの廃兵は、わずかに得た一日の労役の賜物を、その夜濁酒に代える者が大部分であった。木賃宿の薄暗いランプの下に赤い酔顔は力なく笑った。その笑いは、中佐に対する感謝と満足とであった。

「廃兵救慰会本部」の門は、なお毎日二三人ずつの旧勇士を呑んだ。けれ共中佐は云った。

「統計上、まだまだ廃兵は此の近在にいる筈だ、是では計画通り救えない。」そして今までよりは些し大きい広告を新聞に出した。

（一九一四年七月「近代思想」）

夏

荒畑寒村

……どなたです、……あなたはどなたでございます……
……。

夢とも無く、現つとも無く、そういう声が微かに耳に入って来た。高岡は誰か自分を呼んでるのかナ、と思って、眠りから醒めようとは朧ろに思ったが、脳の中には熱い灰が一ぱい詰って居るようで、どうしてもその努力を許さなかった。それに眼瞼の底に、もう一重うすい膜が張られでもしたように、眼は開いたつもりなのだが、世界はやはり何だか薄白い、濁った靄の層みたいであった。昨夜は仕事を終って寝たのが十二時過ぎ、彼是れ一時近かった。それからついトロトロとしただけだったが、一体もう遅いのか、それともまだ早いのかしら。アア眠い、心が深い地の底へでもメリ込んで往くようだ——高岡はボンヤリそう思いながら、ドタリと懶そうに寝返りを打った。

……居りますが、あなたはどなたですと聞いてるのです
……。

おとりの声だ。誰か来たのかしら、誰か今日来る筈だったかしら。高岡はまだすっかり眠りからは醒めなかったが、ようやく意識が些しづつハッキリして来たのが解った。「あなたはどなたです」と、いまおとりの声がして居たようだったが、知らない人で今日来る筈の人があったかしら。高岡はまだボンヤリして居る頭で、一寸そう思って見たが、自分にもどっちとも解らなかった。熱い灰の詰ってるような脳の感じは、まだ彼れに何でも無い考えさえも禁じて居た。

……私しは、S——署のものでございまして、高岡さんがもし御在宅でございましたら……。

男の声でそう云うのが聞えたが、それはまるで、酷い寒さに凍えて居るか、で無ければ、非常に飢えてでも居るように、恐ろしく慄えていた。「S——署の者」と聞いて、高岡はハッと思った。そして静かに顔だけを上り口の方にふり向けて、初めて眼を大きく見開いた。裾の方の蚊帳の釣手が、両方とも外されてあるので、蚊帳の天井はうっとうしいほど、顔に近く垂れ下って居た。障子や襖を悉く開け放してあるので、狭い家の中は入口から見透しだが、襷がけの儘後向きに立って居るおとりの姿でどんな人間か、男の姿はよく見えなかった。

「へえ、何か御用ですか、主人はまだ寝んで居りますが。」

切口上に、然し丁寧では無く、おとりが問い返すと、男

はますます慄え声で、
「ハッ、実は○○の井上×××から電話でございまして、今日の午後二時までに、お出でを願いたいという事でございますが……。」
「ああ、さようですか。……あなた、あなた、S──署の人が来ましたよ。」
おとりは蚊帳の外から、高岡の枕許に膝をついて、声を低めながら云った。
「わかってる。」
彼は仰向いた儘、身動きもしないでおとりにこう云った。そして上り口の方に向っては、
「よろし、二時迄に行くと云って呉れ。」
「へッ、さようでございますか、畏まりました。……どうも失敬いたしました。」
男はやっぱり慄え声で、おとりに挨拶すると、慌てて出て行った。高岡はもうまったく醒めて居た。体を動かすと布団の裾の方が、垂れた蚊帳に触れて、その度に蚊帳にとまって居る蚊の群が、微かな唸り声を立てては舞い上るその声さえも耳にしみるように聞えた。おとりは、「マア、大変な蚊ねえ。あなた、うっとうしいでしょう。蚊帳を除りましょう、ね。」
そう云って、枕許の方から蚊帳を外しにかかった。蚊帳の裾が、心地悪しく顔の上を撫でて過ぎた。吾が家の軒先と、塀越の隣りの家根との間から、僅かに窺われる空の色は白く爛れたように輝やいて、湿布のように空間を奔下する八月初めの日光は、楓の葉にも、から松の葉にも、向日葵の花にも、庭一面の青苔の上にも、塀越しに見ゆる百日紅の花や、蒼梧の葉の上にも洪水のように漲ぎり渡って居た。高岡はやっぱり寝た儘、椽先を越して、眩しい迄にギラギラ輝やく庭をマヂマヂと眺めながら、S──署の巡査の云って往った言葉の意味を、黙って考えて居た。一たん台所に引っ込んだおとりは、再び茶の間に出て来て、長火鉢の前へ座って煙草を吸い付けた。そして高岡に対って、
「ねえ、あなた。二時迄に○○へ来て呉れなんて、一体何でしょうね、雑誌の事なら山田さんを呼びに来そうなものですしサ……ほんとに心配になっちまうネ。」
「別に何も心配するにゃ当らないよ、また呼び付けて叱言でも云おうってんだろう。」
「でもあなた、何か叱言を云われるような覚えがあって？」
「叱言なんてえものは、大抵云う方に覚えがあって、云われる方にゃ一向覚えが無いものだ。フフフフ。」
彼は自分の警句じみた返事に一寸苦笑したが、然し胸の中では、「到頭来やがったナ」と思って居た。それは此数日間、今日は来るだろうか、明日こそは来るに違いないと、毎日のように、或る不安をもって──然し恐怖という程の者を感じてではなく──待ち設けて居た処であった。それが遂に来た。当面の不安も、今後の運命も、今日の午

後二時になればはっきり定って了うのだ。「然し、何故午後二時迄と云ったのだろう。何故二時迄と云う余裕を与えたのだろう。それ迄に、若し俺が逃げて了ったら、どうする積りなのだろう。」高岡は庭の面を移る日差を眺め乍ら、汗ばんだ額を枕に深く面を埋めた儘、心の中で独りその意味を問い詰めて居た。「二時迄に」その語の意味が、彼にはどうしても解けない謎のように思われた。確かにその語の裏には、何か解かなくてはならない意味が籠って居る！「それとも？」、彼はフト思った。凝視して居た一点が、瞬間に他の点に変ったように――。「送ったのは俺だという事は解っても、あれを作ったのが誰かという事は、まだ解って居ないんだ。只だ水野の処で、――或は渡辺の処ででも――あれを悉皆押収した際、俺から送られたという事を聞いたのだろう。それで、きょう俺を呼び出して、更に作った人間を取調べようというのだろう。……然し待てよ、N――市で押収された際、恐らく奥付が付いた儘だったろう。そうすれば、俺だという事はすぐ解る。それに水野の手紙にも、「貴兄の身辺、何とも心許無く」云々とあった位だから、先ず十中八九迄は、そうと見なきゃならん。だが、そうとすれば、水野の手紙は先月の二十九日に来たのだから、それから一週間も、何の音沙汰も無かったのがおかしい。そして今日になって、やっと二時迄に来て呉れなんて云って来るというのは、どうも不思議だ。して見ると、やっぱり、単に発送者としてより外、解って居ないのかしら。」時計は七時を報じた。けれ共、彼は起きようともせず、空虚な眼を大きく見開いた儘、三岐にも四岐にも分れた迷路を、彼方に走り入っては突き当って馳せ戻り、此方に駈け込んではまた何時か旧の道へ返り、神経の痛くなる程、想像と判断をコキ使った。が到頭しまいには、やっぱり如何しても一切が知れて了って居る、そして今日迄放って置いたのは、単に一層確実な証拠を握る為めと、二時迄に来て呉れと云ったのは、成るべく事を荒立てず、愈々という場合迄は、静かに扱おうとするに外ならない。いや、現にああは云って来たものの、俺が家を一足出ると、刑事や巡査が大勢待ち構えて居て、〇〇〇へで無く、すぐS――署へ引致して了うのかも知れない、――という点が、如何しても動きのとれない処のように、思い込まれて了った。

そう思うと、高岡は急にこうしては居られない気がして、平生の床離れの悪いのには似もやらず、慌ただしい、そして胸に何か閊えてでも居るような、重苦しい感じを抱いて起き上った。そうして、急いで顔を洗うと、何時もは何を措ても新聞にとりかかるのに、すぐ飯の膳に向った。彼は冷静に自分の心を客観しても、多少の不安の念の外は、別に恐怖というような感は、抱いて居ないにも拘わらず、やはり飯がうまくなかった。軽く二杯、それも後のは茶を濺いで流し込むようにして、そこそこに済ませて了った。おとりは彼がさり気無く、ハグラかすようにして居るにも拘わらず、心配らしく眉を顰めて始終唇を痙攣的に顫

わせて居た。が然し、夫のいつが日にも甘そうに朝飯を食った事が無いのを知って居るので、今朝の少食を特に深く怪しみもしなかった。高岡は茶を飲みながら、一亘り急がしく新聞に眼を通して了うと、また昨夜の仕事の続きに取りかかった。それは彼の知って居る、ある文学者から貰った仕事で小さな叢書の中の一つであった。彼は一元論に関する、ヘッケルの極めて小さい著書を選んで、もうそれを飜訳し終った。そして今は、附録になる「ヘッケルと其著作」という短かい紹介を草して居るので、正午頃までには、是非書き上げて了おうと思った。庭を劃った高い柵と、枳殻の垣とを隔てて、広い畠があった。煮えくり返った油の玉を、一滴づつ濺ぎ落すような蝉の鳴き声が、そこの可なり大きな栗の樹から、暑苦しく聞え始めた。彼は浴衣の両肌を脱いで、机に向いながら、「暑いなア、今日もこれア九十二三度に上ってるだろう。」と思い思い、稿を続けて往った。

おとりは飯の道具を洗って居るらしく、皿小鉢の触れあう音や、水桶に干杓を落す音なぞが、台所から聞えて来る。彼はウヨルシ博士の「ヘッケル、其生涯及び著作」を参照して筆を運び乍らも、哀れな、そして無智な妻の、此の後の生活を想わずには居られなかった。彼は妻に対っては、少くとも主義の運動に関しては、何事をも明さない。だから今度の事などでも、おとりは固より毛筋ほどの疑いをも持って居ない、それが若し後で、自分が入獄したとでも聞いたら如何するだろう。此無智な、今迄に苦労という苦労を嘗め尽して来た女は、更にどんなにか苦しむだろう。昼も夜も、物も食わずに泣いてばかり居るかも知れない。それよりも、差当ってどう身の振方を付けるだろう。自分には同志もあり、友人もあり、親も兄弟もある。また彼女自身の親しい友達もある。恐らく自分の入獄中、女の一人位い生活に困る事はよもあるまい。それに愈々自分の運命が定れば、兄に頼んでも、おとりの一人位い、世話をして貰えぬものでもない。だけれ共、おとりは自分の親兄弟や、同志友人の世話になって居る女じゃ無い。然し、肉身と云っては絶無の彼女は、屹度恥と苦痛を忍んで、もと勤めて居た処へでも帰って往くだろう。そうすると、すぐまた巡査が行く、刑事が行く、雇主が警察へ呼び出される、始終警察から彼女の様子、自分との交通などを聞きに来る。何も知らぬ近処や、朋輩に迄も、わざと尋ね廻る。そうだ、過去の十年間、自分達が受けて来た皮肉な、陋劣な迫害を、彼女もまた受けねばならないのだろう。そして揚句の果は、お定まりの失業と、貧苦と心痛と、病気と、それから悲惨な最後か……。高岡はペンを抛り出して、堅く唇を噛んだ儘、ヂット頸垂れて居た。熱い大きな涙が一と滴、ポトリと膝に落ちた。

「マア、そう案じたものでもあるまい。」

他の思いが彼を慰さめて云った。よしやられた処で、そう大して永い刑期でも無かろうし、それにあれの困って

居るのを同志や友人が見過す筈が無い。また愈々俺が入獄ったと定れば、その時はそういう覚悟が出もするし、他人にも力になって貰い、それを便りにする気も出るものだ。第一俺自身が必ず入獄すると定って居る訳じゃ無い、まだ海のものとも、山のものとも解らないのだ。そう思うと、彼は幾分か心が軽くなったように感じた。そして再び筆をとり上げた。然し、此の小著の原稿料だけでは、おとりの今月の生活費にカッカッだ。それに俺が入獄すれば、差入物なぞに多少の金が要る。ちょうどZ――とS――との二雑誌社から、原稿を頼まれて居るのだけれ共、それは到底間には合わない。せめて、もう二三日間があれば、昼夜兼行ででもS――の方をやり上げれば先ず安心できるが――。今更いくら焦って考えたって、如何もならぬとは知って居ながら、切迫つまった瀬戸際に、初めて此の大事に気が付いた彼は、独り胸の中で、全身に火でもついたように焦って居た。先刻S――署の巡査が来た時、今日は少し都合が悪いから明日行くと何故さり気無く断わらなかったのだろう。せめて一日間があれば、また何とか目算が明くかも知れないのだが。けれ共、今更そんな事を云ったら、却って怪しまれて、すぐ引致されるかも知れない。彼はそう思うと、熱い血がカッと頸筋に上って、油玉のような汗が額にニジみ出すのを感じた。それに容赦無く、時計の針が進んで行くのを見せ付けられると、彼は無言の儘石のように堅くなって、もう一字もペンを進め得ない程ヂリヂリして来た。

と、山田が外出の用意をして、平常の大きなマドロスパイプを啣えながら、木戸を開けて庭伝いに入って来た。

「オイ、到頭来たようだナ。……まだ終いにならないのか、もう些しだナ。」

山田も、おとりが此の事を早く知り過ぎるのを心配して居た。どうせ分って、苦しまなくてはならない迄も、些しでも多く苦しむのは、おとりにも可哀そうであり、またそれを見る者も辛いからであった。で、茶の間の方で何かして居るおとりには、成るべく気どられないように、初めの言葉を囁やくようにして云った。そして、書き終った分の原稿をいじりなどして居た。

「ウム、今日の二時迄に来て呉れって云うんだがネ。解って居るとすると、どうも少し手温いようじゃないか。」

「まだ解ってないんじゃないか、只だ発送者が君だという事だけ、向うに挙ってるのじゃないだろうか。」

「サア、かとも思うんだがネ。然し、〇――市で大分探して居るという記事が、×××新聞に載ったのが、先月の末の事だろう。それから先達て、N――の水野から手紙が来て、その日の朝、すっかり押収されたと云ってよこした。どうして解ったのかネ　何でも東京から通知があったと云ったそうだが、平素から目指されてるから、屹と鎌を掛けられて、巧く陥ったのだろう。で、そんなだとして見ると、僕だという事は解ってなくちゃならん筈だ。少くと

も、それから四五日も経つ間は、僕だという事の証拠が挙って居るべきだ。それが、こう悠々閑々としてるから、少し面妖だと思うんだ。」

「全く、どういうつもりか、一寸解するに苦しむネ。……二時迄だって。じゃ、僕は是れから医者へ往って帰りにM——ネ、彼処で待って居よう。往く前に、一寸寄って呉れ給え。ア、それから何も用心だ、万一の時に差入れる本を書いてでも置き給え。」

山田が出て行ってから、高岡は急に思い出したように、原稿紙へ後から差入れるべき書籍の名を記し始めた。薄い紙綴の書籍なぞは、読み応えのあるように一冊に合本して貰う注意もした。「本の買える時にゃ読む暇が無く、読む暇のある時は買う金が無い。まア、金のある時に買っといて、牢へでも入った時に読むんだナ。」高岡は彼等の仲間内で、よく冗談にこう云って話し合うことや、佐野が独乙語のマルクスの本などを、ギッシリ詰めた本箱を眺めては、いつも「集めはしたが到底も読めん、また些し監獄へ往かなくちゃダメだ」と云っては笑った事なども思い出した。彼は書き付けて居る中に、それだけでは、何だか便り無く思われ出したので、今度は床の間に一杯並べてある本の中から、差し当って読みたいと思うものを選り出して、それを前の方へ一列に並べ始めた。初めは只乱雑に、片端から並べて居たが、如何しても気が落ち着かないので、更に小型の本は小型の本、大型は大型、紙表紙とクロース綴というように、ワクワクと慌だしい心もちであり乍ら、秩序よく並べ変えても見た。

井戸端へ出て浴衣なぞを洗って居たおとりが、何時の間にか茶の間に入って来て、ヂッと高岡のする事を見守って居た。が、暫らくすると、我慢しきれないように云った。

「あなた、また病気が起りましたネ。それよりも早く書いて終って、用事を済まして来てっから、ゆっくりしたらいいでしょうにな。二時迄に来て呉れって いうのでしょう。もうすぐ十一時ですよ。」

おとりはまだ心配の失せやらない顔色をして居るが、それでも夫の気紛れな、其癖恐ろしい程夢中になって居る様子に、お可笑くて堪らぬという風も見えた。然し、高岡はそう云われたので、また仕事の方が気になり始めた。そして再びペンを取り上げたが、一度散った心もちは却々集中できなかった。ドキドキ、ドキドキと、心臓の鼓動のように鳴りながら進んで往く時計の針を、ヂッと見詰めた儘、彼は何を考うるとも無く、永い間持ったペンを動かさずに、黙って居たりした。日はだんだん真上から射すようになって、庭には些しの蔭も無くなった。喧ましい蝉の声は何時しかやんで、太陽の熱波は、地上のあらゆる声を灼き殺して了った。只時々、秋を催うような虫の音が、何処からとも無く、此の天地の幽寂を縫って流れた。

昼食を済ませてから後も、高岡は筆を渋って、独りヂリ

ヂりして居た。隣の室で小布などをつゞくって居るおとり、が、時々何か云いかけても、苦い顔をして返事もしなかった。それでも、二時をすこし過ぎた頃にはようやく書き終って、筆を措くとほっと息をついた。が、固より原稿を読み返す暇も無いので彼は冷たい井戸水で体の汗を拭き終ると、着物を改めるのもソコソコに家を出た。尾行がついて来るかとも思ったが、それらしい気色は一向無かった。電車の西側の窓は、日が当るので悉く鎧戸が上げてある為めに、車内は蒸すような暑さである。彼は読みさしのハンタアが近著、「暴力と労働運動」を読み続けたが、ソシアリストたる著者の、アナアキズムに対する無理解と、アナアキストに対する偏見とは、極めて保守的なブルジョアのそれと些しも変らなかった。彼は徒らに反感と憤激とを増すのみなので、四五頁にして本を閉じて了った。そして静かに、差し迫った今日の出来事を考えて見た。彼は不思議に心がゆったりと落ち着いて、先程からのワクワクした、慌ただしい心地が、消えたように無くなったことを感じた。

――是は何時お作りでした、いついつでございます。刷ったのは何処です。何処何処です。何処へ送りました、それは云われません。では配った先は、それも云えません。何故云われぬ、何故でも。――そういう問答がくり返されるだろう、すると、屹と火のように怒って、茲を何処と心得る、云わんと其方の利益にならんゾ、とか何とか、凄文句で脅し付けるだろう。そうしたら、こっちもガラリ態度を変えて、そんなに脅したってダメだよ、云いたくないから云わないだけサ、僕一個は如何にでもするがいい、他の事は一切云わぬ。――そう云い切ったら、如何するだろう。予審ででも公判ででもそう強情を張り通したらどうだろう。永く安逸に馴れた今の身には、二年三年の自由無き監獄生活は、やはり初めてと同じ新らしい苦しさを覚えさすに違い無い。けれ共、自分のやった事なり、入獄なりが、全然徒らに終ると思われない。彼の大事件以来、沈頽しきった運動にも、永い苦しい悪戦に対する苛虐な迫害の結果、全く反動の潮流に掃われて了った同志の間にも、多少の刺戟は与え得ると信ずる。否、此の事そのものが、既に此の反動の潮流から脱れ出でんとする、自分自身の努力なのだ。山田と一緒に、此の秋から創めようとして居る、新らしい労働雑誌を思うと、たとえ二三年にもせよ、自由を束縛されるのは厭だが、然しその為めに新らしい運動が、却っていい結果を見ないとも限らない。それに自分は或は山田無しに運動は出来ぬかも知れぬが、山田は自分なんか居なくても、独りででも立派にやって往く男だ。自分は自分の運命を甘受して、それが自分達の理想目的に、間接にもせよ、多少の貢献をなすのを以て満足しなければならぬ。――彼は独りで問いもし、答えもした。為すべき事を為して、脱れる事の出来ない運命を、甘んじて受けようとする満足な感じ――それは全然運命に屈服して了うのでは無く、誇らかに手を伸して運命を取る満足さが、心に充ち渡るのを覚え

た。
高岡がH――公園で電車を降りた時は、電柱の時計はもう三時に間が無かった。彼は約束した時間よりも、約一時間も遅れた事に就て、微かな不安の念を懐きながらも、すぐ〇〇へは往かないで、M――というカフエの二階へ上った。山田は其処の、窓から濠畔の柳の並樹を見渡す隅の卓に座って、煙草とレモン水とをチャンポンに飲んで居た。高岡は山田の傍へ腰を下すとすぐ、煽風器の正面を向いて思うさま風に吹かれた。彼はグッタリして、真実に口をきくのも厭な位い疲れて居た。で、給仕の女が来ても、只だ「僕にもあれ」と云って、顎でレモン水のコップを指したぎりだった。

「もう医者へは往って来たのか。」

「アア、もう済ませた。君の仕事はどうした、今までやって居たのか。」

「やり上げるだけは、兎に角すっかりやり上げて来た。だが、到底訂正したり、読み返したりする暇は無いから、ほんとの書きっ放しさ。後で君一と通り眼を透して呉れないかなア、随分酷い誤訳もあるだろうと思うが。」

「ウン、よし。――尾行がついて来たのか。」

「いいや、僕も尾いて来るかと思ったが、一向そういう様子も無い、どうも些し変だネ。何だか気味が悪いよ。ハ……。」

「僕が全然無関係だ、何も知らないという訳には往くまいと思うがネ……。」

「何故。だって無関係、何も知らないに違いないもの。いくら何だって、事実は奈何ともし難いじゃないか。」

「然し君、向うが些しの間でも、僕等の活動を抑えようと思えば、是れは絶好の機会だからな。それに僕の無関係という事は、向うの容易に信じない処だよ。少くとも、その事実が打ち建つ迄は、僕も入獄(はい)るものと覚悟してるよ。ハハハハ。」

高岡は思い設けなかった深淵が、急に脚下に口を開いたように感じた。自分自身の入獄は当然の事でもあり、何の障碍困難をも惹起さないが、山田の入獄は、今やって居る雑誌は勿論、新らしい雑誌の創刊に、直ちに非常な齟齬を生ずる。それはいいとしても、高岡には、山田の健康が何よりも気遣われた。山田は同志の中で、最も多く入獄した。出てまだ半歳と経たない中にまたすぐ入るというような悪戦を、山田は三四年間続けて来た。そして最後に出て来た時は、既に肺と腸とを甚く壊して居た。それを今、全く責任の無い事の為めに、仮え短かい間にしろまた獄に下すのは、彼には何よりも忍びない処だった。その結果は、彼の平生深く恐れて居る事の一つだった。然し、固よりそれを予期してやった事でも無し、また済まないと云って、謝まるべき性質のものでも無い。同志の言論文章の為めに罪を得、或は直接の責任が無くて、同志の運動の連累となって獄に下った者も多いが、それが主義に関して居る限

り、一人として苦情を云ったり、不平を唱えたりする者は無かった。彼等は皆、欣然としてその運命を享受した。何も初めにそういう契約をしたのでも無く、そういう規則が設けられてあるのでも無いのだが、「主義の為め」という語は、暗黙の間に自ら確定された、彼等の不文律であり、神聖な道徳律であったのである。

「だから、若し聞かれたら、事実ありの儘に云った方がいいと思うよ。こういうものが出来たことを、君から聞いて、初めて知ったという事実をサ。」

「そうだナ、それは聞かれたら云おう、別に差支えもないから、然し、面倒くさい事を云ったら一切返事をしないつもりだ。そうしたら如何するか、やる処までやらして見よう――何時だい、もう。三時半か、待って居るだろう、じゃ、一寸行って来る、一寸じゃ済まない事になるかも知れんがな、ハハハハハ。」

「行って来給え、僕ア兎に角、ここに待ってるからね。もし帰って来て、居なかったら、あの給仕に聞いて呉れ給え、云い残して往く。じゃ、失敬。」

広い往還は、白銀のように眩しく光り、濠畔の柳は、暑さに疲れきったように枝を垂れ、砂埃りに塗れた葉は、白ちゃけて捲き返って居た。鎧戸を揚げた電車は、苦し気に吐息する如く、車体を刻むようにして、長い線路の上を動いて往く、右側には白い巍峩とした、劇場の建物に隣って、宏荘な赤煉瓦の洋館が睨め廻すように聳えて居る。厚いガラス戸は重々しげに閉されて、高いアーチ形の入口を入ると、冷々とした空気は、厚い壁や太い柱の隅々に、うす暗く畳まれて澱んで居た。高岡は一隅の受付の処へ名刺を出して、

「井上〇〇〇に会いたいのですが。」

と云った。白い詰襟服を着た受付は、名刺を二三度ひっくり返して見て居たが、

「井上さんはもうお退けになりましたよ、二時半頃まで待ってお出ででしたがナ、お出がないので今し方お帰りになりました。官舎はつい此の裏でサ、其処をお抜けになれば、じきですよ。」

そう云って、入口の処まで出て来て、道筋を指して教えた。

高岡は一本の樹の、ヂリヂリ照りつける日光を蔽うものとても無い構内を通り抜けて、広い殺風景な裏通りに出た。表通りに向いて居る洋館が、切っ立ての背を向き合せて、その中間の四角な空地には、塵埃だの、煉瓦だのが堆たかく積んであった。撒水した跡の道は生乾きに乾いて、砂埃りの咽っぽい臭いが、大気の中に低く浮いて居る。そこは自動車の倉庫だの、幾頭かの乗馬を繋いだ厩舎だのばかり、並んで居る処だった。高い板塀の囲いの中に、官舎らしい瓦葺の新らしい家も、幾軒か建って居た。そこらを歩き廻って居ると、汗がダクダク流れて、気味悪く胸や背を伝わった。然し、いくら探してもそういう表札のかかっ

た門は無かった。高岡はまた受付の処へ戻って来て、もう一遍詳しく聞こうと思ったが、フト思い返して、明日やって来るという伝言を頼んで出た。

階段からヒョイと顔を出すと、山田は吃驚したように、
「ヤア、如何した。ばかに早いじゃないか。」
「ナーニ、往ったらもう半時間も前に帰ったって云うのサ。それから官舎を聞いて探し廻ったけれ共、却々わからんしね、それに暑くて堪らんからマア一先ず引上げた。」
「そうか、そりゃ少し変だナ、然しまた明日でも迎えに来るだろう、ハハハハ。君、何か飲むか、やらない。じゃ兎に角出よう。」

両人はカフエを出ると、公園の前から電車に乗って、赤坂の溜池に近い佐野の処へ寄った。佐野は大きな体に筒袖の浴衣を着て、椽側で団扇なぞ使って居た。軒先には風鈴が絶えず軽い音を立てて、狭い庭には、朝顔の蔓が低く這ったり、秋海棠と萼を植えた鉢や、しおらしい西洋草花の鉢なども並んで居た。三人は欧洲の戦争や、暗殺された仏蘭西の社会党首領の事なぞを話し合った。やや詳しく仏蘭西の情勢に通じて居る山田は、ジョーレスを暗殺したのは、主戦論者では無くして、寧ろ社会党の態度に慊たらぬ非戦論者ではないかという事や、エルベが復活して、再び非戦論の為に気焔を吐くだろうという事なぞを話した。
「そうだろうナ、ジョーレスの事は僕も多少疑いを挿んで居た。此の間も××新聞の記者が来て、何か知ってる事は無いかと云ったが、マア如何かよくは解らんが、そうでは無かろうかって、話していたがネ。」

佐野はそう云って、すぐまた言葉をついだ。
「一体、ジョーレスという人は、自分の意見は兎も角も、それが党の政見、多数の輿論となれば、それに服従するという風らしいナ。」「どっちにしたって、社会党の首領が反対党を怒らせて、殺されるような真似はしやしないよ。」

山田は皮肉らしくそう云って、独りで面白そうに笑って居た。

高岡は予期して居た重大な事柄が、案外何でも無かったので、何だかボンヤリした、ガッカリしたような心地になって居た。いろんな事を一時に考えたのと、烈しい暑さに照り付けられたからかとも思ったが、何しろ、やって来ればもう帰って居ないような事に、あんなに御大層な取越苦労をしたかと思うと、不愉快な後めたい感がしてならなかった。で、彼は話の中にもたいして口を出さず、疲れ切った顔をして柱に倚り掛って居た。
「どうだ、もう帰らないか。」

彼はつまらなくなったので、そう云って山田を促がした。
「ウン、帰ろう、家でも心配してるだろう、ア、君、一寸。」

山田は佐野に一寸目配せして、両人して二階へ上って往った。あとで、高岡は佐野の細君と、村井という彼等の同志の一人の噂などして居た。

「ですが、村井さんも随分色男ですわネ。何しろ若い女が二人迄も、一緒になれなけりゃ死ぬの、生きるのって騒いでるんですからねえ。あのお清なんぞねえ、村井さんとああなったと思うと、家まで恋しいって云ってね、始終前の家の近所なんぞへ往って見るんですって。ホホホホホ。」

「いや、そうしたもんですよ。」

「高岡さんなんか、随分覚えがあるんでしょう。」

「然しネ、この間も村井がつくづく云うんです、二年ばかりの間に色々な経験をしたって。だから僕も云ってやったんですよ、君は約三十年間、清教徒的な禁欲生活を送って来たのが、出獄後、此の二年間ばかりに長足の進歩をしたんだ。そして僕等が十五六からやって来た経験を、君は僅か二年間に縮験して了った。進化論に従うと、人間は生物が数十万年間に進化して来た経路を、僅か十カ月間の胎児生活で経過するそうだから、君なんざ僕等に較べると、余っ程高等な生物なんだってネ。ハハハハハ。」

「まア、高等な生物、ホホホホホ。」

そんな馬鹿話をして笑っては居るが、高岡は何処か心の隅に、ブスブス燻って居る寂しい感じをどうしても追い出して了うことが出来なかった。大きな激情の後に来る反動と暑い日中を疲れた体で駈け廻ったのとで彼は非常に憂鬱（メランコリック）になっていた。で、何の気無しに話し出した村井の事が、ひどく寂しい回想を誘ったのである。自分達はいつも村井を馬鹿にする、彼の女に対するダラシ無さと、暇と金さえあれば、銘酒屋へ往って了う彼を、賤しんだり嘲けったりする。然し、誰も彼の苦しみと悩みとに同情する者は無い。彼も曽ては勇敢に戦った一人である、その為に手傷を負うた一人である、彼は今でもやっぱり、戦おうとする熱望と、手傷を恐れない勇気とを有って居る。けれ共、戦えないのである、戦う事を許されないのである。手も足も縛せられ、口も舌も緘せられて居るのである。そして生活という責め道具で、拷問にかけられて居るのである。その上戦いの間は忘れられて居た、三十を越した男の烈しい本能の欲求と、永い間の禁欲生活に対する反動とが、無為徒爾の今となって、拒み難い力で、彼の上に押し寄せて来たのだ。感激性に富んだ彼が、しばしば同志に対って、「君、今度遊びに往ったら、僕の頭を撲ってくれ給え。」涙を流すようにして、そう云って居ながら、またすぐ出かけなければならなかった程、その衝撃は強かった。それは彼ばかりでは無い、多くの同志の上にも圧倒した。自分もまた、その反動の流れから脱れる事が出来なかった。それを羞じながら苦しみながら、悩みながら、一歩、一歩、その流れに引きづられて往った。おとり！ おとり！ 愍れな、無智な、便る者も無いおとり！ それは今、自分のまっ直な歩みの上に、大きな躓きを置いて居る。自分が一歩前に進むと二歩後へ

ひき戻す大きな力になって居る。それは、打ち克ち難い運命の、獅子が小兎を弄ぶような酷たらしさ、人間の小さな意志を推しのけて進む自然の力強さの権化である。自ら征服しようとして居る自己の性情と、自ら創り出そうとして居る境遇との、皮肉な、そして身の毛のよだつ叛逆である。それを村井は、何の顧慮するところも無く、殆んど盲目的にやって居る。彼は実に臆病である。だから見苦しいほど恐れたり、逡巡したりして、自己の行為に対する責任を避けようとする。然し一度その盲目の本能に駆られると、人の思惑や、後の難儀も顧みぬ、狂奔するような彼の姿を想うと、高岡は彼に対する日頃の不快な感は無くなって、只だ懸れにいたましかった。――然し、そう思う一方に、高岡はその臆病と卑怯とを在るが儘の事実として、是認しきる心もちにはなれなかった。彼は常に何等かの手段に依て、少くとも自分一個だけでも、此の反動の流れから上げようと思って居た。「最後まで押し詰めなければいけない、究極まで！」彼はいつも、そう心の中に叫んで居た。

高岡は終いには、殆んど何を考えて居るのかわからなくなった。疲れ切った頭の中には、雑多な、思想感想が渦を巻いて居た。両膝を立てて柱に頭を凭せて居ると、ボーッとしたようになって了って、佐野と山田とが、二階から降りて来る迄は、弄ぐって居た団扇を取り落したのすら、気がつかない位だった。

「今日の事を佐野に話したんだ。君も僕も万一やられた場合の後始末もあるからネ。佐野も、どうもそれは怪しいというんだよ。こう迄なって居て事実がまだ判って居ないという筈は無いし、判って居ながらこういう態度をとるのは、何か思惑があるに違い無いっていうんだ。つまり、是を枷にして、何か交換条件でも持ち出すんじゃ無かろうかっていうのサ、新しい雑誌を出そうなんて云ってる際だからネ。どうも両人とも入獄るというような事になっても困るし、と云って交換条件なんぞ持ち出されるのも困るって云ってたよ。」

外へ出てから山田はこう、高岡に云った。「そう、僕も或はそんな事じゃ無いかしらと想うんだが、然しまあ向うの出よう一つだ。是れを枷に交換条件なんか持ち出しゃあ、却って恥をかくばかりサ。何もこっちは、今さらビクビクすることたあないんだからなア。」

西の空はようやく紅く彩られて、高く漂よって居る処は、火焔の断片が飛んだ居るかと思われた。暗緑の色を深く湛えた杜と、曠く開けた野原との間を、郊外を通ずる電車は快く駛って往った。高岡は水のように車内に流れ込む涼しい夕風に吹かれて、やや頭の軽くなったのを覚えた。

些の感情の行き違いから、彼は久しく佐野の許を訪ずれなかった。が、今日久しぶりに会って見ると佐野はやはり親しい、なつかしい先輩であった。顧みると、初めて佐野に会ってから、もう十一二年にもなる。当時、彼はまだ十六七の少年で、故郷でソシアリストの小団体を作って、熱心

に伝道して居た頃であった。佐野の亡くなった妻君が彼の町の高台に在る病院に来て居た。彼は同志の一人と見舞なぞに往ったが、病夫人は見るに堪えない程、痛々しく瘠せ衰えて、ものを云うさえも苦しげであった。彼はまた、そこで初めて佐野に会った。その書いたものなどから、蕭洒たる男振を想像に描いて居たのが、会って見ると、肥った武骨そうな人であったのに、彼は微かな驚きと失望とを感じた。佐野は西洋の新聞に赤鉛筆で線を曳きながら、ビスケットなぞを出して、ソロソロ話をしかけた。それは初夏の日盛りだった。眼下に迫る入江は、眩めくような銀色に輝やいて、廊下に氷を砕く音なぞも聞えた。

「君は英語、で無くとも、何か外国語をやりますか。」

彼は今でも、その時佐野が強度の近眼鏡の底から、柔しい笑をたたえた眼でジッと見つめながらこう尋ねたのを記憶して居る。彼はその後、初対面の後進なぞにこう云って聞くのが、佐野の殆んど癖になって居る事を感じた。

「何でもいいが、兎に角外国語は一生懸命やらなくちゃいかんナ。」

その時、佐野はまたそうも云った。それから幾年かの後、彼が佐野の家に寄食して居た頃なぞも佐野はよく本箱から洋書を引っぱり出しては、「どの位い上達したか、一つ試験してやろう。」と云って、よく彼に訳読を附けさせたりなどした。更にその後、或る事件で佐野も高岡も一緒に入獄し、裁判が定まってC――監獄に送らるる時、佐野は汽車の中で、「君も今度獄を出たら、もう何でも読めるというようにならなけりゃいけないぜ。」と、訓すようにして彼に云った。――考えて見ると、精神的にも物質上からも、佐野には負う処が実に多い――、高岡はよくそう心で思った。それが思想の懸隔と、性情の差違とは、ともすれば高岡を佐野から離れさせた。殊に先頃、ある事で感情の行き違いを生じてからは、彼はしばらく佐野の家に出入しなかった。その癖、佐野から「僕は君と喧嘩するに忍びない、君と別れるに忍びない。……僕は君の怒りが解けるのを待つより外は無い。」と云い越された時は、どんなに堪え難い慚悔の念に責められたか知れなかった。しばらく経っと、心は解けたものの、何だか引き遅れたので、改めて出かけて往くのも気がさして出来なかった。それが、いま会って見ると、やっぱりなつかしい人である。如何に思想が異るにもせよ、如何に行く路が隔たれるにもせよ、佐野は自分が、離れる事の出来ぬ人である――、彼はしみじみそう思った。

翌朝、再びS――署の巡査は、高岡のまだ寝て居る中にやって来て、昨日と同じ旨を云い置いて往った。

朝飯をすませるとすぐ、昨日やり上げた仕事を訂正し始めた。おとりは昨日高岡が無事に帰って来たので、今日は巡査が来ても、そうたいして心配はしないようだった。そして、「あの巡査、きょうは昨日ほど慄え声じゃありませ

んでしたね」なぞと、笑ったりして居た。高岡は然し、もう昨日のように発覚とか、入獄とかいう事を心配はしなかったが、只だ佐野の云った「交換条件」が、気がかりで仕方が無かった。――妥協は固より断じて厭だ。然し、若し自分ばかりで無く、山田までも囚えられて、その為め、新らしい労働雑誌の創刊に、挫折を生じたらどうしよう。万一の時、山田にまでも累が及んで、彼の傷ついた健康と、吾々の運動の将来とに、取返しのつかぬ損害を招くことを恐れて、今度の事は山田にさえも知らせずにやって了った。それだのに、どんなに少く積って見ても、山田が此の事件の渦中に巻き込まれるということは、殆んど疑う余地が無い。そうすると自分のやった事は、結局吾々の運動に、損害を与えるに止まるのだろうか。成算も既につき、準備もほぼ整った、新らしい事業の生命を、自ら一時断つことになるのではあるまいか。反動がまた起る、迫害がまた来る、同志の間の猜忌と狐疑、この間に巧みに行われる離間中傷。凡てそういう恐ろしい敗壊力が、旋風の砂を捲くように襲って来て、運動を組成する細胞と細胞との結合力を殺して了う。――その恐ろしい結果に対する一切の責任を負うか、卑しむべき妥協の前に膝を屈するか、高岡は自身がその二つに岐れた迷路に、ピッタリ面を押し付けたような心苦しさを感じた。

一時頃には、大体の訂正を終った。で、外出の仕度をして隣りに寄って、山田に仕事の校閲を頼んだ。

「誤訳を探すのは訳は無いが、直すのは大変だなア。まあいいや、仲間内の仕事に誤訳があっちゃ他人の誤訳が指摘されないからなア。――もう、出かけるのか、待ち給え、僕も一緒に行こう。」

「御苦労さまだなア、毎日毎日。何しろこう暑くちゃ本人も大儀だが、附添人も一と通りじゃ無いネ。」

両人はこう云って、笑い、笑い、家を出て行った。H――公園の前で電車を降りて、また昨日のようにカフェーMの二階に上った。

「もう彼れ是れ二時だナ。どうだ君、もう三十分ばかりしてから往くからって、電話をかけて置かないか。それから、××館へも電話をかけて、あの印刷に就て○○からでも調べに来やしなかったか、聞いて見給えナ。もしまだ来ないと云ったら、それは君が発送した事しか、まだ解って居ないんだよ。」

「そうだなア、一つかけて見よう。」

高岡は山田に云われて、下へ電話をかけに降りて往ったが、しばらくすると、額の汗を拭き拭き戻って来た。

「ダメ、ダメ。今月に入るとすぐ、○○から来たとサ。そして是れを刷ったが、何部刷った、紙型は取ってあるかなんか聞いてったそうだ。」

「そうか、すると君、いよいよ交換条件を持ち出すな。初めは屹度、ウンと脅しつけるだろう。それから、何とか切り出すに違いないよ。」

「然し、その事が定れば却って安心だ。どうもああ宙ブラリンで居ては、うすっ気味が悪くてしようが無い。だが、こっちがその妥協に応じなければ詰りその儘ほうり込まれる事になる勘定だ。すると、ここのレモン水も今日が当分の飲み納めか。おい、レモンを呉れ。」

高岡は給仕の女を顧みて云った。また当分、貧しいそして急がしい生活に許されてあった、ホンの僅かばかりの自由と放恣とにも別れなければならぬ。そして厳重な獄則の間に、羞恥と、卑下と、屈辱と、服従との生活を送らなければならぬ。そのいたましい最後の数分を、誰も知る事無く、誰にも気付かるる事無く、只だ一人の同志と、此処にこうやって過すのである。彼は非常に寂しかった。然しまた、バカにはしゃぎたい気分でもあった。お松という眼の活々とした大きな、給仕の一人が上って来て、笑いながら卓の傍へ来た。

「昨日は、あなた、随分お急がしそうでしたわネ。日中の暑いさなかを、往ったり来たりなすって。」

「今日だってそうだよ。是れから、また飛び出すんだ。」

「何をそんなに、急がしがって居らっしゃるの。」

「此の人はネ、今まで一緒になるといって釣って置いた女がね、一緒になって呉れなきゃ死ぬって騒ぐもんだから、慌て抜いてるんだよ。」

山田が真面目な顔をして、口を出した。

「だって、一緒になるなんて云っとくからにゃ、悪かないからでしょう。なら、一緒になってあげればいいじゃありませんか。」

「処が、此の男は、家にゃ女房があるのサ。」

「まあ随分だ。男って皆なそんななんですのネ。それじゃ困ったって自業自得だわ、いい気味だわ。そうして困らなくちゃ、却々浮気が止みやしない。」

「ハハハハ、大に憤慨するネ。まだまだ、どうして、こんな苦しみ位で浮気が癒るものか、なあ。」

両人はそんな他愛も無いことを云って、互に声高く笑いなどした。女達は「随分ねえ。だけどあんなこと、屹度いい加減よ。」と云ったように、黙って眼まぜし合って笑って居た。「さあもう往こう。二三十分したら往くったら、なるべく早く来て呉れなんて云ってたから。じゃ失敬。」

「マ、往って来給え。僕は兎も角、ここに待って居て見よう。」

熱い風が、軽い砂を捲いて転ばって来る。一足外へ出ると、高岡はもう頸筋や、耳裏などが、砂でザラザラするのを感じた。足袋の紺色も、埃りでまっ白になって了い、額の汗を拭うと、うすい墨で拭ったような汗水が手巾に付いた。高岡は受付に来意を告げると、昨日の白い詰襟の服を着た男が、階段を登って三階へ導びいた。コンクリートの長い廊下を通って往くと、入口に衝立を立てた室の前を、幾度か過ぎたが、人は居ないのかと疑う程、室内の寂寞(ひっそり)して居るのを見ると、何と無く無気味な感が身に迫るようだ

った。〇〇〇室と書いた室の前へ来ると、
「ここでございます。一寸お待ち下さい。」
と云って、小使は内部へ入って往った。が、またすぐ出て来て、
「はてナ、今まで居られたのだが。」
そう呟やきながら、隣りの室に入って探しなどしたが、其処にも居る様子が無かった。
「まさか、帰ったのじゃありますまいネ。」
「ええ。またおりにゃなりませんとも。一寸ここにお待ち下さい。向うへ往って、探して参りますから。」
高岡は、小使の去った後に独り残されて、見下すような建物の側面や、遠く頭だけが見える杜の翠りを窓越しに眺めて居た。と、高い靴音が聞えて、やはり白い詰襟の服を着た、髪の毛のやや薄い男が近づいて来た。そして、ニコニコしながら、
「や、お待ち申して居りました。さ、どうかこちらへ。」
と、ズンズン先へ先へ立って室内へ入って往く。高岡は此の男も小使なんだろうと思って、その後に続くと、男は椅子を奨めながら、
「どうかお掛け下さい。私が井上でございます。」
と、云って頭を下げた。高岡は初めて、これが〇〇〇だったのに気がついた。で、一寸まご付いたが卓の前へ立って、丁寧に挨拶してから腰を降した。
室の突当りには大きな窓があって、その下には大きな四角い事務卓が据えてある。右手にはガラス戸をはめた高い書棚があった、本がギッシリ詰まって居る。見ると曾て発売禁止に遭った、主義に関する書籍などもあった。高岡は突嗟の間に、数年以前、鉱毒問題で喧ましかったＹ――村が亡ぼされて、利根の濁流を注ぐべき瀦水池となった時、年少の血気に任せた痛憤の文字を並べ、出すとすぐ発売を禁止された「Ｙ――村滅亡史」も、やはりあの書棚の中に在るのじゃ無かろうかと思った。ちょうどこの時背後に誰か入って来る足音がした。と、井上は起ち上って、
「橋本さん、〇〇〇です。」
と、高岡に紹介した。彼は起ち上って、挨拶を返しながら見ると、やはり詰襟の白服を着て、四角なうすあばたのある、元気のいい顔をして居る男で、短かく摘んだ髪は、黒い毛と云っては殆んど無かった。橋本という〇〇〇は黙って事務卓の前に座を占めると、すぐ何か無駄書を始めた。
「お急がしい処を、わざわざお呼び立てしたのは外でも無いんですが、此の頃、大分関西の方で、出版の届けをしてない××××××という小冊子が現われるんです。で、大分手を尽して探しました結果、到頭、Ｎ――市の水野君の処から、二三百部押収したような訳なんです。それで初めてあなたの名なり、印刷所なりが解ったものですから、印刷所の方も調べ、今日御足労を願ったような次第なんですがナ。」

高岡はかなり静かな心もちで、井上のこう云うのを聞いて居た。一つは井上という人間の印象なり、その態度の感じなりが大変良かったのにもよるが、今度は何と云うだろう、此の次は何を云い出すだろうという好奇心めいた感情が、少なからず彼の心の不安を穏やかにした。井上は巻煙草入から、敷島を一本とり出して火を点けた。

「ありゃア、どの位いお刷りでした。」

「ちょうど千部です。」

「で、お送りになった先は、井上君の処の外は、何処ですか。」

「外にはありません。」

「O――市へは、誰かの処へお送りになりませんか。」

「いや、送りません。」

「すると、まだ七八百ある訳ですナ。それはまだありますか。」

「あらかた配って了いました。」

「それは、主にどういう方面ですか。」

「労働者の間です、砲兵工廠だの、電車だのの。」

「処がですナ、こっちも大分そういう方面を探したのですが、一向出ないのです。然るに、O――市の方ではチョイチョイ出るのですがナ。」

「それはこっちでは、後難を恐れて出さないのでしょう。それに三百ばかりは、知れた事が解って焼いて了いましたよ。」

「然し、東京市中だけへ、五百もお配りなれば少しは出なくちゃならんと思うんですがナ。もう些とも残って居ませんか。」

「さあ、五十や六十は、まだ残って居るでしょう。他処に預けてあるのですから、詳しい事は解りません。」

「その預けてあるのは何処ですか。」

「それは申せません。が、あるだけは僕から届けましょう。」

そう云ってから、高岡はこれは譲歩の第一歩だと思った。彼れ自身にも、どうしてこんな事を云ったのか、よく解らなかった。多分、一部も残ってないと云い切るのが、余りに誠らしからぬように思われたからであろう。井上はしかし、預け先を深くは追求しなかった。

「では、是非そうして下さい。禁止されたものなのですから、それを知らずに配れば、刑罰に触れなければなりませんからナ。処で、あの小冊子ですが、無届けで出版されたのです。ですが、此の内容が、非常に兇悪だという程らんのでも無し、殊に是を公けにすれば、事件が小さいのに問題が頗る大きくなると思うのです。こういう事で自由を束縛するのは、諸君にもお気の毒であるし、またこちらも決して好む処では無いのです。で、実は今、それに就て考えて居るのですがナ。」

高岡は心の中で、いよいよ来たナ、と密かに思った。そ

して、井上が口を切って、新らしい巻煙草に、火を点けた時、急いで言葉を挿んだ。
「これが法律に触れる事もよく知って居ますし、また固より、僕は責任を避けようとも思いません。」
今まで黙然として、両人の問答に耳を傾けて居た橋本は、この時初めて口を開いた。が、先刻からやって居る徙ら書きは、やはり続けて居た。
「ねえ井上君、是れあもう、相談する余地も何も無いよ。高岡君は是が法律に触れる事も承知、その為めに刑罰を被る事も覚悟だというのだから、今更とやこう云う必要も無し、また云ったって無駄だ。」
「然し、ですナ。こういう一小事の為めに、短かくとも自由を拘束されるのは、非常な不利益だからと思うんで す。それも単に君ばかりでは無い、多数の同志にまでやはり累が及ぶのですから。こういう小問題の為めに、此の頃は別に過激な言動も見えない君等に対して、再び以前のような拘束を加えるのは、君等の方も厭でしょうし、こっちも随分大変なのです。」
「ですが、まっすぐに出る路が無いとすれば、厭でも応でも、横道へ外れるより外ありません。」
「ホウ、横道へ外れる外は無い。じゃ、君は今後も猶、こういう〇〇〇〇なぞをやるというのだネ。」
橋本が冷かすような口調で、また横合から口を出した。
高岡はもう我慢がし切れなくなった。一人が脅すと、一人が和めるというような、古いやり口を見せ付けられると、如何にも甘く見られて居るように感じて、顔の熱くなって来るのを感じた。
「それは別問題だ。僕は将来の態度を言明する義務は無い。人間、云いたい事も云えず、書きたい事も書けなければ、何処かにその思想感情の出口を見出さずには居られません。」
「然し、君等のいまやって居る雑誌は、別に禁められもせずに出て居るじゃないか。」
「それア、毒にも薬にもならないからです。けれ共、僕が〇〇〇等講演会を開こうとすれば妨害する、×××××××研究会を開けば干渉する、あんな何でも無い雑誌さえも、購読者を脅し廻ったり、本屋に買い手の名を聞かせたりするじゃありませんか。君はあの雑誌が無事に出て居るという。然し、そんな単純な事で、人の行動が律せられるものじゃ無い。永い間の迫害と圧制とが原因となって、それが或る動機に会して現われたのです。僕等は十月から新たに雑誌を出す。また定って無法な迫害が来ます。少くとも従来の経験は僕等にそう教えます。然し、無法な圧制や迫害はこういう結果を生むゾ、まっすぐな路を通らせないと、横道へ外れるゾという事を示そうと思ったのです。」
「フム、然し、それは自ら君等の言動に、一層厳重な拘束制肘を、招く所以じゃないか。」
「そうかも知れません。それと同時に、経験は僕等に、

政府が、そうだから成るべく自由を与えてやれという態度に出る事をも教えます。」

「マ、マ、兎に角ですナ。」

今まで黙って煙草を喫って居た井上が、漸く熟して来た両人の議論の間に、仲裁にでも入るように、言葉せわしく口を入れた。

「今までどういう事があったかは、吾々が局に当って居なかったので、知りませんが、私は余り干渉めいた事はしたくないのです。で、今度の事なども、済んだ事は仕方ありませんし、只だ残って居るだけを差出していただけば、マア不問に附そうかと思ってるんですがナ。然し、君等の方も法律の許す範囲内に於て、言論行動していただきたいと思うのです。で無いと、一旦こういう事があった以上、遺憾ながら、また旧のように、厳重な警戒を附さなければならないのです。」

「然し君、誤解しちゃいかんよ。是れは妥協を申し込むのでも何でも無いのだから。君等にその主義を捨てろとか何とかいうのじゃない。只だ国法の許す範囲内で、言論なり行動なりをしたら如何かというのだ。それが詰り、君等が主張を貫ぬく上に、最も安全有力な方法だと思うんだ。〇〇〇〇でも何でもやる。国法なんかは蹂躙して憚からぬという態度だと、こちらでも止むを得ん、自由を拘束せにゃならん事にもなる。」

「僕等の言論、たとえば今度出す雑誌に対して、従来のような無茶な圧迫を加えられなければ、僕だって何も好んで、法律に触れるような事はしません。」

譲歩の第二歩だ！ 高岡は再び心の中に叫んだ。然しまた全然の屈服じゃ無い、そして何よりももっと甚だしい譲歩や妥協を、交換条件として提出されなかったことを、彼は心から喜ばざるを得なかった。

「いや、どうも暑いのに、態々御足労を願って相すみません。ではどうか、残部を一つ差出して下さい。や、失敬します。」

井上は、室の入口まで高岡を送り出しながら、愛想よくこう云った。

外へ出ると、突然カッと眩しい日光が、まるで濺ぎかけるように、正面から照りつけた。高岡は、ホッと息を吐いて、眼にしみ入った汗を拭い拭い歩んだ。M――の前まで来ると、山田が二階の窓から顔を出して居た。

「大分おそいから、是れア愈々やられたかと思って一寸心配したよ。どうだったい、会見の模様は。」

「ああ暑い、おい、その煽風器をこっちへ廻して呉れ。いや、別に大した事も無くて済んだ。是れア妥協じゃ無いって、向うが却って弁解して居たよ。」

高岡はそれから、かいつまんで、会見の模様を語った。一つは内容が、そう過激なものじゃ、無いからかも知れぬが、事を荒立てて社会の注意を惹いたり、同志を刺戟した

り、しない方針らしい、ということなぞも話した。

「ハハア、賭博本能の勝利だね。どうだ、何か食わないか。然し、まあ、何にしても宜かった。そうか、じゃ出かけよう。ああ大分涼んだが、外はまだ暑いだろうナ。」

神保町で電車を降りて、山田は小川町のS——社という仏文社の本屋へ寄った。そして新着の書籍を二三册受けとって、しばらく主人と戦争で荷の来ない事や、郵便も届かないらしいという事などを話して居た。仏語の少しも解らぬ高岡には、書棚に一杯飾ってある書籍も、何の興味も惹かなかった。ただ、人のよさそうな顔をした主人が、ベルグソンの「メタフイジク」とかいう、新刊書の内容を話しなぞしたのには、少なからず驚かされた。

「あすこの主人は、却々偉いんだネ。」

「ああ、なかなかどうして。あすこは以前、カトリックの坊主が、自分達の便宜の為に開かせたのだがネ。その頃はゾラやモウパッサンのものなぞは注文しても取っちゃ呉れなかったもんだ。」

両人はそんな事を談しあいながら、ようよう日蔭の多くなった三崎町の、汚ない街をあるいて往った。そこには、古い屋敷長屋を作り直して、通り店にしたような、小さな、うす暗い家が多かった。腰かける処もないような狭い、ビシビショの土間に、縁台なぞを置いて、氷の旗を吊してある店もあった。袖の無い襦袢と白い腰巻一つの女が、往来がジャブジャブになる迄、水を撒き散して居たりした。

「然し、本屋の主人が、ベルグソンを論じたりするのは、非常に面白いじゃないか。」

高岡の胸には、いろいろの思いや感じが、織りたたむように流れた。彼は今日の出来事を考えると、不愉快な、屈辱的な感がして堪らないので、なるべくそれを避けるようにして居た。その考えが頭をもたげると、「戦いは永いのだ戦いは永いのだ」と、そういう厭な想いを鎮める咒いのように、心の中でくり返した。が、彼は自分の身と、一緒に歩いて居る山田との対照だけは、どうしても深く考えない訳には往かなかった。——山田は黙って往く。然し、確乎として進む。今の雑誌を創めたのも彼だ。更に新しい労働雑誌を作ろうとして居るのもまた実に彼である。彼はまっすぐに往く。何があっても顧慮しないで進む。他の人間が一里の路を、十歩にも二十歩にも、小刻みに歩む間に、彼は大股に一足で越えて了う。他の者が如何にも活動して居るらしく、彼が如何にも静止して居るらしく見える時、彼の一足は他人の十歩二十歩を超えて居るのだ。ツイ此頃彼に〇〇〇を奨めた、或る同志の男があった。彼は体よく断わった。「君は僕を信用して呉れないのですか。責任は僕一人が引き受けます。」男はそう云って憤慨した。けれ共、彼は「そういう事は人に相談するものじゃ無い。もしやるなら自分一人でやるがいい。」と云って、到頭応じなかった。その彼は、然も肺と腸の疾患に、始終苦しんで居る。彼は、全然責任の無い此の事の為に入獄を覚悟して、然も

一言も自分を責めなかった。――高岡はそう思うと、思わず胸が一ぱいになった。彼は堅く脣を噛んだが、熱い涙は止め度無く瞼にあふれた。

甲武線電車の水道橋停留場に上ると、低く眼下に展けて居る市街は、やっと夏の太陽の苦熱から脱れて、吹きそめた夕風に息をついているように見えた。何処からか、カナカナカナカナと、薄い金属を摺り合せるように、蜩の鳴く声が聞えて来る。まだまったく暮れ切らず、黄昏の微光のたゆとうて居る碧空には、立ちそめた秋の気が、水のようにさびしく流れて居た。

「それでも、もう朝晩は初秋だナ。」

「ああ、吹く風が冷々するからネ。……もうじきだね、二た月と間は無いネ。」

両人はそう云った。真面目な、真実の戦い！ その戦いを開く時が、犇々と身に迫るようだった。

高岡はまた、山田と彼れ自身との関係を、過去に遡って考えて見た。山田と知り合うようになってから、十年の月日は水の流れるように過ぎ去った。けれ共、両人の交情は初めから非常に親しかったとは云われない。両人は親密に交際したり、語り合ったりする機会は乏しかったばかりでなく山田が東京で活動して居る頃、彼は南海の僻陬に在って、伝道に従って居た。その両人が、初めて一緒に運動したのは、彼の大事件の先触れというべき、○○事件であった。そして、数名の同志と一緒に――監獄に入れられて居た間に高岡は真実に山田に対する熱い友情を感じた。雑役夫の囚人から密かに貰った鉛筆の心で、浅草紙へ感想を記しては、両人はよく運動や入浴の際に、それを渡したり取ったりした。獄を出てからも、両人は強いられた無為の苦痛に堪えられないで、いまの雑誌を創めた。どうせ不満足なものには決って居る、然し、そんな物でもやって居れば、一度離散した同志が、またそれを中心として、集まって来るかも知れない。――両人の初めの考えはそうであった。

それは秋の夜であった。両人はH――公園の横手を、雑誌の刊行に就ていろいろ相談しながら歩いて居た。話題はいつしか、入獄中の高岡を捨てて去った或る女の事に移った。

「君は、僕が知る前に、既にその事を聞き知って居たかい。」

「うむ、ワイフが面会に来た時の話や、手紙なぞで、あら方は察して居た。君に別れたら、困る事が出来やしないかと思って、実は多少心配して居たよ。……然し、君もあなった方が、却って幸福だったかも知れないネ。」

「そりゃそうだ。若しああならなかったら、僕は今頃はまた屹と苦しんで居るだろう。殊にああいう最後を遂げたので、僕のあの女に対する不愉快な感情も、今では殆んど無いしネ。」

「然し、僕も出て来た時は苦しんだよ、親父が死んだので、弟や妹を皆な引取らなけりゃならなくなったろう。是

じゃ当分、到底運動なんか出来ないと思ったネ。マア、それぞれ片が付いたからいいようなものの、一時は何処かへ逃げて了おうかと思った。そうすりゃまた、引取って世話する者はあるんだから。」

皆な苦しんで居る、皆な悩みがある。その苦しみや悩みを、そうやって話しあって居ると、高岡は弱い自分と、強い山田とが、一つに馳け合って了うように感じた。

（一九一四年九月「近代思想」廃刊号）

佐吉

宮地嘉六

佐吉は夕立を気遣いながらすたこら急いだ。鳥居坂下まで来た時はもう荒い大粒な雨がぽつぽつ落ち出した。彼は一気に坂を登りきったが雨はザーと地を打ちつけるほど激しく降って来た。佐吉はたまらないと思って駄々馳りに馳り出した。馳る拍子に空虚の弁当箱ががちゃがちゃ鳴った。

やっとのことで彼は或る家の冠木門の下へと駈け込んだ。此の時、佐吉と前後して赤い箱車を飛ばして馳って来たのはカーキ色服の男だった。道端に車を曳き棄てて置くなり、これも冠木門の下へ飛び込んだ。顔を涉めながら帽子を脱いで、濡れた額から頸ったまのへんをやたらに拭いまわした。帽子には廃兵院の徽章が附いていた。

しばらく経ってから、また坂下の方から、びしょ濡れになった若い書生が袴をたくし揚げて低い下駄をぴちゃぴちゃ踏み鳴らしながら登って来た。これも矢張り冠木門へ馳り込んで来た。雨はヤケに強く降りつけて来た。飛沫が容

赦なく跳ね込むようになった。三人はそれでも仕方なしに辛抱していた。すると突然後方から、
『皆さん、こちらへお入んなさいまし……』
と不意にやさしい声がした。雨の音を通してやっと聞き取れたが三人は少し面喰った気味で振り向いて門の内を覗くと、そこに白い顔が浮いていた。廃兵はお辞儀を一つした。それは恰も他の二人の分まで代表するように。
『御免蒙ります』と廃兵がまっさきに飛び込んだ。続いて佐吉も書生も入った。三人は誂えたような一方の伴待の裡に腰を掛けさせて貰ってほっとした。
『此の調子じゃ鳥渡歇みそうもないですなあ。』と廃兵は無言でいるに堪えぬと云う風で斯う云った。そして彼はポケットから朝日を取り出して先ず一本くわえた。
『どうですか、吸いませんか、お吸いなさい。』と佐吉にも書生にも薦めた。佐吉は一本貰った。
廃兵は片手でオツな手つきで燐寸を擦りつけた。それは洒落でやったのでも何でもなかった。佐吉も書生も此の時始めて此の男の左の腕がないのだと気が付いた。よく見ると其の腕は肩のへんからもげていた。そして身のない袖はだらりと力なく垂れ下って袖口だけは態裁よくポケットの裡に縫いつけていた。
三人はお互に煙草を吸い付け合った。佐吉は今更に廃兵の横顔や後頭部のひどく出っ張っている格構や、それから太い猪首のあたりを眺めて、彼の其の当時の勇敢な戦功を想像してみたりした。若し此の場合日露戦争当時のことでも訊ねようものなら、彼は喜んで、其の失われた左腕について得意な物語りをしそうでもある。佐吉はそうした此の廃兵から戦話を聞きたくも思った。
久しぶりに好きな煙草にありついた佐吉は吸口の燻るまで吸った。吸っている間に気分が斯う呆うとなって来た。なんだか眼がくらくらするような変な心持になった。彼は其ののんびりとした心持でいろんなことを思い続けた。今斯うやって雨に降り込められていると云うことは彼にはあまり不愉快ではなかった。根が仕事嫌いでじっとしていることの好きな彼は、一人よりも二人、三人ならなお好いことにして、誰とでも構わず、一緒になって無為な時を過ごしたいのである。彼は今、親類の家に厄介になっている身の上だった。そして毎日仕事口を探しまわっているのであるが、今こうした偶然な夕立雨に途中出逢ったことは、家に帰ってから、空虚な今日一日の申訳の楯ともなるのであった。早く歇めば好いと思っている書生や廃兵とはまるで違った考を持っている彼は、此の勢いで日の暮れるまで降り続けてくれればいいとさえ思った。日が暮れてもやまなんだら此所へ此のまま寝かして貰えばなお好いと考えた。そして何時しか其の気で彼の瞼はだるくなって来て、遂には眼を閉じ、涎さえたらしながら、コクリコクリとやり始めた。
軈て雷がひと鳴りして雨は歇んだ。廃兵は親切らしく佐

吉をゆすり起して置いて、坂下の方へ箱車を曳いて行ってしまった。書生は反対の方向へ行った。佐吉も気がついて少し後れながらしょうことなしに街路へ出た。夕立後の空はもとの通りに午後の太陽が照り輝いて、雨の名残をポトリポトリ落している木々の濡葉はギラギラ光って見えた。道の小砂礫は研ぎ出したように洗い出されて、蛇の目を畳んで小刻みに行く婦の柏歯の響きが清涼な雨後の坂上の空気に小気味よく冴えて聞えた。

空は明るくなったが佐吉の心は暗かった。一寸の間居眠りをした為めに眼が眩しかった。彼はぺたんこの尻切下駄を曳くようにして雨あがりの道をぶらぶら行った。

軈て或る製本屋の前に来て彼は立ち停った。クロースに金文字を焼き込むところを初めて彼は見ると云った風に珍らしそうに眺めた。自分もこれから製本屋になって見ようか知らなどと思った。

『製本一冊でいくら位かかりますか。』

『え……。それや厚さ次第でさあ』製本師は彼を見向きもしずに、ぶっきらぼうに答えた。佐吉は聊か照れ気味で二の句が継げず、ついと其所を去った。そして今度は少し先の絵はがき屋の前に来てまた立ち停った。美人の写真はがきが先ず彼の眼を惹いた。海水浴衣の姿。渚に引き揚げられた小舟のへりに肥った尻を持たせかけて、両の手を後頭部に組み挑発的な、笑顔を作っているのや、いろいろの風をした美人絵はがきを彼はしばらく眺めていた。店の小僧がそばへやって来たのできまり悪くなって、またぶらぶら歩いて行った。

『天どん△△銭、親子どん。』彼にはいつも相変らぬそんな文字が眼につき易いのだった。でパン屋の前に来て思いついたように立ち停った。木の葉形のジャム入を二つ買った。するとパン屋のかみさんは何をボケていたのか、彼がやった五銭白銅に十五銭のおつりをくれた。その上『毎度ありがとうございます。』と紋切形の礼をさえ云った。佐吉は直ぐと其の場が与えてくれた大胆によって、平気な、それは極めて自然な、自分ながら大出来と思うほどの落ちつきを見せて受取った。然しさすがに身内が少しふるえていた。後方から呼びかけられはしまいかと其の店を離れてから妙に彼は気は気でなく急いで横町へ曲った。胸がもう此の時はどきついていた。そして不安の量と同じ嬉しさが絡み合って、これまで経験したことのない愉快を覚えた。一町ばかり行ってもう大丈夫と思ってほっとした。

『ふん……。』彼は安心して嬉しそうに呟いた。

『明治二十五年……。大正五年……。明治十七年……。』彼は一個ずつ叮嚀に白銅の年号を口の中で読んだ。今日は好い日だと思った。

佐吉は其の翌日も其の翌日も家を出て行った。仕事口を捜さなければならぬのを、公園あたりふらついて、木蔭のロハ台に心地好げに昼夜の夢を貪った。其所にはテニスの

試合をやっている書生があり、金棒に飛びついて身軽を自慢の中学生の群れもあった。其の中には酒屋の御用聞きも交っていた。書生の境遇が一番佐吉には気楽そうで羨ましかった。金釦つきの詰襟のユニホームをきちんと着て何の苦労もなげに運動にうき身をやつしている書生の身の上と自分の境遇とを比べて考えた。

或る日彼は学生の真似をして試みに金棒に飛びついて見た。無論何にも出来なかった。唯袋のようにぶら下ったきりピョンピョン足を振って、飛び降りる位が関の山であった。此の時酒屋の小僧らしいのがやって来て、じき足袋のまま軽く飛びついたかと見ると、あざやかな大ぶりでもう金棒の上に上っていた。佐吉はそれにすっかり感心した。彼はもう一度飛びついて見たくもきまりが悪くて出来なかった。

然し其の後公園に行っては、あまり上手のいないような時分を見て熱心に機械体操のお稽古を彼はやっていた。ぶざまな頭体を海老のように丸めてゐの字形にやっこらさと金棒にかじり上れるようになった時はもう大分得意だった。

『おい、金棒のところで誰か呻っているじゃないか。屹度どうかしたんだぜ』テニスの連中の一人は云った。そして気になるので一人は其の方へ行った。此の時佐吉は眼を白黒させながら眉を洩めて苦しそうにうんうん呻っていた。鼻からはだらだら血が流れ出ていた。

『しっかりしないか、おいしっかりしろ。』書生はラケットを其所へ棄てて佐吉を抱き起し、血の出る鼻を摘んでやったりした。

『倒に落ちたんだな。何、たいしたことはないだろう。』他の一人もやって来て見ながら云った。

『熱心にやっていたっけが、とうとうこんなことになった。』と酒屋の小僧が云った。

一人の親切な学生は水を手拭に浸して持って来た。佐吉はやっと正気に帰った。直ぐには立ち上る力はなかったが、這うようにしてロハ台に寄って、そっと横になった。金棒にはもう例の酒屋の小僧や、書生やの巧みな定連が集って交る代る自慢の大ぶりを見せ始めた。佐吉はもうこりごりしたと云う顔でベンチに掛けて唯眺めていた。

第二部

二少女

国木田独歩

上

夏の初、月色街に満つる夜の十時ごろ、カラコロと鼻緒のゆるそうな吾妻下駄の音高く、芝琴平社の後のお濠ばたを十八ばかりの少女、赤坂の方から物案じそうに首をうなだれて来る。

薄闇い狭いぬけろじの車止の横木を俛って、彼方へ出ると、琴平社の中門の通りである。道幅二間ばかりの寂しい町で、（産婆）と書いた軒燈が二階造の家の前に点ている計りで、暗夜なら真闇黒な筋である。それも月の十日と二十日は琴平の縁日で、中門を出入する人の多少は通るが、平常、此町に用事のある者でなければ余り人の往来しない所である。

少女はぬけろじを出るや、そっと左右を見た。月は中天に懸ていて、南から北へと通った此町を隈なく照らして、森としている。人の住んで居ない町かと思われる程で、少女が（産婆）の軒燈の前まで来た時、其二階で赤児の泣声が微かにした。少女は頭を上げてちょっと見上げたが、其儘すぐ一軒置た隣家の二階に目を注いだ。

隣家の二階というのは、見た処、極く軒の低い家で、下の屋根と上の屋根との間に、一間の中窓が窮屈そうに挟まっている、其窓先に軒がさも欝陶しく垂れて、陰気な影を窓の障子に映じている。

少女は此二階家の前に来ると暫時く佇止って居たが、窓を見上げて「江藤さん」と小声で呼んだ、窓は少し開ていて、薄赤い光が煤に黄んだ障子に映じている。

「江藤さん、」と返事が無いから、少女は今一度、やはり小声で呼んだ。

障子がすっと開いたかと思うと、年若い姿が腰から上を現わして、

「誰た？」

「私。」

「オヤ、田川さん。」

「少し用事が有て来たのよ、最早お寝？」

「オヤそう、お上がんなさいよ、でも未だ十時が打たないでしょう。」

「晩く来てお気毒様ねエ」と少女は少しもじもじして居る。

二階の女の姿が消えると間もなく、下の雨戸を開ける音

がゴトゴトして、建付の曲んだ戸が漸と開いた。
「オヤ好い月だね、田川さんお上がんなさいよ」という女は今年十九、歳には少し老けて見ゆる方なるがすらりとした姿の、気高い顔つき、髪は束髪に結んで身には洗曝の浴衣を着けて居る。
「ちょっと平岡さんに頼まれて来た用があるのよ、此処でも話せますよ、もう遅いもの、上ると長座なるから。……」と今来た少女は言って、笑を含んでいる。それで相手の顔は見ないで、月を仰だ目元は其丸顔に適好しく、品の好い愛嬌のある小軀の女である。
「用というのは大概解って居ますが、色々話もあるから一寸お上んなさいよ。」
「そう、あの局の帰りに来ると宜んだけど、家に急ぐ用が有ったもんだから……」
といい乍ら二人は中に入った。
入ると直ぐ下駄直しの仕事場で、脇の方に狭い階段が付ていて、仕事場と奥とは障子で仕切てある。其障子が一枚開かっていたが薄闇くって能く内が見えない。
「遅く来って御気毒様、」と来た少女は軽く言った、奥に向て。
「どう致しまして、」と奥で嗄た声がして、続て咳嗽がして、火鉢の縁をたたく煙管の音が重く響いた。
「この乱暮さを御覧なさい、座る所もないのよ。」と主人の少女はみしみしと音のする、急な階段を先に立て陞って、

「何卒ぞ此処へでも御座わんなさいな。」
と其処らの物を片付けにかかる。
「すこし頼まれた仕事を急いでいますからね、……源ちゃん、お床を少し寄せますよ。」
「いいのよ、其様してお置きなさいよ、源ちゃん最早お寝み、」と客の少女は床なる九歳ばかりの少年を見て座わり乍ら言って、其のにこやかな顔に笑味を湛えた。
「姉さん、氷！」と少年は額を少し挙げて泣声で言った。
「お前、そう氷を食べて好いかね。二三日前から熱が出て困って居るんですよ。源ちゃんそら氷。」
主人の少女は小さな箱から氷の片を二ッ三ッ、皿に乗せて出して、少年の枕頭に置て、「もう此限ですよ、また明日買ってあげましょうねエ」
「風邪でもおひきなさったの！」と客なる少女は心配そうに言った。
「もう快々んですよ。熱いこと、少し開けましょうねエ」と主人の少女は窓の障子を一枚開け放した。今まで蒸熱かった此一室へ冷たい夜風が、音もなく吹き込むと「夜風に当ると悪いでしょうよ、私は宜いからお閉めなさいよ、」と客なる少女、少年の病気を気にする。
「何に、少しは風を通さないと善くないのよ。御用というのは欠勤届のことでしょう、」と主人の少女は額から頬へ垂れかかる髪をうるさそうに撫であげながら少し体軀を前に屈めて小声で言った。

「ハア、あの五週間の欠勤届の期限が最早きれたから何とか為さらないと善けないッて、平岡さんが、是非今日私に貴姉のことを聞いて呉れろッて……明朝は私が午前出だもんだから……」

「成程そうですねエ、真実に私は困まッちまッたねエ、五週間！　もう其様になったろうか、」と主人の少女は嘆息をして、「それで平岡さんが何とか言って？」

「イイエ別に何ともお仰らないけエど、江藤さんは最早局を止すのだろうかって。貴姉どうなさるの。」

「ソー、夫れで実は私も迷っているのよ」と主人の少女は嘆息をついた。

客の少女は密と室内を見廻した。そして何か思い当ることでも有るらしく今まで少し心配そうな顔が急に爽々して満面の笑味を隠し得なかったか、ちょッとあらたまって、

「実は少々貴姉に聞て見ることがあるのよ、」

と一段小声で言った。

「何に？」と主人の少女も笑いながら小声で言った。これも何か思い当る処あるらしく、客なる少女の顔をじっと見て、又た密と傍の寝床を見ると、少年は両腕を捲り出したまま能く眠っている、其手を静に臥被の内に入れてやった。

「怒ちゃ善けないことよ」と客の少女はきまり悪るそうに笑って言出し兼ねている。

「凡そ知ッているのよ、言て御覧なさい、怒りも何もしないから。お可笑な位よ、」と言う主人の少女の顔は羞恥そうな笑のうちにも何となく不穏のところが見透かされた。

「私の口から言い悪くいけれど……貴姉大概解かっていましょう……」

「私が妾になるとか成ったとかいう事なんでしょう。」

と言った主人の少女の声は震えて居た。

下

此二人の少女は共に東京電話交換局の交換手であって、主人の少女を江藤お秀という、客の少女は田川お富といい、交換手としては両人とも老練の方であるがお秀は局を勧めるようになった以来、未だ二年許りであるから給料は漸と十五銭であった。

お秀の父は東京府に勤めて三十五円ばかり取って居て夫婦の間にお秀を長女としてお梅源三郎の三人の児を持て、左まで不自由なく暮らしていた。夫れでお秀も高等小学校を卒えることが出来、其後は宅に居て針仕事の稽古のみに力を尽す傍、読書をも勉めていたが恰度三年前、母が病ついて三月目に亡くなって、夫れを嘆く間もなく又た父が病床に就くように成りこれも二月ばかりで母の後を逐い、三人の児は半歳のうちに両親を失って忽ち孤児となった。そうして殆ど丸裸体の様で此世に残された。

そこで一人の祖母は懇意な家で引うけることになり、お

秀は幸い交換局の交換手を募て居たから直ぐ局に勉めるようになって、妹と弟は兎も角お秀と一所に暮していた。それも多少は祖母を引うけた家から扶助でもらって僅かに糊口を立てていたので、お秀の給料と針仕事とでは三人の口はとても過活されなかった。しかしお秀の労働は決して世の常の少女の出来る業ではなかった。あちら此方と安値そうな間を借りては其処から局に通って、午前出の時は午後を針仕事に、午後出の時は午前を針仕事に、少しも安息む暇がないうちにも弟を小学校に出し妹に自分で裁縫の稽古をしてやり、夜は弟の復習も験てやらねばならず、炊事から洗濯から皆な自分一人の手でやっていた。

其うち物価は次第高くなり、お秀三人の暮は益々困難に成って来た。如何するだろうと内々局の朋輩も噂していた程であったが、お秀は顔にも出さず、何時も身の周囲小清潔として左まで見悪い衣装もせず、平気で局に通っていたから、奇怪なことのように朋輩は思って中には今の世間に能くある例を引て善くない噂を立てる連中もあった。

すると一月半ばかり前からお秀は全然局に出なくなった。初は一週間の病気届、これは正規で別に診断書が要らない、其次は診断書が付て五週間の欠勤。其内五週間も経た、お秀は出て来ないのみならず、欠勤届すら出さない。いよいよ江藤さんは妾になったという噂が誰の口からともなく起って、朋輩の者皆んな喧噪く騒ぎ立てた、遂に係の技手の耳に入った。そこで技手の平岡は田川お富に頼んで、お秀の現状を見届けた上、局を退くとも退かぬとも何とか決めて呉れろと伝言さしたのである。お富は朋輩の中でもお秀とは能く気の合て親密しい方であるからで。

しかしお秀が局を欠勤でから後も二三度会って多少事情を知って居る故、かの怪しい噂は信じなかったが、此頃になって、或という疑が起らなくもなかった。というのもお秀の祖母という人が余り心得の善い人でないことを兼ねて知っているからで。

お富はお秀の様子を一目見て、もう殆んど怪しい疑惑は晴れたが、更らに其室のうちの有様を見てすっかり解かった。

お秀の如何に困って居るかは室のうちの様子で能く解る。兼ねて此部室には戸棚というものが無いからお秀は其衣類を柳行李二個に納めて室の片隅に置ていたのが今は一個も見えない、そして身には浴衣の洗曝を着たままで、別に着更えもない様な様である。六畳の座敷の一畳は階子段に取られて居るから実は五畳敷の一室に、戸棚がない位だから、床もなければ小さな棚一つもない。

天井は低く畳は黒く、窓は西に一間の中窓がある計り東のは真実の呼吸ぬかしという丈けで、室のうち何処となく陰欝で不潔で、とても人の住むべき処でない。

簿記函と書た長方形の箱が鼠入らずの代をしている、其上に二合入の醤油徳利と石油の鑵とが置てあって、箱の前には小さな塗膳があって其上に茶椀小皿などが三ッ四ッ伏

せて有る其横に真黒に煤ぼった凉炉が有って凸凹した湯罐がかけてある。凉炉と膳との蔭に土鍋が置いて有て共に飯七が添えて有るのを見れば其処らに飯桶の見えぬのも道理である。

又た室の片隅に風呂敷包が有って其傍に源三郎の学校道具が置いてある。お秀の室の道具は実にこれ限である。これだけがお秀の財産である。其外源三郎の臥て居る布団というは見て居るのも気の毒なほどの物で、これに姉と弟とが寝るのである。この有様でもお秀は妾になったのだろうか、女の節操を売てまで金銭が欲い者が如何して如此な貧乏しい有様だろうか。

「江藤さん、私は決して其様なことは真実にしないのよ。しかし皆なが色々なことを言っていますから或と思ったの。怒っちゃ宜ないことよ、」とお富の声も震えて左も気の毒そうに言った。

「否エ、怒るどころか、貴姉宜く来て下すって真実に嬉れしう御座います、局の人が色々なことを言っているのは薄々知っていましたが、私は無理はないと思いますわ……」と、

さも悲しげにお秀は言って、ほっと嘆息を吐いた。

「何故。私は口惜いことよ、よく解りもしないことを左も見て来たように言いふらしてさ。」

「私だって口惜しいと思わないことはないけエど、あんな人達が彼是れ言うのも尤ですよ、貴姉……祖母さんね…」

とお秀は口籠った、そしてじっとお富の顔を見た目は湿んでいた。

「祖母さんが何とか言ったのでしょう……真実に貴姉はお可哀そうだよ……」とお富の眼も涙含んだ。

「祖母さんのことだから他の人には言えないけれど……そら先達貴姉の来ていらしゃった時、祖母さんがあんな妙なことを言ったでしょう。処が十日ばかり前に小石川から来て私に妾になれと言わないばかりなのよ、あのお前の思案一つでお梅や源ちゃんにも衣服が着せてやられて、甘味ものが食べさされるッて……」

「それで妾になれって？」お富は眼眶を袖で摩って丸い眼を大きくして言った。

「否エ妾になれって明白とは言わないけれど、妾々ッて世間で大変悪く言うが芸者なんかと比較ると幾何いいか知れない、一人の男を旦那にするのだからって……まあ何という言葉でしょう……私は口惜くって堪りませんでしたの。矢張身を売るのは同じことだと言いますとね、祖母さんや同胞のために身を売るのが何が悪いッて……」

「まア其様なことを！」

「実、私も困り切ているに違いないけエど、いくら零落ても妾になぞ成る気はありませんよ私には。そんな浅間しいことが何で出来ましょうか。祖母さんに、どんな事が有ッても其様な真似は私はしない、私のやれる丈けやって妹と弟の行末を見届けるから心配して下さるなと言切って其時あ

んまり口惜かったから泣きましたのよ。それからね寧のこと針仕事の方が宜いかと思って暫時局を欠勤んでやって見たのですよ。しかし此頃に成って見ると矢張仕事ばかりじゃア、有る時や無い時が有って結極が左程の事もないようだし、それに家にばかりいるとツイ妹や弟の世話が余計焼きたくなって思わず其方に時間を取られるし……ですから矢張半日ずつ、局に出ることに仕ようかとも思って居たところなんですよ。」

「そしてお梅さんはどうなすって？」とお富は不審そうに尋ねた。

「ですから今の処、とても私一人の腕で三人はやりきれない！　小石川の方へも左迄は請求れないもんですから、お梅だけは奉公に出すことにして、丁度一昨々日か先方へ行きましたの。」

「まあ何処へなの？」

「じき其処なの、日蔭町の古着屋なの。」

「おさんどんですか。」

「ハア。」

「まあ可哀そうに、やっと十五でしょう？」

「私も可哀そうでならなかったけエど、つまり私の傍に居た処が苦しいばかりだし、又た結局あの人も暫時は辛い目に遇て生育つのですから今時分から他人の間に出るのも宜かろうと思って、心を鬼にして出してやりました、辛抱が出来ればいいがと思って、……それ源ちゃんは斯様だし、今も彼の裁縫しながら色々なことを思うと悲しくなって泣きたく成て来たから、口のうちで唱歌を歌ってまぎらしたところなの。」

「そして貴姉、矢張局にお出なさいな。その方が宜いでしょうよ。それに局に出て多忙い間だけでも苦労を忘れますよ」とお富は真面目にすすめた。お秀は嘆息ついて、そして淋びしそうな笑を顔に浮かべ、

「ほんに左様ですよ、人様のお話の取次をして何番々々と言って居るうちに日が立ちますからねエ」と言って「おほほほほ」と軽く笑う。「女の仕事はどうせ其様なものですわ。」とお富も「おほほほほ」と笑った。そしてお秀は何とも云い難い、嬉しいような、哀れなような、頼もしいような心持がした。

兎も角も明後日からお秀は局に出ることに話を極めてお富に約束したものの、忽ち衣類の事に思い当って当惑した。若い女ばかり集る処だからお秀の性質でもまさかに寝衣同様の衣服は着てゆかれず、二三枚の単物は皆な質物と成っているし、これには殆んど当惑したお富は流石女同志だけ初めから気が付いていた。お秀の当惑の色を見て、

「気に障えちゃいけないことよ、あの……」

「何に、どうにか致しますよ」とお秀は少し顔を赤らめて、「おほほほほ」と笑った。

「だってお困りでしょう？　明日私が局から帰ったら母上さんと相談して……四時頃又来ましょうよ。」

「あんまりお気の毒さまで……」
お秀は眼に涙一杯含ませて首を垂れた。お富は何とも言い難い、悲しいような、懐かしいような心持がした。
　夜が大分更けたようだからお富は暇を告げて立ちかけた時、鈴虫の鳴く音が突然室のうちでした。
「オヤ鈴虫が」とお富は言って見廻わした。
「窓のところに。お梅さんが先達て琴平で買って来たのよ、奉公に出る時持てゆきたいって……。」
「まだ小供ですもの、ねえ」とお富は立て二人は暗い階段を危なそうに下り、お秀も一所に戸外へ出た。月は稍や西に傾いた。夜は森と更けて居る。
「そこまで送りましょう。」
「宜いのよ、其処へ出ると未だ人通りが沢山あるから」とお富は笑って、
「左様なら、源ちゃんお大事に、」と去きかける。
「御壕の処まで送りましょうよ、」とお秀は関わず同伴に来る。二人の少女の影は、薄暗いぬけろじの中に消えた。
　ぬけろじの中程が恰度、麺包屋の裏になっていて、今二人が通りかけると、戸が少し開て居て、内で麺包を製造っている処が能く見える。其焼たての香しい香が戸外までぷんぷんする。其焼く手際が見ていて面白いほどの上手である。二人は一寸と立て見ていた。
「お美味そうねエ」とお富は笑って言った。
「明朝のを今製造えるのでしょうねエ」とお秀も笑うて行こうとする、
「ちょっと御待ちなさいよ」とお富は止めて、戸外から、
「その麺包を少し下さいな。」
　三十計りの男と十五位な娘とが頻に焼ていたが、驚て戸外の方を向いた。
「お幾価?」
　娘は不精無精に立った。
「お気の毒さま、これ丈け下さいな、」とお富は白銅一個を娘に渡すと、娘は麺包を古新聞に包んで戸の間から出した。
「源ちゃんにあげて下さいな、今夜焼きたてが食べさせたいことねエ、そら熱いですよ。」とお秀に渡す。
「まあお気の毒さまねエ、明朝のお目覚にやりましょう。」
　二人はお壕辺の広い通りに出た。夜が更けてもまだ十二時前であるから彼方此方、人のゆききがある。月はさやかに照て、お壕の水の上は霞んでいる。
「左様なら、又た明日。お寝みなさい、源ちゃん御大事に。」お富はしとやかに辞儀して去こうとした。
「どうも色々有難う御座いました。お母上にも宜しく……それでは明日。」
　二人は分れんとして暫時、立止った。
「あア、明日お出になる時、お花を少し持て来て下さいませんか、何んでも宜いの。仏様にあげたいから」
　とお秀は云い悪くそうに言った。

「此頃は江戸菊が大変よく咲ているのよ、江戸菊を持て来ましょうねエ。」とお富は首をちょっと傾げてニコリと笑って。
「貴姉の処に鈴虫が居て？」
「否エ、どうして？」
「梅ちゃんの鈴虫が此頃大変鳴かないようになって、何だか死にそうですから、どうしたら宜いかと思って。」
「そう、胡瓜をやって？」
「ハア、それで死にそうなのよ」
と言ってる処へ、巡査が通り掛って二人の様子を怪しそうに見て去った。二人は驚いて、
「左様なら……」
「左様なら……急いでお帰んなさいよ……。」
お富はカラコロカラコロと赤阪の方へ帰ってゆく、お秀はじっと其後影を見送て立て居た。(完)

(発表年月不詳「游声」より)

昇降場

広津柳浪

上

仙台の師団に居らしった西田若子さんの御兄いさんが、今度戦地へ行らッしゃるので、新宿の停車場を御通過りなさるから、私も若子さんと御同伴に御見送に行って見ました。

寒い寒い朝、耳朶が千断れそうで、靴の裏が路上に凍着くのでした。此寒い寒い朝だのに、停車場はもう一杯の人でした。こんな多勢の人達が悉皆出征なさる方に縁故のある人、別離を惜しみに此処に集ってお居でなさるのかと思ったら、私は胸が一杯になりましたの。

『若子さん、中へは這入れそうもないことよ。』

各箇かの団体の、いろいろの彩布の大旗小旗の、それが朝風に飜って居る勇しさに、凝乎と見恍れてお居でなさった若子さんは、色の黒い眼の可怖い学生らしい方に押され

ながら、私の方を見返って、
『なに大丈夫よ。私前に行くからね、美子さん尾いてらッしゃいよ。』
『押されるわ。』
　私は若子さんの後に尾いて、停車場の内へ這入ろうとした時、其処に物思わしげな顔をしながら、きょろきょろ四辺を見廻して居た女の人を見ました。唯一目見たばかりですが、何だか可哀相で可哀相でならない気が為たのでした。
　そうねえ、年は二十二三でもありましょうか。そぼうな扮装の、髪はぼうぼうと脂気の無い、その癖、眉の美しい、悧発そうな眼付の、何処にも憎い処の無い人でした。それに生れて辛っと五月ばかしの赤子さんを、懐裏に確と抱締めて御居でなのでした。此様女の人は、多勢の中ですもの、幾人もあったでしょうが、其赤さんを懐いて御居での方が、妙に私の心を動かしたのでした。
『美子さん、早く入ッしゃいよ。あら、はぐれるわ。』
　若子さんに呼ばれて、私ははッと思って、若子さんの方へ行こうとすると、二人の間を先刻の学生に隔てられて居るのでした。
『あらッ若子さん。』
『美子さん、此処よ。』
　若子さんが白い美しい手を、私の方へお伸しでしたから、私も其手につかまって、二人一緒に抱合う様にして、辛と放れないで待合室の傍まで行ったのでした。此処も一杯で、私達は迚も這入れそうもありませんでした。
『若子さん、大層な人ですこと。貴女の御兄さんが御着きなさっても、御目に掛れるでしょうか知ら。』
『私何したッても、何様酷い目に会っても、兄さんに御目に掛ってよ。』
『私もそうよ。久振りで御目に掛るんですもの。』
『あらいやだ。』
　若子さんは頓興に大きな声で、斯うお云いでしたから、何かと思うと、また学生がつい其処に立って居るのでした。
『何だか可厭な人だわ。』
『そうねえ。』
『彼方へ行った方が可いね。』
　若子さんが人と人との間を潜る様にして、急歩いでお行でですから、私も其後に尾いて行きながら、振返って見ますと、今度は学生も尾いて来ませんでした。
『若子さん、あの学生の方は何したって云うんでしょう。』
『何だか知らないけれど、可厭な人ですねえ……あらッ、彼方を御覧なさいよ、可怖いわ。』
　若子さんが眼で教えて下さったので、其方を見ましたら、容色の美しい、花月巻に羽衣肩掛の方が可怖い眼をして何処を見るともなく睨んで居らしッたの。それは可怖い目、見る物を何でも呪って居らッしゃるんじゃないかと思

う位でした。
私も覚えず、『可怖い方だわねえ。』
若子さんは可怖い物見たさと云った様な風をなすって、口も利かないで、其方を見て居らしったのでした。
すると、其方が私達の方へ歩んで御居ででした。途端に其処に通掛った近衛の将校の方があったのです――凛々しい顔をなすった戦争に強そうな方でしたがねえ、其将校の何処が気に入らなかったのか、其可怖眼をした女の方が、下罳む様な笑みを浮べて、屹度お見でしたの。
『彼人達は死ぬのが可いのよ。死ぬのが商売の軍人さんじゃないか。何も人の子まで連れてって、無理に殺さないだって可いわ。何の為か知らないけれども、能くマア殺しに行くわねえ。』と、頻には冷かな笑みがまた見えるのでした。
無論大きな声ではなかったが、私達には能く聞えたから、覚えず若子さんと顔を見合せて居ました。
『……名誉も義務も軍人なればこそよ。軍人なきゃ何でもない。私の兄さんなんか、国の為に死なきゃならない義理は無いわ、ほほ、死ぬのが名誉だッて。』
其方の声がぴたと止まったら、何なすったかと思って見ると、彼の可厭な学生が其の顔を凝乎と見て居るのでした。
『あらッ、また来てよ。』
若子さんと私が異口同音に斯う云って、云合せた様に其処を去ろうとしますと、先刻入口の処で見掛けた彼の可哀相な女の人が、其処に来合せたのでした。私は憎い人と可愛い人が、其処に集ってる様な気がして居ました。
『あらッ、プラットフォームに入れてよ。彼様に人が入ってよ。美子さん早く入らッしゃい。』
若子さんも私も駆出してプラットフォームへ入ったのでした。此処とても直きに一杯の人になって了ったし、汽車がもう着くかもう着くかと、其方にばかし気を奪られて、彼の二三人の人の事は拭った様に忘れて居ました。
万歳の声が其那一体――プラットフォームからも、停車場の中からも盛んに起ると間もなく汽車が着いたのでした。其時の混雑と云ったら、とても私の口では云えない、況して私は若子さんと一緒に夢中になって、御兄さんの乗って居らッしゃる列車を探したんですもの、人に揉れ揉れて押除けられたり、突飛ばされたりしながら。

下

若子さんの御兄さんに御目に掛った時は、何様に嬉しかったでしょう。今思い出しても胸が動悸動悸しますの。況して若子さんの喜び様ッてありませんでした。御二人手を御取合で互に涙含んでらッしゃした御様子てッたら、私も戦地へお行でなさる兄さんが、急に欲しくなった位でした。
『美子さん、勉強なさいよ。勉強して女の偉い人になって

下さい。若子を何時までも友達にして下さってね、私の母の処へも時々遊びに行って下さい。よいですか。』

私は唯胸が痛くなるばかりで、御返辞さえ出来ないのでした。

『兄さん、』と、若子さんは御呼掛でしたが、辛ッと私に聞こえる位の声で、『あのう、阿母さまも私も待って居てよ。』

『生命があったらば。』と莞爾なすって。

私は若子さんの意の中を思遣って、見て居られなくなって横を向きました。

すると、直き傍で急に泣声が発ったのです。見ますとね、先刻の何人でも呪いそうな彼の可怖い眼の方が、隣の列車の窓につかまって泣いてらッしゃるのでした、多くの人目も羞じないで。鋭い声の、あれが泣饒舌と云うのかも知れませんね。

『兄さん、貴方は死んで呉れちゃいやですよ。決して死ぬんじゃありませんよ。貴方は普通の兵士ですよ。戦争の時、死ぬ為に、平生から扶持を受けてる人達とは違ってよ。兄さん自分から好んで、』

強い咳払いを一つ、態と三つまで続けて、其女の方の言葉を紛らそうとしたのは、其兄上らしい三十近い兵士さんでした。それで、其兵士の顔には、他の人へ羞しい様な色が溢れて、妹さんを見据えてお居での眼は、何様に迷惑そうに見られたでしょう。

『もう可いから、彼方へ御行で……お前の云った事は、既う充分解ってる。其処を退いたら可いだろう。邪魔だよ、何時までも一人で、其処を占領してるのは。御覧、皆さんが彼様に立って居らッしゃるじゃないか。』

其女の方の後には、幾個かの人の垣を為た様に取巻いて、何人も呆れてお居での様でした。

『彼の女は僕の云う様な事を云ってる。』

突如に斯う云った人があったのです。見返ると、あの可厭々々学生が、何時か私達の傍近くに立って居たではありませんか。

若子さんの御兄さんは、じろりと彼の学生の顔を御覧でした。

若子さんは小さな声で、『兄さん、彼女の方は随分ですわねえ。』

『女だから可いさ。』と、御兄さんは気にも御止めなさらない様でした。

其時、私は不図あの可哀相な――私が何となくそう思った――乳呑子を懐いた女の人を見出したのです。それはつい、泣饒舌をして居た方から、二つ先の窓の処でした。そして、窓の中から見下して居た若い兵士の、黒い黒い顔の、それでも優しそうな其眼に、一杯涙が見えて居ました。

『……鶴さん、些っとも未練残さねえで、えれえ働きをしてね、人に笑われねえで下せえよ。』

と、眼には涙がほろほろと溢れてお居ででしたが、『お

前さんが戦死さッしゃッても、日本中の人の為だと思って私諦めるだからね、お前さんも其気で……ええかね。』と、赤さんを抱いてお居での方は袖に顔を押当てお了いでした。

涙を拭いたのは、其方の良人の兵士さんと私ばかりではありません。其周囲に居合せた人で、一人だッて涙を浮べない者はありませんでした。

『……兄さん、何様事があったッて、死んじゃいやですよ。お国には、』と、また泣饒舌をなさる声が聞えたのです。

『もう可い、何も云わない方が可い、お前には実に困る。彼方へ行ってお呉れ。』

『余り酷いわ、兄さんは。』

『私は軍人だよ。』

『だけども、徴兵で為方がなしになった軍人よ。月給を貰って妻子を養ってる、軍人とは違うんでしょう。貴方は家の相続人ですわ。お国には阿母さんが唯ッた一人、兄さんを楽しみにして待ってらッしゃるでしょう。仙台は仙台で、三歳になる子まである嫂さんがあるでしょう。それだのに、兄さんが万一、』

『ええ、聞く耳が無い。』と、其の兄さんはつと体を退いて、向側の窓の方に腰を卸してお了いでした。

『兄さん兄さん。』と、窓につかまって伸上り伸上りして、『国の為ッ国の為ッて、親も子も妻も餓死んでも、兄さんは兄さんは……無理に殺しに連れてかれる人もないわ。阿母さんや嫂さんの事を思って頂戴よ。えッえッえッ。』

『此所にも軍人はいくらも居るよ。』

窓の近くに居た兵士の一人が、大きな声で叱る様に斯うお云いでしたの。私可怖かったわ、あの呪う様な眼で、凝乎と其兵士をお睨みでした顔と云ったら。

『決して後の事心配しなさるでねえよ。私何様思いをしても、阿母や此児に餓じい目を見せる事でねえから、安心して行きなさるが可えよ。』

良人の其人も目は泣きながら、嬉しそうに首肯かれたのでした。『乃公はもう何んにも思い置く事はねえよ。村に帰ったら、皆さんへ宜敷く云って呉れるがいい。』

『ああ、能う御座えますよ。』

二人はもう何にも云う事がなくなった様に、互に顔を見てお居ででしたが、女の人は急に思出した様に、抱いて居た赤さんの顔を夫へお見せでして、『此子はお前さんの顔を覚えられねえけんど、お前さんは此子の顔を能く覚えて、戦死しても忘れねえで下せえよ。それが此子への………。』

親御の二人よりかも、傍の一同が泣いて了いました。途端にもう汽車は出るのでした。直ぐ出ました。看々うちに遠くなって、後は万歳の声ばかり。

私も悲しかったの若子さんに劣らなかったでしょう。二

人とも唯だ夢心地に佇んで居ました。
『心にもない事を云うわね、彼女は。』
子を抱いた女の彼の可哀相な人が悄然として、お帰りの後から斯う声を掛けて、彼女の方がまた睨んで御居でした。
『あの、貴方。』と、うって変った優しい御声は、洋服を召した気高い貴夫人が其処に来掛って、あの可哀相な女の人をお呼止めになったのでした。
『あなた、御寒う御座いますから、失礼ですが、其御子に掛けてあげて下さい。』
貴夫人は見事な肩掛を、赤さんへお掛けなすって、急いで出口の方へ行ってお了いでした。其御様子が何様にお美しく見上げられたでしょう。
『偽善よ。ほほ。』と、また可怖い眼で見送りでしたの。
『僕も主義を改めて、あの百姓のお神さんに同情するさ。』
彼可厭と思った学生の声でしたから、私達は急いで停車場を出て、待たせて置いた宅の俥に乗って帰ったのでした。
私は彼女の方は、日本の人か知ら、他国の人じゃないかと思いました。ですけれども、顔だけは何見ても日本の人！

（一九〇五年）

朝飯

島崎藤村

五月が来た。測候所の技手なぞをして居るものは誰しも同じ思であろうが、殊に自分はこの五月を堪えがたく思う。其日々の勤務——気圧を調べるとか、風力を計るとか、雲形を観察するとか、または東京の気象台へ宛てて報告を作るとか、そんな仕事に追われて、月日を送るという境涯でも、あの蛙が旅情をそそるように鳴出す頃になると、妙に寂しい思想を起す。旅だ——五月が自分に教えるのである。
いろいろなことを憶出すのもこの月だ。
ある日のことであった。丁度自分の休暇に当ったので、事務の引続を当番の同僚に頼むつもりで書いて置いた気圧の表を念の為に読んで見た。天気、晴。気温、上昇。雲形、層、層積、巻層、巻積。よし。それで自分は小高い山の上にある長野の測候所を出た。善光寺から七八町向うの質屋の壁は白く日をうけた。庭の内も今は草木の盛な時で、柱

に倚凭って眺めると、新緑の香に圧されるような心地がする。熱い空気に蒸される林檎の可憐らしい花、その周囲を飛ぶ蜜蜂の楽しい羽音、すべて、見るもの聞くものは回想のなかだちであったのである。其時自分は眼を細くして幾度となく若葉の臭を嗅いで、寂しいとも心細いとも名のつけようのない――まあ病人のように弱い気分になった。半生の間の歓しいや哀しいが胸の中に浮んで来た。あの長い漂泊の苦痛を考えると、よく自分のようなものが斯うして今日まで生きながらえて来たと思われる位。破船――というより外に自分の生涯を譬える言葉は見当らない。それがこの山の上の港へ漂い着いて、世離れた測候所の技手をして、雲の形を眺めて暮す身になろうなどとは、実に自分ながら思いもよらない変遷なのである。

　こう思い耽って居ると、誰か表の方で呼ぶような声がする。何の気なしに自分は出て見た。

　旅窶れのした書生体の男が自分の前に立った。片隅へ身を寄せて、上り框のところへ手をつき乍ら、何か低い声で物を言出した時は、自分は直にその男の用事を看て取った。聞いて見ると越後の方から出て来たもので、都にある親戚をたよりに尋ねて行くという。はるばるの長旅、ここまでは辿り着いたが、途中で煩った為に限りある路銀を費い尽して了った。道は遠し懐中には一文も無し、足は斯の通り脚気で腫れて歩行も自由には出来かねる。情があらば助力して呉れ。頼む。斯う真実を顔にあらわして嘆願するのであった。

「実は――まだ朝飯も食べませんような次第で。」

と、その男は附加して言った。

　この「朝飯も食べません」が自分の心を動かした。顔をあげて拝むような目付をしたその男の有様は、と見ると、体軀の割に頭の大きな、下顎の円く長い、何となく人の好さそうな人物。日に焼けて、茶色になって、汗のすこし流れた其痛々敷い額の上には、たしかに落魄という烙印が押しあててあった。悲しい追憶の情は、其時、自分の胸を突いて湧き上って来た。自分も矢張その男と同じように、饑と疲労とで慄えたことを思出した。目的もなく彷徨い歩いたことを思出した。恥を忘れて人の門に立った時は、思わず涙が頬をつたって流れたことを思出した。

「まあ君、そこへ腰掛けたまえ。」

と、自分は馴々敷い調子で言った。男は自分の思惑を憚るかして、妙な顔して、ただもう悄然と震え乍ら立って居る。

「何しろ其は御困りでしょう。」と自分は言葉をつづけた。「僕の家では、君、斯ういう規則にして居る。何かしら為て来ない人には、決して物を上げないということにして居る。だって君、左様じゃないか。僕だって働かずには生きて居られないじゃないか。その汗を流して手に入れたものを、ただで他に上げるということは出来ない。貰う方の人から言っても、ただ物を貰うという法はなかろう。」

こう言い乍ら、自分は十銭銀貨一つ取出して、それを男の前に置いて、
「僕の家ばかりじゃない、何処の家へ行っても左様だろうと思うんだ。ただ呉れろと言われて快く出すものは無い。是から君が東京迄も行こうというのに、そんな方法で旅が出来るものか。だからさ、それを僕が君に忠告してやる。何か為て、働いて、それから頼むという気を起したらば奈何かね。」
「はい。」と、男は額に手を宛てた。
「こんなことを言ったら、妙な人だと君は思うかも知れないが――」と自分は学生生活もしたらしい男の手を眺めて、「僕も君等の時代には、随分困ったことがある――そりゃあもう、辛い目に出遇ったことがある。丁度君が今日の境遇を僕も通り越して来たものさ。さもなければ、君、誰がこんな忠告なぞするものか、実際君の苦しい有様を見ると、僕は大に同情を寄せる。まあ僕は哭きたいような気が起る。真実に苦しんで見たものでなければ、苦しんで居る人の心地は解らないからね。そこだ。もし君が僕の言うことを聞く気があるなら、一つ働いて通る量見になりたまえ。何か君は出来ることがあるだろう――まあ、歌を唄うとか、御経を唱げるとか、または尺八を吹くとかサ。」
「どうも是という芸は御座いませんが、尺八ならすこしひねくったことも――」と、男は寂しそうに笑い乍ら答えた。
「むむ、尺八が吹けるね。それ見給え、そういう芸があるなら売るが可じゃないか。売るべし。売るべし。無くてさえ売ろうという今の世の中に、有っても隠して持ってるなんて、そんな君のような人があるものか。では斯うするさ――僕が今、君に尺八を買うだけの金を上げるから粗末な竹でも何でもいい、一本手に入れて、それを吹いて、それから旅をする、ということにしたまえ――兎に角これだけあったら譲って呉れるだろう――それ十銭上げる。」
斯う言って、そこに出した銀貨を男の手に握らせた。
「人の一生というものは、君、どうなるか解らない。」と自分は男の顔を熟視り乍ら言った。「これから将来、君がどんな出世をするかも知れない。僕がまた今日の君のように困らないとも限らない。まあ、君、左様じゃないか。もし君が壮大な邸宅でも構えるという時代に、僕が困って行くようなことがあったら、其時は君、宜敷頼みますぜ。」
「へへへへへ。」と男は苦笑いをした。
「いいかね。僕の言ったことを君は守らんければ不可よ。尺八を買わないうちに食って了っては不可よ。」
「はい食べません、食べません――決して、食べません。」と、男は言葉に力を入れて、堅く堅く誓うように答えた。
やがて男は元気づいて出て行った。施与ということは妙なもので、施された人も幸福ではあろうが、施した当人の方は尚更心嬉しい。自分は饑えた人を捉えて、説法を聞か

せたとも気付かなかった。十銭呉れてやった上に、助言もしてやった。まあ、二つ恵んでやった。と考えて、自分のしたことを二倍にして喜んだ。五月——寂しい旅情は僅かに斯ういうことで慰められたのである。

しばらくして、水汲みから帰って来た下女に聞くと、その男は自分の家を出ると直に一膳めしの看板をかけた飲食店へ入ったという。其時自分は男の言葉を思出して、「まだ朝飯も食べません。」と、繰返して笑った。定めし男の方でも自分の言葉を思出して、「説法は有難いが、朝飯の方が尚有難い。」とかなんとか独語（ひとりごと）を言い乍ら、其日の糧（かて）にありついたことであろう。

（一九〇六年一月「芸苑」）

戦話

岩野泡鳴

十年振りの会飲に、友人と僕とは気持ちよく酔った。戦争の時も出征して負傷したとは聴いていたが、会う機会を得なかったので、ようよう僕の方から、今度旅行の途次に、訪ねて行ったのだ。話がはずんで出征当時のことになった。

「今の僕なら、君」と少し多言になって来た。友人は、酒のなみなみつげてる猪口を右の手に持ったがまた、そのままおろしてしまった。「今の僕なら、どうせ、役場の書記ぐらいで満足しとるのやもの、徴兵の徴の字を見ても、ぞッとする程の意気地なしやけど、あの時のことを思うたら、不思議に勇気が出たもんや。それも大勢のお立て合う熱に浮されたと云うたら云えんこともなかろう。もう、死んだんが本統であったんやも知れんけど、兎角、勇気のないもんがこないな目に会うて」と、左の肩を振って見せたが、腕がないので、袖がただぶらりと垂れていた。「帰っ

て来ても、廃兵とか、厄介者とか云われるのやろう。もう、僕などはあかん」と、猪口を口へ持って行った。
「そんなことはないさ、」と、僕はなぐさめながら、「君は、もう、名誉の歴史を終えたのだから、これから別な人間のつもりで、からだ相応な働きをすればいいじゃアないか?」
「それでも、君、戦争でやった真剣勝負を思うたら、世の中でやっとることが不真面目で、まどろこしうて、下らん様に見えて、われながら働く気にもなれん。きのうもゆう方、君が来て呉れるというハガキを見てから、それをほところに入れたまま、ぶらぶら営所の近所まで散歩して見たんやけど、琵琶湖のふちを歩いとる方がどれほど愉快か知れん。あの狭い練兵場で、毎日、毎日、朝から晩まで、立てとか、すわれとか、百メートルとか、千メートルとか、云うて、戦争の真似をしとるんかと思うと、おかしうもなるし、あほらしうもなるし、丸で子供のままごとや。えらそうにして聯隊の門を出て来る士官はんを見ると、『お前らは何をしておるぞ』と云うてやりとうなる。されば云うて、自分も兵隊はんの抜けがら――世間に借金の申し訳でないことさえ保証がつくなら、今、直ぐにでも、首くくって死んでしまいたい。」
「君は、元から、厭世家であったが、なかなか直らないと見える。然し、君、戦争は厭世の極致だよ。世の中が楽しいなぞという未練が残ってる間は、決して出来るものじゃアない。軍紀とか、命令とかいうもので圧迫に圧迫を加えられたあげく、これじゃアたまらないと気がつく個人が、夢中になって、盲進するのだ。その盲進が戦争の滋養物である様に、君の現在では、家族の饑餓が君の食物ではないか。人間は皆苦しみに追われて活動しているのだ。」
「そう云われると、そうに違いないのやろけど」と、友人は微笑しながら、「まア、もッとお飲み。」傾けた徳利の酒が不足であったので、「おい、お銚子」と、奥へ注意してから、「女房は弱いし、餓鬼は毎日泣きおる、これも困るさかいなア。」
「それはお互いのことだア。ね」と、僕が答えるとたん、から紙が開いて、妻君が熱そうなお燗を持って出て来たが、大津生れの愛嬌者だけに、
「えろうお気の毒さまどすこと」と、自分は亭主に角のない皮肉をあびせかけ、銚子を僕に向けて、
「まア、一杯どうどす?――うちの人は、いつも、あないなことばかり云うとります。どうぞ、しかってやってお呉れやす。」
「まア、こういう人間は云いたいだけ云わして置きゃア済むんですよ。」
「そうどすか?」と、細君は亭主の方へ顔を向けた。
「まだ女房にしかられる様な阿房やない。」
「そやさかい、岩田はんに頼んどるのやおまへんか?」
「女郎どもは、まア、あッちゃへ行とれ。」

「はい、はい。」
細君は笑いながら、からの徳利を取って立った。
友人は手をちゃぶ台の隅にかけながら、顔は大分赤みの帯びて来たのが、そばに立ってるランプの光に見えた。
「岩田君、君、今、盲進は戦争の食い物やて云うたけど、もう一歩進めて云うたら、死が戦争の喰い物や。人間は死ぬ時にならんと真面目になれんのや。それで死んでしもたら、もう、何もないのや。つまらん命やないか？　ただくたばりそこねた者が帰って来て、その味が甘かったとか、辛かったとか云うて、えらそうに吹聴するのや、僕等は丸で恥さらしに帰って来たんも同然やないか？」
「そう云やア、僕等は一言も口嘴をさしはさむ権利はない、さ」
「まア、死にそこねた身になって見給え。それも、大将とか、大佐とかいうものなら、立派な金鵄勲章をひけらかして、威張って澄ましてもおられよけど、ただの岡見伍長ではないか？　こないな意気地なしになって、世の中に生きながらえとるくらいなら、いッそ、あの時、六カ月間も生死不明にしられた仲間に這入って、支那犬の腹わたになとる方がましであった。それにしても、思い出す度にぞッとするのは、敵の砲弾でもない、光弾の光でもない、速射砲の音でもない、実に、僕の隊附きの軍曹大石という人が、戦線の間を平気で往来した姿や。これが、今でも、幽霊の様に、また神さまの様に、僕の心に見えとるんや。」

「何か意味のありそうな話じゃないか？」
「詳しうすれば長なろけれど、大石という人はもとから忠実で、従順で、少し内気な質であったと思い給え。現役であったにも拘らず、第〇聯隊最初の出征に加わらなかったんに落胆しとったんやけど、おとなしいものやさかい、何も云わんで、留守番役をつとめとった。それが予備軍のくり出される時にも居残りになったんで、自分は上官に信用がないもんやさかいこうなんのやて、急にやけになり、常は大して飲まん酒を無茶苦茶に飲んだやら、赤うなって僕のうちへやって来たことがある。僕などは、『召集されないかて心配もなく、また召集されるような様子になったら、その前からアメリカへでも飛んで行きたいんを、わが身から進んでそないに力んだかて阿房らしいやないか？て』冷かしてやったんけど大した意気込みで不平を云うとって、取り合わん。『こないなことなら、いッそ、割腹して見せてやる』とか、『鉄砲腹をやってやる』とか、なかなか当るべからざる勢いであったんや。然し、いよいよ僕等までが召集されることになって、高須大佐のもとに後備歩兵聯隊が組織され、それが出征する時、待ちかまえとった大石軍曹も、ようよう附いてくことが出来る様になったんで、その喜びと云うたら、並み大抵ではなかった。どうせ、無事に帰るつもりは無いて、細君を離縁する云い出し、自分の云うことを承知せんなら、露助と見て血祭りにする云うて、剣を抜いて追いまわしたんや。」

こう云って、、友人は鳥渡僕から目を離して、猪口に手をかけた。僕も一杯かさねてから、
「実際離縁したのか？」
「いや」と、友人は少し笑いを含みながら、「その手つづきは後でしてやると親類の人達がなだめて、万歳の見送りをしたんやそうや。もう、その時から、少し気が触れとったらしい。」
「気違いになったのだ、な？」
「気違い云うたら、戦争しとる時は皆気違いや。君の云い方に拠れば、戦争というものは気違いが死を喰うのか、死が気違いを喰うのか分らん。ずどん云う大砲の音を初めて聴いた時は、こおうてこおうて堪らんのやけど、度重なれば、神経が鈍になると云うか、過敏となるて云うか、それが聴えんと、寂しうて、寂しうてならん。敵は五六千メートルも隔ってるのに、目の前へでも来とる様に見えて、大砲の弾丸があたまの上で破裂しても、よそごとの様に思われ、向うの手にかかって死ぬくらいなら、こッちゃから死ぬまで戦ってやる云う一念に、皆血まなこになっとるんや。かすり傷ぐらい受けたて、その血が流れとるのを自分は知らんのやし、他人も亦それが見えんのも尤もや。強い弾丸が当って、初めて気が付くんや。それに就いて面白い話がある。僕のではない、他の中隊の一卒で、からだは、大けかったけど、智慧がまわりかねた奴であったさかい、いつも人に馬鹿にされとったんが『伏せ』の命令で発砲した時、急に飛び起きて片足立ちになり、『あ、やられた！　もう、死ぬ！　死ぬ！』て泣き出し、またぱッたり倒れたさかい、どないにやられたかて、同隊の軍曹が調べてやると、足の上を鳥渡敵弾にかすられたんであった。軍曹はその卒の背中をたたいて、『しッかりせい！　こんな傷ならしばっとけばええ。』――」
「随分滑稽な奴じゃないか？」
「それが、さ、岩田君、跡になれば滑稽やが、その場にのぞんでは、極真面目なもんや。戦争の火は人間の心を焼き清めて、一生懸命の塊りにして呉れる。然し、こおうなればどこまでもこわいものやさかい、その方でまた気違いになるんもある。どッちゃにせい、気違いや。大石軍曹などは一番ええ、一番えらい方の気違いや。」
「うちの人もどっちかの気違いどす」と、細君は再び銚子を変えに出て来て、直ぐ行ってしまった。
友人はその跡を見送って、
「あいつの云う通り、僕は厭世気違いやも知れんけど、僕のは女房の器量がようて（奥でくすッと笑う声がした）、子供がかしこうて、金がたんとあって、寝ておられさえすれば直る気違いや。弾丸の雨にさらされとる気違いは、たとえ一時の状態とは云うても、そうは行かん。」
「それで、君の負傷するまでには、たびたび戦ったのか、ね？」
「いや、僕の隊は最初の戦争に全滅してしもたんや。――

さて、これからが話の本文に這入るのやて――」
「まア、一息つき給え」と、僕は友人と盃の交換をした。酔いもまわったのであろう、友人は、気質に似合わず、非常にいい気持ちの様子で、にこにこ笑うている。然し、その笑いが何となく寂しいのは、友人の周囲を僕に思い当らしめた。
「久し振りで君が尋ねて来て、今夜はとまって呉れるのやさかい、僕はこないに嬉しいことはない。充分飲んで呉れ給え」と、酌をしてくれた。
「僕も随分やってるよ。――それよりか、話の続きを聴こうじゃないか？」
「それで、僕等の後備歩兵第〇聯隊が、高須大佐に導かれて金州半島に上陸すると、直ぐ鳳凰山を目がけて急行した。その第五中隊第一小隊に、僕は伍長として、大石軍曹と共に、属しておったんや。進行中に、大石軍曹は何とのうそわそわして、ただ、まえの方へ、まえの方へと浮き足になるんで、或時、上官から、大石、しっかりせい。貴様は今からそんなざまじゃァ、大砲の音を聴いて直ぐくたばってしまうやろ云われた時、赤うなって腹を立て、そないに弱いものなら、初めから出征は望みません、これでも武士の片端やさかい、その場にのぞんで見て貰いましょ。――それからと云うものずうッと腹が立っとったんやろ、無言で鳳凰山まで行進した。もう、何でも早う戦場にのぞみとうてのぞみとうて堪えられなんだやろ。心では、おうかた、大砲の音を聴いとったんやろ。僕は、あの時成る程離縁問題が出た筈やと思た。
「成る程、これからがいよいよ人の気が狂い出すという幕だ、な。」
「それが、さ、君忘れもせぬ明治三十七年八月の二十日、僕等は鳳凰山下を出発し、旅順要塞背面攻撃の一隊として、盤龍山、東鶏冠山の中間にあるピー砲台攻撃に向た。二十日の夜行軍、翌二十一日の朝、敵陣に近い或地点に達したのやけど、危うて前進が出来ん。朝飯の際、敵砲弾の為めに十八名の死者を出した。飯を喰てたうえへ砲弾の砂ほこりを浴びたんやさかい、口へ這入るものが砂か米か分らん様であった。僕などは、もう、ぶるぶる顫て、喰う気にもなれなんだんやけど、大石軍曹は、僕等のあたまの上をひゅうひゅう飛んで行く砲弾を仰ぎながら、にこにこして喰っておった。「腹が出来んといくさも出来ん。」僕等の怖なった時に、却って平気なもんであった。軍曹が上官にしかられた時のうわつき方とは丸で違てた。気狂いは違たもんやて、はたから僕は思た。僕は、まだ、戦場におる気がせなんだんや。それが、敵に見られん様に、敵の刈り残した高黍畑の中を這う様にして前進し、一方に小山を楯にした川筋へ出た。川は水がなかったんで、その川床にずらりと並んで敵の眼を暗ました。鳥渡でも頸を突き出すと直ぐ敵弾の的になってしまう。昼間はとても出ることが出来なかった、日が暮れるのを待ったんやけど、敵は始終光

弾を発射して味方の挙動を探るんで、矢ッ張り出られんのは同じこと。」
「鳥渡聴くが、光弾の破裂した時はどんなものだ？」
「三四尺の火尾を曳いて弓形に登り、わが散兵線上に数個破裂した時などは、青白い光が広がって昼の様であった。それに照らされては、隠れる陰がない。おまけに、そこから敵の砲塁までは小川もなく、樹木もなく、あった畑の黍は、敵が旅順要塞に退却の際、みな刈り取ってしもたんや。一歩踏み出せば、もう、直ぐ敵弾の餌食は覚悟せにゃならん。聯隊長はこの進軍に反対であったんやけど、止むを得ん上官の意志であったんやさかい、まア、半分焼けを起して進んで来たんや。全滅は覚悟であった。目的はピー砲台じゃ、その他の命令は出さんから、この川を出るが最後、個々の行動を取って進めという命令が、敵に悟られん様に、聯隊長からひそかに、口渡しで、僕等に伝えられ、僕等は今更電気に打たれた様に顫たんやが、その日の午後七時頃、いざと一同川を飛び出すと、生憎諸方から赤い尾を曳いて光弾があがり、花火の様にぱッと弾けたかと思う間ものう、ばらばらと速射砲の弾雨を浴びせかけられた。それからていうもの、君、敵塁の方から速射砲発射の音がぽとぽと、ぽとぽとと聴える様になる。頭上では、また砲弾が破裂する。何のことはない、野砲、速射砲の破裂と光弾の光とがつづけざまにやって来るんやもの、かみ鳴りと稲妻とが一時に落ちる様や、僕等は、もう、夢中やった。午後九時頃には、わが聯隊の兵は全く乱れてしもて、各々その中隊にはおらなかった。心易いものと心易いものが、お互いに死出の友を求めて組みし合い、抱き合うばかりにして突進した。今から思て見ると、よく、まア、あないな勇気が出たことや。後について来ると思たものが足音を絶つ、並んどったものが見えん様になる、前に進むものが倒れてしまう。自分は自分で、楯とするものがない。
「そこになると、もう、僕等の到底想像出来ないことだ。」
「実際、君、そうや。」
「わたしは何度も聴かされたんで、よく知っとります」と、細君がまた銚子を持って出て来て、僕等のそばに座り込んだ。
「奥さんがその楯になるつもりです、ね？」
「そうやも知れまへん」と笑っている。
友人は真面目だ。
「僕はなんでこないに勇気が出るか知らん思たんが気のゆるみで、急に寂しい様な気がした。僕独りで、——聯絡がなかった。こないな時の寂しさは乃ち恐怖や、おそれや。それに、発砲を禁じられとったんで、ただ土くれや唐黍の焼け残りをたよりに、弾丸を避けながら進んで行たんやが、僕が黍の根を引き起し、それを堤としてからだを横たえた時、まア、安心と思たんが悪かったんであろ、速射砲弾の破裂に何ともかとも云えん恐ろしさを感じた。仲間どもはどうなったか思て、後方を見ると、光弾の光にずらり

と思う見えるんは石か株か、死体か生きとるんか、見分けがつかなんだ。また敵の砲塁までまだどれほどあるかて、音響測量をやって見たら、たッた二百五十メートルほかなかった。大小の敵弾は矢ッ張り雨の如く降っとった。その間を平気で進んで来たものがあるやないか？　たッた独りやに「沈着にせい、沈着にせい」と云うて命令しとる様な様子が何やらおかしい思われた。演習に行てもあないに落ち付いておられん。人並みとは違た様子や。して、倒れとるものが皆自分の命令に従ごて来るつもりらしかった。それが大石軍曹や。」

友人は不思議ではないかと云わぬばかりに、僕と妻君との顔を順ぐりに見た。

「戦場では」と僕が受けて、「大胆に出て行くものにゃア却って弾が当らないものだそうだ。」

「うちの人の様にくよくよしとると、ほんまにあきまへん。」

「そやさかいおれは不大胆の厭世家やて云うとる。弾丸が当ってくれたのはわしとして名誉でもあったろが、くたばりそこねてこないな恥さらしをするんやさかい、矢ッ張り大胆な奴は仕合せにも死ぬのが早い――『沈着にせい、沈着にせい』云うて進んで行くんやさかい、上官を独りほかして置くわけにも行かん。この人が来なんだら、僕は一目散に逃げてしもたやも知れんのや。僕はこわごわ起きあがってその跡に付いてたんやけど、何やら様子が不思議やったんで、軍曹に目を離さんでおったんやが、これはいよいよキ印になっとるんや思た、自分のキ印には気がつかんで――『軍曹どの危の御座ります』僕が云うたら、

『なアに、くそ！　沈着にせい』

『みなやられたらしいです。あたりには、軍曹どのとわたしとばかり。打たれるくらいなら先ずこッちゃから打って、敵砲手の独りなと、ふたりなと射殺してやりましょ』

『なにイ――距離を測量したか？』

『二百五十メートル以内――只今計りました。』

『じゃア、やれ！　沈着に発砲せい！』

『よろしい！』て、二人ともずどんずどん一生懸命になってから二三十発つづけざまに発砲した。之に応じて、当の目あては勿論、盤龍山、鶏冠山からも砲弾は雨、あられと飛んで来た。ひかって青い光が破裂すると、ぱらぱらッと一段烈しう速射砲弾が降って来たんで、僕は地上にうつ伏しになって之を避けた。敵塁の速射砲を発するぽとぽとぽとぽとと云う響きが聴えたのは、如何にも怖いものや。再び立ちあがった時、僕はやられた。十四箇所の貫通創を受けた。

『軍曹どの、やられました！』

『砲弾か小銃弾か？』

『穴は大きい』

『じゃア、後方にさがれ！』

『かしこまりました！』て一心に僕は駆け出したんやだど

倒れて夢中になった。気がついて見たら『しっかりせい、しっかりせい』と、独りの兵が僕をかかえて後送してくれとった。水が飲みたいんで水瓶の水を取ろうとして、出血の甚しかったんを知り、『とても生きて帰ることが出来んなら、いっそ戦線に於て死にます』云うたら、『じゃア、お前の勝手に任す』云うて、その兵はいずれかへ去った。この際、外に看護してくれるものはなかったんさかい、それが矢ッ張り大石軍曹であったらしい、どうやら、その声にも似とった。」

「それが果して気違いであったなら、随分しっかりした気狂いじゃアないか？」

「無論気狂いにも種類があるもんと見にゃならん。――僕はそれから夜通し何も知らなかったんや。再び気が付いて見たら、前夜川から突進した道筋をずッと右に離れたとこに独立家屋があった。その附近の畑の掘れたなかに倒れとった。夜のあけ方であったんやけど、まだ薄暗かった。あたまを挙げてあたりを見ると、独り兵の這いさがるんかと思た黒い影があるやないか？　自分もあの様にして這いさがろ思てよう見ると、うわさに聴いた支那犬やないか？　戦争の過ぎた跡へかけ付けて、なま臭い人肉を喰う狼見た様な犬がうろ付いとる間で、腰、膝の立たんわが身が一夜をその害からのがれたんは、まだ死をいそぐんではなかろて、勇気――これが僕にはほんまの勇気やろ――を出して後方にさがった。独立家屋のあたりには、衛生隊が死傷者を収容する様子は見えなんだ。進んだ時も夢中であったんやが、さがる時も一生懸命――敵に見付かったらという怖さに、たッた独りぽッちの背中に各種の大砲小銃が四方八方からねらいを向けとる様な気がして、ひどう神経過敏になった耳元で、僕の手足が這うとる音がした。のぼせ切っておったんや。刈り取られた黍畑や赤はげの小山を越えて、およそ二千メートル後方の仮繃帯場へついた時は、ほッと一息したまま、また正気を失てしもた。そこからまた一千メートル程のとこに第〇師団第二野戦病院があって、そこへ転送され、二十四日には長嶺子定立病院にあった。その間に僕の左の腕が無うなっとった。寝台の上に仰向けになったまま、『おや腕が』と気付いたんやが、その時第一に僕の目に見えたんは大石軍曹の姿であった。この人をしかった上官にも見せてやりたかったんやが、『その場にのぞんで見て貰いましょ』と僕の心を威嚇して急に戦争の修羅場が浮んで来た。僕はぞッとして蒲団を被ろうとしたが手が一方よりほか出なかった。びっくりした看護婦が、どうしたんや問うたに答えもせず、右の手を出してそッと左の肩に当って見たら二三のとこで腕が木の株の様に切れて、繃帯をしてあった。――この腕だ。」

　と、友人は左の肩を動かした。

「如何に君自身は弱くっても、君の腕はその大石軍曹と同じく、行くえが知れない程勇気があったんだ」と、僕は猪口を差した。

友人は右の手に受けて、言葉を継ぎ、「あの時の心持ちと云うたら、まだ気が落ち付いとらなんだんやさかい、今にも敵が追い付いて来そうで、怖いばかりのまぼろしを見とったのや。後で看護婦の話を聴いたら、大石軍曹までを敵に思たんであろ、『大石が来た、大石が来た』云うてたびたびうなされとったそうや。して、その軍曹は而も僕を独立家屋のそばまでかかえて来て呉れた命の親だ。よくよく僕は卑恐(ひきょう)の本音を出したもんやらしい。」

「それは僕に解釈さして呉れるなら」と、僕は口を出して、「気狂いとまで一方に思った軍曹の、大胆な態度に君が深く打たれたので、夢中な心にもそれを忘れかねたんだろう。」

「それ、さ。」友人は卓を打って、「僕は今でもその姿が見える様なんや。岡見伍長に大石軍曹は神さんや」と、気の弱いにも似ず、何となく威だけ高になった友人の姿には、一種の神々しいところがあった。その寂しいほほえみは消えて、顔は、酒の酔いでなく、別な力の熱して来た目つきであった。僕は、周囲の平凡な真ん中で、戦争当時の狂熱に接する様な気がした。

「大石軍曹は」と、友人はまた元の寂しい平凡に帰って、「その行くえが他の死者と同じ様に六ヵ月間分らなんだ、独立家屋のさきで倒れとったんを見た云うもんもあったそうやし、もッとさきの方で負傷したまま戦ことった云うもんもある。何にせい、聯隊の全滅であったんやさかい、僕の中隊で僕ともう一人ほか生還しやへんのや。全滅後、死体の収容も出来(でき)んで、そのまま翌年の一月十二三日、乃ち、旅順開城後までほッとかれたんや。一月の十二三日に収容せられ、生死不明者等はそこで初めて戦死と認定せられ、遺骨が皆本国の聯隊に着したんは、三月十五日頃であったんや。死後八ヵ月を過ぎて葬式が行われたんや。」

「して、大石のからだはあったんか？」

「あったとも、君——後で収容当時の様子を聴いて見ると、僕等が飛び出した川からピー堡塁に至る間に、『伏せ』の構えで死んどるもんもあったり、土中に埋って片手や片足を出しとるもんもあったり、からだが離ればなれになっとるんもあった。何れも、腹を出しとったんはあばらが白骨になっとる。腹を土につけとったんは黒い乾物見た様になっとる。中には倒れないで坐ったまま、白骨になっとったんもある。之を見た収容者は男泣きに泣いたそうや。大石軍曹はて云うたら、僕がやられたところよりも遥かさきの大きな岩の上に剣さきを以て敵陣を指したまま高須聯隊長が倒れとった、その岩よりもそッとさきに進んだとこで、敵の第一防禦の塹壕内に死んどったんが、大石軍曹と同じ名の軍曹であったそうや。」

「随分手柄のあった人どす、なア」と、細君は僕の方に頸を動かした。

「そりゃア」と、僕が話しかける間もなく、友人は言葉をついだ。

「思て見ると、僕は独立家屋のそばまで後送して呉れた跡で、また進んで行て例の『沈着にせい、沈着にせい』をつづけとったんやろ。——まア、ざっとこないな話——君の耳も僕の長話の砲声で労れたろから、もう少し飲んで休むことにしよ。まア、飲み給え。」
「酌ぎましたよ」と、すすめる細君の酌を受けながら、僕は大分酔った様子らしかった。
「君と久し振りで会って、愉快に飲んだし、思いもよらない君の戦話を聴いたし、もう、何にも不満足はない。休ませて貰おう。」
「それでは二階へ行こか？」
「まア、鳥渡待っておくれやす」と、細君は先ず僕等の寝床を敷きにあがった。僕等は暫くしてあがった。
　家は古いが、細君の方の親譲りで、二階の飾りなども可なり揃っていた。友人の今の身分から見ると、家賃がいらないだけに、どこか楽に見えるところもあった。夫婦に子供二人の活しだ。
「あす君は帰るんや。なア、僕は役場の書記でくたばるんや。もう一遍君等と一緒に寄宿舎の飯を喰た時代に返りたい」と、友人は寝巻に着かえながらしみじみ語った。下の座敷から年上の子の泣き声が聞えた。つづいて年下の子が泣き出した。細君は急いで下りて行った。
「あれやさかい厭になってしまう。親子四人の為めに僅かの給料で毎日々々こき使われ、帰って晩酌でも一杯思う時は、半分小児の守りや。養子の身はつらいものや、なア。月末の払いが不足する時などは、借金をするんも胸くそ悪し、いッそ子供を抱いたまま、湖水へでも沈んでしまおか思うことがある。」
　こういう話を聴きながら、僕はいつの間にか寝入ってしまったが、酔いの覚めて行くに従って、目も覚めて来て、再び眠られなくなった。神経が段々冴えて行くのであった。
　その間に、僕のそばでぐッすり寝込んでいるらしい友人の身の上や、昔の寄宿舎生活などを思い浮べ、友人の持っていた才能を延ばし得ないで、こんな田舎に埋れてしまう運命が気の毒になり、そのむくろには今どんな夢が宿っているだろうなどと、寝苦しいままに幾度も寝返りをするうちに、よいに聴いた戦話がありありと暗やみに見える様になった。
　然し、大石軍曹なる者の『沈着にせい、沈着にせい』の立ち姿が黒いばかりで分らない。どんな顔をしていたろうと思いめぐらしていると、段々それが友人の皮肉な寂しい顔に見えて来て、——僕は決して夢を見たのではない——その声高いいびきを聴くと、僕は何だか友人と床を並べて寝ている気がしないで、一種威厳ある将軍の床に侍っている様な気がした。

（一九〇八年五月）

太十と其犬

長塚節

一

太十は死んだ。

彼は「北のおっつあん」といわれて居た。それは彼の家が村の北端にあるからである。門口が割合に長くて両方から竹藪が掩いかぶって居る。竹藪は乱伐の為めに大分荒廃して居るが、それでも庭からそこらを陰鬱にして居る。おっつあんというのはおじさんでもなく又おとっつあんでもない。其処には敬称と嘲侮との意味を含んで居る。いつが起りということもなくもう久しい以前からそうなって畢った。彼は六十を越しても三四十代のもの、特に二十代のものとのみ交って居た。彼の年輩のものは却て彼の相手ではない。彼は村には二人とない不男である。彼は幼少の時激烈なる疱瘡に罹った。身体一杯に疱瘡が吹き出した時其鼻孔まで塞ってしまった。呼吸が逼迫して苦んだ。彼の母はそれを見兼ねて枳根(ケンポナシ)の実を拾って来て其塞った鼻の孔へ押し込んでは僅かに呼吸の途をつけてやった。それは霜が木の葉を蹴落す冬のことであった。枳根の木は竹藪の中に在った。黄ばんだ葉が蒼い冴えた空から力なさ相に竹の梢をたよってはらはらと散る。竹はうるさげにさらさら身をゆする。落葉は止むなく竹の葉を滑ってこぼれて行く。澁い枳根の実は霜の降る度に甘くなって、軈て四十雀のような果敢ない足に踏まれても落ちるようになる。幼いものは竹藪へつけこんでは落葉に交って居る不恰好な実を拾っては噛むのである。太十も疱瘡に罹るまでは毎日懐へ入れた枳根の実を噛んで居た。其頃はすべての病が殆ど皆自然療法であった。枳根の実で閉塞した鼻孔を穿ったということは其当時では思いつきの軽便な方法であった。果物のうちで不恰好なものといったら凡そ其骨のような枳根の如きものはあるまい。其枳根の為に救われたということで最初から彼の普通でないことが示されて居るといってもいい。蘇生したけれど彼は満面に豌豆大の痘痕を止めた。鼻は其時から酷くつまってせいせいすることはなくなった。彼は能く唄ったけれど鼻がつまって居る故か竹の筒でも吹くように唯調子もない響を立てるに過ぎない。性来頑健な彼は死ぬ二三年前迄は恐ろしく威勢がよかった。死ぬ迄も依然として身体は丈夫であったけれど何処となく悄れ切って見えた。それは瞽女(ごぜ)のお石がふっつりと村へ姿を見せなくなったたからであった。彼がお石と馴染んだのは足かけもう二十年に

もなる。秋のマチというと一度必ず隊伍を組んだ瞽女の群が村へ来る。其同勢のうちにお石は必ず居たのである。晩秋の収穫季になると何処でも村の社の祭をする。土地ではそれをマチといって居る。マチは村落によって日が違った。瞽女はぐるぐるとマチを求めて村々をめぐる。太十の目には田の畔から垣根から庭からそうして柿の木にまで挂けられた其稲の収穫を見るより瞽女の姿が幾ら嬉しいか知れないのである。瞽女といえば大抵盲目である。手引といって一人位は目明きも交る。彼等は手引を先に立てて村から村へ田甫を越える。褰げた裾から赤いゆもじを垂れてみんな高足駄を穿いて居る。足袋は有繋に白い。荷物が図抜けて大きい時は一口に瞽女の荷物のようだといわれて居る其紺の大風呂敷を胸に結んで居る。大きな荷物は彼等が必ず携帯する自分の敷蒲団と枕とである。此も紺の袋へ入れた三味線が胴は荷物へ載せられて棹が右の肩から斜に突っ張って居る。彼等は皆大きな爪折笠を戴く。瞽女かぶりといって大事な髪は白い手拭で包んでそうして其髷へ載せた爪折笠は高く其位置を保って居る。覗いたように折れた其端が笠の内を深くしてそれが耳の下で交叉して顎で結んだ黒い毛繻子のくけ紐と相俟って彼等の顔を長く見せる。有繋に彼等は見えもせぬのに化粧を苦にして居る。毛繻子のくけ紐は白粉の上にくっきりと強い太い線を描いて居る。削った長い木の杖を斜について危げに其足駄を運んで行く。上部は荷物と爪折笠との為めに図抜けて大きいにも拘らず、足がすっとこけて居る。彼等の此の異様な姿がぞろぞろと続く時其なかにお石が居れば太十がそれに添うて居ないことはない。然し太十は四十になるまで恐ろしい堅固な百姓であった。彼は貧乏な家に生れた。それで彼は骨が太くなると百姓奉公ばかりさせられた。彼はうまく使えば非常な働手であった。彼は一剋者である。一旦怒らせたら打っても突いてもいうことを聴くのではない。性癖は彼の父の遺伝である。だが嘗て乱暴したということもなくてどっちかというと酷く気の弱い所のあるのは彼の母の気質を禀けたのであった。彼の兄も一剋者である。彼等二人は両親が亡くなって自分等も老境に入るまでしみじみと噺をした事がない。そうかといって太十はなかなか義理が堅いので何事かあると屹度兄の家へ駈けつける。然し彼は何事に就いても少しの意見もなければ自ら差し出てどうということもない。気に入らぬことがあれば独でぶつぶつと怒って居る。そうした時は屹度上脣の右の方がぴくぴくと釣って恐ろしい相貌になる。彼の怒は蝮蛇の怒と同一状態である。蝮蛇は之を路傍に見出した時土塊でも木片でも人が之を投げつければ即時にくるくると捲いて決して其所を動かない。そうして扁平な頭をぶるぶると擡げるのみで追うて人を噛むことはない。太十も嘗て人を打擲したことがなかった。彼はすぐに怒るだけに又すぐに解ける。殊に瞽女のお石と馴染んでからはもうどんな時でもお石の噺が出れば相好を崩して畢う。大きな口が更に拡がって鉄漿をつけたような穢

い歯がむき出して更に中症に罹った人のように頭を少し振りながら笑うのである。然し瞽女の噂をして彼に揶揄おうとするものは彼の年輩の者にはない。随って彼の交際する範囲は三四十代の壮者に限られて居るのである。以前奉公して居た頃も稀には若い衆に跟いて夜遊びに出ることもあった。彼も他人のするように手拭かぶって跟いて行った。帰る時にはぼさぼさとして独であった。若い衆はみんな自分の女を見つけると彼を棄ててそこらの藪や林へこそこそと隠れて畢う。太十はどの女にも嫌われた。丁度水に弾かれる油のようであった。それでも彼は昼間は威勢よく馬を曳いて出た。彼は紺の腹掛に紺の長いツッポ襦袢を着て三尺帯を前で結んで居た。襦袢の襟を態と開いて腹掛の丼を現わして居た。彼は六十越しても大抵は其時の馬方姿である。従来酒は嫌な上に女の情というものを味う機会がなかったので彼は唯働くより外に道楽のない壮夫であった。其勤勉に報うる幸運が彼を導いて今の家に送った。彼は養子に望まれたのである。其家は代々の稼ぎ手で家も屋敷も自分のもので田畑も自分で作るだけはあった。手堅にすれば楽な身上であった。夫婦は老いて子がなかった。彼はそこへ行ってから間もなく娵をとった。其家の財産は太十の縁談を容易に成就させたのであった。

二

太十が四十二の秋である。彼は遠い村の姻戚へ「マチ呼バレ」といって招かれて行った。二日目の日が暮れてから帰って来た。隣村の茶店まで来た時そこには大勢が立ち塞って居るのを見た。隣村もマチであった。唄う声と三味線とが家の内から聞えて来る。彼はすぐに瞽女が泊ったのだと知った。大勢の後から爪先を立てて覗いて見ると釣ランプの下で白粉をつけた瞽女が二人三味線の調子を揃えて唄って居る。外の三四人が句切れ句切れに囃子を入れて居る。狭い店先には瞽女の膝元近くまで聞手が詰って居る。土間にも立って居る。そうして表の障子を外した閾を越えて往来まで一杯に成って居る。太十も其儘立って覗いて居た。斜に射すランプの光で唄って居る二女の顔が冴えて見える。一段畢ると家の内はがやがやと騒がしく成る。煙草の烟がランプをめぐって薄く拡がる。瞽女は危ふげな手の運びようをして撥を絃へ挿んで三味線を側へ置いてぐったりとする。耳にばかり手頼る彼等の癖として俯向き加減にして凝然とする。そうかと思うとランプを仰いで見る。死んだ網膜にも灯の光がほっかりと感ずるらしい。一人の瞽女が立ったと思うと一歩でぎっしり詰った聞手につかえる。瞽女はどこまでもあぶなげに両方の手を先へ出して足の底で探るようにして人々の間を抜けようとする。悪戯な聞手はわざと動かないで彼の前を塞ごうとする。憫な瞽女は倒れ相にしては徐に歩を運ぶ。体がへなへなとして見える。大勢はそこここから仮声を出して揶揄おうとする。こ

ういう果敢ない態度が酷く太十の心を惹いた。大勢はまだ暫くがやがやとして居たが一人の手から白紙に包んだ纒頭が其かしらの婆さんの手に移された。瞽女は泊めた家への謝儀として先ず一段を唄う。そうして大勢の中の心あるものから纒頭を得て一くさり唄うのである。其一くさりが畢ると瞽女は絃を緩めて三味線を紺の袋へ納めた。そうして大きな荷物の側へ押しやった。大勢はまたがやがやと騒がしく成った。其時夜は深けかかって居た。人はだんだんに去って狭い店先はひっそりとした。太十はそれでも去らなかった。店先へぽっさりと独で立って居ることは出来ない。横手の流元の引窓から彼は覗いた。唯一つの火鉢へ二三人が手を翳して居る。他の瞽女はぽっさり懐手をして居る。みんな唄の疲が出たせいか深い思に沈んだようにして首をかしげて居る。太十は尚お去ろうともしなかった。突然戸が開いた。太十は驚いて身を引いた。其機会に流し元のどぶへ片足を踏ん込んだ。戸を開けたのは茶店の女房であった。太十は女房を喚び挂けて盥を借りようとした。商売柄だけに田舎者には相応に気転の利く女房は自分が水を汲んで頻りに謝罪しながら、片々の足袋を脱がして家へ連れ込んだ。太十がお石に馴染んだのは此夜からであった。そうして二三日帰らなかった。女の切な情というものを太十は盲女に知ったのである。目が見えて態度のはきはきした女は少年の頃から決して太十の相手ではなかった。太十もそれは知って居る。知って居るということが彼には当然のことなのである。知って居るというより諦めて居た。それより猶お女のつれないということはなくなって居たのでそれを格別不足に思うということはなかった。朝夕顔を見合わす間柄はそんなに追従いうことの出来ないのは当然である。だが其兄とさえ眤まぬ太十だから、どっちかといえばむっつりとした女房は実際こそっぱい間柄であった。瞽女もそれを知らないのではない。然し彼等は其とする。孰れの村落へ行っても人は皆悪戯半分に瞽女を弄ぼうとする。僅少な金銭の為に節操を穢しつつある。瞽女でも相当の年頃になれば人に啻められたいのが山々で見えぬ目に口紅もさせば白粉も塗る。お石は其時世を越えて散々な目に逢って来たのである。幾度か相逢ううちにお石も太十の情に絆された。そうでなくても稀に逢えば誰でも慇懃な語を交換する。お石に逢う度に其情は太十の腸に浸み透るのであった。瞽女は秋毎に村へ来た。そうしてお石は屹度其仲間に居たのである。太十は後には瞽女の群をぞろぞろと自分の家へ連れ込むようになった。女房は我儘な太十の怒癖を怖れて唯むっつりして黙って居た。然しお石は義理を欠かなかった。其大きな荷物の中から屹度女房への苞が出された。女房も後には其見えない女の前に蕎麦の膳を運んでやるようになった。一つには何処へも出たことのない女の身にはなまめかしい姿の瞽女に三味線を弾かせて夜深までも唄わせることがせめてもの欝晴しであったからである。

三

或秋のことであった。お石は子犬を懐へ入れて来た。子犬は古新聞紙へ包んであった。子犬は新聞紙にくるまって寝て居た。懐から出すとぶるぶると体を振るようにしてあぶなげに立つ。悲しげな目で人を見た。目が涙で湿おうて居た。雀の毛を拗ったように痩せて小さかった。お石は可哀想だから救って来たのだといった。太十は独で笑いながら懐へ入れて見ると矢張りくるりとなって寝た。鍋の破片へ飯をくれたが食わない。味噌汗をかけてやったらぴしゃぴしゃと甞めた。暫くすると小さいながら尾を動かしてちょろちょろと駈け歩いた。お石が村を立ってから犬は太十の手に飼われた。太十は従来農家の附属物たる馬と雞との外には動物は嫌いであった。猫も二三度飼ったけれど皆酷く褻れて鳴声も出せないように成って死んだ。猫がないので鼠は多かった。竹藪をかぶった太十の家は内も一杯煤だらけで昼間も闇い程である。天井がないので真黒な太い梁木が縦横に渡されて見える。乾いた西風の烈しい時は其煤がはらはらと落ちる。鼠のためには屈竟な住居である。それでも春から秋の間は蛇が梁木を渡るので鼠が比較的少ない。蛇は時とすると煤けた屋根裏に白い体を現わして鼠を狙って居ることがある。そうした後には鼠は四五日ひっそりする。収穫季の終が来て蛇が閉塞して畢うと鼠は蕎麦や籾の俵を食い破る。それでも猫は飼わなかった。太十が犬だけは自分で世話をした。子犬はそれへくるまって寝た。霜の白い朝彼は起きて屹度犬の箱を覗く。犬は小さいながら成長した。春らしい日の光が稀にはほっかり射すようになって麦がみずみずしい青さを催して来た頃犬は見違える程大きくなった。毛が赤いので赤と呼んだ。太十が出る時は赤は屹度附いて出る。附いて行くのではなくて二町も三町も先へ駈けて行く。岐路があると赤はけろりと立って太十の追いつくのを待って居る。太十が左へ向けば其時一散に左へ駈けて行く。太十は左へ行く時には態と右の方へ足を運ぶ。赤がばらばらと駈けて行くのを見て左の方へ歩いて行くと赤は暫く経って呼吸せわしく太十を求めて駈けて来る。こういう悪戯を二度も三度も繰り返して居る太十の姿を時として見ることがある。赤は煎餅が好きであった。赤に煎餅を食わせて居る太十の姿がよく村の駄菓子店に見えた。焼けの透らぬ堅い煎餅は犬には一度に二枚を噛ることは出来ない。顎が草臥れて畢うのである。唯欲し相にして然かも鼻をひくひくと動かす犬を見て太十は独で笑うのである。赤は恐ろしい人なつこい犬である。後足で立って前足を胸に屈めていつまででも立つことが出来た。そうして何か欲しいといっては長い舌を出してぺろりぺろりと自分の鼻を甞めた。太十が庭へおりると唯悦んで飛びついた。うっかり抱いて太十はよく其舌で甞められた。赤は

太十をなくして畢ってぼさぼさと独りで帰ることがある。春といっても横にひろがった薺が、枝を束ねた桑畑の畝間にすっと延び出して僅かに白い花が見え出してまだ麦が首を擡げない頃は其短い麦の間に小さな体にしては恐ろしげな毛を頭に立てた雲雀がちょろちょろと駈け歩いて居る。赤は雲雀を見つけるとすぐ其後に土塊を蹴立てて駈けて行く。雲雀は低く飛んで遥かに先へ行って畑の境の茶の木の株に隠れたり又飛んだりして遁げて歩く。赤が吠える声は忽ちに遠くなって畢う。頬白が桑の枝から枝を渡って懶げに飛ぶのを見ると赤は又立ちあがって吠える。桑畑から田から堀の岸を頬白が向の岸へ飛んでなくなるまでは吠える。そうして赤は主人を見失うのである。そういう時には尻尾を脚の間へ曲げこんで首を垂れて極めて小刻みに帰って行く。赤は又庭へ雀がおりても駈けて行く。庭の桐の木から落ちたササキリが其長い髭を徐ろに動かしてるのを見て、赤は独で勇み出して庭のうちに輪を描いて駈け歩いた。そうしては足で一寸ササキリを引っ返して其髭の動くのを見て又ばらばらと駈け歩いたことがある。聟の文造と畑へ出ることもあった。秋蕎麦の畑には唯一杯に花が白かった。赤は地鼠の通った穴を探し当てたものか蕎麦の中を駈け歩いた。赤の体が触れて蕎麦の花が先へ先へと動いた。暫く経つと赤はすっと後足で蕎麦の花の中から立つ。そうして文造を見つけていきなりばらばらと駈けて来る。鼻先は土で汚れて居る。赤は恐ろしい威勢のいい犬であった。そうして十分に成長した。夜はよく足音を聞きつけて吠えた。昼間でも彼の目には胡乱なものは屹度吠えられた。次の秋のマチが来た。太十は例の如く瞽女の同勢を連れ込んだ。赤は異様な一群を見て忽ちに吠え迫った。瞽女は滑稽な程慌てた。太十は何ということはなく笑った。そうして赤を叱った。赤は甘えて太十に飛びついた。更に又瞽女の一人にも飛びついた。瞽女はきゃっと驚いた。お石は自分の犬がこんなに威勢よく大きくなったのを知って悦んだ。お石は赤を抱こうとして其手を長い舌でぺろぺろと嘗められた。威勢のいい赤は其から幾年間を太十の手に愛育された。太十とお石との情交は移らなかった。お石は顔に小さい皺が見えて来てもう遠から白粉は塗られなかった。盲目の衰え易い盛りの時期は過ぎ去って居るのである。其でも太十の情は依然として深かった。

四

彼がお石を知ってから十九年目、太十が六十の秋である。彼はお石を待ち焦れて居た。其秋のマチにも瞽女は隊を結んで幾らも来た。其頃になってからは瞽女の風俗も余程変って来て居た。幾らか綺麗な若いものは三味線よりも月琴を持って流行唄をうたって歩いた。そうして目明が多くなった。お石は来なかった。それっきり来なくなったのである。太十は落胆した。迷惑したのは家族のものであっ

た。太十は独でぶつぶついって当り散した。村の者の目にも悄然たる彼の姿は映った。悪戯好のものは太十の意を迎えるようにして共に悲んだ容子を見てやった。太十は泣き相になる。それでもお石の噂をされることがせめてもの慰藉である。みんなに揶揄われる度に切ない情がこみあげて来てそうして又胸がせいせいとした。其秋からげっそりと寂しいマチが彼の心に反覆された。威勢のいい赤は依然として太十にじゃれついて居た。太十は数年来西瓜を作ることを継続し来った。彼はマチの小遣を稼ぎ出す工夫であった。それでもそれは単に彼一人の丹精ではなくて婿の文造が能くぶつぶついわれながら使われた。お石が来なくなってから彼は一意唯銭を得ることばかり腐心した。其年は雨が順よく降った。彼はいつでも冬季の間に肥料を拵えて枯らして置くことを怠らなかった。西瓜の粒が大きく成るというので彼は秋のうちに淵の底に蹯いて居る石菖蒲を泥と一つに掻きあげて乾燥して置く。麦の間を一畝ずつあけておいてそこへ西瓜の種を下ろす。畑のめぐりには蜀黍をぎっしり蒔いた。麦が刈られてから日は暑くなる。西瓜の嫩葉は赤蠅が来て甞めてしまうので太十は畑へつききりにしてそれを防いだ。敏捷な赤蠅はけはいを覗って飛び去るので容易に捕ることが出来ない。太十は朝まだ草葉の露のあるうちに灰を挂けて置いたりして培養に意を注いだ。やがて畑一杯に麦蘗が敷かれた。蔓は其上を偃った。蔓の末端は斜に空を向いて快げである。繊巧な模様のような葉のところどころに黄色な花が小さく開く。淡緑色の小さな玉が幾つか麦蘗の上に軽く置かれた。太十は畑の隅に柱を立てて番小屋を造った。屋根は栗幹で葺いて周囲には莚を吊った。いつしか高くなった蜀黍は其広く長い葉が絶えずざわついて稀には秋らしい風を齎した。腹の底まで涼しくする西瓜が太十の畑に転がった。太十は周囲の蜀黍に竹を縛りつけて垣根を造った。日はまだ非常に暑かった。怖る怖る首を擡げた蜀黍の穂がすぐに日に焼けた鳶色に変じ出した。太十は番小屋の穢い蚊帳へ裸でもぐった。西の空に見えた夕月がだんだん大きくなって東の空から蜀黍の垣根に出るようになって畑の西瓜もぐっと蔓を突きあげてどっしりと黄色な臀を据えた。西瓜は指で弾けば濁声を発するようになった。彼はそれを遠い市場に切り出した。昼間は婿の文造に番をさせて自分は天秤を担いで出た。後には馬を曳いて出た。文造はもう四十になった。太十は決して悪人ではないけれどいつも文造を頭ごなしにして居る。昼間のような月が照ってやがて旧暦の盆は来た。太十はいつも番小屋に寝た。赤も屹度番小屋の蔭に足を投げ出して居た。

　或日太十は赤がけたたましく吠えたのを聞いて午睡から醒めた。犬は其あとは吠えなかった。太十はいつでも犬に就いて注意を懈らない。彼はすぐに番小屋を出た。蜀黍の垣根の側に手拭を頬かぶりにした容子の悪い男がのっそりと立って居る。それは犬殺しで帯へ挿した棍棒を今抜こうとする瞬間であった。人なつこい犬は投げられた煎餅に尾

を振りながら犬殺しの足もとに近づいて居たのである。犬殺しは太十の姿を見て一足すさった。
「何すんだ」
太十は思わず呶鳴った。
「殺すのよ」
犬殺しは太いそうして低い声で応じた。
「殺せんなら殺して見ろ」
太十はいきなり犬を引っつるように左手に抱えた。
「見やがれ殺しはぐりあるもんか」
犬殺しは毒ついて行ってしまった。太十の怒った顔は其時恐ろしかった。赤は抱かれて後足をだらりと垂れて首をすっと低くして居た。荒縄で括った麻の空袋を肩から引っ懸けた犬殺しの後姿が見えなくなってから太十は番小屋へもどった。赤は太十の手を離れるとすぐにさっきの処へ駈けていって棄てられた煎餅を嚙った。太十はすぐに喚んだ。赤は長い舌で鼻を舐めながら駈けて来て前足を太十の体へ挂けて攀じのぼるようにしていつものように甘えた。夜になって文造が番小屋へ来た。それは犬殺しが何処かで赤犬の肉を註文されて狙いをつけたのだから屹度殺してやるとそこらで放言して行ったということを知らせる為めであった。文造は心底から大事と思って知らせたのであったが然し此は知らなかった方が却て太十にも犬にも幸であったのである。実際其頃は犬殺しの徘徊すべき時節ではなかった。暑い時には大切な毛皮が役に立たぬばかりでなく肉の保存も出来ないからである。太十はそれを知って居る。そうして肉の註文を受けたことが事実であるとすれば赤は到底助かれないと信じた。赤犬の肉は黴毒の患者に著しい効験があると一般に信ぜられて居るのである。太十は酷く其胸を焦した。

五

次の日に懇意な一人が太十の畑をおとずれた。彼は能く来た。そうして噺が興に乗じて来る時不器用に割った西瓜が彼等の間に置かれるのである。白い部分まで歯の跡のついた西瓜の皮が番小屋の外へ投げられた。太十は指で弾いて見て此は甘いと自慢をいいながらもいで来ることもあった。暑い日に照られて半分は熱い西瓜でもすぐに割られるのであった。太十の鬱いで居る容子は対手にもわかった。
「おっつあんどうかしやしめえ」
対手は聞いた。太十は少時黙って居たが
「いっそのこと殺しっちまあべと思ってよ」
ぶっきら棒にいった。
「何よ」
と対手はいった。然しそれが余り突然なので対手はいつものように揶揄って見たくなった。
「まさか俺がこっちゃあるめえな」
とすぐにつけ足した。

「どうせ犬殺しの手にかけるなら自分でやっちまった方がいいと思って……」
太十は口をしがめた。
「それじゃ、おっつあん赤か、どうしたんでえまあ」
太十は犬殺しの噺をした。対手の心裏にふとそれを殺してやろうという念慮が湧いた。其肉を食おうと思ったのである。赤犬の肉は佳味いといわれて居る。それも他人の犬であったらそういう念慮も起らなかったであろうが、衷心非常な苦悩を有して居れば居る程太十の態度が可笑しいので罪のない悪い料簡がどうかすると人々の心に萠すのであった。
「殺しちまあ」
太十がいった其声は顫えて居た。犬の身に起った不幸な出来事は薄弱な太十の心を掻き乱して畢った。彼は殺すと口には断言した。然し彼の意識しない愛惜と不安とが対手に愬訴するように其声を顫わせた。殺すなといえばすぐ心が落ち付いて唯其犬が不便になったのである。然し対手は太十の心には無頓着である。
「おっつあん殺すのか」
斯ういう不謹慎ないいようは余計に太十を惑わした。
「そうよな」
と太十は首をかしげた。
「どうせ駄目だから殺しっちまあべ」
威勢よくいった。そうかと思うと暫らく沈黙に耽って居る。
「殺した方あよかんべな」
投げ出したように低い声でいった。其処には対手に縋って留めてくれという意味もあった。だが殺すなという声は太十の耳に響かなかった。
「それじゃ思い切ってやっちまあんだな。どうせ見こまれちゃ駄目だからな。おっつあんそうするんだな」
太十は返辞をしなかった。然し彼の薄弱な心は大きな石で圧えつけられたように且つ釘付にされたように、彼の心の底にはそれが又厭であったけれどそうしっかと極められて畢った。彼の心は劇しく動揺して且つ困憊した。
「それじゃ三次でも連れて来べえ」
対手は去った。太十は一隅を外した蚊帳へもぐった。蚊帳の外には足が投げ出してあった。蛔が足へたかっても動かなかった。犬は蔭の湿った土に腹を冷して長くなって居た。二人は来た。三次は左の手を赤の腹へ当ててそっとあげた。後足は土について居る。赤はすっと首を低くしていつもの甘えた容子をした。犬には荒縄が斜にかけられた。犬は驚いてひいひいと悲愴な声を立てた。三次が手を放した時犬は四つ足を屈めて地を偃うように首を垂れて身を竪めた。そうして盗むように白い眼で三次を見た。犬がひいひい鳴いた時太十はむっくり起きた。彼の神経は過敏になって居た。
「おっつあん」

と先刻の対手が喚びかけた。太十はまたごろりとなった。
「おっつあん縛ったぞ」
三次の声で呶鳴った。
「いいから此れ引っこ抜くべ」
という低い声が続いて聞えた。
「おっつあん此のタンボク引っこぬくかんな」
其声が太十の耳に強く響いた。然し彼は黙って居た。二人は蜀黍の垣根に打ちこんであった棒を抜いた。三次は握って居た荒縄をぐっと曳くと犬は更に大地へしがみついたように身を蹙めた。三次が棒を翳した時縄は切れそうにぴんと吊った。其の瞬間棒はぽくりと犬の頭部を撲った。犬は首を投げた。口からは泡を吹いて後足がぶるぶると顫えた。そうして一声も鳴かなかった。
「おっつあん、うまくいっちゃった」
と先刻の対手は釣してある蓆から首を突っ込んだ。蚊帳の中は動かない。彼は太十の蚊帳をまくった。太十は凝然と目をしかめて居る。
「おっつあん、ありゃどうしたもんだんべな」
「埋めてやってくろえ」
太十はやっとそれだけいった。
「それもそうだがな、片身に皮だけはとって置いたらどうしたもんだ」
「どうでも仕てくろえ」
蚊帳の中は依然として動かなかった。二人は用意して来た出刃で毛皮を剝きはじめた。出刃が喉から腹の中央を過ぎて走った。ぐったりとなった憐れな赤犬は熟睡した小児が母の手に衣物を脱がされるように四つの足からそうして背部へと皮がむかれた。致命の打撲傷を受けた頸のあたりはもう黒く血が凝って居た。裸にされた犬は白い歯を食いしばって目がぎろぎろとして居た。毛皮は尾からぐるぐると巻いて荒縄で括られた。そうして番小屋の日南に置かれた。太十は起きた。毛皮は耳がつんと立って丁度小さな犬が蹲って居るように見える。太十はそれが酷く不憫に見えた。彼は愁然として毛皮を手に提げて見た。
「おっつあん可哀想になったか」
と二人はいった。
「それじゃあとはおらが始末すっからな」
棒をそこへ投げ棄てて二人は去った。血は麦藁の上にたれて居た。三次の手には荒縄で括った犬の死骸があった。太十はあとでぽさぽさとして居た。彼は毛皮を披いて見て居た。彼は思いついたように自分の家に走って木の板と鉈とを持って来た。蜀黍の垣根に括った竹の端を伐って釘を造ってそうして毛皮を其板へ貼りつけた。悲しい一日が太十の番小屋に暮れた。其夜彼は眠れなかった。妄念が止まず湧いて彼を悩ました。うとうとして居ると赤が吠えながら駈け出したように思われてはっと眼が醒めたり、鍋の破片へまけてやった味噌汁をぴしゃぴしゃと嘗めて居る音が聞えるように思われたり、自分の寝て居る床の下に赤が眠

って居るように思われたりしてならなかった。彼は更に次の日の夕方生来嘗てない憤怒と悲痛と悔恨の情を溺かした。それは赤が死んだ日に例の犬殺しが隣の村で赤犬を殺して其飼主と村民の為に夥しくさいなまれて、再び此地に足踏みせぬという誓約のもとに放たれたということを聞いたからである。彼は其夜も眠らなかった。一剋である外に欠点はない彼は正直で勤勉でそうして平穏な生涯を継続して来た。殊に瞽女を知ってからというもの彼は彼の感ずる程度に於て歓楽に酔うて居た。二十年の歓楽から急転し彼は備さに其哀愁を味わねばならなくなった。一大惨劇は相尋いで起った。

六、

夜毎に月の出は遅くなった。太十は精神の疲労から其夜うとうととなった。悪戯な村の若い衆が四五人其頃の闇を幸に太十の西瓜を盗もうと謀った。太十の西瓜はこれまで一つも盗まれなかったのである。彼等の手筈はこうであった。二三人は昼間見ておいた西瓜をひっ抱えてすぐ逃げる。他のものは態と太十を起して蚊帳の釣手を切って後から逃げるというのであった。太十は其夜喚んでも容易に返辞がなかった。それ故そういう悪戯さえしなかったならば翌日ただ太十の怒った顔を発見するに過ぎなかったのである。盗んだ西瓜は遥かに隔った路傍の草の中で割られた。

彼等は膝へ打ちつけて割った。そうして指の先で刳っては食った。水分があとに残って滓ばかりになっても彼等は頓着せぬ。彼等には西瓜の味よりも寧ろうまく盗んだことが愉快に思われるのである。こうして汚れた西瓜の無残な形骸が処々の草の中に発見されるのである。西瓜がなくなって雑談に耽りはじめた時

「あれ」

と一人が喫驚したようにいった。

「どうした」

「何だ」

罪を犯した彼等は等しく耳を欹てた。其一人は頻りに帯のあたりを探って居る。

「何だ」

「どうした」

他のものは又等しく折返して聞いた。

「銭入どうかしっちゃった」

其の声はいたく慌てて居た。

「あれ落っことしちゃ大変だ、何処へなくしたっけかな」

倘幾度かそこらを闇にすかしても見た。然しそこらにそれが落ちて居る理由がなかった。彼等は其夜其まま別れて畢えばまだまだ事は惹き起されなかったのである。彼は家に帰れば直ちにそれを発見したのである。彼は忘れて出たのである。其夜彼等が会合したのは全く悪戯のためであった。悪戯は更に彼等の仲間にも行われざるを得なかった。

「そりゃ畑へ落して来たぞ」
他の一人がいった。
「どこらだんべ」
落したと思った一人は熱心に聞いた。
「西から三番目の畝だ、おめえが大きいのを抱えた時ちゃらんと音がしたっけが其時は気がつかなかったがあれに相違ねえぞ、こっそり行って探して見ろ」
太十が復た眠に就いたと思う頃其一人は三番目の畝を志して蜀黍の垣根をそっと破ってはいった。他のものは垣根の外でひそひそと笑いながら見て居た。蚊帳にくるまった彼は眠れない。自分にも聞かれる程波打った動悸が五分十分と経つうちにだんだん低くなって彼は漸く忌々しさを意識した。そうして彼は西瓜は赤が居ないから盗まれたと考えた。赤が生きて居たら屹度吠えたに相違ないと思った。そうして彼は赤を殺して畢ったことが心外で胸が一しきり一杯にこみあげて来た。彼は強いて眼を瞑った。威勢がよくて人なつこかった赤の動作がそれからそれと目に映って仕方がない。赤がいつものようにぴしゃぴしゃと飯へかけてやった味噌汁を甞める音が耳にはいったり、床の下でくんくんと鼻を鳴らして居るように思われたり、それにむかむかと迫って来る暑さに攻められたりして彼は只管懊悩した。遠くの方で犬の吠えるのが聞える。それがひどく彼の耳を刺戟する。そうかと思うと蜀黍の垣根の蔭に棍棒へ手を挂けて立って居る犬殺がまざまざと目に見える。彼は相の悪い犬殺しが釣した蓆の間から覗くように思われて戦慄した。彼は目を開いた。柱に懸けたともし灯が薄らに光って居る。彼は風を厭うともし灯を若木の桐の大きな葉で包んだ。カンテラの光が透して桐の葉は凄い程青く見えて居る。其の青い中にぽっちりと見えるカンテラの焔が微かに動き乍ら蚊帳を覗て居る。ともし灯を慕うて桐の葉にとまった轡虫が髭を動かしながらがじゃがじゃと太十の心を乱した。太十は煙草を吸おうと思って蚊帳の中に起きた。蜀黍が少しがさがさと鳴るように聞えた。太十は蚊帳を透して見た。其時月はすべてが熟睡した頃とこっそり姿を現わしかけて居た。畑がほのかに明るくなりかけた。太十は動くものを認めた。彼の怒は彼の全心を掩うた。彼は後の方からそっと蚊帳を出た。尚前方を注視しつつ草履を穿くだけの余裕が其時彼の心に存在した。彼は蓆を押して外へ出た。棍棒が彼の足に触れた。彼はすぐにそれを手にした。そうしていきなり盗人に迫った。其時は既に盗ではなかった其不幸な青年は急遽其蜀黍の垣根を破って出た。体は隣の桑畑へ倒れた。太十は一歩境を越して打ち据えた。其第一撃が右の腕を斜に撲った。第二撃が其後頭を撲った。それがそこに何も支うるものがなかったならば怪我人は即死した筈である。棍棒は繁茂した桑の枝を伝いて其根株に止った。更に第三の搏撃が加えられた。そうして赤犬を撲殺した其棍棒は折れた。悪戯の犠牲になった怪我人は絶息し

たまま仲間の為めに其の家へ運ばれた。太十は其夜も眠らなかった。彼は疲労した。

七

怪我人は蘇生した。続いて脳振盪を起した。其家族は太十を告訴すると息巻いた。其間には人が立った。太十の姻戚も聚って見たが怪我人の倒れた側に太十の強く踏んだ足跡と其草履とがあったので到底逃げる処を打ったという事実の分疎は立たぬというのを聞いて皆悄れて畢った。其内怪我人の危険状態は経過した。然し全治までには長い時間を要すると医師は診断した。告訴を受ければ太十は監獄署の門をくぐらねばならぬと思って居る。彼はどれ程警察署や監獄署に恐怖の念を懐いたろう。彼はそれからげっそり窶れて唯とぼとぼとした。事件は内済にするには彼の負担としては過大な治療金を払わねばならぬ。姻戚のものとも諮って家を掩いかぶせた其の竹や欅を伐ることにした。彼は監獄署へ曳かれるのは身を斬られるよりもつらかった。竹でも欅でも何でも惜しくないと彼は思った。だが其頃はまだ竹や木を伐採するには季節が早過ぎたのと一つは彼の足もとをつけ込む商人の値段は皆廉かった。有繋に彼も躊躇した。恐怖心が湧起した時には彼には惜しい何物もなかった。それで居て彼は蚊帳の釣手を切って愚弄されたことや何ということはなしに只心外で堪らなくなる。商人は太十に勧めた。太十はそれが余りに廉いと思うとぐっと胸がこみあげて

「構わねえ、おら伐らねえ」

と呶鳴った。

「おれが死んじまったらどうも出来めえ」

と更に彼は自暴自棄にこういうようになった。唯一人でも衷心慰藉するものがあれば彼は救われた。習慣はすべての心を麻痺した。人は彼に揶揄うことを止めなかった。そうして彼の恐怖心を助長し且つ惑乱した。彼は全く孤立した。

　其日は朝から焦げるように暑かった。太十は草刈鎌を研ぎすましてまだ幾らもなって居る西瓜の蔓をみんな掻っ切って畢った。そうして壻の文造に麦藁から蔓から深く掘り込んでうなわせた。文造はじりじり日に照りつけられながら、時節でもない畑をうなった。太十には西瓜畑が見ることさえ堪えられなかった。彼は物狂おしくなった。彼は鎌をぶつりと番小屋の屋根へ打ち込んだ。薄い屋根を透して鎌の刄先は牙の如く光った。彼は蚊帳へもぐってごろりと横になって絶望的に唸った。文造は止めず鍬を振って居る。其暑い頂点を過ぎて日が稍斜になりかけた頃、俗に三把稲と称する西北の空から怪獣の頭の如き黒雲がむらむらと村の林の極から突き上げて来た。三把稲というのは其方向から雷鳴を聞くと稲三把刈る間に夕立になるといわれて居るのである。雲は太く且つ広く空を掩うて一直線に進ん

で来る。閃光を放ちながら雷鳴が殷々として遠く聞こえはじめた。東南の空際にも柱の如き雲が相応じて立った。文造は此の気象の激変に伴う現象を怖れた。彼は番小屋へ駈け込んで太十を喚んだ。太十は死んだようになって居る。

「北の方はひでぇケイマクだ、おっつあん遁げたらよかねえか」

「うるせえな」

太十は僅にこういった。彼は精神の疲労から迚ても動く気になれなかった。雲は地上に近く掩いかぶさってあたりが薄暮の如く闇くなった。頬白は塒を求めて慌ててさまよった。冷気を含んだ疾風がごうと蜀黍の葉をゆすって来た。遠く夕立の響が聞えて来た。文造は堪らなくなった。彼は鍬を担いで飛び出した。それと同時に屋根へ打ち込んだ鎌の切先が文造の額に触れた。はっと押えた時文造の手の平は赤くなった。犬の血に尋いで更に文造の血が番小屋に灑がれた。雨の大きな粒がまばらに蜀黍の葉を打って来た。霧の如く白雨の脚が軟弱な稲を蹴返し蹴返し迫って来た。田甫を渡って文造はひた走りに走った。夕立がどっと来た。黄褐色の濁水が滾々として押し流された。更に強く更に烈しく打ちつける雨が其氾濫せる水の上に無数の口を開かしめる。忙しく泡を飛ばして其無数の口が囁く。そうして更に無数の囁が騒然として空間に満ちる。電光が針金の如き白熱の一曲線を空際に閃かすと共に雷鳴は一大破壊の音響を齎して凡ての生物を震撼する。穹窿の如き蒼天は一大玻璃器である。熾烈な日光が之を熱して更に熱する時、冷却せる雨水の注射に因って、一大破裂を来したかと想う雷鳴は、ぱりぱりと乾燥した音響を無辺際に伝いて、罅て其玻璃器の大破片が落下したかと思われる音響が、ずしんと大地をゆるがして更にどろどろと遠く消散する。雨は飛散する玻璃の粉末の如く空間に漲って電光に輝く。熾烈な日光が更に其大玻璃器の破れ目に煌くかと想う白熱の電光が止まず閃いて、雷は鳴りに鳴って雨は降りに降った。そうしてからりと晴れた時、日はまだ西の山の上に休んで閉塞し困憊せる地上の総てを笑って居た。文造が畑に来た時いつも遠くから見えた番小屋の屋根はなかった。小屋は焼けて居た。四本の柱は焦げた儘地に立って居た。其他は灰になって湿って居た。家族のものが駈けつけて夕日の光に灰を掻き分けた時、仰向になった儘爛れた太十の姿を発見した。有繋に雷鳴を恐れたと見えて両手は耳を掩うて居た。屋根の裏に白い牙をむいた鎌が或は電気を誘うたのであったろうか、小屋は雷火に焼けたのである。小屋に火の附いた時はもう太十は何等の苦痛もなく死んで居た筈である。たった一人野らに居た一剋者の太十はこうして僅かの間に彼の精神力は消耗した。更に大自然の威力は気象の激変を駆って眇たる彼の恐怖心に強烈なる圧迫を加えた。同時に其単純な生涯から葬り去った。犬の毛皮を貼った板は俯向に倒れて居た。そうして板の裏が僅かに焦げて居た。

（一九一〇年二月「ホトトギス」）

かんかん虫

有島武郎

ドゥニパー湾の水は、照り続く八月の熱で煮え立って、総ての濁った複色の彩(いろ)は影を潜め、モネーの画に見る様な、強烈な単色ばかりが、海と空と船と人とを、めまぐるしい迄にあざやかに染めて、其の総てを真夏の光が、押し包む様に射して居る。丁度昼弁当時で太陽は最頂、物の影が煎りつく様に小さく濃く、それを見てすらぎらぎらと眼が痛む程の暑さであった。

　私は弁当を仕舞ってから、荷船オデッサ丸の舷にぴったりと繋ってある大運搬船(おおだるま)の舷に、一人の仲間と並んで、海に向って坐って居た。仲間と云おうか親分と云おうか、兎に角私が一週間前此処に来てからの知合いである。彼の名はヤコフ・イリイッチと云って、身体の出来が人並外れて大きい、容貌は謂わばカザン寺院の縁日で売る火難盗賊除けのペテロの画像見た様で、太い眉の下に上瞼の一直線になった大きな眼が二つ。それに挾まれて、不規則な小亜細亜特有な鋭からぬ鼻。大きな稍々しまりのない口の周囲には、小児の産毛の様な髯が生い茂って居る。下腭の大きな、顴骨の高い、耳と額との勝れて小さい、譬えて見れば、古道具屋の店頭の様な感じのする、調和の外ずれた面構えであるが、それが不思議にも一種の吸引力を持って居る。

　丁度私が其の不調和なヤコフ・イリイッチの面構えから眼を外らして、手近な海を見下しながら、草の緑の水が徐ろに高くなり低くなり、黒ペンキの半分剝げた吃水を嘗めて、ちゃぶりちゃぶりとやるのが、何かエジプト人でも奏で相な、階律(リズム)の単調な音楽を聞く様だと思って居ると、

　睡いのか。

　とヤコフ・イリイッチが呼びかけたので、顔を上げる調子に見交わした。彼に見られる度に、私は反抗心が刺戟される様な、それで居て如何にも抵抗の出来ない様な、一種の圧迫を感じて、厭な気になるが、其の眼には確かに強く人を牽きつける力を籠めて居る。「豹の眼だ」と此の時も思ったのである。

　私が向き直ると、ヤコフ・イリイッチは一寸苦がい顔をして、汗ばんだだぶだぶな印度藍のズボンを摘まんで、膝頭を撥(は)きながら、突然こう云い出した。

　おい、船の胴腹にたかって、かんかんと敲くからかんかんよ、それは解(げ)せる、それは解せるがかんかん虫、虫たあ何んだ……出来損なったって人間様は人間様だろう、人面

白くも無えけちをつけやがって。
而して又連絡もなく、
　お前っちは字を読むだろう。
と云って私の返事には頓着なく、
　ふむ読む、明盲の眼じゃ無えと思った。乙う小ましゃっくれてけっからあ。
　何をして居た、旧来は。
　と厳重な調子で開き直って来た。私は、ヴォルガ河で船乗りの生活をして、其の間に字を読む事を覚えた事や、カザンで麺麭焼の弟子になって、主人と喧嘩をして、其の細君にひどい復讐をして、とうとう此処まで落ち延びた次第を包まず物語った。ヤコフ・イリイッチの前では、彼に関した事でない限り、何もかも打明ける方が得策だと云う心持を起させられたからだ。彼は始めの中こそ一寸熱心に聴いて居たが、忽ちうるさ相な顔で、私の口の開いたり閉じたりするのを眺めて、仕舞には我慢がしきれな相に、私の言葉を奪ってこう云った。
　探偵でせえ無けりゃそれで好いんだ、馬鹿正直。
而して暫くしてから、
　だが虫かも知れ無え。こう見ねえ、斯うやって這いずって居る蛔を見て居ると、己れっちよりゃ些度計り甘めえ汁を啜めているらしいや。暑さにもめげずにぴんぴんしたものだ。黒茶にレモン一片入れて飲め無えじゃ、人間って名は附けられ無えかも知れ無えや。
　昨夕もよ、空腹を抱えて対岸のアレシキに行って見るとダビドカの野郎に遇った。懐をあたるとあるから貸せと云ったら渋ってけっかる。いまいましい、腕づくでもぎ取ってくれようとすると「オオ神様泥棒が」って、殉教者の様な真似をしやあがる。擦った揉んだの最中に巡的だ、四角四面な面あしやがって「貴様は何んだ」と放言くから「虫」だと言ってくれたのよ。
　え、どうだ、すると貴様は虫で無えと云う御談義だ。あの手合はあんな事さえ云ってりゃ、飯が食えて行くんだと見えらあ。物の小半時も聞かされちゃ、噛み殺して居た欠伸の御葬いが鼻の孔から続け様に出やがらあな。業腹だから斯う云ってくれた——待てよ斯う云ったんだ。
「旦那、お前さん手合は余り虫が宜過ぎまさあ。日頃は虫あつかいに、碌々食うものも食わせ無えで置いて、そんなら って虫の様に立廻れば矢張り人間だと仰しゃる。己れっちらの境涯では、四辻に突っ立って、警部が来ると手を挙げたり、娘が通ると尻を横目で睨んだりして、一日三界お目出度い顔をしてござる様な、そんな呑気な真似は出来ません。赤眼のシムソンの様に、がむしゃに働いて食う外は無え。偶にゃ少し位荒っぽく働いたって、そりゃ仕方が無えや、そうでしょう」ってやると、旦那の野郎が真赤になって怒り出しやがった。もう口じゃまどろっこしい、眼の廻る様な奴を鼻梁にがんとくれて逃んだのよ。何もさ、そう怒るがものは無えんだ。巡的だってあの大きな図体じ

や、飯もうんと食うだろうし、女もほしかろう。「お前もか。己れもやっぱりお前と同じ先祖はアダムだよ」とか何とか云って見ろ。己れだって粗忽な真似はし無えで、兄弟とか相棒とか云って、皮のひんむける位えにゃ手でも握って、祝福の一つ二つはやってやる所だったんだ。誓言そうして見せるんだった。それをお前帽子に喰着けた金ぴかの手前、芝居をしやがって……え、芝居をしやがったんた。己れにゃ芝居ってやつが妙に打て無え。

　気心でかヤコフ・イリイッチの声がふと淋しくなったと思ったので、振向いて見ると彼は正面を向いて居た。波の反射が陽炎の様にてらてらと顔から半白の頭を嘗めるので、うるさ相に眼をかすめながら、向うの白く光った人造石の石垣に囲まれたセミオン会社の船渠(ドック)を見やって居る。自分も彼の視線を辿った。近くでは、日の黄を交えて草緑なのが、遠く見透すと、印度藍を濃く一刷毛横になすった様な海の色で、それ丈けを引き放したら、寒い感じを起すにちがいないのが、堪え切れぬ程暑く思える。殊にケルソン市の岸に立ち並んだ例のセミオン船渠(ドック)や、其の外雑多な工場のこちたい赤青白等の色と、眩るしい対照を為して、突っ立った煙突から、白い細い煙が喘ぐ様に真青な空に昇るのを見て居ると、遠くが霞んで居るのか、眼が霞み始めたのかわからなくなる。

　ヤコフ・イリイッチはそうしたままで暫く黙って居たが、内部からの或る力の圧迫にでも促された様に、急に「うん、そうだ」と独言を云って、又其の奇怪な流暢な口辞を振い始めた。

　処が世の中は芝居で固めてあるんだ。右の手で金を出すてえと、屹度左の手は物を盗(くす)ねて居やあがる。両手で金を出すてえ奴は居無え、両手で物を盗ねる奴も居無えや。余っ程こんがらかって出来て居やあがる。神様って獣は——獣だろうじゃ無えか。人じゃ無えって云うんだから、まさか己れっち見てえな虫でもあるめえ、全くだ。

　何、此の間スタニスラフの尼寺から二人尼っちょが来たんだ。野郎が有難い事を云ったってかんかん虫手合いは鼾をかくばかりで全然(からっきし)補足(たし)になら無えってんで、工場長開けた事を思いつきやがった、女ならよかろうてんだとよ。

　二人来やがった。例の御説教だ集まれてんで、三号の倉庫に狼が羊の檻の中に逐い込まれた様だった。其の中に小羊が二匹来やがった。一人は金縁の眼鏡が鼻の上で光らあ。狼の野郎共は何んの事はねえ、舌なめずりをして喉をぐびつかせたのよ。其の一人が、神様は獣だ……何ね、獣だとは云わ無えさ、云わ無えが人じゃ無えと云ったんだ。

　其の神様ってえのが人間を創って魂を入れたとある。魂があって見れば善と悪とは……何んとか云った、善と悪とは……何んとかだとよ。そうして見ると善はするがいいし、悪はしちゃなら無え。それが出来なけりゃ、此の姿婆に生れて来て居ても、人間じゃ無えと云うんだ。

　お前っちは字を読むからには判るだろう。人間で善をし

て居る奴があるかい。馬鹿野郎、ばちあたり。旨い汁を嘗めっこをして居やがって、食い余しを取っとき物の様に、お次ぎへお次ぎへと廻して居りゃ、それで人間かい。畢竟芝居上手が人間で、己れっち見たいな不器用者は虫なんだ。

見ねえ、死って仕舞やがった。

何処からか枯れた小枝が漂って、自分等の足許に来たのをヤコフ・イリイッチは話しながら、私は聞きながら共に眺めて、其の上に居る一匹の甲虫に眼をつけて居たのであったが、舷に当る波が折れ返る調子に、くるりとさらったので、彼が云う様に憐れな甲虫は水に陥って、油をかけた緑玉の様な雙の翅を無上に振い動かしながら、絶大な海の力に対して、余り悲惨な抵抗を試みて居るのであった。

私は依然波の間に点を為して見ゆる其の甲虫を、悲惨な思いをして眺めている。ヤコフ・イリイッチは忘れた様に船渠の方を見遣って居る。

話柄が途切れて閑とすると、暑さが身に沁みて、かんかん日のあたる胴の間に、折り重なっていぎたなく寝そべった労働者の鼾が聞こえた。

ヤコフ・イリイッチは徐ろに後ろを向いて、眠れる一群に眼をやると、振り返って私を腭でしゃくった。

見ろい、イフヒムの奴を。知ってるか、「癇癪玉」ってんだ綽名が――知ってるか彼奴を。

さすがに声が小さくなる。

イフヒムと云うのはコンスタンチノープルから輸入する巻煙草の大箱を積み重ねた蔭に他の労働者から少し離れて、上向きに寝て居る小男であった。何しろケルソン市だけでも五百人から居る所謂かんかん虫の事であるから、縦令市の隅から隅へと漂泊して歩いた私でも、一週間では彼等の五分の一も親交にはなって居なかったが、独りイフヒムは妙に私の注意を聳やかした一人であった。唯一様の色彩と動作との中にうようよと甲板の掃除をして居る時でも、船艙の板囲いにずらっと列んで、尻をついて休んで居る時でも、イフヒムの姿だけは、一団の労働者から浮き上った様に、際立って見えた。ぎりっと私を見据えて居るものがあると思って振り向くと、屹度イフヒムの大きな夢でも見て居る様な眼にぶつかったものである。あの眼ならショパンの顔に着けても似合うだろうと、そう思った事もある。然しまだ一遍も言葉を交えた事がない。私は其の旨を答えようとするとヤコフ・イリイッチは例の頓着なく話頭を進めて居る。

かんかん虫手合いで恐がられが己れでよ、太腐れが彼奴だ。

彼奴も字は読ま無えがね。

あの野郎が二三年以来カチヤと訳があったのを知って居た。知っては居たがそれが何うなるものかお前、イフヒムは見た通りの裸一貫だろう。何一つ腕に覚えがあるじゃなし、人の隙を窺って、鈎の先で船室小盗でもするのが関の

山だ。何うなるものか。女って獣は栄耀栄華で暮そうと云う外には、何一つ慾の無え獣だ。成程一とわたりは男選みもしようし、気前惚れもしようさ。だがそれも金があって飯が食えて、べらっとしたものでもひっかけられた上の話だ。真っ裸にして日干し上げて見ろ、女が一等先きに目を着けるのは、気前でもなけりゃ、男振りでも無え、金だ。何うも女ってものは老者の再生だぜ。若死したものが生れ代ると男になって、老耄が生れ代ると業で女になるんだ。あり相で居て、色気と決断は全然無しよ、あるものは慾気ばかりだ。私は思わずほほ笑ませられた。ヤコフ・イリイッチを見ると彼は大真面目である。

又親ってものがお前不思議だってえのは、娘を持つと矢っ張りそんな気にならあ。己れにした処がまあカチヤには何よりべらべらしたものを着せて、頬っぺたの肉が好い色になるものでも食わせて、通りすがりの奴等が何処の御新造だろう位の事を云って振り向く様にしてくれりゃ、宿六はちっとやそっとへし曲って居ても構わ無えと思う様になるんだ。

それでもイフヒムとカチヤが水入らずになれ合って居た間は、己れだって口を出すがものは無え、黙って居たのよ。すると不図娘の奴が妙に鬱ぎ出しやがった。鬱ぐもおかしい、そう仰山なんじゃ無えが、何かこう頭の中で円い玉でもぐるぐる廻して見て居る様な面付をして居やあがる。変だなと思ってる中に、一週間もすると、奴の身の周りが追々綺麗になるんだ。晩飯でも食って出懸ける所を見ると、お前、頭にお前、造花なんぞ挿して居やあがる。何処からか指輪が来ると云うあんばいで、仕事も休みがちで遊びまわるんだ。偶にゃ大層も無え。お袋に土産なんぞ持って来やあがる。イフヒムといがみ合った様な噂もちょくちょく聞くから、貢ぐのは野郎じゃ無くって、これはてっきり外に出来たなとそう思ったんだ。そんなあんばいで半年も経った頃、藪から棒に会計のグリゴリー・ペトニコフが人を入れて、カチヤを囲いたい、話に乗ってくれと斯うだ。

之れで読めた、読めは読めたが、思わく違いに当惑いた。全くまごつくじゃ無えか。

虫の娘を人間が欲しいと云って来やがったんだ。

じりじりと板挟みにする様に照り付けて居た暑さがひるみそめて、何処を逃れて来たのか、涼しい風がシャツの汗ばんだ処々を撫でて通った。

其の晩だ、寝ずに考えたってえのは。

己れが考えたなんちゃ可笑しかろう。

可笑しくば神様ってえのを笑いねえ。考えの無え筈の虫でも考える時があるんだ。何を考えたってお前、己ら手合いは人間様の様に智慧がありあまんじゃ無えから、けちな事にも頭を痛めるんだ。話がよ、何うしてくれようと思ったんだ。娘の奴をイフヒムの前に突っ放して、勝手にしろと云ってくれようか。それともカチヤを餌に、人間の食う

ものも食わ無えで溜めた黄色い奴を、思うざま剝奪くってくれようか。虫っけらは何処までも虫っけらで押し通して、人間の鼻をあかさして見てえし、先刻も云った通り、親ってえものは意気地が無え、娘丈けは人間並みにして見てえと思うんだ。

おい、「空の空なるかな総て空なり」って諺があるだろう。旨めえ事を云いやがったもんだ。己れや其の晩妙に臉が合わ無えで、頭ばかりがんがんとほてって来るんだ。何の事は無え暗闇と睨めっくらをしながら、窓の向うを見て居ると、不図星が一つ見え出しやがった。それが又馬鹿に気になって見詰めて居ると、段々西に廻ってとうとう見えなくなったんで、思わず溜息ってものが出たのも其の晩だ。いまいましいと思ったのよ。

そうしたあんばいでもじもじする中に暁方近くなる。夢も見た事の無え己れにゃ、一晩中ぽかんと眼球をむいて居る苦しみったら無えや。何うしてくれようと思案の果てに、御方便なもんで、思い出したのが今云った諺だ。「空の空なるかな総て空なり」「空なるかな」が甘めえ。

神符でも利いた様に胸が透いたんで、ぐっすり寝込んで仕舞った。

おい、も少し其方い寄んねえ、己れやまるで日向に出ちゃった。

其の翌日嚊とカチヤとを眼の前に置いて、己れや云って聞かしたんだ。「空の空なるかな総て空なり」って事があるだろう、解ったら今日から会計の野郎の妾になれ。イフヒムの方は己れが引き受けた。イフヒムが何うなるもんか、それよりも人間に食い込んで行け。食い込んで思うさま甘めえ御馳走にありつくんだてったんだ。そうだろう、早い話がそうじゃ無えか。

処がお前、カチヤの奴は鼻の先きで笑ってけっからあ。一体がお前此の話ってものは、カチヤが首石になって持出したものなんだ。彼奴と来ちゃ全く二まわりも三まわりも己の上手だ。

お前は見無えか知ら無えが、一と眼見ろ、カチヤって奴はそう行く筈の女なんだ。厚い胸で、大きな腰で、腕ったら斯うだ。

と云いながら彼は、両手の食指と拇指とを繋ぎ合わせて大きな輪を作って見せた。

面相だってお前、己れっちの娘だ。お姫様の様なのは出来る筈は無えが、胆が太てえんだからあの大かい眼で見据えて見ねえ、男の心はびりびりっと震え込んで一たまりも無えに極まって居らあ。そりゃ彼奴だってイフヒムに気の無え訳じゃ無えんだが、其処が阿魔だ。矢張り老耄の生れ代りなんだ。当世向きに出来て居やあがる。

そんな訳で話も何も他愛なく纒まっちゃって、己れのこね上げた腸詰はグリゴリー・ペトニコフの皿の上に乗っかったのよ。

それ迄はいい、それ迄は難は無えんだが、それから三日

許り経つと、イフヒムの野郎が颶風の様に駆け込で来やがった。

「イフヒムの野郎」と云った時、ヤコフ・イリイッチは再び胴の間を見返った。話がはずんで思わず募った癇高な声が、もう一度押しつぶされて最低音になる。気が付いて見ると又日影が移って、彼は半身日の中に坐って居るので、私は黙ったまま座を譲ったが、彼は動こうとはしなかった。船員が食うのであろう、馬鈴薯と塩肉とをバタで揚げる香いが、蒸暑く二人に逼った。

海は依然として、ちゃぶりちゃぶりと階律を合せて居る。ヤコフ・イリイッチはもう一度イフヒムを振り返って見ながら、押しつぶした儘の声で、

見ろい、あの切目の長げえ眼をぎろっとむいて、其奴が血走って、からっきし狂人見てえだった。筋が吊ったか舌も廻ら無え、「何んだってカチヤを出した」と固唾をのみながらぬかしやがる。

「出したいから出した迄だ、別に所以のある筈は無え。親が己れの阿魔を、救主に奉ろうが、ユダに嫁にやろうが、お前っちの世話には相成ら無え。些度物には理解を附けねえ。当世は金のある所に玉がよるんだ。それが当世って云うんだ。館棒奴、娘が可愛ければこそ、己れだってこんな仕儀はする。あれ程の容色にべらべらしたものでも着せて見たいが親の人情だ。誠カチヤを女房にしたけりゃ、金の耳を揃えて買いに来う。それが出来ざあ腕っこきでグリゴリー・ペトニコフから取り返しねえ。カチヤだって呼吸もすりゃ飯も喰う、ぽかんと遊ばしちゃおかれ無えんだから……お前っちゃ一体何んだって、そんな太腐れた眼付きをして居やあがるんだ」

とほざいてくれると、イフヒムの野郎じっと考えて居やがったけが、

と語を切ってヤコフ・イリイッチは雙手で身を浮かしながら、先刻私が譲った座に移って、ひたひたと自分に近づいた。乾きかけたオヴァオールから酸っぱい汗の臭いが蒸れ立って何とも云えぬ。

云うにゃ、

と更に声を低くした時、私は云うに云われぬ一種の恐ろしい期待を胸に感じて心を騒がさずには居られなかった。ヤコフ・イリイッチは更めて周囲を見廻わして、

気の早い野郎だ……宜いか、是れからが話だよ、……イフヒムの云うにゃ其の人間って獣にしみじみ愛想が尽きたと云うんだ。人間って奴は何んの事は無え、贅沢三昧をして生れて来やがって、不足の云い様は無い筈なのに、物好きにも事を欠いて、虫手合いの内懐まで手を入れやがる。何が面白くって今日今日を暮して居るんだ。虫って云われて居ながら、それでも偶にゃ気儘な夢でも、見ればこそじゃ無えか……畜生。

ヤコフ・イリイッチはイフヒムの言った事を繰返して居るのか、己れの感慨を漏らすのか解らぬ程、熱烈な調子に

なって居た。

畜生。其奴を野郎見付ければひったくり、見付ければひったくりして、空手にして置いて、搾り栄がしなくなると、靴の先へかけて星の世界へでも蹴っ飛ばそうと云うんだ。慾にかかってそんな事が見えなくなったかって泣きやがった……馬鹿。

馬鹿。己れを幾歳だと思って居やがるんだ。虫っけらの眼から贅沢水を流す様な事をして居やがって、憚りながら口幅ってえ事が云える義理かい。イフヒムの奴も太腐れて居やがる癖に、胸三寸と来ちゃからっきし乳臭(うぶ)なんだ。

だが彼奴の一念と来ちゃ油断がなら無え。

宜いか。

又肩からもたれかかる様にすり寄って、食指で私の膝を念入に押しながら、

宜いか、今日で此の船の鏽落しも全然(すっかり)済む。

斯う云って彼は私の耳へ口を寄せた。

全然済むんでグリゴリー・ペトニコフの野郎が検分に船に来やがるだろう。

イフヒムの奴、黙っちゃ居無え筈だ。

私は「黙っちゃ居ねえ」と云う簡単な言葉が、何を言い顕わして居るかを、直ぐ見て取る事が出来た。余りの不意に思わず気息を引くと、逆る様に鋭く動悸が心臓を衝くのを感じた。而してそわそわしながら、ヤコフ・イリイッチの方を向くと、彼の眼は巌の様な堅い輪廓の瞼の中から、ぎらっと私を見据えて居た。思わず視線をすべらして下を向くと、世の中は依然として夏の光の中に眠った様で、波は相変らずちゃぶりちゃぶりと長閑な階律(リズム)を刻んで居る。

私は下を向いた儘、心は差迫りながら、それで居て閑々として、波の階律に比べて私の動悸が何の位早く打つかを算えて居た。而してヤコフ・イリイッチが更に語を次いだのは、三十秒にも足らぬ短い間であったが、それが恐ろしい様な、待ち遠しい様な長さであった。

私は波を見つめて居る。ヤコフ・イリイッチの豹の様な大きな眼睛は、私の眼から耳にかけたあたりを揉み込む様に見据えて居るのを私はまざまざと感じて、云うべからざる不快を覚えた。

ヤコフ・イリイッチは歯を喰いしばる様にして、

お前も連帯であげられ無えとも限ら無えが、「知ら無え知ら無え」で通すんだぞ、生じっか……

此の時ぴーと耳を劈く様な響きが遠くで起った。其の方を向くと船渠(ドック)の黒い細い煙突の一つから斜にそれた青空をくっきりと染め抜いて、真白く一団の蒸気が漂うて居る。ある限りの煉瓦の煙突からは真黒い煙がむくむくと立ち上って、むっとする様な暑さを覚えしめる。労働を強うる為めに、鉄と蒸気とが下す命令である。私は此の叫びを聞いて起き上ろうとすると、

待て。

とヤコフ・イリイッチが睨み据えた。

きょろきょろするない。

宜いか、生じっか何んとか云って見ろ、生命は無えから。

長げえ身の上話もこの為めにしたんだ。

と云いながら、彼は始めて私から視線を外ずして、やおら立ち上った。胴の間には既に眼を覚したものが二三人居る。

起きろ野郎共、汽笛が鳴ってらい。さ、今日ですっかり片付けて仕舞うんだ。

而して大欠伸をしながら、彼は寝乱れた労働者の間を縫って、オデッサ丸の船階子を上って行った。

私も持場について午後の労働を始めた。最も頭脳を用うる余地のない、而して最も肉体を苦しめる労働はかんかん虫のする労働である。小さなカンテラ一つと、形の色々の金槌二つ三つとを持って、船の二重底に這い込み、石炭がすで真黒になって、油の様にとろりと腐敗したままに溜って居る塩水の中に、身体を半分浸しながら、かんかんと鉄銹を敲き落すのである。隣近所でおろす槌の響は、狭い空洞の中に籠り切って、丁度鳴りはためいて居る大鐘に頭を突っ込んだ通りだ。而して暑さに蒸れ切った空気と、夜よりも暗い暗闇とは、物恐ろしい仮睡に総ての人を誘うのである。敲いて居る中に気が遠くなって、頭と胴とが切り放された様に、頭は頭だけ、手は手だけで、勝手な働きをかすかに続けながら、悪い夢にでもうなされた様な重い心になって居るかと思うと、突然暗黒な物凄い空間の中に眼が覚める。周囲からは鼓膜でも破り相な勢で鉄と鉄とが相打つ音が逼る。動悸が手に取る如く感ぜられて、呼吸は今絶えるかとばかりに苦しい。喘いでも喘いでも、鼻に這入って来るのは窒素ばかりかと思われる汚い空気である。私は其の午後もそんな境涯に居た。然し私は其の日に限って其の境涯を格別気にしなかった。今日一日で仕事が打切りになると云う事も、一つの大なる期待ではあったが、軈て現われ来るべき大事件は若い好奇心と敵愾心とを極端に煽り立てて、私は勇士を乗せて戦場に駆け出そうとする牡馬の様に、暗闇の中で眼を輝かした。

とうとう仕事は終った。其の日は三時半で一統に仕事をやめ、其処此処と残したところに手を入れて、偖て会社から検査員の来るのを待つ計りになった。私はかの二重底から数多の仲間と甲板に這い出して、油照りに横から照りつける午後の日を船橋の影によけながら、古ペンキや赤銹でにちゃにちゃと油ぎって汚れた金槌を拭いにかかった。而して拭いながらいつかヤコフ・イリイッチが「法律ってものは人間に都合よく出来て居やがるんだ。シャンパンを飲み過ぎちゃなら無えとか、靴下を二十足の上持っちゃなら無えとかそんな法律は薬にし度くも無え。はきだめを覗いちゃなら無えとか、落ちたものを拾っちゃなら無えとか云うんなら、数え切れ無え程あるんだ。そんな片手落ちな成

敗にへえへえと云って居られるかい。人間が法律を作れりゃあ、虫だって作れる筈だ」と云ったのを想い出して、虫の法律的制裁が今日こそ公然と行われるんだと思った。

丁度四時半頃でもあったろう、小蒸汽の汽笛が遠くで鳴るのを聞いた。間違なくセミオン会社所有の小蒸汽の汽笛だ。「来たな」と思うと胸は穏かでない。船階子の上り口には労働者が十四五人群がって船の着くのを見守って居た。

私の好奇心は我慢し切れぬ程高まって、商売道具の掃除をして居られなくなった。一つ見物してやろうと思って立ち上ろうとする途端に、

　様あ見やがれ。

　ワハ…………

と云う鋭い声がかの一群から響いたので、私はもう遣ったのかと宙を飛んで、

と笑って居る、其の群に近づいて見ると、一同は手に手に重も相な獲物をぶらさげて居た。而して瞬く暇にかんかん虫は総て其の場に馳せ集まって、「何んだ何んだ」とひしめき返して、始めから居たかんかん虫は誰と誰であるか更に判らなくなって居る。ナポレオンが手下の騎兵を使う時でも、斯うまでの早業はむずかしろう。

私は手欄から下を覗いて居た。

積荷のない為め、思うさま船脚が浮いたので、上甲板は海面から小山の様に高まって居る。其の甲板にグリゴリー・ペトニコフが足をかけようとした刹那、誰が投げたのか、長方形のクヅ鉄が飛んで行って、其の頭蓋骨を破ったので、迸る血烟と共に、彼は階子を逆落しにもんどりを打って小蒸汽の錨の下に落ちて、横腹に大負傷をしたのである。薄地セルの華奢な背広を着た太った姿が、血みどろになって倒れて居るのを、二人の水夫が茫然立って見て居た。

私の心にはイフヒムが急に拡大して考えられた。どんな大活動が演ぜられるかと待ち設けた私の期待は、背負投げを喰わされた気味であったが、きびきびとした成功が齎らす、身ぶるいのする様な爽かな感じが、私の心を引っ掴んだ。私は此の勢に乗じてイフヒムを先きに立てて、更に何か大きな事でもして見たい気になった。而してイフヒムがどんな態度で居るかと思って眼を配ったが、何処にまぎれたのか、其の姿は見当らなかった。

一時間の後に二人の警部が十数人の巡査を連れて来船した。自分等は其の厳しい監視の下に、一人々々凡て危険と目ざされる道具を船に残して、大運搬船に乗り込ませられたのであった。上げて来る潮で波が大まかにうねりを打って、船渠の後方に沈みかけた夕陽が、殆ど水平に横顔に照りつける。地平線に近く夕立雲が渦を巻き返して、驟雨の前に鈍った静かさに、海面は煮つめた様にどろりとなって居る。ドゥニパー河の淡水をしたたか交えたケルソンでも海は海だ。風はなくとも夕されば何処からともなく潮の香

が来て、湿っぽく人を包む。蚊柱の声の様に聞こえて来るケルソン市の薄暮のささやきと、大運搬船を引く小蒸汽の刻をきざむ様な響とが、私の胸の落ちつかないせわしい心地としっくり調子を合わせた。

私は立った儘大運搬船の上を見廻して見た。寂然(ひっそり)して溢れる計り坐ったり立ったりして居るのが皆んなかんかん虫の手合いである。其の間に白帽白衣の警官が立ち交って、戒め顔に佩劔を撫で廻して居る。舳に眼をやるとイフヒムが居た。とぐろを巻いた大繩の上に腰を下して、両手を後方で組み合せて、頭をよせかけたまま眠って居るらしい。ヤコフ・イリイッチはと見ると一人おいた私の隣りに大きく胡坐をかいてくわえ煙管をぱくぱくやって居た。

へん、大袈裟な真似をしやがって、

と云う声がしたので、見ると大黒帽の上から三角布で頬被りをした男が、不平相にあたりを見廻して居たが、一人の巡査が彼を見おろして居るのに気が附くと、しげしげそれを見返して、唾でも吐き出す様に、

畜生。

と云って、穢らわし相に下を向いて仕舞った。

（一九〇六年於米国華盛頓府、一九一〇年十月「白樺」）

和泉屋染物店（一幕一場）

木下杢太郎

登場人物

おとせ
おその
おけん
おさい
徳兵衛
清右衛門
幸一
松次郎

義太夫節にて幕あく。

舞台は紺屋和泉屋の内部を現わす。上手は床(ゆか)低き店先、下手は土間。土間には数多くの藍壷並び埋られてあり。そこと店の框(かまち)との間には叩きの庭ありて奥の方に行くようになりて居る。奥と店との境には紺地に『和泉屋』と染め出したる暖簾が懸かる。叩き

の庭に向える框には細木格の四尺障子二枚あり。藍壺の土間の上に電燈あり。また数本の竹竿を渡し、それに色々の絲を懸けてあり。下手は表の大戸となり、戸の前に腰高障子を閉めたり。それより奥は戸袋と壁とにて、その上のところに門口より取り込みたる暖簾拡げたるままに懸る。角の中に泉、その下に『万染物所』右に『和泉屋』と二行に染め出されたり。赤き漆の地に金字にて京染と彫りたる看板も壁に立てかけられてあり。店は後ろに戸棚あり、其あいだに奥の間にゆく半間の障子。奥まりたる所に帳場。その上に電燈あり。柱には時計、神棚には燈明と注連飾。戸棚は皆戸をはめたれば、そこここ小じんまりと片付きて居る。殊に時は正月元日の夜九時過ぎにして、戸外には昼ごろよりの雪なお降り続き、街道に人声もなく、家の内もまた静かなる心持を現わす。折々雪の崩れ落つる音をきかす。近き鍛冶の夜業の物音も時々響ききたる。店先にはおとせ、おさい、おけん、おそのの四人、大きなる青銅の火鉢の傍にて話をして居る。あたりに茶道具、菓子鉢、餅を取りたるめいめい皿などあり。今しもおけんは膝より三味線を滑したる所なり。軽き笑声起る。おそのは慎ましく帳場の格子の前に坐りて両手を膝に並べて居る。職人の松次郎は藍壺の上に吊したる竹竿より紺絲を外して両手にかけてぱたぱたと振い、一把一把ずつ数えて居る。

おけん　（二十六歳。小造り。場所風の意気なる身態をして居る。髪はややあだなる丸髷。気さくなれども涙もろき質）ほほほ、もう之れぎりなのですよ。もう後は知らないの。

おさい　（四十六歳。大きなる姿勢。同じく寛濶なる性。昔風の古びたる小紋の羽織など着ている。落ち付かざるさまに坐る）はははははは、面白かった。——さあ私は往こう。こう道草を食っては居られない。——それでもまあ能くそれまでに仕込んだねえ。もうお前位の歳になっては覚えられるものじゃ無いのに。（立ち上る）

おけん　まあ、おばさん可いじゃありませんか。御緩り御話しなさいな。——でも小さい時に少しでもかじって置くと違いますわ。——おばさん、まあ貴方は往くのですか。

おさい　もう郷っから使が幾度家へ来たか知れはしない。その上また、もうここに小一時間も居たのだよ。もう事によると福引はおえてるかも知れない。それでもまあ往って見よう。じゃ、ねえさん、さよなら。早かったらまた帰りに寄りますよ。——じゃ、おけんさん、お前さんもまた遊びにお出でなさいよ。

おとせ　（五十二歳。痩せて丈高き方。極端に慎ましき口

許。歳よりもやや派手なる昔風の紬の着物をきる。小さき丸髷。眉を剃り歯を染めて居る）じゃまたお寄んなさいましよ。――おその大戸を開けておやり。

おその（十九歳。丈やや低く太りたる方。世慣れず、素直なる仕込。僅か恨あるようなる表情の目許。痲髮。新しき質素なる着物。――庭に下りて、障子の桟にかかりたる、蔦の紋の小さきぶら提灯に燈をともす）はい、じゃ、おばさん。

おさい（黒めりんすのおこそ頭巾を破り、上り口に立てかけたる蛇の目の傘をとりて）はい、有り難う、おそのさん、それじゃ後を閉めておくんなさいよ。（おその表戸をあける）

おさい　おや外の明るいこと。まるで月夜のようだね。月夜に提灯は外聞がわるいと云うけれど、雪の夜だから構うまい。やっぱり点けてゆきましょう。では、ねえさん、さよなら。おけんさん、さよなら。――おやこの家の御飾は滅法に長いこと。何だと思った、頭の所が――おお寒い。じゃおそのさん、さよなら、お休みなさいよ。（去る）

おその　さよなら。（戸を閉し、その前の障子をもしめて房る）

おけん　富田屋のおばさんは何時も元気がよござんすねえ。――じゃも少し弾いて見ましょう。佐和利の所だけでも。やっぱり素人にはさわりのとこが一番面白うござんすわねえ。――太棹だと好いんですけど、――こんな歌三味線じゃ、まるで音なんど出やしませんわ。

おとせ　大へん註文が六つかしいのだね。だってもうお前、六七年というものは手をつけた事もないのだもの。

おその　おっ母さん。そら何時ぞや富田屋のおていさんが帰ってお出での時に、貸して上げたじゃありませんか。

おとせ　おや、そう、そう、そうだったねえ。そうだ、それであの時に絃も仕替えて呉れたのだった。

おけん　そう？　おていさんが帰ってきたの。私はもう久しく会わない。変ったでしょうねえ。

おとせ　もうすっかり。でもお前大そうりゅうとした態をしてお出でだったよ。一時はね、そら、あの人に捨てられて、随分困った相だったけれど、それでも今じゃ好い旦那を見付けて、此節ではおかみさんで帳場に坐って居られるのだとさ。色々と苦労した話をして行ったよ。

おけん　もうもうそう云えば一昔経ちますものね。世が世ならあの人だって――お、そう云えばあの菊屋さんもうまく行きませんね。

おとせ　お前、この三四年というものは、どう云うわけだか毎年毎年不景気で困ってしまうのだよ。去年はまた

一層ひどくてね。(間)松つァん。おい、松次郎。お前ももうお仕舞いよ。何、この雪じゃ――明日だってやみっこはありゃしないのだから。之じゃ明日の初売も駄目だねえ。

松次郎　そうですけれども、岡津屋のあのばあさんはやかましやだから明日屹度来ますよ。

おとせ　それだってお前、此頃のような天気じゃ間に合わないって仕方がないわさ。もうお休みよ。そしてもうこんなに雪が降るのだから、あしたの朝だって、そんなに早くなくって可いのだよ。さあお休み、お休み。台所へ行って甘酒でもわかしておわがり。

おけん　(三味線の調子を合わせながら、気さくに) ねえ、松つァん。紺屋の明後日って昔から言うじゃありませんか。お正月ですもの、もうお休みなさいね。

松次郎　はいもう直ぐです。もうあと少しほか無いのです。(間)

おけん　(松次郎に)お前さんがそんなに働いているのに、此方ではこんなにのんきに三味なんど弾いたりして済まないわね。――あすこの鍛冶屋でも能く精が出ます事ね。元日だのに夜業をしていますよ。――

おとせ　やっぱり、明日の仕度だろう。

おけん　でもなぜそんなに不景気なのでしょうねえ。

おとせ　なぜだか理由は知らないのだがねえ――町の税だの、所得税だのばっかりは昔の割に取られて居るのに、もう昔のようにやってはいないのだし――

おけん　どこでも不景気って――まあいやですねえ。何故でしょう。内に居てもね、三味線一つ弾くのもあたり近所へ気兼ねなんですの。いつも困ったような顔をして、まあこう謹慎していないと跋が合わないんですもの。(間。急に笑談らしく)ね、おばさん、そりゃそうと、私にもねえ近頃始めていろんな人情や世間のことが分って来たんですよ。

おとせ　(微笑)そりゃそうさ。その年齢で分らなくってどうするのだえ。

おけん　いえ、でもねえ――三味線の歌の文句なんぞもね、もとは唯何のわけもなく歌ったんでしたがねえ、やっぱり歌などと云うものは上手に作ってあるもので御座んすわねえ。

おとせ　さあ前置は後にしてまた歌ってお聞かせよ。お前こんなにのんきにして、お前の三味線なんかを聞くようなときは滅多にありはしないのだから。お父さんがああ寝てしまっては、私一人で、お前、家のことを何から何までしなけりゃならないのだからね。早くおそのに養子でも貰って後をやって貰わなくっちゃ私ゃもうかなわないのだよ。

おけん　そういえばねえ、幸さんも――

おとせ　だから、さあ、語ってお聞かせよ。

おけん　(気をかえて)じゃ親類の二段聞きでもして貰いま

しょうかしら。（新口村の佐和利のところを小さい声で語りながら弾く。此間に松次郎は片腕に一ぱいの紺絣をかけて、庭の電燈を消し暖簾をくぐって奥の方に去る。外を火の廻りの拍子木が微かに過ぎてゆく。おけん、中途にて文句につかえて手をやめる）さあ、又忘れてしまったわ。本をあてにしてまだ文句も覚えないものだから――親子は一世の縁とやら、それから何でしたかねえ。この世からなるじゃない。何でしたかしら。え、もう休しましょう。忘れてしまった。――何だってそんなに真面目になって聞いて居るんです。きまりが悪るいじゃありませんか。（時計一つ打つ）

おとせ　おや、おその、お前台所へ行って皆んなにお休みって云ってお出でよ。もう九時半だよ。それでね、もし明日のあさも雪ならば――明日だって休みっこはありゃしないよ。そんなに早くなくっても可いってね。六時頃までにお節が祝えさえすりゃ可いって云って来ておくれな。それから、もし甘酒がわいて居たらここへ持ってお出でな。

おその　（立って奥へゆく。障子を明けると屏風を立てたる次の間見ゆ）

おけん　ねえ、おばさん、あの事は早くきめてしまった方がよ御座んすのよ。ああ両方で思って居るのなら娶にやったって可いじゃありませんか。――そうですよ。確かに思っているのですよ。

おとせ　だってお前、幸一は全く当てになんないのだからねえ。

おけん　ですからさ。祝言はもっと延ばしたってそりゃ可よご座んすわ。幸さんがお帰りになって、幸さんにお娶さんでも出来てからでそりゃよござんすがね、――（やさしく）ね、おばさん、私ゃほんとうにそう思いますの、あの年頃に思った事が一番本当なんですわ。年をとれば考えも変るって云うけれども、そんなに人間の考えと云うものは変るもんじゃなくってよ。あの頃に思った事が一番邪念がなくって正直なんですわ。もう可いわ、私がどこまでも肩を持って上げるわ。――私ゃねえ、おばさん（膝にねかしたるままに三味線を弄しながら）今になって見るとつくづくそう思うのよ。おばさん、私ゃよっぽど馬鹿でしたのねえ。

おとせ　どうしてさ。

おけん　だって――私はよっぽどおぼこだったのね、ちっとも世間の事だの、人情だのってのが分らなかったのねえ。

おとせ　そうでもあるまいよ、お前は人よりは賢い方だったよ。

おけん　（笑）そんな事はありゃしませんわ。（蓮葉に）随分だわね。――（沈みて）ねえ、おばさん、私はおばさんにも済まない事をしましたのねえ。

おとせ　何をさ。

おけん　何をって。
おとせ　お前の云う事はちっとも分りゃしないのだよ。
おけん　そう。おばさんには分らなくって？——そんなら云いますがね、おばさんも幸さんも、私があすこへ娶に往ったのを好い事には思っては居なかったでしょうね。
おとせ　何がお前、今更そんな古い事を誰が思っているものかね。
おけん　でもそうばかりは行かないわ。私にも今になって見れば色々と思い当ることがあるのよ。
おとせ　そんなつまらない事はお休しよ。お前それよりかまた歌でも聞かしてお呉れな。
おけん　ええ、ええ、それだから、それはもうそれ限りですからさ、幸さんを早く家へ呼んで、好いお娶さんでも貰って、おばさんだって、もう楽をしなさいましな。
おとせ　本当に、ねえおけん、そうなって呉れると私ゃどんなに嬉しいか知れはしないのだよ。
おけん　私もね、生れ故郷の古い家に、おばさんだの、おじさんだの中にこうして居た方がどれ程よかったか知れはしないわ。知らない他人の中で苦労するよりは。
おとせ　何でそんな老人じみた事を云うのだえ。お前などは旦那さんが働き者だからこれからずんずん世の中へ出てゆくのだよ。——だがね、今度の事は私にはどうしても気になって困るのだよ。ねえ、おけん。どうしたら可いだろうねえ。
おけん　大丈夫よ、おばさん、私がさっきからあんなに云ってるじゃありませんか。そんな事はありゃしないわ。幸さんみたようなああいう人が——
おとせ　お前は何にも知らないのだよ。——幸一は昔の幸一じゃないのだよ。
おけん　そりゃ貴方の誤解だわ。
おとせ　そうでないよ。事によると——今度だって、彼がやり兼ねまいものでもないからさ。
おけん　だってそんな理由が無いのでしょう。（間）でも兄さんはもう着きそうなものですのにねえ。
おとせ　そうさ。昨日の手紙では確かに今日中には帰ると云ってあった。都合がよければ幸一をも一遍兎に角一緒に連れてかえると書いてあったが。
おけん　じゃ屹度来るでしょう。も少し待って見ましょう。
おとせ　もしや万一幸一があの事件に関係して居たならどうしようねえ。
おけん　どうしておばさんにはそんな事が考えられるのでしょうね。
おとせ　お前は知らないからだ。何にも知らないからだ。
おけん　でもねえ、おばさん、そんな取越苦労よりおそのさんの話の方が肝腎よ。御性ですからおそのさんの方はくれぐれも頼みますよ。ねえ——（奥の方に人の足

音す。間。三味線の絃を弄じる)

おその　(甘酒の茶碗など持ちて来る)今雪で合所の煙突が折れたのですって。

おとせ　煙突が——その音だったのかえ、さっきのは。

おその　ええ。

おとせ　もう皆な寝たかえ。

おその　もう寝るように言って置きました。でもおじさんが多分今夜お帰りでしょうから起きて居ますなんて云っています。松次郎は兎に角、も一遍河口までお迎えに行って見ましょうかなぞと申して居りますの。

おとせ　いんやもう可いのだよ。船はもうさっき笛の音がしたから——あれからかれこれ二時間も経つ。今日は帰っては来ないのだろう。もうこっちの事は構わないから、みんなお休みと云ってお出で。(おその去る)

おとせ　昨日の新聞の夕刊に、またあの鉱山の騒動のことが少し許り出て居たが——(声をひそめ、目を睜りて)そしてねえ、お前、よくは分らないが、それがまた、あの事件に関係しているのだと云うので、警察が活動を始めたなんて書いてあるのだよ——。

おけん　あの事件て?

おとせ　そら、あの……(聞き難き声にて云う)

おけん　(驚きて)まあさか……そんな……

おとせ　若しもそうだったら何うしようねえ。

おけん　(不安を破いて)まさか、そんな。(瞬間の沈黙)

おとせ　だから節季の忙わしい中を態々お前の兄さんを頼んで山にも往って貰い、土地に親類も少いからお前にもこうして来て貰ったわけなのだよ。お前だっても忙わしい身体だのにねえ。

おけん　いんえ、おばさん、私は内に子供があるのではなし又商売が商売ですから、節季だと云って外の人様のように忙がしいと云うのではなし、それは構いはしないんですが。——でも何うしておばさんは、幸さんがあの仲間に入って居ると仰っしゃるのです。私にはちっとも分らないのです。

おとせ　それはまだ詳しくは分らないけれども、幸一がもう去年の春頃からあの山に居たと云う事は私はうすうす知って居たのだよ。そしてやっぱりあの主義の事から始終お上の注意を受けていたと云う事も知って居たのだよ。今度あの山の騒動で呼ばれた人の中に剣持健作という人の名が見えて居たのさ。(目を光らす)

おけん　(疑問の表情をする)

おとせ　そりゃ全く私の知らない名だけれど、私はどうしても——幸一のことじゃ無いかと云う気がしてならないのだよ。そしてまたそう思うわけもあるのだよ。(声を低めて)一遍——そら一昨年ね、あれがしばらく内に帰って居た時に——あの時だってお前——(更に低く)あれの友達が捕まって牢へはいったのだって——わたしゃなんだか本当に自分の子ながら気味が悪

かったよ。夜でなけりゃ外へも出なかったりしてね、それで昼間は一日案じ屈托していてね。――その時あれの机の上に手紙が一本書いてあるのさ。私が部屋を掃除に往って、何なら女に出させようと思って見ると、裏の名が違っているのさ、その時たしかに剣持生って書いてあったのだよ。可笑しいからあれを呼んで聞くと、あわててその手紙を奪っちゃって、どうかしたのさ。其時はおかしな事をするなとは思ったが、あまり気にも留めては居なかったが、今考えると何か秘密の手紙をやり取りして居たのではなかったかと思われるのさ。

おけん　(何か思い当るさまなれども、定かには言い兼ねたるが如く)だって、だって――そんな事はありゃしないでしょう。今度の剣持って人と何も関係はありゃしないでしょう。

おとせ　(声を低めて)私ゃどうしても幸一が剣持って隠れ名を持って居るのじゃ無いかと思うのだよ。

おけん　(不安なる顔をする)まさか。

おとせ　そんな筈はありようは無いと思うけれども、また然うだとも思われてならないのさ。

おその　(再び登場)まあ、まだおわがりになりませんか。冷めましたでしょう。

おけん　おやそうそう。話に気をとられて。(碗をとる)でもそんな事はありゃしませんよ。

おとせ　ありはしまいと思うけれどもね。――まあ冷めないうちおわがりよ。

おけん　え、じゃ頂きます。――(別の感情にて)ねえ、おばさん、私の子供の時分には、藤三郎叔父さんが三味線が上手でしてねえ。よく松づくしを教えられましたがねえ――あの時分は男の人が義太夫だの踊だのを習ったものでしたねえ、全く今とは世が違ってたのですね。

おとせ　あの時分だって、お前、三味線を弾いたりした人達は今は皆んな零落れて居るわね。

おけん　そうですね。富田屋でも、鍛冶屋でも――。でもねえ何だかあの時分が懐しいわ。大津絵だの端唄だの弾くとあの時分の事が思い出されて悲しくなることがあるわ。(碗を下に置き、半ば無意識に弄ぶさまに、指先にて昔の唄を弾く。そのあいだに遠くにて喇叭の音する。戸外に微かなる人声。少時して田舎の箱馬車の表の街道を通り去る響す。雪の夜の深き寂寞)ねえ、好いものですねえ、歌というものは。

おその　(突然)おっ母さん、おじさんでは無いのでしょうか。

おとせ　(驚きて)え、何がさ。

おその　今家の外で何か声がしたようですよ。

おとせ　そうかい、今の馬車より外にかえ。

おその　ええ、いまよ。
おけん　そうねえ。人だったかしら。雪が落ちたんじゃ無くって？
おその　そうですねえ。——私は——も少し嚮汽船の笛が鳴るようでしたが——汽船が着いたのじゃないでしょうか。
おとせ　汽船は八時じゃないかえ。そしてもう嚮着いたと云うじゃないかえ。
おその　もしかすると、さっきのは別の汽船で、今遅れて着いたのじゃないでしょうか。
おとせ　それでも河口からはここまで三十分はかかるよ。
おけん　おばさん、いまの馬車はどこから来たのです。河口からじゃ無くって？
おとせ　いやあれは違う。あれは峠から来る馬車さ。今夜はこんなに晩く来たのかえ。お正月だのに。（間）
おその　（低く）あれ、戸を叩いて居るようよ。（庭に下りる）
おとせ　今夜は是非帰るっては書いてあったが。
おその　（表の障子をあけ、表戸の潜りの傍による。低く）何方さまですか。（間。声なし）
おけん　おそのさん、そうじゃ無いでしょう。
おその　（気味わるげに後ろを向く。二三歩あとへさがる）
おけん　（おとせも声を合せて）あ。
おその　（又戸に近づき）何方様ですか——おじさんですか。（潜りの開きの猿を外さんとす）
おとせ　（不安なる顔にて角の大黒柱までくる）そうなのかえ？
おその　私です。——今お着きですか。（潜りの戸をあく）
清右衛門　（四十七歳。黒の二重廻しと同じ色の頭巾に、泥にまみれたる草鞋と云う旅装束。蝙蝠傘をそっと戸の外にて振い、家の戸口を入りて身体を揺り動かして外套の雪を落す。森閑たる夜のうちにこのささやかなる響ことごとしく響く。一味の不安の気人々の胸を襲う。お園は開きをしめてまた店の上り口に戻る）
おその　（不安そうに）おじさんですか。大そう遅くなりましたねえ。
清右衛門　（黙したるままに蝙蝠傘と風呂敷包とを差出す）
おその　（それを受取りながら）おじさん。
清右衛門　（外套を脱ぎ静かに雪を払い落す。鼠羅紗の古風の鳥打帽子。両手著しく打震いて居る。疑深く四辺を見廻わす）
おけん　おや兄さん、御帰えんなさいまし。
清右衛門　（頷く、外套を差出す）
おその　（外套を受取る）
清右衛門　（店先に来りて框に腰を下ろす）ねえさん、只今。大そう遅くなりました。——もう皆休みましたか、——おその、店や合所の衆はもう寝たかい。俺は

寒くてたまらない。少し寄り道をして山を越して来た。それ、草鞋なんぞはこの通りだ。
おその　お注ぎをもって来ましょう。
清右衛門　おその、それより早く飯にして呉れ。俺は上らない。すぐ今夜は家に帰る。腹がへった。もうへとへとに労れた。済まないが、早く何か酒を一杯もって来ておくれ。屠蘇でもなんでも構わない。冷で結構——台所の人は起すなよ。わけがある。静かに。そっとこへ持って来い。何でも可いからな。
おけん　兄さん御機嫌よう御座います。
清右衛門　おお、おけんか。お前も来てくれたのか。
おけん　ええ、此家になって居ります。（おその去る）
おとせ　まあ上りなさいよ。内から下駄をはいてゆけば可いじゃありませんかえ。今夜は内へ宿まってお出でなさい。可いだろうがね。——もう今夜は帰らないのと思っていたよ。
清右衛門　ええ、大へん遅くなって。だが今夜は家へ帰りますよ。ねえさん皆寝ましたか。手紙は着いたでしょうね。
おとせ　そして山の方へも行ってくれたかえ。
清右衛門　ええ、後でゆっくり話さなけりゃならないのですがね、東京へ行って直ぐ上村さんを訪ねました。やっぱり山の方に居るって事が分りましたから早速行きましたがねえ。
おとせ　そして何うだったのでしたえ。
清右衛門　ねえさん、にいさんはまだ起きていますか。
おとせ　もう寝たけれど、何なら起して来ようかえ。
清右衛門　にいさんはどうです、安排は。
おとせ　やっぱりはかばかしくは無いが、それでも別に悪くもならないのだが。
清右衛門　ねえさん、実はね今度の事は少し込入って居ましてねえ。
おその　（会席膳に皿などのせ、玻璃の燗徳利に酒を入れたるを持ち来る）
おとせ　お前さん、上ってゆっくりして往けば可いのにねえ。そんな腰かけでなんぞ……。
清右衛門　実は少し上って居られないわけがあるのです。あとでゆっくり云いますがねえ。——おや済まない、おそのさん、酒のみはいじがきたなくてねえ。
おとせ　さっき汽船が着いたというから見せにやったがお前さんは見えなかったと云うからどうしたかと思ったよ。
清右衛門　え、そうです。実は此までは乗っては来ないのです。前の港で下りて雪の中を歩いて来たのです。もう日はとっぷり暮れてしまったでしょう。知った道ではあるけれども提灯は無し、二人でてくてくと歩いて来ると……

おとせ　誰か道連れがあったのかえ。

清右衛門　ええ……そこまで……。で、てくてく雪の中を歩いて来ましたが、本当に泣きたいようになりましたよ。山から見ると海の方はぼおっと微んでいるでしょう。遠くの方に小さく沖の蒸気の灯が見えるばかりです。まるで駆落者かなんぞのように……あんな事は始めてですよ。いや、妙な気がしましたよ……

おとせ　なぜ——だってお前さん、そんな山道なんぞしなくっても……

清右衛門　ですけど、少し用があったもんですからね。——丁度峠の少し前の所で幸い馬車に遇ったものですから——どこの別当だか知らない男でしたがね——そこん所まで乗って来たのですよ。ええ、山は随分積りましたよ。随分難渋でした。それでも雪あかりで道はよく分りました。乗合も四五人ありました。下りには別当が馬を飛ばして、分けはなく着きました。——いや、そうそう、一寸御免なさいましよ。忘れ物をしました。ほほ、大事な忘れ物を。途中ではあんまり寒いから馬車を下るのもいやだったもんで我慢をして来たのです。いや、上るのは面倒臭い、一寸外の憚りへ行って来ましょう。——あ、おその、一寸、一寸——まあ一寸お出で。（おそのに耳打す）

おその　どっかまた直ぐお出でになるのですか。

清右衛門　いいからさ。また後で分るからさ。よいかえ。

（また上り口に戻り、徳利を持ち、そのまま奥へと去る）

おけん　ま、どうしたのでしょう、兄さんは。

おとせ　おけん、おけん！

おけん　え？

おその　おっ母さん。

おとせ　何だえ。

おその　何だか私心配ですわ。

おとせ　何故え？

おその　あの——外に誰か居るのでは無いでしょうか。

おとせ　どうしてえ？

おその　でも——響たしかにも一人外に居たようでしたよ。それにおじさんが握飯を大急ぎで拵えてくれって——。

おとせ　まあ。

おその　何だか私気味がわるいわ。

おとせ　（思入）そんならお前早く拵えてあげれば可いじゃないかえ。おけん——

おその　兄さんでしょうか。

おとせ　あ、私本当に心配になって来た。（庭を見まわす）

おその　下駄ですか。持って来ましょう——あ。

おとせ　（大きく呼び懸ける）清右衛門さんですかい。

清右衛門　（奥より出て来る）ええ、私、私。（おその不思議そうに清右衛門の手許を見る）あ、私は飛んだ粗相

をした。雪の上に酒の徳利を落してしもうた。

おその　（思入）まあ。台所に灯がついて居ましたか。暗かったでしょう。

清右衛門　いや神棚の御灯明でよく分った。外は雪でお前月夜のようだ。それに鍛冶屋でまだ起きて居てぽっと明がさしているわ。

おその　台所の戸締をしてくれましたか。

清右衛門　いや頓と忘れた。――おその、さっきの事を頼むよ、早く。

おその　ええ。（おとせと顔を見合わせながら奥に去る）

清右衛門　（声を低めて）ねえさん、大変なことになりましたよ。

おとせ　（色を変ず）え、え、やっぱりそれじゃ幸一が……。

清右衛門　まあまあ、わけは後で分りますがねえ、今来て居るのですよ、幸一が、ねえさん、私と一緒に。

おとせ　ええ、どこにえ？

清右衛門　今木戸口を開けてやって裏の物置の所にいるのですよ。

おとせ　まあ。

清右衛門　今夜中にまたすぐ出かけて行かなけりゃならないのです。だから早く弁当を拵えてやって下さいよ。ねえさん幸一は罪人ですよ。大へんな、大へんな罪人ですよ。え、もう飛んだ事になってしまって。そしてもう厳しく手が廻っているのですよ。一刻もぐずぐずしちゃ居られないのですよ。さっきも何か気味のわるい人に出っくわしましてねえ、――それに汽船問屋の人にあうのもいやですから、そんな事でここまで乗って来ないで早く上陸ってしまったのですよ。

おとせ　（取乱して）どうしてそうなのだえ。まあ、何をしたのだえ。じゃ、やっぱり――。

清右衛門　ええ、ねえさん、山の方ばかりじゃ無いのですよ。あの方ですよ、ほら、あの方ですよ。

おとせ　（色を失う）え、やっぱり、それじゃやっぱり――。

清右衛門　本当に私ゃびっくりしちゃった。ええ、まあだけど、今は夫れどこじゃ無いのですよ。まあわけは後にして、さ、早く会ってお出でなさいよ、さ、早く。

おとせ　早く、おそのや、おその。

清右衛門　静かに、まあ、皆を起しちゃ不可ません。

おとせ　早くここへ呼んで来ておくれな、ね、幸一をさ。早くよ。

清右衛門　不可ません。そうっと、そうっと。――裏の稲荷さんの陰に居るのですよ。

おとせ　（足袋はだしとなりて庭に下り立つ）

おけん　（同じく足袋はだしとなる）

清右衛門　あ、まあ、静かに、しっ。おい、おけん、何だい、まあ、お前はそこにお出で、お前はそこにおいで。

おけん　(その儘に立つ。おとせは去る)兄さん。(間)

清右衛門　もう仕方がない。唯諦めるのだ。諦めるのだ。(涙す)

おけん　兄さん、どうしたんですねえ、一体幸さんは。

清右衛門　ええ、まあ何でも無いのだよ。何だってそんなに喋々しく云うのだよ。唯つまらない山の騒動さ。

おけん　ですけどねえ本当に。——やっぱりそれじゃあの——。

清右衛門　おけん、お前、おじさんをも起して来ておやり。もう今日が——さあ、おじさんにも会ってやって貰っておくれ。

おけん　(上り框に軽く腰かけて足袋を脱ぎて上にあがり、それを揃えて隅に置く)おじさんを起しましょうか。

清右衛門　(少時の沈黙)そうだ。おれが行こう。どこにお休みになっているのだえ。面倒くさい、おれが自分で一寸会って来よう。そう足も汚れては居ないようだ。(足袋脚絆を脱す)

おけん　(低く、強く)おそのさん。あの——。

清右衛門　何、よし、よし、そう汚れても居ない。(懐より手拭を出して、足指の凹き所を拭う)

おけん　ねえ、兄さん、本当にあの方って、何なんですよ。私心配なんですもの。

清右衛門　(異常なる眼差にておけんを見る)おけん、お前は新聞を見たろう——。

おけん　(石の如き瞬間の凝視)

清右衛門　あの恐ろしい——(迸る涙。腕を顔にす。そのまま奥に入らんとする)

おけん　暗うござんすよ、暗う——。

清右衛門　大丈夫だ。大丈夫だ。

おけん　電気を点けましょう。(清右衛門のあとにつきて入口の所までゆき、思いかえして座に戻り、物案ずるさま。それから三味線や其他の器類を片づける)

おその　(泣き膨らしたる眼にて庭の奥より来る)

おけん　おそのさん、会って来たの、お前さんは。

おその　ねえさん。(と云いたるまま店の上り口にて忍び泣く、清右衛門徳兵衛を伴い奥の間より来る)

おけん　おや、もう火がすっかり消えて居りました。

徳兵衛　(六十余歳。半白の髪。髭なし。あまり商人らしからぬ風采。寝間着の上に厚き布子を羽織りて居る)いや、いらぬ、いらぬ、些とも寒くはない。

幸一　(二十九歳。痩せて丈高し。顔青く眼凹み。斑らなる髭あり、鉱山にて働く人の如き服装にて、此場とは全く遠離せる別の世界より来れるが如く見ゆ。——異常に沈着なる歩調にて庭の奥より来り少時土間に立ちてやや心決せざるが如き態す)

おけん　(土間に面せる店の障子を開く。幸一と視線を合わす。はっとしたる心持。その途端に幸一歩を動かし

たる故沈黙は破裂せずに保たれたり）

おとせ　（この度は下駄もはきて蹌踉めきながら幸一の後を追いて来る）さあ、幸一、お父さんだよ。お父さんだよ。よく、よく、お会い申しな。どんなに家ではお前のことを案じて居たか知れはしないのだよ。まあ本当に、どうしたら、お前、どうしたら可いと云うのだえ。（泣く）

幸一　（極めて冷静に）お父さん。（間）お久しぶりで御座います。お変りもありませんか。（異常なる沈黙の間）

おとせ　幸一ですよ、幸一ですよ。ね、幸一、お前がもう一月早く帰って来てくれたなら、こんな事も無かったろうにねえ。幸一。幸一。（泣く）

幸一　おっ母さん、もう云って下さるな、之も運命です。いや、いや運命と云っては虚になる。こう成らなくてはならない事がそう成った許りです。人間業とは云いながら、之が自然の当然な成行だったのです。先刻も道々おじさんに御話したのですがね——実際今考えて見ると私は自分でどうする事も出来なかったのです。何だか分らない力が、ずんずんと私の背中から押して来たのです。——実際お父さんや、おっ母さんや——親類一同には、まことに済まない事をしました。昔なら一門残らずお仕置きになる可きでした。ですけどねえ——。

おとせ　何もお前がそんな事をしないって、それにはお上の人達がどうでも善くやって下さろうじゃないかえ、何もお前が猪口才に——。

幸一　おっ母さん、私の頭の中にあるものは、誰にも分らないのですよ。（悲しげに）おっ母さん、親と子などと云っても、もう全く別々のものなんですよ。

徳兵衛　幸一、じゃ、兎に角、新聞にも出て居たが、あの剣持と云う人は全くお前の事だったのだな。

幸一　お父さん。

徳兵衛　そしてお前は東京であんな騒動を起して、それから鉱山へ逃げて行って……あの新聞に出て居た恐ろしい事はみんな本当の事だったのか。

幸一　新聞ですって？　新聞に何か出て居たのですか。新聞なんてものが本当の事を書くものですか。ありゃ皆権力のある世に諛う事ばかりなのですよ。——お父さん、あ、何と云って可いのやら、何と云ったら分るやら——お父さん、（異常なる沈着にて）もう全く時代が違うのですね。私はこうやって皆様に御心配をかけて——何とか云って謝罪りたい、身を投げ出して、泣いてお詫をしたいとは思っても、それを私の心は許さないのですよ。私は何にも悪い事をしては居ないのですよ。私は私の良心の命令通りに生活して来た丈です。外の人は良心が命令をしてもその通りの生活はしないのです。それを私は心通りの生活をしようとした丈なのですよ。（悲しげに）こう云っても本当にお分り

にはならないでしょうね、恰で狂者のよまい言としかお考えにならないでしょうね。実際もう時代が違うのですもの。(絶望と狂熱との調子)全く――ことは全く違った世界から私は来たのです。それからまた全く違った世界へ之から行くのです。今迄の奴隷の生活から出て、始めて新しい自由の世界へ行くのです。唯私達は、何にも考えないで、自分達の便利の為め許りに、何時までか古い因襲を護って行こうと云う傲慢な人達を憎んだ許りです。所がそんな人達は権力と云うものを持って居るのですね。ですから此方も其代りに心の革命という武器を選んだのでしたよ。そしてまず手始めに鉱山の、あの無智な二万人の人の眼を開けてやろうとしたのです(寂しき笑)あ、今思えば、あんな心のはずんだ、生甲斐のある生活は今迄は知らなかったのでした。汗と、血と、力と、意味のある生活、私の耳にはまだ蒸気機関の響が鳴って居ます。それが始めは鉱山の人々の耳に、世の中はつらい、不公平だ、つまらない――とそう聞えたのです。それが段々と愉快だ、甲斐がある、早く新しい世界になれ、早く新しい世界になれとそう響きだしたのですね。愉快な努力と緊張せる平和と、ま、そ云ったものが凡ゆる炭坑の中へ行き渡ったのです。そうすると鉱山の上役たちがそれを壊し始めたのです。その内東京の方でもとんだ騒動が起ったのです。私は急いで東京へ帰ったのです。そうするともう後の祭でした。

徳兵衛　じゃお前は東京のあの人達とは直接の関係は無かったのだね。

幸一　ねえ、お父さん、貴方は私の小さかった時分から、えらい人になれ、えらい人になれと云っては私をお叱りでしたね。そして私は本当の心の要求を枉げても貴方の仰っしゃるえらい人にならなければならなかったのですね。今じゃ何でも無いことですけれども、自分の志望も、またまた恋愛と云ったようなものをも犠牲にして、何かしらんえらい人にならなければならなかったのですね。所が其後私も、えらい人って一体どう云う人だろうかと考えて見たのですよ。そうすると皆の人の考えている事とは全く別なものだって事が分ったじゃありませんか。それで私はその考通りに生活しようと決心したのです。そうして見ると、世の中は虚の人ばかりではありませんか。(寂しき笑)私も、お父さん、若し貴方がそう云って叱って下さらなかったなら、そりゃこの小さい町に――昔の唄もまだ残って居ようと云う寂しい港に、のんきな昔のような生活をして、子と呼ばれ、夫と呼ばれ、親と呼ばれて、罪もない生活をして、朽ち果てたでしょう。貴方はそう云う世界から私を追い出してくれました。けれどもそんならどんな世界に棲まなければならないかって事は教えて下さることは出来なかったのですね。だから私は

一人で捜したのですよ。そして捜し当てたものは他の人の想像して居るようなものでは無かったのです。――ああ、ああ、こう云ってもお父さんにはお分りにならないでしょうね。

徳兵衛　分らない。お前の心持は私にはさっぱり分らない。お前は新しい学問もしたのだから何か理があるかも知らないけれども、第一お前が義理のある堀さんの山であぁ云う騒動を起すなどと云う事は、誰が考えても、善い事じゃない。その上お前は東京でまたあんな主義の仲間と気脈を通じて居るなどと――もう私には心にも考えられない事ばかりだ。一体お前はどうしたと云うのだえ。

幸一　お父さん、義理よりももっと大事なものが人間にはあるのですよ。

徳兵衛　義理よりも大事なものとは？

幸一　自分の心の命令です。

徳兵衛　幸一。お前も知って居るじゃ無いか、お前の実の祖父さんも、お前の伯父さんと云う人も、やっぱり妙な、人には分らない考をもって居て、当もない仕事を企んでは、お負けの果には気狂になって死んでしまったのじゃ無いか。そういう事を見て居るから、たった一人の男の子をそう云うものにはしまいと思ってどんなに私が苦労したか知れはしないのだ。そこをお前だっても酌んでくれたって可さそうなものだったじゃ無いかえ。それをお前は悪く僻んで到頭家を出て行ってしまったのだ。

幸一　いやその事なら熟く知って居ます。私はあの子供の時分に深く感銘された恐しい事件をそれからも熟く考えて見ました。伯父さんは明治初年に耶蘇教を始めて信仰し出して、それを弘めようとした為めに、皆に憎まれて到頭あんな事になったのです。祖父さんは亦人の知らない事業を始めて、一生せっせと働いて金を儲けた為に人から嫉まれたのです。皆他の人より一足進んで居たのです。みんなえらい人だったのです。それを世間が気狂にさせてしまったのです。今東京で捕った私の友達だってえらい人なのです。それを世間が罪人にしたのです。

徳兵衛　お前は勿体ない事を云う。勿体ない事を云う。

幸一　（夢遊病者の沈着を以て）世界が違うのです。お互いに理解しないのです。暗い夜の世界から私は始めて明るい世界を見たのですね。いやまだ暗いのだ。それでもそこをもっと良い所にしようと、皆血と汗とを流して働いて居るのだ。いやそうではない。まだ中々真暗だ。地獄の洞のように暗いのだ。もっとどっさり血を流さなければ明るくはなりはしないのだ。それでもその地獄の洞に小さい孔を見出したのだ。積り積った人の思が厚い洞の壁に孔を明けたのだ。其孔から明るい外が見えたのだ。もっと広い、広い金色に光った海

の表面が見えたのだ。その海の向うに本当の都があったのだ。そうです、その世界へ。広い、広い緑色の世界へ、私達は行かなけりゃならないのです。

徳兵衛 (下駄を捜すが如く庭を見廻わして)幸一、お前は気が狂ったのか。

幸　一 (がっくりと我に帰りしものの如く) え、お父さん。

徳兵衛 (決心の調子にて)幸一、お前は良心が咎めてならないのだ。もう仕方がない。一層潔く自首して出ろ。(涙す)

幸　一 (愕然として戦く。更に反語的なる沈着を以て徳兵衛の傍に寄る) え、お父さん、自首して出るのですか。私が東京で何をしているかを本当には御存知がないのですね。

徳兵衛 (幸一を凝視す)

幸　一 お父さん。(徳兵衛に耳語す)

徳兵衛 (愕然として色を失い、狂気の如く庭に飛び下りて) ええ、何だと、何だと。まあお前は正気なのか。本当か、本当か。

幸　一 (異常なる笑)あの事件が世間に知れたら国中がひっくりかえるでしょう。

徳兵衛 おい、幸一、お前はもう往ってはならぬ、さあ、この通り、この通り頭を地びたにつけろ。お上へも、御先祖さまへもお詫を申せ。さあ年寄の父爺にばかりこんな事をさせて唯見て居るのか。

おけん (下駄をはきて庭に下りる) ねえ、幸さん、幸さん、お謝罪りなさい。——何だって貴方はお父さまを——まあ貴方は酷い方なんですねえ。(涙になる)おじさん、おじさん、それでは余り勿体のうございますよ。勿体のうございますよ。

おとせ (おどおどしながら)幸一。幸一。

幸　一 (慄然として身顫う)おや、今のは雪か。雪が落ちたのか。もうそう云えば霧から笛の音がするようだ。あの船で私はもう往かなくてはならないのだ。

徳兵衛 いや往ってはならぬぞ、往ってはならぬぞ。——俺はもう家の事や自分の身などをかばって居られない。

おけん まあ、おじさん、お上んなさいましよ、ねえさん兄さん、さあどうかおじさんを上にあげてやって下さいよう。(幸一の両腕に両手をかけて)幸さん。(泣)

幸　一 (おけんの手を振り払わんとする)

おけん (涙声にて)幸さん、済みませんでした。勘忍して下さいよう。みんな私が悪かったのです(嘘唏)

清右衛門 (庭に下りて徳兵衛を回護い、無理に上にあがらせ、幸一に目くばせする)

幸　一 (再び怪しき冷静の足どりにて奥の方にゆく。少時立って回顧し、思入あり。遂に暖簾を潜りて退場す)

おけん　まあ、幸一さん。

おとせ　（急ぎ幸一の後を追う）幸一、幸一。

おその　（また倉皇しく去る）

徳兵衛　（無言のままにて見送る。それからがっくりと身を落し、物をつぶやき乍ら立ち上りて奥の間に入る）

清右衛門　（意味ありげにおけんに目くばせす。自らもまた奥の間に入る）

おけん　（意識せざるが如く店の間に上り、惘然と考えて居る。それから顔に手をあてて畳の上に俯す。永き間。異常なる寂寞。――この間旧劇に於ける佐和利の心持、必要に応じては遠き方の唄声のつもりにて、陰の浄瑠璃をきかす。――そのうちに表の戸を軽く打つ音す。人の声。おけん立ち上る）へえ、へえ、唯今。（庭に下りる）どなた様ですか。

外の声　まあまた一寸開けておくんなさいよ。また戻って来ましたよ。（おけん戸をあける）

おさい　（前の通りの風にて内に入る。傘を壁に立てかける）おお寒い。さ、早く戸を閉めよう、内へ吹き込んで来る。まだ中々やみ相もないね、珍らしい雪だね。――もう皆な寝ましたかね。

おけん　いいえ。（戸をしめて戻る）

おさい　ねえさんはえ？　（といい乍ら、襷をつけたるままに提灯を適宜の壁にかけ、右の手にて肩の雪をうつ。頭巾を脱ぎて払う）まあ見ておくれ、おけん、こんなものを付けられて来たよ。（頬にお白粉をぬりたる痕あり）あとで濡れた手拭を借りて拭ってゆかなくては。まだ皆なは大騒ぎだったけれど私はそっと一足先きに来た。これから内へ行ったってお常はもう寝ているし、湯も茶もないからまた一寸寄りましたよ。今ね銀明楼のおかみさんが内の芸者を電話で呼んで、いろんな歌をうたわして、そりゃ面白かったよ。ねえ、あすこの所は面白いね、アレ、ツテチン鳥がなく――鳥の名の――ねえ、一寸真似も出来ないが。私も子供の時分習った切りでもうすっかり忘れてしまった。（店の框に腰を下ろそうとして）何だもう火はすっかり消えているじゃ無いかね。――え、まあ、そう云えばもう十時過ぎだよ。ねえさんはもう寝ましたかね。おや、誰だね、この草鞋は。清右衛門さんが帰って来たのですかえ。一寸まあ私にその三味線を貸して御覧。どうだったねえ、あすこの所は。（三味線を弄す）一寸調子を合わせておくんなさいよ。私にはどうも行かない。

おけん　（余儀なく三味線を受取りて）まあ、おばさん。

おさい　おけんさん。ねえ、さあ一寸やって見ておくんなよ。あすこの所を。それ――眺め見飽かぬ――。

おけん　（うわの空にて三味線の調子を合わす。おその庭の奥より現われためらう。突然奥にて人の泣く声す。

おその去る。おけんも俄に三味線の手を止めて、袖にて顔を被い、たまらず泣き出す）おばさん――。

おさい　ええまあ、おけんお前はどうしたと云うのだえ。（四下を見廻わし奥の方へ視線を据える。――遠き方にて再び汽笛鳴る。）

（幕）

（一九一一年三月「スバル」）

軀

徳田秋声

四五日前に、善く人にじゃれつく可愛い犬ころを一匹くれて行った田町の吉兵衛と云う爺さんが、今夜もその犬の馴き具合を見に来たらしい。疳癪の強そうな縁の爛れ気味な赤い目をぱちぱち瞬きながら、獣の皮のように硬張った手で時々目脂を拭いて、茶の間の端に坐っていた。長いあいだ色々の労働で鍛えて来たその軀は、小いなりに精悍らしく見えた。

上さんが気を利かして、金を少し許り紙に包んで、「お爺さん少しだけれど、一杯飲んで下さいよ」と、そこへ差出すと、爺さんは一度辞退してから、戴いて腹掛へ仕舞いこんだ。

「お爺さんはいつも元気すね。」

「なに、もう駄目でさ。今日もこの歯が一本ぐらぐらになってね、棕櫚縄を咬えるもんだから、稼業だから為方がな

いようなもんだけれど……。」
爺さんは植木屋の頭に使われて、其処此処の庭の手入れをしたり垣根を結えたりするのが仕事なのだ。それでも家には小金の貯えも少しはあって、十六七の娘に三味線を仕込などしている。遊芸をみっちり仕込んだ縹緻の好い姉娘は、芝居茶屋に奉公しているうちに、金さんと云う越後産の魚屋と一緒になって、小楽に暮しているが、爺さんの方へは今は余り寄りつかないようにしている。
「私も花をあんなものにくれておくのは惜しいでやすよ。多度でもないけれど、商売の資本まで卸してやったからね」と爺さんは時々その娘のことでこぼしていた。
「お爺さんなんざ、もう楽をしても好いんですがね。」
上さんはお茶を汲んで出しながら、話の多い爺さんから、何か引出そうとするらしかった。子供はもう皆な奥で寝てしまって、二つになる末の子だけが、母親の乳房に吸いついた。勤め人の主は、晩酌の酔がまださめず、火鉢の側に胡座をかいて、にやにやしていた。
「どうして未だなかなか。」
「七十幾歳ですって？」
「七十三になりますがね。もう耳が駄目でさ。亜鉛屋根にパラパラと来る雨の音が聞えなくなりましたからね、随分不断に使った軀ですよ。若い時分にゃ宇都宮まで俥ひいて、日帰りでしたからね。あァお午後ぶらぶらと向を出て八時なら八時に数寄屋橋まで著けろと云や、丁と其時間に入ったんでさ。……ああ、、面白えこともあった。苦しいこともあった。十一の年に実のお袋の仕向が些と腑におちねえことがあって、可愛がってくれた里親の家から、江戸へ逃げて来てから、色々なことをやりましたが、火事にも逢や、女房にも死別れた。忘れもしねえ、暑い土用の最中に、餒じい腹かかえて、神田から鉄砲洲まで急ぎの客人を載せって、やれやれと思って梶棒を卸すてえとぐらぐらと目が眩って其処へ打倒れた。帰りはまた韋駄天走りだ。自分の辛いよりか、朝から三時過までお粥も啜らずに待っている嬶や子供が案じられてなんねえ。」
「兵隊にいっていた息子さんは、幾歳で亡くしましたね。」
上さんは高い声で訊いた。
「悴ですかね。」爺さんは調子を少し落して俛いた。
「二十三でしたよ。」
「戦地でかね。」と主が訊ねた。
「何に、戦地じゃねえがね。それでも戦地で死んだぐらいの待遇はしてくれましたよ。戦地へやらずに殺したのは惜しいもんだとかいうでね。自分の悴を賞めるのは可笑しうがすけれど、出来たにゃ出来た。入営中の勉強っていうものが大したもんで、尤も破格の昇進もしました。それがお前さん、動員令が下って、出発の準備が悉皆調った時分に、秋山大尉を助けるために河へ入って、死んじゃったような訳でね。」
「どうして？」

爺さんは濃い眉毛を動かしながら、「それはその秋山というのが〇〇大将の婿さんでね。この人がなかなか出来た人で、まだ少尉でいる時分に、〇〇大将のところへ出入していたものと見える。処が大将の嬢さまの綾子さんというのが、この秋山少尉に目をつけたものなんだ。これで行く度に阿母さんが出て来て、色々打ち釈けた話をしちゃ、御馳走をして帰す。酒のお酌や飯の給仕に出るのがその綾子さんで、どうも様子が可怪しいと思ってるてえと、やがてのこと阿母さんの口から縁談の話がでた。けど秋山少尉は考えておきますと、然いうだけで、何遍話をしても諾といわない。

そこで阿母さんも不思議に思って、娘が気に入らないのか、それとも外に先約でもあるのかと段々訊いてみるてえと、身分が釣合ねえから貰わねえ。高が少尉の月給で女房を食わして行けようがねえ。とまあ恁云う返答だ。うん、然うだったか。それなら何も心配することはねい。どんな大将だって初めは皆な少尉候補生から仕上げて行くんだから、その点は一向差閊えない。十分やって行けるようにするからと云うんで、世帯道具や何や彼や大将の方から悉皆持ち込んで、漸くまあ婚礼がすんだ。秋山さんは間もなく中尉になる、大尉になる。出来もしたろうが、大将のお引立もあったんでさ。

そこへ戦争がおっ始まった。×××の方の連隊へも夫々動員令下った。秋山さんは自分じゃもう如何しても戦に行くつもりで、服なども六七着も拵らえる。刀や馬具なども買込んで、いざと言えば何時でも出発が出来るように丁と準備が整えている。ところが秋山大尉は留守と来た。お前は前途有望だから、残って部下の訓練に精を出してくれなくちゃ困ると、まあ然ういう命令なんだ。

秋山大尉は残念でならねえ。〇〇師団のところへ掛合に行きも行った。五度も行って縋った。〇〇師団長も終に怒った。軍隊の命令は、総て、天皇陛下のお言渡しと心得ろと然う言って叱って返した。秋山さんも、何うも為方がねえ。

尤も奥さんの綾子さんの方でも、随分気はつけていた。遺書のようなものを、肌を離さずに持っていたのを、どうかした拍子に、ちらと見てからと云うもの、少しも気を許さない。どこへ出るにも馬丁をつけてやることにしていたんだ。夜分なども、碌々眠らないくらいにして、秋山大尉の様子に目を配っておった。

「これがあるから監視するんだな。可しこんなものを焼棄てて了おう。」というんで、秋山大尉がその手紙を奥さんの目の前で皆な火に燻べて了った。それで奥さんの方も気が弛んだ。

秋山大尉は、そうと油断さしておいて、或日××河へ飛込んだがだ。河畔の柳の樹に馬を繋いで、鉛筆で遺書を書いてそいつを鞍に挟んでおいて、自分は鉄橋を渉って真中からどぶんと飛込んじゃった。残念でならんがだ。」爺さ

んは調子に乗って来ると、時々お国訛りが出た。
「そこへ上官が二人通りあわせて、乗棄ててある馬を見るとえ――、たしかに秋山大尉の馬だ。どうも変だというので、百姓に聞いて見るてえと、もう少し前に、士官が一人鉄橋を渡って行くのを見かけたという話だ。帰って来さっしゃらねえところを見ると、どうも可怪いと云う。さア大変秋山を殺すなという騒ぎになって、××じゃ将校連が集って、急いで人名簿を調べる。そうして水練の上手な兵士を三十人選抜して、秋山大尉を捜させようと云うんだ。その人選のなかへ、私のとこの伜も入ったのさね。」
　吉兵衛さんの顔が、紅く火照って来た。そして口にする間もない煙管を持ったまま、火鉢の前に立膝をしていた。鼻の下にすくすく生えた短い胡麻塩髭や、泡のたまった口が汚らしく見えた。
「伜は水練じゃ、褒状を貰ってましたからね。何でも三月からなくちゃ卒業の出来ねえところを、宅の伜はたった二週間で立派にやっちまった。それで免状をもらって、連隊へ帰って来ると、連隊の方でも不思議に思って、そんな箆棒な話がある訳のもんじゃねえ、きっと何かの間違だろうってんで向へ聴合せたんだ。すると教官の方から疑わしいと思うなら、試してくれろっていう返辞なので、連れてって遣して見るてえと、成程技はたしかに出来る。こんな成績の好いのは軍隊でも珍らしいというでね……
　それだから秋山大尉を捜すについちゃ、伜も勿論呼出されて、人選に加わったと云う訳なんで……
　それで三十人の兵士は一度に河へ飛び込んだ。けど何しろ時間が経っている。それに河巾も広い、深さもなかなか如何して深い河だ。いくら捜しても、迹も見つかりっこはありゃしねえと云んで、皆なまあ一時引揚げることにして錨を流して見ることになったんだ。
　処が人数を調べてみると、上等兵の大瀬だけが一人揚って来ねえ。そいつは大変だと云うんで、また伜を捜すと云う騒ぎだ。だが、何処を捜しても姿が見えねえ。……何でも秋山さんは深い水の底にあった、大きな木の株に挟まっていたそうでね、伜は首尾よく秋山さんを捜しあてたにゃ当てたけれど、体へ摑まられたんで、どうにも恁にも足搔が取れなくなって了ったものなんだ。いくら泳ぎが巧くたって大の男に死物狂いで摑まられた日にゃ往生だからね。尤も水のなかの仕事だから、能くは解らねえ。よくは解らねえが、まあそうだろうと云う皆さんの鑑定だ。
　伜の体は、その時錨にかかって挙ったにゃ揚ったが、もう駄目だった。秋山さんの方は、それから大分日数がかかった。これはもう相も悉皆崩れていたという話でね。」
　爺さんはそこまで話して来ると、目を屢瞬いて、泣面をかきそうな顔を、じっと押堪えているらしく、皺の多い筋肉が、微かに動いていた。煙管を持つ手や、立てている膝頭のわなわな戦いているのも、向合っている主の目によく見えた。

「忘れもしねえ、それが丁度九月の九日だ。私はその時、仕事から帰って、湯に行ったり何かしてね、娘どもを相手に飯をすまして、涼んでるてえと、××から悴の死んだ報知が来たというんだ。私アその頃籍が元町の兄貴の内にあったもんだから、そこから然う言って電報が此処へ届く。どうも様子が能く解らねえ。けど、その晩はもう遅くもあるし、さアと云って出かけることもならねえもんだから、明朝仕事を休んで一番で立って行った。

それア鄭重なもんですぜ。私ア恁う恁うしたもので、これこれで出向いて来ましたって云うことを話すと、直に夫々掛りの人に通じて、悴の死骸の据ってるところへ案内される。死骸はもう棺のなかへ収まって、花も備えてあれば、盛物もしてある。ちゃんと番人までつけて、線香を絶やさないようにしてある。

そこで上官の方にもお目にかかって、悴の死んだ始末も会得の行くように詳しくお話し下すったですよ。その時お目にかかって、弔みを言って下さったのが、先ず連隊長、大隊長、中隊長、小隊長と、こう皆さんが夫々叮嚀な御挨拶をなすって下さる。それで×××の△△連隊から河までが十八町、そこから河向一里のあいだのお見送りが、隊の規則になっておるんでござえんして、士官さんが十八人おつき下さる。これが本葬で、香奠は孰にしても公に下るのが十五円と、恁云う規則なんでござえんして……

それで、『大瀬、お前は晴二郎の死骸を、此まま引取って行くか、それとも此方で本葬をして骨にして持って行くか、孰でも其方の都合にするが可い』と、まあ恁う仰って下さるんで……。そこで私は、この晴二郎には、左に右兄弟も親類もあることでござえますから、死骸を引取らして頂いて、一ト晩だけは通夜をしてやりとうごぜえんすと、恁う申しあげましたんです。

それでまア、本郷の山本まで引取るなら、旗が五本に人足が十三人……山本と申すのは、晴二郎の姉の縁先きなんでして、その時の棺側が、礼帽の上等兵が四人、士官が中尉がお一人に少尉がお一人……尤も連隊から一里のあいだは、その外に旗が三本、蓮花が三本、これは其処まで落すことになっているんで……。

その日は、それで一里のあいだ皆さんに送って頂いて、後は車に積んで元町まで持込んで来ました。

その翌日が愈々此処で葬礼と云うことなんで、その時隊の方から見送って下さったのが三本筋に二本筋、少尉が二夕方に下副官がお一方……この下副官の方は初瀬源太郎と仰也って、晴二郎を河から引揚げて下すった方なんでござえして、何かの因縁だろうから、殊に終まで面倒を見てやれと云う連隊長からのお言葉だったもんですから、まア色々とお世話をして下すったんですよ。

その日の骨あげには、兵士一小隊見送りに来る筈でござえしたが、これが丁度九月の二十一日で、二十五日には×××の連隊もいよいよ戦地へ出発しなくちゃならねえんで

兵士を繰出している訳にいかねえで、それだけお廃めになりましたがね、それでも四十人だけ手のすいてる方が、寺まで来て下すったと云う話でござえしたよ。それから此方じゃ、区長、兵事掛。兵事義会の重立ち、何でも礼服を着た方が三方か四方送って下すった。

職業は瓦屋でござえんすけれど、暫らくでもお上の役を勤めていたばかりで、大層お手厚い葬礼でね。此方とらの餓鬼が、屋根から落ちて死んだって、誰方か何といって下さるものけえ。

その日、初瀬という方が、持って来て下すった香奠が、将校方から十五円、兵士一同から二十円……これは皆さんが各々の気心で下すったもので、兵士方は上官から御内意があって、一人につき二銭か三銭のがなれど、人数にすれば二十と云う金高になるといった訳で。他に兵事義会から十円……それから大将の屋敷から十円、秋山大尉の親御から五円……何でも一切で百円はござんしたろう。

それから、確か二十三日の日でござえんしたろう、××××大将の若旦那、これはその時分の三本筋でしてね、つまり綾子さんの弟御に当るお方でさ。その方と秋山さんの親御が、区役所の兵事課へ突然車をおつけになって、小野某と云う者が、田舎の何番地にいる筈だが、そこへ案内しろと仰ったそうです、兵事課じゃ、何か悪いことでもあったかと吃驚したそうでござえんすがね、何々然云う訳じゃねえ、其小野某と云う者の家に、大瀬上等兵の親御がある筈だ、その老人に逢わしてくれと云うんで、その時そのお二方は、手前とこまでお訪ね下すったが、私は外へ出ていてお目に掛りませんでした。

お二方はそれから駒込の菩提寺をお尋ねになって、晴二郎の墓へお詣り下すったうえに、お経料までおいてお出になったそうでね。」

「お爺さんにお金が沢山下ったでしょうね。」上さんは泣出す乳呑児を揺りながら訊いた。

「一時賜金が百三十円に、年金が四十八円ずつでござえますがね。参謀本部へ、一時金を受けに行くと、そこにいた掛の方が、

『大瀬晴二郎の父親の吉兵衛と云うのあお前か』と云うんです。へえ、さようでござえんすと申しあげると、晴二郎は内地で死んだんだから、金は下げる訳にいかん、帰れ帰れと怎う云うんでしょう。

私も為方ないから、へえ然ようでござえんすか、実は然云うお達があったもんですから出ましたような訳でと、然う云うとね、下役の方が、十二枚づつ綴じた忰の成績書をお目にかけて、何かお話をなすっていましたっけがね、それには一等一等と云うのが、何でも幾枚もあったようでしたよ。」

「秋山大尉の方は、それ限かね。」

「秋山さん方かね。此方の揚ったのは、忰の骨揚げのすんだ翌日でしたっけがね、私も詳しいことも知らねえが、△

△中の船頭を一週間買いあげて、捜したそうです。これは×××大将の方からも、入費が出たそうで……その骨揚の日には、私も寄ばれましたっけが、伜の筐の品を二品ほしいと仰ゃるんで、上等兵になった時の写真を二枚持ってまいりましたがね、その時の儀式と云うものが大変なもんでした。

××大将は戦地へ出向く連中から、電報を御覧になって引還してお出でになって、私もその時お目にかかったがね。広い書院は勲章や金モールの方で一杯だ。そこへ私にも出ろと仰ゃって下さるんだけれど、何ぼ何でも状が状だから出る訳に行きゃしねえ。

するとお前さん、大将が私の前までおいでなすって、お前にゃ単た一人の子息じゃったそうだなと、恐入った御挨拶でござえんしょう。見れア伜の位牌を丁と床の間に飾ってお膳がすえてあると云う訳なんだ。坊さんは、××大将は浄土だが、私は真言だからというので、わざわざ真言の坊さんを二人まで呼んで、伜のためにお経をあげて下すったがやすよ。

それから、つい近年まで、法事のあるたんびに、日が同じだからと云うんで、伜の方も一緒にお供養下すって、供物がお国の方から届きましたが、私もその日になると、百目蠟燭を買って送ったり何かしたこともござえんしたよ。

……それで仲間の奴等時々私を揶揄いやがる。息子が死んでも日本が克った方がいいか、日本が負けても、子息が無事でいた方が好いかなんてね。莫迦にしてやがると思って、私も忌々しいからムキになって怒るんだがね。」

悼ましい追憶に生きている爺さんの濁ったような目にはまだ興奮の色があった。

「まるで活動写真みたようなお話ね。」上さんが、奥の間で、子供を寝かしつけていながら言い出した。

「へえ……これア飛んだ長話をしまして……。」やがて爺さんは立てていた膝を崩して柱時計を見あげた。

「私も、これからまた末の女の奴を仕上げなくちゃなんねえんだがね、金のなくなる迄にゃ、まア如何にか物になろうと思うんで……。」爺さんは然う言って、火鉢の側から離れた。

（一九一二年一月「新潮」）

露台

小川未明

一

　志崎は家を出て湯屋に行った。その時は別に頭に考えているようなこともなかった。眩しいように明るい日であった。偶然湯屋で彼は五年前に共に学校を出た小寺という男に出遇った。それが志崎に意外であったというのは、小寺は田舎の中学校の教師をしているということを聞いていたからであった。学校にいた当時はあまり親しく口も利き合わなかった間柄であったが、こうしてしばらく別れていて後に遇ったので、言うに言われない親しさと懐かしさとを感じた。けれど彼は今なにをしているだろうという疑いが志崎の頭に起った。
「やあしばらくでした。お変りもなく。君は北の方へ行ってお出になったのではありませんか。」と志崎は言った。
　小寺は湯から上って着物を着ていたところで、帯を巻きながら挨拶した。
「そうです。いや田舎にいたので全く駄目になってしまいました。」と言って笑った。この淋しい笑いは、学生時代から志崎が傍でたびたび見て、眼に残っている笑いであった。二人は互の居所を話し合って、遊びに来るようにと言って別れたのである。志崎のいる所と小寺の下宿している所とは、わずかに二三町しか隔っていなかった。志崎にはその下宿屋の内部の光景がすぐに眼に浮んだほど、ずっと以前であるが他の人をそこにたびたび訪れて行ったことがあった。
　志崎は友が戸を開けて明るい道の上に出たのを見送ってから、湯に浸ったのである。そして小寺の目下の境遇などをいろいろに想像して家に帰るまで、頭を空虚にしていることが出来なかった。
　それから志崎は小寺と互に交通するようになった。学校時代に無口な男と思っていた小寺は、時々皮肉も言えば、ようやく志崎には胸に蟠りのない正直な面白い男と思うように変った。小寺は国に年取った母親がある。その母を養わなければならなかった。彼が今まで勤めていた北国の某中学校では比較的生徒間に人望があったにもかかわらず、教員免状を有していないという口実によって高等師範出身の校長から排斥せられた。彼はその当時の模様を委細志崎

に物語って聞かせた。そして至る所の学校では官立学校出身者と私立学校出身者との間に、目に見えない暗闘があることを告げた。ちょうど彼等は種族を異にしている人間同志のように反目する、官立学校出身者は文部省という偶像を背景にいつも圧制的態度に出るのが常である。こうして年々教員免状を有していない男は実力があり、人格が好かったにしろ、異った世界に住む人間として排斥せられるのであった。そして人間の幸福を目的として営まれている社会はこの不条理な生涯の迫害者に対して戦うような機関もなく、偶像の改造にも心掛けていない。これが小寺の語った中での不平の重なる意見であった。志崎は、国の中学の年取った体操教師が七八年前に、まだ自分がこっちで学生生活をしている頃出京して、体操の中等教員の資格免状を取らんために、頼って来たことを思い出した。その教師は古い軍曹であった。好い人物で、生徒間に人望があったというより、むしろ愛されていたのであるが、校長が変って、某理学士が来てから、この教師を迫害したので、他に転ずる意気もなかった老教師は免状を取らなければならぬ考えで、遥々上京して来たのであった。その教師が試験に及第したか、落第したか知らなかったが、その人は明る年病んで死んでしまった。その人のことが小寺の話を聞いているうちに志崎の頭に浮んで来た。そして、彼の老教師に免状があったとなかったとが、そこにどれだけ生徒を教える上に異った影響があるであろうかと考えた。

小寺は学校を退いてから東京に出て口を探したのである。学校時代に教った独逸語の教師の世話で、独逸から来ている休職将校に日本語を教える家庭教師の口を得たので、毎日通って、割の好い報酬を得ることが出来た。ある時はその将校に従いて箱根へ行き、またある時は日光あたりに滞在していたことがあった。しかしこういうようなことも二月とは続かなかった。その将校は急に国に帰ることになったので、小寺は二たび放浪の生活に入らなければならなかった。この間にあって常に心を悩ましたのは国にいる一人の年取った母親に送る金の心配であった。今の下宿に来たのは、彼が将校を横浜の埠頭に送って帰った日の午後である。前途のことを考えると麹町の高等下宿を引き払って、この町の小さな下宿に来たのである。

志崎も現に苦しい生活を送っていた。長らく子供が病気であったので、彼の働きだけでは到底薬価を払い滋養を与えることも充分でなかったので、妻が嫁に来る時分に持って来た着物を売り、珊瑚の根掛けなども売ったのであった。彼女の母が三十八円出して求めてくれたのだとよく妻はその根掛けを眺めては言っていた。その品を志崎が郷里にいる時から知っている、今こっちで質屋の番頭をしている男に頼んで売ってもらったが九円にしかならなかった。この踏み倒されたような忌々しい価であるとは知りながら、その時は金に窮していて差当り他にどうする考えもなく黙って売らなければならないような場合にも出遇って来

た。
夕暮方志崎は小寺の下宿屋に出掛けて行った。小寺はその時は既に一月分の宿料が滞っていたのであった。それであるから彼の所へ訪ねて行っても取次に出る女中までが客に対してすら好い顔をしなかった。それ位であるから、もとより小寺が手を叩いても容易に返事をしなかった。小寺はわざわざ汚れた茶道具を自分で運んで、勝手元へ出て行くようなこともあった。ある時志崎が行くと小寺は机の抽斗から飴玉の入った紙袋を取り出して、
「まあこれでも摘んでくれたまえ、茶を上げたいが主婦の厭な顔を見なければならんから。」と言った。この時志崎はつくづく友の境遇が哀れに感ぜられた。
「お茶なんかいらん。まだ口は見当らないかね。」と志崎は言って、友の机の傍に坐った。
小寺は自分の敷いていた灰色の毛布を外して、志崎に敷かせようとした。志崎は友が畳の上に坐らなければならぬのを気の毒に思って、自分も敷くのを辞退した。
「じゃ怨みっこなしに二人で敷きましょう……。」と小寺は例の淋しい笑いを見せて、一枚の毛布を拡げて二人が心淋しく、相対してその上に坐ったこともあった。この毛布は志崎が心のうちで小寺が教師をしている時分に求めた品であろうと思ったほどに古びたものであった。
小寺は奉職の口を探すために終日先輩の家を訪問した。また友達の家などを訪ねて歩いた。けれども他のことに力を入れて世話しようとするものもなかった。小寺も終にはまた行きづらくなって、もはや茫然として一日外に出ずに考え込んで暮らしているより仕方がなかった。先輩といっても学校教師のくれた紹介状は大抵学校への紹介状であったが資格免状のないのが至る所に祟って効を奏しなかった。ただ一つ雑誌社への紹介状があったので、訪ねて行って編集者に面会すると、面白い訪問記事を持って来てくれるならば買おうという条件で、それは目下の生活に安心を与えるものでなかった。小寺はすべての衣類や多少あった書物を売り尽して湯銭にも困った時に、じっとしているよりは、その茫漠として見当の付かない訪問記事を取るために努力して見ようというような決心をしたのであった。
その雑誌は一は実業雑誌で、他は女の雑誌であった。小寺は先ず編集者に面会していかなる人々を訪問したら好かろうかということを聞き、その人々の姓名を手帳に書き付けた。次にどんな問題を聞いて来たらいいかと問うと編集者は、単に面白そうな問題を聞いて来て下さいと言って、この眼前の無経験な男を蔑視するような冷かな笑いを片頬に浮べた。神経の鋭くなっている小寺は氷に触れたように感じた。小寺は訪問記事の題目に関して志崎と相談した。そして最も謹直な先覚として青年間に同情ある某博士を第一に暑い日中を冒して汚れた洋服を着て訪問に出かけて行った。暮方彼は汗を垂らして埃に塗れて疲れて、面白くない下宿に帰って来た。彼は世間の博士に対する批評の間違

っているのを始めての訪問で感じた。少なくも自分という貧しい名もない書生に対しては、博士は警戒なしに地金を出して見せた。こうしてようやく三種の原稿が出来上った。

ある日彼はこの原稿を雑誌社に持って行った。編集者はその記事を一覧して、三つの中で一つを採用した。しかし沢山な文字を削って枚数に差を生じた。こうして彼は四円の原稿料を受取って帰った。二たび彼は慣れない訪問記事を書く気にはなれなかった。主婦と女中とが隔日毎に宿料の請求にやって来た。その女中は必ず一人の女中にきまっていてこの家に長くいるように思われた。痩せた女で蔑むような眼付きで小寺を見た。ある日小寺は思い切って言ったつもりで、女中にこう言った。

「私はどうも出来ないのだから、飯を食わしてくれなければそれでもいい。どうかそう催促をしてくれるな。」と言ったのであった。それぎりその女中は来なくなって、主婦ばかりやって来た。

ある日志崎と小寺の二人は散歩に出かけたのであった。夏もやがて逝かんとしている。蜩の啼声が森の方から聞えて来た。町の屋根を夕日が赤く彩っていた。二人は人や車の通っている町を過ぎて、大空の下に静かに悠々として呼吸している野原に来た。そこで夕日の彩った草の上に坐って語り合った。二人には美しい自然の景色も心を酔わすことが出来なかった。赤く燃えた太陽も、青々とした野原も寥しい草の葉の囁きもなんの慰みにもならなかった。

小寺は志崎に向って今夜にも下宿を夜逃げをしようかと相談したのである。志崎は小寺の考えを聞いてみたが、どうしても夜逃げということがいかなる境遇にあったにせよ最良な方法とは思われなかった。なにもみずからを卑しくして二たび顔を合わされないようにすることをいいとは言われなかった。全く金を持たないのが事実であれば、またなんの悪意があってしたことでないということが事実であれば、どうすることも出来ないであろう。然るに全く金のない者に向って請求する者があれば却ってその者が無理だといわなければならない。だからこの場合、事情を打ち明けて時機の来るまで待ってもらうようにした方がいいと志崎は思ったから、小寺に兎も角も主婦に事情を打ち明けて国へ帰ることにした方がいいと言ったのであった。

小寺も首肯いた。こうして二人は学校を出てから間もないのに、生活の苦しみをそれぞれ異った境遇にあって経験していたのである。二人は私かに少年時代の日を思わざるを得なかった。殊に夏の夕暮方には懐かしい記憶が多かったので……。いつしか血のように赤かった夕日は、地平線に沈んで、頭の上には青い深い空の色が拡がっていた。無数の星の光りは秘密を幾千年の間囁いて来たように今も、瞬いていた。二人は沈み勝ちに町の方へ帰って来た。

二

志崎が机に向って、庭の黒ずんでいる青桐を見ながら、暮方のうす明りでペンを採っている所へ、小寺は悄然としてやって来た。

「や、意外に私を信用して借金を国へ帰るまで待ってくれました。国へ帰ったらどうにかして送ります。」と立っていながら言って、机の傍に来て坐った。志崎はランプを点けてしみじみとした気持で友の顔を見て、悲しいような心持になった。妻が隣の室で泣く児をあやしているのが聞えた。日にまして秋が来るのを思わせるような蜩の啼声がどこかの森で、涼しく磬を叩いているように今日の夕暮を惜しんで鳴いている。

「君にも、お別れですね。」と志崎は遠く西の方の国へ帰る友の身の上を思い、また昨日は二人で郊外を散歩したことなどを考え出した。

「それで実はお別れに来たのです。」と小寺は痩せた顔に例の淋しい笑いを見せて言った。生活の苦しみを経験して来たようななんとなく険しい動きの少ない眼の中に水晶のような涙の光りを見た。

二人はなんとなく落着いて話をしていることも出来ないように、限られている時間の経つのを慌しく心に感じた。ちょうど後方から急き立てているもののあるような気がした。小寺は今夜の十一時に立つと言ったのである。そして彼は気忙しそうに帰って行った。志崎はこれで小寺に別れれば、いつまた遇うか分らないと思ったから、せめて別れる前にもう一度二人が対い合って盃を交わしたいと思ったのである。彼は妻に向ってなにはなくとも、魚と酒を町へ行って買って来て置くように言って、自分は小寺を呼んで来るために家を出かけて行った。青い空の色は次第に濃い紫色に変じて来た。風は木の梢を吹いて、蝉の鳴声はだんだん西の方の淋しい野原の方へと遠退いてしまった。志崎は道を歩きながら空を仰いで、もう明日の今頃は小寺は故郷に帰っているであろうと思われた。見たことのない田舎の景色や、彼の年取った母親の顔などが想像せられた。ただこうしてたまたま遇った友に別れるということにもなんとなく人生の無情というようなものがあるのを覚えた。

小寺の室へ入ると、小寺は両肌を脱いで荷物を片附けていた。汚れたシャツや、黄色くなった夏帽子などは、この前見た時と同じく壁にかかっていたが、机の上は乱雑になって、筆や紙や手拭などがごっちゃになって、鞄の中へ入れられようとしている所であった。小寺は友が入って来たので、急に手を止めて、笑顔で迎えた。

「こんなに散らして、坐る所がないようにして……。」と言いながら、傍にあった着物や、書物などを片附けにかかった。志崎は構わずにすることをしてくれいと言った。そしてなにかすることがあったら手伝ってやろうと言った。志崎はこうして眼の前に友が都会を逃れて行く有様を見て

胸が塞らずにはいられなかった。曽てこの人に対して感じたことのなかった物悲しい同情が自分を深い沈黙に引き入れた。この刹那に、二人の間に極めて明らかな自我の対立というような意識を経験することが出来た。志崎は真情から自分の言葉を友に聴き取ってもらいたいという心持で、是非君の立つ前に共に酒を飲みたいと言った。始め小寺はこの事を無益といって辞退したけれど、遂に辞退するほどのことでなく、ただ別れを惜しむに過ぎないと志崎が言ったので、小寺は荷物を取片附けたら直ぐに行くと言って約束したのである。

窓の障子は開け放たれてあった。庭頭に植っている木立の葉が青硝子のような空にくっきりと浮き出て窓際に垂れ下っていた。その小枝にも風が当って微かに戦いている。窓から見渡すと下の屋根を並べた町には、糠星のように灯火の影が、澄み渡った空気の裡に閃めいている。遠く高台から洩れて来る灯火は、空中に霞んで海に浮ぶ火のように眼に映って来た。たえず少しの休む間もなしに起っている都会のどよめきは、悲壮の音楽のように耳に聞かれたのであった。その調和した音律の中には遠くを走っている電車の笛も音も混っていた。志崎はいつもこの物音を聞くたびに自分が都会の中に生きているということを痛切に感じたのであった。そして日々生活と戦って、今日まで命を繋いで来たということを省みて、なんとなくみずから信じて見るような気持になった。今同窓の小寺がこの都会に生活の途を見出すことが出来なくて、今から数時間の後にはS停車場から、夜行列車に身を委ねて、逃れ出すのだということを考えると、今更ながらこの広い都会の裡にただ一人の小寺を容れる余地がないのであろうかというような疑いが起った。同時に人間の運とか不運とかいうものの目に見えない不思議な力などを考えた。なんの自覚もなく、なんの苦しみもなく、またなんの尽くすところもなく、無為に、満足に生活しているものが多いのに、相当の学力と知識を有しながら食って行くだけの金が取れない者もあるということはなんらの矛盾したことであろう。これはその人の罪よりも社会の制度が不完全であるがためだともいえると思った。そしてこの不幸の友のために同情すると共に、誰に対してということはないが、憤りが頭の中で目醒めて来るのを感じた。そして人間の生活上の幸福と不幸とは、もしくは富裕と貧窮とは、そこになんらの必然的な正しい原因があって生ずるのでなくして、全く、偶然な機会に原因していることの多いのを思ったのであった。

志崎は不運な者、貧しい者を、かれらが汚い様子をして、悲惨な生活を営んでいるからといって、心に卑しむことの不正であると思ったばかりでない。富者と等しい権利を持ち、主張を持ち、主義を持つ上になんらの異った人間でないことを痛切に感じたのであった。

志崎は兎も角も小寺の立つ前に少しの時間でも酒を飲んで友の健康を祈りたいと思った。そして堅く小寺に荷物を

片附けたら来るようにと言って家に帰った。自分が留守の間に妻は子供を負って、町へ行って魚と酒を買って来て支度をしていたのであった。志崎は、徳利の中に酒を入れて、煮え立つ鉄瓶の中に差し込んで燗を附けたり、ランプに石油を注いで心を切って明るくしたり、座布団を正しく置いて、友の来るのを待っていた。彼は縁側に出て、庭の繁った木立の間から紫色に肌に露われている夜の空に見入っていた。まだどこかに明るみの残っているような匂いを懐かしく思った。こうして志崎はなんとなく心が落着かなくて、あちらに行き、こちらに来たりして、ただ小寺の来る足音を聞き取ろうと先刻から耳を傾けていた。いくつか足音は家の門辺を過ぎたけれど、戸を開けて入って来るのはなかったので、「どうしたのだろう……。」と言って、志崎は時計を見た。小寺は十一時の汽車で立つのであったが、もはや夏の夜は暮れたばかりであると思ったのに、いつとはなしに時が経って時計が九時三十分になっていた。

妻は長火鉢の前に来て徳利を抜いて手を触れて見て、

「もう燗が付きましたよ。」と言った。子供は妻の背にすやすやと眠っていた。病身の子供は眠っていても不快な夢を見ているように時々うめいて、落着きのない顔付きに、疲れたような色が不安な赤いランプの火に照らされているのが認められたのであった。志崎は遂に待ち兼ねて、再び小寺の下宿屋に行ったのであった。すると女中が取次に出て、

「小寺さんは、少し前に、もうお立ちになりました。」と言った。志崎は悄然として、力なくうなだれて歩きながら家に帰って来た。急に渇を覚えて息の塞るような惰の急変を感じたのであった。その夜淋しくひとり、小寺の姿を目に描いて机の前に坐って送ったのであった。

三

志崎はその年の秋の始めに、今まで住んでいた家から他へ移ったのであった。小寺はあの夜別れたぎり一度も音信が来なかった。志崎は小寺とは、こうして全く見もしまた容易に聞くことも出来ないように隔った所で、互に異った生活を送る身の上となった。けれど志崎は時々小寺がその後どうしているだろうということを考えた。考えるたびに彼の淋しい笑顔などを思い浮べることがあった。

志崎はその後自分等の気分と主義を標榜したような雑誌を起そうと計画したことがある。年若い学生で、幾百金を出した人があったので、春の花が寥しい梢を彩る頃に第一号を出すことになった。けれどそういう対世間の計画は結果が矛盾したことに終るのが多いもので失敗に帰した。二たびそれを継続するにはある時節と更に金とを要せなければならなかった。遂に廃刊することに決ってその後始末をするために、志崎の家に雑誌に関係した二、三の人が集った夜、話はいろいろのことに移ったが、中に平常理想主義

などと言っている男で、しかも友人の間柄でありながら、案外頼みにならなかったということや、こういう仕事でもしてみると、今までその人の表面だけを知って深い所まで気附かずに過して来たのが、その男の真の人格だの、価値などというようなものまでがほぼ覗われることが出来たのが、せめてもの収穫であるというようなことも語った。何しろこうして世間というものが少しでも分ったが、自分等の好い経験になったというような話もあった。兎に角この会合で一段落着いたのである。

うす青い水のように、更けると共に色褪めて行く初夏の空は、静かに木々の頂きに流れていた。障子を開け放った六畳の室で、三、四人が勝手に臥転んだり、胡坐を組んだりして、いろいろの話をつづけていた。この室は志崎の書斎をも兼ねた室であった。当時志崎の妻は、例の病い勝ちな子供が、この時は熱病にかかって、入院していたので、看護に附いて病院へ行っている留守で志崎は家にただ一人であった。志崎の頭にはたえず、病院にいる子供の心配が絶えなかった。また折節自分等の計画した雑誌も廃刊せなければならなくなり、また故郷ではちょうど気にかかる問題が起って居り、のみならず入用の金に迫られて働かなくてはならぬので、いろいろの心配やら、苦労やらでなんとなく自分にも意気が沮喪しているのが分ったのであった。このいろいろの心配の中でも、子供の病気が考えるとなしに、たえず頭の上に暗い押え付けるような影を投げているような気がした。人間の命というものは分らないものであるから、達者でいる間に愛してやらなければならぬものだというような考えの起ることもあった。この時も、志崎からかかる話題の緒口を出していつしか人間の生活というようなことや、死というような方面に関した話がいろいろに人々の口から取り交わされた。こういうような話でもしているのが、この頃の志崎には慰めとなるように思われた。頭の中に暗い影の如く滞っている思想を、こうして吐き出して言葉に現わしているだけでも、なんとなくその時は気が軽くなるように感じたのであった。志崎は恐らく自分ほど誰も深く死という問題について実際的に考えているものはあるまいと思って、穿ったような眼付きでみんなの顔を見ていた。そして死を怖れないというような説や、空想的に解釈したようなものには同感が出来なかった。

この時集った者の中で年少のMは、志崎に向ってAという人を知っているだろうと言った。そしてAが死ぬまで志崎の愛読者の一人であったこと、最近彼の自殺したこと、また彼が死ぬ二、三カ月前に彼に遇ったこと、始めてMがAを知ったのは、Aの親戚関係の家にMが下宿してからのことであることまで語ったのであった。この話が志崎に意外の驚きを与えたのは、Aの自殺ということである。志崎にはAが少年時代の親友であったからだ。恰も静かな瞑想の天地に急激の波濤を上げて黒い物が襲って来たように、この時志崎の心は驚かされたのであった。志崎には、曽て

のことを忘れることの出来ないほど旧い、親しい友達であった。然るにこの七、八年間全く、音信すらも絶えたというものは全くAの病気であることが原因であって、二人の間を疎隔したとも言える。

二、三ヵ月前、神田のある印刷所で、Mが雑誌の校正をしていた時、ふと頭を上げると曇った、破れた硝子窓を透して、電車の往来している、乾き切った道の上をレールに添うて力なく歩いているAの姿を認めた。Mは早速印刷所を飛び出て、Aを多くの人々の中から呼び止めた。Aは屢々血を吐いた後で、非常に衰弱していたので、立って話をしている間にも息苦しそうな様子を明らかに相手の者に感じさせた。二人は少時の間を物忙しい、また悲しい気持で語った。Aはこれから〇〇〇の孤児院に帰るのだと言って別れた。これがAとMとの最後の別れであった。午後の日の光りの照らした黄色な町には金魚のように赤い旗が閃めいていた。勧工場の二階から、売出しの楽隊の音色が、塵で煙ったような空気の裡にか弱い響きを送っていた。

「どうして自殺なぞする気になったのだろう。」と志崎は、頭が熱って来るのを覚えて、早くその事をMの口から聞きたかった。

次のような事実が、Mの口によって語られたのである。その時ここに集っていた人々は、寒い様な沈黙に口を噤んでいた。

Aにただ一人の姉があった。その姉だけは天恵にも病気の遺伝を免れたので、現に健康でこの都会の某所に嫁いでいる。夫はある役所に務めて相当に暮らしている。けれどこの二人は病んでいる弟を嫌ったのである。姉弟はよく喧嘩をした。この世に於いて楽しみ少ないAは、早く苦痛を逃れようとした。彼はある日、教えていた孤児院の生徒に別れを告げて、愛読の書物などを与えた。ただひとり、彼は霊岸島行きの汽船に乗った。夕暮方の紫色の波を切ってやがて後にした岬の影が霞んで見えた頃は、汽船は渺茫たる太平洋に出ていたのであった。Aは屍を海底に沈める目的であったので、乗客の隙を覗って身を波の中に没したのである。汽船は形ばかりの捜索に取りかかったが、その時屍は見当らなかった。

志崎はMの話を聞いている間に、いろいろの空想が頭の中を去来した。姉夫婦に関して、Aの屍に関して、汽船の捜索に関して、彼等の心理状態やら、光景などがさまざまに想像せられたのであるが、Mの話を聞き終る時分には、頭が茫然として、暴風の去った後の村のようになにもかも忘れられて、ただがっかりとした気持であった。そしてただ、

「死骸は見付からないのだろうか?」と半分ひとり言するような調子でMに向って聞いた。Aの死骸は、それから幾日かの後、潮流の不思議な関係から、彼が長らくいた孤児院のある村の海岸に漂着したということであった。

志崎は、これ以上MにAのことを聞く気にもならなかっ

た。A――と自分。それはここにいる人々には分らない関係であった。志崎は、もはや黙っていたかった。そしてひとりになって考えたかった。なんとなくみんなの帰るのが待たれたのであった。

遂に雑誌の後始末も済んで、その夜は、こんな風な話を終りにして、やがて同人は解散したのであった。

四

志崎はAが自殺した時分の二十日ばかり前の新聞を探したが、それに関した記事は遂に見落して読むことが出来なかった。Mが某新聞に短い記事が載っていたと語ったからである。人々の帰った後で、志崎はひとり机の前に坐って暗い庭に面して追懐に耽った。清らかな世界から洩れ来る微かな星の光りが、次第に自分に近づいて来るように見えてその星を見詰めながらAの面影を偲んだのであった。小学校時代に、Aが自分の家に遊びに来た時二人は裏の庭に出て、林檎の実を取ったことがあった。Aは木の下に立っていて、自分が木に上って、実を投げるのを一つ一つ拾っていた。またある日二人は町からの帰り途に寺の大門の敷石の上に立って、買って来た少年雑誌を拡げて、考え物の懸賞宿題について半日ばかり立ち暮らしたことがあった。前後して二人は上京したのである。その後は異った方面に分れて生活の道を立てた。そして遇う機会がなかった。しかるにある日幾年目かでAが志崎を訪ねて来た時には、既にAは曽て医者から死の宣告を受けたこともあったという後であった。彼は青い顔をして、苦しそうにする呼吸には著しい臭気が混っていた。

この時から二人は昔のように打ち解けることが出来なくなった。志崎の顔には暗い怖れがあった。Aの顔には冷かな嘲りが潜んでいた。二人はその日江戸川の縁を散歩したけれど、常に制し切れない怖れが自然に互の間に際立った三、四尺の距離を設けていた。その時志崎は、真に感情と知識の苦しき争いに泣きたくなった。

「僕も、極端なエゴイストになってしまったよ。」と志崎は友に向ってなにかの話に附け加えて、浅ましい自分を懺悔するような心地で言った。それは言わなくてもいい場合であった。そしてこの時が今になって見るとAと志崎との最後の別れであったことを思うと、志崎には畢竟生を終るまで、償うことの出来ない感情の上の疚しさを感ぜずにはいられなかったのであった。

静かな夜である。志崎は眸を上げて淋しい、音とて聞えない大空を見渡して、一つ群星からかけ離れた所に微かに光っている星を探し出した。そしてその星をしばらくAだと思って眺めていた。

志崎は、妻が子供に従いて病院へ行ってから、自分ひとりで食事をしたことが、はや幾日かつづいた。けれどやは

り面倒になって食べずに済ましたこともあれば、また空腹を感じた場合に外へ出て食べて来るようなこともあった。昼頃戸棚を開けると、そこに煮た魚から小さな蛆が湧いて蠢めいているのが眼に入った。志崎はその腐れた肴の切身の入っている皿を取り出して仔細に見ると、汁には白い黴が浮いていて、肉は臭いを放って紫色に変っていた。これは二日前に近所に住んでいる叔母が、下女に持たして来たのであるが、その時既に新しい魚でなかったので、一箸附けたばかりでそのまま戸棚に突込んで置いたのであった。志崎はなにごとによらず著しく経済的になった叔母のことが念頭に浮んで来た。彼女にもまた一度は抒情詩的な時代があった。熱涙を濺いで運命を呪い、世を憤ったこともあった。然るにアネモネのような恋も褪せヒアシンスのような空想も枯れて、灰色の長い月日を無抵抗な亭主と平和に満足して送っている。彼女も安心の光りを聖書に発見することが出来ずして、貯金帳に見出した一人であった。志崎には人間の一生というものが、常にかくの如くにして無残に青春を葬り、死にゆくものであることを考えざるを得なかった。炎々として灼くがように日光の照り付けた大地に脊を投げ捨てると忽ち小さな虫の屍は白く乾びてしまった。そこには、動物の予め知ることの出来ない、大きな自然力が待ち受けていたようであった。

志崎はやはり飯を食べる気にもなれなくて、自分の室に来て、畳の上にごろりと倒れて昼寝を貪った。午後も二時を過ぎてから、ぼんやり眼を開いて、庭の木立の葉に日の光りが艶々しく流れているのを物憂い気持で眺めていると暑そうにして歩いて来た配達夫がはがきを二枚置いて行った。志崎は早速玄関に出てはがきを拾い上げた。一枚は妻からのはがきであった。それを読むと子供の様子があまりよくないことが書いてあった。志崎はまた頭から押え付けられるような重苦しい感じを受けた。そして他の一枚の文面に気のない注意を向けると、それはどうしても見慣れない手蹟であると思ったので、裏を返して差出人の姓名を見ると、思いがけない小寺から来たはがきであった。

小寺と別れてから、かれこれ一年になる。志崎はその間に自分の生活の変遷を知る外、小寺のことについて全く知る機会がなかった。文面によると、小寺はその後熊本の女学校に奉職をして、今もなおそこに教師をしている。思うに比較的平和な生活を送っている。そしてこの頃妻を迎えたというようなことが書いてあった。志崎は、別れてから一年になる二人の間の生活を顧みた。ここにも、人間の予め知ることの出来ない運命というものを感じずにはいられなかった。自殺したA、自分の病院にいる子供のこと、また去年別れた小寺のことなどが、雑然として頭に浮んで来た。しかし既に死んだものや、どうしても助けることの出来ないものは、いくらこれを惜しみ、思ったって仕方がない。それよりは生きつつあるもの、苦しみ戦いつつあるものの未来に対して幸福を祈らなければならなかった。

その夜、志崎は久しぶりで町の料理屋の二階に上った。そして彼はただひとりで盃を上げた時に、心のうちで小寺の幸福を祈ったのであった。けれど彼は酔うことが出来ずして　次の瞬間には自分のしていることも、考えていることも畢竟空想に過ぎないというような気がした。暗い、知ることの出来ない、怖しい運命が生もまた死も、すべてを支配していると考えたからだ。彼は露台に出て、いろいろの色彩に輝いている町の灯火を眺めながら、そらの下に営まれつつあるその色の如く異った、さまざまの生活について想像をめぐらした。また、自分の残り寂しき半生に於いてなされなければならぬ事について多くの思いを潜めた。頭の上には星影が燦然として、海底を覗くように清らかな感じがした。視力のつづく限り遥かの地平線にまで乳色の天の川が渺茫として、帯のように廻っていた。

　志崎の眼には、おのずと小寺に別れた夜の光景が浮んで来た。

（一九一四年「底の社会へ」所収）

トコヨゴヨミ

田山花袋

一

　雑嚢を肩からかけた勇吉は、日の暮れる時分漸く自分の村近く帰って来た。村と言っても、其処に一軒此処に一軒という風にぽつぽつ家があるばかりで、内地のようにかたまって聚落を成してはいなかった。それに、家屋も掘立小屋見たいなものが多かった。それは其処等にある木を伐り倒して、ぞんざいに板に引いて、丸太を柱にして、無造作に組合せたようなものばかりであった。勇吉も矢張りそういう家屋に住んでいた。

「もう二年になる。」

　勇吉はいつもそんな事を考えた。海岸に近い村に教鞭を執っていた時分は、それでもまだ生活に余裕があった。

「何うせ、田舎に埋れた志だ。無邪気な子供を相手に暮して行くのが自分には相応わしい。」こう思って自から慰めた。国から兄弟達が心配して送ってよこしたような妻は、かれがまだ海を越えて此地に渡って来ない前に一緒になったのであるが、かれはそれを伴れて彼方から此方へと漂泊して行った。海岸の村に来るまでにも、かれは尠くとも四カ所の小学校を勤めて歩いた。ある山の中では、自分一人きりで、十五、六人の児童を相手にのんきに暮した。そこは栗餅、きび飯、馬鈴薯、蕎麦、豆などより他に食うことの出来ないような処であった。勇吉は今でも其処の生活を振返って考えずには居られなかった。

「何故、あそこから出て来たろう。何故あそこにいなかったろう。あそこ位好いところはなかった。あそこ位自分に適当したところはなかった。……矢張、淋しかったのかなア、世の中に出たかったのかなア。」こんなことを言っては、其処から出て来たことを悔んだ。

妻に向っては、「彼処を出て来たのは、お前にも責任があるよ。お前も出たがっていたからな。」何うかすると、勇吉はこんなことを言ったが、しかし、妻に対して常に多く要求していない彼は、そう深く妻を相手にしようとは思わなかった。妻はまた妻自身の独立した領分を持っていて体と物質との両面から常に勇吉を圧迫していた。

「貴方、何をそんなに考えてばかしいるんですよ。」

こんなことを言っては、勇吉が暗い窓の下で、蒼白い顔をして、神経を昂らせて、鉛筆で手帳に何か書きつけていたりするのを叱るように言った。

勇吉は三日間、雑嚢を肩からかけて村から村へと歩いて行った。自分の村から二、三十里近くのところまでも出かけて行った。雑嚢の中には、薬が沢山に入っていた。風邪の薬、胃腸の薬、子供の気つけにする薬、ヨードホルム、即効紙などがごたごたと一杯になって入っていた。勇吉はそれを自分の村から五里ほどある停車場の町に行って、懇意な医師に処方をつくって貰って、小さな製薬会社から成べく安く下して貰って来た。

「薬、入りませんか。」

こう言って、かれは荒蕪地の処々にある家に入って行った。一軒から一軒へ行くのに、萱や篠の一杯に茂った丘を越えて行かなければならないようなこともあれば、沢地のようなぐじゃぐじゃした水のある処をぐるりと廻って行かなければならないようなこともあった。「薬屋さんかネ……今日は好いがな。」伊勢あたりから移住して来た百姓はこんな口の利き方をした。「まア、休んで行かっし、……薬はいらないが、遠いところを来て疲れたろうナモシ。」などと言って、煖炉の傍に請じて呉れる婆さんなどもあった。村から村へ三里もさびしい山路を通って行かなければならないような処を通る時には、勇吉の勇気も幾度か挫けた。「独立独行——何でも自分で生きて行くに限る。小学校でつかって呉れなければ、自分で働いて食うばかりだ。

Socialist ! 結構な名をつけられたものだ。自分は Socialist だろうか。それは思想にはいくらかそういう傾向を持って居るかも知れない。国の新聞に出したあの歌などにはそういう事を主として歌った、それは事実だ。しかし、事実を歌ったばかりで、Socialist と断定する役人達の無学がわかる。

「自分は芸術家だ。Socialist ではないっていくら弁解してもわからなかった。」こんなことを思った勇吉の頭にはあの多くの人達が死刑に処せられた時の光景が歴々と浮んで来た。かれはそれを思い出す毎に、いつも体がわくわくと戦えた。それは日本などには到底起ることがないと信じていた光景であった。外国――殊にロシヤあたりでなければ見ることが出来ないと思っていた凄惨な光景であった。その時新聞を持っていたかれの手はぶるぶる戦えた。其処には、かれの知っている友達の名前が書いてあった。その友達はかれが東京に出ている頃懇意にした男で、よく往来しては、烈しい思想を互に交換したりした。しかし、勇吉は其時でも芸術ということを忘れてはいなかった。Socialist を承認してはいたが、それは芸術上の Socialist であった。勇吉は間もなく郡視学に喚ばれたり警察に呼ばれたりした。休職――こうして唯一の生活法であったかれの職業はかれから永久に奪われて行った。

その時、妻は今の女の児を懐妊していた。「貴方は本当に、そんなんなんですか。なら、私、今からでも出て行く。怖い、死ぬのが怖い。」妻すらこう言って、勇吉の体をさがすようにした。「そうでないなら、そうって、ちゃんと申訳が出来そうなもんですね……。そんなわからないことはお上だってなさる筈がないんですがね……。」などと言った。海岸の小さな小屋みたいな家で、ぶるぶる慄えながら寒い寒い一冬を過したことを勇吉は思い出してゾッとした。其処では刑事が時々様子を見にやって来た。黙って一時間も坐っていることなどもあった。その度毎に、勇吉は弁解したが、それは何の役にも立たなかった。「でもこうやって来るのが私共の職務だから。」などと刑事は笑いながら言った。勇吉はその友達から来た手紙をすっかり出して見せたり、国の新聞に載せた歌の意味を解るように解釈して聞かせたりしたが、それでも矢張駄目だった。で一冬は少しばかり貯金して置いた金で辛うじて過して行った。しかし断頭台に上って、十二分に絶命した若い友達の悲惨な光景は絶えずかれの体に蘇って来ていた。

懇意な深切な医師があって、勇吉の境遇を気の毒がって薬の行商を勧めて呉れたので、かれは辛うじて生活の道を得るようになった。その翌年は、一夏かれは其処から此処へと歩いて行った。幸いにもその年は豊饒で、薬は思ったより売行きがよかった。「思い切って百姓になろう。それが一番好い。自分で耕して自分で食う。世の中では Socialist と呼ぼうが何うしようが、そんなことは頓着しない。」

こう勇吉は幾度となく決心した。しかしその度毎に、かれの体格が鋤犁を取るには不適当なのを考えてかれは躊躇した。かれの体は小柄で、痩せて、力がなかった。「せめて妻位の体があれば――。」こう思って妻の肥えた体を見たことも一度や二度ではなかった。

山路を歩きながら、

「出来る、出来る、小作にさせても出来る。確かに出来る！」

こう発作的に叫んで、路傍の草の上に腰を下して、肩にかけた雑嚢の中から紙片と鉛筆とを出して、急いで数字を書いて計算して見たりした。「そうだ――これが十円、これが二十円、これが五円、確かに出来る、一軒分だけ払下げを願って置いて、それに開墾をさせれば、二年かかれば無論出来る。そうすれば、こんなにして遠い路を歩かなくっても好い。豊饒な土地は何んなにでも生活の道を与えて呉れる。そうだ、そうだ、帰ったら、早速着手しよう。何も官職などを恐れている必要はないんだ。独立独行だ！」さも大きな独創的な考を得たように、膝を叩いて勇吉は跳り上って喜んだ。それは広く四辺が見渡されるような処であった。向うには山毛欅の森や白樺の林が広く遠く連っていた。此処等あたりまでは、開墾者もまだ入って来ないと見えて、低い灌木の野や、笹原や、林の中に、路が唯一筋細くついているばかりで、あたりには百姓の姿も見えなかった。夏の日が明るく心持好くかれの腰をかけている草地を照した。

「そうだ、そうだ。それに限る！」

かれはまた絶叫した。そしてまた新しいことに気が附いたというように、早く鉛筆を紙の上に動かして計算をした。

これに限らず、勇吉は草の上に寝ころんで休むことがすきだった。上には空と日の光があるばかりだ。何んな大きな声を出しても誰も何とも言うものもない。其処にはかれのあとをつけねらっている刑事もなければ、かれに向ってガミガミ言う力の強い妻もいない。心を絶えずイライラさせる子供の啼声もしない。何をしようが勝手である。そこでのみかれは自由に呼吸をつくことが出来るような気がした。「空と日と鳥と……何という自由なひろい天地だろう。」こう独りで言って、大きな自然に圧迫されたように後頭部に両手を当てて、死んだようになって、一時間も二時間も草原の中に寝ころんでいることなどもあった。

「おーい。」

などと大きな声を立てて、気違いのように手を振ったりなどした。

長い山路を通りながら、勇吉はまたよく昔のことを考えた。山路を一人歩いて行くかれに取って唯一の道伴だと言っても好い位であった。いろいろなことがかれの頭に衝き上るように集って来たり散ばって行ったりした。

東京で暮した一年の生活、それがいつでも一番先に湧き

出すような力でかれに蘇って来た。顫えるような神経をかかえて、かれはある作家の玄関にいた。其処でかれはいろいろな人を見た。当時の文壇で名高かった小説家だの詩人だのを見た。美しい若い文学志願の女の群などにも逢った。恋、功名、富貴——そういうものの中に小さくなってぶるぶる顫えているようなかれであった。かれの崇拝した作家は東京の郊外にいて、トタン張の暑い書斉で、大きな作を試みて熱心に筆を執っていた。田舎で想像して出かけて行った心持や希望が逸早く氷のように解けて行って了ったかれを勇吉は歴々とその山路に見た。一年いても何うにもならないので絶えず焦々して神経を昂らせていた彼、持っている思想を紙にのばすことが出来ないで煩悶した彼、美しい女の幻影にあこがれて輾転反側した彼、キラキラする烈しい日光のような刺戟に堪えられずに絶えず眩惑する頭を抱えるようにしていた彼、蒼白い髪の長い顔をして破調の詩に頭を痛めていた彼、下劣な肥った家婢と喧嘩して腹を立ててその頭を撲って怒られた彼、電信柱が人間と同じく動いているような気がして驚いて帰って来た彼、郷里の友達の学校生活を羨しく思って一夜寝られなかった彼、——そういうものは、いつも一人歩いて行く勇吉の道伴になっていた。東京から帰って、腹立ちまぎれに、自暴まぎれに、郷里のある家に火を放けようとして、気違扱いにされて、遠い田舎にやられたことなどもかれは時々思い出した。「何うしてこうだろう。何うしてこう頭が悪いんだろう。」かれは以前にもよくこう思って、顔をしかめて頭を叩いたり何かしたが、今でも矢張りかれは頭のことを絶えず気にしていた。歩きながら、コッコッ自分で頭を叩いて見たりした。

「こんな立派な思想が自分にはあるのに——。」今でも何うかすると、そう思って、こうした僻境に年を取って行くのを勇吉は情なく思った。「他の人々は皆なそれぞれ明るい平和な生活なり家庭なりが出来て行くのに、何故、自分ばかりは、こういう暗い惨めな押詰められたような生活ばかりが続いて行くんだろう。」こう考える時には、一層明かに自分の通って来た路が暗い絵の具で塗られた何枚続きかの絵のようになって見えて来た。そしてその最後の一枚には、肥った妻と自分に似て頭顱ばかり大きく発達した女の児と蒼白い顔をした自分とが暗い寒い一間で寒さと飢えとに戦えていた。

かれはかれの行く部落の人達にもやがて段々懇意になって、後には、「薬屋さん、薬屋さん。」などと呼ばれた。唯で午飯を御馳走して呉れる家などもあった。「此の間の薬はよくきいたよ。この通り治った。」ある百姓はこう言って怪我をした足を出して見せたりした。勇吉は到る処で、遠い国から遥々とこの荒蕪地へやって来ている人達を見た。中には一村を挙げて同じ調子の国訛の言葉をつかっているようなところもあった。人々は皆な精を出して働いていた。「これでも一生の中には、国に帰るつもりですよ。」

などと人々は皆な言った。「寒いし、それに、こういう処で一生暮す気にはなれないね。まア、金をためて国に帰って好い田地でも買って、年を取ってから、楽をするんだねえ。」などという人もあった。かと思うと、荒蕪地をある程度まで耕して、それを後から来た者に売って、もっと交通の便な、開けた町に近いところへ出て行こうとしている人などもあった。森だの藪地だのからは、大きな伐木を焼く煙が高く高く挙っているのを勇吉は見た。

雑嚢に一杯薬を入れると、二貫目位の重量があった。それが段々一日増しに軽くなって行った。勇吉はそれを楽みにして歩いた。

兎に角それだけ売り上げれば、かれはいつも家の方へ引返して来ることにきめていた。しかしそれが十里行って売切れるか、二十里行って売り切れるかわからなかった。一度は三十里近くも行って、それでも売り切れずに山を越して海岸に出て、そして漸く帰って来たことなどもあった。旅舎のない村では、頼んで漸く泊めて貰った。

二

ある夜、勇吉は荒れた小さな駅に来て泊った。そこはある街道からある街道へ通ずるような処で、旅客が馬を次ぐ宿駅になっていた。広い路に添って、人家が十二三軒あった。明るい灯のついた三味線の音のする料理屋などもあった。十月の初めは、もう内地の初冬の頃の気候で、林の木の葉は黄葉してバラバラと散った。

旅舎の店の処を通ろうとして、ふと見ると、ゴルキー集と書いた短篇集の散々読み古されたのが其処の机の上に置いてあった。勇吉はそれを手に取って見た。不思議にも芸術に対する憧憬が湧きかえるように起って来た。この前にも立場などで古新聞の破片などに自分の崇拝していた作家の作を発見して、東京の方をなつかしく思ったことも二、三度はあったが、しかし其時ほど強い烈しい憧憬を覚えたことはなかった。勇吉は頁をくって見ていたが、

「これは誰のだい？」

亭主は振返って見て、

「誰のって言うことはありましねえ。此間、お客様が忘れて置いて行った小説本だ。」

「ちょっと借りて行くよ。」

「え、ようがすとも……。」

其夜一夜、かれはその短篇集を手から離さなかった。夕飯前に読み、寝る前に読み、蒲団の中に入ってからも読んだ。かれは其処にかれの日常多く見ているような旅客だの乞食だの強盗だのを見た。愚かな百姓、色気のない田舎娘、行商人、それは皆なかれの常に眼で見たり話で聞いたりするような人達であった。作物の背景になっている天然もよく似ていた。矢張、榫の林や白楊や白樺などで取囲まれてあった。空は広く星はキラキラと煌いていた。

「そっくりだ、そっくりだ、こういう人間はいくらもいる。」

読みながら勇吉は何遍となくこう繰返した。

「こう書けば好いんだ。」

こんなことを言ったかれは、昂奮して膝を拍った。かれは自分の逢った人間を頭の中に繰返して見た。

「あれもそうだ、あれも好い、あいつも書ける。」こう言ってまた膝を叩いた。

「そうだ、そうだ！」

こう言っては、また深く読み耽った。二三時間の中に、かれはすっかりそれを読み尽して了って、中で気に入ったものをもう一遍読みかえしたりした。「是非、やって見よう。」つぶやくようにかれは独語した。

夜遅くついた旅客の馬の鈴の音がちゃらちゃらと静かに窓の下のところでした。勇吉は窓を明けて見た。広い空には星が煌々とかがやいていた。

三

確かな計算を立てて、少し耕しかけた田地を安くある人から買って、日雇取に頼んで開墾に着手し始めた。自分は矢張薬売に遠く出かけて行ってはいたが、兎に角勇吉は百姓になろうと決心した。それより他に自分の出て行く道はないとすら思った。旅から帰って来て自分の荒蕪地が少しずつでも開墾されて行っているのを、見るのは楽みであった。しかし、半年と経たない中に、確かな計算だと堅く信じていた数字が数字通りになって行かないのを勇吉はだんだん発見した。一年間に規定された荒蕪地を完全に開墾するには猶多くの金と力とを要した。天然と戦うのについて思いもかけない障碍が沢山に一方にあると共に、日雇取達は何の彼のと言っては怠けて遊んだ。開墾が出来て貸した方の土地には、小作人は菜種などを蒔いたが、それも十分な収穫を得ることが出来なかった。薬の方で儲けた金は段々土地の方にすい取られて行った。勇吉は鉛筆で数字を書いた帳面の上に、髪の延びた蒼白い顔を落して、屈託そうに何か考えていることなどがよくあった。

しかし、計算が合わないでも、天候さえ十分ならば、かれの計画は段々成功して行くであろうと思われた。「なァに、そう心配したものではない。三年も経てば余程目鼻が明いて来まさ。」こう年を取った近所の百姓は言って呉れた。ところが不仕合せにも二年目は天候は好い方ではなかった。菜種も、豆類も、粟もすっかり駄目だった。百姓はこぼしながら馬鈴薯や玉蜀黍などを食った。今年こそ、今年こそと言って、昨年の凶作の取りかえしをしようとした今年は、また昨年以上に天候がわるかった。暑い日影の照ったことなどは殆ど一度もないと言って好い位であった。秋の末のような薄ら寒い気候が農作に肝腎な夏の盛りのすべてを占めた。此処では、五日でも一週間でも好いから、

くわっと暑い日の光線の照りわたるのが必要であった。強い日の光を受けさえすれば、作物は一日、二日の中に三尺も四尺も伸びるというような処であった。で作物は皆な成熟せずに終った。粟にも穂という穂もつかなかった。馬鈴薯さえ完全に出来なかった。豆、麦、稗、蕎麦――すべて小さくいじけて実を結ぶ間もないのに秋の霜は早くもやって来た。凶作という声が到る処に満ちわたった。物価は俄かに高くなった。とてもやり切れないなどと言って、半分耕した土地を売払って他国に行って了うものが頻々として続いた。ことに旅をして彼方此方を見て歩いている勇吉には、その災害の甚しいのが一層明かに眼に映った。ある村などでは、殆ど全く無収穫というような悲惨な状態に落ちているのを勇吉は見た。丘に添った村はひっそりとして煙の立っている家などはないという位であった。いつも威勢よく鈴の音をさせて山を越えたり野を越えたりして停車場の方へ行く駄馬の群にも滅多には出会わなかった。何処の村も皆なひっそりとしていた。

勇吉は非常に大きな打撃を受けた。百姓の事業の方も無論そうだが、それよりも一層困ったのは、薬のばったり売れなくなったということであった。病人は却っていつもより多いのだけれど、何処の家でも薬などは買わなかった。大抵は富山から来る置き薬で間に合せた。

「薬屋さん、気の毒だけど……この凶作じゃ薬も買って飲めねえや。」

こう到る処で勇吉は言われた。

勇吉は重い離嚢を肩からかけてそして遠い旅から帰って来た。

「駄目だ、駄目だ。」

こう言って、小さな自分の家に入って行った。六畳一間に、その奥に小さい二畳があるばかりであった。十月の末はもう寒かった。雪も二、三度やって来た。ブリキの煖炉の中には薪が燻って、煙が薄暗い室の中に一杯に満ちていた。妻は裏の方に行っていたが、声を聞きつけて此方に来た。背に痩せこけた女の児を負っていた。

「何うだったね。」

「駄目だ、駄目だ。」

「ちっとは、それでも……。」

「駄目だ、駄目だ、すっかり駄目だ。」勇吉は神経性の暗い顔をして、「薬なんぞ買うものは一人もありゃしない。」

「困ったね。」

妻はこう言って、「まア、上んなさい。留守に彼方から来たよ。いくらでも何うかして呉れって……。」

「そうか。」

勇吉はこう言ったきりで、草鞋をぬいで上に上った。腹は減っているけれど、飯を食う気にはなれなかった。粟と麦とを雑ぜた雑炊――それすら今年から来年にかけての材料を持っていないということが、一番先に勇吉の胸につかえた。勇吉は母親の背に負われてにこりともせずに痩せて

いじけている女の児を不愉快な心持で見た。

古い煤けた箪笥、ブリキ落しの安火鉢、半分壊れかけた炭取りなどが其処に置いてあった。壁に張ったトルストイの肖像は黒く煤けて見えていた。勇吉は暖炉の前に坐って後頭部に両手を組合せて、やがて来る寒い冬を想像した。雪、雪、雪、恐ろしい雪がすぐ眼の前に迫っていた。「こうしちゃいられない。」勇吉はいても立ってもいられないような気がした。

「御飯は？」

「今、食う……。」

こう言ったが、勇吉は夢中で膳に向って二三杯暖いのをかき込んだ。で、いくらか元気が出て来た。「まア考えよう。」こう思って、蒲団を引ずり出して、古い汚い衿に顔を埋めたが、疲れているので、いつとなくぐっすり寝込んで了った。

勇吉は一日、二日全く考え込んで暮した。百姓の事業の方も捨てて了うのは惜しいとは思ったが、これから先凶作が毎年つづくかも知れないと思うと、不安がそれからそれへと起って来た。それにかれの持っている土地を物にしようとするには、まだ少からぬ金が必要であった。今でさえ借りた金に困っているのに、此上金を工面することなどはとても出来なかった。貯金はいくらか持ってはいても、それは万一の時の為に残して置かなければならないものであった。勇吉は溜息をついた。

ある日は何か思いついたことがあるように、急に勇み立って海岸の村へ出かけて行ったが、帰って来た時には、矢張しおれた動揺した顔をしていた。自分の住んでいる村の人達からはことにかれは何物をも得ることが出来ないのを見た。

「兎に角、こうしちゃいられない。こうしてぐずぐずしていれば、親子三人雪の中で餓えて死んで了うばかりだ。」

こう思うと、勇吉はいても立ってもいられないような心持がした。それに、海岸の村で聞いて来た Socialist に対する官憲の方針はかれの恐怖の血を泡立たせた。自分のあとには常に刑事がついていて、自分の考えていることは何も彼も知っている。こう思うと、怖くって仕方がなかった。片時も心の安まる時がなかった。自分は何もわるいことはしないのだけれど、今までのことが既に大きな罪になっていて、突然刑事や巡査がやって来て自分を伴れて行きはしないかとさえ疑われた。

かれは部落に一人いる巡査を怖いものに思って、その駐在所の傍は常によけるようにして通って行った。

ふと思いついた。かれは例の通り膝を拍った。晴々しい顔をして心の中に叫んだ。「そうだ。そうだ、そうしよう。あいつを持って東京へ行こう。あいつなら確かだ。確に売れる。誰も必要な重宝なものだから……。」かれは海岸の村にいる時分、一生懸命になって、ある一種の層を発明したことを思い出したのであった。それは千年前乃至千

年後の二十八宿と七曜日が数字の合せ方で間違いなく出て来るというようなものであった。それをかれはかれの不思議な数学的の頭から案出した。かれはそれを郷里出身の理学博士に送って賞讃を博した。現にその博士の手紙を勇吉は持っていた。「そうだ、それに限る。暦は安くって必要なものだから、いくらでも売れる。東京に行って、安い印刷所でこしらえれば費用だっていくらもかからない。一枚二、三十銭位で売り出せば屹度売れる。そうだ。好いことに思い附いた。」こう思って、かれは文庫の底からその暦の原稿を出して、更に博士の手紙を読みかえした。「七曜の数の出し方は確かに貴下の新研究と存候――。」こう書いてあった。今まで持っていた才能を何故今までつかわずに置いたかと勇吉は思った。限りない勇気が全身に漲って来た。神！　神が救けて呉れた！　こんな風にも思って雀躍した。

Socialist としての圧迫も、東京に行けば何うにでもなると勇吉は思った。「東京は広い。身を躱して了えばわかりゃしない。巡査だって、刑事だって、そうそうはさがして歩かれやしまい。それに、東京には代用小学校がいくらでもある。教員の口だってさがせばわけはない。そうだ。そうだ。こんなところに齷齪して、雪の中に餓えて死んで了うことはない。それに限る！」勇吉は妻にすぐ言って聞かせようとは思ったけれど、まアあとで、すっかり決ってからでも好いと思いかえして、その愉快な計画を自分一人の腹の中に納めて置いた。勇吉はボールの厚紙を押入の中から捜して、不完全な原稿の訂正に其日を費した。丸く切ったボール紙をぐるぐる廻して、別の紙の数字と合せるように勇吉は骨折ってこしらえた。すべてがかれの思うように行った。かれは使用法を箇条書きにして書いて見たりした。

「旨い、旨い。これで出来た。」

かれは喜ばしそうな顔をして言った。

「何ッていう名をつけようか。」続いてかれはこう思った。万代暦、何うも固すぎると思った。新式万世暦、年代暦、こうも考えた。しかし何れもこれも皆な気に入らなかった。もう少し砕けて出て、ちょうほう暦、百年こよみなどという名をつけてみた。何うも矢張自分の思ったような好い名がなかった。

勇吉はその名の為めに尠くとも三日、四日考えた。ふとトコヨという字が頭に浮んで来た。トコヨゴヨミ――好い、好い、これが好いこれが好いと思って、嬉しそうに膝を叩いた。山田式トコヨゴヨミ――二、三度口でよんで見て、「矢張、式なんて言う字がない方が好い。ヤマダトコヨゴヨミ、それで好い、それで好い。」こう得意そうに言って、それを原稿の上のところに、ゴジックスタイルで丁寧に書いた。そしてその上に理学博士吉田卓爾先生証明と横に書いた。

「これで好い、これで好い。」

勇吉はある大きな事業をしたような心持で雀躍して狭い室の中を歩き廻った。

四

出京の準備は思の外手間取った。土地の処分をして、少しでも多く金を作りたいと思ったので、金を借りた家に行って相談をしたりなどした。懇意の医師の許などにも行った。

十一月の末が来ても、まだ土地の処分が完全に出来なかった。勇吉は段々焦々し出して来た。「暦は十二月から正月が売れるんだ。ぐずぐずしていて時を失っては大変だ。」こんな風に考えたかれは、終には安く土地を手離して了わなければならなかった。「何ァに構わない、貯金の金があるから、東京に行ってから一月、二月は何うにでもして行かれる。少し位安くっても早く行ける方が好い。」勇吉はこう思って土地売買の証文に判を捺した。

勇吉の妻も無論東京に出るという計画を喜んでいた。まだ東京を知らないかの女に取っては、東京は何んなことでも出来るところのように思われていた。果して夫の言う通りならば、こんな寒い荒蕪地の中に暮しているより何れほど好いか知れなかった。絶えず心配になっているSocialistの嫌疑を避け得られるだけでも好いと思った。始めて運が開いて来たという風にも考えられた。長年夫を知っているので、時には、「何を言っているんだかわかりゃしない。そんな暦が売れるもんだか何だかわかりゃしない。」こう不安に思うこともないではなかったが、雪の中に顫えて餓えているよりは、何んな苦労をしても東京に行く方がまだしも好いと妻は思った。

「私は何んな苦労をしても好いけど、貴方もしっかりして下さらなけりゃ仕方がないよ。」

こう妻は勇吉に言った。

五

小さな海岸の停車場から目も覚めるような賑やかな大きな上野の停車場までのさまざまの光景は、何枚続きの絵か何ぞのようになって勇吉の妻の眼に映って見えた。雪、雪、雪、何処を見ても雪ばかりの広い荒漠とした野原の中の停車場が見えるかと思うと、何本とわからないほどの煙突が黒い凄じい煤煙をあたりに漲らしているような大きな町なども見えた。ある線からある線へ乗換える停車場では二人は寒気に顫えながら、家から持って来た冷たい結飯などを食った。女の児が泣いて泣いて何うしてもだまらないので、一度背中から下して、乳を含ませて見たりなどしたが、矢張そりかえって火がつくように烈しく泣いた。

「貴方、ちょっと抱いて下さい。」

こう言うと、夫は暗い顔をして黙ってそれを抱いてあち

こちと揺って歩いた。暗い暗いプラットホームだった。汽車は大きな眼のように光をかがやかして凄しい地響をさせてその停車場に入って来た。
夥しく混み合った三等室を勇吉の妻は眼の前に浮べた。大きな荷物を抱えて二人は入って行ったが、何処も一杯で坐る処がなかった。妻だけは何うやらこうやら割り込むようにして腰をかけさせて貰ったが、勇吉は大きな荷物を下に置きながら、便所の扉のところに凭りかかっていなければならなかった。それに便所の扉は幾度か明けられたり閉められたりした。後には夫は立ちくたびれて堪らなくなったというようにして荷物の上に腰を掛けた。
大きな町の雪に埋っているさまなども見えた。鮨、弁当、正宗、マッチ、煙草――と長く引張った物売の声が今だに耳について残っているように思われた。海に近い町に来て汽車を下りて、停車場の傍の方の小さな旅舎で朝飯を食った時には、ひどく労れて、一時間でも二時間でも好いから寝て休んで行きたいと妻は思った。其処は勇吉に取っても妻に取っても思い出の多い処であった。結婚した翌年二人は山の中から海を渡って其処に来た。そこに二人は一週間ほどいた。「その時分は楽しかった。」などと妻は思った。
追立てられるようにして、埠頭の方へ駈けて行く二人の姿が続いて見えた。向うに渡る汽船の白いペンキ塗は碧い海の中にくっきりと見えていた。めずらしく其朝は晴れていた。朝日が煌々と眩しく海に砕けて光っていた。
寒い汚い狭い船室に、動物か何ぞのように何処からともなく人々は坐ったり寝たりしていた。一種のイヤな臭気が何処から自分を襲って来た。妻は眠くって眠くって仕方がなかった自分を見た。「己は甲板の上に行っているぞ。」こう勇吉が言って出て行くのをうつつに聞いて、女の児に乳を含ませながら大勢の人達の中に足を蝦のように曲げて、何も彼も忘れてぐっすりと寝た。
船から下りたところにある停車場では、故郷の方にわかれて行く汽車が今発とうとして烟を挙げているのを見た。「国になんか寄っていられない。そんな暇はない。そうでなくってさえ遅くなったんだ。もう十二月じゃないか。」こう言って二人とも素通をして行くことにきめていたけれど、此処に来ては流石に国の方に心をひかれない訳には行かなかった。「こうして東京に行けばまたいつ国に行って親や同胞に逢われることだろう。」こんなことを思って、勇吉の妻は涙をそっと袖に拭った。
其処でも二人は停車場の前の茶店にも休まなかった。一銭でも多く金をつかうことを二人は恐れた。東京に行って暦が売れるか、ある職業にありつくかするまでは、餓を忍んでも暮さなければならないような境遇であった。勇吉の妻は其処で泣く子の為めに駄菓子を二つ三つ買ったばかりであった。
三等室は矢張混み合っていた。一日も二日も汽車や汽船

に揺れ通しにやって来た体は、ヘトヘトに労れて、物に凭りかかりさえすればすぐ居眠が出るようになっていた。勇吉は蒼い昂奮した顔をして、両方から押つけられるようにして小さくなっていた。窓の硝子に箒のようにぼさぼさした頭を凭せかけて昏睡していたりした。

勇吉の妻は段々賑やかな町や村や停車場の多くなって来るのを見た。人が沢山に路を通っていた。こんなに大勢人が居るかと不思議に思われる位であった。海を一緒に越えて来た人は、「北海道はえらい凶作ですよ。この冬が思いやられますよ。」などと言って、粟も稗も馬鈴薯も取れなかったことを車中の旅客に話して聞かせたりなどした。

気候も段々暖くなって来た。畠には麦が青々と生えていた。「あちらに比べたら、何て好い処なんだろう。こういうところに住んでいる人達は何れほど仕合せだか。」勇吉の妻はこんなことを思って、雪一つない地上に草や木の青々と生えているのをめずらしそうに見た。

「暖かいこと。」

こう勇吉に言って見たりした。

賑かな大きな目も覚めるような停車場――幸いにも其処には予め手紙をやって今日の到着を知らせて置いた遠い親類の男が迎いに来ていて呉れた。荷物と一緒に自分と女の児だけ車に乗せられて、借りて置いて呉れた裏店のような三軒つづきの狭い家にやがて皆なは落附くことになった。それは擂鉢の底のようになっている処で、ちょっとの隙間もなく家が一面に建て込んであった。

「何て家の多い処だか――私吃驚した。」こんなことを勇吉の妻は言った。

三畳に六畳、床の間もないような小さな家であった。それでも彼方の寒い掘立小屋よりはいくら増しだか知れないと妻は思った。新しい柄杓、新しい桶、瀬戸で出来た釜、鍋、薬罐、そういうものをやがて親類の男は買って来て呉れた。その男は勇吉の母方の従弟で、近所の工場に勤めているような人であった。妻はあの荒蕪地の中からこういう処に急にやって来たのを不思議に思わずにはいられなかった。「私、まだ体が揺いでいるような気がして。」二三日経ってからも妻はこんなことを勇吉に言った。

六

勇吉は着いた翌日から、彼方此方と活版所をさがして訊いて歩いた。しかし落附いてかれの要求を聞いて呉れるような所は稀であった。勇吉の様子をジロジロと見て、てんから相手にしないようなところも何軒かあった。「そうですな、今は年の暮が近いもんですから、忙しくってとてもお引受は出来ませんな。春にでもなれば、また緩り御相談をしてもよう御座いますが……。」ある小さな活版屋の爺はこんなことを言って笑った。勇吉は気が気でなかった。かれは一軒から一軒へと熱心に訊いて見て歩いた。

かれは活版屋をさがすだけにも二三日を徒らに費さなければならなかった。漸くさがしあてた処は、場末の小さな活版所で、見積もあまり安くはないと思ったけれど、ぐずぐずしていて機会を失っては大変だと思って、勇吉は兎に角其処で印刷させることにして、その翌日すぐ原稿を持って行った。

髯の生えた四十恰好の主人は、勇吉からその原稿の説明を聞いて、「成るほど、これは面白いもんだ。千年前でも千年後でも何日は何曜日だって言うことがちゃんとわかるんですな、これは新案だ。」などと言って、丸いものを自分で廻して見たりした。

「博士の証明までついているんですな、これなら確かなもんだ。」などと言った。「忙しいけれども、兎に角二十日までにこしらえて上げましょう、千枚ですな……。」こう言ってちょっと途切れて、「それで紙の色は何が好いでしょう。」

勇吉は見本に出した小さな帳面をひっくりかえして見た。色の種類も少なく好い色もなかった。ふとかれの崇拝している作家の短篇集の表紙に似た色が其処にあったのを見て、「これにしましょう、これにしましょう。」と早口に言った。

「知っている絵かきがありますから、何か少し周囲に意匠をさせましょうか。いくらもかかりゃしません。余り周囲に何もなくってはさびしいですからな、書斉の柱なんかにかけて粧飾にして置くもんだから……。」深切な主人はこんなことを言って呉れた。原稿を持って行ってから俄かに主人の態度の変って行ったのも勇吉には成功の第一のように見えた。

博士の邸を本郷の高台に訪ねて行った時には、怪しい姿を玄関にいる大きな犬に噛みつくように吠えられて、かれは狼狽した。幸いに博士は在宅で、立派な庭に面した大きな室で逢って呉れた。「それは好いですな、登録すれば一層好いんだけども、まあ、誰も始めは真似るものもあるまい。少し売出してからにする方が好い。」などと言って、版権登録の手続などを教えて呉れた。勇吉は土産に持って行ったものを出すのが恥かしいような気がした。

帰る時に、漸く思切って、「これはあっちで取れたのでに御座いますが、私がつくったんだと猶好いんですけども……そうじゃ御座いませんけれども、折角持って参ったんですから。」

こう言って、木綿の汚れた風呂敷から新聞紙に包んだ一升足らずの白隠元豆を其処に出した。

「イヤ、これは有難う。好い豆が出来るな、矢張、彼方では。」

博士は莞爾しながら言った。

勇吉は唯まごまごして暮した。印刷が出来上らない中は販路の方に取かかることも出来ないので、仕方なしに職業の方を彼方此方で訊いて見たりなどした。路の通りにある

職業周旋のビラの沢山に張って出してある家の中にも入って行って見た。其処には矢張かれと同じように職業を求める青年がいて、あるかなしの財布の中から五円札を一枚出したりしていた。勇吉はいろいろなことを訊いて其処から帰って来た。

ある学校友達は、此前東京に出た時分には、早稲田の学校に入って劇の方に志していたが、此頃では大分文壇に名高くなって、その人の書くものなどが時々芝居に演ぜられたりなどしていた。一度其処を訪問して見ようと思ったがまア印刷が出来上ってからと思って、途中まで行ったのを引かえして戻って来た。「千枚で五十三円、二十円位で出来ると思っていたのに……大分の違いだ。」こんなことを思って、かれは歩きながら貯金を腹の中で勘定したりした。「二月、三月はまア好いが、そうかと言って、女房と子供をかかえて遊んでなんかいられない。」かれは蕎麦屋にも入らずに、飢えた腹を抱えて裏店の狭い自分の宅に帰って来た。

印刷は何うもはかどらなかった。二十日でも、もう遅いと思っているのに、二十一日になっても、まだその暦は出来て来なかった。催促に行くと、「何うも廻すところが旨く行きませんでな。」などと言って主人はその半分出来かかったものを持って来て見せた。成ほど旨く廻らなかった。「もう少し厚い紙にしなけりゃ駄目だ。」などと言った。周囲の意匠はかなりによく出来ていた。四季の花卉が四隅に小さく輪廓を取って書いてあった。「明日までには是非拵えて下さい。でないと困るんですから。」こう強く頼んで、勇吉は其処から帰って来た。イヤに曇った寒い日で、近所の工場の煤烟が低くあたりにむせるように靡いて来ていた。

家に帰ると、妻は不愉快な心配そうな顔をして坐っていた。

突然

「貴方、また来たよ。」

勇吉はゾッとした。「え？ 来た？」

漸く免れた危難に再び迫られて来たような戦慄を勇吉は覚えた。勇吉は棒のように其処に立っていた。

「矢張、駄目ですね。」

妻は失望したように言った。今から一時間ほど前、巡査が入って来て、「お前は北海道から来たのか。」と訊いた。「士別の近所にいたんだな。」こう言ってつづいていろいろなことを訊いた。Socialist の取扱を受けていたということをちゃんと巡査は知っていた。イヤなことを種々言ってまた其中主人のいる時来ると言って帰って行った。

「何うしても駄目かね。」

勇吉は黙って暗い顔をしていた。東京に行けばそのイヤな監視を遁れることが出来ると思って、それを唯一の希望にして来たのであった。しかしそれも空頼であった。こうした弱い者を酷める社会の残酷さが、染々と痛感されて来

た。勇吉は恐ろしくなって体を震わした。
「お前のように気にしたって仕方がないじゃないか。わるいこともしないのに、向うで勝手について来るんだから仕方がないじゃないか。」
こうたしなめるように妻には言って聞かせたけれど、勇吉は妻以上にその監視を恐れていた。これで出京の希望が十の八九まで破れたようにさえ勇吉には思われた。
二三日して刑事が訪ねて来た時は丁度活版所から出来た暦を届けてよこして呉れたところであった。勇吉は丁寧に刑事を座敷に通して、死刑に処せられた友達と自分との関係に就いて詳しく話して聞かせた。しかしジロジロと体を捜すようにして見る刑事の眼に出会って時々声を顫わせたりなどした。刑事は瘦せた神経質の男を勇吉に見た。勇吉の眼のわるく光るのも気味わるく刑事は思った。何をするかわからない危険人物のように刑事の眼には映って見えた。
「何うも、そうでしょうけれど……私の方も役目ですからな。」
刑事はこんなことを言った。
「実際、馬鹿な話なんです。仕事をするにも、そんな風に思われていると、非常に迷惑なんです。友達の手紙の中に私の名があったから、帳面に書かれて了って、こうやって何処までも何処までもついて来られるんですが、その帳面から名を消して戴くわけには行かないでしょうか。調べるなら、いくら調べて頂いても好いんです。却って望むところなんです。調べもしないで、唯、跡をつけられるんですから困るんです。調べて頂きたいもんですがな。」
勇吉は声を顫わして言った。
「何うも仕方がないんですよ。」刑事も流石に気の毒そうな顔をして笑って言ったが、其処に積んである印刷物を見て、「何です、それは？」
勇吉はそれを一枚取って渡した。刑事はヤマダトコヨゴヨミなどと読んでいた。暦だということだけはわかるが、トコヨゴヨミとは何ういう暦だか刑事はよくわからなかった。刑事は勇吉の顔をジロジロ見ていたが、「何です、これは？」
勇吉はお前なぞにはわかるもんかと言うような顔をして得意そうにその仕かけを話して聞かせた。
「はアそうですか、これは成ほど面白いな。」こんなことを言って大正三年の処をくるくる廻して、「これで来年一年の七曜が出るんですな、これは面白い。」刑事はこう言ってまた今年の処を廻して見た。
「一つ差上げましょう。」
「そうですか。」と言ったが、「イヤ何ァに、買いますよ。」
勇吉が呉々も頼むと、「私は疑っても何もいやしないですけれどもな、職務ですからな、しかし長い中には、段々様子を見て、帳面を消すことになっているんですから……私の方だって用の少い方が好いんだから。」後には刑事も

打解けてこんなことを言った。

七

暦を五、六枚持って、市中の雑誌店や何かを勇吉が廻って歩いたのはもう年の暮も押詰った二十五六日であった。市中は賑かに派手な粧飾などをして、夜は電気が昼のように街頭を照した。車や自動車が威勢よく通って行ったりした。

何処の雑誌店でも、相手にしないような家が多かった。仕かけを説明してきかせても、容易に飲み込めないような人ばかりであった。「まア、なんなら二三枚置いて行って御覧なさい。」こう言って呉れる家は中でも深切な好い方であった。ある店では、「暦はもう遅いですよ。もう大抵何処の宅だって買って了いましたからな……もうちっと早ければ売りようもあったでしょうけれども、こう押詰っちゃ駄目ですよ。」などと言った。勇吉はためしに置いて貰う位で満足しなければならなかった。

それでも百枚ほどは足を棒のようにして、彼方此方の店に行って頼んで置いて貰った。本郷から小石川、牛込、下谷、浅草の方まで行った。毎日勇吉はヘトヘトに労れて家に帰って来た。

二三日経ってから、置いて来た店を勇吉は廻りに出かけて行った。勇吉は非常に失望して帰って来た。殆ど一軒も売れないと言っても好い位であった。何処でも店の隅の方に形式だけに置いてあった。「其処にあるから、見て行って下さい。」などと言った。「売れませんな矢張、ゆっくり広告でもしなけりゃ、いくら好いものだって売れやしませんよ。」ある店ではこんなことを言われた。勇吉は都会の塵埃にまみれて暗い顔をして帰って来た。

荒蕪地で、薬売をやっていた時の方が何んなに好いか知れなかったなどと勇吉は思った。そこには広々した天然があった。其処に住んでいる人も、都会に住んでいるような忙しい冷淡な人間ではなかった。

歩いている路にも、餓を刺戟する蕎麦屋、天ぷら屋などもなければ、性慾を刺戟する綺麗なぴらしゃらする女もなかった。勇吉は計画が全く徒労になったような気がしてがっかりした。

刑事も其後度々やって来たという妻の話であった。何うかすると、夜などこっそり様子を見に来るものもあるらしく勇吉には思われた。職業の方もさがす気が出なくなって了った。Socialistという嫌疑がかかっているということが知れては何処でもつかって呉れる処はありそうに思われなかった。望みをかけて来た小学校教員の方は殊にそうであった。教員になろうとするには、黙って隠して置いたところで、本籍から屹度通牒して来るに違いなかった。二度目に暦を持って博士をたずねた時に、思い切ってその話をすると、「困るねえ、それは――。何うかしてその嫌疑を解

いて貰わなければ、本当に何にも出来やしないよ。困ったことになっているんだねえ。」こう博士は言って、矢張勇吉の体中をさがすようにして見た。俄かに博士の態度が変って行ったように——そういう嫌疑を持っている人間に邸に出入されては困るというように思っているらしく勇吉には邪推された。

勇吉はいても立ってもいられないような気がした。

「貯金はすぐなくなって了うし……。」

勇吉は絶えずこう思って、例の鉛筆で計算をやって見たりした。

正月が来た。注連飾などが見事に出来て賑やかな笑声が其処此処からきこえて来た。

しかし勇吉はじっとしてはいられなかった。正月の初めにもっと家賃の安い家を別な方面にさがして、遁げるようにして移転して行った。刑事の監視をのがれたいという腹もあった。出来るならば、この都会の群集と雑沓との中に巧みにまぎれ込んで了いたいと思った。しかしそれは矢張徒労であった。一週間と経たない中に刑事は其処にもやって来ていた。勇吉はわくわく震えた。

（一九一四年三月「早稲田文学」）

剃刀（一幕）

中村吉蔵

登場人物

理髪師　木村為吉
内縁の妻　お鹿
小学校校長　佐藤敬一
村役場書記　野口早太
代議士、参事官　岡田秀作
富豪伊勢屋の息子　勘七

場所——東京附近の小村駅

時——現代

○

舞台は片田舎の理髪店の内部、上手三分は畳を敷いて茶の間全体が来客の待合処になっている、古びた

長火鉢を据え、粗末な茶器などがそこ等に転がっている突当りは劉の障子が二枚、その左手に紗擬いの簾が裏座敷への出入口に懸けてある、右手の壁には暦入の彩色のけばけばしい広告絵や、石版刷の戦争画などがベタベタ貼附けてある、理髪床の正面上手寄りには出入口の玻璃戸が二枚、それから下手へ寄って、縁の剝げた姿見鏡が二つ、棚の上には、ブラッシ、香水瓶、剃刀掛、シャボン函、檜扇の花の赤いのが小鏡に映っている、花瓶などゴタゴタと列び、下手の壁際には洗面台が立っている、椅子も三台、小汚いのが配置されて、何んだか荒んだような、塵埃臭い空気がそこらに漂うている。

○

白い仕事着を被った為吉は、神経質らしい眼を光らせながら、一人の男の顔を剃っている、火鉢際には二十七八の蝶々髷の髪が乱れて青白い顔をした、眼元に嬌のある、お鹿が長煙管で煙草を吹かしている。二十四五の棘栗頭の、ニッケル縁の眼鏡を掛け小倉の袴を着けた村役場の書記野口早太は、上り框に腰を卸して新聞を覗き覗き話している。

野口　今日は午後から浄福寺で政談演説があって、それから夜にかけて懇親会があるんだ、何しろ代議士で今度の内閣で参事官に任命されたんだし、新聞にもこんなに書立ててある位だから、此の辺の評判は大したものだ、幸、日曜日でもあるしするから近村からも随分有志者が集って来るだろう、岡田さんのような人物が出たのは此の村の名誉だね。

お鹿　まだ若い方なんでしょう、夫と同年輩位なもんでしょうねえ。

野口　何んでも三十代だろう、四十になったら県知事か局長、五十になったら大臣だろうね。

お鹿　ヘエ、そんなに豪い人ですかねえ、何んな顔をしてる方でしょう、一寸見たいわ。

野口　（笑って）別に俳優のような顔をした色男でもないサ、だが眉の太い、口元の引締った一寸見ても貫目のある人だね、殊に眼の光の鋭さと云ったら、一目で他人のお腹の中まで見破ろうというような処があるよ。

為吉　（冷やかに笑って）千里眼っていう奴の親類見たいだな。

野口　イヤ戯談じゃアない、昨日、村役場へ訪えて村税の事なんかいろいろ聴いて行かれたが、後で村長も収入役も、「あの眼が恐い、一物ある」って云い合ってたんだ、それに第一、気軽に村役場へテクテク歩いて来るなんて、平民主義の人だって、皆も感心していたんだよ。

為吉　平民主義か……勝手な時には然うなんだろう。

お鹿　宅じゃア昨日、ワザワザ御機嫌伺いに行ったのに来

客があるって、面も出さないのは不都合だって、プリプリ怒ってるんですよ、けれども身分が違やァ仕方がないじゃァありませんかねえ。

野口　そりゃ然うサ、己だって、顔は見たが、まだ口を利いた事はないんだからな。

為吉　（ブラシを掛けながら）村のお役人様と、政府のお役人とは、そりゃ資格が違わァな、けれども己と秀作さんとは、そんな筈はねえんだ。

お鹿　村の小学校で、同じ級だったし、卒業する時も宅のが一番で、あの方が二番だったからって、今でも矢張昔の友達の様な事を云ってるんですが、世間は然うは行きませんわ、あんまりそんな事を人様に云っちゃァ笑われるって、私が気を揉んでるんですよ？

為吉　フン、何方が笑われるんだい？

野口　昔は昔、今は今サ、村役場の書記と政府の参事官と資格が違ってりゃァ、田舎のさんぱつ屋さんと、高等官二等とは尚更縁もゆかりも無さそうだ、為吉君の変人も、ちと桁が外れ過ぎてるようだよ、気候の加減かも知れないな。（と新聞を取り上げる）

お鹿　真実ですよ、この頃は妙に気六ずかしくなって、昨日なんか記事の出ている新聞をベリベリ引裂いたりなんかするんですもの、宛で気狂いだって笑ったんですよ。

為吉　貴様こそ、余計なお喋舌をするな、（叱り付けて、ジット睨み、それから客を洗面台の処へ連れて行く）

野口　今日の新聞は二段埋めてあるな、「錦を故郷に飾れる岡田参事官」って、二号標題だから豪いよ……何しろ、善かれ悪かれ、人間も新聞に出されるようにならないと駄目だな、生きてるか死んでるか、分らないような事をして、愚図愚図、その日暮らしをやってるんじゃァ全く生甲斐がない。

お鹿　（苦笑して）私だって、これで新聞に載った事もあるんですがねえ。

野口　然う、然う、例の無理心中の一件かね……お鹿さんも兎に角あの頃は若かったよ。

お鹿　今はもうこんな婆さんになっちまったわねえ。

野口　イヤ、然ういう訳じゃないよ……今でも矢張り美しいには美しいがね、（少し周章てながら）あの相手は監獄に入ったんだったね、でもまあ、お鹿さんが負傷しなかったのが何より幸福だったよ。

お鹿　お庇で生き延びて、今じゃァさんぱつ屋のお女房さんかね、斯うなっちゃ新聞へも出ないわねえ。

野口　イヤ、我々新聞へ出るのは碌な事じゃないよ、まァ出ない方が増しとして置くんだな。

（為吉は伊勢屋の息子勘七の散髪を了えて、上り框へ腰を卸ろし、煙草を一服する。客は大島の単衣に鼠色の縮緬の帯をしめ直し、巻煙草を吹かし始める。）

お鹿　若旦那、まァお掛けなさいませな。

勘七　有難う……(腰を卸ろす)

野口　伊勢屋さん、まア遊んでお在なさい、今に這般の将棋の仇打ちをやりますよ、ちょっと一つ、頭髪を済まして貰ってからね。(早く椅子へ倚る)

勘七　(お鹿の顔と為吉の顔とを等分に見ながら)お忙しいでしょう!?

お鹿　イエ、別に貴方……まアお上んなさいましな、お茶を一つ入れましょう、番茶ですけれども。

勘七　お構いなさらんで下さいよ。

お鹿　何んにも貴方……まア此方へお上んなすったら善いじゃアありませんか。

勘七　(為吉の方を気にしながら)　御邪魔じゃありませんか?　(云い云い片足ずつ膝行り上る)

お鹿　此頃は、奥さんの御病気はおよろしい方ですか?

勘七　否え、病気保養に里へ遣ってあります、あんなものはもう帰って来ないが宜いんです、病人を抱え込んじゃア一生のお荷物ですからね。

お鹿　でも可哀そうじゃありませんか?

勘七　仕方がありませんよ。

野口　(笑って)　勘七さんが自分の病気を伝染して置いて、それを打捨るなんて随分じゃアないか?　こういう人の細君になったものは随分悲惨だよ。

お鹿　真実ね、一体、男子っていうものが得手勝手なんだわ、若旦那に限った事じゃない。

野口　此処の親方なんか、女房孝行って評判だが、でも矢っ張お鹿さんの方に怨があるんだね。

お鹿　ありますともさ……

(為吉は黙って勘七の方をジロリジロリ尻目にかけている)

野口　時に親方、煙草が済んだら、チョット遣って貰おうじゃないか?　午後からお寺の方へ行って、会場の整理を見届けて来なけりゃアならんから、これでナカナカ忙しいんだ。

為吉　でも将棋の仇打だなんて、呑気そうな事を云ってたじゃないかね?　まアもう二三服遣ってからだ、己だって元来人の頭髪を刈る為に生れて来た人間じゃアないんだからね。

野口　だって商売となりゃア、そんな変痴奇論は止す事だよ、さんぱつ屋で飯を食ってる以上、お客様の云う事を聴くのが当然だ。

為吉　八銭のお客様のお庇で、飯を食わせて貰ってるんだな、有難い事だ。

お鹿　汝さん、そんな馬鹿な事を云わないで、早くして上げたら宜いじゃアないかね、野口さんだからこそそんな無遠慮な口を利いても判ってなさろうが、商売に障るよ。

為吉　己ゃもうつくづく忌になった。寧そ廃業したい位だ。

野口　親方、串談云っちゃア困るぜ、此村には此処一軒じゃないか？　廃業されちゃア隣村迄行かなけゃアならない、皆が困るよ。
お鹿　この頃は急にあんな事許り云出して来て、私も一人で困らせられているんですよ……若旦那も些と云って聴かせてやって下さいな。
勘七　兎に角、稼がなけりゃ仕方がないでしょう。（茶を呑み呑み云う）
為吉　己等は稼がなけゃア仕方がなくて、若旦那は遊ばなけゃア仕方がないんだろう、善く出来ていますぜ。
お鹿　そんな事をツケツケ云うもんじゃないよ……若旦那の家は沢山とお金がおありなさるから、稼ぐ方は店の者が大勢引受けてしているんだし、若旦那は唯遊んで居なさればそれで済んで行くんですわねえ。此方等とは運命が違っているんだからね。
為吉　フン汝もその運命が悪かったんだね、お気の毒さまだ。
お鹿　悪縁っていうんだろうね。（笑う）
為吉　あの時汝も若旦那に請出されていたら、今じゃ伊勢屋の若奥様でさんぱつ屋さんなんかとは口も利かない身分になれたんだろうが、馬鹿だったね、尤も越前屋の酌婦にゃ、今の身分が分相応だと思って諦めるんだ。
お鹿　（悄とした顔色）若旦那を前へ置いて、下らん事をお云いでないよ、馬鹿馬鹿しいッ。
為吉　（鼻であしらって）若旦那も昔忘れずに、よくチョクチョク来て下さるんだから、お礼を云ったが宜いんだ。
勘七　……もう失礼します……じゃア、これを……（と銀貨を出す）
お鹿　有難う……二十銭でございますか？　お剰銭を！（起上る）
勘七　いやお剰銭はよろしいです。（と下へ降りる）
為吉　お剰銭を持ってお出で……十二銭！
勘七　イヤ……それはもう要りませんから……
為吉　要らん事はありません……余計に貰う道理がないから。
（お鹿が渡すのを為吉は受取って、客の鼻先へ突出し）
為吉　有難う……
（客は匆々に立出で、戸口の玻璃戸をガタリと軋らせて出て行く）
野口　親方も随分ぶっきら棒だな。
為吉　畜生めッ、（怒った顔色で、後を睨めながら）まだ何んとか思ってやがるんだから仕末に了ねえ。
お鹿　ああ一刻じゃア段々お客が寄り附かなくなる一方だよ、大切な旦那様じゃアないかえ。
為吉　ヘン、貴様の為めにゃ然うかも知れないが、己の為めには油断のならない昼鳶だ、ざんぱつ屋をだるま屋

と間違えてやがるんだろう、生っ白い面をしゃがって女の尻を追駈け廻る外に能がないんだから箸にも棒にも懸ったもんじゃァない、あんな穀潰しでも、富豪の息子だというので、村の奴らはへいへいしてやがる、笑わせやがらァな。

野口　（真面目になって）　そりゃァ全く親方の云う通りだ、あんなのが不良少年っていうんだな……（四辺を見廻して）大きい声では云えないが……

お鹿　（口元で笑って）　だって野口さんも折々、若旦那のお取巻きで料理屋へ上って行なさるって評判がありますよ。

野口　（周章てたように）　それは一度や二度お交際に行った事もあるが、幇間のような真似はしないよ、これでも大望のある身分だから。

お鹿　東京へ行って勉強するって云う貴方のお話も随分長いようですが、愈々何時頃御出発なさるんですか？

野口　講義録の方はもう卒業したから、これで一二年勉強したら、弁護士か、高等文官の試験は受けられますよ。一生村役場の書記じゃァ情ないからね。何時でも上役に頭を仰え付けられ通しで、威張れる時と云ったら、まァ滞納税の処分に行った時位のものだね。

お鹿　ホ、、、然うでしたっけね、この春、此処へ滞納税の取立に入らしって茶碗や膳まで差押えるって切口上で云いなすった時は、チョット怖うございましたっけ、平常の野口さんとは人間が変っていたようでしたよ。

野口　（真面目になって）　職務の執行となったら、そりゃァ止むを得ないんです、ああいう時は自分が自分でない、国家の法律の力が、自分の身体に宿って来るんだね、それで、気の毒だとか、惨酷だとか云う感は、何処か腹の隅の方へ押し込められて了うんです、そして他人の柔脈（やわら）を押えたような気がして、苦しむのを見ているのが、一寸愉快ですよ、後からは気の毒になって、閾を跨ぐのが極悪いけれども。（と頭を掻いてわざとらしく笑う）

為吉　（冷やかに笑って）　柔脈を抑えるって云やァ私は毎日それをやってるんだね、柔脈って云うよりは私のは急所だ、私は毎日、剃刀を握って、人の喉首を剃ってるんだからね、刃先を一つグイと突いたら人間の息の音を止めて了えるんだ、それを思うと、お客って皆馬鹿正直なもんだ、此方が何んな恐ろしい事を考えてるかも知らないで、平気で、首を此方の手へ任せて、磨ぎ澄した刃物で自由自在に生身へ触らせるんだからね、何んな豪そうな顔をしている人でも、何んな善い身分だと云って威張ってる奴でも、此方の腕へ首を抱かせたら最後、活そうが殺そうが指先一本の働きにあるんだからね、それで私は無事に剃ってやった後では人間一匹助けてやったと思って、腹の中では笑ってるん

だ。

お鹿　まあ汝さん、そんな気狂めいた事を云ったり、考えたりしちゃアいけないじゃアないか？……汝さん何うも変だよ、お医者に診て貰ったらいいわ。

野口　親方は剃刀を使う時、そんな事を考えてるんかね、薄気味が悪くなって来るよ。

為吉　イヤ、それも始めの中は、お客の顔へかすり傷一つ附けないようにと思って、後生大事にビクビクやっていたもんだが、段々馴れて来ると、段々倦怠が来て、終いには繰り返し繰り返し一つ事を毎日やってるのが癪に障って、寧そ客の喉首でもぐいとやったら、この商売を廃業られるかと云う気になって、それからは始終そんな考えが頭の中に巣を喰ったように附いて廻っているんだ、現に、今の、伊勢屋の若僧を剃ってやる時も、グイと喉笛へ突込もうかと思ったんだ。

お鹿　オヤ、マア……真実に此人は何うかしてるんだよ、野口さん、困りましたねえ。

野口　これじゃウッカリ髯も剃って貰えない、ざんぱつ屋で死んだんでは、私も浮ばれない、これでまだナカナカ大望を持っているんだから。（向うの椅子へ逃げる）

為吉　（嘲るように笑って）　マサカ、村のお役人の喉笛を抉るような気まぐれもやりませんよ。何しろ考えて見ると自分の生命と掛替えだからね、あの伊勢屋の若僧位なものと取替えるのもつまらなくなって来まさア、若し彼奴が、家の嬶を何うかしたという事件でもあった日にゃ、今日だって生かしてこの戸口を出しゃしなかったかも知れないけれども……

野口　（吐息をして）　じゃア怨みがなければ、そんな真似も出来ないというんだね。

為吉　イヤ怨みがあれば、それ位な事は当り前だアね、誰の喉へ剃刀を当てて る時でも、シュッシュッと刃先が髯を擦って、皮膚の上を滑ってゆくのを見つめていると、何だか不思議な気持がして、も少しの事でこの皮膚が凸くなっている骨が切れて、真赤な血がパット吹き出すんだが、何うして剃刀は何時も上ばかり滑ってやがるんだろう、ハ、ア己の手は器械になったんだ、剃刀へ附着いて了ったんだ、そうすると己の体全体は人の髯を剃ったり、髪を刈ったりする器械に化って了いやがった、忌々しい。己は生きているぞ、生きてる証拠に、一つ剃刀を外らかしてグイとやれという気持になるんだね、だがそう思うとふと気が附いたように、生命と掛替だぞと自分が自分の耳で独語を云ってるんだね。

お鹿　野口さん、まア何うしてあんな事を云い出したんでしょう。

野口　少し逆上に附いてるようだね、親方チト休んだら善いじゃアないか？

為吉　イヤ、自分の生命が惜しいッと思う位だからまだ大

丈夫、そりゃアこれでも相手に依っちゃア、取替えたって構やしないサ、何うせ己もこんな下らない商売をして、腰の曲るまで生きていたって、始まらないからな、だが是迄まだ不足のない相手には出逢さない、村長や、郡長や、三等郵便局長なんかの喉笛やったってつまらないからな……尤も一月前に、この村へ演習の下見物に来た何とか少佐の奴は、田舎の剃刀は切れないとかなんとかぬかしやがって、あんまり威張くさった口を利くから、髯が切れなくても、骨は切れるのを見せてやろうかと思って、已にグイとやる処だったが、つい馬鹿馬鹿しくなって止して了ったんだ。

野口　开奴ア危険だったな、でもまあ無事に済んで村役場で騒がんでも宜かったのは大助かりだ。

お鹿　（溜息をして）真実に宅はこの頃、何うかしてるんだよ、野口さん、何卒こんな事を世間へ仰しゃらないで下さいよ、商売が上りますから。

為吉　商売が上りゃア結句幸福だ、此れで己にも又別の考えがあらアな、何アに、こんな田舎にばかり日が照ってるんじゃアあるまいし、世間は広いんだ。

お鹿　（窘めるように）世間が広くたって、私等の生活の立つ道はもう極り切っているんですよ、今更何う足掻いて見たって、仕様がありゃしないんだからね。

野口　然う云えばまアそんなものかも知れないな。（考え込む）

（表の戸を開けて、半白の髪と髯とに包まれた五十前後の老人、時勢遅れの、短いフロックコートに、銀鎖をジャケットの扣鈕に絡ませながら入って来る、彼は小学校校長佐藤敏一である）

佐藤校長　今日は……やア野口さんか、此れからですな？

野口　（丁寧に会釈）イヤ私はその、後からでもよろしいです……何卒先生から……。

（為吉は黙礼する）

お鹿　先生様、ようこそ、何卒まア此方へ。

佐藤校長　（口早な調子で）有難う……有難う……野口さん。まア先口から……何卒御遠慮は要らない事です。

野口　えヤ、私はその……何卒先生から……

為吉　まアお掛けなさいませ。

佐藤校長　有難う……何うだね、相不変忙しいかな。

為吉　へエ……（と口重たげな調子）

佐藤校長　野口さんは歓迎会や何彼でいろいろ御用事がありましょうな。

野口　ハイ……否え……午後、一寸お寺まで行って下検分をしたら別に用事はありません……掛の方が大分居られますから。

佐藤校長　然うですかな……何しろ今日は愉快な事だね、この村の名誉でもあるし、又我が小学校の名誉だからね。

野口　然うですね、昨年は先生の二十五年勤続の祝賀会が

ありますし、今年は又、先生の御弟子の中からァ、して出世された方があるし、重ね重ねお目度い事ですね。

佐藤校長　大きに然うだね、お互様に喜ばしい事だ……岡田君は相不変平民主義で、昨夜はワザワザ私の陋屋を訪ねて来てくれてね、昔談も出たんだよ、今日は一つ髯でも剃ってから、御挨拶に出かけようと思う処だ、もう明晩は東京へ帰るのだそうだから、ナカナカ忙しい事だて。

野口　何しろ中央政府の高官ですから、一日でも半日でも時間が大切なんでしょう。

佐藤校長　大きに然うだろう、行く行くは大臣だろうね、矢ッ張、豪物は小学校時代から何処か違った処があるよ、一番か、二番か始終外ずした事はなかったからな。

野口　矢ッ張、小学校時代の薫陶の如何に依りますね、佐藤先生のお手柄もあるのに相違ありません。

佐藤校長　有難う……有難う……何しろ自分の教えた生徒の中から、天下の人材が出て来てくれると、自分の肩身も広くなって来るように思われるね、其処が天職の有難さだ。

為吉　野口さん、此方へお掛けなさい、やりましょう。

野口　イヤ、先生から先へ、……私は何時でも宜い。

佐藤校長　イヤ、まァ野口さんから……先口は先口だ。

野口　私は後でよろしいんですから……何卒先生から。

佐藤校長　イヤ、そりゃァいけない私は後から来たんだから。

為吉　何方でも、早く片附けましょう。

野口　サア、先生、何卒。

佐藤校長　イヤ、でも礼儀だから。

為吉　（剃刀を研ぎながら）じゃァ野口さんから先へ息の根を留めて上げようか？

野口　串談云っちゃァいけねえ、私は今日でなくても宜いよ、そう髪が延びてる訳でもないんだから。

為吉　じゃァ先生から先へ片附けましょう。

（佐藤校長、中央の椅子へかける）

佐藤校長　でも為吉君も近頃は大そう精が出るね、何しろ結構だ。

為吉　イヤ結構でもありませんよざんぱつ屋なんて、随分下らないもんです。

佐藤校長　イヤ、職業に高下はないんだから、忠実に勉強すれば宜いんだ。

野口　然うですとも、為吉君も此迄辛抱して来たんですから、もう一息ズッと遣り通すんですね。

為吉　（刃先を眺めながら）何を遣り通すんでしょう。（高笑する）

佐藤校長　それぞれ人間には天職があるんだから、それを一生懸命に遣り通すんだね。

為吉　二十年前に先生がそんな事を仰しゃって下さったんだね、それからズット遣り通したんですが、つくづく下らないという事が分って来ました。
佐藤校長　フン、君が小学校を卒業後、東京へ苦学に行くっていう話だったのを、君の親父が心配して、父の家業を継ぐように説諭してくれという事だったので、私はそれに賛成したんだが、まアまア斯うしてやって行けりゃア結構じゃアないか？
為吉　でも秀作さんには、親の家業の農業をやれって、説諭はなさらなかったんですね。
佐藤校長　岡田には学資金があるんだから、遊学させるというのに賛成したよ、それが今日、秀作君の出世の基になった訳じゃアないか。
為吉　じゃア学資金がありア、私もこんなざんぱつ屋なんかやってるんじゃアなかったんだね、つまり金が豪いんだハ、、、、。
野口　結局そんなもんだろう。
佐藤校長　そりゃア為吉君も小学校は善く出来たんだから惜しい物だとは思ったが、何しろ無茶苦茶に東京へ踏み出して、迷い途に入っちゃアいけないと思ってな。
為吉　でもその後、二三度、東京へ逃げ出しちゃア、力づくで親爺に連れ戻されたりなんかしてたんですからね。それから道楽もありました。女房も二三度取更えました。諦めようと思っても、諦められるものじゃアありませんよ。（云い云い髯剃に取かかる）

（野口は、座敷の上り框へ戻って）
野口　（小声に）お鹿さん、気を附けないといけないよ。
お鹿　真実だわ。（上り框へ乗り出して、来て仕事の様子を見守っている）
（為吉は折々、溜息をしてはゴリゴリ剃刀を使っている）
佐藤校長　少し暑くるしいから、頰髯は薄く剃って貰おうか!?
為吉　宜うございます……
佐藤校長　段々白髪が多くなるようだな。
為吉　お年齢には適いませんね……併し先生、あんまり口をお利きになると剃刀が滑って、何処を切るか知れたもんじゃアありませんよ。
佐藤校長　然う然う、毎度、汝に叱られるな、刃物が汝の手にあるんだから斯うなっちゃア、汝の命令通りにする外はないね。
為吉　もうお黙んなさらんと、剃刀が使えません。
佐藤校長　ハイハイ……
（為吉は今、喉の辺りへ剃刀を動かしている）
野口　（相不変、小声に）何んだか冷汗が出るようだよ、あれで指先へグイと力を入れたら、それ限りだから、人間って脆いもんだな。
お鹿　（振返って）聞えますよ、家のが変な気持でも起し

ちゃア大変ですからね。

野口　（コロりと畳へ寝転んで）　併し考えると忌になるね、立身だの、出世だの、やれ名誉だの、財産だのって、血眼になって騒ぎ立てて見た処で、あの指先一つでグイとやったら、後はもう何んにも無くなるんだからね、人間って奴の総勘定が附いて了うんだからね、三十近くにもなって、これから東京なんか出て苦労するのも馬鹿かな、ア、ア、。

お鹿　忌に心細い事を云い出して来たのね、野口さんは？

野口　（興奮的口調で）　併し矢張り、金だ、世の中は金がなけやァ駄目だ。

お鹿　つまりは其処へ落込んで行くんだね！

野口　金があって見給え、あの人だって、参事官位になれたかも知れないよ、そりゃァ実際分らないよ。

お鹿　そうすると私が参事官の夫人さんだね、惜しい運を取逃がしたよ。

野口　女は何んな出世でも出来るさ、女の資本は容貌とそれから肉体だアね。

お鹿　然う云やア男だって腕一つじゃアないかね？

野口　腕があっても金が無けやァ当節は駄目だ、時勢が然うなって来てるんだから何うも致方がない……オヤ、もう済みそうだな、エ、と、私は一寸出て来よう。

お鹿　頭髪は何うなさるの？

野口　後にしよう……一寸用事があるから……先生御免蒙ります……（スタスタと出て行く）

佐藤校長　（洗面台から帰って）　ハ、ア、大分若くなったようだな。

お鹿　先生は何時も御元気が宜くいらっしゃいますよ。

佐藤校長　まだナカナカ此世にする仕事が残っているからな、もっと元気が宜くないと何うもならんのだよ…………序に香水を一つ願おうかな。

（為吉、香水を吹き掛け了って、座敷へ上る、お鹿はお茶を入れる）

佐藤校長　野口さんは何うして帰ったのかな、私が先へ済まして何うも気の毒だったな。

お鹿　イヤ、又お帰りになるでございましょう。

佐藤校長　然うかな。（頬を撫で廻して）　イヤ、スッカリ善い気持になった、髯が延び過ぎるとモシャモシャして他人の顔だか自分の顔だか分らなくなるが、お庇でサッパリした。

お鹿　まアお茶を一つ召上りませ。

佐藤校長　有難う……有難う……じゃアここに御礼を置きますよ……左様なら。

お鹿　先生お剰銭を……

佐藤校長　否……要りません……左様なら。

お鹿　有難うございます。（送り出して）　為さん、「有難う」位云ったら善いじゃないかね、あんまり無愛相だよ。

為吉　（煙草を吹かしながら）　有難くもねえよ……何んだい老耄めが……秀作さんが小学校時代から違ってりゃア己だって違ってらアな、己の方が卒業する時は一番だったぞ、天職だなんて、二十五年も一つ処の小学校校長に噛り付いてりゃア訳は無いやね、善く倦きもしないでやって来られたもんだ、馬鹿根気丈は感心するよ。

お鹿　でも二十五ヵ年も辛抱が出来たから、知事さんから御褒美が出たんじゃないかね！

為吉　じゃア己れも今に二十五ヵ年勤続のざんぱつ屋さんだって、郡長から御褒美の出るのでも目的に働こうかな……糞でも喰えだ。

お鹿　今更焦々したって仕方がないじゃアないかね。

為吉　己はもうこんな生活に倦怠み切ったから、焦々するのも当前だ、第一、あの姿見鏡から癪に障るよ、あの縁の剝げたのは、親父の代からあの通りだ、そして鏡の中を見ると椅子へ掛けた人間の顔は毎日幾度でも変って行くが、傍へ立って白上着を着てる奴の面は一向変って行かない、何時も同じ男子だ、三百六十五日、男が同じ手つきをして、同じ狭い場所を往ったり来たりして、恥しげもなく同じ事を、繰返してやっていやがる、あの鏡は玻璃張の檻だよ、その檻の中から一生出られない男子が一匹いるんだ、気の毒にもなって来るし、可哀そうにもなって来る、而もそれが己なんだ、この己なんだ、そう思うと堪らないッ。（頭髪をふる）

お鹿　それがサ、今の運命だよ、もう斯うなっちゃア三度のお飯が戴いて行けりゃアそれで結構だとしとかなけりゃならないんサ、何うしようたって何うしようもありゃアしないじゃアないかね、気分を取直してお稼ぎよ。

為吉　フン、稼いだって何うなるんだい、己が斯うして一生稼いで汝を養ってやりゃアそれで善いんかい？　それが己の一生の目的なんだろうか、馬鹿馬鹿しいッ……貴様アそれで善くっても己は忌だッ。

お鹿　じゃア他に何うする途があるって云うの？　私だって何も、汝さんに養って貰えばそれで善いと云うんじゃアないよ、一生此処で燻ぶっていて、それで他に思い残す事はないと云うんじゃアないサ。

為吉　（冷笑）　然うだろう、汝が店番をしているのを見ると、御退屈様って折々云ってやり度いような気がするよ。

お鹿　お察しが善いわ、真実に私だってお退屈様に相違ないんだよ、汝さんの処へは、取替え、取替え御客様が見えるんだが、私のお客さんって、今じゃ汝さん一人限りなんだからね。

為吉　（怪訝そうな眼色）己は貴様のお客さんかい？

お鹿　（笑顔）　今じゃア御亭主と定った人が、私のお客さんじゃアないか、昔は然うじゃアなかったよ。

為吉　（吐出すような調子で）　フン、だるま屋じゃア毎晩

御亭主が変っていたんだからな、この頃はお客さんの顔が定り切って了ったから、それで御退屈だと仰るんだな。
お鹿　汝さんが、今、あんな事をお云いだったから……鏡の中に、何時も同じ顔をした男子のいるのが怖ろしいって云ったもんだから、私も何だか自分の胸に思当って来たんサ。
為吉　何んな事を思い当ったんだい。
お鹿　怒っちゃいけないよ、何も浮気で云うんじゃないが、私も汝のような事を折々考えていないじゃアないんだよ。
為吉　何をサ？
お鹿　（半ば笑って）夜中なんかに、偶と目が醒めると、何時も同じ顔の男子が、私の傍に眠ってるんだもの、何んだか不思議なような、怖ろしいような気持のする事もあったんだよ。
（為吉はジットお鹿の顔を見据えている）
お鹿　ホ、、、何もそんな怖い顔をして見なくっても善いじゃアないか？　汝さんが忌になったって訳じゃア更々ないんだよ。
為吉　（頽然となって）ア、、、人間って奴は些っとも依頼にやアならねえんだ。
お鹿　そんなに解っておくれでないよ、汝さんが鏡の話をするんだから、私だって同じ事だ、誰にだって皆辛抱気がなけゃア駄目だって云うんサ。
為吉　（少し慄えた口調で）貴様がそんなに浮気っぽい奴だから、伊勢屋の野良息子なんかが、ちょいちょい爪を出しに出入してやがるんだ、イヤ、あの野口だって油断はなりゃしない、何の客も、何の客も、油断がなりゃしない、それ丈でもこんな商売は忌だ、忌だ、あの鏡を叩き壊してやろう。（駈下りる、お鹿は追駈けて肱へ取り付く）
お鹿　短気な事をおしでないよ、商売道具を叩き壊したら明日の日を何うするんだね、早速困るのは眼に見えているじゃないか。
為吉　放しやがれッ……幾何困ったって死んだらそれでお了いだい、放しやがれッ。
お鹿　（堅く抱き緊めて）私はまだ死ぬのは忌だよ……今死ぬ程なら、もっと前に死んでるわね。
為吉　誰と死んでるんだ？（振返つて顔を見詰る）
お鹿　誰とでも相手は構やしないサ。
為吉　売女めッ、（と頰桁を叩いて、グタリとそこの椅子へ腰を落し）惚れたの腫れたのって、貴様は皆己を欺してやがったんだな。
お鹿　（嘲るように）勝手に疑るが善いよ。
為吉　（無念そうに、切歯して）こんな奴にまで馬鹿にされてたんか？　己はこんな下らない男子だったのか……
……

お鹿　何うせ汝も私も下らないサ。似たもの夫婦だよ、今更怒ったって、泣いたって、仕方があるもんか。
（為吉は額を押えて呻吟いている）
（突然、戸口から絹帽子に、フロックコート、胸間に金時計の鎖を光らせた、代議士参事官岡田秀作入って来る、手にはシガーの紫烟ゆるく立上っている）
岡田　御免……今日は（笑顔で会釈する）
お鹿　（周章てて丁寧に叩頭をしながら）入らっしゃいまし。
（為吉立上って呆然と見ている）
岡田　（笑を浮べて）私だ、岡田だ……何うも久し振だったね、昨夜は折角訪ねて貰ったそうだが、来客が立込んでいて何うもとんだ失礼を……
為吉　（顔色を和げて）ア、岡田様でしたか？　善うこそまア……（会釈する）
お鹿　（アタフタと、座敷の方へ行って、そこらを取片附け、極り悪そうに座蒲団を出しながら）旦那様、まア何卒此方へ……汚くろしうございますが、まア何卒……
為吉　何卒まア……
岡田　（鷹揚に歩み寄って腰を卸し）お介意なく……一寸挨拶に出かけました。
為吉　（上着を脱ぎながら座敷へ上って、小さく正座って）こんな汚さくろしい処へ善うこそ入らしって下さいました、今度は何うも御目出度うございます。（丁寧な叩頭をする）
岡田　イヤ、有難う……為吉さんとは、大分暫らく逢わないな、御健康で、稼業に御精が出て何よりだ。
為吉　一向、詰りません……御目に蒐るのもお恥かしい次第でございますよ。
岡田　イヤ、国民が各自各自、その職業を忠実に勉強して貰えば、それで結構だ、役人になるのが、別に大した名誉でもないからね。（云い云いシガーを燻らしている）
為吉　（苦笑して）何しろ貴方は結構な身分におなりなさいましたが、私はこんな事で、うだつが上りません、もうつくづく忌になったから、廃業しようかって、思った矢先なんです。
岡田　それは戯談だろう。今更商売替をして見たって、別に面白い事がある訳のものでもないんだからね、まア辛抱が第一だね。
お鹿　全く旦那様の仰有る通りでございますよ。
岡田　ア、またしみじみ御挨拶もしなかったが、為吉君の御家内ですな。
お鹿　ハイ……（耳の根を赤くして挨拶しながら）為吉から御噂も聞いて居るのでございます。昔をお忘れなさらないで善うこそお出で下さいました。
岡田　為吉君とは小学校時代の悪戯仲間だったんで……矢

ッ張り折々は思出すんだね。
お鹿　それにしても、善うこそ、ワザワザ御越し下さいまして、恐れ入りますでございます。
岡田　イヤ、別にワザワザと云う訳でもないんだがね、この先の有志者の家へ廻って、この前へ来かかるとつい顔を一つ剃って貰おうかと思ってな。
（為吉は眼をジロリと光らせる）
お鹿　オヤ、左様で入らっしゃいましたか、じゃア一つお顔を……為吉さん……
岡田　別に急がんでも善い、午後までは用事がないんだから……今小学校の門の前を通って見ると、黒かった校舎は、ペンキ塗に変っているが椎樹なんか昔のままに茂ってるな。
為吉　（冷淡に）然うですな。昔のままの者もいりゃア、変った者も居りまさア。
お鹿　（愛矯笑）旦那様なんか、一番善くお変りなすったんでございますね。
岡田　（得意げに微笑）まだまだ変り様が足りないんだ。これから又、二度も三度も繭を破らないと、目的地へ飛んで行けないんだ。
お鹿　（媚びた調子で）何れ大臣におなりなさるんでございましょうね。
岡田　（声高に笑い）ハッハッハッハッ、ナカナカお世辞が善いね、……併し大臣なんか何んでもない者だよ、蜜柑の皮を投げ付けて当った人を大臣にしろって、云ってる者もある位だからね。
お鹿　ヘエ……（相返答に困っている）
為吉　（冷笑的口調）蜜柑の皮じゃアない、金だアね、金さえありア代議士にでも、何にでもなれる。金の無い奴がざんぱつ屋なんかになるんだ。
岡田　（真面目に）為吉君は大そうこの稼業が厭になったような口吻だな。
為吉　厭も絲瓜もありませんよ、成ろう事なら私も富豪の家へ産れて、もう一度学校から遣り直し度い……でも小学校に居る時分にゃ、富豪も貧乏人もありゃアしない、強い奴が大将になる、弱い奴が草履持になる、出来る者が一番で、怠ける者がビリと極ってたんだから苦情も不平も無かったんだね、……椎の樹と云やア、秀作さんを踏台にして、私がその背中へ乗って、椎の実を取った事もあったっけな、月の出る晩方に……。
岡田　（追懐的に）然う然う一度、樹の洞穴から蝙蝠が沢山飛んで出て、為吉君が吃驚して、飛び下りたので、私も胆を潰して逃げ出そうとするはずみに、樹根に転んで大そう鼻血を出した事をよく記憶えているよ、今日もその事が頭に浮んで来たのだ、何しろ無邪気だったね。
お鹿　オヤ、まア、そんな事があったのでございますか？
岡田　子供の時の事を思出すと、随分面白いな。

為吉　(溜息して)　私は苦しくなって来る、岡田さんにはこれから前途があるが、私の眼先は真闇だ、方角が立たない、もう手も足も縛られてるんだ。
岡田　何うしてそんな自棄を云出すんだね、斯うして稼いでりゃア、それで沢山じゃアないか!
お鹿　人にはそれぞれ分相応って云う事がございますからね。
岡田　大きに然うだ、女房子が養って行けりゃア、それで人間は一人前だ、何処へ行っても恥かしい事はない。
為吉　(自ら嘲るように笑って)　一人前の人間って奴にはもう倦々した、図抜けて豪くなるか、図抜けて馬鹿になるか、世の中の相場を狂わすような事をやらなけりゃ生き甲斐はねえ。毎日、毎日、活版で捺したような事を繰返してやってるのが恥かしくないような奴は生きてるんじゃアない、器械になってるんだ、己だって、バリカンを使ってるのか、バリカンに使われてるのか分らなくなって来る時がある、何しろ情ない話だ。
野口　(戸口から声をかけて)　頭髪丈やって貰おうか、髯は自分で剃って来た。
(岡田を見ると、周章てて礼をする)
為吉　頭髪丈だな。
野口　イヤ、然う急がんでも。
為吉　でも、貴方が先口だから、先へ片附けよう……(仕事着を着けて下り立つ)じゃア一寸失礼します。
岡田　サア、何卒……。
野口　イヤ、岡田閣下から何卒……私なんか何時でも善い……意外な処で御目に蒐ります。(ペコペコする)
岡田　何卒お先へ……私は別に急がないから。
為吉　野口さんは朝から来て待っていたんだから先へやろう……髯を自分で剃ったたア可笑しいな、(冷笑して)誰れが汝さんの……(唾を吐出すような口調)
お鹿　岡田の旦那様から先へしてお上げなさいよ。
岡田　イヤ、私は何うでも善いんだ、まア家内さんと世間話でもして待っていましょう。
お鹿　何んならお邸へ伺わせましょうか?
岡田　イヤ、イヤ、そんな事には及ばない、私も洋行中の習慣が附いて、毎朝、自分で剃っていたんだが、家内を貰ってからは、家内に剃らせていた、その剃刀が丸刃になったので、磨がせにやったまま此方へ来たんだ、もう二日剃刀を当てないのでザラザラして気持が善くないんでね!
(この間に、野口は隅の椅子へ小さくなって倚りかかる、為吉は剪刀を使い出す。)
お鹿　オヤ、奥さまに、(莞爾して)左様でございますか?
岡田　(ジロジロお鹿の顔を見て)　貴方は何処かで見たような気がするよ、東京に居た事があるんじゃアないかね?
お鹿　ハイ、十年許り前には居た事もございますが、旦那

様に御目に蒐った事はないようでございますよ。

岡田　東京の何処に居たんだね？

お鹿　ハイ……あの……片隅の方に……一寸との間でございますから、よく覚えても居りません。

岡田　然うかなア、こりゃア、私の思違いかも知れんな……空肖っていうんだろうねハ、、、。(と快活に笑う)

お鹿　でも東京は善うございますわ、十年の間に大そう変ったでございましょうね。

岡田　そりゃアもう日々変って行くね、何を云っても日本じゃア東京だ、自分の産れ故郷の悪口を云うじゃアないが、こんな田舎へ帰って来ると、何んだか鼻を突くような気持がしてな。

お鹿　そりゃア然うでございましょうとも、私等も同じ苦労するなら矢ッ張り東京辺へ出て一苦労しとうございますね、此処じゃア怠屈して了います。

岡田　(打解けた調子で) 東京へ出なさい、それが善い、私なんか一週間此処に静としていると、怠屈で堪らないね、親の家があるし、選挙区でもあるしするから、そんな事を云ってられない場合もあるがね。

お鹿　左様でございましょうとも……(笑靨を見せて)何んなら御邸へ、御奉公にでも上げて戴きましょうか知ら!?

岡田　ハ、、、、それは結構だ、貴方が独身者だと明日でも連れて帰るんだが、然うも行かないしサ。

(為吉は又しても二人の談話の方に耳を傾けている)

野口　アイタ、、、耳を切っちゃ困るよ、親方しっかり頼む。

為吉　ちょっと剪刀の尖が当ったんだ、何んでもねえや……

(その方には眼も遣らないで、岡田は興が乗ったように、片膝を深く畳の上へ滑らし込む)

お鹿　否え、私なんか何うなったって構わない体でございますから、真実に御奉公口があれば、も一度東京へ出て見度いと思います。御戯談になさらないで旦那様に一つお世話をお願いしましょうか？

岡田　否、真実に、家妻が兎角病身だから、仲働を一人入れたいと思ってる処だがね、心当りがあったら御周旋をお願いしようか。これは戯談にしないで気にかけていて貰い度いね。

お鹿　オヤ、真実でございますか？……奥様が御病身で入らっしゃるんでございますか？

岡田　婦人病でもう一年許りぶらぶらしていて、病院へ出たり入ったりなんだから、弱って了うんだ、矢張婦人は体格が善くないといけないよ。貴方は健康そうだな。(と肉附を見ている)

お鹿　ハイ、貧乏するお庇で病いもしませんが、心(しん)は弱いのでございますよ。

岡田　でもよく肥っていられるようじゃないか？

お鹿　(微笑)　脂肪質肥って云うのだそうでございます…
…色艶が悪うございましてね。
岡田　下地が白いんだろう……イヤ、美人に色の黒いのは
あまりないようだねハヽヽ。
お鹿　(嬌を作って)　旦那様もお人が悪うございますよ、
そんな事を仰しゃって、お戯いなさるものじゃァあり
ません、若い娘ならウッカリ善い気になって、旦那様
の後から追駈けて行くような事になりますよ……(低
声で)　真実に、私仲働に使って戴けましょうか?
岡田　(髯を弄って)　でも夫婦連れの御奉公はちと当方に
困るよ、心当があったら頼みます。
お鹿　心当がありますよ、(媚るように見て)オヤ、旦那様
御襟に煙草の灰が。(云い云い膝行り寄って胸を軽く
たたく)
岡田　有難う、(仕事場を顧みながら)まだ時間が取れそう
だね、午後は大分忙しくなるから、何なら貴方に一つ
剃って貰えまいか?
お鹿　お顔を……私はまだ慣れませんけれども……為吉さ
んの顔しか剃った事はないんですけれども……
岡田　傷を付ける心配もないでしょう。一つ願おうかな。
お鹿　よろしうございます……何うせ奥様のようには参り
ますまいけれども。
岡田　(笑って)　処が一年許り、その奥様が顔を剃ってく
れないいんだからね……此方の椅子へ掛けようか?　(と
そこへ立って行く)
(為吉はしきりに尻目にかけながら、自棄に剪刀を
鳴らしている)
お鹿　(庭へ下り立って、白い巾を岡田の首へ巻いてやり
ながら)お急ぎなさる様子だから、私が剃って上げま
すよ、旦那様の御注文でもあるしね。(云い云い剃刀
を研いでいる)
為吉　(突慳貪に)　もう済むんだ。
岡田　御家内に御苦労をかける事にした、昔の友人に髯を
剃って貰うのも気が刺すからな。
(為吉は忌な顔をして彼方へ向く)
お鹿　旦那様は明日、東京へお立ちになるのでございます
か?
岡田　明日の午後から立つ積だ、これでナカナカ用事の多
い体だからな。
お鹿　左様でございましょうとも、お越になっても、お帰
りになっても真実にお大抵じゃァございませんね、今
日は此から演説会に、歓迎会とかがあるんでございま
しょう、嘸お疲れなさいましょう。
岡田　何しろ、皆の衆の厚意だから疲れるも何も云っちゃ
居られないんだね。
お鹿　新聞へ毎日、旦那様の事が出て居るのでございます
ね。宅と二人で引張り合で読んで居ります。
岡田　ハヽヽいろいろお負を書き足すので困るよ、東京の

新聞には又、官費で党勢拡張に出かけたなんて悪口が叩いてあった、下らん事を問題にするもんだ。

お鹿　お帰りになったら、東京でも歓迎会とかがあるんでございましょうね？

岡田　マサカ……ハ、、、、今度は歓迎会でなくて、停車場で新聞屋連中の囚になるんだ、それは実にうるさいよ、又、尾に鰭を附けていろんな事を書立てるのだろう、殊に反対党の新聞と来たら、思い切った猛烈な揑造記事を出すんだからホトホト閉口するね。

お鹿　（剃刀を当て始めて）とても奥様のようには参りませんよ、新参者でございますから……

岡田　結構結構……

（お鹿は微笑して、岡田の顔へしきりに指先を触れて、それから又鏡をのぞいて見ては莞爾する）

（為吉は小ッ酷く、野口の頭髪を引掻き廻しながら一方を尻目でチラチラ睨んでいる）

お鹿　旦那様のお髯は随分濃くていらっしゃいますね。

（為吉は野口を洗面台の処へ引張って行く）

お髪も艶々して、真実に羨しいようでございますわ。

岡田　…………

（為吉は焦々して野口の頭髪へ香水を吹きかける）

お鹿　お襟足の長くていらっしゃる事、女に欲うございますわ。

岡田　…………

（野口は座敷の上り口へ戻り際に、鏡の中の岡田に黙礼する）

為吉　（急に剃刀を研ぎ始める、眼色が変っている）お鹿退くんだ、私が剃る。

お鹿　（喫驚した眼色で見返って）宜いんだよ、もう直だから（小声に）加之に、気持宜さそうにウトウトしていらっしゃる様だからね。

野口　お鹿さん、剃ってお了いよ、親方は乱暴だからいけないよ、私は耳へ傷をした。

お鹿　真実にいけないわね、何うかしてるんだから。

野口　剪刀だって、危険だよ、私は冷々した。

お鹿　（軽く笑って）野口さんは一体気が小さいんだからね。

為吉　（研ぎ済ました剃刀の刄先を見つめて凄い笑を洩らし）己は剃刀を使うんだぞ、剃刀に使われる人間じゃアないんだ。

お鹿　宜いよ、私が剃って了うんだから、もう喉だけだよ。

為吉　退けッ。（と睨む）

お鹿　宜いてばねえ……（小声で）ウトウトしていらっしゃるんだから。

為吉　退けッ。（肱を掴んで向へ突き退ける）

お鹿　酷い人……眼をお醒しなさるんだよ。

岡田　（為吉代って、岡田の喉を摩する）
ア、為吉君か、……善い気持で、ウトウト夢を見かけた処だ。

為吉　（冷やかに）　定めて御立身なすった夢でも見ていらっしゃったんでしょう。

岡田　何んでも急に電報がかかって東京へ帰ると、何処か大きな広間へ召し出された処だった、壁が金色で、緋天鵞絨の帷幕（カーテン）なんか掛っていて、足の下には弁慶縞のように、黒と白との大理石が敷き詰めてあってな……何処か外国で見た宮殿のようだった。

為吉　ヘエ！、私なんか夢にも見られゃアしませんや……

岡田　（独語するように）　そして向うの三重になった蛇紋の大理石の一番上の台には、コブラン織の絨氈を敷いて、玉座が出来ている、……その玉座に、金の縁縫をした紫色の長い絹の裾を曳いた女王がいられる……その女王が可笑しいんだ。

為吉　ヘエ……何んなに可笑しいんですかな？　（と冷嘲する口調）

岡田　（笑って）　それが可笑しいんだ……それが君の御家内の顔そっくりだった……ア、、こんな面白い夢は近頃見た事がない、惜しい処で目を醒まされたよ。
（お鹿は、莞爾して、鏡の中の岡田を見る）

為吉　ヘエ……その女王があの嬶の面に見えたんですか？コリャ笑わせ物だ。（云い云い剃刀を当て始める）

お鹿　汝さん、気を附けてお剃りよ、大切な方だからね。

為吉　（振向いて）　何が大切なんだい、素面めッ。

お鹿　旦那は大切なお体だと云うんだよ、野口さんのように、粗末な真似をおしでないと云うんだよ。

為吉　やかましいッ……喋舌るなッ、（云い云いふと鏡の中を見て）やってやがる、相不変あの男が檻の中で働いてやがる、白い衣服を着た囚徒だな、彼奴は……、
（と見入っている）

岡田　君何を云ってるんだね？

為吉　イヤ、鏡に映ってる自分の影法師を見ると、つくづく情なくなって来やがると云う事サ。

岡田　何うしたと云うんだね。

為吉　秀作さんは夢を見てられるんだ、人の嬶に紫の衣服（きもの）とやらを着せて贅沢な真似をする夢を見てられるんだ、その傍に己は立って、一生アして人の髯を剃ったり、頭髪の臭気を嗅だりして暮さなけゃならない、堪らない、堪らないッ。

岡田　少し逆上せているようだね。

為吉　今こそ、二人の影法師がア、して鏡へ映ってるが、秀作さんが立って了ったら、後には己一人になる、己一人が何時迄もこの檻の中で過さなけゃならない、忌だいッ。

お鹿　（歩み寄って）　汝、又何を云い出したんだね、仕事を早くサッサッと片附けたら善いじゃないかね、旦那

様もお忙しいんだから。

為吉　売女めッ、その旦那様に蹤いて行き度いって云ってやがったな。

お鹿　（苦笑）戯談を真に受けるものがあるかね、お坊ちゃんねえ、汝も……。

岡田　早く片附けてくれちゃア何うだ？

為吉　（興奮した口調）片附けるとも……己は斯うして剃刀を片手に握ってる、此の手で、首を押えているんだ、斯うしてる時や、此の世界に誰も恐ろしい者はない、……馬鹿め、己はまだ生きてるんだぞ、今日こそ剃刀を使ってやるんだ……。

（剃刀が急に閃く、岡田は一叫して椅子と共に倒れる）

お鹿　アッ……汝さんまア何うしたんだね。（と叫ぶ）

野口　とうとう遣附けたんだ。（慄えた口調で）演説会も歓迎会もこれで滅茶滅茶だ。

為吉　（瞳を据えて）オヤ、オヤ、己の眼前に己の死骸が倒れてやがらア……（狂的な笑）ざまア見やがれ。（青白く慄えて立つ）

――カーテン――

（一九一四年七月「中央公論」）

牛部屋の臭い

正宗白鳥

一

稼業がら潮の干満に関係の深い漁夫どもは、季節の変化や年中行事の何事にでも陰暦を標準とした。伊勢の太神宮のお札と一緒に頒られる国定の暦には除かれようとも、村役場などでいくら陽暦の採用を奨励しようとも、隣近所の村々が次第に新の年月を迎えるようになろうとも、この小さい漁夫村の一区劃だけは、迷わないで普通りに歳を送り歳を迎えている。海で生計を立てる者に取っては、陰暦に依って区切りをつけた方が自然の道に適っていた。

今年もその旧の正月が来た。大晦日までには、不断は淋しい浜辺にも小さい船や大きな船やが景気よく並んだ。××丸と染出したり墨で書いたりした旗を立てたのは、多くは荒海を乗越えて遠方から帰って来たのである。陸の家はどんなに穢しくても、舟という舟は皆綺麗に掃除されて、

飾罇を垂れ蜜柑や串柿などを供えられている。潮が満ちると漣が舟端に戯れ、潮が退くと牡蠣殻が模様のようにところどころ色取っている潟の柔かい泥が舟底に吸付いた。海が浅いのに、小川からは絶えず汚い水を吐出しているため、干潮時の海際には一種の臭気が漂った。村の者が無頓着に流す洗濯水の臭い、腐敗した食物の臭い、魚の臭いや藻の臭いや、糞尿の臭いさえその中に交っているのである。潮の差退きの激しい海辺のように柔かい白沙はこの湾内の何処にも見られないが、その代りに袋の中のような此処の入江の魚は内海の中では殊に旨味(しみ)に富んでいる。湿った泥海は魚の餌を豊かにするし、静かな水は魚の疲労を少くした。そして、沖で労(つか)れた魚などは鰭を休めるために樹木の繁った島蔭に集まって来た。

海鼠や飯蛸の漁の盛りは年内に一先ず終って、此処暫らくは松明の光が闇の海を照らさなくなった。網曳の懸声も舟唄も聞えなくなった。が、海がひっそりとして来る代りに、陸は俄かに囂しくなった。餅搗のために村中の井戸水が涸れて、全村の飲料水となっている山の藪蔭の「清水」さえ涸れかけた。

元日から毎日隣村の牛肉売りが入って来た。漁夫どもは注連飾をした神棚の前で車座になって、この牛肉を喰って酒を飲んで唄い囃して新玉の春を祝った。澁紙のような顔色をしていても猥雑な唄を怒鳴っていても、年中潮風で鍛えた彼等の喉から出る唄声は凛々として周囲に響いた。太鼓にでも合わすとその声が一層よく調和していた。七草まで毎夜浜の集会所で催される旅芸人の浪花節よりも、漁夫自身の無心のざれ唄の方がどれほど快い音を含んでいるか知れなかった。

浪花節は毎夜客止の賑いで、中日から昼席をも企てられた。芸人と名のつくものがこの狭い貧乏村へ只の三日でも足を留めることは年に一二度あるかないかなのだから、村の浮気な娘だの、寡婦(ごけ)だの、あるいは亭主持までも、白粉を鏝塗りにしてめかし込んで、浪花節語りの宿へ押かけた。夜は集会所の楽屋口に立って彼等が出て来るのを待受けた。

その中でも取分けて噂に上ったのはお村という三十近い女だった。何時も笑っているような顔をしている大柄な女で、これまで三度も四度もこの土地の漁夫や隣村の百姓の家などへ縁付いたのだが、何時も自分で逃出すか先方から追出されるかして、半歳も尻の落着いていたことはなかった。今は誰と極った一人の亭主は持たないで、母親と二人家内で、蜜柑だの干物だの季節季節の物を駕籠で背負って、近村を売廻っている。そして、盆とか祭とかの田舎の休日には、年下の男女の中に交って浮かれ騒いで、悪遊びには人に遅れを取らなかった。青葉の頃にこの村へ廻って来る伊勢神楽の一座や、偶然に流れ込む祭文(さいもん)語りなどといろんな噂を立てられたこともあった。

「またお村さんが……」と、朋輩の菊代は眉を顰めて蔑

んだが、この女は正月が来ても、沖から若い漁夫どもが帰って来ても、お村のように臙脂白粉をつけるどころではなかった。同い歳で幼い時分からの遊び友達で、今でも同じように背負籠を背負って物売をしているのだが、菊代には八十を越している祖母がまだ生きている。母親は両眼とも潰れている。そして父親とか兄弟とか手頼りになる男切れは身内の中に一人もなくなって、たった一人の姉は、菊代が十二三の頃播州室津の飲食店へ身売りして、惣嫁とかになって、それきり音信不通になっている。菊代にも二度ばかり確かに夫と名のつけられるものが出来たのであったが、一人は兵役に服している中幾度も脱営してついに死刑に処せられ、後の夫は繋累の多いのを厭って朝鮮へ出稼ぎに行ったきり、五年六年葉書一本の音信さえしないので自然に縁は切れている。

　で、正月になっても、菊代には心待ちにする舟はなかった。隣近所共同の一つ春で餅を搗くにも、菊代は人前の恥かしい思いをしたが、それでも欲ばかりの餅は工面して拵えたが、餅の外には正月の支度とて、金のかかることは何一つ出来なかった。何かの手伝いに始終出入りしている家主の家の仕舞湯へ入って、其処の下女と髪の結い合いをして、注連飾は其処の作男に残りの藁で一掴み、神棚へ垂れるものだけ造って貰った。祖母は何十年面影に変化のない枯木のような身体で、他家の飲み水汲みや使歩きをしていたのだが、年末に水桶を担ったまま蹴躓いて、向う脛を擦剝いてからは、戸外の便所へ出て行くのさえ術ながって、昼も夜も炬燵に臥せって、おりおり心細いことを云っちゃ唸っている。壁や塀を手索りに伝って近まわりへだけ独りでも出掛けられる母親は、質屋使いを稼業のようにして、一銭二銭の使い賃を貰っているので、節季には菊代と一緒の餅米搗きとこの質屋使いとで盲目相応の役があって忙しかったが、一夜明けると用もないので、炬燵の中で眠飽きると、隣近所の女達を相手に、持前の高声でげらげらと笑い話をして興じている。

　一つ春で餅搗きをする仲間内は、便所も共同で、小川の裾の方に貧しい一区劃をつくっているのであるが、菊代の家は先日まで、この村では可成り大地主の浜屋の牛小屋であったのを、新しい小屋が上の地面に建てられたので、その跡の不用になったのを、無家賃同様で借りているのである。小川の縁に堆くなっている芥の臭いやこの界隈の家々から洩れ出るさまざまの臭気は、不潔な臭いに馴れているこの村の者の鼻にさえ、一種異様な刺戟を与えたが、菊代の家には、その上に牛部屋らしい臭いがまだ漂っている。二枚の莚を敷いた板の間に寝起きしているが、土間は元のままで、牛の五体から出た汚い物は日当りや風通しの悪いためか、まだ乾き切らないのである。冬の間はまだしも、梅雨時や暑中には、蠅と蚊と臭い温気とでとても家の中にじっとしてはいられないのである。

　でも、祖母や母親は寒い冬よりも夏を恋しがった。腰巻

一つで埠頭場で涼んでいられる夏の方が、腹の減って手足に皸が出来て身体の凍える冬よりもどれほど暮しいいか知れなかった。旨い南瓜や瓜が鱈腹食べられるし、旨い水が夏は銭入らずで飲まれた。

「おらに一合だけ神酒を飲ませて呉れ、それでおらも有難い正月が祝われるんじゃから、祭には強請みゃせんから、三ヵ日の中にたんだ一合だけ買うて呉れい」

祖母のおみちは三日の朝向いの家の老爺の酒臭い息を嗅いでから、矢も楯も溜らないような気になって、わざと哀れげな声をして菊代に頼んだ。

「お婆がとうとうお極りを云い出したなあ」

菊代は鼻で笑って、「その間に新田の酒屋へ蜜柑を持って行くんじゃから、その時に酒の糟を貰うて来て上げらあ」

「阿呆吐かせ。酒の糟でお正月が祝えるか。……去年の秋にお上から盃とお金を五十銭頂戴した時に、これも長生したお蔭だから、早速神様に神酒を供えて、そのお余りをあの盃で頂こうと思うたら、われは何と云うた。もう寒うなるからこのお金でお母の半纒を出しとくことにして、お酒は正月まで辛抱しなさいと云うたじゃないか。おらあよう覚えとるがな」

「お婆も勝手なことはよう覚えとるなあ。おらあ何もかも忘れてしまうから苦がないと先日も云うとった癖に」

菊代が笑って相手にもしないので、おみちは泣寝入りに寝入った。其処へ長刀草履を引摺って何処かで貰った飴菓子を舐りながら帰って来た母親のお夏は、菊代に訳を聞いて、

「そないに飲みたがっとるのなら買うて上げたらええがの、われは知るまいが、お婆は昔は寝酒の一合ぐらい欠かしたことはなかったものじゃ。お初が重たい徳利を抱えてよう買いに行きよった。あの時のことを思うと、お婆に酒の気のない正月をさすのは不憫じゃから一舐めでも買うて来て上げい」

お夏は薄々物の黒白の見えていた遠い昔を夢のように思出した。その時分には、亭主もまだ生きていて三度の食事には不自由しなかったので、婆さんは婆さんで自分の稼いで取った金は、皆な自分の飲食に費っていたのだった。……母親に生写しといわれた姉娘のお初の目の大きな脊の高い姿や、貰い乳して育てた菊代の幼姿は、目の開いていた時代の懐かしい記念として、おりおりお夏の胸に浮んでいた。今も炬燵に当って、口をもぐもぐさせながら白眼を天井へ向けて、過去った影を捉えていると、先きから炬燵の上で誰憚らじ鏡にわが影を映して独りで楽んでいた菊代は、ふと顔を上げて、

「お母はにやにや笑って、何か可笑しいことがあるんかな、口の端に飴の汁を垂らして……」

「お母は泣きも笑いもしとりゃせん、われの目にゃそう見えるんか」お夏は例になく突慳貪に云って、手の甲で口

端を拭って、「……お姉が今ひょっと戻って来たらわれはどないな気がするだろう」と出抜けに云って、聴い耳を戸外の足音に留めた。

「お母にも呆れるがの、突拍子もないことを云い出すんだもの。盆なら幽霊になって精霊棚へでも出て来るかも知れんけど、お正月にはどうしてお姉が戻って来るものか」

「われは何時でもそう云って、お母の腹の中の楽みを腐らしてしまう。お姉が死んだという確かな報知があったのじゃなし、今の今でもどないええ身装をして、お母もお婆も大丈夫で居ったかなというて此処へ入って来んとも限りゃせん。おしも婆さん処の喜左を見い。紀州沖で難船して七年も音沙汰がなかったから、位牌まで拵えてお線香を上げたりしとったのに、一昨年の秋祭にひょっくり戻って来たじゃないか。八丈島へ流れ着いて生命が助かった上に、その島は暮らしええ土地じゃというて七年も其処で漁をして気散じに暮らしとったそうじゃないか。それだもの、われお姉にしても何処ぞええ島で不自由のない月日を送っとるかも知れやせん。喜左も他国の者に親切にされても、つい家の事が思出されてじっとして居れん気になったから、皆なに留められるのを逃げるようにして、夜昼通して此方へ戻ったというから、お姉も何時身内が恋しうなって戻って来まいものでもないがの。どんな遠方に居っても、この頃は汽車や蒸汽船があるから、造作もないこっちゃがな」

「何ぼ便利でも冥途からは汽車も蒸汽も通っとらんからの」

菊代は欠伸まじりで云って、炬燵の上へ額を当てて目を瞑った。狭い道一つ隔てて向いの家からは酔いどれ声の浪花節が聞えて来た。牛肉の焼けつく臭いや酒の匂いはますます烈しく窓から入って来た。窓には疎い格子が嵌っているだけで障子がないので、夜は舟板の毀れで風を防ぎ、昼間は開けっ放しのままで明りを取っている。

「菊は居らんのかい」と、ふと窓の上の、地主の庭の方から声がした。

「へえ、居ります」お夏は代って返事をして、

「何ぞ御用で御座りますか」

「午餐のお菜にするんじゃから、魚を捜して来て呉れんか。何でもええから生かして持っとる処があったら頒けて貰うて来て呉れいな」

「ええ承知しました。……お松が去んどる間はお事多う御座いましょう」

お夏は窓の上の足音が消えてから、言附かった用向を繰返して、菊代を促したが、菊代は夢現で返事しながら、容易に立上らなかった。平生過度な働きをしていたのが生中二三日骨休めをしたために、手足がだるくて、坐ったが最後、身動きもしたくなかった。それに、初日から二日つづけて浪花節を聞いて夜更しをしたので、今はどやされても起きたくなかった。

「用事だけしてきてから眠りゃええのに」と、母親はや

きもきしたが、菊代はわれ知らず快い夢に落ちた。

「どの舟にも今魚なんぞあるものか」と菊代はふと目を開けて、寝言見たいに呆けた口を利いたが、直ぐにまた寝息を洩らし出した。

二三度背を揺っても手応えがないと、お夏はその上娘を急立てることは出来なくなって、炬燵の中の孱細い足を摑んで、「お婆お婆」と呼立てた。

「お婆一寸起きて下んせ……大儀じゃろうが、お前でも浜屋の魚を買いに往て上げにゃなるまいがの」

「おらがかい。……おらに酒の一合も飲まして呉れりゃ往てもええが、只じゃ一足も歩く気にゃなれん」と、婆さんは片手で身体を少し持上げて子供染みた口調で云った。

「そないな無理を云うてうちを困らせるもんじゃない。足が疼うても浜まで往て来て下んせ。神酒は屹度うちが飲まして上げらあな」

「ほんまにか。この頃は世間が皆なおらを欺してどもならん。今度はわれも謔をこくと承知せんぞ」

婆さんは自分で疼い疼いと思過していた足を動かして、二三度呻いてから起上った。そして引摺り引摺り戸外へ出たが、盲目のお夏と同じように杖は手にしなかった。

頭巾代りに汚い手拭で頭を包んで、縞目も分らぬような単衣の上に綿の食出た猿子を着ているだけで、足袋さえ穿いていなかった。魚桶を浜屋から持って来て、心当りの漁夫の家を訊いて歩いたが、彼処此処に見覚えのない若い漁夫どもが五人十人寄り集まって、飲んだり食ったり、面白そうな話をしていたりした。

「誰かと思うたらおみつ婆さんか。お婆はまだ生きとったのか」と、遠海へ出稼ぎに行っていた漁夫が道で擦違いざま、興醒めたような顔をして婆さんを見詰めた。

「へへえ。……今年の寒は温うておらのような老人には何よりじゃがの」

「まあ大事にして長生をしなさい」

漁夫は卒気なく云って、にこっともせずに行過ぎた。婆さんはその男は誰だったかと考え考え歩いていると、菊代の二度目の夫と仲よしだった何とか云う男らしくも思われ出した。そうならば訊ねることもあったのにと残惜しそうに振返ったが、最早姿も影も見えなかった。「まだ生きて居らいでか」と、婆さんは口の内で独言を云った。

二

正午前には静かだった空も、季節がら、午餐の煙が家々の煙筒から噴出される時分には、西風が浜の松林に烈しい音を立てて、鏡のような入江もうねうねと皺をつくった。菊代の家では風避けに舟板を窓へ立掛けたので、家の内は真昼でも薄暗くなって、竈の煙が何時までも漂っていた。三人は餅を入れて温かい雑炊を食べてからまた炬燵の中へ藻繰込んで、話もなく互い互いの思いを恣にしていた。

ようよう眠足った菊代は、昨夜の浪花節の続きを想像していた。鳴物などの芸事には子供の折から現を脱かす質で祭文や阿呆陀羅経でも語り手の後に随いて聞惚れていたので、歳を取ってからも村に興行物のあるたびに工面のつく限りは滅多に欠かしたことはないのだった。しかし、今度は二日とも浜屋で不用な入場切符を呉れたので、無銭で聞きに行かれたものの、三日目の今夜からはそうは行かなかった。正月の三カ日が済んだら、明日からは厭でも問屋で品物を借りて出売をしなければ、芋粥も啜れないくらいなのに、八銭の聞賃で耳の保養なぞは迂濶に出来なかった。……二つの燭台の明りで左右の頰を照らされながら、目を細くして唄ってる寅若の姿が目にちらついたが、それよりも菊代の心を唆かしていたのは、膝と膝との擦れ擦れに込合っている場内の賑いであった。若い百姓や若い女どもが薄暗い席に矢鱈に入雑って、息と息とを交互に通わせながら、語り手の声に浮かされている有様であった。……不断は相手の得られない菊代も、其処では色めいた仲間入が出来るような気がした。昨夜は誰と誰とが前後に坐って足を抓ったり膝頭でどうしたりしていたとか、誰と誰とが終いの一席を聴かないで早く帰ったとか、いろんな噂が翌日の若い同志の口に上っていた。そして菊代自身は願っても噂の種になるどころではなかったが、女房も情人もない若い漁夫と並んでいると、今に何事か起りそうで心がどきめきするのだった。

マッチの空箱に入れて神棚にそっと載せてある自分達の総財産を浚って行けば、木戸銭が払えた上に、中入に振菓子の二三本は買喰いの出来ないことはないのだが、菊代はそう思っても直ぐにそうすることは出来なかった。そして人寄せの太鼓がどんどん鳴り出すとそわそわして、ややもすると手が神棚の方へ伸びて行きそうだった。

朝から、行方不明の姉娘の上を楽みに思続けていた母親は、ふと菊代の方へ顔を向けながら、「われは遊びに行きたいのか、遊びに往てもええけれど、お村さんのようにならんようにせい。われは一度ならず業曝し奴に騙されてどえらい目に会うたんじゃから、若い男の居る処へは寄付かんようにせい。何を云われても本真にしちゃならんぜ」

「阿呆云わんすな。お母がまた入らん心配をし出した」

「われ先きから尻をもぞもぞさせて遊びに行きたそうにしとるのが、お母にはちゃんと分っとるがの。万が一われが婿になろうという者があっても、お母によく相談してからにせい、お母は目は見えいでも男の腹の中はよう分るんじゃから、隠さずに何でも打明けるのがわれが身のためじゃ、遠方から戻って来た漁夫の居る間は若い女子は危いこっちゃ」

母親は周囲かまわず声高にそう云ったが、菊代が取合わないので、元の沈黙に返って、姉娘の事をまた思続けた。西風はますます吹募って舟板の隙間からぴうぴう吹込んで白髪まじりのお夏の髪を乱した。火の消えかかった炬燵の

中へ菊代が粉炭を一掴み入れると、ぱちぱち火花が散って、長く突出している婆さんの足の裏へも頻りにとんだ。が、垢や何かで皮の硬ばっている婆さんは、火の子の熱さぐらいには怯えなかった。そして一杯の酒が自分の目の前で注がれる時を夢まぼろしに見続けていた。

「菊さん……寒いなあ。どがいしとんなさる？」

戸の外から声を掛けて行過ぎたものがあった。菊代は思わず伸上って返事をしようとしたが、声の主の急ぎ足には追いつきそうでなかったので、返事は喉で留った。

「およしじゃないか、あの声は。今朝橋の側で会うたらええ匂いをさせとった。あれが香水と云うものか知らんが高い銭を出して身体に匂いをつけたって、何の得にもならんこっちゃ。勿体ないのに」

母親がそう云っても菊代は黙っていたが、やがてそっと炬燵をすざり出て上り框の方へ行った。

「遊びに行くんなら行先をお母に云うといて行けい」と声を掛けられると、「直きに戻って来るがの」と答えて、表の戸を開けて横っ面を寒い風に曝した。一足閾を跨いで神棚の金入を顧みたが、そのまま戸の外へ出て行った。小走りに小川の縁へ出て、袂を掻合せて首を縮めながら、何処という当てもなく爪先で軽く歩いていたが、やがて、その足はお村の家の裏口に留った。よく若い者の足溜りとなっている家なのに、今はひっそりとしていた。戸の節穴から覗くと、竈の火に照らされた母親の顔が先ず目についた。

炬燵は何時ものように若い男の顔が動いていないで、お村が手枕して横になっていた。

様子を見定めてから菊代は戸を開けて、「寒うなったなあ、叔母さん」と懐かしそうに声を掛けた。

「あ、吃驚した」

火箸を持ったまま、思わず立ちかけたお村の母親は、相手の顔を見て安心して、竈へ薪をくべながら、お愛想など云った。菊代は上り框に腰を掛けて、土間の莚に置いてある塩魚や、板の間の背負籠に入っている蜜柑やネーブルの量の多いのを羨ましげに見廻しながら商売話を持出した。

「お正月なんぞ早う去んだ方がええ。菊さんは何時から商売に出掛けなさる？」

「うちはもう二三日休んどりたいと思うとるけど、そうしちゃ居られまいなあ」

菊代は半ば自分に向って云った。お村のようにちゃんと用意が出来ているのではないし、今夜の中に問屋から品物を借りて置かねばならぬので、急に安閑としてはいられない気がし出した。

「せっせと稼ぎなされ。家のお村も三ヵ日が済んだら商売に出て呉れんと困るがの」母親はそう云ってから声を潜めて、「今の先きにも音松か茂平が耳の饐えるような声を出して、やちもない話ばかりして、その挙句にゃ、本気だか戯談だか摑合いをし出したのじゃ。うちもこれまでに皆なのすることを大目に見て黙っとったけれど、今日はあん

まりのことで業が煮えてならんから、わい等は人の家を何と思うとると糞さんざんに怒鳴りつけて、担棒を振廻して追出してやったところじゃがな」
「叔母さんがそないに怒るのはよくよくのこっちゃな」
「お前さんの家にはあんなやんちゃ者が寄付かんからええ。あの連中の機嫌を害ねても後が気疎いし、したいままにさせとく方図がないし、うちも困って居るがな」
「叔母さんは人がええから……」
だから娘がだらしのない好いた真似をするのだと、菊代は他人事でも歯痒く思いながら、お村の寝様を顧みていたが、ぐっすり眠入っているらしかったお村は、意外にも睛々した顔をしてむくむくと起上って、
「お母は余計なことを云わんすな」と叱って、「菊さん、まあ上って当りんさい。面白いことを聞かせて上げるから」
「……」菊代はどうせ朋輩の色話だろうと、聞きたいようなききたくないような気持になって、にやにや笑いながら炬燵の側へよると、お村は相手の耳許へ大きな口を持って行って、
「……」と笑い笑い囁いた。
「よう聞えんから、笑わないでぼつぼつ云うとくれな」
「じゃ一寸待っとくれ」
お村は笑いを鎮めてから、菊代の福々した耳を抓んで引寄せて、再び囁いた。……それはおよしというまだ十八九の不器量な女とある男との密会を覗きに行こうではないかということだった。今夜家の者が浪花節を聴きに行った留守に出会う約束をしていたのを、立聞してすっかり知っているので、初心なおよしの様はさぞ面白かろうと、さも面白そうに戯言まじりで話した。
「お前さんは阿呆臭いことばかり云うて」と、菊代は取合わぬ振りをしながらも胸をわくわくさせていた。炬燵のほとりには今まで遊んでいた漁夫共が喰荒らした蜜柑の皮や駄菓子の端切れの散らかっているのが、夕暮の薄明りで目についたが、そんな物を見るにつけても、この家は若い者の出入が多いために、余分な利得のあることを菊代は考えないでいられなかった。そして、この朋輩に負けんように商売をしたいと発作的に気張っていた。
お村は相手が生真面目になるのも構わずおよしを冷かしたり、浪花節の口真似をしたりしていたが、その間に母親が膳立して、ランプも点けると、炬燵から匍出して、親子差向いで茶漬を掻込んだ。
西風は雨戸に音を立てていたが、自分の家に比べると、温かで陽気で、身分違いの人の住居のようなのが菊代は殊更今日は妬ましかった。どんな仕事をしたって、お村などに引けを取るんじゃないのにと、娘の手助けをしている此処の母親と、邪魔をしている自分の母親や祖母とを引比べた。若い者が寄って来ないのも、盲目やよぼよぼの婆さんがいて穢らしい思いをさせるからだと、何もかもの不幸の

元を二人に塗りつけるのが、考え事した最後の行詰りだった。
「うちも去んでお夕飯を食べようかい」と座を立った。
「御馳走があると饗んで上げるのにな」と母親は憐れみを含んで見上げた。
「今のことは別として、今夜は一緒に遊ぼうではないか。お前さんが出て来にゃ、此方から誘いに行くぞな」
お村の押付がましい声を後に聞きながら、菊代は裏口から飛出した。三日月は磨ぎ澄ました空に慄えていた。何処でも戸を鎖していたが、ところどころに賑かな声はしていた。菊代は祖母や母親の傍へ帰りたくはないので、遊ぶ道さえあれば夜遅くまで遊んでいる気だったが、それには先ず空腹を癒さなければならなかった。浪花節を聴くにしても、何かの遊び事をしている人溜りへ出掛けるにしても、一文無しでは仕方がなかった。で、足許の暗い川端を伝って自分の家へ戻ると、豆ランプが神棚で幽かに光っていた。盲目のお夏は、娘の留守の間は自分達老人には不用としてランプは消して置くのだが、お正月にはお燈明として神棚に載せていた。
菊代はランプの心を捻上げてから、取下そうとしながら、神棚をよく見ると、出掛けには確かに其処にあった金入が見つからなかったので、頻りに捜していると、
「金入ならお母が持っとる」と、お夏は訊かれぬ先に、袂から財布を出した。「今お婆に一合だけ買うて来て上げたのじゃ。見い、お婆はいい気持に酔うて寝とろうがな」
「まあ呆れた……」菊代は浮かりすると、踏付けそうな祖母の頭をランプを持って見下したが、そう思って見ると皺くちゃの顔にも稍人間らしい紅味が差していた。微かに吐く息にも酒の香が混っていた。
「何ぼせがまれても酒なんぞ買うてやるということがあるものか、うちが明日草履買う銭に残しといたのに、裸足で三里も五里もの道を歩いて商売に出られるか、よう考えて見るがええ」
菊代は軽くなった金入を母の手から取るが早いか、恨めしそうに炬燵の上へぶっ付けたが、お夏は気にも留めないで笑顔をして、「われは戸外から戻ると、何ぞれかぞれ苦情を云うてお母を困らせ居る。草履の穿代えが入りゃお母のでも持って行けいよ。お母は裸足でも構やせんがの。うちはお婆に正月の祝い酒を呑ましたのが何よりも悦しうてならんのじゃ。これでもう死んでも残り惜しうないちうてお婆は上機嫌で、お飯も食べないで眠入ったがの。われ、よう見い、お婆の寝顔も今夜は仏様のようじゃろうがな」
「……」菊代は返事もしないで膳を引寄せたが、蓋を取ると、意外にも汁掛け飯の山盛りにされた丼が入っていた。浜屋のお情とは聞かずとも分っていた。
「それはわれ一人で食べいよ。お母は雑炊の残りをお腹に一杯食べたから今夜は何にも欲しうないがの」
丼からの温かい米の飯の香いや鳥の香が菊代の鼻を抉っ

た。お夏は娘の箸の運びを快げに耳に留めながら、正月三カ日が案じたほどでなく、穏かに過ぎたことを独り喜んで、神棚の金毘羅様のお札を心で拝んでいた。

「今年こそお初の音信が聞かれますように…菊代の心に魔が差さぬように」と、明日の糧を祈った上に、今夜はそれを附加えた。

夢中で鳥汁を平げた菊代は、箸を擱くと、急に元気づいて、約束したお村の訪れを待構えて何処へでも浮れ出す気になっていたが、誰一人声を掛けて呉れるものもなかった。で、また今夜も興もなく家内三人炬燵を囲んでごろ寝をした。昼寝をし過ぎたせいか、菊代は浪花節帰りの騒々しい足音に目を醒してからは、暫らく眠つかれなかった。眠れないと、窓の隙間から吹込む風が身に染みて堪えられないので、母親の掛けている蒲団の中へ藻繰込んで、頭まで埋めて抱付くようにした。夫に逃げられてから久しく忘れていた人肌の温味を、菊代は今垢臭い母親の身体で思出した。

永年寒さに暑さに鍛えて来た祖母のおみちは、肩が凍るように冷えていても、夢は少しも乱されなかった。

三

三カ日が過ぎ寒が明けてから、厚い氷が張ったり霙が降ったりする日が続いた。菊代は毎日薄暗い間に起きて、商品を満載した籠を背負って、東西の村々へ出掛けて、日暮前にはほぼ売尽して帰るのだったが、家に休んでいた日よりも却って屈託がないだけでもよかった。たまに顔馴染の出来た家へ寄って、火鉢か焚火で亀(かじか)んだ手を温めながら世間話をしたり、お茶を貰って弁当をつかったりすることもあったが、大抵は一日歩き通しで、日当りのいい処で小休みして、川水や井戸水で喉の乾きを留めるのに過ぎなかった。おりおり道連れになるお村などが、饂飩屋や駄菓子屋へ寄っても、自分だけは誘われないで素通りした。その癖菊代は風付の悪いせいかお世辞のせいか、お村などよりも安物を持っていながら品物の捌けがのろいのだった。

七草が過ぎ飾卸しも過ぎると、処々の村で初祭などがあって、不景気ながらも魚の値がよくて、骨惜みをしない漁夫や売子は春早々可成り豊かな収入(みい)りがあった。怠けていた漁夫も自分の村の恵比須神社の祭を済ますと、纜を解いて漁場々々へ向った。

船の出入のあるたびに質屋通いの用事で忙しい盲目のお夏は今度もいくらか儲けた。年末(くれ)の使賃は凡て菊代に渡して借金払いなどの役に立てたのであったが、年が明けて後のは、半ば自分の懐中にして置くようにした。村の者が少くも一生に一度は参詣するという讃岐の金毘羅へ、お夏もかねて詣りたいと念じていたので、五年十年も前からその路用に当てるつもりで、零細な貯蓄をしていたのだが、何時の間にか貯蓄は一文無しに消えるのが例になっていた。

でも思出しては一銭二銭と秘密で溜置くのだった。

昔は此処の浜から屢々金毘羅詣りの船が出た。今は汽車や汽船の便利があるので、わざわざ和船を仕立てて行く者は殆んどなくなったが、それでも花の咲く季節には、たまには近村の老若男女が団体をつくって、旅費の廉いのを取得に、時日のかかるのも構わず、のろのろと和船で港々へ寄って四国渡りをすることもあった。お夏はその船の出るたびに、御利益のあらたかな象頭山の御社を憧憬れた。

「菊よ、われも一度金毘羅様へお詣りしとくと運が向いて来るぜ。お母もわれと一緒なら船へ乗せて貰うてお詣りの出来んこともあるまいと思うとるけいどな」と、旅費の足らぬのを歎息した。

「目の見えんものがそないな遠方へ行こうなんて、お母もなかなか大望を持っとるんじゃな、うちは何も願を掛けることはないし、金毘羅様へも大師様へもお詣りしようとは思やせんがな」

「そう信心気がないと、われもこの先ええことはあるまい。家のお婆を見い。若い時から飲食にばかり身を入れて神詣りも仏信心もせなんだから、歳を取っても楽な日は送れんじゃないか。今でもお婆はお宮の前を通っても頭を下げることはあるまいがな」

お夏は今年こそ来年こそと望みをかけながら、いざ船の出る場合になって、自分に何の準備も出来ていないのを知ると、落胆して、せめて気休めに、参詣仲間の知合いの老人に銅貨一つのお賽銭を託したり、お札や護符を買って来て貰ったりした。土産に貰った堅い板飴を有難そうにしゃぶった。

この正月にも炬燵でうとうとしている間に、またも金毘羅詣でを思詰めて、例の貯蓄を志したので、質屋の使いが並々ならぬ楽みになった。菊代の商売も正月には可成りに儲けがあるので、そうして母親に求むる所はなかった。が、漁船が出てしまって浜が淋しくなると、お夏の用事も暇になった。米搗仕事も精米所に奪われて、滅多に依頼者はなくなった。で、菊代の留守中には、日一日炬燵で暮らすことが多かったが、側で寝ている老婆には余り口は利かなかった。何年もこうしているので二人の間には話の種が尽きたという有様で、たまに話をしても同じ事の繰返しに過ぎなかった。殊に傷をしてからの老婆はそれを気病にして、傍の世間話などに耳を留める気持にはなっていなかった。芋でも麦飯でも与えられたものを食っては、木枕に白髪頭をのせて眠入って、目が醒めると口の内で訳の分らぬ独言を云っていた。その突拍子もない独言がたまに耳に入ると、お夏は声を挙げて笑った。

ところがある日、老婆はむくむくと身体を起して、

「おらは今奇体な夢を見たがの」と、きっぱりした声音で云った。

「極楽へでも行った夢を見たのかな」と、お夏は冷かすように云った。

「おらは極楽や地獄の夢は一ぺんも見たことがないが、な、われ。……おらは今菊が目の醒めるような綺麗な着物を着て船へ乗っとる夢を見た。浜は一杯の人だかりじゃった。われにも菊の綺麗な身装を一目見せたかったがの」

「呆けたことを云わんすな、……お前が夢に見たのは、菊じゃない、お初じゃろうがな。お初が綺麗な身装をして戻って来ることなら、うちは夢でのうて起きてる時にでも見ることがあるんじゃもの」

「うんにゃ、おらは今確かに菊の夢を見たんじゃ。何ぼ歳がよっても菊とお初との顔は見違えりゃせん」と、老婆は力んで云って、「われはどう思うか知らんが、おらはな、菊がお初のように惣嫁にでもなったら、担歩きするよりゃどれほど面白い目が見られるか知らんと思うとるぜ。永年見たことのないお金が一時に取れて、われやおらも好きなことをして気楽に暮らせらあ。あの女にしても碌でなしの亭主を持って難儀するよりはどれほどましか知れやせん。われは菊の機嫌のええ時にそう云うて見い」

「お前はこの頃もまだそう言うことを考えとるんじゃな。興醒めたこっちゃ。もうそがいなことは云わんすな。聞きともないから」お夏は腹立しげに云った。娘がひょんな噂の立てられるのさえ厭うて、休みの日にはその出先を気遣っているほどなのにと、老婆の根性を憎々しく思った。

「よしかあの女の身を売って、菊の身体と同じ重量の銭が手に入ったって、代りのない菊に遠方へ行かれたら、うちやお前はどうして生きとれると思うとるのかいな。気が狂うてもそないなことは云えたものじゃあるまいにな」

「……お初のように遠方へ行かさいで近所の町で勤め奉公をさせりゃええじゃないか、菊がうんといやあ、世間にも秘密でおらが奉公口を捜して来てやるがな」

「阿呆云いなさんな、お前が襤褸を垂れて町へ行こうもんなら、それこそ乞食かと思われらあ。誰が相手になって呉れるものか。お前の足が長途を踏めるくらいなら、菊に恥を掻かせに町へ行くよりゃ、水汲みでも使いでもして、お前の好きな酒を買うて飲むとええのに」

「われはようそう云うけいど、おらの儲けた銭は取るが早いか菊に渡しとるじゃないか。一文でも隠立てして自分の栄耀をしたことはないがの、われこそ菊に秘密で自分の使賃を隠しときながら、われ一人菊を可愛がっとるようなことを吐し腐って」

　老婆は久振りにこんな毒口を叩いた。そして、自分や孫娘の幸福を、お夏が何時も妨げているように一途に思詰めた。菊代が惣嫁にでもなれば、今夢に見たような美しい衣服が着られて、第一当人のために仕合せだ。老婆自身も米の飯に魚を添えて鱈腹食べられるし、寝酒の贅も尽せるのだ。……おらは本真の乞食になっても苦とは思わない。菊代が仕合せになるためなら、椀を持って物貰いしたって自分一人の口過ぎは屹度して見せる。結局その方が気楽かも

知れん。ただこんな盲人が何時までも生きているために、何かにつけて手足纒いになって、菊や自分の心まかせにならんのだ。と老婆は思っていた。で、われという邪魔物が死んで、おら達がもっと楽が出来るまでは、おらはどうしても死にやせん、と腹の中で意気込んで相手の顔を見た。が、お夏は最早取合わないで笑っていた。

「お前は今日は仰山な元気じゃな。そないに元気があるんなら、これから先も天子様からたびたびお杯を頂戴出来らあな」と、話を外したが、老婆は先きからの一つ事に暫らくこだわって、お夏に突掛った。

そこへ、菊代が何時ものように腹をぴょこぴょこに減らせて帰って来ると、老婆は、「おらの云うたことを今直ぐ菊に話すじゃないぞ」とお夏に囁いて、「われのことも秘密にしといてやる」と、きょときょとした目付をした。そして、菊代が背負籠に残っている蜜柑を一つ炬燵の上に投げて呉れると、急いで攫取って寝ながら食べた。

四

窓の上の浜屋の庭先には、蕗が芽を萌出した。日に日に彼方此方の地べたを割って青い芽が開いて、浜屋の子供が珍らしがって「今日はいくつ出た」と数えているのがお夏の耳にも入った。浜屋に飼ってある可愛らしい牝猫を追廻している幾匹もの牡猫のいやらしい鳴声も二三日前から日ましに盛んになった。

風のない日には周囲がすっかり春景色になったのを、お夏は総身に感じて、用がなくっても、炬燵から匐出して、近所の女房達と立話をしたり、時としては索り足で埠頭場近くへ行ったりした。岸端に蹲んで小波の音や櫓の音を聞いていると気持がせいせいした。そして、今年も四月の末か五月の初めにはこの埠頭場から出ると云う噂のある金毘羅船に乗れたら、さぞ面白かろうと、何十年の昔向いの島へ柴刈に行って以来嘗て乗ったことのない船の乗心地をさまざまに思いやった。……元結がわりの藁で髪を茶筅のように結った、蒼黒い顔したお夏の盲いた目の前には、麗かな日光が波に砕けている。鳶が輪を描いて舞っている爪の延びた足許には寄居虫が石垣伝いにうようよしている。……冬の間に繁殖した虱までも温かい日に誘われて、彼女の肌着から匐出している。

「南無、金毘羅大権現様」と、お夏はふと海の彼方を仰いで、手を合せて拝んだ。「……」と、一心に祈願を籠めたが、差当って痛切に何を願うということはなかった。只五体に触れる春らしい柔かい風や日光に心が盪かされて、神や仏が懐かしく思われたのだった。

「そこで何をして居りんさる？」と、たまに声を掛けて呉れるものもあった。

「家で寝てばかり居ると身体に毒じゃから」と答えて、声の主に向って、前に湛えている海の上の光景を訊いた。

運送船が何艘沖に繋っているとか、誰某が肥船を漕いでいるとか教えられると、夢見るような穏かな春の海面を胸に描いて楽んだが、おりおりは教えられもしないお初の姿を海の上に浮べた。渡舟に乗って向いの村から直ぐそこまで戻って来ているように思って見たりした。……「菊は笑うて相手にせんけれど、お初が無事で戻って来まいものでもない」と、自分の胸に問い胸に答えた。神仏の御利益で自分の両眼が開くということは信じないけれど、お初が生身を運んで、生れ故郷の母親の膝へ戻って来るという不思議は待設けられないではなかった。

親類は一軒もないし、上り込んで番茶の一杯も飲んで親身な話の出来る家は村中に何処にもないので、お夏は海辺への往帰りにたまさか誰かに呼留められて立寄っても、自分の汚い身装を憚って、閾の外に立って話をするか、せいぜい上り框に腰を掛けるかするくらいで、いくら親切に云われても畳の上へ匐上るような不遠慮な真似はしなかった。

「菊代が毎度御厄介になります」と、人の家へ寄ると、高い声で、挨拶がわりにそれを云った。

お夏が浜辺の春風に吹かれて、牛小屋で永い間の冬籠りの退屈を忘れている時分に、菊代は籠を背負って、雲雀の鳴いている田圃道を辿っていた。

藪蔭の泉の水もやや温んで、渇を医し汗を拭うのに快くなった。日が永くなったので、帰りが遅れても暗い道を通る恐れがなくなった。朋輩と道伴れになることは稀でも、他村の者や旅の者に向うから話掛けられて一緒に歩くことはよくあったが、見知らぬ人と取留めのないことを言合っている方が、自分の身の上をよく知っている人達と話しているよりも、菊代には却って気晴しになった。……初大師詣りの連中の巫山戯ながら歩いている間に交って羨ましい思いをしたこともあったが、殊に彼女の心を惹いたのは、古ぼけた笈摺に何か黒い字の書いてある巡礼姿の女であった。

四十あまりの頑丈な女で、脚絆甲掛の足許軽げに歩いていた。巡礼には大抵連れがあるものなのに、この女は一人ぽっちであった。

「××へまだ余程遠う御座いますか」と尋ねられたのが縁となって、峠を下りるまで道連れとなった。

「何処へお詣りなさるんです」と、菊代が訊くと、

「名所見物がてら西国廻りしようと思うとります。去年は四国を八十八カ所無事にお詣りを済ましましたから、今年は××まで出て汽車に乗って、一月がかりぐらいで彼処の札所々々を打って来ようと思うとりますのじゃ」

「お一人じゃ淋しいでしょうのに」

「独りの方が結局気散じですがな。歩きたいところを歩いて、疲れれば汽車に乗るし、早く宿へ泊ろうと自分の気儘が出来ますもの。……路用は不用心だから些とばかり手許に持っとって、行先のお寺宛で為替を家から送らせるこ

とにしとります。本真に世の中は便利になりましたわいな。そうしとけば、途中でお詣りがいやになっても無性気を出して取返す訳に行きませんからの」
「でも随分費用がかかるんでしょう」
「そりゃ心掛一つでどうにでもなりますわな。こういう服装をしてお精進物ばかり食べるのですから、宿銭だって並の人よりずっと安うて済まされます。処によって無銭で泊めて呉れるところもありますし」巡礼はそう云いながら、ふと菊代の籠に目をつけて、三つ四つの蜜柑を買って、直ぐ様それを剝いて食べながら、三十三ヵ所の寺々の名前など語った。
菊代は峠の裾で別れてからも、夕日を浴びた笈摺姿が蜜柑の皮を投散らしながら足早に歩いているのを顧みていたが、すると、盂蘭盆の夜など、母親はじめ近所合壁の老婆たちが鉦を叩いて、哀れな声で唄う御詠歌が久振りに思出された。そして、一つ二つ口の内で唄って見ると、自分も背負籠のかわりに笈摺を掛けて、知らぬ他の国へ行って見たくなった。
温かくなるにつれて、菊代は自分の家にますます厭気が差して来た。お末やお鶴のように岡山の紡績へ女工になって行こうとも、あるいは下女奉公に出ようとも、どんなつらい仕事をしてもいいから、自分の村と家とから遠ざかりたかった。
「こんなことを何時までしていたって、面白いことはない」と、母親の側に空籠を抛卸して当付けるように云うこともあったが、
「商売が大儀になったら一日や二日草臥休めをすりゃええがの。おまちもそう云うとったが、われは商売を焦り過ぎるのが悪いんじゃ。外の者に負けちゃ口惜しいなぞと思わいで、気を長う持って居れよ」と、母親は慰めて、そんな時に、菊代に媚びて力を付けてやるつもりで、かねての貯蓄の一部を、五銭でも十銭でも抛出すのだった。
「お母はお金持じゃな」菊代はそうされると悪い気持はしなかった。それに、自分の手足を働かさないで、予期しなかった銭が、たとい一厘でも一銭でも入ると、心の躍るような悦しさが感ぜられた。
「お母が普通の人のようで、うちと二人で精一杯稼いだら面白かろうのにな」
「もうそういうことを云うて呉れるな」
母親は手を振った。

五

「菊さん菊さん……」と幾度も呼ぶ低い声が、母子が早寝の床に就こうとしているところへ聞えた。真先に聞付けた母親は、不審げに、「異な声じゃな」と菊代に囁いて、「入らんせい、誰かいな」と表へ向って叫んだ。が、返事もしないで、荒々しい足音が小川の方へ消えた。

「誰か知らん、われには分っとるんか」母親は胸をどきつかせた。
「うちはよう聞かなんだ」
「あれは通り掛けに呼んだ声じゃないぜ、秘密でわれを呼びに来たんじゃ。用心せいよ」
「またお母が妙なことを云い出した」
そう云って笑いながらも、菊代は母親の言葉に心を動かされて、ふと眠気を醒まして戸を開けて見た。其処には誰もいないし、周囲を見廻しても真暗で分らなかった。が、先きの声がただの声ではないような気もしたので、疑念晴らしに川端まで出て行った。海の方から吹寄せる温かい南風がいい気持に頬や鼻に触れた。
「降るかと思うたらお星様が出て居る」と、拾いものをしたように喜んで空を見上げていると、
「おい、菊さん」と呼ぶと共に、男の手が肩に触った。
菊代は吃驚して飛退いて、相手を見詰めた。幽霊ではなくって、五年前と同じ顔した繁松がにやにやと笑って立っていた。
「お主はうちをどがいしようと思うて此処へ来た？」と声は潜めたが、目は尖らせて体を顫わせた。男の顔を掻きむしりたいほど怒りに燃えていた。
「まあそがい怒らずにわしの云うことを聞いて呉れい。訳をよう話すから。此処じゃ人に見られるからお地蔵様のところへ行かんか、わしが先へ行っとるから後から来い。ええか。……若し来なんだら、われが家へ行くぞ」
繁松は柔しく云いながらも、脅すことを忘れなかった。そしてすたすたと行過ぎた。「誰が行くものか」と、菊代は腹の中で逆っていたが、「われが家へ行く」と云われたのが薄気味が悪かった。以前例のあったことで、母親へ酷く当るだろうし母親の方でもこの男を憎んでいるから、大喧嘩が始まるかも知れないと思われた。それは兎に角、自分でも云ってやりたいことは溜っているんだから、と、直ぐに後を追った。
地蔵様は橋はずれの小高い処にあって、後は小さい藪で、左右には松などが疎らに生えている。五六年前に二人が最初に出会ったのは此処だったので、お地蔵と聞いてさえ菊代は妙な刺戟を与えられるのだった。
少し逆上せて夢のようだったが、知った人に会わぬ用心して、淋しい小道を選って石地蔵の側まで来たが、男の方は何処をまごついているのか、まだ来ていなかった。菊代は一刻も待ちあぐんで、きょときょと左右を見廻しながら立ったり蹲んだりしていた。沖には蛸釣船の篝火が闇の中にちらほら光っていて、岸に寄せる波は不断よりもやや高かった。
「菊……もう来とったか。早かったな。わしは藤屋で飯米を買うて船へ抛込んどいて来たんじゃ」
下脣の曲った目の爛れた人相のよくない繁松は松の蔭から忍び足で近づいていてそう云った。

「うちはこないな処に愚図々々しとらりゃせん。聞くことは聞いて早う往なにゃならんのじゃ」菊代は突慳貪にそう云ったが、最早気が緩んでいて、「お前は船で戻ったのかな。自分の船に乗っとらんかな」と訊ねた。
「なあに、円太爺の船に乗せて貰うてようよう戻って来たんじゃ。わしはあれから難儀したぜ。三次の船で朝鮮へ行ったのはええが、ひょんなことから彼奴と喧嘩をして陸へ上ってから、いろいろな力業をやっとったのじゃぜ。何方向いても知らん人間ばかりの中で稼ぐんじゃから此方の海で漁をしとるように気儘は出来やせん。そりゃまだええが、わしは何が祟ったのか、人違いで牢へ打込まれて去年の盆時分まで丸三年というものは半死半生の目に会うとった。ようよう本真の罪人が知れてから牢を出るにゃ出たが、着のみ着のままの一文なしじゃからの」
「また博奕でも打ったんじゃないかな。朝鮮から戻った人に訊ねても、お前が牢へ入っとると云うことは一度も聞かなんだのに。陸でええ仕事をして儲けとるという話だったがの」
「博奕どころか、わしは狐に化されたような気持で牢へ連れて行かれたのじゃ。しかし、わしが牢へ入っとったことは秘密にしとるんじゃから誰にも云うな。無実の罪にしても体裁が悪いから」
「そんなことを人に云うものか」菊代は肩と肩と擦合っている男の顔を星明りで見詰めたが、思いなしか、以前よりは窶れているように思われた。「今夜からお前は円太爺の家に泊るのかな」
「泊めちゃ呉れるけいど、彼処は子供が大勢居って窮屈だからの。わしは独りで船へ寝てやらあ」
「これからは近所で漁をするつもりなのかい、お前。直ぐにまた朝鮮へでも行くのかな」
「わしはもう遠方は懲りた。お爺にでも使うて貰うて手繰網でも曳こうと思とる」男は石地蔵の蔭に蹲んで、懐の財布を弄んで銅貨の音をさせながら、「われはこの頃は誰と一緒に居るんだい」
「極っとるじゃないか、お婆とお母と……」
「それっきりか」男はにやりと笑って、「二人とも何時まで丈夫で生きとるのう。お母は今でもわしのことを悪う思うとろうがな」
「そりゃ極っとらあ、あないに老人を酷い目に会わしたんじゃもの」
この男が母親を打ったり蹴ったりしたことはまざまざと菊代の記憶に浮んだ。老人二人を抛散らかして、他所へ行こうとされて、男の不人情を怒ったことも思出された。
「お母にもよう謝っといて呉れい。そうすりゃわしも明日お母の好きな物を買うて謝りに行かあ」
「……」この男が村へ戻ったことが明日になって母親に知れて騒ぎ出されるのが菊代には恐ろしかったが、「来るな」と斥ける力は出なかった。そして、五年前のお地蔵様

の界隈はもっと樹木が茂っていて、月夜にでも人目を避けるに都合がよかったことに気がついた。吹く風に竹藪はざわついて、野良犬の声が間近く聞えた。
「わしは久振りで睦の家の中で思う存分足を踏ん伸ばして寝たいぜ」
暫らく経って繁松は手に付いた泥を払いながら云った。殊に風の吹いている日に、揺られながら船で眠るのは、漁夫稼業をしていても辛気なものだった。
「うちはまたあの家で寝るよりゃ船にでも寝たいと思うことがあるがの」
「われ、そんなことを思うようになったか。わしの船だったら連れてて寝させてやるのに」
二人は明日の晩の約束などして石地蔵の浜通りへ下りた。菊代は男が指差した船の在所を些っと見やっただけで、男を振切って一散に駈けて、自分の家の戸口まで帰った。戸は自分が明けたままだったので、母親などの寝姿が豆ランプの光で微かに見えた。
静かに戸を締めて、気取られぬようにそっと枕に就いたが、すると母親は顔を持上げて出先を訊ねた。
「一寸用があって行っとったんじゃがの。そないに煩そう訊いて下んすな。うちは眠とうてならんのじゃから」
がみがみ叱りつけて置いて、菊代は直ぐに鼾をかいた。そして、夜明け前に呼起されても容易に枕を離れないで、窓の上で雀の囀り出すまでぐっすり眠入っていた。

「菊は今日は休むんか、大儀なら休めばええがの」と母親に云われると、
「こんな天気のええ日に休んで溜るものか」と、菊代は威勢よく云って、大急ぎで食事を済まして籠を背負って出た。近所の者に顔を見られるのが厭さにすたすたと傍目も触らずに道を急いだ。しかし村を離れると足が次第に進まなくなった。母親の思惑や村の人々の口の端や繁松の今後の所行がかわるがわる彼女の胸を驚かして、商売のことなどに身が入らなかった。で、負けと云われるだけ負けて殆んど捨売同様にして、田の畔ででも屢々荷物を卸して足を休めて、時の経つのも忘れて考え込んだ。……独笑いをして浮立つようになるかと思うと、自分は矢張自分一人を頼りにしている盲人や老耄を大事にしてやって、かねての覚悟通りに男に掛合わないで通そうかと思ったりした。
面白い目には会わずに、徒らに年を取って来た菊代は、村に男の数は多うても、繁松の外には自分などを相手にして呉れる者のないことをしみじみ感じているので、屑の出た爛れ目のこの男でも、取逃がす諦めはつかなかった。以前の男の仕打に柔しいところや手頼りになるところの些ともなかったことはよく知っているのだけれど、菊代には最早男に対して選好みをする気は些ともなくなっていて、相手が男の身体を具えてさえいれば、二度でも三度でも石地蔵の側で会うだけ得だという気持になった。
それにしても石地蔵の側だけでは物足らなかった。……

祖母はいてもいなくても同じようなものだが、盲目で耳の敏い怜悧な母親が家に尻を据えているのが、どれほど邪魔になるか知れなかった。……「お夏が可哀想じゃから無賃で貸してやると、浜屋では牛小屋をお母に貸して呉れたのじゃから、お母は不都合のないようにと義理を想うて、一晩博奕宿に貸して呉れと頼まれた時にも、われがそうしたけりゃ、浜屋へ断ってからにせいと堅意地なこと云うて承知せなんだ。男を連込むのも承知する筈はない」

これやあれやで胸を悩ますものの、菊代は平生に比べると、今日は村へ帰るのに張合いがあった。石地蔵の裏藪に咲きこぼれている紅い椿に目がついたり、石地蔵の上に鳥の留っているのが可笑しく思われたりした。夕潮は岸を浸して、船端で米を磨いでいる漁夫もあった。

繁松の不意に帰って来たために村の様子が異って、其処等の人々の話声はみんなその噂かと案ぜられたが、道で擦合った人の誰もが菊代に向って変った口を利かなかった。例のように、「温うなったなあ」とか、「今日はよう売れたかな」とか、たまに声を掛けられるばかりであった。

六

「待っとるお初は戻って来ず、戻らいでもいいものは戻って来るし、お婆、うち等はまた酷い目に会わされるぞな」

お夏は円太爺に救われて朝鮮から着の身着のままで戻って来たという繁松の名を聞いた時に溜息を吐いた。

「おらはどがいでも構わんがの、繁が来て呉れりゃ結句賑かでよかろうわい」おみち婆さんは口先で毒づかれようとも、傍で大喧嘩がはじまろうとも、繁松の飲み余しが一杯でも飲めて、たまには魚の頭ぐらい食べられる楽みがありそうに思われた。

「彼奴が居ると菊が今のように一心に働いて呉れんぞ、うちはあがいな獄道奴に食うや食わずの目に会わされると思うと、細引の一本は用意しとかにゃならん。繁も朝鮮で牢へ入っとったいうから最後の果にゃ十作のようになるんじゃろうから、うちは気疎うてどうもならんがの。菊までも巻添になって見んさい」

お夏はその有様が目に見えるようで身震いした。繁松とは違って菊代のちゃんとした亭主であった十作が、脱営の罪科で死刑に会ったことはお夏の骨身に深く染んでいて、菊代に男の出来るというと、直ぐにかの死刑が聯想されて恐ろしかった。……他村から流れて来た繁松の顔は、目の開いていた時分に一度も見たことはないので、最初娘の入婿の格で会った時からして、獄門に懸る顔のようにお夏の心には映っていたのだった。そして、半年ばかり養われていながらも、睦まじく打解ける気になれなかった。

「気疎や気疎や。男という者は何時お上に殺されるかも知れない」と、ある日隣の主人に話したことがあった。

「縁起の悪いことを云いなさんな。悪いことさえせにゃ咎めらるる心配はないよな」
「そりゃその訳じゃけれどの、うちはどうも腑に落ちんがの」
「男は殺されるにしても、お前の家には女子ばかりじゃから安心だ」隣の主人はそう云って笑った。
男の子を生まいで結句仕合せかと、お夏は自分の幸福をそういう事にでも求めようとした。
今にも恐ろしい繫松がやって来るかと待構えて、油断しないでいたが、夕方まで音沙汰はなかった。戸を開けて入って来た足音は菊代に違いなかった。
「戸はちゃんと締めて置けい」
「こんな温い日は、開けとく方が明るうて陽気でええのに」菊代は開けたまま家へ入って、不断よりも口数を余計に利いた。滅多に云ったことのない商売の話をもした。
「お母、××の畝には桃の花が一面に咲いとるぞな。お母に一目見せたいとうちは思うた。もうお彼岸が来るから、今年はお母もお婆も久振りでお墓詣りをするとええにな。……お彼岸といえば、浜屋でお接待の手伝いを一日して上げにゃなるまいな」
「われが連れてて呉れりゃ、お墓詣りにでも行かあ」と、お夏は大声で云って、「われは今日何か悦しいことがあるんか。桃の花の咲いとるのがそないに面白かったのか」
「……」菊代は母親の顔を顧みると、急に陰気になった。

「お母は先きからわれが不憫でならんがの。お母やお婆に饑い目をさせてもええから、悪い奴に誑かされんようにせいよ」
「そんな大きな声を出して下んすな。人が聞いたら何事かと思わあ」
菊代は母親に背を向けて窓の側に立った。浜屋の子供達は庭先で縄飛びをして遊んでいた。姿は見えないけれど、浜屋の姉娘が弾いている琴の音が二階の方から落ちて来た。夕日は長閑に土蔵の壁を照らしている。
「菊はそこでどないし居るんならえ」と、庭先にいる小さい子がふと身を屈めて窓を見下して笑顔をした。
「菊は坊ちゃんの縄飛びを見て居ります」
「わしは此処で小便をしようか。その窓まで届くぜ」と、子供は身体を突出して前をまくった。すると、他の子供も寄って来て、
「わいだって負きゃせん、見て居れ」と、身体を力ませた。臭い水の飛沫が窓の格子にまでも降りかかった。
菊代は驚いて首を引込めて、黙って晩餐の支度に取掛ったが、売残りの鰺の干物を惜気もなく焙った。生臭い煙が小屋の中から流れ出た。
「問屋の物を矢鱈に口へ入れると、儲けた銭を差引かれるんじゃから恐ろしい。向う見ずはわれしちゃならんぜ」
「干物を一枚くらい、たまにゃ食べたって大事ないがの、うちはどないに辛抱したって長者になれるんじゃなし

……」

「今日はわれもどえらい剛い気になったな……」お夏は娘の気に障って争いの起るのが気遣わしさに、繁松の名を容易に口に出さなかった。そして娘が焙って呉れた干物には手をつけないで、麦飯に塩を振掛けた湯漬を食べた。

「問屋へ行って、戻りに浜屋で風呂へ入れて貰おう」

菊代は箸を擱くと独言のように言ったが、先きから隣の家の話声に耳を留めていたお夏は、「とうとうやって来やがった」と、突如に叫んだ。「来るのなら、門口で秘密に呼出したりせいで、うち等の居る前で話を極めい」と誰に云うともなく云った。

菊代は呆気に取られていたが、ふと隣の家の女房と一緒に入って来たのは、褞袍を着た繁松であった。

「繁さんもこれからは此村で身を入れて稼ぐんじゃといな。よう話を聞いて元々通りにして上げなさい」と、女房は仲人気取りで云って、夕闇を透して皆なの顔を見廻した。

暫らくは皆な黙っていたが、お夏が躙り出て何か口を利こうとする前に、菊代は土間へ飛下りるが早いか、すたすた川端の方へ駈け出した。そして、浜辺を伝って昨夕教えられた繁松の船の繋っている処まで行った。四五艘の漁船の中で稍大きいのが、朝鮮帰りの円太爺さんの持船だということは直ぐに知れた。どの船にも人のいる気色はしなかった。

菊代はどうなったかと自分の身に関った話の決着を気遣いながら、岩の上に佇んで、船縁を嬲っている小波の音を聞いていた。後を振向くと、ところどころに燈火がついて、海際の家でも障子を開けて夕風の吹入るにまかせている。菊代はそれ等の家々の娘や主婦の悪い品行を思出しては、「構うものか」と自分に力をつけた。

「オー、われは此処へ来とったんか、問屋へ行っとるのかと思ったのに」

繁松は徳利をぶら提げて、突出た石垣の端から船へ飛乗って、「誰も居らんからわれを乗せてやろう」と、岩の上へ歩板を掛けて、招いた。手を伸して捉まらせた。

伊部焼の船玉様を正面に据えて、その前に蓙を敷いていた。菊代は男が点けたカンテラの光できょろきょろ船の中を見廻したが、舟板は綺麗に拭磨かれて、煮焚きの道具もちゃんと揃っていた。

「われはようあないな汚い家で辛抱しとったな。臭うて臭うてわしは一時もじっとして居られなんだ。何ぼ陸で寝とうても、あないな家には頼まれても泊る気にゃならんぜ」

「そんな無理を云わんすな。女子一人の腕で稼いどるんじゃもの、家賃の出る家に居れるものか」

「あの家からこの船へ来ようなら気がせいせいしようがな。わしはお母に謝ろうと思うたけれど、家の様を見てやめにしたぜ」繁松は長い間慕っていた陸の家の住み甲斐の

ないのに失望していた。五年前に愛想を尽かして振棄てた盲人や老婆は一層見窄らしくて、同じ部屋に起臥するのも気味が悪いようであった。

「わしは当分船住いじゃ。われも夜此処へ来て泊れ。円太爺さんももう四五日休まにゃ船を出しゃせんから、当分は夜の間はわし一人が留守番じゃ。夜遅うやって来いよ。万一他人に見つけられたって構やせんじゃないか」

「……」菊代はにやにや笑った。綺麗な船の中に人目を避けて、男と差向いでいるなんて、何年の間夢にも見たことのない気保養であった。男は買って来た酒を温めたり、魚を煮たりした。舟板をめくると、水槽には清水が湛えられ、米櫃には白い米が入っていた。

「船乗りは陸に居るものに比べるとお大臣様じゃぞな」と羨ましそうに云うと、

「われはそう思うか。そう思や船に乗せて連れて行ってやろうか、四国へでも朝鮮へでも渡らんか」

「ふふん……」菊代は男の言葉が夢のようなので真に受けなかった。

「われのお姉は容色よしじゃったそうだが、われだって些とばか粧飾したら綺麗になるのに、われは稼いでばかり居って身体を粗末にするのが悪いんじゃ」

繁松は昨夕の闇でよく見なかった女の顔形を見詰めて、いとど婆あ染みて、五年前よりも更に醜くなっているのに興醒めながら、出鱈目の悦しがらせを云ったりした。そして、温まった酒を女に酌をさせて茶碗でぐい飲みして、女にも強いた。菊代は興に乗って、鼻を抓みながら一口だけ呑んだ。

「繁公……」煮えた小魚を箸の先でつついているところへ、岸の方から呼立てる声がした。

「円太爺さんだ。構やせん、一寸の間隠れとれ」繁松は慌てている菊代を船底の水槽の側へ忍ばせて、舟板を嵌めて、自分は何喰わぬ顔でその上に胡坐を搔いていた。

「貴様はまた秘密で酒を喰ってるな。おらにも一杯呉れい」と、赤銅色した爺さんは既に酒臭い息をさせながら入って来た。

「たった二合じゃもの、もう飲んじまった」繁松はそう云って、女の飲み残した茶碗へ徳利の余瀝を振落した。

「貴様の飲滓を頂戴するのか」爺さんは腰を据えて茶碗を手にし、ちびちびやりながら女の持っていた箸で小魚を摘った。

菊代は生臭い臭いに悩まされて、先き飲んだ一口の酒をも吐出した。爺さんの威勢のいい声のみはとぎれとぎれに耳に入ったが、繁松の声は殆んど聞取れぬほど低かった。

「貴様は甲斐性なしじゃぜ。ええ歳をして居りながら、女房一人よう持たいで。……牢へぶち込まれるような間抜けた真似をして可笑しな奴じゃ。貴様なぞは親はなし子はなし、何時何処でくたばろうと構わんのじゃから、命懸けのどえらいことをやって見い。おらは貴様に米の飯を食わ

せて一両二両の酒手をやるくらい苦にゃしとらんがの、おらの前でそがいにびくびくしとるようじゃ駄目じゃ」爺さんは一杯機嫌で毒口を叩いたが、目には柔しい微笑を浮べていた。
「お前がこういうことをやれと云やあ、わしは何でもやって見らあ」
「そうか。そいじゃ貴様、今から浜屋の菜園へ行って、分葱を一握り盗んで来い。家の子供が貝を拾うて来とるから、あれを酢味噌にして一杯やろうぜ。今夜は闇夜だから知れりゃせん、塀を飛越えて入って見い」
「阿呆云わんすな。分葱ぐらいで盗人にはなりとうないがな」
「高慢なことを吐すな。……菜園物で物足らにゃ、土蔵の錠前でも切って金庫でも盗んで来い」
「そんなことよりゃ、もっと気の利いたことをして、お前を吃驚させて見せらあな」
　粲松は爺さんが容易に座を立ちそうにしないので当惑して鬱ぎ込んだ。酒はないし喰うものはないし、じりじりする気持を紛らす術はなかった。そして、菊代の身体を動かす微かな音も耳についた。いっそ破れかぶれで舟板をめくって、女を爺さんの鼻の先へ引据えて見ようかとも思ったが、そうすると、明日から自分の食扶持にも泊り場所にも離れなければならないのが恐ろしかった。「貴様おらの大事な船を穢しやがったな」と、爺さんがその目に角を立てて怒出すのが目に見えるようだった。
「お爺、今夜だけお前家に泊めて下んせ。四五日すりゃまた沖へ出るのに、一晩も陸で寝んと、船を着けた甲斐がないもの」
「貴様は昨日高慢な口を叩いた癖に、もう陸が恋しうなったか。貴様も不憫な奴じゃ、女子の子が待っとるんじゃないしの」爺さんはそう云ったが、今急に思出したように、「たしか貴様は盲人の娘の家へ入込んどったんじゃな」
「あれや些っとした悪戯じゃがの」
「いや、貴様にゃ丁度ええ女房かも知れんぜ。乞食見たいな様をしとるから誰も相手にすりゃせん。あがいな女子を女房にしときゃ何年沖へ出とっても、留守に間違いの出来る心配がないから、漁業に身が入って結句仕合せじゃろうかい」
「そないに腐して下んすな」粲松はむっとした。
「まあ腹を立てるない。……おらの先の女房はの、おらの留守に真桑瓜二つで角の野郎と抱寝をしやがった。痢病で死んだ後で知らせて呉れたものがあったから、おらは何ぼ腹が立ってもどうすることも出来やせん。せめてもの腹癒せに、お墓を打倒して踏付けてやったがの……それ、漁夫の女房は真瓜二つじゃ。えいか」
　爺さんは独りで喋舌って独りで面白がっていたが、やがてひょろひょろ起上って、

「酒もないのに糞面白くもない。もう帰るから、貴様は後片付をして火の気のないようにして後から泊りに来いや」と、云残して、掛声かけて岸の上へ飛んだ。
繁松は生返ったような気持で、急いで舟板を取って、菊代を呼んだ。が、菊代は泣吃逆(なきじゃくり)して身を持上げなかった。そして、繁松が引出そうとして伸した手を力強く突きのけた。

七

「朝鮮へでも四国へでもお前の好きなところへ連れて行って下んせ。うちは何処へでも行くがな。今直ぐに」
やがて船底から引張り出された菊代は、陸へ上ろうとはしないで、涙ながらに気色ばんで男に迫った。「お前は先き何処へでも連れて行ってやると、うちに約束したじゃないか。船にゃお米もあるし、水もあるし今夜夜中に出掛ける気にゃなれんのかの。人がうちを捜しに来りゃ夜中でも船の下へ隠れて居らあ」
「われ、気が狂うたんか。この船はわしの船じゃないのに勝手に出せるものかよう、考えて見い、われが遠方へ行きたいんなら、四五日中にわしが手筈を極めて、ええ塩梅に行けるようにしてやるから、それまで待って居れ。急ぐことあないじゃないか」
「思い立った時に直ぐに行かにゃ、愚図々々してる間にゃ家が出られんようになるもの。うちはこれまでに何度も一人で他所へ行ってしまおうかと思うたことはあったけいど、お母や祖母(ばば)のことが気に掛ってどうしても行けなんだ。じゃけど今夜なら覚悟がついたのじゃ。この船が出せにゃ伝馬にでも乗せて連れて行って下んせ」
「路用も持たいで何処へ行けるか」
繁松は嘲笑っていたが、最早女と差向いでいるのが煩さいばかりで何の興もなくなった。女は繁松の膝を揺ぶったり腕を小突いたりして、船が駄目なら徒歩(かち)で村を逃げようと言出して止まなかった。
「歩いて何処へ行ったって、御馳走してわし等を待っとるところはないぜ。わしは貧乏してもまだ乞食をした覚えがないからの」男の言葉はますます冷かだった。「われは些たあ銭を溜めとるのか」
「……」そんな馬鹿げた問いには答えないで、菊代は、「お前さえ約束を間違えにゃ、今夜中にうちが路用を拵えて来るぞな」と、目を見据えて云った。
「えらいなあ、誰かに借って来るんか」繁松は真に受けなかった。
「誰に借るもんか、誰が貸して呉れるものか。皆なしてうちを蔑視(あなず)っとりやがって」菊代は船底で洩れ聞いた円太爺さんの言葉を憎んで、村の人々にも憎みの刃を向けていたが、それにつけて、浜屋の土蔵だの、金庫だの、と云った爺さんの言葉も頭の中に響いていた。……浜屋の土蔵や

物置へは、年末(くれ)の煤掃の手伝いをした時や平生(ふだん)でも屢々出入りして、その様子を彼女はよう知っているのだ。
で、菊代は薄暗い船の中に坐っていながら、浜屋の母屋から離座敷、土蔵や物置部屋の隅々まで、ありありと目の前に浮べた。欲しい物は何でも心まかせに奪って来られそうに思われた。
「繁さん。その時になってうち抛たらかしちゃ承知せんぞ。厭じゃと云うても以前のように黙ってお前を逃しゃあせん。ええ事でも悪い事でもお前は巻添になる覚悟になって居らんせ」
菊代はそう云って、寝ころんでいる繁松に夜着を被せて、後刻を期して、突出ている岸の上へ飛んだ。空はどんより曇って生温い風が吹いている。波に揺られている一艘の伝馬船は彼女の目を惹いた。
時刻を忘れていたが、まだ宵の口なのか戸を鎖した家は少かった。提灯を持った老和尚や、浪花節を唄っている三人連れの若漁夫などに擦違ったが、菊代から途を避けるほどの遠慮もしなかった。皆なを敵として引受けるような気持になっていた。
「オ！　菊さんか。お母がお前を捜し居ったぞな。何処へ行っとったならえ」と、ふとお今婆さんの声がした。
「何処へ行こうとうちの儘じゃがな」
菊代は浜通りから脇道へ外れて、ところどころに野菜を作っている空地へ入った。よく見廻しても周囲(あたり)に人影はなかった。自分の家の裏手へ廻って、窓の側から石垣を攀じて浜屋の庭先へ匐上った。母屋の階下(した)の雨戸は皆締っていたが、二階の障子にはまだ燈火(あかり)が映っていた。
まだ時刻は早いし、何処へどうして忍入るのやら見当(けんとう)がついていなかったので、菊代は半ば夢中で石段の脇の埃溜の中へ身を潜めた。
「お婆今そこから浜屋の庭へ誰か入ったようじゃな」
と、窓の側で物案じしていたお夏が云った。
「猫か犬かが通ったんじゃろがな」
「うんにゃ、確かに人が入ったんじゃ。そらまだ音がして居らあ」
お夏はそう云って、竊かに浜屋へ知らせようとして出掛けた。
母親が下女のお松に話している声は、埃溜の中でもぞもぞしている菊代の耳へも幽かに入った。はっきり聞取れはしなかったが、菊代は水を浴せかけられるように吃驚して、慌てて其処を飛出した。母屋の潜戸(くぐり)が開いて、お松の持った提灯の光は庭先を照らした。険しい石垣を無闇に飛下りかねてまごまごしている菊代の姿は、お松の寝呆眼にも見逃されなかった。
「まあ、菊さんかな。そこでどないし居るのなら」お松はただ不思議に思いながら、
「伯母さん、菊さんじゃないか。うちは今時分盗人が入る訳はないと思うとったのに。伯母さんは寝呆けとるんじ

ゃな」と、戸口を顧みて叫んだ。
「呆れたこっちゃ……」お夏はぞっとしながら庭に立竦まった。
「菊はどうしたのじゃ」浜屋の人達は皆戸口に集って、お松に手を執られた菊代の蒼褪めた顔を訝しげに見詰めた。
「狐にでも憑かれたんでしょうぞいな」
お夏はそう言濁して、菊代の手を摑んで「さあ家へ戻れ」と引張りながら、とぼとぼと索り足で川端を伝って自分の家へ入った。家には豆ランプさえ点いていなかった。
「お母はもう何にも聞きともない。気疎や気疎や……」
お夏は明日の日からのわが世の恐ろしさに戦いていた。この時にふと心に浮んだ姉娘のお初の影は、昨日までの思出にあったような娑婆の何処かに生きている姿ではなかった。お墓の彼方から手招ぎしているのだった。背負籠の綱切や、上り口の上にある横木や、炬燵の踏台やが、自分のために用意されているように、彼女の心に浮んだ。
「菊は何を泣いとるんじゃ、繁と喧嘩でもしたのか、明日仲直りして、家へ連れて来て一杯飲ましゃええがの」老婆はそう云って、身を起して、「おらがランプを点けてやろう。真闇じゃ仕様がない」とマッチを索った。
窓の外では、浜屋の主人が提灯を持って石垣の側を彼方此方検分していた。そして時々窓の方へも目をつけた。

（一九一六年五月「中央公論」）

影なき人

青木健作

一

彼が漸く中禅寺湖の一部分が蒼黒く見える処まで来たときは秋の夕暮は慌しいように迫っていた。正午過までからりと晴れて、日光から大谷川に沿うた両側の山の火を吐くような楓の色を美しく照らした空は、何時の間にかどんよりと一面に灰色に曇って、今にも雨を落しそうである。彼はともかくも今日の泊りへ無事に着いたことに当座の満足を得て、擦り切れた草鞋を引摺り乍ら急いだ。それに是迄は諸国を伝道中、何処へ行っても其筋の探偵に跡をつけられたのが、昨日東京を立ってからはうまく其の眼を離れて、初めて心悠やかに大きな自然の懐かしい胸の奥に別け入る事が出来たのも、彼にとっては近頃にない心安さを覚えさせたのである。
中禅寺の町は彼が是迄想像していたよりも物寂びた落ち

つきがあった。夕暮の色に塗られた故か、向いの山の中腹にある洋館も今朝日光で見たもの等とは異って、さほど毒々しい感じを与えなかった。

彼は殆んど何の選択もなく、×屋という旅館に立ち寄って一泊を請うた。彼の見窄らしい洋服姿は是迄よく拒絶されたので、此処でも多少の疑惧があったが、玄関の広い板の間の中央の大きな炉に暖まっていた客引らしい男が早速出て来て愛想よく彼を受け容れた。

彼の案内された部屋は二階の六畳で、綺麗であった。もう此処の秋は晩いので遊覧の客も滅多にないから、こんな良い部屋が彼に当がわれたものだと思われた。彼は贅沢すぎるとも思った。番頭が宿帳を持って来た時、例の如く彼は最下等の宿料で泊めて貰うことに云ったが、番頭は素より室を移そうともいわなかった。

洋服を褞袍に着換えて風呂に下りて行った。裸体になる時、ふと柱にかけてある長い鏡に自分の姿がぼんやりと薄暗く映ったが、彼はその栄養不良らしい憔悴した体格を自分ながら驚き憐まずにはいられなかった。旅疲れの身体が溶けて流れそうな程心持よい澄み切った湯の中にじっと浸っていながらも、彼は腕を伸して見たり、胸の辺を静かに撫でて見たりして、過労と粗食の怖ろしい影響を今更の様に強く感じた。如何に主義の為、信念の為といっても、こう身体が弱っては長く仕事を続ける事は出来ない。何とかして今少し栄養を取る必要がある、などとも思った。――

彼は東京に居る時二三の同志と同棲していた。同志の一人が本郷にミルクホールを出しているが、その二階が彼等の唯一のホームであった。彼等の一人前の生活費が六円を越えなかった。それに伝道の雑誌を出したり、大道演説をしたりして、隙さえあれば読書に耽るのであった。

間もなく三助が背を流しに来たが、彼は夫には及ばぬといって断った。三助は其処辺りを片附けながら威勢よく彼に話しかけた。

「旦那は東京からですかね。随分お疲れでござんしょう。併し良い時お着きになりました。もう降って来ました。何しろ是からは此方は叶いませんよ、天気が悪くてな。客人ももう終りでさあ。紅葉も山の下の方はまだ盛りを過ぎないでしょうが、此方はもうすっかり駄目になっちゃったのですからね。今に白いのに降り込められるんだから堪りませんよ。」

三助が去った後で耳を澄すと、成程窓の上のトタンの庇をほつほつと打つ雨の音が佗しげに聞える。明日は雨の中を歩くのかなと彼は思った。

湯上りのぐったりした身体を二階の欄干に寄せかけた時、彼は雨に暮れ行く湖水を現心もなく眺めやった。直ぐ下の小波さえも立てぬ水の面にはさめざめと降る雨の足が仄に見えるが、少し遠方には薄暗がり一面に瀰み渡って、その向うの山は限りもない遠い処にあるように、幽に黒い影を大空の深さの中に沁ませて、頼りなげに聳えている。

彼はじっとこの黒色の中に浸っている中、いい知らぬ淋しさが犇々と心に迫って来るのを感じた。世界にたった一人自分が生存しているような孤独の淋しさである。勿論彼は同僚と語ったり、労働者に主義を説いたりする時は、憐な人類の救済、主義の為の奮闘などと、威勢のよい文句を高唱して真剣に身を犠牲にする程な覚悟を決めていた。その為にあらゆる迫害や困窮にも屈しないで不断の努力を吝まなかった。却って迫害や困窮が来れば来る程消極的な悦びをさえ感ずる位であった。それがどうした訳か近頃は時々堪らない寂寞に襲われるようになった。そういう場合には極力勇を鼓して意気地ない自己を叱り飛ばすことに努めて、尊い使命に邁進するように心を引き立て引き立てした。素より如何なる迫害に対しても是迄怖しいと思った事はないが、ただこの寂しさ丈はどうする事も出来ない。

——

雨は益々強くなって、ざわざわと水の面に音を立てる。時に微風に煽られる重吹は彼の顔を冷かに撫でた。夫でも彼は何時までも其処にじっと立っていたかった。

夕飯の膳を運んで来た女中はがらがらと雨戸を繰り初めた。彼は一寸それを止めさせて訊いた。

「足尾へ越す道はどちらかね。」

「足尾ですか。」と女は彼の側に来て左の方の暗い中を覗き見るようにして、「もう良く見えませんが、この方角の山の中の道を行くのですよ。随分険しい所もあるそうです。——お客さんは足尾へお越しなさるのですか。」と彼の方を向いた。

「そうだ。明日は早く起して貰わなくちゃならないんだ。」

「こんなに雨が降りましても？」

「雨に敗けちゃ居られないよ。」

「大変ですね。」

「此所から足尾へ幾里あるかい。」

「四里位とか申します。」

「じゃ槍が降ったって知れたものだ。」

「でも随分酷い路だそうですよ。」

それから彼は女に促されて夕食の膳に就いた。湖水で捕れる川魚の焼いたのが、彼には両頬の絞るほど佳味しく味われた。灯の下で初めて見る女はよく肥って、何の煩いもないようなあどけない細い眼付をしている。——こんな静な心地よさ相な宿で、何の思うこともなく二三日でも遊ぶことが出来たら——彼はちらと心の底からこういう考が浮んだ時、「不可ない、それが最も危険な魔だ」と自分で自分の心を叱り乍ら、無心に箸を動かした。

「きょうは日光の方からお出なすったのでしょう。」

女はこう話しかけて、「滝を御覧になって？」と訊いた。

「華厳をかい。いや見ない。そんな時間が無いのだ。」

「何でも今日滝壺に死人が浮き上っていたそうですよ。」

「ふむ、誰か見て来たのかい。」

「ええ、向の六番の二人づれのお客さんが御覧になったのです。始め白い体が浮いたり沈んだりするのを誰かが泳いでいるのか知らと思ったが、よく見ると裸体の死人だったので、気味が悪くなって、大急ぎで遁げて来たと被仰います。」
「男かい女かい、その死人は。」
「男だったそうです。」
彼は夫を聞いても新聞で毎日の様に見ると同じ様に余り心を動かされもしなかった。でも女は何だか落ち着かない様子で、きょときょと部屋中を見廻わしたりする。彼は漸く箸を置いた時、軽くこう云った。
「そんな事は良くあるだろう。」
女は膳を運ぼうとした膝を復下して答えた。
「否、近頃は滅多にないのです。妾がこの春当地に参りましてからも今度が初めてです。で、警察の方でも少々手を緩めてたとか申します。——その人はね、脱いであった着物で解ったのですが、実は一週間計り前に家に泊った客ですよ。華厳に落ちた人は大抵死体の行方が知れないのだそうですが、偶には一週間振位に浮き上るのもあるんですって。」
「じゃお前さんも顔を覚えているだろう。」
「眼について仕様がないんです。足尾から来たのですが、三十位の頑丈な男でした。」
「坑夫かい。」
「どうもそうらしいのです。死ぬ様な風はちっとも見えませんでしたのにね、晩に御酒を飲んで、陽気に悪戯たりなんかしましたの。仕舞に妾に散々嫌らしい事を口説くじゃありませんか。夫から朝立つ時、妾を睨んで、『姐さん俺の顔をよく覚えて置け』って捨台詞を残しましたのよ。その日の夕方です、飛び込んだのは。夫から妾この部屋へ一人で来るのは昼間でも薄気味が悪くてね。実はこの部屋へ泊ったのです。あなたには誠に済みませんが。」
女は一人でも余計にその事を語って自分の恐怖を頒ちたいという風に本気に饒舌り続けた。併し彼は夫を聞いても別に深い感動も起らなくて、自分とは全然関係のないお伽話を聞くような心地であった。それが彼自身にも不思議な位であった。是迄はそんな事を直接に聞くと、直ぐ胸に動悸を覚えるほど強く刺戟された。ことにその男が坑夫であるからには、彼の当面の問題として絶好な事実であるから、なお深く立ち入って探究もし、考えても見るべきであるのに、どうも心に何の緊張をも覚えない。矢張人の事だという気がする。
食事後間もなく彼は床を伸べて貰って枕に就いたが、四辺が寂寞している中に、屋外の雨の音のみ襲う様に聞えるのが、一層彼の淋しさを増した。彼は一人静かに雨の音を聞くと、気が鎮まって楽しい哀感を催すのが常であるが、今夜はそれが度を越えて、ぞくぞく身に迫る苦しい淋しさを喚るのである。彼は夜気の冷い天鵞絨の襟を頭から引被

って、自分の過去の波瀾に富んだ生涯を顧みなどして現在の苦悶を暫時でも忘れようとした。

二

彼は本州西部の海岸の商業地の商家の惣領に生れた。彼の家は可成り大きな綿問屋で、彼は若旦那々々といって、多くの召使等にかしづかれていた。土蔵の横の広い長屋造で多くの綿打職人が毎日毎夜、ビンビンと一斉に弦音高く綿を打つ音が今も明瞭と彼の耳に残っている。彼は元来怜悧な質で、その上早熟の方であった。小学の頃から雑誌を読むのが好きで、その頃少年世界に連載されていた漣山人のお伽話の「犬張子」などは毎月出るのが待遠い程愛読していた。その地には程度の低い商業学校しかなかったので彼は十四五里隔った土地の叔父の家に泊って其処から中学へ通わされた。中学でも彼は何時も優秀な成績を挙げていた。殊に文章では教師からもその将来を嘱望された程目に立った。三年を終える頃に既にハイネの訳詩などを読んで十分これを味う丈の感受性と理解力を持っていた。今でも彼は表紙が真紅で、当時では珍しい細長い小形なあの本を忘れる事は出来ない。

そして

「おのがなみだのしたたらば
うるわしきはなさきぬべし。」

というような句を覚えている。この詩集を懐にして、晩春の或る日曜に叔父の家の村の後方の小山に登って余りの心地よさに、物に誘われるように山から山の背を追うて、到頭若山の頂上に来、大内氏を亡ぼして暫くここに栄華を誇った陶晴賢の古城趾の礎の上に腰かけ乍ら、銀を溶かして流したようにほの白く光る瀬戸内海を眺めて訳もない涙を垂れた事も思出の種であった。後で知ったのだが彼の実家が漸く非運に向ったのはこの頃からであった。夫は西洋との貿易が盛んになるに連れて、綿という財貨の経済的事情が一変して来た結果で、焦れば焦る程不可なくなって遂には没落の已むなきに到ったものである。彼も四年の半で学校を廃さねばならなかった。両親は当時小学に通っていた弟を連れて、その町の貧民窟ともいうべき、遊女町の隣の陋巷に引き移って、親戚や旧知の同情で漸く渡世した。この事は彼の心に大きな打撃を与えた。彼は一人上京した。そして中学の某教師の世話で耶蘇教のある教師の家に起臥する身となった。其処で始めて耶蘇の教に接した。語学をも熱心に修めた。彼が文学で身を立てようと決心したのはその後間もなくであった。で、牧師の知人の新派の和歌の先生の家へも出入した。「人誘う魔女の如くに誇り咲く罌粟の花びら触るれば散りぬ」という幼稚な歌を詠んで先生に大層賞められたのも当時であった。とかくする中にある偶然の折にロバート・オーエンの伝記を読んでから、その理想や人格に一方ならぬ感激を受けた。夫からはこの種類

の書物を耽読して、終にはその主義に心酔する様になった。そして二三の同志と共に献身的に努力することになった。尤も当時日本にあったこの主義の他の団体とは直接の関係はなかった。彼は徒に反抗と破壊を事とする者とはその性格上から到底相容れなかった。只飽くまで社会の弱き階級の伴侶となり、指導者となって少しでも彼等を幸福にさせたいというのが彼の目的であった。彼はその為に同志と雑誌を出した。伝道の小冊子をも書いた。その上、地方へ視察を兼ねて演説をしに出かけた。彼の文章はいつも詩人的熱情を以て燃ゆる光彩を放っていた。彼の演説は能弁ではないが、両頬に朱を濺いで一言一句胸から絞り出るようで、理解力に乏しい者にさえ何等かの感激を強いずに止まなかった。併し彼は間もなくその筋の注意人物となった。資本家側から蛇蝎の如く嫌われた。公衆は触らぬ神に祟なしという様な態度で彼を遇した。所有迫害が加えられた。ある地方では宿屋が一致して彼の宿泊を拒んだ事もあった。ある時は弱き者の監督者から大道で殴られた上に唾を吐きかけられた。国の両親は彼に勘当を云い送った。牧師は彼の志を壮とするが表向の出入は遠慮して呉れと云って夫となく破門した。これに就いては母の愛を以て彼を慈しみ扶けた牧師の妻君は余程心を痛めたが、良人の手前どうする事も出来ず泣いて彼と別れた。彼はそれが何より悲しかった。こうして彼は総ての愛から離れた。唯二三の同志が味方であった。何故世間が自分に対してかく迫害を加えるのか、それが彼には不思議であった。少くとも自分の如き愛と正義とを以て弱き者を救おうとするのが何故危険であるのか。何時自分は秩序を紊る様な行いをしたか。そんな事は自分でも平生から憎んでいるのだ。世間は名目に拘泥して内容を攷えないで、十把一からげに自分等を排斥するのではないか。世間はまだ長夜の眠りから醒めないのだ。何時かは自分等の精神が感応する折が来るだろう。それ迄待たねばならぬ。ただ堅忍不抜の意志を以て徐々に自分の道を進まねばならぬ。と、こういう風に彼は考えて、幾年の困厄と窮乏に堪えつつ将来の光明を望んで努力して来た。この間にあって彼の唯一の慰楽は憐なる労働者を集めて道を説く事であった。幾十人幾百人の野獣の様な彼等が、彼の演説に或は感歎し或は落涙するのを見ては、一介の青書生ともいうべき自分の説く処がかく多大の影響を及ぼすかと思うて、嬉しさに自分にも熱い涙を絞る事もあった。

所が彼は近頃になって労働者に対する演説の効果に就いても疑を懐くようになった。それは彼等の感激は一時的で且つ余りに雷同的である事を知ったからである。彼は東北のある礦山へ年を置いて二度行った事がある。二度目の時は最初の度より屹度事情が良好になっている事を予期して行ったのに結果は却って反対であった。一年前に彼の演説に熱狂した彼等は、一年後には全くその時の事を忘れて仕舞ったらしく、彼等の間には何等の改良も進歩も見られな

いのみならず、その徳性は益々損われているのを目撃した時、彼は云い甲斐なく失望せずにいられなかった。「否、彼等を咎むべきではない、自分の熱誠が足らぬのだ」彼は励めてこう思い返そうとしたが、多少気抜したような心の調子を破る事は出来なかった。

彼はその後次第に疑を増すばかりであった。――彼等は到底誨うべからざるものではないか。それに彼等は第三者から見る程自分自身に不幸を感じてはいないらしい。その境遇を当然として甘じているのではないか。それを救おうとするのは無益なおせっかいかも知れぬ。彼等は矢張適所にいるものとも云える。ニイチェがソーシヤズムに反対したのはこの点に於てだ。そう思えば実に馬鹿々々しい。――けれどもそれもまだ自分の根気負を表白する口実ではないか。愛を以て万物に臨むに何の疑うべきことがあろうぞ。愛は人類の光であり糧である。これが無くなる時、真の人類は亡びるのだ。愛は理窟ではない、事実だ。何の躊躇もなく憐なるものを愛を以て抱擁しなければならぬ。

彼は最近までこういう問題に苦悶しつつも、足尾銅山の労働階級に主義を宣伝する為に惰性的に出かけた。その頃まだ大間々から足尾鉄道が出来ていなかったので、日光へ廻ったのである。

三

ざわざわと単調に降り続く雨の音、枕下に遠くなったり近くなったりする時計の音、遥か向うの部屋で時々幽に漏れる話声。その他には何も聞えない中に横わって、彼は考から考を追うた。

偶々少年の頃を思い出して今の自分の境遇と余に隔絶しているのを自分乍ら怪しみ驚かざるを得なかった。

「自分の一家の者はその後どうなったか。別けても自分を可愛がった母はどうしているだろうか。相変らず世の中の悪という事を知らない平和な心をもって日々を送っているのか。今時分にはもうあの狭苦しい六畳の片隅にすやすやと眠っているだろう。自分が三百里も隔った山の中の湖水の辺のこんな宿屋に寝ているとは夢にも知らずに。――それとももう死んで仕舞ったか。否、そんな事はない筈だ。思うてさえ怖しい事だ。」

夫から彼は三年前の冬に故郷に立ち寄った時の事をも思い浮べて、当時の傷ましい事実をさまざま眼前に見た。

夫は彼が九州の某炭鑛へ伝道に行く序であった。最初東京を立つ時は、永久に勘当を受けた故郷に立寄る気になれぬのみならず、素通にするのさえ厭わしい感じがしたので、汽車から直ぐ連絡船で対岸へ渡る事に決めていた。所が故郷の町に汽車が近づくに従って、妙に心が騒いで窓から山や河や野を見るにつけ打消し難い懐かしさが胸に込み上げた。乗客の中にも若しや知人はないかと竊に物色もした。市に着いた時は日は暮れて、冬の星が入江に林の様に

立ち並んだ帆柱の上に幽に瞬いていた。彼は直ぐ船に乗る事はどうしても出来なかった。久し振で嗅ぐ港の臭も故郷という感じを喚った。彼は到頭力強い何物かに引摺られる様に父母の家の方へ脚を動かしていた。人に逢うのが何となしに気が引ける様なので、外套の襟を立てて顔をその中に埋めた。遊女町ではまだ嫖客も少く、ひっそりして家々の軒下の燈籠も淋しげに見えた。その町から右に折れて黒いポストが夕闇に立っている家から三軒目が彼の家である。彼は脚がぶるぶる顫えるほど心が動揺し乍らも、靴音をも憚る様にとぼとぼ近寄った。後になってその時の自分を想うと旧劇の世話物の中の人物そっくりであったろうと可笑しくもあるが、その時はそんな事を想う余裕など無かった。愈々家の前に忍び寄って見ると、低い軒廂も格子戸の横の板に貼りつけられた魔除の護符も素の儘である。そして第一に彼の耳を貫いたのは奥の方で小声で唄う父の謡の声であった。低い曇った様な声だけれど、人通りの無い小路の静けさの中に鮮かに聞える。彼は動悸を押える様にして聴耳を立てた。それは父が最も好きで得意でもあるので彼が子供の時から能く聞かされて文句まで大分覚えて仕舞っている「熊野」の終の方であった。「何御暇と候や」から「あら有難や嬉しやな。是観音の御利生なり」の辺底力のある寂切った声で謡うのをじっと聞いている中、彼は思わず涙が沁み出るのをどうする事も出来なかった。

「花を見捨る雁金のそれは越路我は又、東に帰る名残かな名残かな」と謡い終えた時、彼は殆ど前後の思慮を喪って格子戸をがらりと開けて這入った。其所は境の障子に奥から射すランプの灯が映るのでぼんやりと薄明るかった。台所では茶碗か何か洗っていたらしい母は直ぐ手を拭き拭き障子を開けてぬっと顔を出して、

「誰さんかい」と云った。母の顔はよく見えないが、小さい丸髷からほつれた両鬢にかけての輪廓だけはその瞬間に明瞭と彼の眼に映った。

「お母さん、私です、仙蔵で……」

彼の声は妙に間誤ついた。

「あら仙蔵」母はこう頓狂にいって、直ぐ奥の方を向いて、父を見る風であった。と、その次の瞬間に「何」と父は一声鋭くいいなり出て来て、細長い体を玄関に顕した。続いて、今迄書見をしていたらしい弟も出て来た。彼はなお三人の姿を等分に見上げて黙って土間に立っていた。父は不意の事に言葉も出ない様子で肩を怒らしていたが、到頭

「貴様何しに戻って来たのじゃ。馬鹿者。貴様はお上の厄介者じゃないか。穀潰奴が」と怒鳴った。母と弟は何だかもじもじしている風であったが一言も発しなかった。

彼はその時は不思議にもう心が鎮って、冷やかになっていた。後になってもその時の心持が彼自身にも解し難い位であった。

「じゃ行きます」

と一言いい放って彼は静に外に出た。「くたばって仕舞え」と罵る父の声が後に聞えた。併し彼はその声を憎いとも、悧めしいとも感じなかった。唯立ち寄るべからざる所へ立ち寄った自分の無分別な弱い心を悔いるのみであった。遊女町の角の所にその筋の人が立っていた。白い手袋と劔とが夜目にも著るく見えた。「もう手が廻っているな」と思ったきり、慣れっこになっているので別に驚きもしなかった。

「お前が小松仙蔵じゃな。何の用事で親の所へ行ったのか、有体に云え」彼はこう訊かれたので、包む所なく経過を簡単に語った。

「お前も馬鹿じゃないか。お前が家へ寄ると何れ程迷惑になるか考えて見るが良い。町でもお前の事を知らん者はないぞ。早う何処かへ行け」こんな事をも云われた。その晩彼は直に九州へ渡った。

その時以来彼は決して親とか故郷とかいう考を起すまいと努めた。親子の間柄も一種のコンヴェンションだ。小っぽけな五月蠅い故郷など無い方が良い。何とかは郷党に容れられずだ。

「俺の故郷は世界だ」

彼はこう壮語していた。

今彼はそんな過去の事実を顧ると益々淋しさが増すばかりであった。世界を故郷とするという様な事は矢張空疎な負惜みではないか。真に温かい心を以って自分を受け容れて呉れる家と故郷がないほど便り無い事が他にあろうか。帰るべき故郷の無い者は影のない人と同じだと誰かが云っているが、そうかも知れぬ。形影相弔うにさえも影がなくては出来ないのだ。

今の自分は全く影の無い人だ。親、兄弟、旧友、旧師、それ等が皆自分に背中を向けているのみならず、社会からも害虫の如くに取扱われる。それに近頃は二三の同志とも往々にして意志の齟齬を感ずる事さえある。

「全くの一人ぼっちだ」

堪らず夜着から頭を出して見ると五燭の電燈は頭の上になお寝ぼけた様に点いている。それをじっと見ている中彼はふと先刻女が語った身投男の事を思い出した。あの男も一週間前にこの電燈の下に寝たのだ。そして自分と同じ様に眠られないで、こうして種々と死後の事など考えたであろう。

その煤けた天井、床に懸けてある布袋の絵、ごたごたと眼まぐるしい様な襖の模様、それ等をあの男も訳もなく見廻し乍ら、苦しんだに相違ない。それからこの枕、この褥、この夜着。みんな彼の使った物かも知れない。そう思えばあの男の死神に襲われた血の暖味が今もぽかぽか夜着の中に残っていて、自分の身体の中に滲み通って行ってるような気がしてならぬ。そしてこの世の思い出に女の肉体に触れたいという慾望に駆られて、女中に迫った男の心持

や態度も眼に見るように鮮かに心に描くことが出来た。
と同時に、彼はどうしても遁れ難いようなある暴力的な誘惑が身を圧すのを感じた。

女、酒……死。

ああ怖ろしい事だ。彼は絶望的な欠伸をして、一切を忘れ度い様に四肢を伸ばした。

床の布袋は相変らず大きな腹を持て余しつつ嫣笑々していた。

四

一寸眠ったかと思ったら、戸を繰る音に眼が覚めた。倦怠い身体を起して外廊下に出て見ると、雨は昨夜ほどに強くはないが、なおじめじめと湖水をかすめて降っている。

「お早うございました。――まあよく降りますことね。何時になったら歇むのでしょう」女は平気な顔をして挨拶した。「これでもお発になりますか」

「発つよ。仕方がないからね」

「昨夜は良くお休みになれましたの？　変なことを申し上げたので、後で妾後悔いたしましたのよ」

「あの為でもないが矢張眠れなかった」

「済みませんでしたわね」女はこう云って下へ行った。

宿屋の女中にしてはおっとりしたしおらしさの失せない女だと彼は思った。殊に湿んだ深い眼元が彼の心を惹いた。「せめてこんな女にでも真から可愛がられたら嬉しかろ。併し到底自分はもう人に愛せられる事など有りようがない。人と自分との間は厚い鉄板で遮られているのだ。駄目だ。」

直ぐ前面を雨に濡れながら家鴨が二三羽並んで、「ぐわっぐわっ」と鳴き乍ら過ぎた。良く見ると昨夜の中に水嵩が増したかと思われる程、見渡す限り一面に漫々と湛えている。宿の隣の家の背戸に桟橋の様に突き出した処に繋いである蒼白い一人乗のボートも殆んど橋と同じ高さに浮き上っていた。――この湖水の深さは如何程あろうか。何れ火山系の湖であるからには測り難い程底深いに相違ない。その底には何があるのだろう。何千何万年の昔からの水がその儘、毛ほどの動揺もなく静まり返っているのだろう。そして周囲の山から落ちる木の葉や実や石塊や、そんなものが自然に沈澱するのだ。時には溺死した人の骨も横わっているだろう。何時ぞや英国大使館附武官がボート覆没の為に行衛不明になった。その人の骨もこの湖水の底の何処かへ永久に横わっているのだ。若し剣を吊っていたなら、その剣も、それから洋服もボタンも同じ様に。あの武官は英国の何の州の片隅に生れた人か知らないが、東洋の然もこの山中の湖水の底に骨を埋めようとは誰が予期したろう。

こんな事を思い乍ら彼は現在の自分をも打忘れて不可思議な気分に魘されていた。其処の水面に漂うている一枚の

枯葉も、人間の力では到底解きがたい謎を含んでいる様に感じられた。

朝飯が済んでから矢張彼は足尾行の支度にかかるより他に仕方がなかった。何時の間にか風が少し出たので外套がなくては蝙蝠傘丈では迚も不可（いけな）そうになったから油紙を買って来て貰った。

「風になったからお午頃には雨も上るでがしょう」という番頭の声に送られて宿を出た。

滝の方への水の出口に架けた危かしい板橋を渡る時には湖水を渡って来る風が案外強くて、冷い雨を顔に叩きつけた。岸には暗茶色の落葉が打ち寄せられて、枯かかった水草の先に揺れていた。少し湖畔に沿うて行くと間もなく林の中の小径となった。径というよりも、落葉の踏み躙られているので僅にそれと判断し得るほどの跡に過ぎなかった。林の中は風は却って当らないが、その代り樹の枝や葉からぼたぼたと大きな滴が落ちる。殊に今は万木落葉の真最中と見えて、櫟、楢、樺などの雑木が風雨に叩かれて、争うて重く濡れた枯葉を揺り落す様は慌しくも凄じくもあった。それが傘の上にべったりと附着いて中々落ちなかった。林が深くなるに連れて、木の子が腐ったような妙な臭が鼻を衝いた。昔から空しく積っては腐り積っては腐りした木の葉の精が怨みがましく漂うているように彼は思った。

時には木の間から雨に白い湖水の面が見えた。低い木が二三本生えている小島も見えた。時には径に大木が横わっていて、夫から先の径を見つけるに困った。時には崩れかかった小屋があって、山賊でもいたかの様に焚火の跡も見えた。彼は単調を破る此等の物に却って気を紛らしながら足に任せて歩いた。

湖水から余程遠ざかって愈々山の奥深く来たと思う頃、彼は稍々疲れたので、倒れた木に腰かけて休んだ。膝から下は全く濡れそぼって、脚絆と足袋の間が両足ともむず痒い。それに山中の冷気が犇と全身を廻り凍（こご）えさす様にぞくぞくと寒さを感じた。併し彼は元来雨の中を一人旅行するのは、かんかんと照る日に歩くよりも好きであった。ことに此の様に何方を見ても樹ばかりで、全然人間の世界からかけ離れた処に、たった一人でこうしてじっと雨の音や風の声を聞いているのは、現在の自分の心持と周囲の光景とが寸分の隙もなくぴったりと合体しているようで、云い難い喜悦を覚えるのであった。自分の行くべき処、落ちつくべき処はこういう境地だ、という気がする。もし事情が許せば、何の目的もなく、こんな処を幾日でも歩いていたい。

――傘を横にして見上げると、此辺では葉は大抵落ち尽していて無数に差し交した梢の間から濁りきった空がちょいちょい見えた。

ふと寒さに身体がぶるぶると顫えたので彼はまた勇を鼓して歩き出した。何だか油紙や洋服を通して雨が肌に沁み

込むかと思われるような寒さである。彼は歩きながら何の連続もないのにひょっと、最近まで自分を愛して呉れた牧師の夫人の事を想い起した。異性で彼を愛したものは母を除いてはこの夫人だけであった。当時彼はそれが何より心強く嬉しくて堪らなかった。或る時は夫人は人の妻としては程度を越えていはしないかと思われる様な振舞を彼に対してやった。彼も識らず識らず母や姉の愛とは別種な牽引を夫人に対して感ずる事が屢々あった。ことに何時か春の夕暮に教会から二人連で牛込袋町を帰った折など、今思うても胸の血が躍るようだ。あの真白な手、誘う様な髪の香油、夫から自分の頬に触れた熱ぼったい唇……。彼はこんな荒寥たる山中であの夫人を思うことの余り突飛であるのを不思議がりつつもそれを打消す事が出来なかった。——ああ併しそれも過去の夢だ。夫人も社会のコンヴェンションを怖れて自分を遠ざけたではないか。駄目だ。

行く中に傘が何かに衝き当ったので、見ると誰の悪戯か、木通の蔓に草鞋の破れたのが高く吊下げてある。彼はぶらぶらと揺れる夫を不審げに見上げた。尚高い所には枝に絡った蔓に木通の実の皮だけが三つ四つ黒ずんで下っていた。何の苦労もない男女の恋のような木通の甘ったるい味を思うと、口に粘い唾が湧いて来るのであった。

間もなく路は急な坂となった。橡の大木が根を張って茂っている間に熊笹が所狭き迄に蔓った怖ろしく嶮しい崖である。今朝発つ時、宿の番頭が話していたが、まさか是程とは思わなかった。彼は傘を畳んで熊笹や蔓を捕まえて喘ぎ喘ぎ上った。肩にかけた鞄が酷く邪魔になった。息は段々迫る。膝から腿にかけて痛怠い。右に左に葛折を幾つ行っても坂は中々尽きそうにもなかった。今はもう他の考えは全く消えて、少しも早く坂を乗り越えたいばかりであった。

樹が次第に疎になるに連れて、霧が段々深くなった。遂には低い茨や枯草許りになって漸く頂上に達した時、彼は濛々とした雲の中に佇んで、吐息を洩らし乍ら悃憊した身体を其処の草の上に据えた。下を見ても上を見ても息が詰る様な濃い白雲に閉されて、藻掻いても出る事の出来ない別の世界に一人置去にされたような気もするが、また他人が到底到達し得ざる高所に来たような淡い誇もないでもなかった。

下りも可成り急であった。草も樹もなく唯礫がごろごろとしているのみで、足が滑り初めると捕まえる物がないので、危険であった。少時下ると霧は漸く薄らいで、向うの山も姿を露わして来た。見ると此方の山も彼方の山も樹という樹はなく、唯一様に黒み渡っている。彼は礦毒の為にこうなったのだと気が付いた時悲痛な感慨が胸に湧くのを禁じ得なかった。谷には昨夜からの豪雨のせいか、濁水が音高く狂い流れていた。是が二三十年前から八釜しい問題になっている渡瀬川の上流だなと彼は思った。同時に終始一貫した犠牲的精神を以て、平和の民の為に奮闘難儀した

T翁の事も思い出された。

何という荒廃だろう。この山へは飛ぶ鳥さえも来ないだろう。あの河には一尾の魚もいないのだ。彼はこう思いつつ、昨日通って来た日光から中禅寺にかけての紅葉に飾られた山峡の華麗さを想起して、そのコントラストの余りに酷い事に驚いた。山一つを表と裏にして、この二つの別天地を示現したのは、天の悪戯か或は啓示か。

ふと見ると、遥か下の方から黒蟻の行列の様に学生らしいものが上って来る。近づくに従って、がやがやと乱雑な音が聞えた。一歩を誤れば数十仭の谷底へ滑り落ちそうな狭い径で中学生に行き逢った時、彼は横に立止って、一人一人彼等を通してやった。学生は中学でも上級の者らしく、皆大きかった。何れも手に太い杖をついて、快活そうな顔をして、小鳥の様に饒舌る。三四十人も行った後を少し遅れて老耄れたような教師がとぼとぼと上って来た。

「まだ頂上まで随分ありますかね」

教師は帽子を脱って訊いた。頭の前の方がすっかり禿げているのが彼の眼についた。併し教師の温顔には少しの苦痛もなさそうであった。

親から金を貰って気儘に旅行する学生、決った俸給によって安らかに暮す教師、それ等は今の彼には少しの交渉もないものであった。

径は一旦河床に下ってまた山の中腹に上った。それから出張った所を曲ると、直ぐ下に赤く大きな煙突がぬっと聳えて、膿の様に黄色い煙を、灰色に濁った天にむくむくと吐き出していた。

あの煙が亜硫酸瓦斯だ。あの為に有らゆるものが枯死するのだ。草も木も鳥獣も、そして遂には人間も……自然を圧倒する文明の毒手を見ろ。

彼はそう思うと、身体中に抑え難い悲憤の血液が迸る様な気持がして、邪魔になる油紙をまくり上げ乍ら下りを急いだ。

（一九一六年七月「新小説」）

II 評論

小説と社会の隠微

田岡嶺雲

近時風俗の壊敗豈にいうに忍びんや、奢侈淫靡其極に達し、賭博公に行われて、花牌を弄せざるものは所謂紳士に似ずとし、附托請謁盛に行われて白昼権門に出入して愧じとせず。学者にして僧侶と女を争うものあり、高利貸をなすものあり、書肆と結托して利を図るものあり、文学者にして財を騙るものあり、強談を以て金を奪うものあり、賭博を以て其片商売とするものあり。劇評家は黄金によりて其評を上下し、新聞記者は好悪によりて其筆を二三にす。色を漁するの僧徒あり、利を争うの宣教師あり、神道の名の下に淫祠の人心を蠱わすあり。社会の裏面覗去り覗来れば、人をして嘔吐三石ならしめんとす。嗚呼々々人心の萎靡腐敗何ぞ怪しむに足らんや。此時に於て苟も志ある者の眼が社会の裏面に注がれたる亦怪しむに足らんや、見よ二三年来新聞紙が如何に社会裏面の隠微を発かんとするに勉めたるかを、（仮令其間これによりてまた利を貪らむとするもの二三なきにしもあらざりしと雖も）而して頃日に至りて吾人は小説界に於て亦此傾向あるを認む、「都」に於ける欠伸が「女喰い」、「四の緒」に於ける眉山が「左褄」、「国民の友」の夏期附録に於ける眉山が「うらおもて」、緑雨が「贖面」、「文芸倶楽部」に於ける乙羽が「人鬼」等看来れば何れか社会の裏面の悪徳に対する嫌悪の叫喚の声にあらざらんや。かのトルストイがクレーッェロフの一曲痛罵骨を刺す所、吾人をして忸怩寧ろ特に日本国民の為めにしか云いしに非ずやの感あらしむ。嗚呼暴露せよ、暴露せよ、益々社会の裏面を暴露せよ、所謂社会の悪徳は既に法律以外に逸す、これを責め、これを呵し、これを嘲り、之を罵り、翻為として自ら悔い自ら悛めしむるものは豈に天下操觚者の任に非ずや。然れども啻に其悪を発き、其醜を露すのみを以て能事畢れりという可からず、人心染み易し、啻に其醜悪を発露するのみにしてやまば、寧ろ天下の人を胥いて醜悪の淵に曳入るるものなり。吾人は筆底血あり涙あり、外に笑うて内に泣き、外に憤りて内に悲む熱情の文士に須つこと多し。吾人は天下の文士が大に社会の罪悪を暴露し来ると共に、更に大に其同情の涙を揮て人道の為めに泣き、道義の為に憤り、絶叫大呼して警世の暁鐘となり、懲悪の震雷たらんことを望む。然れども吾人は敢て美文を以て人を教えよといわず、唯自ら悔いしめよといいう、大なる理想を内に懐きて以て写実せよ、燃ゆるが如き同情を注ぎて以て暴露せよ。

（一八九五年九月稿）

下流の細民と文士

田岡嶺雲

十九世紀の所謂文明開化なる者は富者に厚きの文明也、自由の名の下に貴賤の階級を打破せりと雖も、貧富の隔絶はこれによりて益々太甚しきを加えたり。唯物文明の進歩に伴う器械の精巧は、労働者より其職を奪い、文華の発達に伴う奢侈の風は、窮乏者を擠して弥々塗炭に苦ましむ。富む者は弥々富み、貧き者は弥々貧す、富む者は常に楽しみ、貧き者は常に苦しむ。朱門の家、馬常に肥えて、菜色の丐徒累々途に満つ。肉食の者腹常に便々、冬の短きを消遣の途なきに苦しみ、而して陋屋の裡、眼凹み頬落ちたるの人、秋夜の長きを猶お作業の捗々しからざるにかこつ。今の文明は中流以上の徒を悪徳に陥るると共に、下流社会のものを擠して悲惨の谷に落す。今日の下流社会餓えて而して死せん乎、否らざれば盗みて食わざる可からず、盗みて食うもとより罪なり、然れども人常に伯夷の潔なし、正を守りて餓死せんよりは罪名を受けて生きざる能わず。下流社会の罪悪之を安逸の余に出ずる上流の悪徳に比すれば其の情や憫むべし、而かも人之を罰して仮さず、而かも呑舟の魚を逸して上流社会が汚行淫風をとがめず、嗚呼人の眼は到底明のみをみて暗をみる能わざる乎。且つや貧窶なるもの必ずしも悉く怠慢より来らず、かの罪悪なるもの必ずしも常に自動的ならず、而かも一たび窮乏の淵に沈めば再び浮む瀬にあうこと難く、一たび牢獄の人となれば、世は常に之を忘れずしてこれに歯するを愧ず。嗚呼々々天下最も其運命の悲惨にして、其生涯の最も憫むべきの生涯を描く、豈に詩人文士の事にあらざらんや。世は既に才子佳人相思の織巧なる小説に飽けり、侠客烈婦の講談めきたる、物語に倦めり、人は漸く人生問題に傾頭して神霊の秘密に聞かんとするの今日、作家たるもの満腔の同情を彼等悲惨の運命の上に注ぎ、渾身の熱血を其腕下の筆に瀉ぎて、彼等憫むべきの生涯を描き、彼等無告の民の為めに痛哭し、大息し、彼等に代りて何ぞ奮て天下に愬うるを為さざる。ユーゴーが筆底雷霆い濤湧く所以のものは、彼が常に此等無告の民の為めに憤り、彼等の運命の悲惨に泣きて人道を絶叫するの声によるにあらずや。近時ユーゴーを説く者漸く多く、（数年前に在りて思軒が訳せしものは、ユーゴーが見聞の一瑣話に過ぎざりしのみ）無腸道人は「日本」に「九十三年」の梗概を、鈴浦漁人は「ノーツルダム塔」を概論し、而して又氏の大著「悲惨」は桜痴居士の筆によりて「アナ無慙の浮世」なる戯曲に訳し出されんとす

と聞く。嗚呼一葉の落つるを以て、天下の秋をトし得べくんば、此等の事世人の漸く意をかの人生問題とともに、社会問題に傾注し来りしを知り得べきに非ずや。然れども先ず自ら動きて而る後人を動かすべし、我先ず涙下りて而る後能く人を泣かしむべしとせば、今の貧窶者に代りて天下に愬えんとするもの、必ず眼中万斛の涙あり、胸中万斛の血あるものにして始めて得べし、軽薄なる幇間者流の作家、浅膚なる才子肌の文士に、其純潔を瀆さしむ可からず。嗚呼誰れかこれをなすものぞ、嗚呼誰れかこれをなすものぞ。

（一八九五年九月稿）

ヒューマニチー

田岡嶺雲

社会の表面をのみ見ば、花は咲き月は麗かに朱門の内肥馬高く嘶き、高楼の上絃歌湧く、人生の悲惨なるもの、苦痛なるもの、此輩は知らず。然れども更に翻て、社会半面の暗黒を見よ。寒夜屋なくして霜冴ゆる原頭に単衣にて眠るものあり。三日食を得ず、児は涸れたる乳房に飢えを泣くの一家あり。病めど医を得ず、薬を得ず而して職に離れて賃せる屋を追わるるものあり。天下彼等を唾棄し擯斥して顧みざるなり、彼等の此境遇に陥れる、或は自らの罪にして憐むを要せざるものもあらん。然れども、彼等の大半は、優勝劣敗の社会の大勢に敗れて然るに至りたるもの、彼等の所謂罪悪なるものを犯すに至るは寧ろ然るに至りて後にこれあるなり。

嗚呼文明という莫れ、開化という莫れ。電気灯は徹宵夜業の瞼重く頭痛むの人を照らさず。葡萄の美酒、血紅殷々朱門の膳羞に上れども、貧窟裡衰死の人の血を補わず。寧ろ文明といい、開化といい、細民の職を奪うて之を機械に与えて、彼等をして飢えて死せしむるのみ。人間悲惨なるもの多しと雖も、試みに貧窟に入りて、かの目光うるみ鬢髪蓬々、顔は土灰の如く而かも煤色を帯び、四肢は水腫して蒼白、満身の塵垢を蔽うに幾片の襤褸を以てしたるものを見ば、誰れか慄然として戦き、慄然としておそれざらんや。嗚呼今の小説家はよく悲惨を描くに誇るものなり。何ぞ更に進んで此悲惨の極を描かざるぞ。嗚呼今の世界正理ありという莫れ、公道ありという莫れ、強は弱を凌ぎ、富は貧を凌ぐ今猶昔の如きなり。代議の政体という莫れ、啻富者強者の寡人の政治のみ。公平なる判官ありという莫れ、彼等は猶其枉屈を訴うべき地なきに非らずや。世人皆暖かく衣、飽くまで食う。酒楼の上、絃歌絶ゆることなく、媚を売るの佳人錦繍を襲ぬ。而かも寒夜路側児女にた

すけられ、破琴を弾じて哀を乞う瞽たる女には、人飽くまでも其弾奏を貪りきいて、而も一文銭をも投ずるなくして過ぎ去る。嗚呼彼等悲惨の生涯誰れに頼て乎其不平を訴えんや、彼等の多くは無文訴うるに筆を以てする能わず、愬うるに舌を以てする能わず。彼等は満腔鬱勃の不満を呑で地下に入るなり。法律ありと雖も以て其枉屈を伸べず、倫理なるものありと雖も、恵を彼等の上に垂れず。アァァ彼等に代りて彼等の筆となり、彼等の舌となり、絶叫絶喚、上は九天に愬え、下は九地に訴えて、彼等が為めに其鬱悶を開かしむるもの文学者に非ずして将た誰ぞや。嗚呼今の文学者ママ事の如き恋愛に筆を労することをやめて此活境を捉え来れ、此活相を捉え来れ、捉え来りて之に満腔の心血と、万斛の熱涙を濺いで、彼等が為めに尽し彼等が為めに泣けよ。詩人の題目は必ずしも花鳥風月にあらじ。作家の材料常に必らずしも恋愛のみにあらじ。誰か之れをなすものぞ、誰か之れをなすものぞ。

（一八九六年一月稿）

新春の第壹喝

田岡嶺雲

青年は活気なり。進取の蛍火洞然として内に燃ゆ。唯直前邁往向上を知て、保守を知らず。未だ世故を知らず、故に猶予なし、狐疑なし、唯希望の光を望んで勇進するのみ、故に真摯あり、熱誠あり。故に青年の活気あり。故に革命の大業多く青年の健児に属す。青年は洵に一国の元気なり、守成に適せずと雖ども、旧物の打破青年に非らざれば能わず。青年血誠の蛍火、よく沈滞汚敗の気を燃やし尽して、之を清粋にす。一国元気凝滞あれば、青年あって唯之を疎通し得べきのみ。

明治、年を重ねて玆に三十。初年当時にありて垂髫のもの、猶初老に近からん。況んや当時青年の活気、よく維新改革の功をなしたるもの、今や則ち頽然として老えり。老いたる者は偸安を喜ぶ、明治初年の元気また見るに由なし、一国の元気まさに沈滞す。嗚呼今の時に当て、奮然身を挺して此沈滞を捲き去らん者、唯今の青年にあるのみ。

然るに今の青年をみよ、彼等よく此活気ある乎。果して進取の霊火ある乎。功利唯物の文明は世を挙げて功利唯物の人とせり、此風の浸染殊に所謂新教育をうけたるの青年に多し彼等は最も多く功利唯物的の教育をうけたり、功利唯物の教育は、人を誘うて唯実利にこれ就かしむ。唯実利をこれみる、苟くも実利を収むるに非ざれば為さず、左顧右眄、唯実利を的とするのみ、献身のこと、彼等の解する所に非ず。己れに利あらざれば捨てて知らざるを為す。豈に身を殺して仁を為すのことをなさんや。於是乎、青年の活気なるもの全く銷耗す、血誠なく直前邁往の勇なし。青年にして既に此の如くんば、一国終に元気なるものなきなり。

敝れたる縕袍をきて狐貉をきるものと立ちて恥じざるは青年の意気なり。彼等唯希望あに陥れるのみ、未だ貧窟裡の民が精神的肉体的に絶望の暗黒に陥れるが如くならず。彼の不具なるものの生涯亦もとより悲惨なり、而れども猶肉体的に然るのみ、未だ貧窟民の如く然るにあらず、それ活きんとするは人の皆之を欲する所、而かも彼等は時に自ら死するものすらあるなり、何ぞや、彼等は絶望の極に陥れる者なり。彼等は生きて生を繋ぐの糧に乏しく、而して既に生を繋ぐの糧に乏し、口腹のもとめこれ急、何ぞ況んや声色の慾を充すを得んや、彼等はあらゆる快楽なるものを其一身より褫われたるなり、あらゆる幸福なるものを其一生より奪われたるなり、希望あれども必ず達するを得ず、需求あれども必ず給するを得ず、それ人希望あるが故に立つ、快楽あるが故に生く、既に希望に達すべきなく、快楽のもとむべきなし、彼等また何のために生くるを欲せんや、何のために世にあるを望まんや、彼等生きて何の用ぞ、生くると雖ども既に死す、寧ろ砕して早く身神の寂滅につきて、知る莫らんには若かず、彼等何ぞ、生を軽ぜんや、死の更に楽しきを知ればなり、嗚呼人生病に死するものもとより多し、然れども貧のために縊死し投水するものまた決して少々に非ず、彼等の運命が斯の如く悲惨なり、悲惨なる此の如くにして之が為めに泣き之が為めに同情するもの少きは何ぞ、吾人敢て之を天下に責めず、彼の同情に富まざる可らざる詩人文士にして、猶今日の如きを見ずや。

然れども貧民が天下多数の同情をひかざる抑もまた其所以なくんばあらず、蓋し彼等を以て懶惰のために此域に陥れるものとし、而してまた彼等を以て罪悪の府となせばなり。而れども知らずや、彼等が罪悪を犯すに至るものは寧ろ其貧に因して然るものなり、而してまた彼等が此境遇に陥れるものは、其社会の潮流に乗ずる能わざりしによるなり。吾人は必ずしも悉く然りとはいわず、而れども其多数は必ず自業の致す所に非ずして境遇のためにこれに陥り、而して自ら好んでなすに非ざるも、必至に迫られて罪悪を犯すものなり。社会の潮流に乗ずる能わざるもの固より自らに不能なしとはいわず、然れども社会の順風に駕するも

の多くこれ僥倖児のみ然らずんば玕犴便佞の徒のみ、而して誠実真摯のもの世と共に醒酔する能わずして却て逆流に落つ、仮令然らずといえどもまた世波の激動に堪ゆる能わざる弱者のみ、薄運者に非らざれば則ち弱者、弱者は憐むべし、悪むべきに非ず、見や彼等絶望に落ち飢寒に迫らる、彼等が生を好むの情、自ら殺すを能くするも猶飢寒に死する能わず、死せんよりは寧ろ罪悪を犯さん、清廉高潔の士に非らざるよりは、誰か飢死に瀕して猶凛然として其名を潔くし其節を守るを能くせんや。彼等に食を奪うて猶彼等に責むるに仁義を以てするは、豈に彼等のよくする所ならんや。嗚呼衣食足て後礼節を教うべきのみ、貧者の罪を犯すや、其責其人にあらずして其貧にあり、彼等をして此罪悪を犯さざる能わざらしむるの運命、寧ろ憐むべくして悪むきべものあるを見ず。嗚呼滔々たる天下、今日白昼に相欺むき、稠人の間に相詐わり靦然、唯だその巧みに法網を潜るが故に紳士と称せられ、紳商と称せらるるのみ、何ぞひとりかの貧者に責めんや、貧者に責めんや、嗚呼貴紳の食前に供せらるる葡萄の美酒には僅に幾分の関税を課せられたるのみ、而して貧民は一日の罷労をいやすべき一杯の濁醪に高価の税を払うなり。マニラ、ハウァナの葉煙草は一厘の印税をも課せられざるも、貧者の骨休め一服の刻煙草には、彼等は幾何の重税を払うなり。十九世紀は階級を打破したりという、而かも富貧の懸絶を以て人爵の差等に代えたるを知らずや。貴の賤を圧すると、富の貧を圧すると、実際に於て何等の相違あるべき乎。代議の政体布かれたりという莫れ、所謂代議士なるものは中等以上の富者の代表者たるのみ、彼等は自己の選挙者に便にせんことをこれ知るのみ。彼等は貧者の為めに代りて愬うるあるなきなり。貧者は仮令不平あるも、不満あるも、其枉屈以て伸ぶる所あるなし。天に泣くも天冷冷、地に泣くも地冷冷、法は彼等の為めに庇護せず、行政の者は彼等を度外に措く、彼等は恨を呑んで黙せざる可らず。嗚呼誰れか此等の慰者となり庇護者となり、之に代て天下に愬え、之に代て懐抱を伸ぶべきものぞ。

　宗教者あり、彼等は此大任を尽すべきの職責あり、而るも彼等の慈善を名とするも実は已れの宗教に利せんとする私心の其の間に介せるを免れず。彼等の多くは偽善者なり、其の名を美にして其の行を匿にす、彼等には以て此れ等の貧者を托すべきに非ず、未来の福田を説きて貧者の財嚢を絞るが如きは更に酷だし、断じて貧者の味方に非ず。

　庶幾くは唯詩人文士あるのみ、もし真に意を此に注がば憐むべきもの、悲むべきもの、泣くべきもの、憤るべきもの、慨すべきもの、皆是れのみ。貧民の為めに代りて其枉屈を愬え、更に其悲惨の境遇を描きて天下に示す、血あり涙ある詩人文士、希くは起てこれに従えよ。而れども銭の為めに文を売り、銭の為めに書肆に叩頭するもののよくする所にあらず、一身を以て人道の為めに殉じ、毀誉禍福を以て度外に措くの熱誠あるを要す。起て貧者の味方となれ、

花鳥と恋愛のみ必ずしも汝等が好題目に非ず。社会の最大数を占むる貧者の味方となって天下に絶叫するまた人間の一大快事に非ずや。
嗚呼我に一万金あらしめよ、我は先ず東京中に於けるあらゆる貧者乞食の徒、襤褸蓬髪の者を率いて、一夜所謂紳士と称するものの宴遊の場たるあらゆる紅楼翠閣に上り、彼等をして牛飲飽食せしめ、これが興を助くるに彼の紳士貴顕と称する人々の宴に侍して嬌語喃笑するあらゆる絃妓なる者を喚来って絃歌舞踏せん哉。

（一八九六年三月稿）

一葉女史の『にごり江』

田岡嶺雲

境遇は人をつくるという、然り、人の境遇に制せらるること洵に大なりと雖も、されども人また其の内奥一点の霊性、之を熱して融けず、之を鋳て而して変せざるものあって存せずんばあらず。故に人を観るに境遇によれる習性のみを以て之を断ずべからず、境遇のなす所は、己欲して之を為すに非らず、己の罪にあらず、境遇の罪のみ。境遇の罪を以て人を責むべからず、境遇の罪を以て人を責むるは、鉱中にあるを以て黄金をすつるものなり。人病的にあらざるよりは、何等狼戻の徒と雖も、またその裡自ら隠約蔵し得ざるの霊性なるものなくんばあらず。此の霊性や智の謂にあらず、意の謂にあらず、純なるの情これのみ、智や、意や、真偽あり、是非あり、善悪あり。唯情や真偽なし、是非なし、善悪なし、ありのままの本体也、智や弁ず、故に真偽あり、是非あり、意や欲す故に善悪分る。既に善悪と是非と真偽とあり、乃ち古今を以て同じからず、東西を以て別あり、唯真偽なし、是非なし、善悪なし、故に古より今に渉り、東と西とを該ねて、情に二致なし、唯智之に加わり、意之に加わるに於て、善悪ここに生じ、是非ここに生じ、真偽ここに生じ純なるの情は裸躶々、赤条々、本質を露呈す。唯人や意あり、智あり、情を包囲して存す、智、情を飾って偽となり、意、情に加わって欲となる。此欲や此偽や念々刻々事に触れ物に応じて心に発す。純なるの情は之がために掩われて其の真光を洩す能わず。而も洩す能わずと雖も、内に伏し内に隠れて猶お潜勢の力を滅せず、物に触れて時に一内す、電光石火捕捉し易からず、唯瞥見すべき而已、故に之を察すること甚だ難。於是乎彼の憒々たる庸者、唯皮相をみるのみ、習性は現われて日常動作の上に出ず、之を見るは易し、既に見るは易し、便ち此の習性を捕えて、直に人を断ず、其精神を問わず、其本領

を問わず、其行の迹を以て直ちに之を断ず。嗚呼何ぞ其忍酷にして思少きや。人を観るには寛恕を要す、同情を要す、皮相を徹して奥底を観、之を庇護するの心を以て之にのぞまざる可からず、所謂ヒューマニチーなるもの此に存す。かのユーゴーの如何に其の同情の憐みを以てジャンヴアルジャンを描きたるか、ユーゴーをヒューマニチーの人というはこれが為め而已。

唯に尋常人が人を観るに寛恕之にのぞまざる可からざるのみならず、殊に小説家として、人間を活写せんとするもの、最も彼の慈悲眼を要す。成心を以て之をみる可からず、善悪無差別にして之に対せざる可からず、始めより悪を悪み、善をよみする意ありて筆を下すならん乎、善者は常に善、悪者は常に悪、悪と善と劃然として別あらん。然れども人情は微妙なり、人心は隠秘也、悪者必しも常に悪ならず、善者必ずしも常に善ならず、欲の動く、偽の生ずる、人たるもの輙ち免れず。善者豈常に善ならんや。本心の醒むる、良心の閃く、人これなきにはあらず、悪者豈常に悪ならんや。ただそれ迹を見る、故に善は常に善に、悪は常に悪、而も一たび深く内奥の琴線にきかば、人心の波動或は高或は低、相錯綜す。小説家たるもの果して人間を活写せんとす、善悪美醜並べ描かざる可からず。其皮相を描くものは是れ人間の半面をうつす而已、人間を死写するのみ、昔は俳人晋其角猿簑の序に、芭蕉の猿に魂を入れたるをいう。今小説家にして如此に、人間をうつすものあらば、これ霊あるの人間より其の霊を抜去って之をうつす也。豈よく人間をうつしたりといわんや。小説家の眼光は深きに徹して悪者の為めにも泣かざるべからず、悪の悪たる所以に泣くにあらず、悪の悪たらざるを得ざりしに泣くなり、其の境遇を罰して其良心の為めに泣くなり。其の匪行を描くと共にかの霊性一瞥の閃光を捉え来って之を明々地に顕示せざる可からず。認め難きの閃光を捉えて、これを繋住して之を彼の之を看得ざる尋常庸者に看せしむ。既に所謂悪者なるものの、常に悪にあらずして、境遇の然らしむる所、習性の然らしむる所を暁知し得、豈に所謂彼の悪者の悪者たらざるを得ざりし心情を酌んで一滴の涙を灑がざらんや。

所謂法律なるものは行の迹を罰するのみ、所謂社会の制裁なるものは業の本を咎むるのみ。法律は精神を問わず、制裁は心術に拘わらず。嗚呼社会や、法律や、匪行は法律之を牢獄に投じ、社会は之を郷党に歯せず。此間に在て其心術に入り、精神を問い、これが為めに同情を表して慰藉の涙をそそぐものは独り小説家あるのみ、小説家なるものは、此等のものが聽て以て路を有するの活一縷たるのみ。此小説家にしてまた皮相をみるのみならしめば、此等のものは何の処にか、其真情を発露せん、誰か其の霊性を顕わさん。アア天地は蒼々茫々、社会は冷々淡々、法律は惨々酷々、小説家たるもの豈此間に抽んで、燃ゆるが如き熱情をそそぎ、寛恕同情を表して此等に慈悲眼を垂るるなくし

て可ならんや。

小説家たるものの眼力は実に其美中醜を認め、醜中美を認むるの辺に在って存す。一瞥の閃光を捉えて之を其眼前に繋住し得るものは、其の天才也。其人物を描くや、内よりし、外よりし、表よりし、裏よりし、正よりし、側よりし、縦よりし、横よりし、毫を剖き釐を拆ち、微に入り妙に出で、四方八面より之を描き、其人物を其人物の内奥を透して読者の前に露呈し来らざる可からず。小説家は秦鏡の如く心肝臓腑をも照し来らざる可からず。然らざれば是れ傀儡の人間を写すのみ、所作は則ち有り、精神はなし、此の如くにして活描といわんや、活写といわんや。

吾人は一葉女史が、「濁江」一篇を読みて深く作者が犀利の眼光と、溢るる如き同情とに服す。女史は小説家として優に其の技倆滔々たる当世に抽んず。濁江一篇は売春の女を主人公としたるもの、作者はこの厭悪すべき女性に向って無量の同情をそそぎ、細やかにその同情をうつし来る。嗚呼かの売春の女なるもの、唯一の女徳たる貞操をうるもの、醜陋の極、卑猥の極、士君子たるものの、口にするだに猶之恥ずべし。而も売春の女彼れも女児なり。その嘗て処女たりしの時、彼また豈処女の羞恥と純潔とあらざりしならんや。而して色を売り貞操を売るの人間の最大恥辱たるを知らざりしならんや。而かも色を売り貞操を売り、其の純潔を汚し其の羞恥を、破らざる可からざりしの時に於て、その心情果して何にか似たる可き。その女性の最大の汚点たり、最大恥辱たりと知りながら其の最大汚点、最大恥辱に甘んじて受けざるを得ざるとせば、其の心胸の苦痛と煩悶と豈に言語のつくす所ならんや。而も彼等は猶お其の心中の苦悶と悲痛とを戯謔と笑語との下に隠して、此の最大恥辱と最大汚辱とを喜んで受くるが如くせざる可からずとせば、誰か之を憐むべきの運命にあらずといわん。其の皮相よりして之をみる、彼等はこの大恥辱と大汚辱の事を戯謔笑語の間に平然として之を為す、信に悪むべく、賤しむべく大醜陋、大卑猥のものたるに似たり。而も知らずや、彼は泣かんとして笑うものたり、哭せんとして謔るものなり。泣かんとして泣くを得ずして却て笑い、哭せんとして哭するを得ずして却って謔る。人間寧ろ之より悲惨のことあらんや。

嗚呼々々心中無限の悶々を将って、却って他の弄するに資して粉黛を粧い媚を呈す、売春の女其の行迹や悪むべし。而かも其の心術寧ろ一滴の涙をそそぐべきもの莫からんや。嗚呼彼は人を迷わし、人を詐むく、人の心を蕩かし、人の財を絞るというか。彼等と雖も豈人を迷わし、人を欺き、人の心を蕩かし、人の財を絞るを以て、而して快とし、潔とせんや。ただ彼等はしかせざる可からざるの運命に陥れるなり、しかせざるべからざるの境遇に落ちたるなり、境遇の罪なり、人の罪にあらざるなり。而して習の性となるや、或はそれを以て快とし、之を以て潔とするに至ることなからん乎。而も猶これ境遇の其の之を然らしめ

たるもの、彼等は是に至て寧ろ自らの罪の罪たるを知らんや、自ら罪を犯して自らその罪の罪たるを知らざるに至る、豈寧ろ人生憐むべきの境にはあらずや。その人を欺き、人を詐わることはもとより罪也。而れどもこれ其罪に罪あるのみ、無邪気可憐花蕾の如きの少女を自ら罪を犯しながらも其罪たるを知らざるまでに、堕落せしむるに至ては、境遇の罪豈少々なりとせんや。且つ夫れ貞操は女徳の最重なるもの、既に之を忍んで之をしも破る、彼等何の行をか為し得ざらむ。その道徳の観念を欠くるに至るもとよりその所、嗚呼天下売春の女を指して禽獣という、而も此憐むべき女児の貞操を破らしむる境遇の罪の更に悪むべきを知らざる也、噫。

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく、景色づくり、何処にからくりのあるとも見えねど、逆さ落しの血の池、
借金の針の山に追いのぼすも手の物ときくに。寄ってお出でよと甘える声も、蛇くう雉子と恐ろしくなりぬ。さりとも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃は、手打々々あわわの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したるものなれば、今の稼業に誠はなくとも、百人の中の一人に真からの涙こぼして、（中略）常は人をも欺す口で人の愁らきを恨みの言葉頭痛を押えて思案にくれるもあり。今日は盆の十六日だ、お閻魔様へのお詣に連れ立って通る子供達の、奇麗な着物きて小遣もらって嬉しそうな顔してゆくは、定めて定めて二人揃って甲斐性のある親を持って為るのであろ。私の息子の与太郎は今日の休みに御主人から暇が出て何処へ往って何な事して遊ぼうとも定めし人が羨しかろ、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母はこんな身になって恥かしいは紅白粉（中略）悲しさは女の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく、さりとて人の台所を這うも柔弱の身体なれば勤めがたく同じ憂き中にも身の楽なれば此んなことして日を送る夢さら浮いた心ではなけれど、言甲斐のないお袋と彼の子は定めし爪弾するのであろう。常は何とも思わぬ島田が今日ばかりは恥しい、と夕ぐれの鏡の前に涙ぐむもあるべし。

看よ作者が如何に万斛の同情を運んで彼等の心情を描き来れるかを、惻々として人をして泣かしめんとす、「今の稼業に誠はなくとも、百人の中の一人に真からの涙こぼして」といい、「此様事して日を送る、夢さら浮いた心ではなけれど」という。嗚呼彼等を醜陋なり、卑猥なりと唾斥する天下方正の君子之を読んでまた彼等が為めに一滴の涙をそそぎ給わずや。彼等が所業は素より淫猥なり、彼等が行跡はもとより放縦なり、而れどもまた一片憐むべきの心情、かくの如きものあるを忘る可からず。滔々たる天下偽善のみ、虚礼のみ偽善ならず、虚礼ならざれば天下之を不徳なり、不道なり、放恣なりと罵る、而るに今求めて此醜陋を表とし卑猥と銘打たるものの間に入る、叱罵せられ唾

斥せらるるはもとよりその所たるを知りて、其の叱罵せられ唾斥せらるる境に入る、彼等と雖も其の叱罵せられ唾斥せらるるを欲せんや、欲せずして之を為さざる可からず、其の心情また憐むべからずや、アァ天下の眼は皮一枚の上を見るのみ。孔雀を真似る七面鳥を貴び、蠶虫の形を悪むで父よとなく哀れを知らざるもののみ。

更に進んで作者が一篇の主人公たるお力を写し来るを見よ。彼が動作は如何にも放縦なり、所業は如何にも野卑なり。

頸元ばかりの白粉も栄なく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、煙草すぱすぱ長烟管に立膝作る。

その無作法人をして面をそむけしむるに足るあらずや。

馴染はざら一面手紙のやりとりは反古の取かえっこ書けと仰しゃれば起証でも誓紙でもお好み次第さし上げましょう女夫やくそくなどと言っても、此方で破るよりは先方様の性根なし、主人もちなら主人が怕く、親もちなら親のいいなり、振向いて見てくれねば、此方も追いかけて袖をとらえるにも及ばず、夫れなら廃せと夫れ限りになりまする。

何ぞその浮薄にして定操なきや、其の面に唾せんとす。而れども其の浮薄や野卑なるの間更に深く其の心情を問えばまた人をして泣かしむるに足るものあり。

菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにはあるまじ、さる仔細あればこそ、此処の流れに落ちこんで嘘のありたけ串談に其日を送って情は吉野紙の薄物に蛍の光ぴっかりとする計り、人の涙は百年も我慢して我ゆえ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他処目も養いつらめさりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたたまって泣くにも人目を恥ずれば二階坐敷の床の間に身を投じて忍び音の憂き涙これをば友朋輩にも洩さじと包むに、根性のしっかりしたお気の強い子というものあれど、障れば絶ゆる蛛の糸のはかない所は知る人はなかりき。

果然、作者は其はかなき所をみ得たり、如何に此放縦なるお力のはかなく哀れなる処を描き出さんとつとめたるを見よ。お力が

人間ばかりの大陽気、菊の井のお力は行ぬけの締なしだ、苦労という事はしるまいというお客様もござります、ほんに因果とでもいうものか、私が身位かなしいものはあるまいと思います。

と嘆じ其の胸中の鬱々酒を以て僅に之を遣るのみ、

お力が無理にも商売していられるのは、此力と思し召さぬか、私に酒気が離れたら坐敷も三昧堂のようになりましょう。

嗚呼彼も人の子のみ。綾羅につつまれ、錦裀に座し、宝鼎香濃に、繡簾風細かに、東閣の上閨門深く鎖して空しく東風を怨むの人、これも亦人の子のみ、彼が粉を装い媚を売り其の色を売り其操を売らざるを得ざるの大恥辱大汚辱

をうけて而も悲痛訴うる処なく、僅かに酒に托して其悶を排するのみとせば、其の境涯また悲惨のものにあらざらんや。

悲惨々々、彼は強て之を笑謔に紛らし酒に托せんとするも、猶お時に悲惨の情堪えざる所あり。作者がその客中にありて喧鬧の場にたえず、急に座を逃れたるを写すを看よ。

お力は一散に家を出て、行かれるものなら此のまま唐天竺の果までも行って仕舞いたい、ああ嫌だ、嫌だ、嫌だ、何うしたら人の声も聞えない、物の音もしない、静かな、静かな自分の心も何もぼおっとして、物思いのない処へ行かれるであろう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない、悲しい、心細い中に何時まで私は止められているのかしら、これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だ（中略）情ないとても誰も哀れと思うてくれる人はあるまじく、悲しいといえば商売がらを嫌うかと一ト口に言われて仕舞う、ええ何うなりとも勝手になれ、私には此上考えたとて私の身の行き方は分らぬなれば分らぬなりに菊の井のお力を通して行こう、人情知らず義理知らずか、其様な事も思うまい、思うたとて何うなる物ぞ此様な身で、此様な行体で此様な宿世で、何うしたからとて人並では無いに相違なければ人並の事を考えて苦労する丈間違である。

此一節誰か之を読んで衿を沾おさざるものぞ、境遇はお力を悲惨の深谷に擠れたり、而かもその父祖遺伝の気象はかくの如き醜陋卑猥の間に在っても猶銷し得ざる也、彼は「色の黒い、背の高い、人の好い計りで、取得とては皆無」なる源七に彼は猶綿々たる一縷の情の、断たんと欲して断ち得ざるものあるなり、忘れんとして忘るる能わず、而かも彼は猶此の如き醜陋の境卑猥の境にいつまでも安んずるを欲せず、彼はお高にいわれたるが如く「気位高」きなり、結城にいわれたる如く「出世を望」めるなり、忘られぬ乍らも「見るかげもなく貧乏」せる源七を忘れ得ざるを得ざるなり、捨てられぬ乍らも「八百屋の裏の小さな家にまいまいつぶらの様になって」住せる源七を捨てざるを得ざるなり。されども栄枯によりて其の愛を渝ゆるはその気象として忍んでなし得る所にあらざるなり。彼はまた結城に対して情なきにもあらず。

そもそもの最初から私は貴方が好きで、好きで一日お目にかからねば、恋しいほどなれども、奥様にと言うて下されたら、何うでござんしょうか、持たれるは嫌なり他所ながらは慕わしう。

然り彼は結城に情なきに非ず而も其の遺伝なる豪放の性は屈して人の妻たるを屑とせざるなり。彼は猶一片の自尊あり、屈して栄達するを欲せず、而してまた其一片の気象源七をも捨つるに忍びざるなり。

あの水菓子屋で桃を買う子がござんしょ、可愛らしき四つ計の彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよくよく憎いと思うと見えて、私の事をば鬼々といいます

る。まあ其様な悪者にも見えまするかとて空を見上げてホット息をつくさま、堪えかねたる様子は五音の調子にあらわれぬ。

人は軽薄といえ、鬼といえ、蛇といえ、自らは、鬼となり、蛇となり、軽佻となり、浮薄となる能わざるなり。結城に就かんか、源七を捨てんか、捨てんとして捨て得ず、就かんとして就き得ず、結城に対するの情も有無の間に迷い、源七に対する情も有無の間に迷い、就かんか、去らんか、去らんか、就かんか、迷また迷。悶また悶。彼はこの胸底の迷と悶とを齎らして源七が刃に死ぬ、彼は捨てず、また就かず、彼は死によって永く其の迷を離れ、悶を断てり。知らずして殺されたるか、相約して死したるか。はたまた徒らに其の手に死せる歟、嗚呼これも亦有無の間に存す。

吾人は敢て此の篇を以て些の瑕疵なしといわず、然れども作者がお力に向って無量の同情をそそぎ、其の醜陋卑猥に包まれたる一点憐むべきの心情を、彼に代わって発露し来りたるに向って十二分の賞讃を作者に呈するを躊躇せず。近時有髯の作家中、猶よく此作に駕して遜色なきを得るものありや、作者が新進として優に其技倆を先輩に抽ずると、其の筆致の軽妙、着眼の奇警、観察の精緻、大に天外と相似たるものなきに非らず。吾人は後進中に在って男作者には天外を推し、女流に在っては此作者を推す。二人は実に今日文壇の麒麟児なる哉。

此作者が筆致のこまやかにあわれに神采の躍動せる試みに左の一節を見よ。

ああ陰気らしい、何だとて此様な処に立って居るのか、何しに此様な処へ出て来たのか、馬鹿らしい、気違じみた、我身ながら分らぬ、もうもう帰りましょうとて横町の闇をば出はなれて、夜店の並ぶにぎやかなる小路を気まぎらしにとぶらぶら歩るけば、行かよう人の顔少さくすれ違う人の顔さえも遥かとおくに見るように思われて、我が踏む土のみ一寸も上にあがり居る如く、がやがやという声は聞ゆれど、井の底に物を落したる如き響に聞きなされて人の声は人の声、我が考は考と別々になりて更に何事にも気のまぎれるものなく云々

豈に是れ神助の文にはあらずや、神来の語にはあらずや、入神の筆には非ずや。

（一八九六年十二月稿）

詩人と人道

田岡嶺雲

人道とは何ぞ、相憐の謂のみ、相憐とは何ぞ、同情の謂

のみ。詩人は最も同情に富む者と称す、詩人人道に冷かなるものなりといふは、吾人の信ずる能わざる所、詩人に果して人道に冷かなるものあらん歟、吾人は之を許して真詩人と称する能わざるなり。彼等にして人類に相憐を表する能わずという、吾人はその真に山川花鳥に同情するを信ずる能わず、既に同胞の為めに泣く能わず、彼等にして真に恋愛の為めに泣くといふを信ずるを能わず、彼等にして真によく恋愛に泣き、花鳥風月に同情せば、何を以てか人類に同情し、同胞の為めに泣く能わざらんや。詩人にして人道に冷かなる、吾人之れを称して真の詩人に非ずというも何の不可かこれ有らんや。

今の小説家は最もよく人間の暗黒面を描くを以て誇るものなり、而かもその一人、果してよく社会下層細民の為めに泣き、其悲惨の境遇を描出して、之を天下に愬えたるものある歟。彼等の奇癖の人間を描くもよし、不具の人間を写すもよし、然れども飢に叫び寒に泣く悲惨の境遇は、彼等の題目たる能わざるべき歟。恋愛をうつすもよし、失恋を写すもよし、然れども絶望して溝壑に転ずるもの、果して更に悲惨の運命を有するに非ざるべき歟。嗚呼吾人之を知れり、今の所謂詩人文士と称するものの輩は、一時の流行を追って其流行の趨く所に従て其筆を動かすのみ。彼等内に一点の真同情あり、一毫の権同情ありて鬱勃たる満腔の感慨抑えんと欲して抑ゆる能わずして始めて、之を筆に下したるものに非ず、彼等のよく失恋に泣き、無能に同情を表するが如くなるも而かも一点人道に敦きを認め得ざるは宜にこれが為めのみ。

嗚呼人生の悲惨、彼の下流細民の生涯より甚だしきものある歟、失恋なるものもとより悲惨なり、而れども彼等は唯精神的に絶望の谷あるのみ、精神的に自ら標置する所あり、故に、形骸の事その顧みる所に非ず。往日の書生を見よ、短衣高屐揚々として「今の参議は皆書生」を高唱せしに非ずや。今の書生を見よ、その意に介する所は唯辺幅にあり。辺幅飾らずんば世顧みず唯世に售らんとす、故に今の書生辺幅を飾らず能わず。且つや、功利的の気風は人を局促にす。功利唯物の教育によって、養成せられたるもの小利にあるのみ、小才子あるのみ、的とする所唯実利にあり、故に苟合ならざる能わず、面従ならざる能わず、巍然として自ら操守して、售れんことを求めざる如きは、彼等の夢想にだも知る所に非らず。既に面従なり、苟合なり。彼等何の血誠かあらん。何の真摯かあらん。今の青年たるものは、青年たる所以を失す。彼等は一種の怪物なり、紅顔にして心には老の波よせたり。怪物や、怪物や、彼等は既に共に進取を談ずるに足らず、革命をいうに足らず。今や彼の往日青年の人は既に頽然として老いて、而して今日の青年なるもの、また此の如しとせば、咲呼咲呼誰と共にかせん。

嗚呼々々明治既に三十年。第二革命の機は既に熟す。山雨来らんとして風満楼。政治界は吾人の知る所に非ず、宗

教界を見ずや、文学界を見ずや、南山の陽既に殷雷あり、霹靂まさに空を劈いて下らんとす。まさに是れ、青年鶏声をきいて蹶起すべきの秋にあらずや。而して今の青年果してよくこれあり得べき歟。吾人私に之を憂う、血誠なく、真摯なき青年、果して共になすに足るべきものありやを。彼等果して一時の名の為めにするなき歟、果して一時の利の為めにするなき歟。

　而して吾人の時に杞憂に禁えざるものは、今の文界に於ける所謂新進の文士なり。彼等果して天地を斡旋する底の大手腕あるべき歟。革命は打破なり、打破して向上するなり、彼等果して破壊の敢為ある歟、向上の大精神ある歟。革命は既に破壊なり、実利的にあらず、献身的なり、彼等果して自らを損して悔いざるの熱誠ある歟。既に献身的なり、身を殺し仁をなす底の大決心を要す、彼等果して之をなすに足るの真摯ある歟。吾人は今の所謂新進文士について之を疑う、彼等果して一時の流行にうかされたるにあらざるべき歟、文界の名をなし易きに乗ぜんとするにあらざる歟、文筆の事の逸して贏得ることの易きを利せんとするに非ざる歟。今の熱誠なき、摯実なき、実利的の青年にして、果して然るが如きものなければ洵に幸なり。

　且夫れ人の情安きを偸み、逸に狃る、激せずんば奮わず、窮せずんば励まず。今の文壇なるものは、之を諸他のカリアに比す、安にして逸なり、一度文壇に上るもの、其筆僅に文をなすを得ば即ち可なり。其才僅に書を解するを得ば即ち可なり。必ずしも大主能あるを要せず、必ずしも大見地あるを要せず、幽玄の理想あるを要せず、熱烈の信仰あるを要せず。漫りに写実の観察に托し、経験折衷の学風というを名として、飣餖剪裁一時を糊塗すれば即ち足る。唯文を為すこと多く、作を出すこと多ければ、庸衆何の眼識あらんや、其実を識らずして其名に衒し、其力を知らずして其数に駭き、相争うて其名を喧伝す、名をなすの易き文壇に過ぐるものあらんや。而して僅に名をなせば、文を売て優に一口を糊すべし、其潤筆の料もとより之を今日西欧の貴に比す可らずといえども、また餓えて死するある往日の文士の如きものあらず。一夜の呻吟以て数金を贏得べし、今の文士の他に比して贅沢なるを見ずや、今の時世は寧ろ文士を遇する厚きに過ぎ、また文士を見ること高に過ぎたり。此の如く安にして逸なるの境に処る。文士たるもの何ぞ奮わん、何ぞ励まん、励まざるも、奮わざるも、彼等は容易に名をなすべく、彼等は優に衣食し得べし。人此裡に入る、偸安たらざらんとするも得んや。惰慢ならざらんとするも得んや。安逸は沈滞なり、精神的に人を腐敗に導く。今彼等新進文士にして、仮令向上の精神あり、献身の決心あらしむるも、猶此黴菌に腐蝕せらるるを免れじ。何ぞ況んや功利唯物の汚気中に養成せられたるものをや。嗚呼文界革命の大活劇、終に之を今の新進文士に托するに足らざるべき歟。雨後の春草、地上に抽くもの一に何ぞ多き、而して遂に拮するに足るものなき乎、熱誠なる一

人なき乎。真摯なる一人なき乎、活火内に燃ゆる一人なき乎。嗚呼革命の健児ついになき乎。

然れども、然れども、人、気運をつくる乎、将たそれ気運、人をつくる乎。チャーレス一世にはクロムエルあり。革命の気運既に熟せば、文界将に一人のクロムエルを胎み来らざらんや。文壇に鉄騎を麾いて、斡天旋地するの巨手出でざらんや。今の新進文士遂にいうに足るものなしとせば、吾人は唯望を当来に繋けて、之を仰望す。美人は天の一方にあり、髣髴として形影あり、喚べども未だ来らず、招けども未だ到らず、歳は改まる、気運は更に一歩を進む、気運果して歳とともに新たまるべき歟。気運果して吾人の希望を実にするを得る歟。吾人は之を明治三十年の文壇に見ん。

（一八九七年一月稿）

所謂戦争文学

幸徳秋水

近時我文壇に向って戦争を題目とし武人を材料とせる雄篇大作を出さんことを迫る者多し、而して作家自身も亦之に向って大に力を致さんとするが如し、是れ我文学前途の為に利なしとせざるべし、而も予は其害たるの更に甚しき者あらんことを恐る、何となれば世間の所謂戦争文学や、大抵戦争を奨励し武人に阿媚するの具となるの傾向を有せざる者稀なれば也、予は此点に就て聊か今の作家及び批評家の省慮を促すの急要なるを感ず、彼等蓋し謂らく、活発壮快の筆を揮うて戦争を謳歌し武人を賛歎するは、国民の愛国心を激励し、義勇の念を鼓舞する所以にして、而し是れ文士詩人が国民としての責務にあらずやと、如此にして彼等の筆は、其剣戟日に映ずるの壮観を説て其殺戮の惨状を説かざる也、其敵国憎悪すべきを説て其兵士の愛憐すべきは説かざる也、其戦利品の巨額を説て其剽掠の罪悪を説かざる程也、一将の功成るを説て万骨の枯るるを説かざる也、戦死の名誉なることを説て其姓名の直ちに遺却せらるるを説かざる也、国旗の光栄を説て生民の苦患を説かざる也、領土の拡張を説て財貨の消糜を説かざる也、野蛮の競争を楽んで文明の破壊を悲まざる也、而して曰く、愛国心を激励すと、国家を愛するの心は或は激励せらるべし、人類を愛するの心は果して何処に在り得る乎、強者勝者を賛美するの心は或は鼓らるべし、弱者敗者に対するの同情は果して何処に在り得る乎、野蛮的戦争は或は奨励せらるべし、文明的平和は果して何処に保せらるべき乎、動物的感情は或は亢進せらるべし、道徳的理想は果して何処に持せ

らるべき乎、彼れ説く処、咏ずる処、既に真ならず、善ならず、而して更に美なるを得ずとせば、豈能く文士詩人の責務を尽すと云うことを得んや、豈に能く真個文学の価値を具せりということを得んや。

而して所謂愛国心奨励を以て目的とせる文学が若し能く功果を奏せりとせば、其功果や即ち天下の人をして戦争の愉快を感ぜしめ、戦死の名誉を恋わしめ、幾億の財貨と幾千の生命を靡して、進歩を阻害し、学術を萎靡せしめ、而して数箇の武断政治家をして、其功名心を満足せしむるのみ、所謂国威国光の虚栄心を満足せしむるのみ、敵国に対する憎悪を満足せしむるのみ、是れ唯だ純文学の真価の欠如たるのみにあらずして、実に其堕落を表彰するもの也、其神聖を汚瀆する者也。ジョン・エム・ロバートソンは其新著「パトリオチズム、エンド、エンパイア」に於て論じて曰く、「彼明的生活と相容る可らざる一切の動物的天性より発現し来れる者を以て、最良の文学也と定義するが如きは、是れ文学の為めに甚しき恥辱也。全篇を通じて愛情なく、有る所の者は野蛮なる嫉悪の情のみ、而して虚偽的博愛を以て之を掩うが如きは、結合的精神の倫理上極めて劣等なる形状也、文学が人生の為めに道徳的糧食及び快楽の源泉たる所以の者は、決して斯る劣等の出情を叫ぶが為めに非ざる也」と、然り予も亦曰わん、彼等の所謂鼓舞激励は、一片博愛的同情あるに非ずして、実に動物的慾情を煽動するに過ぎざる也、是等の文学や我国文子前途の為めに決して賀すべきの者に非ざる也と。

彼等又蓋し謂えらく、我文学や繊巧に失し、優美に失し、華麗に失し、絶て雄大、高遠、悲壮、俊邁の雄篇大作を見ること能わず、故に戦争を咏じ、勇士を謳うの必要ありと、此目的や多少真個文学の為めに忠なるを見る、而して古来不朽の文学が戦争勇士を材とするの多き亦之を知る、然れども彼等が不朽なる所以の者は、彼等が動物的争闘を鼓舞し、賛歎するに在らずして、其真なるに在り、善なるに在り、美なるに在り、而して此高尚の想を行うに曠世の天才を以てせるの故なると知らざる可らず、然り彼古来の雄篇大作とするもの、其題目を取る所、其材を取る所、戦争を必せざる也、戦争の奨励を必せざる也、誰か曰う、国旗を謳えと、誰か曰う祖国を頌せよと、而も見よホーマは単にギリシャの為めに謳わざりし也、シエクスピアは単に英国の為めに語らざりし也、ダンテは単に伊太利の為めに謳わざりし也、ハムレットや、レアや、オセロが不朽の大作たるは其英国の愛国心を激励したるが為に非ず、ホーマの名の尊きは、アキレスの憤怒と凱旋に非ずしてヘクトルの苦悩と死に在り、然り希臘文学の重きを為すは、タイルチアスの散逸せる軍歌にあらずして、其悲劇に於ける同情の深きと思想家の沈思也、然り彼等は国家的ならずして世界的也、一時的にあらずして永久的也、肉情的にあらずして心理的也、殺伐にあらずして大慈悲也、国家の栄誉にあらずして社会人生の光明也、敵人に対する憎悪にあらずし

て隣人に対する同情也、故に能く大なる耳。
　夫れ彼等、雄大、高遠、俊邁、悲壮を求めんとせば、必しも戦争の謳歌に於てす可らざる也、文学としてのバイブルを見よ、法華経を見よ、平和を緯とし博愛を経とす、誰かこれを雄大、高遠ならずというや、杜子美、李白は戦争の惨害を説て生民の平和を希えりき、誰かこれを俊邁、悲壮ならずといふや、予は固より戦争を咏ずる勿れとは言わず、勇士を賛する勿れとは言わず、宇宙の森羅万象は彼等の自由に取て題とし択んで材となすに任ず、戦争も可也、平和も可也、武勇も可也、恋愛も可也、剣戟も可也、牙籌も可也、北京天津も可也、箱根鎌倉も可也、唯虚偽的、煽動的、野蛮的ならずして、真善美たり大慈悲たり、世界的たり、永久的たらんことを期せざる可らず、若し徒らに戦争を奨励し武人に阿媚するを以て能事となさば、我国の文学を亡す者は、世の所謂戦争文学ならんや、然り今や我文壇は百のキップリングを要せずして、却て一のトルストイに渇せる也、作家及び批評家諸子以て如何となすや。

（一九〇〇年九月五日「日本人」第一二二号）

日本主義を論ず

高山樗陰

一個学説の標幟としては其名已に漠然たり。其説くところを聴くに至りては、則ち更に復た甚だ妄、甚だ愚なるに驚く。
　日本主義の発明者は称道すらく。君臣一家は我国体の精華なり。故に国祖及皇宗は日本国民の宗家として無上の崇敬を致すべき所。是故に、日本主義は国祖を崇拝して常に建国の抱負を奉体せんことを務む。日本主義は光明を旨とし、生を尚ぶ。日本主義は平時に在りて武備を怠らず、いよいよ国民的団結を鞏固にせんことを務む。日本主義は世界平和の維持を務め、進みて人類情誼の発達を期す。而して要は、我国建国の精神を発揮し、我国民の大抱負を実現せんとするにありと。
　吾人祖先の賢なる者曽て一薬万病に適するの万能膏を発見したりき。而して今日に於て日本主義を発明したるものは則ち其子孫の賢なるものなり。宜なる哉、其調法なるこ

と亦かの万能膏に譲らざるや。其説くところを見よ。日本主義なるものは、其一個学説を以て、宗教となり、倫理となり、治国の典謨となり、外交の政略となり、軍事の指針となり、農工商業の淵源となり、社会、国家、あらゆる事物、悉く此日本主義の中に包容せらるるにあらずや。蓋し是の如き発明物も其分を守りて、或る程度に止まることを知らば、調法なる一時の効能を奏せざるにもあらざるべしと雖も、この主義の発明者は全く其分を守るを忘れて、之を立てて以て、あらゆる他の宗教倫理を排斥せんとす。これ此主義の妄なる所以愚なる所以なり。

　抑も日本主義なるものは、彼等之を底所より得来れるか。彼等曰、現時のあらゆる倫理説、宗教教義は悉く日本人民の信奉すべきものにあらず。日本人は特殊なる国体と、特殊なる国民発達の歴史とを有す。故に如是国体、如是歴史を有せざる他国に発生したる宗教倫理は、日本人民に適せざるなりと。実にや、然らん。然れども、日本国民が特殊なる国体歴史を有するが如く、他の世界の各国民も亦、各自に特殊なる国体歴史を有せざるか、全世界何れの国民が此二点に於て相同じきものある。支那は支那、英吉利は英吉利、仏蘭西は仏蘭西、普西亜は普西亜、印度は印度、朝鮮は朝鮮として、其国体、其歴史、各々特殊なり、各々格別なり。若し夫れ彼等説くところの如く、此二点に於ける相違は即ち格別なる倫理宗教等を持つべきの理由あらば、是等各国民は亦各々格別なるものを発明せざるべからざるべし。然らば則ち孔子の教は支那に限り、釈迦の教は天竺に限り、基督の教は猶亜太に限り、韓図の説は仏国に限り、歇傑爾の一説は独逸に限り、而して日本主義は発明者の本国たる日本に限りて之を用うべきものならん。然れども此の如き没理的帰結は彼等能く猶お忍んで之を認むるの勇気あるか。人間は何れの国に住するも同じく人間なり。而して此同じ人間の間には善は何処に行くも善なり。悪は何処に到るも悪なり。大本に於て観念、思想の一致を有するの理を以て之を推す。此の如き説は到底確立し、維持し得らるべきにあらざるなり。

　且つや彼等は建国の精神を奉体すと説く。誠に天照皇太神が神孫に諭したまえる、豊葦原瑞穂国は我子孫王たるべきの地なりとの勅語は、やがて日本が万世一系の皇統を奉戴する所以にして、日本臣民と皇室との関係を規する所以の道なれば、日本臣民たるもの宜しく万世に亘りて遵奉すべきところなり。然れども、われは未だ建国の当初に於て日本国民の遵奉すべき特殊なる宗教倫理の宣言せられたるものあるを聞かず。則ち彼等が自ら奉体して以て他の宗教倫理に代えんと説くところの日本主義なるものは全く根拠を有せざるものにして、自家捏造の妄説ならんのみ。

　彼等は又建国の精神を奉体し、之を国民の文化発達の歴史に考えて以て日本主義を称道すと説く。過去の歴史より倫理と宗教とを建立せんとするは、古今如何なる大哲学者も大思想家も未だ曽て知らざりしところ、是れが発明の名

誉は亦彼等に帰せざるを得ず。然れども我は疑う、彼等は如何にして能く之を成し得しかを。歴史は死事実なり。当代人間の思想の化石なり。死事実は黙として語らず化石は自ら自己生活の当時を告げず。科学者が化石を研究するや、既に立てる科学上の智識に憑拠す。人間思想の化石を研究するに於ても若し死事実を死事実として見るのみならば、玉は玉たり、石は石たることの外に、又何物をか告げ得んや。同じく一国の歴史に於ても、世に治乱あり、事に興敗あり、勢に盛衰あり、運に消長あり、民心に淳朴澆薄あり、風俗に義醜良悪あり、而して歴史は自ら其善悪、得失を語らず、只観る人の判断するに任す。而して之を判断する者は歴史自体以外に於て我に得たる或る智識を役することを要す。斯の如くして、歴史は玆に始めて興味ある研究の物体たることを得べし。然るに今は即わち説く者あり曰く、我は現世界に於ける総ての宗教観念総ての倫理観念を排す、而して、これに代るべきもの我に在り、こは歴史より得たるものなりと。夫れ我に研究の標準たるべき観念なくして、歴史を研究するは、これ研究にあらずして、只見るなり。歴史をさながらに見るのみにして、いかで我れに是れより或る智識を感納し得べき。されば歴史的研究に依りて或る智識を得たりといわん者は、必ず亦其の前に於て研究の標準たり、基本なるべき或る観念の存在を否拒して、而かも歴史的研究に依りて智識得たりと称道す。分明に是れ不能の事にして、其所説の互に相否定するは、宛かも彼の矛と盾とを鬻る者の言なり。否、かくの如きものは、実に、誠に、彼の日本主義称道者の所説なり。亦太甚愚ならずや。

建国当初の天皇は宗教家にあらず、倫理学者にあらず政治学者にあらず、外交家にも、実業家にもあらざるに如何で這般諸多のものを説かんや。彼等が称して以て建国の精神と謂うもの、畢竟是れ彼等自家の迷想愚見の特産物ならんのみ。彼等畢竟新粉細工の如来仏に合掌礼拝するの痴童のみ。しかも他人を拉して、一切の信仰を棄てて之に帰依せしめんとするに至りては、亦甚しき悪戯ならずや。

天命これを性と謂い、性に率うこれを道という、則ち唯一の天を頂き、唯一の地上に生れたる人間の道豈両岐あらんや。然り、両岐なし、故に古来地球上に発生したる倫理上の教と人間の徳性とは、多少は広狭浅深の差こそあらめ、悉く相一致するにあらずや。これを此処に施して可ならば何処に施してか可ならざらん。若し不可ならば、何処にてか不可ならざらん。人間の徳性は此の如く相合致するに、何ぞしかく一国特殊の倫理なるものあるべき。

只それ一国政治的情態の異なるに従て、国家と個人との関係に於て徳義上多少の差異を甲国と乙国との間に見るべきは真なり。然れども如何なる種類にもあれ、苟も倫理説と謂われんもの、一国の政治的組織との衝突を教うるは、未だ曽て有らざるなり。其国に生るれば即ち其国を愛するは人間情性の自然なり。豈に特殊なる国体なるが故に乃ち特殊なる倫理説を要するものならんや。

殊に況んや、宗教に至りては、其現世に関する点に於ても、又未来に関する点に於ても絶対に、一国の政治的組織と相関渉するところなきをや。古来信仰に対する太だしき抑圧窘迫が一国の政治上に騒乱革命を惹起したること無きにあらずと雖、是れ宗教の罪にあらず、咎は常に之を招けるものに帰せざるを得ず。若し如是の例を挙げて、以て宗教は一国の政治に害ありと為し、一切の宗教排すべきものとせば、此の如き徒は到底書を焚いて黔首を愚にする嬴政の故智を学ばずんば休まざるべし。

論究し来れば、日本主義なるものは、之を立つる所以の基礎已に彼の如く妄なり、謬なり。而して之を道理に照して考うれば、一国に特殊なる倫理宗教ちょうものの人間に存在すべき理なく、又存立し得べき理無し。到底是れ迷論愚説、一の採るに足り、省りみるに足るものなし。斯の如き浅薄、散漫、雑駁、謬妄の見を立てて、日本主義ちょう誇大、虚矜なる題目の下に、一切の宗教倫理を排破せんとすと声言するに至りては、これを大胆なりと言わば言え、我は寧ろ其愚の及ぶ可からざるに噴飯せんのみ。

然れども、是れ亦怪しむに足らざるなり。尋思すれば這は是れ明治廿七、八年日清戦争の勝後、日本人民が虚栄の夢に溺れたる虚矜心に投じて起りたる発明物なりき。大日本の大の字に満足せずして、大々的ちょう、新熟字を発明し、日本が世界に於ける、一帝国たるの事実に満足せずして、自ら世界の日本ちょう称号を選みて冠を加えたる、当時の人心より生れ出でし産物なりき、大々的ちょう文字、世界之日本ちょう称号が国民の虚矜心を表示する符牒たる外に、何の意義をも有せざるが如く、日本主義なるものも亦、称号の徒らに巍々然たると声言の徒らに堂々乎たるとの外に、其内容に於て毫も秤量すべきの価値を有せざるなり。

噫、日本主義の発明者よ。万能膏をして只万能膏たらしめよ。微痒、擦傷、灸の痕、用いて以て一時の鎮補剤たらしむるは、則ち或は可ならん。以て人間膏肓の疾を治すと称し、神医の薬方を非なりと唱うるに至りては、其自ら量らざるも亦太甚しからずや。何況んや用いて以て未来の生命を贏得すと言うに至りては、人誰れか汝を信ぜん。宗教倫理の世界は神聖なり、汝等の蹂躪を容るさず。速かに去れ。去りて阿那の僻隅に汝等の所謂日本主義を抱きて、其専売特許権に満足して在れや。

（一九〇二年八月刊「無政罪」所収）

暴風に寄するの辞

松岡荒村

暴風起って雲飛揚すとや、げにここちよき歌のしらべやいとも勇ましき風の音かな、来れ大風よあらびあらびて大空よりここに、ここには枯木あり、枯れすすきあり、そもそも又頑迷度す可くもあらぬ旧代の遺物存す、他に雨が吹き折り吹き払う可きもの何ぞ一にして足らんや。自然のそれらはとまれかくまれ、十二軍余の天軍風の如くに虚空より来れ、旧世界の魔風にそだてられて、而かも侚野辺の枯薄の如く、露なく血なく花もなくて、徒に浮世に未練のかげを追う、愚物頑老の消えやらぬこの世は、この死物死に損いを打ち払って、没風世間にせめてものちりはらいをなす可きの要あり、

嗚呼来れ大風大地をゆるがして来れ、来ってかの偏執盲目の老朽の鬼を、すみやかに墳墓という塵溜の中に払込しめよ、

而して春草芳野の曙をむかえなば、そよそよと花にそよいで、胡蝶の夢をやぶる事なく、千里駘蕩として蓬莱の楽をしらべよ。

木村夢弓に与えて現代の所謂円満を呪咀す

松岡荒村

夢弓兄足下、永劫の過去の歴史に、風吹き雨降り大空荒れて、花鳥草露は云うも足らず、巖山時に崩裂し、乾坤或は覆没の恐れありしは是れを聴けど、未だ嘗て之れが為めに真如の玉体につつがありし音ずれを聞かず、天地の風情はなかなかに趣き深くも候かな。

十九日深更の夜気の静寂に、激切の一指を触れて漂渺の微動を漾わし、わが為めに草し給いし水茎のあと、うれしともなつかしとも、繰り返し繰り返し拝読心に銘じ申候。

仰せの如く、近頃我名は喧騒の市井に晒し、狂と呼び痴漢と嘲弄し得々として道義を口にするものの多きを見る。而かもわれの未だ一矢もそれに報ゆるあらざるを見ば、浮世はさこそ我身の云い甲斐なきを思い、意気地なき敗亡を

破れる者として笑うなるべし、されど君よ、市の子が捕えし影はかれらに任せん、それを裂かんも打たんも唾せんも一にかれらの心のまま、われに於て寸毫も何の関するところあらんや。

足下想え、人生はいずれ戦闘の姿なり、われ不肖而かも何すれぞ戦うの力なからん、されど君よ、われかれらを何処の辺にむかえ打つ可き、道義の山か宗教の峯か、花咲き匂う文学の野か、あらずあらず、かれらは未だ我戦闘線内に迫らざるなり、かくて戦うの道しなければ、依然としてわれは平和の殿堂に座す、人間の世の有様も、なかなかに趣深くも候かな。

却説足下よ、われらが戦うべきは匹夫にあらず、匹婦にあらず、将又紛々たる小児輩にあらず、云うをまたずして今永遠の旅の門出にありながら、早くすでに慢心と増長との莚に座し、徒らに治国と太平の楽を調べて激切の想海を緩慢の流れに腐らせんとする、頑迷消極のともがらに候、彼等が口にするところは円満の君子、唱うる所は成熟の思想、而かも自之れを以て己れに任じ、得々として審きの位に安ぜんとす、嗚呼何ぞ幽遠無辺の大天地に対して礼を欠くの甚だしき哉。

足下よ、昔ヘブライの詩人が歌いし如く「この日ことばを彼の日に伝え、此夜智識を彼夜に送り、語らず云わず、其声たとえ聴こえざるも、其響きは全地に洽くその言葉は地のはてにまで及ぶべし過去幾百万年飛ぶが如くに来りしが如く此世は更に又永劫の未来にまでも喘ぐなり、さればこの限り知られぬ遥けき旅に比ぶれば、過去の千年は昨日の如く億万年も一夜の夢の如けん、而してわれらが喘ぎ求むる円満無障の大理想は、この儘未来の際限に光り輝やく大光明の夫れにあらずや、此大光明の宮殿に、万有遂に至り着くまで一世一代幾億世紀の人の子等は、悉く之れ流れに喘ぐ峯の鹿なり、バベルの尖塔が彼太庭に聳え立つまで、犠牲たるべき強大の基礎なり、豈に己れ円満の極致と誤想して早熟早成の境に惰眠を貪ぼるべきものならんや。

然るに見よや現代の学者を義人を宗教家をかれらは自以て先達と称し、学芸技術の淵源と称し、完全無欠純理正当の思想と号し、矢よりも早くまっしぐらに、切窮の奥に喘がんとする大激流の中に立ちて、小癪にも之れに批評を試みんとす、是れもとより大海の怒濤に対して、海沙の堤を築かんとする、さながら児戯に等しと雖も、小成早熟に得々の声を嬉しがる浮世に取りては、なかなかに見脱がし難き影響をなす。

素より心あるものの目より見れば取るに足らぬ一小事ならんも、試みにかの宣教師等が賛成する、所謂日本の伝道者を見よ、多言を要せずして、早くすでに大なる真理を窺うを得ん、足下よ、かの正統派円満思想の近衛兵、宣教師等の旗下により小さく、より正統なる抑も又より生意気なる伝道者あるを見給わずや、洗礼を受けて神学を学び、三年にして伝道者となり、滔々として円満成熟の真理を口に

す、嗚呼沐猴にして冠す何ぞかくも甚だしきや、足下よ、余はすべて米流の小君子を排せんと欲す、かれらは学説教育の進程に堤防を築く者なり、盛春激切の思想を腐らするものなり、新日本の瀾汗たる想界を、山間渓流の間に導きて云うにも足らぬ静寂の一小天地を造らんとす、嗚呼円満の渇仰者にして、無障の大光明に喘ぐ可き身を以て、無礼にも已れ自ら之れに任じ、得々としてラビの如くし、而して其師を凌ぐ能わざる小君子小義人小宗教家を養成して、以て思潮の大運流を妨げんとす、円満成熟の正統者流、嗚呼呪う可く又咀う可き哉。

足下よ、若きものをして小児の指導者たらしめよとは、ジャン・ジャック・ルソー――の名言にあらずや、要するに教ゆるものを求めずして共に遊ぶものを求めたるなり。

吾人は無辺の大天地にあって、永劫に成長す可き嬰児ならずや、何すれぞ、ここに円満の君子を要せん、飽く迄率直腕白にして、大胆に突貫奔逸すべき友をこそ要すれ、小成老衰将に枯死せんとする、軟弱の君子何の要ぞ、足下よ、足下は現代の想界にありて、少くとも病的矛盾撞着の嘲弄を受く可き人なり、シェレーが文壇の悪魔なりしとは、足下が常に語るところ、而も夫子自らも亦た之れを以て目せられつつあるにあらずや。

面白し病的矛盾撞着快く受けよ、現代の文壇に悪魔の称号必ずしも足下の一顧に価せざらん、足下は円満無障の渇仰者なり、而かも今得々として円満成就を叫ぶ、小君子的うろたえ者のやからにあらず、却而彼等の陣頭に突貫して惰眠緩慢の想界を擾乱せんとする謀反気のある大丈夫なり。

足下よ、撞着を恐れ矛盾を怖れ戦慄して早やく円満寂滅を求むるものは卑怯なり、撞着せよ、矛盾せよ、撞着し矛盾し岩に砕け淵に渦巻き、而して百年百難錬確し得たる、足下全身の大精髄を育て出して、永劫の旅程の途の花と咲かせよ、嗚呼足下幸に奮闘せよ、かの自ら円満を口にして奔逸の大想海を賦せんとする、小癪なる小君子を破壊しつくせ永劫無辺の大天地に、無礙清浄の大円満を与えんが為めに。

君よ、哀れなる今の我世の様を見ずや、左も右も前も後も末法の浮世の群鴉ばかり、穢士に飼い行く蟻群のみ、語るに友なく論ぜんに人なし、さては髀肉の嘆に堪えで、足下に縷々の駄言を寄せ、せめて欝勃の余情を漏らす、今や夜ふけて浮世に人の気はいだになく、如意峰頭唯一片の孤月、沈むが如く漂うに似たり、嗚呼天地静寂の夜の色、是れを眺めて我も又吾がこの筆を洗わんと欲す。早々。

ドレフュー大疑獄とエミール・ゾーラ

幸徳秋水

近時世界の耳目を聳動せる仏国ドレフューの大疑獄は軍政が社会人心を腐敗せしむる較著なる例証也。

見よ其裁判の曖昧なる其処分の乱暴なる、其間に起れる流説の奇怪にして醜悪なる、世人をして殆ど仏国の陸軍部内は唯だ悪人と痴漢とを以って充満せらるるかを疑わしめたり。怪しむ勿き也。軍隊の組織は悪人をして其兇暴を逞しくせしむること、他の社会よりも容易にして正義の人物をして痴漢と同様ならしむるの害や、亦他の社会に比して更に大也、何となれば陸軍部内は××の世界なれば也。威権の世界なれば也、階級の世界なれば也。服従の世界なれば也。道理や徳義の此門内に入るを許さざれば也。

蓋し司法権の独立完全ならざる東洋諸国を除くの外は此如き暴横なる裁判、暴横なる宣告は、陸軍部内に非ざるよりは、軍法会議に非ざるよりは、決して見ることを得ざる所也。

然り是実に普通法術の苟も為さざる所也。普通民法刑法の苟も許さざる所也。

而も赳々たる幾万の貔貅、一個の進んでドレフューの為めに、其寃を鳴し以って再審を促す者あらざりき。皆曰く。寧ろ一人の無辜を殺すも陸軍の醜辱を掩蔽するに如かずと。而してエミール・ゾーラは蹶然として起てり。彼が火の如き花の如き大文字は、淋漓たる熱血を仏国四千万の蠢頭に注ぎ来れる也。

当時若しゾーラをして黙して已ましめんか、彼れ仏国の軍人は遂に一語を出すなくしてドレフューの再審は永遠に行われ得ざりしや必せり。彼等の恥なく義なく勇なきは、実に市井の一文士に如かざりき。彼軍人的教練なる者是に於て一毫の価値ある耶。

孔子曰く、自らなして直くんば千万人と雖も我往かんと。此意気精神、唯一文士ゾーラに見て堂々たる軍人に見ざるは何ぞや。

或は曰く、長上に抗するは軍人の為す可らざる事、且つ為すを得ざるの事也。ドレフュー事件の際に於ける仏国軍人の盲従は、未だ以って彼等の道心欠乏を証するに足らずと。果して然る乎。

文士としての兆民先生

幸徳秋水

一

官吏、教師、商人としての兆民先生は、必ずしも企及すべからざる者ではない。議員、新聞記者としての兆民先生も、亦世間其匹を見出すことも出来るであろう。唯り文士としての兆民先生其人に至っては、実に明治当代の最も偉大なるものと言わねばならぬ。

先生、姓は中江、名は篤介、兆民は其号、弘化四年土佐高知に生れ、明治三十五年、五十五歳を以て東京に歿した。

二

先生の文は殆ど神品であった。鬼工であった、予は先生の遺稿に対する毎に、未だ曽て一唱三嘆、造花の才を生ずるの甚だ奇なるに驚かぬことはない。殊に新聞紙の論説の如きは奇想湧くが如く、運筆飛ぶが如く、一気に揮洒し去って多く改竄しなかったに拘らず、字句軒昂して天馬行空の勢いがあった。其一例を示せば、

我日本国の帝室は地球上一種特異の建設物たり。万国の史を閲読するも此の如き建設物は一個も有ること無し。地上の熱度漸く下降し草木漸く萠生し那辺箇辺の流潦中若干原素の偶然相抱合して蠢々然たる肉塊を造出し、日照し風乾かし耳目啓き手足動きて玆に乃ち人類なる者の初て成立せし以来、我日本の帝室は常に現在して一回も跡を斂めたることなし。我日本の帝室は開闢の初より尽未来の末迄縦に引きたる一条の金鉄線なり。載籍以来の昔より今日並に今後迄一行に書き将ち去るべき歴史の本項なり。初生の人類より滴々血液を伝え来れる地球上譜牒の本系なり。之を人と云えば人なり。之を神と云えば神なり。政治学的に人類学的に宇内の最も貴重すべき一大古物なり。上無始に溯りて其以前に物あることなく、此宇内の最も貴重すべき古物をして常に鮮美清麗の新物たらしめ、下無終に延きて其以後の物有ること無からしむること是れ豈我儕日本人民の至願に非ずや。其至願を成就せんと欲せば如何。皇室と内閣と別物たらしむるに在るのみ。

の如きである。東雲新聞、政倫、立憲自由新聞、雑誌「経綸」「百零一」等は実に此種の金玉文字を惜し気もなく撒布した所であった。又著書に於ても飄逸奇突を極めて居る

のは「三酔人経綸問答」の一篇である。此書や先生の人物思想、本領を併せ得て十二分に活躍せしめて居るのみならず、寸鉄人を殺すの警句、冷罵、骨を刺すの妙語、紙上に相踵ぎ、殆ど応接に遑まあらぬのである。

三

併し先生自身は、単に才気に任せて揮洒し去るのに満足しては居なかった。自分が作る所の日々の新聞論説は単に漫言放言であって決して、文章というべき者ではないと言い、予が「三酔人」の文字を歎美するに対しては、彼の書は一時の遊戯文字で甚だ稚気がある。詰らぬ物だ。と謙遜して居た。然り、先生は其気、其才、彼が如きに拘らず、文章に対しては寧ろ頗る忠実謹厳の人であった。

先生は常に曰った。日本の文字は漢字である。日本の文章は漢文崩しである。漢字の用法を知らないで文字の書ける筈はない。飜訳などをするものが、勝手に粗末な熟語を捽えるのは読むに堪えぬ。是等は実に適当な訳語が無いではない。漢文の素養がないので知らないのだ云々。先生は実に仏蘭西学の大家たるのみでなく、亦漢学の大家として諸子百家窺わざるはなかった。西洋から帰って仏学塾を開き子弟を教授して居た後までも、更に岡松甕谷先生の門に入って漢文を作ることを学んで怠らなかったのである。

故に其飜訳でも著作でも、一字一語皆出処があって、決して杜撰なものでは無かった。彼の「維氏美学」の如き、「理学沿革史」の如き飜訳でも、少しも直訳の臭味と硬澁の処とを存しない。文章流暢、意義明瞭で殆ど唐宋の古文を読むが如き思いがある。

抑も芸術の物たる其由て居る所果して、安くに在る哉。蓋し吾人情性皆脳中一種の構造に繋る者にして其庶物の観に於けるや嗜む所あり嗜まざる所有り。而して庶物の形状声音是の如く其れ蕃庶なりと雖も之を要するに二種を出でず。即ち形態は人目を怡ましむる者にして其数万殊なるも竟には線条の相錯われると色采の相雑われるとに外ならず。声音は人耳を怡ましむる者にして其の種は千差万別なるも竟に亦抑揚下緩急疾徐の相調和するに外ならず。

是れ維氏美学の一節である。近時諸種の訳書に比較して見よ。如何に其漢文に老けたる歟が分るではない乎。而して其著「理学鈎玄」は先生が哲学上の用語に就て非常の苦心を費したもので「革命前仏蘭西二世紀事」は其記事文の尤も精采あるものである。而して先生は殊に記事文を重んじた。先生曰く、事を紀して読者をして見るが如くならしむるは至難の業である。若し能く紀事の文に長ずれば往くとして可ならざるなしであると。蓋し岡松先生の教に従ったのである。今先生の記事文の一節を掲げよう。

一日ルソー歩してワンセンヌに赴く。偶ま中路暑に苦み樹下に憩い携うる所の一新聞紙を披いて之を閲す

るに、中に載する有りチシヨンの博士会一文題を発し賞を懸けて能く応ずる者あるを募る。其題に曰く学術技科の進闘せしをば人の心術風俗に於て益有りしと為す乎将た害ありしと為す乎とルーソー之を読みて神気俄に旺盛し、意思頓に激揚し自ら肺腸の一変して別人と成りしを覚え、殆ど飛游して新世界に跳入せしが如し。因て急に鉛筆を執りファブリシュースの一段を草して之を懐にし既にワンセンヌに至りジデローを見るも猶お去気奮湧し血脈狡憤して自ら安んずること能わず。ジデロー一誦して善しと勧めて更に敷演して一論を完結せしむ。ルーソー其言に従う所謂非開化論なり。

而して先生は古今の記事文中、漢文に於ては史記、邦文では「近松」洋文ではヴォルテールの「シヤル・十二世」を激賞して居た。

四

先生の文章は其売れ高より言えば決して偉大なる者ではなかった。先生の多くの著訳書中、其所謂「生前の遺稿」なる「一年有半」及び「続一年有半」が翼なくして飛んだ外は、殆ど売れたという程の者はない。彼の「一年有半」「続一年有半」すらも、若し死に瀕しての著作でなかったならば、アノ十分の一も売れなかったかも知れぬ。

先生の文章は当世に売らんが為めには、寧ろ余りに高過ぎた。先生の文章は曽て世間と伴わなった。曽て世間に媚びなかった。常に世間に一歩を先んじた。先生の文章は先生の至誠至忠の人格の発露であった。是れ先生の文章の常に真気惻々人を動かす所以であって、而も陽春白雪利する者少き所以である。而して単に其文学から言っても、漢文の趣味の十分に解せられない今日に於て、多数人士の愛読する所とならぬは当然である。先生「一年有半」中に、

夫文人の苦心は古人の後に生れ古人開拓の田地の外、別に播種し別に刈穫せんと慾する所の処に存す。韓退之所謂務去陳言戞々乎其難哉とは正に此謂いなり、若し古人の意を踏襲して即ち古人の田地の種穫せば是れ剽盗のみ。李白杜甫韓柳の徒何ぞ曽て古今を毀わん。独り漢文学然るに非ず。英のシエクスピールやミルトンや仏のパスカルやコルネイユや皆別に機軸を出さざる莫し。然らずんば何の尊ぶ可きことか之れ有らん。

記してあるのみならず、平生予に向っても昔し蘇東坡は極力孟子の文を学び、竟に孟子以外に一家を成すに至った。若しお前が私の文を学んで、私の文に似て居る間は私以上に出ることは出来ない。誰でも前人以外に新機軸を出さねばならぬと誨えられた。先生の文章に於けるや、苦心常に此如きものがあった。先生の文は決して売らんがために作るものではなかった。其売れると売れないとは毫も文士として先生の偉大を損するに足らぬのである。

パイオニアーの悪戦

白柳秀湖

自然主義を標榜して起った諸君は、過去一年に亘って可なりに好い戦を戦ったようだ。諸君は此戦によって必ず何等かの新しい経験と、更にそれによって新しい或る力とを得た事と信ずる。

諸君が一つの主義、理想を標榜した、鮮明な旗幟を樹てて進む時に、論敵の多数が諸君の主義、主張の幾分をも了解して居ないで、殆ど標的を逸した征矢を放って、自ら得たりとするものであるという事をしみじみと感じ得た事と信ずる。単に社会の智的水準を代表する大多数の論客が、諸君に対して当ての無い毒矢を放つばかりではない、一世の学者、大家と称せられたる者が斯る多くの場合に於て、此衆愚王の後援者であるという事も諸君は此戦によって尤も好く経験し得たに違いない。されば単に文芸上の問題のみに限らず、政治上、宗教上、社会上凡ての場合に於て一つの新しい主義理想のパイオニアーは、常に斯る社会多数の非理なる圧迫に苦しめられるのである。主義、理想其ものにどれ程の価値があるかは別問題として、此孤独の先導者に石を投げ、市場の塵を浴せかける、旧社会の代表者は何時でも、先導者のいう事だけも正解して居て呉れないのが常である。

故に吾人は其人の主義、主張の内容を理智の度量衡にかけて見る事ばかりを努て、其人の生涯其者の価値を忘れてはならぬ、糞尿を掃除するには誰かが、悪臭を忍んで人の嫌がる事を敢てしなければならない。講堂に立って清潔の演説をする役になるのは、爾んなに困難な事じゃあ無い。爾んなに偉い事じゃあ無い。

イブセンの生涯にも、ゾラの生涯にも、ツルゲネーフの生涯にも、ピストルの硝煙と、匕首の閃光とがつき纏うた。今は知らず、昔、日本の文学者は、恁んな事実をひどく嫌がって、眉を顰めて吾輩文学者の使命は爾んな『卑近な今日の問題』に力を致すのではないというて排斥した時代もあった。けれども好く考えて見ると、清潔の講演は易く、汚穢屋は難しで、誰しも傍ら学校の先生でもして、傍ら文壇の大家と崇められ、社会に固定された習慣、道徳に調和して行った方が、どんなに安楽であるか知れたものではない。けれども一度自分の主義主張を明かにして、社会に対する個人としての自己の位置を深く意識して来た場合には、其処に初めて自分の生涯に対する強い興味と力とが湧いて来る。

自然主義の諸君の近頃の態度は明かにそうだ。娯楽文学や、戯作文学に対して自然主義の旗幟が文壇の一方に掲げられて以来、社会からは随分酷い誤解を受けて非理な攻撃の標的にされた上に、頑迷固陋な官憲の迫害までも受ける事となった。恁う誤解されたり、迫害されたりするに随って、諸君の旧社会に対する地位の自覚が弥よ強められて来る。生涯に対する新しい興味と、底ひしられぬ力とが油然として湧いて来る。

生田葵山君が有司の前にひかれ、地上の権威に対して為したる態度、答解は、吾人の眼から見ると気の毒な程臆病なのであった。吾人のコムラッドにして、其『父母を蹴れ』という論文の為に廿四歳の若冠を以て法廷に起ち、尤も大胆にして、尤も直截なる答解をなしたる青年がある、自然主義の大家諸君にして、若し真に其生涯を愛するならば、其作物に対して少くとも此青年だけの誠実と、力とがあって好いと思う。吾人のコムラッドは諸君の眼から見て、或はあまりに小さい理智の為に囚えられて居る者であるかも知れない。けれども彼等は生涯を愛する、彼等の生涯は諸君の所謂自然主義の生命である。真に力ある作物は、作者の生命其ものでなければならないと云う事は、吾人の久しく唱えた所である。

ゾラの四福音書、ツルゲネーフの四大社会小説、トルストイの『復活』、ゴルキーの『母』之等の晩作が各家従来の諸作に比して純芸術的の価値を失ったものである、何等かの理智に束縛されたものであるという事は、吾人が屢々諸君の口から聞く所である。けれども諸君がもし真に現在の安楽を捨てて、文壇的地位以外、真に自己の生涯に強い強い興味を持つに至ったならば、此点に到着するのが或は自然の径程ではなかろうか。兎角の議論は別として、一寸した官憲の迫害に臆病な態度をとって見たり、露探が殺されたというて愚民の感情に投ずるような語気を漏して見る小説家の口から、剣とピストルと断頭台との間に、パイオニアーとして尤も勇敢な悪戦を続けて来た人の、肺肝の血とも見るべき晩年の大作が、文壇的価値、純芸術的価値というような標準の下に一概に排斥されるのを見ると多少片腹痛い気にもなる。諸君の生涯が諸君の文壇的地位と調和しない間は、換言すれば諸君が依然安逸を欲する以上、自然主義も単に文壇一時の流行たるに止まるであろう。諸君がもう少し地上の権威と戦い、もう少し多数社会と戦うて、真に『我は世界に於てただ孤独なり』と叫ぶに至った時、諸君はもう少し同情ある人となる事が出来るであろうと思う。

古来日本の芸術家は、芸術的の嫉妬心を以て孤独であった。芸壇的地位に対する嫉妬心は実は娯楽主義、戯作主義の文芸が産んだ私生児である。諸君の作物をして諸君の生涯たらしめよ、諸君は再び此私生児を抱くの要はないのだ。諸君は『われ孤独なり』というが好し、大いに好し、されど吾人は諸君が文壇の友の間に於て只孤独なる事を望

まない。
　諸君をして世界に於て只孤独たらしめよ、社会に於て只孤独たらしめよ。
　敬愛する自然派の諸君よ、吾人は諸君が勇敢なる生涯の建設者にして、大胆なる社会のパイオニアーたらん事を望む。

山上憶良が貧窮問答の歌を読む

松岡荒村

　貧窮問答の歌は万葉集中の雄篇にして、作者は即ち山上憶良卿なり、卿の歌の彼集中にあるは、只其晩年の作のみと聞けり、されどひと葉の桐のおとないにも、全き秋の消息を窺うに足れりとすれば、吾人は其僅少の者より推して、思想道念二つながらに高邁なる詩人の面影を想見するを得るなり。
　史に依れば、彼が一生は多くは、地方官たりし如く、漂浪流転は其生涯の姿に似たり、而して此の間もみにもんで、磨き出せし特種の偉彩は、人情の奥を貫く事極めて深く、社会の事情を写し来って飽くまで切実なる作物の表に輝き出でぬ、蓋し其境遇の変遷と地位とは一は以て人情の妙機を了し、他は以て益々社会に接近するの時機を与えられ、他の凡々たる詩人輩が、徒らに月と山と杯（さかづき）と迷信とを歌う間に、独彼れは人情の道歌を編み、社会の根底に突入して痛く其感慨をもらしたるが故に、我文学史は千有余年の昔に於て、すでにすでに社会主義詩人をもてるにあらずやと思わしむるに到れり。而して今ここに諸君と共に誦せんとする貧窮問答の歌は、天平中彼遠く、筑前の守たりし時、五穀実らず四民窮するの状を親しく見て、満腔悲歌を歌うたる大作、希くは天下の惰眠を打破ることを得んか。

　　貧窮問答の歌

　風交り雨降る夜の、雨交り雪の降る夜は、為べもなく寒くしあれば堅塩を取り綴ろいし、糟湯酒（かすゆざけ）うちすすろいて、咳（しはぶ）かい、鼻びしびしにしかとあらぬ鬚かきなでて、我をおきて人はあらじと誇ろえど寒くしあれば麻衾（あさぶすま）引かかぶり布肩衣（ぬのかたぎぬ）ありのことでと、着そえども、寒き夜すらを、我よりも貧しき人の、父母は飢え寒からん、妻子（めこ）どもは乞いてなくらん、此時はいかにしつつか汝が世を渡る。

　こは此歌の上半なるが、先ず冒頭に於て、風交り雨降る夜、雨交り雪の降る夜の寒気まことに剣の如く、骨肉を貫いて忍び難きをあらわし、次に此寒き夜に鼻びしびしにうちかみながら、塩を肴に、酒にもあらぬ酒の糟に湯を注い

で、僅に暖を希いつつ、貧乏慄いにふるいわななき、麻布団布肩衣の類まで、苟も其もち物の一切を取り重ねても尚堪え難き憶良自身の窮状を歌えり。

嗚呼山上筑前守、固よりしかく高官にあらずとするも一地方の長官にあらずや、而も其寒気凛烈の夜にあらずとする外外酒は白湯を交えたる糟酒の外、冬の夜に麻肩衣を被る外他に何物の蓄えもあらず、何ぞ夫れ赤貧の洗うが如くにして、清廉の気は彼明月にも似たらずや、吾人は現代の俗吏が、徒らに飯み徒らに食い、或は良民は虐げ、風教を破りてまでも己れ一人飽食暖衣せんとする陋醜が、滔々として朝野に漲れるを見て、あわれ何物かの強大なる宣告が、彼等の呼吸に止まれと命ずる日の寸時も早く来らざるかを思うものなり。

人々よ、再び我万葉の詩人に帰れ、彼はしかく貧窮の身なりき、然れども清廉さながら明月の如き彼は、座して戸祿を貪らんとする今日の俗吏の如き陋劣の徒にあらず、加うるに彼は優しき、詩人なりき、而してこの善良なる地方官の心と詩人の情とは、徒らに自己周辺にてのみ執着苦悶する事なく、電影一度折れて、一瞬に他の一角を突くが如く、其哀憐の心と撫育のまなざしとは、直に領土の民に走れり。

回顧せよ、時は厳冬、天下は四民困窮の時饑寒の苦み、げに堪ゆべくもあらざりしか、憶良が塩、憶良が酒、麻肩衣はもとより貧窮の姿なれども、彼はかく自己の落魄を歌い来って、更に取り出でて着るものもなき彼よりもまずしき人の身の上を憂い、

之れよりも賤しき人々の、父母は飢えさむからん、妻子どもは乞いてなくらん、此時は如何にしつつか汝が世を渡る。

と、哀憐同情の調べを駆って、食うに物なく、衣るにものなく、父母は飢え妻子は、物を乞うて泣くの惨状を哀れみ、深き愁いに破れんばかりの胸中を歌いたるところ、地方官として、詩人として、げに一指の指す可き点も見出ざぬ哉。

敢てすすむ漸死せよ当代の俗吏、渡良瀬の畔りに其同胞は飢えて死しても、工場の烟りに幾百の弱者は消えて失するも、尚汲々として、一身の安定政権の争奪をのみ事とする売国の狡奴汝等果して塩をかじりて天下の憂いを憂とするの心あるか、憶良はまことになつかしき民の牧者のやさしみを備えき。

かくて吾人は今や歌の上半を歌い終りつつ更に其後半に移り行いて、一層激烈なる彼の思想を味わんとするなり。さても、斯くの如く痛快なる同情の疑問を、民衆の上に下し置きて、提げ来れる後半の答えは何？　曰く、社会の下層に欝勃として鬱積し居たる痛恨の悲鳴ぞこれ、

天地は広しといえど、あが為は狭くやなりぬる、
日月は明しといえど、あが為はてりやたまわぬ、
人皆か我のみや燃る、わくらはに人とはあるを、

人並に我もなれるを、わたもなき布かたぎぬの、
海松のごとわわけさがれる、かがふのみ肩に打かけ、
伏菴の曲菴のうちに、直土にわらときしきて、
父母は枕のかたに、妻子どもは足のほとりに、
囲みいて憂えさまよい、竈には烟ふきたてず、
甑には蜘蛛の巣かきて、飯かしぐ事も忘れて、
鵺鳥の喉よひなるに、いとのきて短かきものを、
端截といえるが如く、笞とる里長がこえは、
寝屋戸まで来立ちよばいぬ、かくばかり為べなきものか、
世の中のみち、

尽せるかな天地は広しといえど、日月は明しと雖、残忍の人鬼跋扈し、横暴の徒充満せる不完全なる世の中に於ては、地位なく権威なく富なく飾りなき貧窮の良民は、日夜に領土を狭くせられ、圧屈せられ侮辱せられて、日月の光りを仰ぐに力なかんとす、嗚呼姦悪の世、陋醜朝野に雲をなして、世道を乱し民衆を苦しむるは、古今一徹変ぜざるか、憶良がここに歌いたる、欝勃のどよみ生活の悲鳴は、今尚明治聖代といふに、忠君愛国の君子全土に満てりと伝え聞くに、市町村落到るところに繰り返され、さては只一詩人文客にのみ之を委ねず、民衆各々相率いて、大に叫ばんとするの傾きを見る、叫べ大にわれらの主張を。まことや憶良が云える如く、かく耻多く苦しみ多く、狭き世の中暗き世界に、生血と脂にしみひたりつつ生くるものは、万人然るか将われのみか、こは最要の疑問にして痛快なる解決をせまらざるところ、而してわれらの詩人が、腹一杯に其窮迫をもらすや否や、引続いて、

人みなかわれのみやしかる、

と簡結直截の一句に、民衆が目ざす可き彼方を指し示したるに到りては、社会主義者詩人の意気、今将に九天に迄達せんとするを見るなり。

起てよ、古今東西の我々ともがら、無意義の暴威に圧せられつつ暴戻の徒の夢やすからしめんにも何日までぞや、恐れの迷霧盲従の雲を排して奮起せよ、われらの天地はいと狭く、われらの日月は光り暗きに、他の高楼の欄干の風に、狂喜の声は聞えざるか、綺羅は旭日に輝かざるか、見よ、暴戻の世は、残忍の強者は、われらが依って以て生き、依て以て楽しむ可き物を奪うて、放蕩逸楽の為め、酒池肉林にまきちらしつつあるにあらずや、刻め、此状態を深くわれらの骨髄の髄に。

而して更に一句を読め、

わくらはに人とはあるを、人なみに我もなれるを、

一度前の単句を読みて、徐ろに眦を転じたるものは、此句の来るをまち兼ねやすらん。わくらはにとは、会々にの古語なる可く、されば此意はわれら会々人とうまれて、人なみに自由平等、何の隔てもある可き筈のものにあらず、然るに現在社会の状態は、已に詩人が歌える如く、貧するは我等のみなり、不平等、不自由、不公平、上下の懸隔は天地も只ならぬばかりにして、一国の財を空にしても、尚一

個の栄華に捧げん事を強うるの徒、学術や真理や押しつぶしても只管に権威のもとに、降らんとするやからのみさかえ、他は皆挙げて「綿もなき布肩衣の海草(みる)の如くにボロボロになりたるを肩にかけ、伏庵のまげ庵の、破れ戸に朽ちたるむしろ引すだし、しとしとと湿り勝なる只の土間に、梅雨の候も極寒の時も、せ給う其父母は枕辺に、飢寒に枯れし妻や子は足の方に打倒れて、夢や現の夜も昼も、憂い悲しみて寸時の楽しみを受くる日もなき」惨状、熱烈の情緒、とみにも高じ易き詩人の胸に打ちたる事如何ばかりなりけん。

将に一篇を結ばんとするや、ここに全く掾大の筆力を尽して、

いとのきて短かきものを、端きるといえるが如く、笞(しもと)とる里長がこえは、寝屋戸まで来立ちよばいぬ、かくばかりすべなきものか世の中のみち、

と筆を納めぬ、世に所謂持てるものは益々加えられ、もたざるものは其持物をも失うに到るという如く、かく貧困の血になく民を、俗吏は強慾非道の虎の威をかり、少しの事の行き違いにも暴力を以て之を虐げ、笞もて打たたく様の思うにだにも堪え難きに、まして寝戸をもれて、かすけき悲鳴の来れるを聞きし詩人の胸中如何なりけん、只一句「かくばかりすべなきものか、世の中のみち」と長大嘆息を洩らすと共に、

「世の中をうしとやさしと思えども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」

いずれこの土に住まねばならぬ人の身の此圧制と横暴は遂にまぬがる可くもあらぬ悲運を泣いて、此長編の悲歌は終りぬ。

これを誦して、社会を見よ、社会を見よ、一度自己を省みて而して眼を他方に転ぜよ、憶良が歌の、活画の如く汝の胸中に躍れるを見るらん、

希くは大に自覚するところあれ、かくの如く、山上憶良がかかる実情を叙し来る筆路の、如何にも切実にして、緻密なるを味い尽して、徐ろに其面影を呼び出し来れば、古代に於ける、沈痛真面目なる一個吾党の大詩人を思い寄するのやむなきに至らん、思い見よ彼は地方の一官吏なり、其今日の習に推せば、阿諛弁佞、日夜に夫れを事として只管其食禄に放れん事を恐れ、かの渡良瀬の窮迫も調査に事を左右にするが如く、民情も風教も、決して彼等の顧るところにあらざる如くなれど、憶良が高潔なる道念は、一切の恐れと一切の迫害を四辺に踏破し、以て其天職を全うせんとし、さては身の官籍にあるをも知らざる如く、此弾劾の悲歌を編んで、特に終りに、山上憶良頓首と記入しあるを見れば、こは其あまりに窮迫の様なるを憐み、且は俗吏の横暴を録して、時の大宰の長官か、或は深く九重の奥に奉れるものたるや、疑を納れず、之を現代の小役人等が、社会の事情を密閉して、聖上の眼をおおいまつらんとし、又は社会主義思想の伝播を恐れ、警官までも騒ぎ廻るの醜

体寧ろ滑稽なるに比し、其意気の盛なる、其良民を撫育せる心情、二つながら雲泥の差あるは論をまたず、実に我文学史上、而かも多く似て非なる詩人の中に、この大篇を紹介するを得るは吾人の大に以て誇りとなすところ、希くば今日宮中に出入りする、御歌所の諸大人たるもの、徒らに聖上をして月と花とに、歌わしめ奉らず、其奉講の時に於て、御都合をのみ謀らずして、日本古代に於ける詩歌精神の神髄なるものを献ぜよ、然らば此抹殺す可らざる、万葉集の雄篇を如何にして、講じ奉らんとするか、頑迷の徒よ、阿諛の輩よ、汝の知らざるうちに、汝等の育たざるうちに、汝の祖先は吾人と同様の声をふるいあげて、大に汝等の没道を弾劾しつつありけるを、

　識れよ甞ては渡良瀬の哀歌を禁じ、今又吾人を圧せんとする者よ、爾等果して、故人憶良が骸をして、万葉集中此歌を取り除くの英断を敢て仕得るか、愚なり、愚なり。

（一九〇三年八月）

時代閉塞の現状

（強権、純粋自然主義の最後及び明日の考察）

石川啄木

一

　数日前本欄（東京朝日新聞の文芸欄）に出た「自己主張の思想としての自然主義」と題する魚住氏の論文は、今日に於ける我々日本の青年の思索的生活の半面――閑却されている半面を比較的明瞭に指摘した点に於て、注意を値するものであった。蓋し我々が一概に自然主義という名の下に呼んで来た所の思潮には、最初からして幾多の矛盾が雑然として混在していたに拘らず、今日まで未だ何等の厳密なる検覈がそれに対して加えられずにいるのである。彼等の両方――所謂自然主義者も、早くから此矛盾を或程度までに感知していたに拘わらず、共に其「自然主義」という名を最初から余りにオオソライズして考えていた為に、此矛盾を根柢まで深く解剖し、検覈する事を、そうしてそれ

が彼等の確執を最も早く解決するものなる事を忘れていたのである。斯くて此「主義」は既に五年の間間断なき論争を続けられて来たに拘らず、今日猶其最も一般的なる定義をさえ与えられずにいるのみならず、事実に於て既に純粋自然主義が其理論上の最後を告げているに拘らず、同じ名の下に繰返さるる全く別な主張と、それに対する無用の反駁とが、其熱心を失った状態を以て何時までも継続されている。そうして凡て此等の混乱の渦中に在って、今や我々の多くは其心内に於て自己分裂のいたましき悲劇に際会しているのである。思想の中心を失っているのである。

　自己主張的傾向が、数年前我々が其新しき思索的生活を始めた当初からして、一方それと矛盾する科学的、運命論的、自己否定的傾向（純粋自然主義）と結合していた事は事実である。そうしてこれは屢後者の一つの属性の如く取扱われて来たに拘らず、近来（純粋自然主義が彼の観照論に於て実人生に対する態度を一決して以来）の傾向は、漸く両者の間の溝渠の遂に越ゆべからざるを示している。此意味に於て、魚住氏の指摘は能く其時を得たものというべきである。然し我々は、それと共に或重大なる誤謬が彼の論文に含まれているのを看過することが出来ない。それは、論者が其指摘を一の議論として発表する為に――「自己主張の思想としての自然主義」を説く為に、我々に向って一の虚偽を強要している事である。相矛盾せる両傾向の不思議なる五年間の共棲を我々に理解させる為に、其処に論者が自分勝手に一つの動機を捏造している事である。即ち、其共棲が全く両者共通の怨敵たるオオソリテイ――国家というものに対抗する為に政略的に行われた結婚であるとしている事である。

　それが明白なる誤謬、寧ろ明白なる虚偽である事は、此処に詳しく述べるまでもない。我々日本の青年は未だ嘗て彼の強権に対して何等の確執をも醸した事が無いのである。従って国家が我々に取って怨敵となるべき機会も未だ嘗て無かったのである。そうして此処に我々が論者の不注意に対して是正を試みるのは、蓋し、今日の我々にとって一つの新しい悲しみでなければならぬ。何故なれば、それは実に、我々自身が現在に於て有っている理解の猶極めて不徹底の状態に在る事、及び我々の今日及び今日までの境遇が彼の強権を敵とし得る境遇の不幸よりも更に一層不幸なものである事を自ら承認する所以であるからである。

　今日我々の中誰でも先ず心を鎮めて、彼の強権と我々自身との関係を考えて見るならば、必ず其処に予想外に大きい疎隔（不和ではない）の横たわっている事を発見して驚くに違いない。実に彼の日本の総ての女子が、明治新社会の形成を全く男子の手に委ねた結果として、過去四十年の間一に男子の奴隷として規定、訓練され（法規の上にも、教育の上にも、将又実際の家庭の上にも）、しかもそれに満足――少くともそれに抗弁する理由を知らずにいる如く、我々青年も亦同じ理由によって、総て国家に就いての

問題に於ては（それが今日の問題であろうと、我々自身の時代たる明日の問題であろうと）、全く父兄の手に一任しているのである。これ我々自身の希望、若くは便宜によるか、父兄の希望、便宜によるか、或は又両者の共に意識せざる他の原因によるかは別として、兎も角も以上の状態は事実である。国家という問題が我々の脳裡に入って来るのは、ただそれが我々の個人的利害に関係する時だけである。そうしてそれが過ぎてしまえば、再び他人同志になるのである。

二

無論思想上の事は、必ずしも特殊の接触、特殊の機会によってのみ発生するものではない。我々青年は誰しも其或時期に於て徴兵検査の為に非常な危惧を感じている。又総ての青年の権利たる教育が其一部分――富有なる父兄を有った一部分だけの特権となり、更にそれが無法なる試験制度の為に更に又約三分の一だけに限られている事実や、国民の最大多数の食事を制限している高率の租税の費途なども目撃している。凡そ此等の極く普通な現象も、我々をして彼の強権に対する自由討究を始めしむる動機たる性質は有っているに違いない。然り、寧ろ本来に於ては我々は、已に業に其自由討究を始めているべき筈なのである。にも拘らず実際に於ては、幸か不幸か我々の理解はまだ其処まで進んでいない。そうして其処には日本人特有の或理論が常に働いている。

しかも今日我々が父兄に対して注意せねばならぬ点が其処に存するのである。蓋し其論理は我々の父兄の手に在る間は其国家を保護し、発達さする最重要の武器なるに拘らず、一度我々青年の手に移されるに及んで、全く何人も予期しなかった結論に到達しているのである。「国家は強大でなければならぬ。我々は夫を阻害すべき何等の理由も有っていない。但し我々だけはそれにお手伝いするのは御免だ！」これ実に今日比較的教養ある殆ど総ての青年が国家と他人たる境遇に於て有ち得る愛国心の全体ではないか。そうして此結論は、特に実業界などに志す一部の青年の間には、更に一層明晰になっている。曰く、「国家は帝国主義で以て日に増し強大になって行く。誠に結構な事だ。だから我々もよろしくその真似をしなければならぬ。正義だの、人道だのという事にはお構いなしに一生懸命儲けなければならぬ。国の為なんて考える暇があるものか！」

彼の早くから我々の間に竄入している哲学的虚無主義の如きも、亦此愛国心の一歩だけ進歩したものである事は言うまでもない。それは一見彼の強権を敵としているようであるけれども、そうではない。寧ろ当然敵とすべき者に服従した結果なのである。彼等は実に一切の人間の活動を白眼を以て見る如く、強権の存在に対しても亦全く没交渉なのである――それだけ絶望的なのである。

かくて魚住氏の所謂共通の怨敵が実際に於て存在しない

事は明らかになった。無論それは、彼の敵が敵たる性質を有っていないという事でない。我々がそれを敵にしていないという事である。そうして此結合（矛盾せる両思想の）は、寧ろそういう外部的原因からではなく、実に此両思想の対立が認められた最初から今日に至る迄の間、両者が共に敵を有たなかったという事に、原因しているのである。（後段参照）

　魚住氏は更に同じ誤謬から、自然主義者の或人々が嘗て其主義と国家主義との間に或妥協を試みたのを見て、「不徹底」だと咎めている。私は今論者の心持だけは充分了解することが出来る。然し既に国家が今日まで我々の敵ではなかった以上、また自然主義という言葉の内容たる思想の中心が何処にあるか解らない状態にある以上、何を標準として我々はしかく軽々しく不徹底呼ばわりをする事が出来よう。そうして又其不徹底が、たとい論者の所謂自己主張の思想から言っては不徹底であるにしても、自然主義としての不徹底では必ずしも無いのである。

　すべて此等の誤謬は、論者が既に自然主義という名に含まるる相矛盾する傾向を指摘して置きながら、猶且それに対して厳密なる検覈を加えずにいる所から来ているのである。一切の近代的傾向を自然主義という名によって呼ぼうとする笑うべき「羅馬帝国」的妄想から来ているのである。そうして此無定見は、実は、今日自然主義という名を口にする殆んど総ての人の無定見なのである。

三

　無論自然主義の定義は、少くとも日本に於ては、未だ定まっていない。従って我々は各々其欲する時、欲する処に勝手に此名を使用しても、何処からも咎められる心配は無い。然しそれにしても思慮ある人はそう言う事はしない筈である。同じ町内に同じ名の人が五人も十人も有った時、それによって我々の感ずる不便は何れだけであるか。其不便からだけでも、我々は今我々の思想其者を統一すると共に、又其名にも整理を加える必要があるのである。

　見よ、花袋氏、藤村氏、天渓氏、抱月氏、泡鳴氏、白鳥氏、今は忘られているが風葉氏、青果氏、其他——すべて此等の人は皆斉しく自然主義者なのである。そうして其各各の間には、今日既に其肩書以外には殆ど全く共通した点が見出し難いのである。無論同主義者だからと言って、必ずしも同じ事を書き、同じ事を論じなければならぬという理由はない。それならば我々は、白鳥氏対藤村氏、泡鳴氏対抱月氏の如く、人生に対する態度までが全く相違している事実を如何に説明すればよいのであるか。尤も此等の人の名は既に半ば歴史的に固定しているのであるから仕方が無いとしても、我々は更に、現実暴露、無解決、平面描写、劃一線の態度等の言葉によって表わされた科学的、運命論的、静止的、自己否定的の内容が、其後漸く、第一義慾と

か、人生批評とか、主観の権威とか、自然主義中の浪漫的分子とかいう言葉によって表さるる活動的、自己主張的の内容に変って来た事や、荷風氏が自然主義者によって推讃の辞を贈られた事や、今度また「自己主張の思想としての自然主義」という論文を読まされた事などを、どういう手続を以て承認すれば可いのであるか。其等の矛盾は、啻に一見して矛盾に見える許りでなく、見れば見る程何処迄も矛盾しているのである。かくて今や「自然主義」という言葉は、刻一刻に身体も顔も変って来て、全く一個のスフィンクスに成っている。「自然主義とは何ぞや？ 其中心は何処に在りや？」斯く我々が問を発する時、彼等の中一人でも起ってそれに答え得る者があるか。否、彼等は一様に起って答えるに違いない、全く別々な答を。

更に此混雑は彼等の間のみに止まらないのである。今日の文壇には彼等の外に別に、自然主義者という名を肯じない人達がある。然し其等の人達と彼等との間には抑も何れだけの相違が有るのか。一例を挙げるならば、近き過去に於て自然主義者から攻撃を享けた享楽主義と観照論当時の自然主義との間に、一方が稍贅沢で他方が稍つつましやかだという以外に、何れだけの間隔が有るだろうか。新浪漫主義を唱える人と主観の苦悶を説く自然主義者との心境に何れだけの扞格が有るだろうか。淫売屋から出て来る自然主義者の顔と女郎屋から出て来る芸術至上主義者の顔と其表れている醜悪の表情に何等かの高下が有るだろうか。少し例は違うが、小説『放浪』に描かれたる肉霊合致の全我的活動なるものは、其論理と表象の方が新しくなった外に嘗て本能満足主義という名の下に考量されたものと何れだけ違っているだろうか。

魚住氏は此一見収攬し難き混乱の状態に対して、極めて都合の好い解釈を与えている。曰く、「此の奇なる結合、(自己主張の思想とデターミニスチックの思想の)名が自然主義である」と。蓋しこれ此状態に対する最も都合の好い、且最も気の利いた解釈である。然し我々は覚悟しなければならぬ。此解釈を承認する上は、更に或驚く可き大罪を犯さねばならぬという事を。何故なれば、人間の思想は、それが人間自体に関するものなる限り、必ず何等かの意味に於て自己主張的、自己否定的の二者を出ずることが出来ないのである。即ち、若し我々が今論者の言を承認すれば、今後永久に一切の人間思想に対して、「自然主義」という冠詞を附けて呼ばねばならなくなるのである。

此論者の誤謬は、自然主義発生当時に立帰って考えれば一層明瞭である。自然主義と称えらるる自己否定的の傾向は、誰も知る如く日露戦争以後に於て初めて徐々に起って来たものであるに拘らず、一方はそれよりもずっと以前――十年以前から在ったのである。新しき名は新しく起った者に与えらるべきであろうか、将又それと前から在った者との結合に与えらるべきであろうか。そうして此結合は、前にも言った如く、両者共敵を有たなかった（一方は

敵を有つべき性質のものでなく、一方は敵を有っていなかった）事に起因していたのである。別の見方をすれば、両者の経済的状態の一時的共通（一方は理想を有つべき性質のものではなく、一方は理想を失っていた）に起因しているのである。そうして更に詳しく言えば、純粋自然主義は実に反省の形に於て他の一方から分化したものであったのである。

かくて此結合の結果は我々の今日迄見て来た如くである。初めは両者共仲好く暮していた。それが、純粋自然主義にあっては単に見、而して承認するだけの事を、其同棲者が無遠慮にも、行い、且つ主張せんとするようになって、其処に此不思議なる夫婦は最初の、而して最終の夫婦喧嘩を始めたのである。実行と観照との問題がそれである。そうして其論争によって、純粋自然主義が其最初から限定されている劃一線の態度を正確に決定し、其理論上の最後を告げて、此処に結合は全く内部に於て断絶してしまっているのである。

四

斯くて今や我々には、自己主張の強烈な欲求が残っているのみである。自然主義発生当時と同じく、今猶理想を失い、方向を失い出口を失った状態に於て、長い間鬱積して来た其自身の力を独りで持余しているのである。既に断絶している純粋自然主義との結合を今猶意識しかねている事や、其他すべて今日の我々青年が有っている内訌的、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき状態を極めて明瞭に語っている。――そうしてこれは実に「時代閉塞」の結果なのである。

見よ、我々は今何処に我々の進むべき路を見出し得るか。此処に一人の青年が有って教育家たらんとしているとする。彼は教育とは、時代が其一切の所有を提供して次の時代の為にする犠牲だという事を知っている。然も今日に於ては教育はただ其「今日」に必要なる人物を養成する所以に過ぎない。そうして彼が、教育家として為し得る仕事は、リーダーの一から五までを一生繰返すか、或は其他の学科の何れも極く初歩のところを毎日々々死ぬまで講義する丈の事である。若しそれ以外の事をなさんとすれば、彼はもう教育界にいる事が出来ないのである。又一人の青年があって何等か重要なる発明を為さんとしているとする。しかも今日に於ては、一切の発明は実に一切の労力と共に全く無価値である――資本という不思議な勢力の援助を得ない限りは。

時代閉塞の現状は啻にそれら個々の問題に止まらないのである。今日我々の父兄は、大体に於て一般学生の気風が着実になったと言って喜んでいる。しかも其着実とは単に今日の学生のすべてが其在学時代から奉職口の心配をしなければならなくなったという事ではないか。そうしてそう

着実になっているに拘らず、毎年何百という官私大学卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にごろごろしているではないか。しかも彼等はまだまだ幸福な方である。前にも言った如く、彼等に何十倍、何百倍する多数の青年は、其教育を享ける権利を中途半端で奪われてしまうではないか。中途半端の教育は其人の一生を中途半端にする。彼等は実に其生涯の勤勉努力を以てしても猶且三十円以上の月給を取る事が許されないのである。無論彼等はそれに満足する筈がない。かくて日本には今「遊民」という不思議な階級が漸次其数を増しつつある。今やどんな僻村へ行っても三人か五人の中学卒業者がいる。そうして、彼等の事業は、実に、父兄の財産を食い減らす事と無駄話をする事だけである。

我々青年を囲繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなった。強権の勢力は普く国内に行亘っている。現代社会組織は其隅々まで発達している。――そうして其発達が最早完成に近い程度まで進んでいる事は、其制度の有する欠陥の日一日明白になっている事によって知ることが出来る。戦争とか豊作とか饑饉とか、すべて或偶然の出来事の発生するでなければ振興する見込の無い一般経済界の状態は何を語るか。財産と共に道徳心をも失った貧民と売淫婦との急激なる増加は何を語るか。将又今日我邦に於て、其法律の規定している罪人の数が驚くべき勢いを以て増して来た結果、遂に見す見す其国法の適用を一部に於て中止せねばならなくなっている事実(微罪不検挙の事実、東京並びに各都市に於ける無数の売淫婦が拘禁する場所が無い為に半公認の状態にある事実)は何を語るか。

斯くの如き時代閉塞の現状に於て、我々の最も急進的な人達が、如何なる方面に其「自己」を主張しているかは既に読者の知る如くである。実に彼等は、抑えても抑えても抑えきれぬ自己其者の圧迫に堪えかねて、彼等の入れられている箱の最も板の薄い処、若くは空隙(現代社会組織の欠陥)に向って全く盲目的に突進している。今日の小説や詩や歌の殆どすべてが女郎買、淫売買、乃至野合、姦通の記録であるのは決して偶然ではない。しかも我々の父兄にはこれを攻撃する権利はないのである。何故なれば、すべて此等は国法によって公認、若くは半ば公認されている所ではないか。

そうして又我々の一部は、「未来」を奪われたる現状に対して、不思議なる方法によって其敬意と服従とを表している。元祿時代に対する回顧がそれである。見よ、彼等の亡国的感情が其祖先が一度遭遇した時代閉塞の状態に対する同感と思慕とによって、如何に遺憾なく其美しさを発揮しているかを。

斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起って

先ず此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察――我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。

五

明日の考察！　これ実に我々が今日に於て為すべき唯一である。そうして又総てである。

その考察が、如何なる方面に如何にして始めらるべきであるか、それは無論人々各自の自由である。然し此際に於て、我々青年が過去に於て如何に其「自己」を主張し、如何にそれを失敗して来たかを考えて見れば、大体に於て我我の今後の方向が予測されぬでもない。

蓋し、我々明治の青年が、全く其父兄の手によって造り出された明治新社会の完成の為に有用な人物となるべく教育されて来た間に、別に青年自体の権利を認識し、自発的に自己を主張し始めたのは、誰も知る如く、日清戦争の結果によって国民全体が其国民的自覚の勃興を示してから間もなくの事であった。既に自然主義運動の先蹤として一部の間に認められている如く、樗牛の個人主義が即ち其第一声であった。（そうして其際に於ても、我々はまだ彼の既成強権に対して第二者たる意識を持ち得なかった。樗牛は後年彼の友人が自然主義と国家的観念との間に妥協を試みた如く、其日蓮論の中に彼の主義対既成強権の圧制結婚を企てている。）

樗牛の個人主義の破滅の原因は、彼の思想それ自身の中にあった事は言うまでもない。即ち彼には、人間の偉大に関する伝習的迷信が極めて多量に含まれていたと共に、一切の「既成」と青年との間の関係に対する理解が遥かに局限的（日露戦争以前に於ける日本人の精神的活動があらゆる方面に於て局限的であった如く）であった。そうして其思想が魔語の如く（彼がニイチェを評した言葉を借りて言えば）当時の青年を動かしたに拘らず、彼が未来の一設計者たるニイチェから分れて、其迷信の偶像を日蓮という過去の人間に発見した時、「未来の権利」たる青年の心は、彼の永眠を待つまでもなく、早く既に彼を離れ始めたのである。

この失敗は何を我々に語っているか。一切の「既成」を其儘にして置いて、その中に自力を以て我々が天地を新に建設するという事は全く不可能だという事である。斯くて我々は期せずして第二の経験――宗教的欲求の時代に移った。それは其当時に於ては前者の反動として認められた。個人意識の勃興が自ら其跳梁に堪えられなくなったのだと批評された。然しそれは正鵠を得ていない。何故なれば其処にはただ方法と目的の場所との差違が有るのみである。自力によって既成の中に自己を主張せんとしたのが、他力によって既成の外に同じ事を成さんとしたまでである。そ

うして此第二の経験も見事に失敗した。我々は彼の純粋にて且つ美しき感情を以て語られた梁川の異常なる宗教的実験の報告を読んで、其遠神清浄なる心境に対して限りなき希求憧憬の情を走らせながらも、又常に、彼が一個の肺病患者であるという事実を忘れなかった。何時からとなく我我の心にまぎれ込んでいた「科学」の石の重みは、遂に我我をして九皐の天に飛翔する事を許さなかったのである。

第三の経験は言うまでもなく純粋自然主義との結合時代である。此時代には前の時代に於て我々の敵であった科学は却って我々の味方であった。そうして此経験は、前の二つの経験にも増して重大なる教訓を我々に与えている。それは外ではない。「一切の美しき理想は皆虚偽である！」

かくて我々の今後の方針は、以上三次の経験によって略限定されているのである。即ち我々の理想は最早「善」や「美」に対する空想である訳はない。一切の空想を峻拒して、其処に残る唯一つの真実――「必要」！ これ実に未来に向って求むべき一切である。我々は今最も厳密に、大胆に、自由に「今日」を研究して、其処に我々自身にとっての「明日」の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である。

更に、既に我々が我々の理想を発見した時に於て、それを如何にして如何なる処に求むべきか。「既成」の内にか。外にか。「既成」を其儘にしてか、しないでか。或は又自力によってか、他力によってか、それはもう言うまでもない。今日の我々は過去の我々ではないのである。従って過去に於ける失敗を再びする筈はないのである。

文学――彼の自然主義運動の前半、彼等の「真実」の発見と承認とが、「批評」としての刺戟を有っていた時代が過ぎて以来、漸くただの記述、ただの説話に傾いて来ている文学も、斯くて復た其眠れる精神が目を覚して来るのではあるまいか。何故なれば、我々全青年の心が「明日」を占領した時、其時「今日」の一切が初めて最も適切なる批評を享くるからである。時代に没頭していては時代を批評する事が出来ない。私の文学に求むる所は批評である。

（一九一〇年八月）

発売禁止論

平出　修

発売禁止論と云う命題は決して新らしいものではない。しかし之れ迄の議論は主として文学者側より出たものであって、一の出版物が発売禁止の命令を受けると、その当面の事件に就て、当局者の処分を攻撃し、難詰すると云う傾

きにのみ、論陣を敷かれたように思う。而して其度毎に、此の如き作物をも発売禁止する当局者は、果して作物検閲の明があるのであろうか、もしありとするならば、如何なる尺度を用いて之を測定するのであろうか、其尺度準縄を発表せずして、猥りに禁止処分を決行するのは文明の政治家の態度でないとの、批難もしくは要求が提出されたのである。が当局者は、此声を聞けるか、聞かざるか、只黙々として、其所信？を断行し来って居る。よくまあ斯様のものまでも見附け出して、禁止処分を下したものだと思われるものに迄、其斧を揮って居る。

元来物の標準ほど立て悪いものはあるまい。学者が、ある概念の定義を作ることは、至難中の至難事であると、嘆じた如く、文芸取締の標準を立てよと、当局者に肉薄しても、当局者が之に答え得ぬのも無理からぬ事である。反対に、文芸家に対し、卿等先ず此の如き作物は、之を発売禁止すべからざるものなりとの標準を作り、示せと迫り来らば、何と答えるであろうか。

思うて茲に至れば岡田警視庁官房主事が、九月の「明治評論」誌上「文芸取締の標準」を公にした、勇気に対しては、吾人は満腹の敬意を捧げざるを得ないのである。今吾人は弁護士として国法の解釈に容喙する資格を有すると共に、雑誌「スバル」編輯の一員として、出版法の支配を受けて居るものである。されば、吾人は岡田主事に対して、敬意を表すると共に、其意見に就き、其同意すべき点と否らざる点とを分ち論述することの、必ずしも無用でないことを信ずる。吾人が新らしからぬ命題の下に此一文を草する所以は、実に茲に存するのである。

第一、岡田主事は、風俗を害するとは、普通の者が見て羞恥の念を起す程度が標準なりと云っている。此羞恥と云う詞は、思うに、主事の云わんと欲する意味の内容を包括し得る詞では無いであろう。通例用うる「羞恥」の語は、「うらはずかしい」と云った様な場所に用いられ、処女心のぬけきらぬ、はにかみを指す様に思われる。さまで反道徳の事でなくとも、其時其場合により、うらはずかしい感じの起ることは、吾人日常に屢々遭遇するものである。此点に関し、嘗て小説「都会」事件公判の際、第一審検事は、「一見醜悪なりと感ぜしむることが、風俗壊乱罪の基礎観念をなす」と云われたが、「醜悪」とか「厭悪」とかも少し強い詞で云わなければ、岡田主事の思う所は、明瞭にあらわれぬであろう。吾人は極めて善意に解して、所謂「羞恥」とは、通常の用例よりも、も少し強い意味を含ませたものとして見る。そして、つまらぬ語咎めをする事は決してない積りである。（ものの定義の六カしさが此一例によっても明白である。）

第二、岡田主事は、「社会の風俗を善良に導かんとする我々の立場と文芸の独立を叫んで居る文士の立場とは当分は一致すまい」と云って居る。此問題は一見頗る簡明であるが、少しく幽微に入れば、極めて複雑した問題を生じて

くる。先ず

㈠ 岡田主事が維持しようとする現代社会は、さほどに完全無欠のものであろうかと云う事を考えて見たい。

㈡ 岡田主事の維持しようとする現代道徳若くは、現代人の道徳心は、さほどに完全のものであろうかと云うことも考えて見たい。

㈢ 岡田主事の云う如き現代社会、現代道徳、現代人の道徳心が、さほどに維持せらるべき完全のものならば、区区たる一二冊の文芸の作品の力でもって、之を破壊し、頽廃せしめ、乱雑たらしむることが出来るであろうかとも、思って見ねばならぬ。

㈣ 岡田主事は、現代社会と文芸の独立とは一致し得ぬと云われたが、現代社会の事象は、文芸を除く他のすべてが、一致調和を得て居るであろうか、どうであろう。又文芸のみが何故にさほどに調和を欠いて超然たり得るであろうか、同じ時代の同じ産物ではないか、然るに他の社会現象と不一致な歩調で、何故に文芸家のみ、天下を歩んで居るのであろうか、と云う点も亦充分攻究に価する。

もし現代社会に不調和あり、現代道徳に欠陥あり、現代人の道徳心に腐敗あることを認むと云うならば、現代社会のみを対象とし之に文芸の作品を照し合せ、此対象に合わざる文芸には、一々反社会的制裁を加うべしとの論結は、姑く之を為すに躊躇せねばなるまいと思う。

玆に一例を引こう。現代我国の小説家は、社会の暗黒面を描写する傾向がある。之が自然主義の本領なるかの如く世間の一部からは嫉視されている、吾人は世評に雷同するでもなく、又自然主義の弁護をしようとも思わぬが、暗黒面描写の態度を説明すれば、大約下の様になるのである。曰く、現代の社会は暗黒である、実際の人生は悲惨である。文芸の作家は即ち人生批評家である、現代の事実を有りの儘に描写せよ、そこに醜悪あり、罪業あり、悲惨があるであろう。之は作家の罪でない、事象そのものが即ちそれであるからである。現実を暴露して、人生の真実を発見すること、科学者が科学を研究する態度に出でよ、文芸は作為ではない、発見であると。自然主義者はかくして理想を斥け、解決を求めないのであるから、其研究したる結果の報告は、報告それ自体である。固より是を以って社会の秩序維持に用いようとはせぬ。又道徳の進歩発達を助けようとはせぬ。かくの如き有目的、有理想の下に其報告を公にするのではない。然れども報告それ自体によって、如是の社会如是の人生が見えるものならば、経世憂国の人は、其報告に対し、重大なる価値と尊敬とを払わねばならぬ次第である。従って、警視庁の蛇蝎視する、暗黒描写の報告も、或は風俗の矯正を助長する結果とならぬでもあるまい。

社会の風俗を壊乱するものは之を禁止する、それには誰しも異存はないが、其社会と云うことの解釈を、単に文芸

家以外の社会と見ることは、どうしても吾人は賛同し能わぬ。不調和な、乱雑な、進歩の途中にある社会ではないか。学術界然り、教育界然り、実業界然り、芸術界亦然りである。然らば、文芸界を除外したる社会のみに加担して文芸界を孤立せしめ、継子扱にすると云うことは、行政手段より云っても、決して公平ではあるまい。古来呪われたる芸術品にして、しかも、其国民の精神生活に、霊妙不可思議の力を与え、千百年と雖も毫も衰えざるのみか、常に新らしき勢力を新らしき人に与えつつあるの例、決して乏しからざるによって見ても、高き眼、広き眼、遠き慮りを以って、時代を処理する事の必要さが解るであろう。西鶴の作品は淫靡である、醜悪である。あれがあの時の為政家によりて絶板せられ、世に伝わらなかったら、明治新文学の第一期、紅葉露伴時代が、或は来なかったかもしれぬ。来てもまだずっと遅れたかもしれぬ。

　吾人を以って之を見れば、社会の害を云う時には文芸をも包括したる社会と見、然る後之を決定すべきものであって、之が最も公平なる見方であることと確信する。岡田主事は、文芸家は独立を唱えていると云うことを仰山らしく云われるが、先に云う如く、社会に何の調和ありや、統一ありや、融合ありや。教育は独立し、宗教は独立し、実業は独立し、科学は独立し、何れも、交渉を容れず、助力を叫んで居らぬのである。独立と云えば詞は美しいが、其実は孤立である、憐むべき孤児である。其憐むべき孤児の中なる文芸を更に侮蔑、虐待しようとするのは、あまりと云えば無情である。

　小説「都会」の作者を有罪にした今村判事は、嘗て早稲田文学誌上に、公言したことがある。文芸家は何も発売禁止を恐れなくともよい、自信ある作物はどしどし之を作って見るがよいと云う意味であったと記憶する。文芸家が作品を作るのは、之を世上に発表しようと思うからである。発表すれば発売禁止の厄に遭う事なら、何を励みに之を労作しようぞ。昔は知己を千古に待つと云った人もあった。けれども其れは印刷術の進歩しない、時代変化の少ない頃の人の云うことで、今日の時勢に適合すべき事例ではない。今村判事の斯言の如き、畢竟、文芸と云うものを度外にするから起ることで、何等の同情のない、又何等の見識のない、従って文芸の功過を洞察することの出来ない人の云うべき筈のものである。吾人は斯る意見を抱持する人の裁判の下、有罪の宣告を受けた、作者、編輯者の不幸を、当時既に悲しんで居たのである。今尚悲しんでいるのである。岡田主事が、文芸が独立して居るものの如く、又文芸家のみが独立を主張して居るものの如く誤解し、文芸を社会現象より引放して見ようとする心の奥には亦斯の如き冷かなる潮流が流れて居るのではあるまいか。もし岡田主事がかかる誤解なく、且吾人の説を聞こうとの雅量を有するならば、吾人は更に左の一節を加えねばならぬ。

　文芸を他社会より引放すこと勿れと云う意味は、机上に

置かれたる此作品は果して社会の風紀壊乱するものか否かを判定する時、一応その国の文芸界の風潮を顧念せよと云うことになるのである。文芸の根ざしは古く且深く、人の心の奥に培われ、一面はそが有する思想と、一面はそが有する技巧とをもって、人の興味の中心に、美しき花を開くものである。故に文芸界の風潮如何を顧みるには、先ず時代精神の趨く処を考察し、何故にかかる作物が産出せらるるや、世人又何故にかかる作品を喜び閲読するやの真諦を究め、然る後、之れ人心淫靡の兆なり、作家堕落の象なりと思わば、顧みて作品全体の思潮と技巧とを闡明し、初めて最後の断案を下すべきものである。此事たるや、極めて幽微、極めて複雑の事柄にして、真に文芸の本旨に徹底したるものにですら、誤なき断案に到ることを容易に望み得べからざるもの、文芸の研究も茲に至れば、既に一の専門で、一の技術なること、恰かも衛生事務が専門技術家の説に聞きて後、之が処決を要すると其規を同じうする。吾人は常に吾国人の趣味の低きを卑しみ、憂え、悲しんでいる。吾国為政家が、文芸に対して、低能児なることを嘲笑して居る。されども吾人はかかる専門的技術の知識までを要求しようとは決して云うまい。しかし之が専門家の説を聞くべき事柄なりや否やの断定をなすまでの、趣味と知識とを養うべき事を常に要求して居るのである。彼の「都会」事件の公判廷に於て吾人が、鑑定を申請したる所以のもの亦実に茲に存したのである。此犯罪人は精神病者なりや否やの鑑定申請を無造作に許可する法官は、此作品は時代思潮と如何なる関係ありやの鑑定申請を却下してしまった。之れ常識を以って判定し得ると思ったからであろう。常識か、非常識か、文学的常識をだに用意せずして、此専門的事案を判定しようとする勇気は、遂に小説「都会」を有罪にしたのである。而して之れと殆んど同一程度の常識は、巴里及モリエエル全集の発売禁止に世界の嗤笑を買うに至ったのである。何故に内務省及警視庁は文芸の作品検閲に、専門家を用いぬであろう。少くも専門家の意見を参考にせぬのであろう。文芸に同情し、尊敬を払うならば自己の修養如何を顧みて、其足らざる処は、他人の知識と考慮とで補充することが、何で愧かしい事であろうぞ。自分の明を恃んで、加うべからざる制裁を文芸に加えた為め、世上より浴びせらる嘲笑と侮蔑とは、更に更に、より大なる耻とは思わないのであろうか。岡田主事にして吾人の説を聞く雅量あらば、此点に就き三たび思を致して可なりである。

第三、岡田主事は又次の如き説を為して居る。

同じく姦通を描き性慾を描くにしても、作者の態度が真面目で、或感念を現わす為に、已むなく材料にしたと云う様に見えた時は、敢て禁止する必要はないが、作者の態度が真面目でなく、殊更猥褻なことを書いて人気を博そうなどと言う考で書いたものには、発売禁止をせねばならぬものが多い。作者の態度稿が真面目であるか、否か読めばすぐ分る　云云。

之に由って観ると、岡田主事も満更の酷吏ではない、文芸に同情し、作者に好意を持ち、真面目な作者の手から産れた作品に対しては、継子扱をせぬと云う意見を有して居るものと見える。しかし此「真面目な態度」と云う事は、どの点から観察するのであろう。岡田主事の所謂社会の人としての真面目と云うことと、吾人の所謂文芸の人としての真面目と云うこととは、大変な意義の相違がある。分り易い例で云えば、彼の俳人其角の如き、あれをあの時代の道徳観念、社会律から批判したら、随分不まじめな人と云わねばならぬが、俳句を通してあらわれた其角は、決して不真面目のものではなかった。一体芸術三昧に入る時の心持と、芸術以外に歩んでる時の心持とは之を一つにして見ることは到底出来ぬのであるから、芸術品に関する議論をする時に真面目、不真面目を云うのは、単純に芸術の世界にある時の心持丈けを抽き出した上の事とせられねばならぬ。故に岡田主事の「真面目の態度」と云うは、文芸家としての態度の真面目を意味すると解するが正当であって、又しか解するのが岡田主事の真意に適するのであろう。果して然らば、次に来る問題は、近来日本の当局者によりて嫉視せらるる、自然主義的作品の作者は態度が不真面目であると概言するのであろうか、どうであろう。岡田主事は公然明言はしなかろうけれど、世間多くの人は、口を開けば、自然主義を罵倒する。之に出歯亀主義との異名までも附して居る。聰明なる文芸の取締官は、かかる世評に、其察々の明をば掩るる事もあるまいが、取締官がなしたる処分の径路と、結論とを考えて見ると、或は、自然主義的作品の作家を、常に不真面目の態度であるとの観察をして居るのではあるまいかと疑を挟む余地がないでもない。又、之は内務省の処分であるから岡田主事に当面の弁難は出来ないが、彼の「巴里」の作者や「モリエエル全集」の作者は、果して不真面目な態度を持って居たと見るのであろうか。ゾラはまだしも、モリエエルまでが不真面目な作者であると云うことは、恐く日本の内務当局者を除いた世界幾億の人間は、異口同音に否定するであろうと思われる。

岡田主事は、社会本位の目から文芸を取扱うと声言したのである。此声言通りにやるならば、現われたる此作品は、所謂社会本位から見て風俗壊乱なりや否やを判定すれば、それで足る筈である。作者の態度が文芸的に真面目であろうと、不真面目であろうとは之を問うの遑ない筈である。岡田主事が作者の態度を参照すると云うことは、作家から云えば難有いが、主事の最初の声言とは矛盾して来はしまいか。一歩を文芸界に容れ、作者の態度は真面目であると認めたに拘らず、しかもそれが岡田式社会の風俗を壊乱する作品があったとすれば、主事は如何にして此矛盾を解決するであろうか。前にも云う如く、真面目、不真面目の問題は、文芸上の立場から見るのであって、社会風俗の壊乱と否とは、岡田式社会（文芸家と一致し能わぬ立場なりと主事が云える）の立場から見るのであるから、此両者

の立場に相違ある以上、観察に相違の生じて来ることは、論理上又実際上免る可らざる事であるが、此調和は如何なる方面に之を求めようとするのか。幸にしてかかる不調和が事実あり得ないと断言が出来ればよし、かかる不調和の際には、作者の態度を尊重し、従って文芸の威厳を保持しようと云う意見に帰着するならば、吾人は甚満足を表するものにして、前段に岡田主事に雅量あれよと切言したのも畢意此趣意に外ならぬのである。

尚一つの疑問がある。作者の態度が真面目か否か読めばすぐ解ると、岡田主事が断言した一事である。吾人は前に、我当局者が文芸鑑賞の趣味に乏しきを痛言して置いた。文芸の検覈は、一の専門である、技術であるとまで断言して置いた。吾人は法律家である、けれど幼少より文芸を好み、今日に至るまで普通世人が、読者として修養し得る、最高度までとは云えないが、相当程度以上に、先輩諸氏の訓育を受けたものである。しかも尚、一の作品を通して、作家の態度を研究することの困難なることを自覚して居る。然るに岡田主事は一見直ちに作者の態度の真面目、不真面目を批判し得ると云う断言を聞いては、聊か疑惑を抱かざるを得ない。岡田主事の断言は、本統であろうか。吾人の愚なる、主事に及ばざる幾十等であるのであろうか。仄に聞くに、「煤烟」が朝日新聞紙上に連載せられた時は屡々其筋から注意があったと云うことだ。其後之を単行本にしようとする時、それを許さなんだとか、訂正を命ぜられたとか云うことだ。吾人は事の真偽は知らぬ。只こう云う事は我国当局者としては随分なし兼ねない、かかる風説は極めて信じ易いものであると思っている。こう云う当局者は、煤烟の作者の態度を、不真面目と見たのであろうか。よし不真面目の態度と見てもよろしい、その不真面目の態度を改めよと注意すると云うのは聊滑稽である。進んで詞句章節の一部に対し訂正を命ずるに至っては、既に態度如何の問題でないのである。風説の如く警視庁が果してかかる処置に出たとすると、岡田主事が、作者の態度によって処分を決するとの声言は、虚である、詐りであると云わねばならぬ。次に之も内務省の取扱故主事に対してはお気の毒であるが、雑誌「スバル」に載った森林太郎氏のヰタ・セクスアリスは、不真面目な作物と見たのであろうか、作者森林太郎氏は殊更猥褻な事を書いて人気を博そうとしたものと見たのであろうか。如何にもあれには性慾の描写がある。春画、男色、吉原、待合等の記実がある。けれど、其描写のどの点が不真面目であり、どの調子が人気受けを主としていると指摘するであろう。大町桂月氏は文芸の批評家の一人であって、暗黒面の描写、現実の暴露等を、嫌忌すること、内務当局の某々氏等さては岡田主事よりも、むしろ甚しいかと思われるほど、反自然主義者である。斯人が雑誌「趣味」誌上、ヰタ・セクスアリスを評して、左の如く論じて居る。

世には此小説が風俗壊乱になりはせぬかと心配する

人もあるようなれども、吾人思うに、啻に風俗を害せざるのみならず、ひろく天下の少年青年に読ましめたきもの也。

世には大なり、小なり、性慾に誤まられたるもの、極めて多し。然れども翁（森氏の事なり）は、毫も性の為に誤まられず、翁とても、神にはあらざれば、時には性慾の淵の岸までは、踏み出したることあれどもいつも凱歌を奏して、勇ましく帰り来れり。天晴の快男子也。（中略）

われ謹んで今の青年に告ぐ、鷗外翁の性慾史を味うにつけても、間接に紙表に躍如たる翁の人格抱負の非凡なることを洞察せよ。

此の文の続きは中々長い故、其一小節を掲ぐるにとどめる。ギタ・セクスアリスの批評及此発売禁止処分の当否に付ては、吾人別に懐抱がある（今は云わぬ）従って吾人は桂月氏の此批評を盾として弁護の材料にしようとは思って居らぬ。只内務省側が不真面目なる作者危険なる作品としたに反し、桂月氏はひろく天下の少青年に読ましめて、教科書となすべしと云い、翁の人格抱負の非凡なるを洞察せよと云って居る。しかも其立場は、岡田主事や、内務当局者と同じ処に居ての観察と見らるるのである。斯様に、同じ立場にあり乍ら、正反対の見解が出て来て居る。人心の同じからざる猶其面の如しとて、嘯き居らばそれまでなれど、作者の態度を観察することの六カしさは、此現在の事実が明に証拠立てて居る。さて此両者何れの見方が正当であろうか。之は条理によりて考える外はない。作者の態度如何を見るのは、作物の検覈が第一次である。作物の検覈にはそれ丈けの知識、修養がいる。其知識修養は誰に多いかと云わば、岡田氏よりも桂月氏、内務当局者より桂月氏の方が、先ず上であるとするのが普通である。従って桂月氏の見方が正当であるとの条理が出て来る。茲へ来て我々は社会的見地から見るのだとは、岡田主事は云う事が出来ぬ。繰り返して云うが、作者の態度と云う問題は、文芸上の現象である。此態度を見るに社会的見地を云々しては、論旨が不明になり、滅裂になる。それが厭だと云う事ならば、作品検閲に（一）作者の態度を見ると云うこと（二）態度は読めば直ぐ解ると云うことの二つの標準を取消してしまい、我々は、社会的見地から之を見下す、我々の眼には、芸術はない、趣味はない、只文字が見える、醜い文字が見える、即ち発売の禁止をする、そして此善良なる社会風紀を維持するとの、一カ条のみを固守して、盛に蛮勇を揮って、群小小説家を驚き且つ走らしめたらよかろう。

右にて吾人の論旨は略つきた。最後に総括して云うことがある。（一）文芸取締の標準は立て憎いものである。（二）芸術の鑑賞は容易ならぬものである。（三）国家の生命は千百万年の永劫に亘るものである。（四）芸術の生命は人類と共に永久に存続するものである。（五）一時代の一時の現象に眼眩み、人類永久の利益を害しては後世に対して、言訳

があるまい。(六)仮令官等は奏任の低きに居っても、千百万年に嗤を貽す様なことをしてはならぬ。(七)すべて事は、慎重なるべし、遠き慮あるべし。(八)自己の乏しき知識を唯一の味方とすれば、思わざる恥あるべし。事に局に当るものは、克く此消息を解し、敢て或は過誤なからんことに、留意すべく、努力すべく、そして人類の発展に貢献すべきものである。(妄言多罪)。

(一九一〇年稿)

謀叛論

徳富蘆花

僕は武蔵野の片隅に住んで居る。東京へ出るたびに、青山方角へ往くとすれば、必ず世田ヶ谷を通る。僕の家から約一里程行くと、街道の南手に赤松のばらばらと生えた処が見える。此は豪徳寺——井伊掃部守直弼の墓で名高い寺である。豪徳寺から少し行くと、谷の向うに杉や松の茂った丘が見える。吉田松陰の墓及び松陰神社は其丘の上にある。井伊と吉田、五十年前には互に倶不戴天の仇敵で、安政の大獄に井伊は吉田の首を斬れば、桜田の雪を紅に染めて、井伊が浪士に殺される。斬りつ斬られつした両人も、死は一切の恩怨を消して了って谷一重のさし向い、安らかに眠っている。今日の我等が人情の眼から見れば、松陰はもとより醇平として醇なる志士の典型、井伊も幕末の重荷を背負って立った剛骨の好男児、朝に立ち野に分れて斬るの殺すのと騒いだ彼等も、五十年後の今日から歴史の背景に照して見れば、畢竟今日の日本を造り出さんが為に、反対の方向から相槌を打ったに過ぎぬ。彼等は各々其位置に立ち自信に立って、為るだけの事を存分に為て土に入り、其余沢を明治の今日に享くる百姓等は、さりげなく其墓の近所で悠々と麦のサクを切っている。

諸君、明治に生れた我々は五六十年前の窮屈千万な社会を知らぬ。斯の小さな日本を六十幾箇の碁盤に劃って、一寸隣へ往くにも関所があったり、税が出たり、人間と人間の間には階級があり格式があり分限があり法度でしばって、習慣で固めて、苟くも新しいものは皆禁制、新しい事をするものは皆謀叛人であった時代を想像して御覧なさい。幸にして世界を流るる大潮流の余波は、水門を乗り越え潜り脱けて滔々と我日本に流れ入って、維新の革命は一挙に六十藩を掃蕩し日本を挙げて統一国家とした。其時の快豁な気持は、何ものを以てするも比すべきものが無かった。諸君解脱は苦痛である。而して最大愉快である。人間が懺悔して赤裸

裸として立つ時、社会が旧習をかなぐり落して天地間に素裸で立つ時、其雄大光明な心地は実に何とも云えぬのである。明治初年の日本は実に初々しい此解脱の時代で、着ぶくれていた着物を一枚剝ねぬぎ、二枚剝ねぬぎ、素裸になって行く明治初年の日本の意気は実に凄じいもので、五ヵ条の誓文が天から下る、藩主が封土を投げ出す、武士が両刀を投出す、△△が平民になる、自由平等革新の空気は磅礴として、其空気に蒸された。日本はまるで筍の様にずんずん伸びて行く。インスピレーションの高調に達したといおうか、寧ろ狂気といおうか、――狂気でも宜い――狂気の快は不狂気の知る能わざる所である。誰が其様な気運を作った乎。世界を流るる人情の大潮流である。誰が其潮流を導いた乎。我先覚の志士である。新思想を導いた蘭学者にせよ、局面打破を事とした勤王攘夷の処士にせよ、時の権力から云えば謀叛人であった。彼等が千荊万棘を渉った艱難辛苦――中々一朝夕に説き尽せるものではない。明治の今日に生を享くる我等は十分に彼等が苦心を酌んで感謝しなければならぬ。

僕は世田ガ谷を通る度に然思う。吉田も井伊も白骨になって最早五十年、彼等及び無数の犠牲によって与えられた動力は、日本を今日の位置に達せしめた。日本も早や明治となって四十何年、子供で無い、大分大人になった。明治の初年に狂気の如く駈足で来た日本も、何時の間にか足もとを見て歩く様になり、内観する様になり、回顧もする様になり、新日本の統一ここに一段落を劃した観がある。維新前後志士の苦心もいささか酬いられたと云わなければならぬ。然らば新日本史は茲に完結を告げた乎。是から完成の歴史に移るの乎。局面回転の要はないか。最早志士の必要は無い乎。飛んでもない事である。五十余年前、徳川三百年の封建社会を唯一簸りに推流して日本を打って一丸とした世界の大潮流は、倦まず息まず澎湃として流れている。其れは人類が一にならんとする傾向である。四海同胞の理想を実現せんとする人類の心である。何の国も何の国も陸海軍を並べ、税関の墻を押立てて、兄弟どころか敵味方、右で握手して左でポケットの短銃を握る時代である。窮屈と思い馬鹿らしいと思ったら実に片時もたまらぬ時ではないか。然し乍ら人類の大理想は一切の障壁を推倒して一にならなければ止まぬ。一にせん、一にならんともがく。国と国との間もそれである。人種と人種の間も其通りである。階級と階級の間もそれである。性と性の間もそれである。宗教と宗教――数え立つれば際限が無い。部分は部分に於て一になり、全体は全体に於て一とならんとする大渦小渦鳴戸の其も啻ならぬ波瀾の最中に我等は立っているのである。斯の大回転大軋轢は無際限であろう乎。恰も明治の初年日本の人々が皆感激の高調に上って解脱狂気の如く自己を擲った如く、我々の世界も何時か△者其×を投出し、富豪其金庫を投出し、戦士其剣を投出し、智愚強弱一切の差別を忘れて、青天白日の下に抱擁握手抃舞する刹那は来ぬであ

ろう乎。或は夢であろう。夢でも宜い。人間夢を見ずに生きて居られるものでない。――其時節は必ず来る。無論其れが終局ではない、人類のあらん限り新局面は開けて止まぬものである、然し乍ら一刹那でも人類の歴史が此詩的高調、此エクスタシイの刹那に達するを得ば、長い長い旅の辛苦も贖われて余あるではないか。其時節は必ず来る、着々として来つつある。我等の哀心が然囁くのだ。然しながら其愉快は必ず我等が汗もて血をもて涙をもて贖わねばならぬ。収穫は短く、準備は長い。ゾラの小説にある、無政府主義者が鉱山のシャフトの排水樋を竊に鋸でゴシゴシ切って置く。水がドンドン坑内に溢れ入って、立坑といわず横坑といわず廃坑といわず知らぬ間に水が廻って、廻り切ったと思うと、俄然鉱山の敷地が陥落を初めて、建物も人も恐ろしい勢を以て瞬く間に総崩れに陥ち込んで了ったという事が書いてある。旧組織が崩れ出したら案外速にばたばたいってしまうものだ。地下に火が廻る時日が長い。人知れず働く犠牲の数が要る。犠牲、実に多くの犠牲を要する。日露の握手を来す為に幾万の血が流れた乎。彼等は犠牲である。然し乍ら犠牲の種類も一ではない。自ら進んで自己を進歩の祭壇に提供する犠牲もある。新式の吉田松陰等は出て来るに違いない。僕は斯く思いつつ常に世田ガ谷を過ぎていた。思っていたが、実に思いがけなく今明治四十四年の劈頭に於て、我々は早くも茲に×××の×××を×すこととなった。唯一週間前の事である。

諸君、僕は××君等と多少立場を異にする者である。僕は臆病者で血を流すのは嫌である。××君等に尽く真剣に××を行う意志が有ったか無かったか僕は知らぬ。彼等の一人×××××君が云ったと云う如く、今度のことは嘘から出た真で、はずみにのせられ、足もとを見る遑もなく陥穽に落ちたのか如何か。僕は知らぬ。舌は縛られる、筆は折られる、手も足も出ぬ苦しまぎれに死物狂になつて、×××と無理心中を企てたのか、否か。僕は知らぬ。冷厳なる法律の眼から見て、××になった×××悉く××の価値があったか僕は知らぬ。「一無辜を殺して天下を取るも不為」で其原因事情は何れにもせよ大審院の判決通り真に××の企があったとすれば、僕は甚だ残念に思うものである。暴力は感心が出来ぬ。自ら犠牲となる共、人を犠牲にはしたくない。然し乍ら×××の企に万不同意であると同時に、其企の失敗を喜ぶと同時に、彼等×××も×したくはなかった。×かして置きたかった。彼等は乱臣賊子の名を受けてもただの×ではない、××である。ただの賊でも××はいけぬ。況んや彼等は有為の××である。自由平等の新天新地を夢み身を献げて人類の為に尽さんとする××である。其行為は仮令狂に近いとも、其志は憐れむべきではないか。彼等は、もとは社会主義者であった。富の分配の不平等に社会の欠陥を見て、生産機関の公有を主張した、社会主義が何が恐い？　世界の何処にでもある。然るに狭量にして神経質な××は、ひどく気にさえ出して、殊

に社会主義者が日露戦争に非戦論を唱うると俄に圧迫を強くし、足尾騒動から赤旗事件となって、官権と社会主義者は到頭犬猿の間となって了った。諸君、最上の帽子は頭にのっていることを忘るる様な帽子である。最上の政府は存在を忘れらるる様な政府である。帽子は上に居る積りであまり頭を押付けてはいけぬ。我等の政府は重いか軽いか分らぬが、××君等の頭にひどく重く感ぜられて、到頭彼等は××××××になって了うた。×××××が何が恐い？　其程×××××が恐いなら、事の未だ大ならぬ内に、下僚ではいけぬ、総理大臣内務大臣なり自ら××と会見して、膝詰の懇談すればいいではないか。然し当局者は其様な不識庵流をやるにはあまりに武田式家康式で、且あまりに××である。得意の章魚の様に長い手足で、じいとからんで彼等をしめつける。彼等は今や堪え兼ねて鼠は虎に変じた。彼等の或者は最早最後の手段に訴える外ないと覚悟して、幽霊の様な企がふらふらと浮いて来た。××がいけなかった。今一足の辛抱が足らなかった。然し誰が彼等をヤケにならしめた乎。法律の眼から何と見ても、天の眼からは彼等は××でもない、××でもない、××である。皇天其志を憐んで彼等の企は未だ熟せざるに失敗した。彼等が企の成功は、素志の蹉跌を意味したであろう、皇天××を憐み、また彼等を憐んで其企を失敗せしめた。企は失敗して、彼等は擒えられ、さばかれ、×××は××の為に死滅一等せられ、重立たる余の×××は天の××によって××に絞台の露と消えた。×××――諸君、今一人、土佐で亡くなった多分自殺した幸徳の母君あるを忘れてはならぬ。

斯くの如くして彼等は死んだ。×は彼等の××である。パラドックスのようであるが、人事の法則、負くるが勝である。死ぬるが生きるである。彼等は確に其自信があった。×の宣告をうけて法廷を出る時、彼等の或者が「××！　××！」と叫んだのは其証拠である。彼等は斯くして笑を含んで死んだ。悪僧と云わる、××××の死顔は平和であった。斯くして×××の×××××者は死んだ。数え難き××××者の種は蒔かれた。彼等は××に犠牲の死を遂げた。然し乍ら犠牲を造れるものは実に禍なるかな。

諸君、我々の脈管には自然に勤皇の血が流れている。……………天皇陛下は剛健質実、実に日本男児の標本たる御方である。「とこしえに民安かれと祈るなる吾代を守れ伊勢の大神。」其誠は天に逼るというべきもの。「取る棹の心長くも漕ぎ寄せん蘆分小舟さわりありとも。」国家の元首として堅実の向上心は、三十一文字に看取される。「あさみどり澄み渡りたる大空の広きをおのが心ともがな。」実に立派な御心掛である。諸君、我等は斯の天皇陛下を戴いてい乍ら、仮令親殺しの非望を企てた鬼子にもせよ、何故に其×××だけが宥されて、余の×××を×さなければならなかった乎。断じて△ではない。――確に輔弼の責である。若し陛下の御身近く忠義硬骨の臣があって、陛下の赤子に差異は無い、何卒×××名の者共罪の浅きも

深きも一同に御宥し下されて、反省改悟の機会を御与え下されかしと、身を以て懇願ずる者があったならば、陛下も御領きになって、我等は×××の×××の墓を建てずに済んだであろう。若し斯様な時にせめて山岡鉄舟がいたならば――鉄舟は忠勇無双の男、陛下が御若い時英気にまかせ××に臣下を投飛ばしたり遊ばすのを憂えて、或時××という程×××××手剛い意見を申上げたこともあった。若し木戸松菊が居たらば――明治の初年木戸は陛下の御前、三条岩倉以下卿相列坐の中で、面を正して陛下に向い、今後の日本は従来の日本と同じからず、既に外国には君王を廃して共和政治を布きたる国も候、よくよく御注意遊ばさるべくと凜然として言上し、陛下も悚然として御容をあらため、列坐の卿相皆色を失ったということである。せめて元田宮中顧問官でも生きていたらばと思う。元田は真に陛下を敬愛し、君を堯舜に致すを畢生の精神としていた。せめて伊藤さんでも生きて居たら。――否、若し皇太子殿下が×××××××××××××、陛下は御考があったかも知れぬ。皇后陛下は実に聡明恐れ入った御方である。「浅しとてせけばあふるる河水の心や民の心なるらん」陛下の御歌は実に為政者の全誠である「浅しとてせけばあふるる」せけばあふるる、実に其通りである。若し当局者が、無闇に堰かなかったならば、数年前の日比谷焼打事件はなかったであろう。若し政府が神経質で依怙地になって社会主義者を堰かなかったならば、今度の事件もなかったであろう。然し乍ら不幸にして皇后陛下は沼津に御出になり、物の役に立つべき面々は皆他界の人になって廟堂にずらり頭を駢べて居る連中には誰一人帝王の師たる者もなく、誰一人××××××××××もなく可惜君徳を補佐して陛下を堯舜に致すべき千載一遇の大切なる機会を見す見す看過し、国家百年の大計から云えば眼前×××の××××者を×して将来永く無数の××××者を生むべき種子を播いて了うた。×××して××××名を殺した××こそ真に××××の臣で、××の罪で×××××は却って死を以て××××××××××××××となって了うた。忠君忠義――忠義顔する者は夥しいが、進退伺を出して恐懼々々と米つきばったの真似をする者はあるが、御歌所に干渉して朝鮮人に愛想をふりまく悧口者はあるが、何処に××の人格を敬愛してますます徳に進ませ給う様に希う真の忠臣がある乎。何処に不忠の嫌疑を冒しても×××め奉り××をして敵を愛し不孝の者を宥し×××とし奉らねば「まぬ××がある乎。諸君、忠臣は孝子の門に出ずで、忠孝もと一途である。孔子は孝について何と云った乎。色難し、有事弟子服其労、有酒食先生饌、曽以此為孝乎。行儀の良いのが孝ではない。また曰うた今之者孝謂唯能養到犬馬皆能有養、不敬何以別乎。体ばかり大事にするが孝ではない。孝の字を忠に代えて見るがいい。×××××××××××が真の忠臣であろう乎。若し××××××××××、侍医と大膳職と皇宮警手とが大忠臣でなくてはなら

ぬ。今度の事の如きこそ真忠臣が禍を転じて福となすべき千金の機会である。列国も見ている。日本にも××××が出て来た。×ろしい企をした、西洋では皆打殺す、日本では寛仁大慶の皇帝陛下が、悉く罪を宥して反省の機会を与えられたと云えば、いささか××が立つではないか。皇室を民の心腹に打込むのに、斯様な機会はまたと得られぬ。然るに彼等閣臣の輩は事前に其企を萌すに由なからしむる程の遠見と憂国の誠もなく、事後に局面を急転せしむる機智親切もなく、云わば自身で仕立てた不孝の子二十四名を得たりや応と引×って二進の一十、二進の一十、二進の一十で綺麗に二等分して――若し×××××××××××××にしたかも知れぬ――二等分して格別物にもなりそうも無い足の方丈××××じて牢屋に追込み、手硬い頭だけ××して地下に追いやり、天晴恩威並行われて候と××を小楯に五千万の見物に向って気取った見得は、何という××である乎。啻に政府許りでない、議会をはじめ誰も彼も皆××の名に恐れをなして一人として聖明の為に弊事を除かんとする者もない。出家僧侶宗教家などには、一人位は××の××する者があって宜いではない乎。然るに管下の末寺から××が出たと云っては大狼狽で破門したり僧籍を剝いだり恐れ入り奉るとは上書しても、御慈悲と一句書いたものが無い、何という情ないこと乎。××等の死に関しては、我々五千万人斉しく其責を負わねばならぬ。然し尤も責むべきは×××である。総じて××等に対する××の遣口は、最切から蛇の蛙を狙う様で随分陰険冷酷を極めたものである。網を張って置いて、鳥を追立て、引かかるが最後網をしめる。陥穽を掘って置いて、其方にじりじり追いやって、落ちるとすぐ蓋をする。彼等は国家の為にする積りかは知らぬが、天の目からは正しく××――××だ。それに公開の裁判でもすることか、風紀を名として何もかも××にやってのけて――諸君、議会に於ける花井弁護士の言を記憶せよ、大逆事件の審判中当路の大臣は一人も唯の一度も傍聴に来なかったのである。――死の判決で国民を嚇して、××××××で××××を取って、余の×××は殆ど不意打××××――否××ではない。××――××である。せめて××になったら一滴の涙位は持っても宜いではない乎。それにあの執念な追窮のしざまは如何だ。××の引取り会葬者の数にも干渉する。秘密、秘密、何もかも一切秘密に押込めて、××の解剖すら大学ではさせぬ。出来ることならさぞ××の霊魂も殺して了いたかったであろう。否、××等の体を殺して無政府主義を殺し得た積りでいる。彼等当局者は無神無霊魂の信者で、無神無霊魂を標榜した××等こそ真の永生の信者である。然し当局者も全く無霊魂を信じ切れぬと思える。彼等も幽霊が恐いと見える。死後の干渉を見れば分る。恐い筈である。××等は死ぬる所か活潑々地に生きている。現に武蔵野の片隅に寝ていた斯くいう僕を曳きずって来て、此処に永生不滅の証拠を見せている。死んだ者も恐い。

死滅一等の連中を地方監獄に送る途中警護の仰山さ、始終××を囚徒の××××けるなぞ、其恐がり様もあまりひどいではない乎。××は嘸笑っているであろう。何十万の陸軍、何万噸の海軍、幾万の警察力を擁する堂々たる明治政府を以てして、数うる程もない、加之手も足も出ぬ者共に対する怖え様も甚しいではない乎。人間弱味がなければ滅多に恐がるものでない。××××すべし。××が君等を殺した其前後の遽てざまに、××の否、君等が所謂権力階級の鼎の軽重は分明に暴露されて了うた。

斯様な事になるのも、国政の要路に当る者に博大なる理想もなく信念もなく人情に立つことを知らず、人格を敬することを知らず、謙虚忠言を聞く度量もなく、日月と共に進む向上の心もなく、傲慢にして甚しく時勢に後れたるの致す所である。諸君、我等は決して不公平ではならぬ。当局者の苦心は察せねばならぬ。地位は人を縛り、歳月は人を老いしむるものである。廟堂の諸君も昔は若かった。書生であった、今は老成人である。残念ながら御ふるい。切棄てても理想は皦々たり。白日の下に駒を駛せて、政治は馬上提灯の覚束ないあかりにほくほく瘠馬を歩ませて行くというのが古来の通則である。廟堂の諸君は頭の禿げた政治家である。所謂責任ある地位に立って、慎重なる態度を以て国政を執る方々である。当路に立てば処士横議は確に厄介なものであろう。仕事をするには邪魔も払いたくなる筈。統一々々と目ざす鼻先に××の禁物は知れたことである。老人の胸には、花火線光も爆烈弾の響がするかも知れぬ。天下泰平は無論結構である。共同一致は美徳である。斉一統一は美観である。小学校の運動会に小さな手足の揃うすら心地好いものである。「一方に靡きそろいて花すすき、風吹く時ぞ乱れざりける」で、事ある時などに国民の足並の綺麗に揃うのは、まことに余所目立派なものであろう。然しながら当局者はよく記憶しなければならぬ、強制的の一致は自由を殺す、自由を殺すは即ち生命を殺すのである。今度の事件でも彼等は始終皇室の為国家の為と思ったであろう。然し乍ら其結果は××に禍し、××××を殺し得ずして却て夥しい騒動の種子を蒔いた。諸君は××人を容るるの度量と、青書生に聴くの謙遜がなければならぬ。彼等の中には維新志士の腰について、多少先輩当年の苦心を知っている人もある筈。よくは知らぬが、明治の初年に近事評論などで大分政府に窘められた経験がある閣臣も居る筈。窘められた嫁が姑になって又嫁を窘める。古今同嘆である。当局者は初心を点検して、書生にならねばならぬ。彼等は××の事に関しては自信によって涯分を尽したと弁疏するかも知れぬ。冷かな歴史の眼から見れば、彼等は××××者を殺して、却て局面開展の地を作った一種の××とも見られよう。吉田に対する井伊をやった積りでいるかも知れぬ。徳川の末年でもあることか、白日青天、明治昇平の四十四年に××という陛下の赤子、加之×す所あるべき者共を×めぬいて激さして××に××て

て、臆面もなく×××した一事に到っては、××断じてが之責任を負わねばならぬ。麻を着、灰を被って不明を陛下に謝し、国民に謝し、死んだ××名に×さなければならぬ。死ぬるが生きるのである。殺さるる共殺してはならぬ犠牲となるが奉仕の道である。——人格を重んぜねばならぬ。負わさるる名は何でもいい。事業の成績は必しも問う所でない。最後の審判は我々が最も奥深いものによって定まるのである。

諸君、××君等は時の政府に××人と見做されて殺された。が、××を恐れてはならぬ。××人を恐れてはならぬ。自ら××人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に××である。「身を殺して魂を殺す能わざる者を恐るる勿れ」肉体の死は何でも無い。恐るべきは霊魂の死である。人が教えられたる信条のままに執着し、言わせらるる如く云い、為せらるる如くふるまい、型から鋳出した人形の如く形式的に生活の安を偸んで、一切の自立自信、自化自発を失う時、即ち是霊魂の死である。我等は生きねばならぬ。生きる為に謀叛しなければならぬ。古人は云うた如何なる真理にも停滞するな、停滞すれば墓となると。人生は解脱の連続である。如何に愛着する所のものでも脱ぎ棄てねばならぬ時がある。其は形式残って生命去った時である。「死にし者は死にし者に葬らせ」墓は常に後にしなければならぬ。××等は××して死んだ。死んで最早××した。墓は空虚だ。何時迄も墓に縋りついてはならぬ。「若爾の右眼爾を躓かさば抽出して之をすてよ」愛別、離苦、打克たねばならぬ。我等は苦痛を忍んで解脱せねばならぬ。繰り返して曰う、諸君、我々は生きねばならぬ。生きる為に常に××しなければならぬ。自己に対して、また周囲に対して。

諸君、××君等は×××として××の×と消えた。其行動について不満があるとしても、誰か××として其動機を疑い得る。西郷も逆賊であった。然し今日となって見れば、逆賊でないこと西郷の如き者がある乎。××等も誤って××××となった。然し百年の公論は必其事を××で其×を×しむであろう。要するに人格の問題である。諸君、我々は人格を研くことを怠ってはならぬ。

（一九一一年四月二十日第一高等学校における講演草稿）

A LETTER FROM PRISON
EDITOR'S NOTES

石川啄木

*一　幸徳はこれを書いてから数日の後、その弁護人の勧めによって、この陳弁書と同一の事を彼自ら公判廷に陳述

したそうである。'V NAROD' SERIES の編輯者は、此事を友人にして且同事件の弁護人の一人であった若い法律家H——君から聞いた。

*二 乱臣賊子の弁護をするのは不埒だという意味の脅迫的な手紙が二三の弁護士の許に届いたのは事実である。そうしてそういう意見が無智な階級にのみでなく所謂教育ある人士の間にさえ往々にして発見されたのも事実である。編輯者は当時その勤めている新聞社の編輯局で遭遇した一つの出来事に今猶或る興味を有っている。それはもう昼勤の人々が皆帰って了って、数ある卓子の上に電灯が一時に光を放ってから間もなくの時間であった。予の卓子の周囲には二人の人——マスター・オヴ・アーツの学位を有する外電係と新しく社会部に入った若い、肥った法学士——とが集っていた。この若い法学士は何処までも、「若い法学士」——何事に対しても、たとえば自分の少しも知らぬ事に対しても、必ず何等かの「自分の意見」を持ち出さずには止まれぬ——の特性を発揮した人で、社会部の次席編輯者が数日前の新聞のこの事件の記事に「無政府共産党陰謀事件」という標題を附けたことに就いて頻りに攻撃の言葉を放った。彼の言う処によると、無政府共産党という言葉は全く意味を成さぬ言葉でこの滑稽な造語を敢てした次席編輯者（彼は法学士ではなかった）は屹度何か感違いをしているのであろうということであった。そうして彼はその記事の出た朝の新聞を見た時には、思わず吹き出したのだそうである。予はこの何事にも自信の強い人の自信を傷けることを遠慮しながら、クロポトキンの或る章の標題にたしか Anarchist Communism と書いてあった筈だと話したが、「法学士」は無論自分の読んだことのない本のことを自分より無学な者の話すのに耳を傾ける人ではなかった。『しかし「無政府」ということと「共産」ということとは全く別なことなんだから、それを一しょにするのはどうしても滑稽だなあ』これ彼の最後の言葉であった。彼にとっては、政治は政治、経済は経済、そうして又宗教（彼は基督教徒であった）は宗教、実際生活は実際生活で、その間に何等の内部的関係なく、人生は恰も歌牌の札の如く離れ離れなものであった。しかし予はもうこの上彼の自信を傷けることはしなかった。又その所謂滑稽な言葉は犯罪の動機及性質に就いて検事総長から各新聞社に対して発表した文書（すでに記事として掲載された）にあったので、次席編輯者がそれを襲用したに過ぎぬということも言わなかった。何故なれば予は、その時、仮りにこの法学士の用いた論理を借りると、或る面白い結論を得るということに気が付いたからである。そうして予はただ笑った。論理に従えば、「尊王攘夷」とか、「忠君愛国」とか、「立憲君主制」とかいう言葉がすべて滑稽な、矛盾した言葉になる許りでなく、「日本の道徳は忠孝を本とす」ということさえ「吹き出」さねばならぬことになるのである。

やがて、卓子の端に腰かけて片足をぶらぶらさしていた

外電係兼国際論文記者が口を開くべき機会を得た。この学者——実際この人は、何事にも退嬰的な態度をとること、とその癖平生は人の意見には頓着なしに自分の言いたいことだけを言うといった風な傾きのあることとの二つの学者的な習癖を除いては、殆ど全く非難すべき点のない、温厚な、勤勉な、頭の進んだ学者で、現に東京帝国大学に講師となり、繁劇な新聞の仕事をやる傍ら、其処の商科に社会学及社会政策の講義をしているが、しかしその最も得意とする処は寧ろ国際法学であって、時にその米国に関する国際法に於ては自分が日本のオオソリチイであると、嘗て彼自ら子供らしい無邪気を以て語ったことがあった。彼の論文は時々彼等少数の国際法学者の学会から発行する機関雑誌の巻頭を飾ることがあり、且つ彼の従事している新聞は国際的事件に関する評論を掲ぐること最も多き新聞である。そうして彼はまた十数年以前に於て、日本に於ける最初のバイロン伝の著者であった。——この学者は、その専門的な立場から、今度の事件に対する日本政府の処置の如何が如何に国際上に影響するかということに就いて話し出した。若し噂の如く彼等二十六人をすべて秘密裁判の後に死刑に処するというようなことになれば、思想の自由を重んずる欧米人の間に屹度日本に対する反感が起るに違いない。反感は一度起ったら仲々消えるものでない。そうしてその反感——日本が憎むべき圧制国だという感情が一度起るとすれば、今後日本政府の行為——たとえば朝鮮に於ける——が今迄のように好意的に批評される機会がなくなるかも知れぬ。間接ではあるけれども、こういう影響は却って予期しない程の損失を外交上齎すことがないと言えぬというのであった。そうして彼は恰もその講座に立って学生に話す時のように、指の短い小さい手を以て一種の調子をとりながら、以上の意見に裏書すべき一つの事実について語り出した。それは露仏同盟が何故その最初の提議から数箇年の後まで締結されなかったかという事情であった。当時仏国の上下には、露国政府の残酷な圧制に苦しんでいる同国の自由主義者及び波蘭人に対する同情が非常に盛んであった。駐仏露国公使を主賓とした或る宴会に於て、仏国の小壮議員が公使の面前に一斉に盃を挙げて「波蘭万歳」を叫び、為めに公使が宴半ばに密かに逃げ出したというような事さえあった。この事情こそ、実に、両国の当時の国勢に於て、一方は国債市場を得る意味から、一方は対独関係から全く必至の要求であった所の同盟を、猶且つ数年の間延期せしめた真の理由であった。何故なれば、時の仏国政府にして若しも早急にこの同盟を締結しようとすれば、それに先立って先ず、「圧制者の賞与」という悪名を負わされ、おまけにその内閣の椅子を空け渡すだけの決心をする必要があったのである——。

恰度此処まで彼の語り来った時に、やや離れた卓子にいた一人の記者——その編輯している地方版の一つの大組が遅れた為めに残っていた——が、何を思ったか、突然椅子

を離れて、だらしなく腰に巻いた縮緬の兵子帯の前に両手を突込み、肩を怒らした歩き方で我々の方に近づいて来た。そうして、謡曲で鍛えた錆のある声で、叱るように言った。

『そういう議論は可かん。そういう議論を聞くと、吾輩も大いに口を出さねばならん』

彼は故落合直文の門下から出て新聞記者になった人で、年はまだ三十八九にしかならぬ癖に大分頭の禿げていると同じく、その記者としての風格、技倆も何時か知ら時代の進歩に伴わなくなっていた。ただ彼は主筆の親戚であった。そうして彼の癖は酔うて謡曲を唸ることと、常に東洋豪傑的の言語、挙動を弄ぶことであった。

我々三人は一様にその声に驚かされた。そうして黙って彼の顔を見上げた。彼は直ぐまた口を尖らして叱るような言葉を続けた。『ああいう奴等は早速殺して了わなくちゃ可かん。全部やらなくちゃ可かん。そうしなくちゃ見せしめにならん。一体日本の国体を考えて見ると、彼奴等を人並に裁判するというのが既に恩典だ……諸君は第一此処が何処だと思う。此処は日本国だ。諸君は日本国に居って日本人だということを忘れとる。外国の手前手前というが、外国の手前が何だ。外国の手前ばかり考えて初めから腰を抜かしていたら何が出来る。僕が若し当局者だったら、彼等二十六名を無裁判で死刑にしてやる、そうして彼等の近親六族に対して十年間も公民権を停止してやる。のう、△

△君、彼等は無政府主義だから、無裁判でやっつけるのが一番可いじゃないか。』

名指された予は何とも返事のしようがなかった。ただ苦笑した。我が国際法学者はこの時漸くその不意を食った驚きから覚めたように物静かに笑った。

『しかし日本も文明国なそうだからなあ』

『そうさ、文明国さ』「日本人」は奪い取るように言った。『しかし考えて見たまえ。建国の精神を忘れるのが若し文明なら、僕は文明に用はない。その精神を完全に発揮してこそ真の文明じゃないか。文明、文明といって日本の国体を忘れてるような奴は、僕は好かん。第一僕は今度のような事の起った際に、花井だの何だのいう、三百代言共が、その弁護を引受けるのが可かんと思うのだ。何処を弁護する。弁護すべき点が一つもないじゃないか。貴様達のような事をする奴を弁護する者は日本に一人もいないぞということを示してやらなくちゃ可かん……』

『それあそういう極端な保守主義の議論も』と、コッコッ卓子を叩いていた鉛筆を左の胸のポケットに挿して、法学士が言った。『日本というこの特別の国には無くちゃならんさ。寧ろ大いに必要かも知れん。僕は君のように無裁判で死刑にするの、罪を六族に及ぼすのということは賛成しない。すでに法律というもののある以上は何処までもそれによって処置して行かなくちゃならんと思うが、しかし日本が特別の国柄だということは、議論でなくて事実であ

る。――』

『君は僕の議論を極端な保守主義というが、何処が極端だ。若し僕の言う事が保守主義の議論とすれば、進歩主義の議論とは何か。幸徳伝次郎に同情することか』

『そんな無茶な事を言っては困る。僕はちっとも彼等に同情していないさ。欧羅巴でならああいう運動もそれぞれ或る意義があるけれども、日本でやろうというのは飛んでもない間違だからなあ』

弁当屋の小僧が岡持を持って入って来た。それは予がこの話の初まる前に給仕に誂えさしたものであった。小僧は丼と香の物の皿とを予の前に併べた。予等の話を聞いていた給仕の一人は茶をいれるべく立って行った。我が国際法学者はこの時漸くこの不愉快な場所から離れるべき機会を得た。『そうだ、僕も、飯を食って来なくちゃならなかった』そう言いながら卓子から辷り落ちて、いそいそと二重廻しを着て出かけて行った。法学士も大きな欠伸を一つして自分の椅子に帰った。予は黙って丼の蓋を取った。あたたかい飯から立騰る水蒸気と天ぷらの香ばしいにおいとが柔かに予の顔を撫でた。

地方版編輯記者も遂に予の卓子を離れねばならなかった。予は恰度、予の前に立ちはだかっていた一疋の野獣が、咆え、そうして牙を鳴らしただけで、首を廻らして林の中に入って行ったような安心を感じた。彼は自分の椅子に帰らずに、ストオヴの前に進んで行った。『日本人にして日本人たることを忘れとる奴がある。』突然こういう独語が彼の口から聞かれた。それは出て行った人と予とに対する漫罵であった。そうして直ぐ、『貴様も日本人だから、日本人だということを忘れちゃいかん。のう、貴様は犬の頭のような平ったい頭をしとるけれども日本人じゃ。のう。』こういいながら、椅子に腰かけて雑誌を読んでいた給仕の肩に手をかけて、烈しく揺り動かしているのが見えた。予は、「日本人」に対する深い憐れみを以て静かに箸を動かした。

しかしこういう極端に頑迷な思想は、或る新聞などによってやや誇大に吹聴されているに拘らず、ごく少数者の頭脳を司配していたに過ぎなかった。それはこの事件に対して殆ど何等の国民的憎悪の発表せられなかった事実に見ても明らかである。国民の多数は、こういう事件は今日に於ても、将来に於ても日本に起るべからざるもの、既に起ったからには法律の明文通り死刑を宣告されなければならぬものとは考えていた。彼等は彼の法学士と同じく決して彼の二十六名に同情してはいなかったけれども、而してまた憎悪の感情を持つだけの理由を持っていなかった。彼等は実にそれだけ平生から、皇室と縁故の薄い生活をしているのである。また彼等は、一様にこの事件を頗る重大なる事件であるとは感じていたが、その何故に重大であるかの真の意味を理解するだけの智識的準備を欠いていた。従って彼等は、彼等の所謂起るべからずして起った所のこの事件

（大隈伯さえこの事件を以て全く偶発的な性質のものと解したことは人の知る所である）は、死刑の宣告、及びそれについで発表せらるべき全部若しくは一部の減刑――即ち国体の尊厳の犯すべからざることと天皇の宏大なる慈悲とを併せ示すことに依って、表裏共に全く解決されるものと考えていたのである。そうしてこれは、思想を解せざる日本人の多数の抱いた、最も普遍的な、且精一杯の考えであった。

ただこれに満足することの出来ぬ、少くとも三つの種類の人達が別に存在していた。その一は思想を解する人々である。彼等はこの事件を決して偶発的なものであるとは考え得なかった。彼等は日本が特別な国柄であるということは、議論ではなくして事実だということを知る上に於て、決してかの法学士に劣らなかった。ただ彼等はその「事実」のどれだけも尊いものでないことを併せ知っていた。その二は政府当局者である。彼等はその数年間の苦き経験によって、思想を弾圧するということの如何に困難であるかを誰よりもよく知っていた。かくて彼等はこの事の起るや、恰も独帝狙撃者の現れた機会を巧みに社会党鎮圧に利用したビスマアクの如く、その非道なる思想抑圧手段を国民及び観察者の耳目を聳動することなくして行い得る機会に到達したものとして喜んだのである。そうしてその三は時代の推移によって多少の理解を有っている教育ある青年であった。彼等は皆一様にこの事件によってその心に或る深い衝動を感じた。そうしてその或る者は、社会主義乃至無政府主義に対して強い智識的渇望を感ずるようになった。予は現に帝国大学の法科の学生の間に主としてこの事件の影響と認むべき事情の下に、一の秘密の社会主義研究会が起ったことを知っている。また嘗て予を訪ねて来た一人の外国語学校生徒の、学生の多くが心ひそかに幸徳に対して深い同情をもっていることを指摘し、「幸徳の死は最も有力なる伝道であった」と言ったのを聞いた。また或る日、本郷三丁目から須田町までの電車の中に於て、二人の大学生――二人共和服を着ていたから何科の学生であるかは解らなかったが――が、恰度予と向い合って腰かけて、声高に元気よくこの事件について語るのを聞いた。話は電車に乗らぬ前からの続きらしかった。車掌に鋏を入れさせた回数切符を袂に捻じ込むや否や、小柄な、厳しい顔をした一人がその持前らしい鋭い語調で、『第一、君、日本の裁判官なんて幸徳より学問が無いんだからなあ。それでいて裁判するなどは滑稽さ。そこへ持って来て政府が干渉して、この機会に彼等を全く撲滅しようというような方針でやったとすれば、もう君、裁判とは言われんじゃないか』

『まあそうだね。それが事実だとすれば』と、顔の平ったい、血色の悪い、五分許りに延びた濃い頬髯を生やした一人が落付いた声で言った。『兎に角今度のような事件は、いくら政府が裁判を秘密にしたり、弁解を試みたりしたって駄目だよ。こういう事件が起ったということだけでただ

それだけでも我々の平生持っていた心の平和を揺がすに充分なんだからなあ。人の前じゃ知らん顔してるけれど、僕の方の奴にも大分揺がされてるのが有るようだぜ』
『そうだよ。昨夜山本（予はこの姓を明瞭に記憶している。何故なればそれは予の姉の姓と同じであるから）に会ったら、幸徳のお蔭で不眠症にかかって弱っていたっけ』
『不眠症とは少し御念が入り過ぎたね』
『何でも四五日前に誰かと夜遅くまで議論したんだそうだよ――無論今度の事件についてだね。するとその晩どうしても昻奮していて眠れなかったんだそうだが、それが習慣になって次の晩から毎晩眠られないんだそうだ。君もそんなに昻奮することがあるのかってからかってやったら、これでも貴様より年は一つ若いぞとか言って威張っていたっけがね』
こう話している二人の声はあまりに高かった。予はひそかに彼等のために、若しや刑事でも乗客の中にいはしないかと危んだ。しかしそれらしい者は見付からなかった。二人の会話は須田町に近づくまでも同じ題目の上を行きつ戻りつした。予は其処で他の車に乗換えなければならなかった。
かかる間に、彼等の検挙以来、政府の所謂危険思想撲滅手段があらゆる方面に向ってその黒い手を延ばした。彼等を知り若しくは文通のあった者、平生から熱心なる社会主義者と思われていた者の殆どすべては、或いは召喚され、或いは家宅を捜索され、或いは拘引された。或る学生の如きは、家宅捜索をうけた際に、その日記のただ一ヵ所不敬にわたる文字があったというだけで、数ヵ月の間監獄の飯を食わねばならなかった。そうしてそれらのすべては昼夜角袖が尾行した。社会主義者の著述は、数年前の発行にかかるものにまで溯って、殆ど一時に何十種となく発売を禁止された。
かくてこの事件は従来社会改造の理想を奉じていた人々に対して、最も直接なる影響を与えたらしい。即ち、或者は良心に責められつつ遂に強権に屈し、或者は何時となく革命的精神を失って他の温和なる手段を考えるようになり（心懐語の著者の如く）、或者は全くその理想の前途に絶望して人生に対する興味までも失い（幸徳の崇拝者であった一人の青年の長野県に於て鉄道自殺を遂げたことはその当時の新聞に出ていた）、そうして或者はこの事件によって層一層強権と旧思想とに対する憎悪を強めたらしい。乱臣賊子の弁護をするという意味の脅迫状を受取った弁護士達は、又実に同時に、この最後の部類に属する人々からの、それとは全く反対な意味の脅迫状及び嘆願的の手紙を受取らねばならなかったのである。
＊三　国民の多数は勿論、警察官も、裁判官も、その他の官吏も、新聞記者も、乃至はこの事件の質問演説を試みた議員までも、社会主義と無政府主義との区別すら知らず、従ってこの事件の性質を理解することの出来なかった

のは、笑うべくまた悲しむべきことであった。予が某処に於いてひそかに読むを得たこの事件の予審決定書にさえ、この悲しむべき無智は充分に表わされていた。日本の予審判事の見方に従えば、社会主義には由来硬軟の二派あって、その硬派は即ち暴力主義、暗殺主義なのである。

＊四　幸徳が此処に無政府主義と暗殺主義とを混同する誤解に対して極力弁明したということは、極めて意味あることである。蓋しかの二十六名の被告中に四名の一致したテロリスト、及びそれとは直接の連絡なしに働こうとした一名の含まれていたことは事実である。後者は即ち主として皇太子暗殺を企てていたもので、此事件の発覚以前から不敬事件、秘密出版事件、爆発物取締規則違反事件で入獄していた内山愚童、前者即ちこの事件の真の骨子たる天皇暗殺企画者管野すが、宮下太吉、新村忠雄、古河力作であった。幸徳はこれらの企画を早くから知っていたけれど、嘗て一度も賛成の意を表したことなく、指揮したことなく、ただ放任して置いた。これ蓋し彼の地位として当然の事であった。そうして幸徳及他の被告（有期懲役に処せられたる新田融新村善兵衛の二人及奥宮健之を除く）の罪案は、ただこの陳弁書の後の章に明白に書いてある通りの一時的東京占領の計画をしたというだけの事で、しかもそれが単に話し合っただけ——意志の発動だけにとどまって、未だ予備行為に入っていないから、厳正の裁判では無論無罪になるべき性質のものであったに拘らず、政府及びその命を受けたる裁判官は、極力以上相連絡なき三箇の罪案を打って一丸となし、以て国内に於ける無政府主義を一挙に撲滅するの機会を作らんと努力し、しかして遂に無法にもそれに成功したのである。予はこの事をこの事件に関する一切の智識（一件書類の秘密閲読及び弁護人の一人より聞きたる公判の経過等より得たる）から判断して正確であると信じている。されば幸徳は、主義のためにも、多数青年被告及び自己のためにも、又歴史の正確を期するためにも、必ずこの弁明をなさねばならなかったのである。

一切の暴力を否認する無政府主義者の中に往々にしてテロリズムの発生するのは、何故であるかという問いに対して、クロポトキンは大要左の如く答えているそうである。曰く、「熱戦、勇敢なる人士は唯言葉のみで満足せず、必ず言語を行為に翻訳しようとする。言語と行為との間には殆ど区別がなくなる。されば暴政抑圧を以て人民に臨み毫も省みる所なき者に対しては、単に言語を以てその耳を打つのみに満足されなくなることがある。ましてその言語の使用までも禁ぜられるような場合には、行為を以て言語に代えようとする人々の出て来るのは、実に止むを得ないのである。」云々。

猶予は此処に、虚無主義と暗殺主義とを混同するの愚を指摘して、虚無主義の何であるかを我々に教えてくれたクロポトキンの叙述を、彼の自伝（'MEMOIRS OF A REVOLUTIONIST'）の中から引用して置きたい。それはこ

の事件にも、はた又無政府主義そのものにも、別に関係するところのない事ではあるが、かの愛すべき露西亜の青年の長く且つ深い革命的ストラッグルが、その最初如何なる形をとって現われたかを知ることは、今日の我々に極めて興味あることでなければならぬ。文章は即ち次の如くである。——

私の留守の間に、ロシアの教育ある青年の間に、或るすばらしい運動が発達しつつあった。農奴制は廃止された。しかし、此の農奴制が存在した二百五十年の間に、家庭的奴隷制や、人間の個性の極端な無視や、父の専制や、妻や子供の偽善的服役などの風俗習慣が、まるで動きのとれない網のように発達していた。ヨーロッパのどの国にでも、十九世紀の始めには、甚だしい家庭的専制が、行われていた。サッカレエやディケンスの作物には其の十分な証拠が載っている。しかしこの専制がロシアに於ける程猛烈な発達を遂げたところは他にはない。ロシアの一切の生活は、其の家庭に於ても、上役と下役と、上官と兵卒と、主人と雇人との関係に於いても、総て皆な此の極印を押されている。此の怠惰な生活に養われた習慣や、物事の考え方や、僻見や、道徳上の卑劣が、一つの立派な世界を形づくって発達していた。そして当時の最も優れた人々と雖も此の農奴時代の遺物に莫大な税金を払っていた。

法律の力も斯う云った事情には何んの制裁をも加える事が出来ない。ただ此の弊害の根本を改革する強大な社会運動のみが、日常生活の風俗習慣を改善する事が出来る。そしてロシアでは、此の運動が、此の個人的反逆が——西ヨーロッパやアメリカのどの国に於けるよりも、遥かに有力な性質を帯びて、其の批評も、遥かに猛烈なものとなった。ツルゲエネフがその劃時代的作品『父と子』の中にナイヒリズムという名を与えたのは即ちそれだ。

此の運動は西ヨーロッパでは往々誤解されている。たとえば新聞などでは、此のナイヒリズムとテロリズムとがごっちゃにされている。アレキサンダー二世の治世の終りに爆発して、其の悲劇的な死によって終った革命的騒擾は、何処ででもナイヒリズムだと云われている。しかしそれは間違いだ。ナイヒリズムとテロリズムとを混同するのは、丁度ストイシズムやポジティィズムのような哲学運動と、共和主義のような政治運動とを混同するようなものだ。テロリズムは或る特定の歴史的時期に或る特殊の政治的闘争状態の下に生れたものである。嘗ってはあったが、今ではなくなった。又再び復活して、再び又なくなるかも知れない。しかしナイヒリズムはロシアの知識階級の生活全体の上に其の極印を押した。そして此の極印は来るべき多くの年月の間保存されて行くだろう。吾々が西ヨーロッパの生活に見る事の出来ないのを遺憾に思っている或る特殊の性質が、此のナイヒリズムによって、斯うした若い運動には免れ難い多少の欠点を取り除いた此のナイヒリズムによっ

て、今日ロシアの知識階級の大部分の生活に与えられている。又此のナイヒリズムは種々の形となって現われて、ロシアの多くの作家に西ヨーロッパの読者を驚かせた、彼の著しい真率、『声高く考える』習慣を与えた。

ナイヒリストは、何によりも先ず、『文明人の習慣的虚偽』とも云うべきものに挑戦した。絶対的誠実と云う事が其の特質であったのだ。そして彼等は、此の誠実の名の下に、彼等自身の理性が認め得ない迷信や偏見や風俗や習慣を、彼等自らも唾棄し又他人にもそれを要求した。彼等は理性の権威以外の一切の権威の前に膝まづく事を拒んだ。そして、有らゆる社会的制度や習慣を分析解剖して有らゆる種類の多少でも仮装した詭弁に反抗した。

彼等は勿論其の父の迷信とも絶縁した。彼等は其の哲学概念に於ては実証主義者であった。不可知論者であった。スペンサー流の進化論者であった。科学的物質論者であった。そして彼等は、情緒の心理的必然である単純誠実な宗教的信仰を攻撃する事は決してなかったが、宗教の面を被って民衆を導こうとする偽善に対しては、絶えずそれを無益な底荷だと云って容赦なくそれと戦って投げ棄てた。

文明人の生活は小さな習慣的虚偽に充ち満ちている。互に嫌い合っている人が、道で会えば、其の顔を仕合せそうな微笑みで輝かせる。しかしナイヒリストはそんな時には顔の筋一つ動かさない。そして実際会って嬉しい人にだけ微笑む。又ナイヒリストは単なる偽善に過ぎない有らゆる形式の外的礼譲をも嫌う。そして彼等は其の父の円滑な深切に対する反抗として多少の外的粗暴をも敢てする。彼等は其の父が理想主義的感傷主義者として誇らかに語るのを聞いた。が、同時に又、彼等は其の父が妻や子や農奴等に対して全くの野蛮人のように行為するのを見た。彼等は此の種の、ロシア生活の理想的状態に巧みに適応した、感傷主義に反抗した。芸術も同様の一掃的否定の中に捲きこまれた。人々は絶えず美を語り、理想を語り、芸術の為めの芸術を語り、美学を語り、そして喜んでそれ等のものの中に耽っている。然るに有らゆる芸術品は餓え渇えている農夫や職工から取りあげた金で買われているのだ。そして謂わゆる『美の崇拝』なるものは極めて卑俗な遊蕩心を蔽う為めの仮面に過ぎないのだ。と云う事はナイヒリストに嘔吐を催させた。そして現世紀の最大芸術家の一人であるトルストイは有力な芸術批評を作り上げた。ナイヒリストは、『一足の靴は、諸君の有らゆるマドンナよりも、又シェキスピアに就いての諸君の有らゆる讃嘆の言葉よりも、更に貴い』と云う一掃的断言を下した。

愛のない結婚や友情のない親密は排斥された。ナイヒリストの若い女達は、其の両親から人形の家の中に人形でいなければならぬように余儀なくされるよりは、又は財産の為めに結婚を強いられるよりは寧ろ其の家と絹の着物を棄て去る事を選んだ。彼女等はじみな柄の黒い毛の着物を着た。髪の毛を切った。そして自己の独立を得る為めに高等

の学校に通った。自分の結婚でないと云う事が分れば、即ち法律上では夫婦として認められながらもう其の間に愛も友情もないと云う事が分れば、直ぐに其の縁を断つ事を選んだ。そして往々彼女等は其の子供等を連れて貧困の中へ行った。習俗的生活の下に其の最善の自己を欺くよりも、寧ろ孤独と貧困とを選んだのだ。

ナイヒリストは毎日の生活の極く細事にまでも其の誠実に対する愛を実行した。彼等は交友の間の談話の習俗的形式を棄てた。そして多少の外的粗暴を以てしても、露骨に且つ簡明に自己の意見を吐いた。

イルクックで、私達は毎週一度或るクラブに集って舞踏をやっていた。私は暫くの間此の会に規則正しく出席した。が、だんだん仕事が忙しくなって、其の会に出る事が出来なくなった。或る晩、私の友人の一人の青年が、私が引続いて幾週間も顔を見せなかったので、なぜ私が此の会合に少しも来ないのだろうと一人の婦人に尋ねられた。『運動がしたくなると今では馬に乗っていますよ。』と私の友人は乱暴な答をした。『でも、舞踏をしなくたって、一時間や二時間私達と一緒にいらしたっていいでしょう』と婦人達の一人はやりこめようとした。『此処で何にをするんです？　あなた方と流行や縁飾の話しをしにですか？　そんなつまらん事はもう沢山ですとさ。』と私の友人のナイヒリストはしっぺい返しに答えた。『でも、あの方折々……嬢さんと会っていますわ。』と其処にいた若い婦人の一人がおずおずしながら云った。『そうです。……嬢さんは勉強家ですからね。クロポトキン君は其のドイツ語の稽古を助けてやってるんです。』と私の友人は有りのままに答えた。此の乱暴な批難は却って其の効果があった。イルクックの若い女達は、其後直ぐに、何にを読んでいいかとか何にを研究すればいいかとか云うような質問で、私の兄や友人や私などを攻め寄せるようになった。ナイヒリストは其の知人等にも同じような露骨さで物を云った。『彼の憐れなる民衆』などといくら云ったところで、此の民衆の安い賃銀の労働の上に生活しつつ、立派に飾られた室の中で呑気にお喋舌りしながら其の民衆を憫んでいるようでは、全くの偽善だ、と喝破した。又ナイヒリストは高位高官の役人に対しても、『君は君が支配する人達の幸福を希おうとしないただの泥棒だ。』と云うような露骨な事を云った。

ナイヒリストは又、つまらぬお喋舌りに耽ったり、自分の『女らしい』所作や巧みなお化粧を誇ったりする女を、随分手厳しく排斥した。『そんなつまらぬ事を話したり、入毛のまげを結ったりして、どうして恥かしくないんです？』と綺麗な若い女に露骨に云った。ナイヒリストは女の中に友人を、人形やお雛様でない一人格を見出したかったのだ。そして男共が喜んで『より弱い性』と見做して、其のまわりを取りかこんで、つまらん丁重なお喋舌りをする中へは、絶対に仲間入りする事を拒んだ。婦人が室の中へはいって来ても、ナイヒリストは其の婦人が疲れていると

か或は室の中に他の席がないとか云う時でなければ、立ちあがって其の婦人に席を譲る事をしない。婦人に対しても自分と同じ性の友人に対するのと同じようにした。或る婦人が、よし全く未知の人であっても、彼れの知っているそして彼女の知らない、何事かを学びたいと云う熱望を示せば、彼れは毎晩でも其の事を教えに大都市の端から端まででも歩いて通って行く。婦人には一杯の茶を出す為めにでも其の手を動かさない青年が、モスコーやセント・ペテルスブルグへ勉強しに来ている若い女には、自分が漸く見つけてそれで毎日のパンを得ている家庭教師の仕事を譲る。『女よりは男の方が仕事は見つけ易い。私が斯うして譲ってあげるのは、決して弱い者を助けるという俠気からではない。平等のものの間の些事です。』とだけ云いながら。

ロシアの二大小説家ツルゲエネフとゴンチャロフとは、其の作物の中に此の新しいタイプの人間を描こうとした。ゴンチャロフは其の『断崖』の中に、此の階級の実際のしかし代表的ではない一人をつかまえて、ナイヒリズムのポンチ絵を描いて了った。ツルゲエネフは此の新しいタイプの人間を非常に賞讃していて、それをポンチ絵化すると云うには、余りに立派な芸術であった。しかし其のナイヒリストのバザロフですらも、猶私達を満足させなかった。私達はバザロフは余りに刻薄だと思った。殊に其の年老った両親に対してあんまりだと思った。そして殊に又、私達は彼れが一市民としての其の義務を怠っているのを批難した。ロシアの青年はツルゲエネフの主人公の単なる消極的態度に満足する事が出来なかった。ナイヒリズムは、個人の権利を肯定し一切の偽善を否定すると共に、偉いなる共同利害の為めにのみ生きる自由なり高尚な男女を造る第一歩であった。そして彼等は、チェルニシェフスキィが芸術的には遥かに劣った其の『何にを為すべきか』の中に描いたナイヒリスト等の中に彼等自身のより真実な描写を見たのであった。

『奴隷によりて造られたパンは苦い』と吾々の詩人ネクラソフは歌った。実際青年等は、此のパンを食うのを拒んだ。そして奴隷の労働によって、それが農奴のでも又今日の工業制度の奴隷のでも、とにかく奴隷的労働によって父の家に蓄えられた富を享ける事を拒んだ。

全ロシアはカラコゾフや其の友人等に対する法廷の公訴状を読んで驚いた。巨万の財産所有者である、此の青年等は、三四人で一室に住んで、皆んなで一ヵ月十ルーブルを出ない暮らしをして、そして其の財産を自分等の働いている共同組合や共同工場などに費やしていたのであった。然るにそれから五年後には、ロシアの青年の、しかも其の中の最良の、幾千幾万のものが皆なそれと同じ事をしていた。フ・ナロード！　平民の中に！　と云うのが彼等の合言葉であった。一八六〇年から六五年までの間、殆んど有らゆる富裕な家庭に、其の古い伝統を維持しようとする父と、自分自身の理想に従って生活する権利を主張する子と

の間に、悲惨な闘争が続いた。青年等は軍職や帳場や工場から去って、大学所在の都市に群がり集まった。極く貴族的な家庭に育てられた若い娘等も、一文なしでセント・ペテルスブルグやモスコーやキエフなどに走って、家庭の束縛から免がれしめ又恐らくは更に他日夫の束縛からも免がれしめる何にかの職業を学んだ。彼等の多くは、幾多の辛苦艱難の後に、此人身的自由を得た。そして今彼等は其の自由を自分等の個人的享楽の為めにではなく更に民衆の為めに利用して、彼等自身を解放してくれた知識を民衆の間に広めようとしたのである。

ロシアの有らゆる都会に、セント・ペテルスブルグの有らゆる区内に、自己改善と自己教育との小団体が設けられた。そしてそれらの団体では、哲学書や経済学書やロシアの新歴史派の諸研究などが細心に朗読されて、其の朗読の後には果てしのない討論が続いた。一切の此の朗読と討論との目的は、如何にして彼等は民衆の為めに尽すべきか、と云う彼等の前に横わる大問題を解決する事であった。遂に彼等は其の唯一の方法は民衆の中にはいって、民衆の生活をするにある、と云う事にきまった。青年等は或は医師となり、医師の助手となり、小学教師となり、役場の書記となり、或は又農業労働者となり、蹄鉄工となり、樵夫となって、村々へ行った。そして其処で農民等と密接な生活をしようとした。若い娘等も小学校教師の試験を受け、産婆看護婦の術を学んで、幾百となく村々へ行った。そして其処で村の極貧者の為めに全く献身的に尽した。

彼等は社会改造に就いての何等の理想も、又革命などと云う事に就いての何等の思想も持っていなかった。彼等はただ農民等に読む事を教えて彼等を教育し、医薬を与え、又は何んとかして彼等が其の無知と貧窮との中から浮びあがる手伝いをして、同時に彼等からより善き社会生活に就いての彼等自身の理想を知ろうとしたに過ぎなかった。

私はスイッルから帰って、今や此の運動が其の高潮に達していたのを見た。

（註）嘛木本文中の英文はここでは除き、大杉栄訳『革命家の思出』（大正九年版）によって該当箇所を抄出した。

△クロポトキンの瑞西より帰ったのは千八百七十三年か四年であった。

△文中にあるカラコオゾフというのは、千八百六十六年四月、亜歴山二世がサンマー・ガーデンから出て来て馬車に乗ろうとしているところを狙撃し、狙いがはずれたために目的を達せずして捕縛された男。

相互扶助（ソリダリティ）という言葉は殆どクロポトキンの無政府主義の標語になっている。彼はその哲学を説くに当って常に科学的方法をとった。彼は先ず動物界に於ける相互扶助の感情を研究し、彼等の間に往々にして無政府的——無権力的——共同生活の極めて具合よく行われている事実を指摘して、更にそれを人間界に及ぼした。彼の見

る処によれば、この尊い感情を多量に有することに於いても他の動物より優れている人類が、却って今日の如くそれに反する社会生活を営み、そうしてそのために苦しんでいるのは、全く現在の諸組織、諸制度の悪いために外ならぬのである。権力というものを是認した結果に外ならぬのである。

この根柢を出発点としたクロポトキン（幸徳等の奉じたる）は、その当然の結果として、今日の諸制度、諸組織を否認すると同時に、また今日の社会主義にも反対せざるを得なかった。政治的には社会全体の権力というものを承認し、経済的には労働の時間、種類、優劣等によってその社会的分配に或る差等を承認しようとする集産的社会主義者の思想は、彼の論理から見れば、甲に与えた権力を更に乙に与えんとするもの、今日の経済的不平等を来した原因を更に名前を変えただけで継続するものに過ぎなかった。相互扶助を基礎とする人類生活の理想的境地、即ち彼の所謂無政府共産制の新社会に於いては、一切の事は、何等権力の干渉を蒙らざる完全なる各個人、各団体の自由合意によって処理されなければならぬ。そうしてその生産及び社会的利便も亦何等の人為的拘束を受けずに、ただ各個人の必要に応じて分配されなければならぬ。彼はこういう新組織、新制度の決して突飛なる「新発明」でなく、相互扶助の精神を有する人類の生活の当然到達せねばならぬ結論であること、及びそれが決して「実行し得ざる空想」でないことを証明するために、今日の社会に於いてさえそういう新社会の萌芽が段々発達しつつあることを挙げている。権力を有する中央機関なくして而もよく統一され、完成されつつある鉄道、郵便、電信、学術的結社等の万国的連合は自由合意の例で、墺地利に於ける、鉄道賃銀の特異なる制度、道路、橋梁、公園等の自由使用、図書館などに於ける均一見料制等は必要による公平分配の例である。これらの事に関する彼の著書にして更に数年遅れて出版されたならば、彼はこれらの例の中に、更に万国平和会議、仲裁裁判或る都市に実行されて来た電車賃銀の均一等の例を加え得たに違いない。『今日中央鉄道政府というようなものがなくして、猶且つ誰でも一枚の切符で、安全に、正確に、新橋から倫敦まで旅行し得る事実を見ていながら、人々は何故何時までもその「政府という権力執行機関がなくては社会を統一し、整理することが出来ぬ」という偏見を捨てぬのであろうか。又、本の冊数や、種類や、それを読む時間によってでなく、各人の必要の平等であることを基礎として定められた今日の図書館の均一見料制を是認し、且つ便利として一言の不平も洩らさぬ人々が、如何してそれとは全く反対な、例えば甲、乙の二人があって、その胃嚢を充たすに、甲は四箇の麺麭を要し、乙は二箇にて足るというような場合に、その胃を充たさんとする必要に何の差等なきに拘らず、甲は乙の二倍の代価を払わねばならぬという事実を同時に是認するであろうか。更に又同じ理に於い

て、電車の均一賃銀制を便利とする人々がその電車を運転するに要する人員の勤務の、その生活を維持するの必要のためである点に於いて、相等しきこと、猶彼等が僅か三町の間乗る場合も、終点から終点まで三里の間乗りつづける場合も、その「乗らねばならぬ」という必要に差等なきに同じきに拘らず、如何してそれらの勤務者の所得に人為的の差等を附して置くのであろうか。』クロポトキンの論理はこういった調子である。

編輯者の現在無政府主義に関して有する知識は頗る貧弱である。

（一九一一年五月）

新しい戯作者

山本飼山

『一体人というものに盲目的に過去の伝習やコンペンショナルな思想に附和雷同すべきものではない。厳正なる科学的批判の手段に依て自分自身の為めに自分自身の信条を作り出し、且つ此の信条を実際生活に現わすべきである。祖先の考えた通りに考え、祖先の生活した通りに生活するのは「真の道徳的の人間」を作る所以ではない。又如何にインデペンデントリに考えて自分自身の信条を作り出したとしても之を実行しようと努力もせず犠牲も払わぬような人間は不道徳的な奴である。』とは、千八百六十年代の露西亜哲学の倫理的方面を代表するピーター・ラブロフの言である。僕は今日の智的階級の若い人達に此の言を呈し度い。

僕は今日の智識階級の人々の聡明に驚かざるを得ない。彼等はよく知りよく語る。欧米に新しい思潮運動が起れば直に之を紹介してその聡明を誇って見せる。然し彼等は只知るのである。彼等は曾て彼等の智識言説に相応しい実行を一つもした事が無い。真面目に努力とか犠牲とかいう態度、否、気分すらも彼等は持って居ない。彼等は如何してもルージンの徒、オブロモフの輩である。実行の満足なしには生きて居られない僕等とは余程縁遠き人達である。

早稲田派の或る文士は嘗て『自然主義諸作家の作品を蔽うた徹底的な絶望の気分』というような事を云った。徹底的な絶望？　今日の文学者の実際生活に果して徹底的な絶望と云ったような強い色彩が見えるであろうか。徹底という言葉、絶望という言葉には余程痛切なトーンが含まれて居るべき筈である。然るに僕等の眼より見れば彼等の生活は『徹底的な絶望』に非ずして、『不徹底的な優柔不断』である。人間として当然会すべき実行本能を欠ける『オブロモフィスト』である。青い酒と若い女とに、対する時の

外、何等自己に対しまた社会に対して徹底的な態度に出ずる事のない生活——かかる生活に対して徹底的という形容詞を被せるのは、要するに自分達の圏以外社会人生に対する無智識無関心の結果だ。

今日の若い智識階級の人達は、人間として当然持つべき感情と理解力とを欠いて居るのではあるまいか。『青年よ、諸君は暖かき感情を以て社会を見ざるべからず』と露西亜の或る哲学者が云ったその暖かき感情を彼等は果して持って居るであろうか。僕等は彼等の心理状態に大なる疑惑を抱かざるを得ない。試みに彼等の作品を見よ。尽く是れ狭隘なる主我心の現われに非ざるはない。彼等は『痛ましや、パンは奴隷の手に作られたり』と叫んだ、ネクラソフの心情をも知らなければ、『世の中には苦しんでいる者が数限りなく在るのに、何故お前達は私に許り気をとられて居るのか』と云った死んだトルストイの心持をもくみ取り得ない芸術家である。彼等を欧米の——少くとも北欧の——文学者に比する時、彼等の血脈には所謂戯作者的血液の多量に流れて居るのに僕等は少なからぬ嫌悪の情を禁じ得ない。

ロバート・ハンタアはゴルキーを、評して云った。『ゴルキーはレヴォルターである、世の常の文士の如き書斎的の人ではない。彼は活動的な計劃の多いレヴォリュウショナリーである。若し諸君が一度ゴルキーを見るならば、諸君は直ちに彼の精力の源を解するであろう。彼の眼——烱烱たる探海灯を思わせるような眼——は事物の内面に透徹せずんば止まざる視力を持っている』と。日本にもゴルキーの作は随分紹介された。然し彼のような作家は一人も居らぬ。僕等は彼の如き男らしき、民衆に対して燃ゆるような同情心を切に要求する。

ステプニアクはツルゲネフを評して云った。『彼は決して如何なる教義をも説かない、然し彼はその申分なき芸術的筆致に依て生きて居る男女を捉えて、かかる男女の間に或る思想、或る教義を具体化するのである。而してかかる思想や教義は決して彼の心中より作り出さるるのではない。彼は之を現実の生活より取り、その汲めども尽きざる芸術家的本能を以て或る一のムーブメントを、漸くその時代の歴史的現象とならんとする初期に於て捉え来るのである。斯くの如くにして彼の小説は近代露西亜の思想史の芸術的概説であり、又その智的発達の有力なる道具である』と。斯かる作家を有せる露西亜の文壇は幸福であった。斯かる作家に材料を供給するを得た露西亜のインテレクチュアルスは光栄であった。僕等は日本の思想界を顧みて寂寞の感に堪えない。

緑蔭の家

荒畑寒村

○啄木遺稿を読む

啄木遺稿が出た。僕は啄木の歌の愛読者の一人であり、また啄木の生前折があったら会って見たいと思って居た。いま、遺稿を繙いて、切に此の感を新たにする。

遺稿の終りにある金田一京助氏の略伝を読むと、才華煥発、情恩奔放、二十八にして逝ける磊落不羈の詩人啄木が半生は、悉く是れ放浪と、不遇と、失業との悲惨なる記録を見る。そして此の実際生活の苦い盃に唇を触れた啄木の思想は、人生社会に対して何の洞察批判をも有せず、権力階級の組織的暴力の下に、一切の自由を奪われ、労力を掠められ意志を蹂躙せられつつある平民階級に対って、何の同情をも感動をも有する事なく、醜悪と、暴戻と、無恥と残忍との権化とも云うべき治者階級に対って、曽て反抗憎悪の念すら抱ける事なき世の常の詩人文士などとは、必然に異る処が多かった。僕は啄木がどれ程まで、吾々と思想を同じうし、感情を同じうし、態度を同じうせんとしたかは知らぬ。然し乍ら啄木の晩年の思想が、非常に社会主義に傾いて居たという事は、曽て噂に聞いた事があるし、またその詩には、非常にそういう傾向が見えて居る。げに巻頭の「呼子と口笛」の中の詩は、何れかその思想の片影その人格の現われでないものがあろうか。

げに、げに、「されど誰一人握りしめたる拳に卓を叩きて、'V Narod' と叫び出ずるものなし。」と叫んだ「果しなき議論の後」の心は、到底ブルジョアジーの青年や、文学を職業とせるものの解し難く、知り難き境地である。「人民の裡に！」と叫んで、無智と窮乏の底に苦しめる同胞の為に戦った、十九世紀中葉の露国青年の心情を解し、己れまたその経験を味うには、此の賤しむべき大日本帝国の青年は、余りに無関心、無智識、卑屈、怯懦である。若しそれ「ココアのひと匙」の中に、「言葉と行いとを分ちがたき、只一つの心を奪われし言葉の代りに、行いもて語らんとする心を、われとわがからだを、敵に擲げ付る心を、而してこは真面目にして熱心なる人の、常に有つ悲しみなり。」と云える如きは、まさに吾々の心、吾々の感情である。断じて彼の酒と、女と、無為より生ずる倦怠の煩悶より外、平民階級の苦悩努力に就ては何の知る処なき文学者の心情では無いのである。

更にその「墓碑銘」と題する一篇を読め。此の詩が啄木

の実際生活より来れるものか、将た単に空想の産物である乎は、ここに問わんとする処でない。然し乍ら、是は明らかにアナーキストの詩、労働者の詩である。「われには何時にても起つ事を得る準備あり……今日は五月一日なり、われ等の日なり。」若し啄木にして、アナーキズムに対する理解を欠き、労働者の心理に融合する処が無かったならば、恐らく是等の句は創られざりし筈である。

吾々が曾て因襲と瞞着との為に盲にされて居た時代に、甚だ熱烈な忠君愛国者であった如く、啄木もまた一と頃旺んに日露戦争の肩入などをして居たのが、だんだん社会の実状を知って来ると共に、その迷信から醒めて往たメンタル・プロセスが此の遺稿中の文字を通して、よく現われ居るのが面白いと思う。そしてその傾向は「硝子窓」「紙上の塵」「歌のいろいろ」等の中に散見して居るが、就中、「巻煙草」並びに巻末の「時代閉塞の現状」と題する論文の如きは、全く吾々の平生の議論と同じである。

○啄木の歌と哀果の歌

土岐哀果と、故石川啄木とは親友であった。そして文学者と称するもの、随って亦、その作物の大嫌いな僕も、此の二人の歌だけは、常に愛誦して措かないものである。

此の二人の歌は、その格調に於て非常な類似があり、その内容に於て多少の差異が認められるが、然しその差異は、種類の点ではなくして距離の上である。啄木の歌には平民階級の苦悩煩悶というようなものがやや朧ろ気ながらも見え、哀果の歌には中流階級の青年の社会の実状に対して目ざめた悲哀というようなものが、可なり濃い色に現われて居る。そしてその点が、僕の此の二家の歌を好む所以なのだ。

「啄木歌集」には遺稿中の詩に見られるような、アナーキスチックな、反抗的な、強い半面は無い。また世の常の詩人の詠むような、恋とか涙とかいう歌も随分多いが、それでも貧乏が何にも起させるサモしい心、長い単調な労働から放たれた後のガッカリした心、不如意に会う毎に、冷然と自ら嘲笑ったり、怒って叫んだり、黙って泣いたりする心、そういう感情が些しも飾らずに、極めて大胆率直に詠ってある。そして是等の歌を見、更に「呼子と口笛」の詩を読む時、それが全然チグハグなものでなく、やはりそこに一脈の相通ずる点あるを感ずる。

実務には役たたざるうた人と、我を見る人に金借りにけり。

気の変る人に仕えてつくづくと、わが世がいやになりにけるかな。

友よさは乞食の卑しさ厭うなかれ、餓えたる時はわれもしかりき。

はたらけどはたらけどなおわがくらし、楽にならざりじっと手を見る。

とある日に酒が飲みたくてならぬ如く、今日われ切に金をほっせり。
この次の休みに一日寝て見んと、思い過しぬ三年このかた。
何事も金金と笑いすごし経て、またも俄かに不平つのり来。
負けたるもわれとてありき争いの、因もわれなりしと今は思えり。
赤紙の表紙手ずれし国禁の、書を行李の底にさがす日。
本を買いたし本を買いたしとあてつけの、つもりではなけれど妻に云いて見る。
家に帰る時間となるを只だ一つの、待つ事にして今日もゆけり。
いろいろの人の思わくはかりかねて、今日もおとなしく暮したるかな。
百姓の多くは酒をやめしという、もっと困らば何をやめるらん。
何故こうかと悄なくなり弱い心を何度も叱り金借りに行く。
友も妻もかなしと思うらし病みても猶、革命のこと口にたたねば。
やや遠きものに思いしテロリストの、悲しき心も近づく日のあり。

哀果の歌はやや趣きが違う。彼の歌は飽くまで中産階級の青年の心理、無事に学校を出て、勤め人になって月給を貰って居る者の心理であるが、それと同時に自己の畢竟一個の労働者に過ぎず、且つその日常生活の、極めて非良心的なのを意識し、そして若し、良心の命令に従って行動しようとすれば、必然に平民階級の中に来らねばならぬと自覚し乍ら、猶そこまで踏み込めぬ、その矛盾と悲哀も亦よく現われて居る。

ストライキやまんともせぬ恐ろしさ、息をひそめて君を思うわれは。
働らく為に生くるにやあらん生くる為に、働くにやあらんわからなくなれり。
クロポトキンの「パンの略取」を半ばまで、読みしがその後読むひまの無し。
かれら今寒き街頭を帰るらん、日ねもすわれは家に眠れり。
日本に住み日本の国の言葉もて、云うは危うしわが思うこと。
手の白き労働者こそ悲しけれ、国禁の書を涙して読めり。
鼻先につきつけられし拳にも、怒り得ぬ如き世渡りをする。
毎日あさ電車に乗りて思うには、車掌よりわれすこしはよきかな。

働らくはさまで苦しくもあらぬかな、しか思うようになりし悲しさ。
ストーブの夜の股火のもの思い、かたき椅子にも二年あまりか。
哀しきは職業のあるその事を、幸福とするいまの心かな。

革命の軍歌としての文学詩歌、僕はそんなものは信じない。必要だとも思わない。社会革命は労働者の力だけで沢山だと思う。だから、啄木と哀果とが、(と云っても、一人はもう居ないが)更に進んで全然アナーキスチックな詩人になったとしても、若し単に文学の上、思想の上、文学の上だけのアナーキストに止まるならば、何の関係もないと思う。然し啄木の此の歌を見、彼の詩を読んだ僕は、啄木がもう些し生きて居たならば、文学に満足する事能わずして、吾々の間に来るか、若くは単独でか真に革命運動を起したろうと思う。そして今は空しき此の希望を、哀果の前途に繋ぐを得ば、大なる幸福であり愉快である。

(一九一三年七月「近代思想」)

相馬御風君に与う

時が来たのだ

大杉　栄

御風君。十一月末の「読売新聞」にあった、君の「人間性の為めの戦い」は、近来僕が読んだものの中での、最も会心したものの一つであった。

君があの文の中に紹介した小川未明君の近著「廃墟」は同君の他の多くの作物と共に、君の云うが如く、「物質力と暴圧力の為めに極度に虐げられつつある哀れな人間の叫び声」として、又「主観的には物質以外に彼等の生活を導く何物もなく、客観的には、物質生活の労苦以外何者もなき、現代の最も烈しく圧迫された階級の苦しいうめき声として。」そして矢張り君の云う如く、未明君が単に此の「暗黒裏の詩人」にとどまっているのを、甚だ物たらず感じながら僕も又愛読したのであった。

しかし、未明君の作物其者に就いて、又それに対する君

の批評に就いて、僕は今此処で君に話しかけようとするのではない。未明君に対する君の批評、推奨、及び誘導(此の最後の文字は或は未明君に取って迷惑かも知れんが)は僕は只、同君が親切なる一友人を有する事を、同君の為めに慶賀して置く。

僕が君に話して、僕の喜びと疑いとを君に伝えたいと思うのは、あの文中にある君の主張たる「此の根本的な個人革命と同時に、吾々は更に現代のあやまりつくられたる社会組織に向って根本的な革新を要求する。物質の力を人間性の力以上に置こうとしている現代の社会組織の革新を要求する」事に、就いてなのだ。

個人革命と同時に社会革命を主張するものは、僕に取って、決して初耳ではない。僕自身既に、幾度か、「近代思想誌上に於て、寧ろ此の両者を同一視するまでに論じて来た。近くは「鎖工場」の如き、「生の創造」の如き、最もこれを力説したつもりのものである。そして今後も猶、僕の新個人主義として、或は新社会主義として飽くまでも闡明して行こうと思う、僕自身の主張なのである。僕自身なのである。

此の点に於て、僕の友人を、君の中に見出したのだ。僕の喜びとは即ち此の事である。「自我の尊厳」や生の「創造」やは、近時の我が思想界、殊に文壇に於ける論議の基調となった。尤も此の「自我」や「生」の内容に於いては、多くの論議も未だ朦朧たるを免れないのであるが、兎も角も一代の精神が此の人間性の根本に向った事は、僕等自我論者にとって、歓喜に堪えない現象である。

けれども更に翻って思うに、此の自我論や創造論やが殆んど流行的に主張せられた原因の一面には僕等の平素最も嫌悪する逃避的態度が含まれていやしないか。これは逆言めいた観察ではあるが、逆言は往々にして正言である。

自我論や創造論の主たる原因は、君の所謂人間性の其の周囲の暴圧に対する叛逆である。然るに現在の多くの此の論者は、周囲の為に屈服される事はいさぎよしとせざるものの、猶それと戦う事を敢てするに至らず、又此の周囲を恐怖するの余り、それと接触する事だに厭悪して、遂に一切の周囲、一切の外界に眼を閉じて、ひたすらに其の自我の中に、蝸牛が殻の中にとじこもれるが如く、逃避し去ったものではあるまいか。そして此の殻の中で、或はすまし返り、或は豪語し、或はベソついているものではなかろうか。これは或は酷評に過ぎるかもしれない。しかし彼等の間にたしかに此の傾向のある事は、若し必要とあれば、僕はその事実を列挙する事に敢てしりごみはしない。

自我論や創造論やと共に、誰が周囲論を試みたか、社会論を試みたか。自我の権威の為には生の創造の為には、ひたぶるに突進して、一切の妥協と調和とを排斥すると云う人はある。けれども其の当然の結果たる闘争、殊に経済的闘争に就いては殆んど誰も皆な唖である。盲である。まれに芽原崋山君の如き、「万朝報」及び「第三帝国」に於

て、多少これを論じてもいるが、彼れはまだ政治の迷想を解脱しない過去の人である。

僕は、今日の多くの自我論や、生論が其の内容外包共に甚だ朦朧として不徹底なる主たる所以のものを此の周囲、殊に社会的周囲の忘却と及び其処からの逃避とに置かねばならぬと思う。

然るに君は、此の朦朧と不徹底とから、少くとも大体の形式に於て脱離して来た。君は個人革命と同時に社会革命をも要求した。恐らくは君も、社会革命を無視した所謂個人革命の遂に仇花に終るべき事を知ったのであろう。

けれども僕は、此処まで考えて、再び君の「人間性の為の戦い」を読み返した。そして君の社会革命論の根底に少なからざる疑惑を挟むに至った。

君は、現代の社会組織をあやまりつくられたるとなし、更にこれを詳言して「物質の力を人間性の力以上に置こうとしている」と云った。そしてこれが原因を指示して「近代に於ける物質的文明の急に拠る進歩が主なる原因であるか、或は人間の物質的欲望の過度な増大と云う事の方が第一の原因であるか、その何れにしても……」と云った。

随分曖昧なる言葉である。尤も言論の自由なき此の帝国に於ては、曖昧なる言葉は屢々必要である。しかしそれにしてもこれは余りに曖昧である。「物質の力を人間性の力以上に置く」も曖昧なれば、次の二原因も共に甚だ曖昧である。殊に其の原因の如きは、もっと遡って、もっと具体的に観ねば駄目である。あんな曖昧さでは、君の社会学的知識に、君の文明批評家としての資格に、よし疑惑を挟まれても、致し方がない事になる。

しかし僕は、その短い文章に於て、敢て多くを求めず、又さまでに君を責めようとは思わない。僕は、君が社会革命を論ずる以上は現社会の組織に就いて、其の経済的及び政治的組織について、もっと明確なる知識のある事を信ずる。そしてこれを信ずると共に、君がもっと明確に、現社会組織のあやまりつくられたる所以を、痛撃しなければならぬ君自身の義務を感ずる。

猶君は「今や新しい戦が、開始せられたのだ、時が来たのだ」と叫んだ。そして暗黒裡の詩人小川未明君に、「今や一刻も早く進み出で此の新しい戦に参加しなくてはならぬ」と警告した。

本当に時が来たのだ。未明君がもっとあかるみへ出なければならぬと同時に、君も「黎明期の文学」や「第一歩」から、真昼間の生の闘いの中に、第五歩第六歩の中に踏み出さねばならぬ時が来たのだ。

御風君。僕が君の中に見出した友人は、本当に僕の友人なのだろうか。僕が君に聞きたいのはこれだ。

（一九・四・一）

再び相馬君に与う

僕が君に公開状を書いたのは、先日も早稲田文学社で話したように、僕等から見れば実に身の毛のよだつような恐ろしい言葉や文句が、一向平気な様子で文壇に喋々せられているのを驚いたからの事である。其等の人々が何れ程の見識と覚悟とを以て其等の文字を筆にするのかを尋ねて見たいからの事である。其等の人々の中に、僕の真の友人を、僕と手を携えて個人革命との道に強行軍する真の友人を、見出したいからの事である。そして君が其の最初の槍玉にあがった訳なのだ。

個人革命と同時に社会革命が必要である事は、「実際少し真面目に考えている者なら誰でも気のついている事」には違いない。そうなければならぬ筈なのだ。しかし只だ気がついただけで、それに表白或は実行が伴わない間は、要するに何にもならぬ。君は少くともこれを表白した。今の世では此の表白と云う、事だけですら既に珍らしいのである。従って僕は此の表白をする人を尊敬する。そして又、表白其者に対する其の人々の自重を要求する。即ちホンの一寸気のついた位の事を、しかも自己にとり又社会にとっての一大事を、あんまり無造作に表白して貰いたくない。十分に深い且つ十分に強い内容のある表白であって欲しい。更に望むらくは必ず実行の伴った或は伴わんとする表白であって欲しい。

「まあ早い話がそんなものじゃあないか」位の戯談ではないのである。又個人革命を要求すると云う事は、僕にとっては、「そんな抽象的な境地に止まって居る事」ではないのである。君の云う如何なる点が今の人間に対し、社会に対して不満足なのか、如何なる事を吾々は本当に望んでいるのか、それを具体的に表白し、実行する、それが僕にとっての個人革命、同時に社会革命なのだ。只だ其の具体的が如何なる具体的なるかに就いて、僕と君とは別れるのだ。

君は僕を客観に走り過ぎて主観に足りないと云う。けれども僕の「鎖工場」をもう一度読んでくれ給え。果して僕が然るか否か。「現実する者の一切は道理ある者である。道理ある者の一切は現実する者である。ヰリアム第一世及び其の忠良なる臣下は、此の言葉を以て、当時の専制政府、警察国家、封印状裁判、言論圧迫等の有りのままの一切の政治的事実に、哲学的祝聖を与えたものであると解釈した。政治的事実ばかりではない。総てがそうなのだ。あの愚鈍なる普魯西人民に取ってはあの一切の現実が、たしかに必然のそして道理あるものであったのだ。俺自ら俺の鎖を鋳、且つ俺自ら俺を縛っている間、到底此の現実は必然である。道理である、因果である」これと「僕等が自我の創造を主張し、生の要求を肯定するに努めるのは、要す

るに内に誤まれる僕を破って、本当の僕を表現しようとするのだ」と云う君と何の差があるか。

君は又僕を創造的生活其者を味おうとする方は少しおろそかだと難じた。これに就いても僕の「生の拡充」をもう一度読んでくれ給え。「実行の前後には勿論其の最中と雖も猶当面の事実の背景が十分額に映じている実行である。実行に伴う観照がある。観照に伴う恍惚がある。恍惚に伴う熱情がある。そして此の熱情は更に新しき実行を呼ぶ。そこにはもう単一な主観も、単一な客観もなく、主観と客観とが合致する。これがレヴォリュショナリイとしての僕の法悦の境である。芸術の境である。且つこの境にある間かの征服の事実に対する僕の意識は、全心的に最も明瞭なる時である。僕の自我は、僕の生は、最も確実に樹立した時である。そして此の境を経験する度毎に、僕の意識と僕の自我とは、益々明瞭に益々確実になって行く。生の歓喜があふれて行く。」此の僕の味い方に間違いがあると云うのか。これでもまだ足りないと云うのか。僕の芸術家的生活に対するアンチパシイは、彼等の多くが此の実行の法悦を顧みないで、観照の法悦にのみ耽る傾向に同感し得ないから起るのだ。

此等の点に就いては、君は僕の「欠点に対して誇大的に云い過ぎた」のではない。恐らくは所謂社会主義者に対する君の定心から、僕自身をも強いて其の仲間入りをさせて了ったのだ。迷惑至極である。僕は飽くまでも主観的に行きたいと同時に又飽くまでも客観的に行きたいのだ。物の本当の調和は、其の二つが全力を尽して衝突し合った。其の後の成行である。

此処までは君の定心から生じた僕に対する誤解である。そして此処からは、それと同時に亦、恐らくは君の客観的理解の不明確から生ずる、君の態度の曖昧さを自白するものである。

君は現代社会の誤りつくられたる所以を「近代社会の経済組織たる資本家制度や伝習的国家組織」に置く事に異存はないらしい。君は僕等の此の見解に対して「殊更楯をつく必要も見出さない」と云っている。けれども此の見解の内容に対する君の理解に就いては遂に一言も聞く事が出来なかった。「罪は外存の社会制度にあると同時に僕等自身に寧ろより多くあるのだ」と云った所で、其の「僕等自身」を腑甲斐なからしめる外存の社会制度に就いて明確な理解のない間は、「本当の僕自身の表現は」要するに不可能である。自己の表現は社会の中でなければ出来ない。自己其者は社会の中で発生し発達したのだ。随って、社会に対する明確な判断のない間、個人としての明確な態度はあり得ない訳である。

僕は何によりも先ず個人としての態度を君から教わろうと期待していなかった。今日の社会制度に対する君の理解の程度を聞きたかったのだ。個人としての態度はそれからの事である。団結の事も反逆の事も君が「十分に合点の行

く」ようになるのは、その後の事である。君は「云いたい事の十分の一も云えない、改めて詳しく書く」と云う。願くば其時には僕の此の希望を第一に満さして戴きたい。そして其上で僕を十分に論ずる事としよう。これは君と僕の二人だけの問題じゃない。紳士閥中の進歩思想家と平民階級中の革命家との久しい間の問題なのだ。此の問題の解けない間、君と僕とは、紳士閥の進歩思想家と平民階級中の革命家とは、せいぜい敵味方の友人となるに過ぎない。味方同志の友人とはなれない。お互に剣をとって殺しあわなければならぬ悄けない友人に過ぎない。

僕等が敵として戦わねばならぬ相手があるのかないのか。予め敵を認めた僕と、認めない君と、何れが正しいか。これも其の後の問題である。猶最後に君が云った、君と僕との態度の差の如きは、君をも僕をも何れ劣らず偉そうに見せかけた、君が独りぎめの差にすぎない。もっと明礁な差が、更に今後の吾々の議論、及び生活の中に現われねばならぬ。

何だかまるで弁解ばかりになって了った。紙面と時間の都合で、今はこれだけにとどめて置く。そして君のこんどの文を待つ。

（一九一四年二月）

労働運動と個人主義

大杉　栄

一　センディカリスムと個人主義

自由派経済学の泰斗ルロワ・ボリュは、其の隷属する紳士閥階級に最も忠実なる学者であるが、嘗って其著「集産主義」によって極力社会主義を駁論し、猶其の最後の数章によってセンディカリスムの撲滅を主張している。そして其の一節に、センディカリスムの個人主義を説いて、次の如く云っている。

「労働総同盟は、多数と云う事にも、亦平等と云う事にも、甚だ大なる侮蔑を宣言している。普通選挙も亦、其の蔑視を免れ得ない。其の常に口癖の如く罵倒する所は、即ち彼の『多数党』と云う言葉である。そして常に此の『多数党の迷信』に反抗している。

労働総同盟は只だ、大胆猛烈なる少数者の不断の活動の外に、何物をも期待していない。されば此の労働総同盟の

参謀本部を形づくる労働者及び旧労働者は、此点に於て甚だニイチェと相似ている。尤も彼等は、ニイチェの思想などに就いては、全く無知であるのだが。」

此のセンディカリスムとニイチェスムとの類縁は、ボリュのみならず、猶多くの学者等の承認する所であるが、更にセンディカリスムの此の主張を明かにする為めに、其の主なる運動者の一人であるブウジェの言葉を、等しく亦ボリュによって次に引用する。

「労働組合運動は多数党の議論を否認するに在る。若し多数者の言を採用せんと欲するならば、労働組合に加入していない労働者の大群のある事を忘れてはいけない。されど若し多数者の権利を尊重せんとならば、労働組合に加入した労働者は常に他の臆病者の大群に随って行かなければならぬ事となる。常に掠奪に満足する卑怯者に随って行かねばならぬ事となる。しかし自覚せる労働者は、意志の実体以外に、周囲の多数者の勢力を受けない叛逆者以外に、此の社会に価値のあるもののない事を知っている。そして有らゆる労働組合の加入者は、総て皆な多少の叛逆者である。

これは労働組合内に於ても社会に於けると同様である。只だ活動的なるもの、労働組合の事業に従事するもの、伝道を為すもののみが頼りになる。集金者に迫られて醵金をしながらも、兎も角も会費だけは払って行くと云う様な羊の如き労働組合員は、其勢力を労働組合内に持つ事が出来ない。彼等は自ら此の勢力を拒んでいるのだ。

けれども一度機会が来れば、此の無限に多産なる少数者は、其の放射的勢力によって、羊の如き労働組合員に活力を与え、且つ労働組合の外にある全く自覚せざる群集をも其の勢力の中に引き入れて了う。斯くして少数者の活動の力が現われて来る。」

ボリュの云うが如く、センディカリスト等は、ニイチェの思想などに就いては、其の他の多くの科学者や哲学者の思想に就いてと同じく、全く無知であったのだ。しかし斯く無知にして其処に達し得た所に、彼等の思想の、極めて大なる真実味と強味とが含まれているのだ。彼等の知識や思想は、他人から教え込まれた、若しくは書斎の中から写し取って来たものではない。彼等の知識や思想は、人間味を離れた抽象的真実の、只だ頭の中でのこね廻しから出て来たのではない。彼等は只だ其の生活の困難から、瀕死の状態から遁れ出でんとする、より善き生活への本能的憧憬と活動とによって、其の月々膏血滴る、生活と闘争との間に、自己と其の周囲との社会的関係を自覚し、知識し、思想し来ったのだ。

此の事実は、先きに早稲田文学四月号所載「個人主義者と政治運動」の中に詳述し、更に論集「社会的個人主義」の中に再録せんとしたが、不幸にして其部分だけを抹殺するの余儀なきに至った。従って今僕は、労働者が如何にし

て其の独自の社会的知識と思想とを獲得し来ったかに就いて、労働運動史上の事実によって、それを詳説する自由を持たない。そこで猶詳しくは、漸くにして発売禁止の厄を免れた早稲田文学の同号と、及び「労働運動とプラグマティズム」との参照を希って置く。後の論文は、此事を全く哲学的に説いた、僕等の思想と行為との方法論の暗示である。

センディカリスト等は、信者の如く行為すると同時に、又懐疑者の如く思索する。強烈なる生活本能に従って行為しつつ、其の行為の自己に与うる結果に就いて、出来るだけの判断に耽る。多くは直覚より成る彼等の思想は、此の行為と判断との全力的結実の集積である。そして僕は今、此の集積の中の一つである。彼等の個人主義に就いて、彼等の言説によってではなく、寧ろ彼等自身の生活によって、説いて見たいのだ。

しかし此の生活と云っても、斯くの如き生活に到着した経路は先の理由によって省略して、其の到着点の事実に就いてのみ説くの已むを得ない事を甚だ遺憾とする。そして又、其の到着点に就いても、先にポリュやプウジェの言を引用したるが如き運動方法の上の事実ではなく、選びに選んで最も無事らしいと思われる彼等の団体の組織だけに限るの已むを得ない事を亦甚だ遺憾とする。

二　労働総同盟の組織

国家の中に国家あるを許さず、国家は唯一不分割性のものであるとは、近世国家学の根本的一原則である。然るに仏蘭西の国家は他の諸国家に於ても此の例外（と云うよりも寧ろ規則）はいくらでもあるが、其の国家の中に強大なる組織の一敵国を潜ませている。仏蘭西の参謀本部は、諸隣国に対する攻防の作戦計画に従うと共に、又国内の此の敵国に対する作戦にも怠る事が出来ない。嘗てモロッコ問題の為に仏独国交の危機に瀕した際、仏蘭西の諸革命党殊に労働総同盟の戦争防止総同盟罷工案に対して、極めて周到なる鎮圧の作戦が、参謀本部の一室で窃かに講ぜられた事は隠れもない事実である。

仏蘭西の此の労働総同盟、即ち La Confédération général du Travail（普通には略して C. G. T. と云う）は、其の兵員一九〇四年には僅かに十六万に過ぎなかったのが、同十年には俄かに三十六万に達した。そして此の仏蘭西国家内の一敵国は、其の生れ出て来た民主的社会とは全く相異なる独自に創造した新組織を持っている。しかもセンディカリスト等は、或る科学的発見や又は哲学的体系に基いて、此の独自の組織を創り出したのではない。彼等は只だ、より善く生きんとする強烈な本能から、其日々の生活と闘争との必要から斯くの如き組織を築き上げて来た

のだ。そして自ら築き上げて来た此の組織の中に、彼等自身の社会的創造力を発見したのだ。そして彼等は、自らの組織を新社会建設の萌芽であると為し、更にそれを充実し拡張して、遂には一般の社会組織とまで成長せしめんとしているのだ。

労働総同盟の組織の根本的原則は、経済的利害の一致を以て、各組合間の唯一の結縁と為すに在る。即ち先ず同一職業又は同一工業の従業員は、其の政治的、哲学的、宗教的意見の如何に係らず、又人種や国籍や、性の如何に係らず、只だ其の賃銀労働者であると云う資格だけで、労働組合(Syndicat センディカ)に加盟する。されば労働組合に加盟する労働者は、或は政綱に調印するのでもなく、信仰告白をするのでもなく、又信仰箇条に従うのでもない。只だ其の社会に於ける地位の上から余儀なくされている関係に入るのだ。斯くして其の仲間と団結しつつ、生存競争場裡に自己の強大を謀ると共に、又他の仲間の強大にも寄与する事となる。

斯くして組合内の労働者は、其の共通利害の為に相結ぶ外には、其一切の生活に於て全く自由なる個人である。そして此処から、万人が生産と消費との経済的関係の上に協力して、其の生活の基礎を固めた上で、各人の自由自主なる発達を期すると云う、其の社会的個人主義の根本的思想が生れて来たのだ。

此の自由自主なる個人の相集った、そして労働総同盟の組織の単位である労働組合も亦、他の労働組合と相結ぶに当っては、其の共通利害の上に協力するのみで、全く其の団体の自由自主を保留する。然るに此の労働組合は又、其の組合員の利害のみならず、更に其の職業若しくは工業に従事する一般労働者の利害をも、常に代表する。即ちセンディカリスト等は、旧い同業組合の狭い利己心を棄てて更に労働階級と云う広い眼界の下に立つ。されば種々なる職業若しくは工業に属する、同一地方の種々なる労働組合が集って、更に労働組合地方同盟(Bourse du Travail ou Union des Syndicats)を形づくるに及んでは、其の同盟は少なくとも其の地方に於ける有らゆる労働者の利害を代表する事となる。そしてセンディカリスト等は、此の地方同盟の組織の中に、今日の市町村に代るべき、将来社会の単位を見ている。

労働組合は又各種の労働組合の結合たる此の地方同盟の外に、同種の即ち同職業若しくは同工業の労働組合の結合たる同業労働組合全国同盟(Fédération nationale corporative)を形づくっている。そして此の各地の地方同盟が一大連合を成すと共に、又各同業全国同盟も一大連合を成し、此の二大連合が相依り、相扶けて、更に労働総同盟の大組織によって終っている。

斯くして仏蘭西の革命的労働者団体は三段に組織され、其の第一段は労働組合、第二段は地方同盟及び全国同盟、

そして最後の第三段は労働総同盟となる。即ち此の労働総同盟の中に、労働階級の一切の組織が、集中される事となる。労働階級の一切の組織は、此処に相接触し、其の経済的活動を結合し、強固にし、又普及させる。しかし個人主義的原則を以て出発した其の組織は、最後までも矢張り此原則を以て一貫している。即ち総同盟は、他の所謂民主的団体に於けるが如き、指揮命令の機関ではない。只だ労働階級の革命的活動を組織立たしめ、強大ならしめる機関に過ぎない。従って他の所謂民主的団体に於けるが如く其の中央集権によって、各単位の活力を抑圧するものではない。其処には連絡がある。しかし中央集権はないのである。しかし命令はない。連合主義は到処に行き渡っている。各個人は、各労働組合は、各全国同盟は、各地方同盟は、総て全く自由自主である。又其の衝動も上からは来ない。何処かの最も活力ある或る一点から出て、四方に益々強く且つ益々大きく活動して行く。

又此等の団体は、先ず総同盟、次に全国同盟、若しくは地方同盟そして最後に労働組合と云うように、上から下に又複雑から単純に組織されたのではない。反対に、先ず労働組合、次に地方同盟若しくは全国同盟、そして最後に総同盟と云うように、下から上に又単純から複雑に組織されたものである。そして其の組織の各段毎にも、又其の各段内にも、常に自由なる個人的発意が、最も大なる役目を為している。即ち労働総同盟の組織は、大体に於て、自主と連合との社会的個人主義の根本原則に基づく。

三　労働者の社会的創造力

往々僕等は、何故に殊に労働者の間に入って彼等と事を共にせんとするのか、と云う質問を受ける。

此の理由の第一としては、僕等は経済的進化の傾向を観て、労働者が新社会建設の中堅たるべき事を知識するからである。今日の資本家社会は、其の経済制度の必然の結果として、即ち社会的生産と個人的分配との矛盾（「社会的個人主義」中の「現代社会観」参照）が益々増大するに従って、遂に何等かの根本的改革を施されなければならぬ必要に迫られている。此の改革は、今日の社会制度によって何等かの特権若しくは利益を受けているものによってではなく、其の為めに最も不利益を蒙むるものによって、計画され又実行されなければならぬ。そして労働者は、此の地位にあると共に、更に社会の原動力たる生産其者を掌中に握っている。彼等は只だ欲しさえすればいいのだ。

此の経済的及び社会学的理由は、僕等をして知識的に労働者の群に投ぜしめる。しかし又、既に今日の社会制度によって多少の利益と特権とを有する僕等の如き中等階級の徒が、斯く労働者の群に投ずると云うには、此の知識的理由の外に、更に他の重要なる動機がある。

此の知識と相俟って発達したものでもあろうが、僕等に

は周囲の圧迫に就いての敏感と反抗本能とが、先ず僕等をして起たしめた、恐らくは第一の理由であろう。幼時からの、父母や、年長者や、教師等の圧迫。学校を出てからの世間や生活の為めの圧迫。僕は僕自身の成長を顧みて、全く此の圧迫とそれに対する反抗との連続であったかの如き感じをする。そして僕は、主として社会主義から得た社会学的及び経済学的知識によって、此等の圧迫の殆どすべてが同一根底から来る事を教えられ、且つそれに対する反抗を是認する道徳を与えられたのだ。

同時に僕等は又、僕等の耳目に触れる労働者階級の人々の無知と愚昧と困窮とに対して、一種の人道的熱情を感ぜざるを得ない。多くの社会主義者又は無政府主義者は、自己の受くる圧迫に就いてよりも、寧ろ先ず此等の労働者の生活状態に憤激して、所謂労働運動に身を投じた事であろう。僕自身の行き方はこれと反対であったようだが、しかし其の僕としても、此の人道的感情には最高の尊敬を払い、又僕自身にもそれが多分にある事を否めない。

けれども僕は、殊に最近の僕は、此等の諸理由によってよりも、更に最後の他の一大理由によって、労働運動に引きつけられている事を感ずる。そして此の理由が、最近の僕の、労働運動に対する態度を決定しているように思われる。それはクラポオトキンなどの著書によっても、既に古くから僕の社会学的知識とはなっていたのだが、それが本当に僕の脳髄にも心臓にも深く浸み込んで来たのは、此の四五年以来の事である。即ち僕は、労働者の悲惨な生活に対する憐愍とか同情とかではなく、却って其の生活の中に或る偉大なる力を見出して、其の力を讃美し、又自らも其の力の中に同化して了いたいと感ずるようになったのだ。

五年以前の二年半ばかりの獄中生活の間に、僕は少しく露西亜文学に親しみを覚えて、トルストイ（若しくはダスタイエフスキー）、トウルゲエニエフ、及びゴリキイの各々の対平民的態度に就いて、僕にとっては甚だ興味深かった、比較観察をした事がある。そして殊に僕は、トルストイやダスタイエフスキイが平民の温順と忍辱とに、ゴリキイが平民の放恣と反抗とに、各々人生の真理を、認めた事に、最も興味深い対照を感じた。僕は、トルストイやダスタイエフスキイと共に、甚だ温順の徳を尊敬するのであるが、奴隷的境遇にあるものの忍辱は、却って甚だしき不徳であると考えた。そして寧ろゴリキイの主人公の放恣と反抗とに強い同感を覚えた。猶此の事に就いては、近くダスタイエフスキイ論を書いて詳論する積りである。

兎に角僕は、獄中に於ける此等の文学書の影響と、及び其の以前から続けていたセンディカリスムの研究とによって、労働者の有する強烈なる生活本能と反抗本能と、及び其等の本能が行為となって現われた結果の、偉大なる個人的及び社会的創造力に打たれたのだ。仏蘭西のセンディカリスト等が、如何に刻苦して其の血と肉と骨とを以て、自

己及び其の自己の処るべき小社会を築き上げて来たかは、「個人主義と政治運動」の中に詳説した。又先に云った労働総同盟の組織の如きも、其の好適例である。

僕はそれ等の事実を見て、労働者の此の力を讃美すると共に、自らも亦此の力の中に同化し了りたい念を禁じ得なくなったのだ。そして又、労働者の間の此の力を感じ始めて、先きに云った経済的進化の傾向とか、労働者が新社会建設の中堅となるとか云う知識が、本当に僕の全身の中に活躍して来たのだ。

遠い仏蘭西の事ばかりではない。僕は既に、この日本の国に於ても、労働者の此の力の事実を見ている。少なくとも個人的に、斯くして自らを創造し来たった労働者を、少数ながらも僕の周囲に見ている。そして僕は、斯くの如き労働者と共に、更に社会的創造に入るべく、勇敢なる少数者たらん事を期している。

（一九一五年十月）

III

詩・短歌・俳句

大塩中斎先生の霊に告ぐる歌

児玉花外

明治卅六年四月六日大阪中之島公会堂に於て開きたる日本最初の社会主義者大会にて即吟したるもの

時維れ天保八年の
春は二月の十九日
中斎先生大塩が
闇の秕政を憤り
民の困苦を救わんと
洗心洞に燃え立ちし
勇壮義挙の記念日ぞ。

天なる聖き靈の火か
地獄の底の罰の火か
社会の腸を火にかけて
いざや腐敗をとどめんと
血性男子大塩が
至誠一念火を放けて
鬼神感泣せしその日なり。

春なお寒き朝風に
「救民」の旗翻えし
賄賂貪ぼる有司等や
餓えたる民に涙なき
富者の酣酔さまさんと
鳴らす大砲、叫び声。

聞けや　暴吏等　富豪よ
涙もあらず血もなくば
無感無触の死屍と
汝の身をば焼きやらん
慾や深くば灰の山
黄金ほしくば火ぞやらん
轟く大砲、見よ焦土。

嗚呼、燃えし火や銃の音
夫れも昔の夢と消え
今は人謂う文明の
世とはかわりし大都会
砲の音より烈しきは
車の響き人人の

競い争う修羅の火や。
黄金は照らす政治界
地主、資本家跋扈して
社会の蔭に民ぞ泣く
哀れ今の世君あらば
悲憤三斗の血を吐かん
嗚呼、金権は地に勝ちて
正義、自由は死せんとす。

陽春花は開けども
社会の底は冬にして
降り積む雪に圧せられ
哀れ民草萠えいでず
無残、蕾の美わしさ
貧家の少女金ゆえに
操の花ぞ破らるる

同じ島根に住みながら
人と人とが残害す
皇天何ぞ無情なる
天保の世のそれならで
今東奥に饑饉あり
嗟呼此時に君あらば

いかりて天も地も焚かん。

今年三十六年の
春も四月の六日の夜
墓場に君を起さんと
君を演壇より呼ぶならじ
枯骨は死より甦らんや
再び君を火の中に
惨死さするに忍びんや。

西に東に漂泊いて
よしあし知らぬ浪華なる
吾れ大阪に来し夕
入日の雲を見てしより
おだやかならぬ吾胸や
夕焼雲を仰ぐたび
胸は燃えては君慕う。

爪先立てて眺むれば
君が焼きたる難波橋
天満は彼方、公会堂
吾等同志が世に慨し
声を挙ぐるの社会主義
怨恨尽きざる君が霊

この夜この会、来りたすけよ。

（一九〇三年八月「社会主義詩集」）

紡績工女

児玉花外

東の窓よりながむれば
山はみゆなり故郷の
西の窓よりながむれば
河はみゆなり流れゆく
工場の中は塵たちて
雪と降り舞う綿屑は
髪に愁と積りつつ
脚は立木よ折るるまで
機械操つる苦しさよ。
女の身にて猿啼く
山は一夜に越えもえん
嫁入すべく金ためて
衣をも帯も櫛さえも
買いて帰らんそれまでは
家の戸あけんものかはと
誓って出でし我村の
土をいかでか踏みうべき。

涙の珠のかずよりも
多き痛みと悲みに
骨は刺されて肉そがれ
かくてある日の耐えがたや。

『つらいしごとも
　今晩かぎり……』
節おもしろく歌えども
鐘の響にさまされて
臥床はなれば哀しやな
地獄にゆくらんここちして。

東の山をいでて太陽は
西へ西へと月もまた
われは東の古里に
かえるもつらし西の方
水に入るべき運命かと
夕暮ごとに窓により
川にむかいて泣く身かな。

（一九〇三年八月「社会主義詩集」）

運転手嘆きの歌

児玉花外

まわれ、まわれ、まわれよ車輪（くるま）
鉄の車よ廻らずば
命の車止みぬべし
まわれ、まわれ、まわれよ車輪
腕の力の続くまで

歳はめぐりていと疾（はや）く
車と共にめぐりつつ
多くの年を経たりけり
移り進むは世なれども
吾や変らで老いんのみ

悒欝（いぶせ）き暗き工場に
花と快楽（けらく）に背きつつ
人の心の冷たさの
鉄の機械に屈みつつ
生命（いのち）の糧（かて）を求むなり

若き誇りは昨日今日
鉄の錆よりいや疾く
おのが頭（かしら）に雪ぞ置き
破損（こわ）る機械に先だちて
疲弱（つか）れて老て捨てられん

汗と涙を油にて
車廻すも幾ばくか
まわれ、まわれ、まわれよ車輪
年もまわれよいと早く
屍を墓に運ぶべく。

（一九〇三年九月「社会主義詩集」）

労働軍歌

児玉花外

神は天地を創造（つく）りたり
吾等は強き腕により
雲に聳ゆる楼閣（たかどの）や

地上の家や衣や食も
世界の貨財つくり出す
吾等も一の造物者
蔭に隠れて善を為す。

月雪花に比うべき
都の偉観壮観も
吾等が飾る美術なり
機械の鉄輪（くるま）まわし出す
世界文明のそが為に
社会進歩のそが為に
吾等は名無き英雄ぞ。

誰かに問わん、忘恩の
世は何故に吾等をば
奴隷の如く卑しむる
弊衣粗食に労働し
生命（いのち）縮めて死に瀕す
吾等は友の仆（たお）る見て
日々に涙と血潮湧く。

吾等は人ぞいつまでか
不幸不運を忍ばんや
無情無道の資本主の
富の犠牲に終らんや
今ぞ、習慣はた制度
不利の貧者のそが為に
不法を挙げて絶叫（さけ）ぶべし

いざや吾友、団結し
起ちて権利を主張せよ
正義、自由を圧すれば
嗚呼何物も敵とせん
貧富幸福ひとしうす
愛と平和の社会主義
はやく実行望みつつ。

一つの枝に花と花
咲きて優しく揃うごと
人と人とが楽しみて
愛の法には義務の律
ここに始めて光栄の
天日見なん　諸共に
四海兄弟たるをえん。

（一九〇三年八月「社会主義詩集」）

馬上哀吟

児玉花外

重き愁の身をのせて
駒の歩みの遅きかな、
桔梗、小萩は咲き乱れ
露にたおるる女郎花
鶉啼くちょう野を過ぎて
その名も高き信濃なる
浅間の山に来りけり。
ここ秋風の蕭条と
麓を辿る旅人吹き、
松のみ多しこのあたり。

仰ぎ見すれば、空ぎわに
浅間の山の吐く煙、
鳥は迷わず、木は生いず、
いきたる物の影も無く
高く聳えて、遠く延ぶ。
山の威霊におのずから
首くだれば、わが袖と
馬のたてがみ、灰白し
夕陽をよけて進みゆく
まごの笠にも積るかな。

壮なるかな永却に
天に光をあぐる山、
小さき胸に火は燃えて
われも天地に怨みあり、
人の思想を圧すなる
世をば焼かんか、憤恨の
火にて燃えんかおのが身は
むしろみ山よ、もろ共に
裂けてくだけて冷えんかな
呪咀の世にぞ吾は帰らじ。

(一九〇三年作　一九〇四年二月発行「花外詩集」所収)

マザージョーンス

山口孤剣

マザージョーンスは北米六十万の炭坑工夫の首領
にして慈眼愛膓の老婦なり

重く沈める灰雲を
陰暗き地底に眺めては
鶴嘴やめて坑夫等も
熱き感謝を君に寄す

愛の栄冠ぞ白き髪
涙の珠玉に飾られて
青く輝く瞳こそ
海濤にきらめく新星よ

雛をあつむる母鶏の
翼の下に寂寞の
胸に抱きて走り来よ
「死」と「恐」との潮路より

君が感情をたとうれば
深山かくれの大沼の
夏の夕陽に燃ゆるごと
焔の鞭よ、火の弓よ

衣を着たる野狐の
黄金ぬかづくアメリカに
血と涙との偶像を
ああ今君に見つる哉

世界の民を教化せし
シャロンの薔薇は脆かりき
君が涙に植えつくる
愛の樹をして永久に栄えよ。

戦争の歌

木下尚江

青山墓地にて

山桜、
散るを誉れと歌われし
「軍神」のあと来て見れば
五月雨暗き原頭に
標の杭は白けれど
風に花輪の鬘乱れ
いともあらわの墳墓
心ありてやま榊の

青葉の袖に打ち掩い
涙とばかり露を滴る
　都人士の歌は花より先に枯れて
　雨の青山訪う影もなし

新大将

戦争五ヵ月ならずして
大将七人早や現われぬ
寡婦と孤児とは数知らねど
餓孚は地上に充満てり

召集兵

残る妻子や白髪の親の
明日を忍べば
心が裂ける
名誉々々と騒いで呉れな、
国の為との世間の義理で、
何も云わずに只目を閉じて
涙かくして

死に行く

（一九〇四年六月十二日「平民新聞」三一号）

もの種の歌

松岡荒村

外面の相に覆われて
みえずしられず現われず
只ひそみ行く時のかげ、
うかごうてのみかくろいつ
折りまち顔を袖に被う、
ものの種こそゆかしけれ。
降れふけ雨もまた風も、
葬もとんでふるき世の、
残んの古葉払い去れ、
われ新らしき世を望む。

みよいとふるきいにしえの、
ふるきかたみの枯れすすき、
みき徙らに固くして、
風かしましきかたくなを。

老朽すでに精つきて、
早時の間にくちぬ可き、
そのみきの為めやせし葉の、
やれ行くさまもしらぬかな。

雨ふれや、
一雨ごとに時はとび、
風ふけや、
一いきごとにふるき世の
未練の思をさらえ行く。

忍べ幼きものの種、
かれしすすきのかたくなの、
つめたき月に立つを見て、
つゆ恐ろしき夢な見そ。

おもえ大地のふるえるは、
なか外からの時を得て、
破れて爾れを放つ可き、
手だて絶えざるしるしなり。

これをおもえばわがこころ、
すがすがしくも躍るかな、
なが若草に萌ゆるとき、
春光千里風かろく、

花爛漫の世をむかえ、
くみかう酒はいにしえの、
ふるき袋をはりさきて、
いと新らしき杯に、
溢れあふるる甘酒や。

さてはゆるみし琴の緒も、
春野の花の歌の曲、
和風楽に柳花苑、
柳花苑の鶯も、
同じき曲を囀って、
新らしき世をことおがん。

（一九〇四年四月「近代思想」）

飴売之歌

巷のちりはげしくして、
初夏頃のあつき日に、
親子二人の飴売は、
しばし木かげにやすらいぬ、

子は水車に種々の、
小さき旗をばつみのせつ、
親は手なれし一管の、
飴売り喇叭肩にして、

涼しきかげに塵をさけ、
喇叭の歌に飴うりは、
しばし浮世をよそに吹く、

もとより富める商人に、
くらぶるよしはなけれども、
つみと苦痛の富よりも、
夜半の夢はやすからん、

かの高楼の歌きかば、
わが飴うりはあわれなり、
やがて青葉の涼風の、
小さき旗をばふきし時、
親は喇叭をとりあげて、
高き調子に歌い出ぬ、

げに面白き歌なれば、
それと知りつつ童等は、

子の水車をとりかこみ、
旗と飴とによろこべり、
嗚呼心地よきなりわいや、
されども天の風流は、
夏の木かげの歌にあり、

いざふきならせ飴うりや、
寡慾清涼の喇叭をば、
虚栄の雲をふき破り、
天つ光りをもらすまで。

三つの声

一　虚栄の声

飲めや友歌え手踊
歓楽の数をつくして
山海の珍味を尽さん
夜も昼もわれら飽くまで

善も来よ悪も群れ
浮世をば只我ままに

我ままに大手ふりつつ
渡りゆく身こそ大けれ

黄金こそまことの帝
大臣も巡査も犬も
此前に頭を垂れて
道徳も人倫も空

「あやめ」なは位望むか
さらば只我れになびけや
多額納税貴族に列し
五万円任従五位

「小菊」なは盃みたせ
「色香」なは肴をつけよ
「初音」汝は歌うてひけよ
嗚呼黄金花さく御代や

何を歌う？
「しののめのストライキ」とや
とんで火にやけ死ぬ虫の
うじ虫の日やとい職工
捨てておけ飢えてや死なん

社会主義只やせ犬の
墓原に吠ゆるが如く
黄金の城の何のこしゃくな
中止解散我意のままなり

飲めや友歌え手弱女
飽かずんば裸に躍れ
徳義何？　風教何ぞ
黄金の城の身こそ安けれ

二　貧苦の声

五月雨の降りしくなかを
破れたる小笠にかくれ
出でゆきてすぐれぬ面の
目につきてこらえかねつも

かこつ心露もたねども
貧の身は「ぐち」に痩せて
一時もやすき眠りに
我がせこを置きし夜もなし

嬰児なければ胸はやぶれて

紅き血の流れはすれど
着するべき衣はなくて
のますべき乳は涸れけり

嗚呼工場の雨に日くれて
疲れはて帰り来ますを
如何にして慰むべきか
この肉をさが如何にぞ
されどこれもいたくやせたり

嗚呼この世消えて行けかし
此命消えてゆけかし
降る雨の水面に落ちて
名残なく消えてゆくこと

神楽坂神の助も
あらざりし世こそうたてき
降る雨にしとと打たれて
逝きしとはあさましきかな

其面は土の如くに
其腕は糸の如くに
其胸をやぶりやぶりて
紅き血を吸いしは誰れぞ

君が血は我等のいのち
君が手は我が杖なりき
さるに今いのちにはなれ
盲目らは杖を折られぬ

嗚呼この世消えて行けかし
此命消えてゆけかし
降る雨にしととうたれて
消えゆきし其人のごと

三　大霊の声

生めよ繁殖（さかえ）よ地に満てよ
とわによかれとわがのりし
わが花園は醜草（しこ）の
今さかりなる浮世かな

昔林檎の木のかげに
かくれて住みしへびの如
今の錦のもすそには
貧の血を吸うまむしあり

歌は欄干に漂うて
絃声夜気をふるわする
高楼の下をよくみれば
貧にかれたる骨白く

漸々もゆる若草は
黄金の岩に圧えられ
逢うべき春の野べにだも
花に幸なき長恨賦

嗚呼只かりに与えたる
人の権威のなどてかく
罪なき民をくるしめて
其血と肉を貪るか

及ぶ手なきを誇り気に
嵐を知らぬ花のごと
富と権威の人の子は
此大盟をわすれしや

いざ今さらば四十夜の
雨はかの地に送らずも
無象の風に打のりて
道の軍の鯨波あげん

黄金の栄光何日までぞ
小さき権威は水の泡
天のラッパの響くとき
只見る前のちりほこり

立てよ楼下に枯れし骨
起てよ斃れし貧の民
岩のはざまの若草も
今いましらの春や来む

歌え其時大ごえに
新らしき世のあり様を
愛と平和と平等を
われは無限にほほ笑まむ

残逆の世に寄する歌

人の浮世の半面に座る、
金殿よきけ玉楼に耳をかたむけよ、
大廈高楼に宜しく爾の首を垂れよ、
嗚呼爾等残逆の鬼、

酒池に棹し肉林を戯れ、
爾等が放歌乱舞のどよむうらには、
飢に泣き寒に凍えて、
咽泣日夜に絶ゆるなき様を知らずや。

持てる者は益これに与えられ、
持たざる者は持てる物をも奪わるるとは、
如何に戦慄のことばならずや、
みよ鬼はますます牙するどく、
弱きはますます肉を食まる
嗚呼残逆の世や暴戻の世や、

言問わむ貧家に生れて貧に泣き、
飢寒に泣く子は前生果して何の罪、
更に問わむ富家に人となり栄華を得、
飽食暖衣する子は何の巧ぞ、
人知らずわれ知らず、
しかも現世の応報は何処より来る、

よし茲に凡ての疑問は放棄し去って、
心むなしくして世を観ぜんとも、
よるべなき身を飢にないて、
死に行く児等のあわれを見て、
抱いて育てて見たくもなき、

心なきもの何の人ぞ、

人よきけ、富貴は耳をかたむけよ、
爾土塊にこころ奪われ
饑えたる羊の群を追うて、
その血その肉に飽くことをよろこび、
又は可憐罪なき児まで、
今このままに見殺さんとするか、

嗚呼残逆の世や暴戻の人や、
浮世朝露の如き富を抱いて、
道義人倫を風の如くに吹き過ごしつつ
肉と骨とを躍らして狂え、
狂うて歌え爾が虚栄と虚偽の歌を、

さもあらばあれ大自然一度腕を揮うて、
泡沫の虚栄を強くうつとき、
又は人道の征矢とび交うて、
汚濁の大野に押し寄する時、
富もたからも何のためぞ、
歓楽の歌は風前の灯火なるらん、

嗚呼残逆の浮世冷酷の人よ、
汝等が生れしは汝等のため禍なるかな、

そは寸間の歓楽を夢のまに貪って、
永刼かぎりなき亡びに入るべく、
一度生の門をくぐり、
永く亡びの暗に行くべければなり。

労働軍歌

小塚空谷

一

卑屈の夢を打ち破り
眠れる友を呼び起し
起てよ世界の生産者
人類社会は進歩して
汝の権利を認めたり

二

四民同権たることは
もとより天理の定めなり
虐主の権力ほろぶまで
大声罪を疾呼して
一歩も退くこと勿れ

三

いずこの土地もどの時も
我等を支配するものは
世界を越えて平等に
塵の邪道も用捨せぬ
真理と正義たらしめよ

四

労作(ろうさ)の獄(ひとや)破壊して
艱(なや)みの壁を圧しつぶし
困苦の首械(かせ)解き放ち
休安の平和もたらする
進軍喇叭におくるるな

五

其の日その日の食毎に
汗と脂と血のパンに
苦き味い知るものは
如何なる働きするものも
我等の主義に早や来れ

六

四海兄弟実(じつ)があり
平等安慰の樹の蔭に
凡てが自由と為るまでは
海と陸(おか)とに差別(けじめ)なく
労働するもの皆きたれ

七

土地の私有を全廃し
資本制度の悪を矯め
社会の生産するものに
其の報酬を欠かざるは
我等の主張するところ

八

帝王何の要かある
政府俗吏は坐食の徒
我等の恃むは正義のみ
天下の悪は皆滅し
勝利の関声期して待つ

九

軍艦くだき兵馬売り
あらゆる軍備撤去して
同胞親誼の情あふる
愛と平和の社会主義
此の世に浄界風あげん

十

これらの正しき要求は
神も仏も聞き容れて
諸手を高く喜んで
我等の進路さし招き
早き到着助くなり

十一

今や時勢は迫り来て
労働運動盛んなり
眠れるものは早く起き
醒めたるものは声高く
鼓吹の曲を歌うべし

(一九〇三年六月「社会主義」第七年第十三号)

革命行

小塚空谷

一

来たれ革命、革命来たれ
正義かがやく政治
革命成就の暁は
理想社会の序幕なり

二

来たれ革命、革命来たれ
汝の生める国家こそ
最善良美の社会にて
幸福凡て人にあり

三

生産已に偏頗なく
万事は相互親誼の世
資本制度の利己域は
已に過去の物語り

四

あらゆる悪魔は倒れたり
総ての罪業消滅し
自ら掘りし墳墓穴に
彼等自ら葬りぬ

五

最大幸福もたらする
人類進歩の天職を
得るは正しく此の時ぞ
凱歌を挙げよ、社会主義

六

諸宗、諸教が説き伝う
未来の光栄、極楽を
我等は眼前に実現し
円満社会と成りにけり

七

貧者、富豪の別ちなく
圧制盲従の弊もなく
万人平等平和なる
社会主義こそ楽しけれ

八

我が運命は我れ開き
我が改良は我れが義務
いざや諸人ともどもに
手に手を取って早く起て

九

卑怯は不正の結果なり
未練は栄華の名残なり
義勇堂々、真理には
富も刃も立ばこそ

十

嵐は晴のきざしなり
陋俗弊風破壊して
始めて成就す真、善、美
いざや歌わん、革命行

（一九〇四年二月「社会主義」第八年第三号）

遊君

児玉星人

都鳥浮く隅田川の

西に輝く万灯や
末吉原と夢の世に
古りし吾妻の不夜の城。

今戸の橋畔の黄昏れて
竹屋の渡舟消ゆるとき
黒髪ながき遊君が
欄干に淋しき物おもい。

大門の見返柳の緑なる
色は変らね、紅いの
花瓣は錦の一と時に
散りて跡なき葉桜や。

雲と流れて雨と降る
代々の哀れの歌反古に
春花と飾りて秋露に似し
魂を抱けるああ君よ。

恋の手習見ならいし
禿育ちや、春秋を
郭訛の言の葉に
成いたる君もあるならん。

仲之町に並ぶ絵灯籠は
その古を偲べとや
憂き玉菊が伝えてし
涙物語の筆の彩。

伽羅の塗枕や絹行灯を
長袖に恨みの綾ごろも
涙と憂の恋衣に
笑まうも果敢な露の浮世に

(一九〇三年八月「社会主義」第七年第十七号)

工女

児玉星人

黄昏鐘が淵工場より程近き寄宿舎へ帰る多くの工女を見てつくる

一と日の労働いま終えて
急ぐこころの帰り路や
共寝の夢ぞなつかしき
寄宿舎は彼方に見ゆるなり

都の空のあちこちと
馴れぬ巷のうれしさも
物珍らしの夢の中
籠鳥にも似たる今の身や。

静草踏める塗下駄の
褪せし鼻緒もさまざまに
手織木綿の縞柄も
母やこいしき鄙むすめ。

あゝあゝ君よ過ぎし日の
夏の峠や、雪の路、
あるは時雨や、霧深き
旅の長途をし辿り来し。

春の小雨やそぼ降れる
里の御寺の白壁に
誰が戯れぞ、落書の
相合傘に若命や止むべきを。

恋のお蝶とうたわれて
盆の踊や浴衣地の
揃姿も村の白手拭に

浮名染めなん花の齢。

露のお花とうたわれて
逢うにうれしき七夕の
初秋の野川の小流に
月の吉三や待つべきに。

人世の春の恋ざかり
色の盛りを初花の
萎れて鬢の後れ毛に
油香も失せし黄楊の櫛。

涙の梭や、憂きの杼や、
廻ぐる哀れの絲車
解けぬ縺れの賤機に
通える織歌の沈みては。

遠山の面にたらちねが
影も映らず、夏の暮
幾重に垂れて故郷の
さえわかぬ破窓のもと。

長籠に芸なす山雀の
夕日の前に放たれて

枝より枝を行くごとく
寄宿舎にぞ帰る君が後姿。

急げ、天路に言問の
末白鬚の喜さえも
早暮れぬらん、灯に集りて
浮世語の興に入れかし。

(一九〇三年八月「社会主義」第七年第十七号収載)

ストライキ

平木白星

四十年の紀元節、関西の地雪降る数十年来に無い大雪だという。余は逓信事業監察の為め、彼の地方を巡歴し、京都に滞留していたが翌十二日、某一等郵便局の配達人等給料増額の申請をなし来り、猶お示威運動として大同盟罷業を行った。其夜、旅館柊屋に在ってこの詩を作る。

一

『一日に一銭を増さなけりゃ
同盟をして罷めん職』
雪の朝興奮す五十人、
『勤務時間を減せよ』と。

二

『爆裂弾』、『労働の神聖』と
顔をほてらす、秘密の座、
紅葉鍋つつきつつ『打ち入』を、
老いしが呻る浪花節。

三

保安法、牢獄へことごとく
数珠つなぎぞとおどかせば
妻に良き夫、子に——善き父は
「テ」章の帽着る、即夜。

四

思い出す、赤髯の光次郎
いずくにあるか、我が友が
麺包のため社会主義唱うれば

詩中に「光次郎」とあるのは、親友西川光次郎氏の事で、氏が積極的社会主義者の頭領なのは、洞く世に知られている。

反対す、我も「喰うため」に。

五

群盲はよく睡り、目覚めたる
　検校せっせ琵琶を弾く、——
金泥にむらさきの古ぼけた
　柊屋なる屏風の画。

（一九〇八年四月「趣味」第三巻第四号）

鐘に寄す

山本露葉

生と光のゆり床に
起てよと声を励まして
且の母をよび来る
鐘よ、響の王たらば
空をどよもす雷音に
眠る自由を喚び醒せ
自由の天に湧きかえる
潮を海にみちびきて
古き世紀を覆えし
新しき世を招じたれ
巨人の如き掌に
詩の独立を誘わずや

曽て羅馬に鳴りし時
若きダンテは目ざめたり
曽て希臘に鳴りし時
サッフォの詩は燦（かがや）きぬ
今此の国を震わして
偉なる力をこころみよ

森の神秘をゆるがして
精舎に霊をよぶ如く
害われたる詩の為に
自由の精を誘いて
讃美の鳩を踊らしめ
芸術（たくみ）の国を守らせよ

嗚呼独立と自由とは
翅（つばさ）もあげず身じろがず
詩歌の園に眠りたり
天の大海かたむけて
生命の水をそそぎたる
鐘よ、雲まで鳴りわたれ。

（一九〇四年二月発行「花外詩集」附録「同情録」）

隴頭感慨

大塚甲山

農童たかく叫びつつ
午を報ず畑の面に
炎の日かげ背にして
鍬をうちふる翁あり。

ああ若きより此の日まで
雨に嵐にうたれつつ、
つとめ励みしむくいには
ただ荒栲のきぬひとつ

いそしむ汝は饑に泣き
つま子草屋に冷ゆる時、
知るやにしきに包まれて、
あける懶怠のいぬありと。

翁よ汝の執るわざは、
ただいたずらに高殿の、
為すこともなき貴人の、
酒色の料を造るのみ。

農夫

田村が建てし石碑の、
跡はたれとも見わかねど、
夕日の花は蒼茫と、
ひろき野の上に散ろうかな

聞けや、かなたの燕麦の、
はたのなか道かえり行く、
めおとのふたりの唄声の、
ほがらに響き肩に鍬。

ああいずこにか我が奥の、
農夫のごとき健康と、
朴茂の心たもちたる、
尊きたみの今ありや。

よしやすべての清き香は、
社会の上に失するとも
ひとり汗ばむ額の上に、

神のひかりぞ宿るなる。

塘（つつみ）の楊（やなぎ）

水に河骨黄を挿せど、
かえりみもせず河骨を、
沢に翡翠（かわせみ）かけれども、
湿りに靴をうるおして、
指すは塘（つつみ）の楊かげ。

むかし朧の月の夜に、
逢いしはここか深みどり、
引鳥園（ひきとりその）にきえしごと、
今はいずくの空に泣く、
かの君こうる夢ならば、
宏けくまもれ夕の葉楊。

『陣中詩篇』より

小杉未醒

姿絵

馬上の姿そのままに
絵師にたのみて写させて
船の便りに古里へ
一封の書に捲き添えし
ああ姿絵の波の上
南に向う朝また暮よ
ぬしは旗守（も）り鞍の上
北に進まむ風また雨よ
鏡の蓋に忍ばせて
かくす涙のかげ膳を
荒野の夜の夢にやうくらん

帰れ弟

帰れ弟夕の鳥の
林の中に没（い）る如帰れ
韓の平壌気は腥く
乾ける風に殺気ぞこもる
いかんぞ国の春を蹴立てて

好んで平汐の風雨を慕うや
弟汝の白き額の
あないたましや日に黒みたり
恋と歌とを語るに澄みし
星の瞳の猛くもなりぬ
稚児なす覇気の己むに難くて
八道の野に墓求めにか
帰れ弟夕の鳥の
林の中に没る如帰れ

かの美しき優しきものの
情の絆焼いて断ちしは
何が煽りし野心の炎ぞ
留めし袂を魔や払わせし
云うな却って理めかし
兄をいかにと比べて説くな
汝に教ゆかかる処は
とわに情の春に追われし
吾輩の怨みを吐きつつ
濁りに沈む冷たき塚よ
兄の血の香をなどや羨やむ
疾く其腰の刃を捨てよ
歌の泉の清くも湧けば
弟ながら神の若子よ
玉の器を守りて帰れ

別れの盃挙ぐるも遅し
憂いて泣いて待つらん人に
酷くも解きし其手を返せ
帰れ弟夕の鳥の
林の中に没る如帰れ。

髑髏塔の筆者

去歳八月故山日光に起臥して、吾知れる家の花園に近き室に、さる露国の名高き画伯が来り寓せるを聞きしが、其人甚だ他に接するを忌みて、仮の画室を一目だも見らるるを好まずとさえ云うに、さりとは心小さき男かななど打捨てて、名の頭文字の一つだに知らぬままに過ぎたり。今年韓山に在って旅順口外にウエレストチャギン氏の彼の名将マカロフと死を共にせしを聞きつつ、哀悼の念自ら禁じ難きものありき、そは人の相賊うを警めて一将功成万骨枯の意を寄せたる、髑髏塔の筆者は此のチャギン氏を知り居たればなり、拙詩四章、聊か国を異にして思を同うする先輩の尊霊に手向けぬ、九月（明治三七年……大系編者）満洲の野より帰りて、再び故山老親の

膝下に一週日の閑を消ずるの際、吾師文哉先生を訪えば、一冊のノートブックを出し示して、是れチャギン氏が遺物なりと云う、訝り問うて、始めて知りぬ、彼の閉戸翁は即ち髑髏塔の筆者なりし事を、花園に秋草の花は今歳も露の色美し、ありし仮の画室のほとりを徘徊するに、只虫の声のみ切々たり、浅からぬ感傷を抱いて家に帰る路上、老幼群り連して綺羅恰も祭礼の如くなるに会う、一流の旗大書して曰く「陸軍一等卒某氏之霊柩」

一章

人相殺す戦の罪
平和の神の御心受けて
世を拯くべくはた訓うべく
君よかきしか髑髏塔の画」
野より市より曳き出されて
国の為ぞと死の坑深く
一令の下推し落されし
人さまざまの希望と理想
肉と血汐と消えて失せては
骨うずだこう荒野に晒れて
もの云わず只石にも似れど
一たび君が霊ある筆に
染むれば恨蘇り出で
馬上の功に驕れる児等の
栄華長夜の夢に鞭ち
責めと悶えの淵に入らしむ」
ああ残暴のスラブの国に
君のいますはそよさながらに
氷海遠く暗き御空を
只一つ照る星にも似たり
眼あるもの仰がざらんや」

二章

ここに東の島の国人
十年忍びし怒りは凝りて
義戦の旗の色鮮やかに
機を制したる二度のかちどき
韓山遼東満洲の空
殺気いよいよ低く圧して
生霊そこにそも幾千か
害われんを君より見れば
無差平等の人の子どちよ
いざや平和の筆提げて
その戦と戦わんとか

旅順の港吾から乞うて
甲板(デッキ)の上に画帖展ぶれば
四月凪なし春のわだつみ」

三章

露艦七隻戦い利なく
舵をめぐらす水路の左
忽ち潮湧き立ちかえれば
すは水雷と叫ぶも遅し
脚下幾重の鉄板砕け
焔百尺くれないを吹く
頭上幾個の人抛たる
波十丈の青きを捲けば
海覆えり天倒まに
大叫喚の声を包める
黒濛々(こくもうもう)の煙消ゆると
共に旗艦のあとも留(とど)めず
恥と傷とを帯びて浮びし
キルリ親王僅かに活(い)きて
一世の雄才将軍マカロフ
卒五百人藻屑となりし
中にもあわれ気高き白髯
大慈(だいじ)の眼不断の微笑(ほほえ)み

平和の神の御使(みつかい)の君
画帖空しく素(しろ)きが波に」

四章

ああ戦を罪と責めしを
破壊(はえ)の鬼にや君詛(のろ)われし
深き同情(なさけ)のあまりに憎みし
其戦の為に撃たれて
又(とうと)わだつみの底の幽暗(くら)きに
貴き芸術(たくみ)沈みて果てぬ
黄人白人水と陸とに
勝ちぬ負けぬのいたわしの犠牲(にえ)
それよ第二の髑髏塔の画
現世(このよ)再び染められずとも
焔と水のそがただ中に
身をもて描きし最期のさまが
とわの生命(いのち)の画と現われて
世に戦の罪を示さん
それ勇将の血汐に代えし
軍功後の男児を誘わば
主義に仆れし君が精霊(みたま)は
たくみの園の吾等に帰り
深き同情(なさけ)といや高々き

君が理想を受け嗣ぎ立ちて
人相殺す其禍の
其戦と戦わんなり。」

月と病兵

燃ゆるが如き額の上
冷やかなりと覚えしは
窓に忍びて訪れし
月の影にてありけるよ
思えば去りし戦に
流れを胤すしるべせし
月はあたかもきょうの月
熱に眠りて熱に覚む
病の床の起き臥しも
早ひと月を経にけりな
　ああさやかなる月の影

彼の鴨緑の中島を
二人並びて進みしが
右に左に乱れとぶ
弾丸に驚く砂煙
ただ一声を名残にて
あわれ故園に新妻の
秘めたる夢もそのままに
胸砕かれて倒れにし
親しき友が骨の上
今宵はいかに照すらん
　ああさやかなる月の影

異境の陣に病めりとは
音信れせねば知りまさじ
老いたる母の只独り
村端れなる侘住居
あしたの畑に耘りて
夕の市に葱売る
いとど貧しきたつきにも
なお北の方子を思う
夜をこめたるあばら屋を
今宵はいかに照らすらん
　ああさやかなる月の影

君死にたまうことなかれ

与謝野晶子

（旅順口包囲軍の中にある弟を歎きて）

ああおとうとよ、君を泣く、
君死にたまうことなかれ、
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも、
親は刃をにぎらせて
人を殺せとおしえしや。
人を殺して死ねよとて
二十四までそだてしや。

堺の町のあきびとの
旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまうことなかれ

旅順の城はほろぶとも
ほろびずとても何事ぞ
君は知らじな、あきびとの
家のおきてになかりけり。

君死にたまうことなかれ、
すめらみことは、戦いに、
おおみずからは出でまさぬ、
かたみに人の血を流し、
獣の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みこころの深ければ
もとよりいかで思されん。

ああおとうとよ、戦いに
君死にたまうことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに、
おくれたまえる母ぎみは
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守り、
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾（のれん）のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を、
君わするるや、思えるや
十月も添わでわかれたる
少女（おとめ）ごころを思いみよ、
この世ひとりの君ならで、
ああまた誰をたのむべき
君死にたまうことなかれ。

お百度詣で

大塚楠緒子

ひとあし踏みて　夫（つま）思い
ふたあし国を思えども
三足ふたたび夫おもう
女心に咎ありや
朝日に匂う日の本の
国は世界に只一つ
妻と呼ばれて契りてし
人はこの世に只一人
かくて御国と我夫と
いずれ重きととわれなば
ただ答えずに泣かんのみ
お百度詣でああ咎ありや

誠之助の死

與謝野寛

大石誠之助は死にました、
いい気味な、
機械に挾まれて死にました。
人の名前に誠之助は沢山ある、
然し、然し、
わたしの友達の誠之助は唯一人。

わたしはもうその誠之助に逢われない、
なんの、構うもんか、
機械に挾まれて死ぬような、
馬鹿な、大馬鹿な、わたしの一人の友達の誠之助。

それでも誠之助は死にました、
おお、死にました。

日本人で無かった誠之助、
立派な気ちがいの誠之助、
有ることか、無いことか、
神様を最初に無視した誠之助、
大逆無道の誠之助。

ほんにまあ、皆さん、いい気味な
その誠之助は死にました。

誠之助と誠之助の一味が死んだので、
忠良な日本人は之から気楽に寝られます。
おめでとう。

（一九一〇年作）

愚者の死

佐藤春夫

千九百十一年一月二十三日
大石誠之助は殺されたり。

げに厳粛なる多数者の規約を
裏切る者は殺さるべきかな。

死を賭して遊戯を思い、
民俗の歴史を知らず、
日本人ならざる者
愚なる者は殺されたり。

「偽より出でし真実なり」と
絞首台上の一語その愚を極む。

われの郷里は紀州新宮。
渠の郷里もわれの町。

聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる
紀州新宮の町は恐懼せりと。
うべさかしかる商人の町は歎かん、

――町民は慎めよ。
教師らは国の歴史を更にまた説けよ。

（一九一一年三月「スバル」）

はてしなき議論の後（その一）

石川啄木

暗き、暗き曠野にも似たる
わが頭脳の中に、

時として、電（いなずま）のほとばしる如く、
革命の思想はひらめけども――

あわれ、あわれ、
かの壮大なる雷鳴は遂に聞え来らず。
我は知る、
その電（いなずま）に照し出さるる
新しき世界の姿を。
其処にては、物みなそのところを得べし。

されど、そは常に一瞬にして消え去るなり、
しかして、かの壮快なる雷鳴は遂に聞え来らず。

暗き、暗き曠野にも似たる
わが頭脳の中に、
時として、雷のほとばしる如く、
革命の思想はひらめけども――

（一九一一年六月一五日夜）

はてしなき議論の後（その二）

われらの且つ読み且つ議論を闘わすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前の露西亜の青年に劣らず。
われらは何を為すべきかを議論す。
されど誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
"V NAROD" と叫び出ずるものなし。

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る。
また民衆の求むるものの何なるかを知る。
しかして、我等の何を為すべきかを知る。
実に五十年前の露西亜の青年よりも多く知れり。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
"V NAROD" と叫び出ずるものなし。

此処にあつまれる者は皆青年なり、
常に世に新しきものを作り出す青年なり。
われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂に勝つべきを知る。
見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
"V NAROD" と叫び出ずるものなし。

ああ蝋燭はすでに三度も取りかえられ、
飲物の茶碗には小さき羽虫の死骸浮び、
若き婦人の熱心に変りはなけれど、

その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。
されど、なお、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
"V NAROD" と叫び出ずるものなし。

(1911 6.15. Tokyo)

ココアのひと匙

われは知る、テロリストの
かなしき心を——
言葉とおこないとを分ちがたき
ただひとつの心を、
奪われたる言葉のかわりに
おこないをもて語らんとする心を、
われとわがからだを敵に擲げつくる心を——
しかして、そは真面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の
冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌触りに、
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

(1911.6.15. Tokyo)

激　論

われはかの夜の激論を忘るること能わず、
新しき社会に於ける「権力」の処置に就きて、
はしなくも同志の一人なる若き経済学者Nと、
我との間に惹き起されたる激論を、
かの五時間に亘れる激論を。

「君の言う所は徹頭徹尾煽動家の言なり。」
かれは遂にかく言い放ちき。
その声はさながら咆(ほ)ゆるごとくなりき。
若しその間に卓子(テエブル)のなかりせば、
かれの手は恐らくわが頭(かうべ)を撃ちたるならん。
われはその浅黒き、大いなる頭の
男らしき怒りに漲れるを見たり。

五月の夜はすでに一時なりき。
或る一人の立ちて窓を明けたるとき、
Nとわれとの間なる蠟燭の火は幾度か揺れたり。
病みあがりの、しかして快く熱したるわが頬に、
雨をふくめる夜風の爽かなりしかな。

さてわれは、また、かの夜の、
われらの会合に常にただ一人の婦人なる
Kのしなやかなる手の指環を忘るること能わず。
ほつれ毛をかき上ぐるとき、
また、蠟燭の心を截るとき、
そは幾度かわが眼の前に光りたり。
しかして、そは実にNの贈れる約婚のしるしなりき。
されど、かの夜のわれらの議論に於いては、
かの女は初めよりわが味方なりき。

(1911.6.16. Tokyo)

墓碑銘

われは常にかれを尊敬せりき、
しかして今も猶尊敬す——
かの郊外の墓地の栗の木の下に
かれを葬りて、すでにふた月を経たれど。
実に、われらの会合の席に彼を見ずなりてより、
すでにふた月は過ぎ去りたり。
かれは議論家にてはなかりしかど、
かくてかなわぬ一人なりしが。
或る時、彼の語りけるは、

「同志よ、われの無言をとがむるなかれ。
われは議論すること能わず、
されど、我には何時にても起つことを得る準備あり。」

「彼の眼は常に論者の怯懦を叱責す。」
同志の一人はかくかれを評しき。
然り、われもまた度度しかく感じたりき。
しかして、今や再びその眼より正義の叱責をうくることなし。

かれは労働者——一個の機械職工なりき。
かれは常に熱心に、且つ快活に働き、
暇あれば同志と語り、またよく読書したり。
かれは煙草も酒も用いざりき。

かれの真摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、
かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。
かれは烈しき熱に冒されて、病の床に横わりつつ、
なお死にいたるまで譫言を口にせざりき。

「今日は五月一日なり、われらの日なり。」
これかれのわれに遺したる最後の言葉なり。
その日の朝、われはかれの病を見舞い、
その日の夕、かれは遂に永き眠りに入れり。

ああかの広き額と鉄槌のごとき腕(かいな)と、
しかして、またかの生を恐れざりしごとく、
死を恐れざりし、常に直視する眼と、
眼つぶれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸は、一個の唯物論者として、
かの栗の木の下に葬られたり。
われら同志の撰びたる墓碑銘は左の如し、
「われには何時にても起つことを得る準備あり。」

(1911.6.16 Tokyo)

愚かなるものよ

徳永保之助
(発表名　飄風)

愚かなる。
太陽を捕え、朝の日光を、
縄をもって縛しめんとする。
風に乗り、あるはまた、
走る流れに逆らわんとする。
四季を阻みて、降る雨を止めんとする。

空気と戦う心無さよ。
ありとある力を、畢に無にせん。
かかるに同じく、かかる業より更に愚かなる。

人の言う所を咎め、そを強いて教に適わさんとする。
定めを人の上に立て、
物言うも、そを超えしめぬ。

さなり、人の口を壅がんこと、
吹く風を捕うるよりも難きものを。
愚かなるもの。

DILEMMA

佐藤緑葉

いらだたしき一夜よ、
群集と巡査とは睨みあい、
街灯の瓦斯の灯も常より青し。

窓硝子のやぶるる音に、
喜びて叫ぶ声、恐ろしき鬨の声、
馳せちがう民衆と警官の剣鞘のおと。

哀れにも暴君のくるしむ姿、
われもまた群集ともろ共に手を打って
幾度か「バンザイ」を叫ばんとせしが、されど……

かの家にはわが椅子あり、
わがペンもあり、
かかる時なお忘れえざるわがパンの家。

雨のごとく石はふり、
群集は狂おしく鳴りわめく、
いらだたしき銀座の一夜。

野獣

大杉栄

また、向う側の監房で、荒れ狂う音がする、
怒鳴り声がする、歌を唱う、
壁板を叩いて騒ぎ立てる。
それでも役人は、知らん顔をしてほおって置く。

いくど減食を食っても、
暗室に閉じこめられても、
鎖りづけにされても、
やっぱり依然として騒ぎ出すので、
役人はもう何んとも手のつけようがなくなったのだ。

まるで気ちがいだ、野獣だ。

だが俺は、この気ちがい、この野獣が羨ましくって仕方
がない。
そうだ！ 俺はもっと馬鹿になる修業をつまなければな
らぬ。

（一九一三・九）

週刊「平民新聞」抄

（一九〇三年十一月十五日創刊、一九〇五年一月二十九日終刊）

狂酔野人

社会主義の歌

同胞（はらから）の血潮舐（ねぶ）りて人の子が戦い勝つと魔に似たる声

富に媚ぶるこの花憎し泣く子らに慰藉（なぐさめ）なくば花よ咲かざれ

こおろぎは露のめぐみに人の子は何のめぐみに地に泣くらんか

（第二号）

中里汪洋

血涙吟

兵士（もののふ）の三年の義務（つとめ）終えぬれば故郷（くに）に荒れたり田畑九畝（ここのせ）

日の旗の旗影高し然はあれど民の幾千の饑に泣けるよも

血に渇く悪魔三千砂を蹴て北に向いし夢を見しかな

（十三号）

海谷野人

ああ戦争

我れは父汝は母されど戦いに、一人子死せり、栄（はえ）なき世はや。

芋を掘る我手に銃を持てという、蝮（まむし）の世なり悪魔の世なり。

戦よし、ロシヤ打つべしと罐詰に石つめて待つ、醜（しこ）の大倉。

（十五号）

ト翁戦争論中に現われたる一農夫をしぬびて詠める歌

星山安

西比利亜の醜の戦に斃るべく君が立ちぬる心悲しも

国のため皇帝のためとうちはやす司人等を君如何に見し

露西亜人日本人と人は云えど君が眼にけじめあらめやも

（四十三号）

戦争を呪う

山口孤剣

天の星、野べの百合にも平和の、色は満てるを醜の戦よ

血の酒杯、舌づつみ打つ醜人を、滅亡にさそう天の火もがも

バイブルを血汐に染めて、十字架を、砲にかざらん宗教家はや

醜国の司人等よ、孤児と、寡婦が血に泣く、声を聞かずや

戦いの毒酒に酔える人の子に、神の怒りの鞭よ下り来ね

（四十五号）

週刊新聞「直言」抄

（「平民新聞」を第一巻として、一九〇五年二月五日、第二巻第一号より発刊。一九〇五年九月三日終刊。）

暗潮

有香

現世は正しくはあらず権力ある痴者はびこれば弱き子起たず

銃すてて人道（ひと）の叫びに夢醒めよ火は投げられぬ深き地の
うち

大義なく掟も立たで呪われし弱き子叫ぶ渡良瀬の川

田中正造翁

叫声（さけび）あげて玆に二十年（はたとせ）終に成らず叫び疲れし翁あわれむ

君を措きて誰かえりみる渡良瀬ぞ二十年（はたとせ）議会魔に詛われ
し

（第二巻一号）

関野琴平

○

情あらば人はつれなき弱き子の、機（はた）おり歌に涙なからめ
や

梅咲けど弱きは餓ゆるものと聞く、春を笑むべき御世と
おぼすか

星山安

○

くろがねの牢屋（ひとや）の中は寒けきに、尙いや寒し風な引きそ
ね

罪のなき人を入るべき牢屋ありと、思いしもえば涙し流
る

有香

○

細けれど腕に血潮はたぎるなり、我れ革命の斧は捨てじ
な

革命の理法とや君、血にあらず筆舌人の心射るにあり

○ 無名氏

利根川に白帆の影も見えずなりぬ、千九百五年旅順落ちし頃

馬車にして只半銭(せん)を君に忌むか、不運の命よし我れに寄せよ（めしいの乞丐を憐む）

（第二巻四号）

○ 無名氏

いくさ終えてここ遼陽の冬の営、独り五万の枯骨(ほね)に笑む人

恋もなき、はた個人(ひと)もなき社会(このよ)なり、嗚呼ただ焼きて、焼きて棄てなん

○ 汀秋生

道はただ、荒れぬ、すたれぬ、人黙し、聖人(ひじり)叫ばず、世は滅びゆく

虚偽の冠、偽善の衣、まだはしに、人の子あまた、ひしめきあえる

（第二巻五号）

○ 桜子

君が説く正義の御名の犠牲(いけにえ)に人の子五万、亜細亜に逝きぬ

うら若き人の子の血を外に流し、国まもるとや君はさか

しき

緑川

行きぬアァ忍びの門に我が兄子は、やがて地を捲き来れ我が兄子

○

雪中にかおる姿の尊しや、君に譬えん白梅の花（第二巻七号）

赤羽生

激湍集

人の子等が剣と剣斬りあうを、讃めたたえぬる醜人あわれ

大君の勅命かしこみ征く人の、戎衣の袖に降る涙かな

将軍の胸に輝く勲章に、百千の魂の叫びきかずや（第二巻三十号）

日刊「平民新聞」抄（一九〇七年一月十五日創刊、一〇年四月十四日終刊）

相坂生

○

「君が代は千代に八千代」と歌う子の、眼凹み頬落ち、狼の如

何処にか革命の子等起ちたりし、夕べ行く雲態常ならぬ（第七号）

宮沢天韻

○

此の躰たとい市(ちまた)に斬らるとも自由の歌我は断たじよ

革命よ自由よいかに恋しき名、牢獄よ我の故郷ならずや

革命の志士の臨終に似たるかな冬の入日のある美しき

（第八号）

草風

○

革命の焔揚がらば我が望み足れりと神によろこび告げむ

荒磯に寄せてくだくる巨浪は彼の革命の歌かあらじか

（第九号）

安成懐春郎

○

労働の槌の音にも故郷の潮の遠鳴り聞くという子よ

熱鉄の燃ゆるに向い限りなき尊貴を覚ゆ我が労働は

（第十号）

相坂生

○

我が好は赤旗機関車、鉄の槌、天地斜めに射る夕日影

破れ障子に洩るる灯火、紡糸(つむ)の音、たまに苦しき咳(しわぶき)の音

（第十六号）

懐春郎

○

我が織りし美しき衣誰着ると怨みに春の町をゆきけれ

我が織りし真紅の衣よ火となりて誇れる者の身を焼きつくせ

窓外

○

男なら燃ゆる血汐を吐いてみよ打てば石にも声あり火あり

オイ君と知らぬ旅人呼びとめて革命語る冬の山道

（第十九号）

翠湖

○

さんざんに恥しめられて帰り来ぬ襤褸かなしき貧の子なれば

米の値の上りしことを耳にして小供心の悲しき日かな

寒村

○

そそぎ来しあつき涙も遂に涸れぬ濁世呪わん毒胸にもれ

革命の天馬かけるよ夕空に血煙りのごと雲のみだるる

（第二十号）

○

たもつ

残飯を買うべく民は集りぬ紀元の節の夕ぐれの貧民窟

国のため君のためとの兵士(われ)なれど今鉱山に資本家まもる

（第三十五号）

九月の夜の不平

石川啄木

秋の風今日よりは彼のふやけたる男に口を利かじと思う

大海のその片隅につらなれる島々の上を秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる男憐れなり初秋の風

男と生れ男とまじり負けて居りかかるが故にや秋が身に沁む

燐寸(マッチ)擦れば二尺ばかりの明るさの中を過ぎれる(よぎれる)白き蛾のあり

その昔秀才の名の高かりし友牢にあり秋の風吹く

いつも来るこの酒舗(さかみせ)のかなしさよ夕日赤々と酒に射し入る

わが友は今日も母なき児を負いてかの城址をさまよえるかな

この日頃ひそかに胸にやどりたる悔ある我を笑わしめざり

公園のかなしみよ君の嫁ぎてよりすでに七月(ななつき)来しこともなし

公園のとある木蔭の捨椅子に思いあまりて身を寄せしかな

やとばかり桂首相に手とられし夢みてさめぬ秋の夜の二時

事務には役に立たざるうた人と我を見る人に金借りにけり

女あり我がいいつけに背かじと心をくだく見ればかなしも

ふがいなき我が日の本の女等を秋雨の夜に罵りしかな

時ありて猫のまねなどして笑う三十路(みそじ)の友が酒のめば泣く

ダイナモの重き唸りの心地よさよあわれこの如く物を言わまし

新しき背広など着て旅をせんしかく今年も思い過ぎたる

売ることを差止められし本の著者に途にて会える秋の朝かな

何となく顔がさもしき邦人の首府の大空を秋の風吹く

つね日頃好みて言いし革命の語をつつしみて秋に入れりけり

今思えばげに彼もまた秋水の一味なりしと知るふしもあり

この世よりのがれんと思う企てに遊蕩の名を与えられしかな

わが抱く思想はすべて金なきに因する如し秋の風吹く

秋の風我等明治の青年の危機をかなしむ顔撫でて吹く

時代閉塞の現状を奈何にせん秋に入りてことに斯く思うかな

忘られぬ顔なりしかな今日街に捕吏にひかれて笑める男は

人ありて電車の中に唾を吐くそれにも心傷まんとする

朝まだきやっと間に合いし初秋の旅出の汽車の堅き麺麭(パン)かな

地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聴く

誰ぞ我にピストルにても撃てよかし伊藤の如く北にて見せなん

いらだてる心よ汝は悲しかりいざいざ少し欠伸(あくび)などせん

何事も金金といいて笑いけり不平のかぎりぶちまけし後

明治四十三年の秋わが心ことに真面目になりて悲しも

(雑誌「創作」一九一〇年十月号、第一巻八号)

広田楽

工場にて歌える

日を浴びる快さをもおもい出ず工場がよい七年を経ぬ

モーターの響きの底に沈みゆくこの魂のおもさにたえず

窓にのぼり秋の日に照らされつゝうすら眠たき哀しみに居る

窓かけに滲める鉱油匂いいずる新秋の日にやや飢えてあり

うす暗き工場の隅にうずくまり夕餉をおもい寝床をおもい

(雑誌「創作」一九一〇年十二月、第一巻、十号)

近藤嵐翠

若き機関手の歌える

二十四のわれは機関手わが乗るは石炭を牽く黒き機関車

汗ばめる黒きわが顔友の顔ボイラーの前にかなしくならぶ

焦熱の地獄のごとき機関車のなかに日毎にむせかえる魂

初夏の峡を走れるひるの汽車火を焚く火夫の赤ら顔かな

ボイラーの熱にむせつつ悲しくも汗にまじりて流るる涙

(雑誌「詩歌」一九一一年六月、第一巻六号)

工場の隅

森園天涙

戸締りを了えて工場のくらき灯の下に坐れば牢獄の如し

灯火なき部屋に坐りて梭の音織女の唄をきけば涙落つ

仲間らと首のみ入れて寝ぬる蚊帳ねむられぬ身の肌にまつわる

この工場を一人ひそかに逃げいでて走らん夜半の闇をおもえる

膝組めば何とはなしにさしぐまる工女等と対う夕食の膳

（雑誌「詩歌」一九一一年七月、第一巻四号）

歌集「悲しき玩具」抄

石川啄木

呼吸(いき)すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
　凩よりもさびしきその音！

眼閉(と)ずれど、
心に浮ぶ何もなし。
　さびしくも、また、眼をあけるかな。

本を買いたし、本を買いたしと、
あてつけのつもりではなけれど、
妻に言いてみる。

新しき明日(あす)の来るを信ずという
自分の言葉に
嘘はなけれど——

よごれたる手を洗いし時の
かすかなる満足が
今日の満足なりき。

世におこないがたき事のみ考える
われの頭よ！
今年もしかるか。

珍らしく今日は、

議会を罵りつつ涙出でたり、
うれしと思う。

何故こうかとなさけなくなり、
弱い心を何度も叱り、
金かりに行く。

わが病の
その因るところ深く且つ遠きを思う。
目をとじて思う。

友も妻もかなしと思うらし——
病みても猶
革命のこと口に絶たねば。

やや遠きものに思いし
テロリストの悲しき心を——
近づく日のあり。

かなしきは、
（われもしかりき）
叱れども、打てども泣かぬ児の心なる。

「労働者」「革命」などという言葉を
聞きおぼえたる
五歳の児かな。

五歳になる子に、何故ともなく、
ソニヤという露西亜をつけて、
呼びてはよろこぶ。

解けがたき
不和のあいだに身を処して
ひとりかなしく今日も怒れり。

猫を飼わば
その猫がまた争いの種となるらん、
かなしきわが家。

クリストを人なりといえば
妹の眼がかなしくも
われをあわれむ。

（一九一二年六月二十日刊行）

歌集「黄昏に」抄

土岐哀果

指をもて遠く辿れば、水いろの
　ヴォルガの河の
　なつかしきかな。

働くために生けるにやあらん、
生くるために働けるにや、
　わからなくなれり。

ストライキ
やまんともせぬ、おそろしさ。
　息をひそめて君を思う、われは。

非常なる力がほしとおもうかな、
　目くらむばかり、
　不平つのれば。

クロポトキンの『パンの略取』を、
半ばまで読みしが――その後(のち)、
　読むひまのなし。

いまもなお、青き顔して、
革命を、ひとり説くらん、
　ひさしく逢わず。

わが友の、寝台(ねだい)の下の、
　鞄より、
国禁の書を借りてゆくかな。

日本に住み、
日本の国のことばもて言うは危うし
　わが思う事。

白き手の労働者こそ哀しけれ。
　国禁の書を、
　涙して読めり。

『働かぬゆえ、貧しきならん、』
『働きても、貧しかるべし、』
　『ともかくも、働かん。』

りんてん機、今こそ響け。
　うれしくも、
東京版に雪のふりいず。

（一九一二年二月十八日刊行）

片見の歌

田島梅子

此の思い御胸を焼くの火ならずば、我に希望（のぞみ）なし、我に生命（いのち）なし

美しき望みをかけて仰ぐ星、恋の息吹にまたたく今宵。

世を呪う血潮は燃えぬ、漲りぬ、吾れ二十年の今日此胸に

金色の征矢（そや）のいくすじ地に投げて、紅葉の奥に日は落ちんとす

そそり立つ秩父の峰に神秘あり、吾れかくめいの御告を聞きぬ

此胸を白刃にえりて紅（あけ）のしぶき、注ぎかけまし恋知らぬ子に

たわむれにすねたる宵に似たるかな、君在す空に月ほのめきて

かくめいの其一言に恋成りぬ、えにしの糸は真紅のほのお

紅の峰に灰色の雲ただようて、麓しぐれぬ、秩父嶺（ね）の秋

断ち得るか、さらば断ちませ、何の力、えみ美しき会心の二人

かくめいの人の血潮の燃ゆるごと、凌霄（のうぜん）の花、夕日にはゆる

この血もてこの涙もて掩わなん、世の戦いにつかれし君を

若き子に若き生命（いのち）を捨てよとや、斯くて崇（とうと）し、教なるもの

山恋し、雪にうもれし山恋し、二十年住みし故郷恋し

（一九一二年五月刊の堺利彦編「売文集」巻末に収められた田島梅子の歌三七首より抄出）

歌集「不平なく」抄

土岐哀果

労働をよろこぶ心をころすなかれ——
　夏の街路に、
　口ぶえをふく。

ドアを押して、
おもいがけなく正面の鏡に見たる
　わが顔のいとしさ。

輪転機、牀にひびきて、
　ゆうされば、
汽船にのれるおもいあり、夏。

八月の校正室の泣きたさよ、
　しょぼしょぼ顔の、
　まともの西日。

かの夜の群衆の叫びの、ふとしては
耳に湧くなり、
さびしくてならず。

やれ、やれ、やれと、叫ばんとして、
群衆の
かなしき顔を、眺めたりけり。

（一九一三年七日十三月刊行）

歌集「街上不平」抄

貧民窟巡察（二十二首のうち八首）

土岐哀果

ざくざくとこくそを踏めば靴痛し、
　この一廓の冬、
　何も知らず。

じめじめと
この泥濘（ぬかるみ）路のくらやみに、人間住めり、
　何にも知らず。

眼のふちに、あかき涙の流るれど、
しょぼしょぼとして、

何も知らず。

泣くな、泣くな、
顔いちめんのできものの、赤くはれぽたく、
　何にも知らず。

どん隅のおんぼろ厠(かわや)、
龔みずに落日(いりひ)がさせり、
　何にも知らず。

まっぴるまのうすくらやみの天井に、
らんぷ黄ろく、
　何にも知らず。

父と子と喰いつくように抱きあい、
夕日あかあかく、
　何も知らず。

これがこれ生きた人間の顔かもよ、
あおじろく、あおじろく、
　何にも知らず。

（一九一五年三月十八日刊行）

都会詩人（矢代東村）

反国家の心

反国家の心かなしく日本に
小学教師なせりけるかも

反国家の心かなしく大学に
法律を学ぶ我れなるかこは

反国家の心かなしく弁護士に
ならんとあせる我れなるかこは

反国家の心漸く二十七の
日本の青年とならんとするか

これもまた浅薄皮層在来の
破壊反抗のたぐいなりけり

（雑誌「詩歌」一九一五年二月、第五巻二号）

最近二年間のわが生活の記録

安成二郎

児が悲し、
　里に遣られし児よりも、わが身が悲し、
其の日に追われる。

豊葦原瑞穂の国に生れ来て、
　米が食えぬとは、
嘘のよな話。

子を生みて、
　ストリンドベルヒの疑いも、
さわさりながら、暮しの切なさ。

妻よ、
　無限の生殖力を有つ如き、お前の身体と、
経済組織と。

好人物と、
　われを言いし男に金を借りて、
返さず、此頃は何と言うらん。

鯤、鵬となり、
　水に翼撲って上ること三千里――、
行き詰った生活には無き思想かな。

しっかりと、
　金を握った心持、
十円足らずの、生の充実。

児の里の、多摩川の、
　鮎の芽出たし、恙なく、
生い立ちぬらし、わが子も。

ソファが欲し、児には乳母車を――、
　さて女には、
男と児との満足の笑顔を。

児を抱いて、しゃがんでいれば、
　犬が来て、
児の鼻を舐る秋の朝かな。

子供をどっさり生んで、
　あいつらが皆、貧乏になれ、
公平に。

又しても、
　貧の盗みという言葉が、
思い出される年の暮かな。

『貧故に』
　それで一切の罪悪が、
解決される御代の芽出度さ。

『貧乏な家からエライ者が出る』
　それを楽しみに、
子どもをこさえる。

泥棒と結婚と流行る、
　十二月、
われは彼等の幸福を祈らん。

満足に、
　支払さえも断れず――、
妻の選択を誤りしかな。

金を貸して呉れと、
　片手を出しけるに、五銭貸しけり、
洒落と思いしか。

つづけさまに、
　姙娠をする妻をもち、
一生の不作と思いけるかな。

『貧して鈍するは凡人なり』と
　三宅博士が言いたりと、
聞きて、又少し鈍になりけり。

春よ、
　此の年はわが家をも訪れよ、
女の児生れたり。

生活の苦しさ、
　されども春よ、
恋を持来らば、われに与えよ。

ヒロシは父の懐に、
　シゲリは母の懐に、
貧しかれども、春の夜の家。

いつしかまた、
　四月となりぬ、往還り、
電車の窓に花見る身の上。

父となりし、
　免れ得ざる過失(あやまち)と、
夫となりし、愚(おろか)のあやまち。

泣き止まぬ、子どもの為めに、
　母も泣く、
目ざめし父の、貧しき心よ。

『階上の書斎より』
　われも二階ある家に住みて書く——、
『家賃の払えそうも無き階上の書斎より』

『芸は身を助ける』
　それも嘘とは思わねど、
歌を估(う)れども、其日が送れず。

金こそは悲しけれ、
　欧洲の大戦争も、
われと妻との悶着も、此の為め、

わが貧乏の、
　子にも解るか、ゼゼ、、と、
先ず覚えしは、金貰うこと。

われ夢む——、
　数多の児孫に囲繞(とりま)かるる、
幸福の翁を、わが老後を。

貧苦のなか

鈴木佐光

父ははをいつくしむ心、まことに深く貧しさのうちに見
　いでたりけり。

なに事ぞ、わが身を前に、わが家の没落の日は来るなり
　けり

わが家の苦しきなかに、祖母あるを草鞋つくれるを、忘
　れてありけり。

心のみはのんびりとして世に生きん、このねがいすら危
　うきが如し。

なにごとのありとも知らず、中学を終りて帰りし家は貧
　しく

（雑誌「生活と芸術」一九一五年第二号）

魂いれかえて

唐木　伝

枯れ枯れし稗のふとみきがしがしと刈る音さびしく、夕ぞらは黄に。

一心に穂を刈る父のうしろかげ、こは人間のすがたなるかも。

鎌利ぎつぐずぐずしてはいられずよ、山にははや雪の来ており。

ともかくも百姓とならん、働きさえすれば生活はたちゆくなりけり。

人として、げに然り、まず人として生きねばならず、働かねばならず。

（同上、第三号）

機械のかげにて

高崎篤郎

ハンドルの油をぎゅっと握りたり、いまぞ機械をまわさんとして。

夕さればかなしき瞳して我等みな、この地下室をいずるなりけり。

ただひとり機械のかげに泣いじゃくるわかき女工をいたわりにけり。

めずらしく機械の音を恋人のささやきのごとくきき惚れにけり。

たくみなる職工としてこの土地へ買われてきてよりみとせを経たり。

（同上、第五号）

解説

小田切秀雄

この序巻は、明治三十年前後から大正四年ごろまでの期間においての、人民的、革命的な文学の流れを形成している作品、および日本近代文学直流のうちでそれに接近した諸作品を収録した。プロレタリア文学大系が収録作品を明治三十年前後をもってはじめたのは、この時期が日本の労働者階級の階級的な自覚と闘争の最初の飛躍的な発展の時期に当り、自由民権運動の挫折いらい人民的・階級的な運動による支えを失っていた日本においての民主主義的自由の闘争が労働組合とその闘争によって新しい現実的よりどころをもちはじめた時期に当ること、そのことが文学にも直接間接に影響と刺激と反映とをもち、自由を求める文学者たちの活動に新しい進歩的な方向や気分や情熱をあたえていること――こうした事情によるものである。

明治三十年という年は、片山潜の『自伝』によると、「明治三十年は日清戦役後の産業勃興で万業が好景気であった。……之に加えて故伊藤公が下関平和条約で三国干渉の為めに大敗を取った国を国民から抹殺する為めに、凱旋祝賀祭で国民を酔わした。之れが為めに国民は戦勝にウヌボレて来た、事業界は大狂熱に浮されて来るに従って物価は大騰起を来たした。と共に労働者も多少自覚をした。ストライ

キは頻々として起った。社会問題は叫ばれるようになり……普通選挙を叫ぶ者もあり労働問題の声を揚げた者もあったが此等は一時の流行であった」。頻々として起ったストライキ、というのは、横山源之助の『日本之下層社会』によると、明治三十年六月から十一月までの間三一件の争議が行われ、他の諸資料に現れた争議をも合せるとこの年度の判明している争議だけで四五件にのぼり、北海道から九州にいたる鉱山・繊維・造船・交通・塩田・電気等の各産業で労働者はたち上りはじめたのである。そしてこれとあいたずさえて、明治三十年四月東京に職工義友会がつくられ、それは同年七月には労働組合期成会に発展し、片山潜・島田三郎・安部磯雄・村井知至らが幹事や評議員に選出された。公開の論説会には千余の聴衆が集まったという。また同年十二月には鉄工組合が発会式をもち、砲兵工廠職工六七七名、甲武鉄道六名、新橋鉄道局八六名、逓信省職工四〇名、平岡工場四三名、中島工場五三名、原鉄工場一一名、東京紡績工場一五名、竹内金庫職工一四名、大宮工場五三名、横浜鉄工一八五名、合計一一八三名が参加し、のち芝浦工場・石川島造船・横須賀造船、赤羽海軍工廠、等々からも労働者が参加した。なお、発会式には農商務省工務局長・同文書課長・砲兵工廠技師らが来賓としてきているということだけからも、この当時の組合が労資協調的な面をもっていたことが知られるが、同時に、労資協調が必要になるほどにも労働者の力が強まってきていたことを示してもいるのである。この年の十二月には片山潜を中心とする最初の労働運動機関紙『労働世界』が創刊され（はじめ労働組合期成会の機関紙だったがのち『社会主義』と改題して月三回刊の雑誌となり日露戦争まで続いた）、その三十二年一月には「社会主義欄」が設けられた。そして、たんに労働者階級だけでなく、さきの片山潜のことばのなかにもあるように「普通選挙を叫ぶ者もあり」、中村太八郎（平野義太郎の『中村太八郎伝』にくわしい。日本における普選運動の先覚者）とともに木下尚江が信州で普選運動をはじめて投獄され、年余にして出獄、ラジカルなブルジョア民主主義の立場からしだいに社会主義運動に進み出てゆく筋道がつくられ

はじめたのもこのころであった。他方また、二葉亭四迷と親しかった横山源之助は下積みの民衆への尽きない愛からして極貧のひとびとの生活を綿密に調査して『日本之下層社会』（明治三十二年刊）を書いたが、これは明治二十年代後半の松原岩五郎らの一連の「下層社会」調査報告書の中心をなすものであり、慈恵的「社会政策」立案の資料としてつくられたものや興味的なものもあったが全体としては人民の生活と社会的矛盾へのヒューマニスティックな関心の強化を示すものであり、独自な記録文学・報告文学としての性格をそなえているものが多い（この点については青木書店刊の小著『日本近代文学』でややくわしくのべておいた）。後年の細井和喜蔵『女工哀史』（本大系第二巻所収）の先駆としての意味をももっている。なお二葉亭四迷は職人ふうに「身をやつして」横山源之助とともに当時のいわゆる貧民窟をたびたび歩きまわったという。三十一年四月には、松原岩五郎・山室軍平・松村介石・片山潜・高野房太郎らによって貧民研究会がつくられている（『明治文化全集』第二一巻参照）。横山の『日本之下層社会』はその一部をこの巻に収録したかったが、近年岩波文庫に収められて流布しており、また抄出になるのを避けたかったので割愛した。

また、「明治三十年は同盟罷工の極めて流行せし年なりき。又凡ての新聞雑誌が盛に社会問題を論ぜし年なりき」（片山潜『日本の労働運動』。岩波文庫に収む）。労働問題を基礎としていわゆる社会問題がさまざまな角度から問題になってきたのである。貧富の問題や自由の問題や家族制度の重圧などが次々ととりあげられ、社会的矛盾の追及とそれの打開のためのさまざまな方式が提出された。かって自由民権運動とともに挫折した民主主義的要求は、この時期にいたって、一方に労働組合の組織や社会主義思想の形成（やがて幸徳秋水・木下尚江らブルジョア民主主義者が社会主義的立場に移行してゆく）となるとともに、他方では島崎藤村の『若菜集』等の新体詩やそれに続いての与謝野晶子の『みだれ髪』等の短歌においての狭隘ななりに強烈な自我の固執・主張となって、新しい緊張と展開をつくりだすよう

になり、絶対主義権力とその秩序にたいする下からのさまざまな批判や抵抗が発展しはじめた。

こうした動向はすでに日清戦争下の社会的緊張のなかで若い文学的世代によって予感されていた。明治二十八年は日本近代文学史において一つの大きな転換を示す時期となっているが、それまでの戯作的な風俗文学の支配にたいして広津柳浪らのいわゆる深刻小説や泉鏡花らのいわゆる観念小説がまだ戦争の終らぬうちに発表されはじめ、田岡嶺雲の雑誌『青年文』も二十八年二月に創刊された。内田魯庵は硯友社を中心とする戯作的な旧文学観念への北村透谷いらいの批判に『文学者となる法』(二八年)で一つの仕上げをあたえ、正岡子規は「写生」というワクのなかにおいてではあるが独特の角度から近代リアリズムへの道をひらきはじめていた。樋口一葉は、虐げられた女性の現実とその運命を抒情的に美しく描きだした晩年の傑作を書き、大西祝が『社会主義の必要』を論じたのも二十九年十一月(『六合雑誌』)であった。二十九年から三十二年にかけて社会小説の模索と提唱と実作とが行われたのはこうした機運のなかにおいてである。――これらの文学的動向のなかで、従来ほとんど描かれることのなかった人民の生活と関心がしだいに直接または間接に作品のなかに反映するようになり、積極的にそれを自己の主題として追及することを主張するにいたった。『青年文』の田岡嶺雲は広く注目されて、かれの最初の評論集『嶺雲揺曳』(明治三二年)は数版を重ねた。自由民権運動盛時の高知にそだった嶺雲は、東大漢文科(選科)出身として『日本人』のナショナリズム・グループに接近していたが、長沢別天らとともにナショナリズム左派ともいわるべき人民的傾向を色濃く示しており、人間の近代的な解放要求としての「ヒューマニティ」の要求を明治社会の現実につき合せて、虐げられ抑圧された「下流細民」の生活と声とを描くことのなかに文学の新しい進路をつくりだそうとした。北村透谷が左派民権運動の人民的動向にインスパイアされた文学者として出発し活動しながら、しだいに観念的な自己封鎖的な袋小路の世界に追いつめられていったのにたいして、嶺雲は人民の生活と社会的矛盾との追及を主張するこ

とによってそれを社会的・社会主義方向に打開したのである。本書に収録したかれの評論は『青年文』を中心とする時期のかれのさかんな活動のうちのごく一部分を示すものに過ぎぬが、ここには近代文学のワクを破って人民的・革命的・社会主義的な展望を開く歴史的な準備が見出される。このような嶺雲は、社会と家との両方から二重に抑圧された明治の女性たちの暗い現実にも深い関心を示し、女性解放はかれの生涯のテーマの一つとなった。かれが森鷗外とはまたちがった角度から樋口一葉を高く評価し押し出したのは当然のことであった（本書所収の一葉論参照）。嶺雲は一葉や徳田秋声をおしだしたばかりでなく、後年嶺雲の自伝『数奇伝』の巻頭に寄せた泉鏡花や秋声の序文によって知られるように当時の青年文学者たちにきわめて大きな影響を及ぼしていたのであった。なお、透谷の流れのなかから登場した松岡荒村がやがて社会主義的評論家・詩人として現れ、同じく透谷に「自分らの犠牲者」を見出していた木下尚江が『火の柱』・『良人の自白』の二長篇によって社会主義作家として登場し、さらに内田魯庵が片山潜の『労働世界』に『革命会議』という小説（編者はまだこれを見ることができずにいるが）を連載するなど、いずれも右のような嶺雲のコースと相通ずるものであり、嶺雲はこれらの動きの間の代表的な文学イデオローグとして活動したのであった。嶺雲はさらに、北清事変のさい新聞社特派員という形で従軍して書いた『北清雑観』という従軍ルポルタージュのなかで反戦的な活気を示し（本大系所収の『兵燹中の天津』はその一節）、また明治四十年代のはじめには社会民主主義から脱却しはじめた幸徳秋水の新しい革命的立場に微妙な仕方で呼応しつつ『明治叛臣伝』（明治四二年刊、いま青木文庫に収められているので本大系には抄出しなかった）を書いた。

ところで、明治三十年前後からの社会小説の試みは、内田魯庵の評論（三二年刊『文芸小品』に収む）および小説『くれの二十八日』（三一年三月、いま河出書房の小説大系等に収録）・『社會百面相』（三五年刊、いま岩波文庫）等によって代表されているが、社会生活の客観的・批判的追及を試みに日本近代

文学に新しい可能性を仕度しながら、追及に当っての魯庵自身の主体内面の分裂のために漠然とした社会的傾向以上に出ることができず、明治三四年社会民主党が結成されるというようなラジカルな動向の発展とともにかれはしだいに創作から遠ざかっていった（しかし魯庵はその後も終生進歩の友としての活動の面をもっていた）。そして魯庵の代りのようにして、徳富蘆花が長篇小説『黒潮』（三四―五年。岩波文庫）をもって社会主義小説の作家として現れる。蘆花は兄蘇峰の民友社にあって少年向きの伝記や『不如帰』（三一年）のような通俗小説を書いていたが、長篇『思出の記』（三三年）で進歩的なブルジョア精神の横溢した作品に進み出、さらにそのような進歩的ブルジョア精神が明治絶対主義の暗黒支配下におしゆがめられ圧殺されている現実を批判的に追及した『黒潮』に進み出たのであった。兄蘇峰は日清戦争とともに御用イデオローグに転化しており、この兄との袂別と社会主義への接近とを公然表明した序文をつけて『黒潮』は刊行されたが、この作品の主人公は藩閥政府に抗争する気骨ある老人で、作品そのものには社会主義的な色彩はとぼしいが、絶対主義政府にたいする一貫したはげしい批判と暴露と憎悪とは人民的な性格を濃厚に示しており、しかも当時の人民的動向はすでに社会主義的なものとして発展しはじめていたのである。蘆花は社会主義者になったのではなかったが、この作品を支えている情熱のはげしさは社会主義者たちによってインスパイアされたのであり、これが社会主義小説の確かな端緒となったのはしぜんなことであった。蘆花自身はこれをまっすぐにつきつめては行かず、トルストイ主義に傾斜していったが、後年の幸徳らの大逆事件のさいには『謀叛論』のようなすぐれた主張を発表することを恐れなかった。

　蘆花の『黒潮』を発展的にうけついで明治社会主義の代表的長篇小説を書いたのは木下尚江であった。尚江は、『黒潮』に刺激されて長篇『火の柱』（明治三七年、岩波文庫）を書き、『平民新聞』を中心とする幸徳や堺利彦やかれ自身やの反戦活動と支配権力の内部の政治家軍人の戦争準備とをいわば革

命的ロマンティシズムの情熱と方法とで描きだし、その文学的成功に力づけられて第二の長篇『良人の自由』（同年から三九年まで。岩波文庫）に着手した。この二つの長篇は長さの関係で本大系に収録しえなかったが、露骨な傾向性と自然主義以前の文学的方法の側面とにもかかわらず、その人民的・革命的な情熱の真実さによって今なお精彩を失っていない。――尚江が活動するしばらく前から、児玉花外・松岡荒村らをはじめとする社会主義詩人グループがさかんに人民的・革命的な詩を発表しはじめており、前記の『労働世界』の改題『社会主義』誌がその主要な発表舞台となっていた。この雑誌には『社会主義小楽園』という固定欄があって社会主義的な民衆文学の素朴な試みが続けられていたが、その欄のなかだけでなく本文のなかにも詩がかなりたびたびのせられていて、片山潜は児玉花外などをきわめて高く評価していた。この花外は、『社会主義詩集』（三六年『社会主義』の図書部から刊行）によって発売禁止処分をうけ、かれの詩と権力との関係を結果的にあかしだてることになったが、この詩集がたった一冊だけ第二次世界大戦後まで伝えられて岡部他家夫の手で四〇年後にはじめて陽の目を見たことは広く知られている通りである。花外を中心とする社会主義詩人グループの作品はこの大系に主要なものを収めてあるが、このうち大塚甲山は、貧しい農民の子でさまざまな職業を転々としながら孤独な文学的努力のなかで人民的な新体詩人として活動をはじめ、後藤宙外が編集していた『新小説』にすぐれた詩や随筆を発表した。蘆花は、甲山について「或は我国の新パアンズとならるゝ人にあらずや」と思った、と手紙のなかに書いている。甲山のことは宙外の『明治文壇回顧録』（河出文庫）にくわしい。それから、小杉未醒の日露戦争当時の詩集『陣中詩篇』*がきわめてすぐれた反戦詩集であることは、近年西田勝によって発見されるまでは全く忘れられていた。未醒は画家として現存のひとであるが、国木田独歩と親しかっただけでなく嶺雲ともきわめてしたしく、嶺雲の著には未醒の絵のおさめられているものもある。『君死にたもうことなかれ』*に通ずるこの詩集の反戦的な卓抜は、独歩よりも嶺雲との

内面的近接に負うところが多いと見ねばならぬ。なお、与謝野晶子や大塚楠緒子や小杉未醒らの反戦詩が公然と発表されえたのは、社会主義詩人グループをもふくめての社会主義者たちの反戦活動の展開、とくにその前面に立っていた幸徳らの『平民新聞』による公然たる反戦運動のためであり、抵抗の前線が果敢に活動していたために晶子や未醒が自由な活動をもちえたのであった。

高山樗陰は、樗牛と名前が似ているが何の関係もないばかりか、時代の支配的な精神の安手なメガフォンであった樗牛とはまったく対立的に人民と社会主義に接近していった若い新聞記者であり、千葉の新聞『新房総』によって社会評論ふうのことを書いていた。この新聞は明治三四年の社会民主党の結成のさい、その宣言と綱領とを発表して罪に問われた新聞であるが、樗陰は同紙でこれを大胆に批判し幸徳秋水はこれを感動して読んだという。秋水の序文を附した遺稿集『無弦琴』(三五年八月刊)を見た限りでは文芸評論ふうのものは多くないが、本大系におさめたものは樗陰の資質を示すに足りるであろう。本大系の第一巻に収録のまにあわなかった大正期の若い社会主義的批評家竹内仁と同じく、樗陰も数え年三〇歳で死んでいる。

以上のようなさまざまな流れは、明治三八年に旧『平民新聞』系のひとたちを中心とする文学雑誌『火鞭』が創刊されるにおよんで一つの文学的結集をもつことになった。嶺雲や尙江やが応援し白柳秀湖ら若い世代が活動したこの雑誌のなかには、日本近代文学が自然主義として確立してゆくのとはちがったコースが準備され、当時の自然主義的動向へのすぐれた批判なども見出されるが、その批判と格闘をつきつめて十分な発展をつくり出さぬうちに挫折した。しかし、白柳秀湖の『駅夫日記』*はこの流れのなかから生れた代表的なすぐれた中篇小説で、自然主義への傾斜とともにのちの労働者文学の先駆としての特色をはっきりとそなえている。尙江の『良人の自白』の主人公が島崎藤村の『破戒』の主人公

につながり、それがまた『駅夫日記』の主人公につながる筋道はこんにちかえり見て尽きないおもしろさをもっている。なお田山花袋の『田舎教師』の主人公と『駅夫日記』の主人公との内面的関連も見落すことができない。秀湖にはこれとほぼ同じ時期に中篇『黄昏』(四二年五月刊)があり、自然主義との近接と相違とはよりあからさまにこの作品に描きだされているが、『駅夫日記』の方が作品としてすぐれているだけでなく労働者文学の確かな芸術的先駆としての性格をそなえている。

幸徳秋水が文章家としてすぐれていることは当時広く知られていたが、狭い意味での文学作品というに足る作品は多くなく、ここに収めた『東京の木賃宿』*は『日本之下層社会』の系統を引くルポタージュの一つである。堺利彦は文学的活動の量はかなり多いが、ここには獄中記の一つを収めた。

大逆事件後の「冬の時代」での石川啄木の先駆的な意義については周知の通りであり、また大杉栄の果した役割については一応第一巻の解説にふれたのでここでは略すことにする。大杉と荒畑の創刊した『近代思想』が日本の進歩的文学の歴史の上ではたした大きな役割については、なおくわしくのべる予定だったが、その余裕がなくなったので他の機会を期したい。

日本近代文学の主流に立っていた個人主義文学者のなかで、人民的・革命的な動向への接近(一時的にせよ、またそうした自覚なしにせよ)については平野謙の叙述にゆずる。

解説

平野謙

太平洋戦争中、大正文学研究会というささやかな会があった。芥川龍之助と志賀直哉との二人の作家の研究書を編んだのが、その会の主要な業績にすぎなかったが、会の末席につらなっているというだけで、私なども所轄警察によばれたことがあった。提唱者は高見順、世話役は詩人の倉橋弥一だったとおぼえている。この会のことなども、たれかが一度書いておいてくれるといい。衛生無害な文学団体だったが、ほかならぬ衛生無害という点で多少は警察の注目もひいたようだった。

その大正文学研究会が、あるとき、宇野浩二を囲む座談会をもったことがある。当時宇野は大正文学に関する文学的回想をいろいろ書いていて、大正文学に異常な愛著を示していたから、一度その話をききたいという会の趣旨だったろう。主として明治末年の自然派・スバル派・白樺派のことなどが話題の中心だったようにおぼえているが、その途中で、これは速記してもらっては困るけれど、と断りながら、宇野は幸徳秋水らの大逆事件について話した。ちょっと顎をひいて、言葉をとぎらせ、いかにもヒソヒソ声でという口調で、大逆事件について語ったのである。話の内容は、明治四十三・四年ころ二十歳前後の文学青年だった宇野浩二らにとって、あの事件がいかに衝撃的だったかというだけのことだったが

宇野浩二の話ぶりの幸徳らに同情的だったことはここに断るまでもない。しかし、当時の私には、宇野浩二と大逆事件などまるで無縁のことと思いこんでいただけに、その宇野の話の中味や語り口はひとつのショックだった。いつどこで知ったか、幸徳らの大逆事件の輪廓はずっと前から私はおぼろげに心得ていて、その真相をハッキリ知りたいと希っていたので、宇野の話は電撃的な印象を私に与えたのだ。卒直にいえば、宇野浩二でさえも！　という感銘であった。

ここで今日の若い読者のために蛇足をくわえれば、この有名な明治天皇暗殺未遂事件は、その裁判の顚末もこめて、天皇制国家によって厳重に封印され、みだりにそれにふれることは到底できなかった。白柳秀湖は「云うに忍びざる兇行を演ぜんとしたもの」というような表現でふれ、沖野岩三郎は「例の悲しい千九百十年事件」とか「千九百十年の二十六人事件」とかいう言葉づかいでふれていた。中野重治が『啄木に関する一断片』を大正十五年十一月に雑誌に発表したときも、「かの有名な、けれどもその内容については我々の永久に知り得ない（だがやがて知り得るであろう！）前代未聞なりと称する事件」というふうに書いていて、天皇暗殺などとは何人も言葉にも文字にも発音できなかったのである。その大逆事件に、社会思潮などにはまるで無関心としか思えなかった宇野浩二が、半公開の席上で言及したから、私にはショッキングだったのだ。当時、私は与謝野鉄幹や佐藤春夫が大石誠之助を悼んだ詩を書いたことも、石川啄木が大逆事件に触発されて思想的転換をとげたことも一応知ってはいたが、それはいわばスペシャル・ケースだとばかり思いこんでいた。宇野浩二はそのような私の先入観をくつがえしたのである。

戦後、宇野浩二が「私たちの年ごろのもので、いくらか文学にしたしんだものは、大逆事件の報をきいたとき、よしあしにかかわらず、稲光りをあびたような気がした」とある文章に書きつけたとき、私はその言葉を文字どおりすなおに信用することができた。だから、私は宇野浩二が広津和郎とならんで

松川事件について強力な発言をした報道も、幸徳事件を作品化したモティーフもまっすぐうべなうことができたのである。——

本大系の解説として、私は一見ふさわぬ回想めいたことを書きつけたようだけれど、私のいまここでいいたいのは、本巻収録の小説・戯曲の第二部の編集を、どういう意図でえらんだか、ということだ。本巻全体がどういう意図で本体系の序巻として編まれたか、については小田切秀雄の解説で詳しくふれられるはずである。私はそのような本巻の小説・戯曲の第二部を撰定編集したわけだから、ここにその意図について若干解題めいた言葉をつらねたい、と思う。

わがプロレタリア文学がその源流として、いわゆる政治小説・社会小説・社会主義小説を明治から大正にかけて持っていることは、すでにゆるがぬ文学史的定説である。その典型的な文献は、勝本清一郎・藤森成吉の共同執筆にかかるというハリコフ会議提出の報告書だろう。しかし、その「前史」説はいささか狭く自己限定しすぎる嫌いはないか、という疑問が以前から私にはあった。それはプロレタリア文学が共産主義文学として自己晶化したことの功罪ともつながる大問題だから、軽々にここに断定するわけにはゆかないが、事実問題として、一時のプロレタリア文学が「ブルジョア文学」として敵にまわした作家・作品のなかにも、社会的なテーマを扱った作品群は、かなり存在しているのである。たとえば、大正末年に雑誌「文芸春秋」を創刊して、反プロレタリア文学の総帥と目されていた菊池寛でさえ、平沢計七の庇護者であり、平沢の提供した題料を『火華』にとりいれたことは有名な話柄である。そういういわば「ブルジョア作家」のシンパ的行動については第一巻の小田切秀雄の解説にもふれられていたから、しばらく措くとして、作品自体からみて、菊池寛の『身投救助業』という初期の作品などは、私の嫌いな言葉だが我慢してつかうとして批判的リアリズムの一秀作である。菊池寛だけではない、彼と同輩のいわゆる新思潮派に限っても、芥川龍之介の『将軍』、『一塊の土』や久米正雄の戯曲『三浦製

絲工場主』、小説『砲兵工廠裏』や豊島与志雄の『黒点』などは、すべて批判的リアリズムの作として、力作でもあり、佳作でもある。わけて豊島の『黒点』は大正十五年の作だが、当時のプロレタリア文学に優に比肩し得る立派なプロレタリア小説といっていい。こういう実例は、もし系統的にたずねたら、無数にあるだろう。志賀直哉の『山形』、『十一月三日午後の事』や武者小路実篤の『ある青年の夢』などはあまりに有名だけれど、こういう作品系列を丹念にさがしたら、自然主義文学はいうに及ばず、漱石・鷗外の作品にも、該当する作品群は枚挙にいとまない、といってよかろう。重要なことは、それら「ブルジョア作家」の批判的リアリズムに対して、具体的にどう評価するかという文学史的な仕事がまだほとんど手つかずにほっておかれているという事実だ。無論、文学理論に階級的観点を導入した事実は、画期の展望をうちひらいた。私どもはこの事実を何度も確認しなおさねばなるまい。しかし、そのことは、たとえばナップ時代のいわゆる「同伴者作家」に対する取扱いの不充分をそのまま是認することではない。『貧しき人々の群』の作者だけが『道標』の作者として死んだ作家的道程の秘密をあきらめることは、菊池寛の批判的リアリズムの芽が中道にして萎んだ道ゆきの照明と表裏をなすものだ、と思う。この事実は、近代日本文学のさまざまな可能性を可能性として評価し、その可能性の芽がどこでどうして伸びていったか、折れ曲ったかの文学史的な再発掘にかかわる問題だろう。宇野浩二がその文学的出発にあたって、大逆事件に「稲光り」のような衝撃をうけたという事実は、そのまま江口渙の場合にもあてはまると思うが、宇野と江口とがどこで手を結び、どこで別れ別れとなり、それぞれの旅路のはてに、どこでまた手を握りあうにいたったかというような事実の探求を、私どもは個々の事例としてではなく、一般的なかたちでまだなにほども明らめていない。しかし、それを私どもはやりとげねばならぬ。そのことぬきには、プロレタリア文学運動の歴史が今日私どもの前におかれてあるような形のプロレタリア文学としてある所以も、明治末年以来の近代文学がさまざまな可能性を孕みながらも所詮

は私小説・心境小説として自己限定していった道すじも、いわば丸ごとの歴史としてはよみがえらぬだろう。

そのような可能と挫折の歴史を、プロレタリア文学発生の源流にまで遡ってみること、それをこの序巻において、具体的な作品の再発掘というかたちでなしとげたい、というのが編集者としての私どもの目論見であった。

しかし、この目論見はうまく実現できなかった。第一には時間と紙幅があまりになさすぎたせいもあるが、第二には私どもの文学史的な知識の不充分という根本のことがあった。私ども――といっては語弊があるかもしれぬが、私の知識の貧弱を補うために、吉田精一の垂教をあおぎ、貴重な史料もかずかず借覧におよんだにもかかわらず、おおねの不充分はついに拭い得なかった。このことを読者諸君と示教を惜しまれなかった吉田さんとにまずおわびしておきたい。その上で、編集の目論見をもうすこし具体的に語ろうなら――

第一に、幸徳秋水らの大逆事件の文学的反映というテーマがある。第二に、日清戦争以後における庶民の厭戦的非戦的感情の再発掘というテーマがある。第三に、半封建的な農村の状況とそこにすむ人々の哀歓の再確認というテーマがある。第四に都会労働者の苦しい生活感情の芽ばえというテーマがある。それらのテーマにふさわしい作品をひろく収録することによって、近代日本文学の可能を挫折の道ゆきを泛びあがらせたい、と希ったのである。

幸徳らの大逆事件については、戦後いろんな人の努力によって、厳封された天皇制権力の封印が破れてきた。宮武外骨、渡辺順三、神崎清、糸屋寿雄、塩田庄兵衛というような人々のたゆまぬ努力によって、そのフレーム・アップの内容は、ほぼ明らかとなった、といっていいだろう。わけて、神崎清編著の大逆事件記録第一巻『獄中手記』はほとんど奇蹟にちかい貴重なドキュメントである。その記録の解

説のなかで、神崎清は大逆事件の文学的反映についても語っているが、博捜のすえになったものだけに、私など教えられるところ多大であった。そこで神崎のしるした作家と作品の名をあげてみるならば——

徳富蘆花の『謀叛論』*、三宅雪嶺の『四恩論』、木下尚江の『神・人間・自由』、石川啄木の『日本無政府主義者陰謀事件及び付帯現象』『墓碑銘』*、森鷗外の『沈黙の塔』『食堂』、平出修の『逆徒』『計画』『畜生道』、与謝野鉄幹の『大石誠之助の死』*、佐藤春夫の『やまい』、永井荷風の『散柳窓夕栄』、正宗白鳥の『危険人物』、沖野岩三郎の『宿命』、秋田雨雀の『第一の暁』『森林の犠牲』、武藤直治の『甦らぬ朝』、池亨吉の『雁の祟』、尾崎士郎の『獄中より』『獄中の暗影』『伝説』『蜜柑の皮』などを、神崎はあげている。大逆事件関係の文学作品リストはほとんどここにつくされている、といっていい。ただ啄木の『時代閉塞の現状』*や荷風の『花火』に言及していない点や木下杢太郎の『和泉屋染物店』*が落ちているのは、カキンというべきであろうか。その後、本多秋五によって武者小路実篤の『桃色の部屋』が、吉田精一によって田山花袋の『トコヨゴヨミ』*が発掘された。また、私の心おぼえをつけくわえるなら、里見弴の『雪の夜話』や小林多喜二の『東倶知安行』や田山花袋の『残雪』なども一応あげておくべきだろう。荒正人によれば、宇野浩二にもたしか敗戦前に大逆事件に取材した作品があった由だが、その作品名も発表年月もさだかでない。戦後は尾崎士郎が正面から事件を扱った作品を二度三度書き、田宮虎彦が『ある女の生涯』を書いた。また、幸徳の大逆事件とは関係ないが、『愚者の死』*を書いた佐藤春夫の昭和初年の長篇『心驕れる女』は、朝鮮人グループの大逆事件を作全体の背景にしている、とよめばよめるような作品である。朴烈事件からのヒントでもあったのであろうか。青木健作の『影なき人』も、幸徳の大逆事件とは無関係だが、いわば生きのこりの社会主義者の苦しい生活を描いた、という点では、花袋の『トコヨゴヨミ』や里見弴の『雪の夜話』と共通のテーマを追っている。そして、それら全体を大逆事件後の社会主義者のゆきくれたすがたが私小説ふうに語られてある

ている由である。

でである。なお、吉田精一の説によれば、小栗風葉の反軍小説『下士官』の結末も、一種の大逆を示唆し

荒畑寒村の『逃避者』などと比較するならば、双方の文学性のプラスマイナスも、より瞭然とするはず

いま寒村の『逃避者』のような作品を一応除外して、大逆事件の文学的反映という点を考えれば、そ

れらさまざまな作品群は、やはり鷗外と荷風と啄木の三人の態度によってほぼ代表されるかと思う。

『沈黙の塔』『食堂』を書き、『かのように』一連の五条秀麿ものを書き、『大塩平八郎』を書いた森鷗

外。『散柳窓夕栄』を書き、後になって『花火』を書いた永井荷風。『時代閉塞の現状』を書き、『墓

碑銘』を書き、"V NAROD' SERIES" を書いた石川啄木。この三人の文学的態度にほぼ大逆事件の

文学的反映は要約される、と思われる。鷗外はもっともすぐれた保守主義者の立場を代表し、荷風は同

情的だが傍観者的態度をくずし得ぬ文学的インテリゲンツィアの立場を代表し、啄木はそのインテリゲ

ンツィア的な限界を身をもってうちやぶろうとした立場をよく代表するものとして。荷風的立場は、武

者小路実篤の『桃色の部屋』や平出修の『逆徒』や田山花袋の『トコヨゴヨミ』などさまざまなニュア

ンスの作品群を基底にもつインテリゲンツィアの立場をやはり端に代表するものだ。それを中間項とし

て、鷗外と啄木との態度はするどい対極を示している。明治四十年二月の日本社会党第二回大会を傍聴

した唯一の文学者たる徳富蘆花は、明治天皇にあてて大逆事件被告の助命嘆願の公開状を書き、『謀叛

論』を講演し、みずからの書斎に秋水の名を冠した。そのような蘆花は啄木の立場に近接した文学者の

ひとりといっていいが、その『黒潮』の作者でさえ、わかい啄木の辿った切迫した到達点には、やはり

及ばなかった、と思う。大逆事件を媒介として、啄木は『きれぎれに心に浮かんだ感じと回想』などの

まっすぐな発展として、天皇制国家権力そのものを急速に自己正面の敵にえらんだのである。だからこ

そ、啄木はよく「明日の考察」にも赴き得たのだ。それは『かのように』一連の作品で天皇制護持を理

性的文学的に処理しようとした森鷗外の「日本の、軍事的・資本的・地主的・身分的な支配階級が、あたらしく下からのぼって来る敵を防ごうため、敵にさきんじて自己陣営の精神的再武装をこころみた」「絶望的な努力」（中野重治）とは全く対蹠的な地点といわなくてはならない。

そのような鷗外・荷風・啄木のかたちづくる文学的三角形は、大逆事件という「稲光り」に照しだされた天皇制国家との対決のすがたを、近代日本文学の可能と挫折とにおいて、もっとも尖鋭に反映するものにほかならない。

なお天皇制問題と対決した作品に、沖野岩三郎の『誰をか怨みん』のあることを附言しておきたい。大石誠之助の新年宴会に招かれる予定で、牧師のゆえをもって除外された偶然によって、検挙をまぬがれたと伝えられる沖野に、掲載中止を命ぜられた新聞小説『宿命』のあることはよく知られているが、その『宿命』の作者だからこそ、また『誰をか怨みん』のような天皇制批判の作も存在するのだろう。天皇より基督の方がエライとうっかり放言したために不敬罪に問われた若い牧師の裁判事件を空想的にえがいた作品である。注意すべきは、さまざまな証人の証言ののちに、裁判長が無罪を宣言するその結末であろう。それは一個の天皇制批判であると同時に、大逆事件のフレーム・アップに対する作者内心のプロテストをよくあらわしている。

しかし、大逆事件に取材した作品群のなかで、もっとも文学的に完成した秀作をただひとつあげようといわれるなら、私は尾崎士郎の『蜜柑の皮』をあげなければならぬ。一口にいえば、奥宮健之の謎を文学的に解明しようとつとめた作品で、『伝説』などにくらべて作者の人間的文学的追求の深さを物語る一傑作である。大正十一年の『獄室の暗影』から昭和五年の『伝説』を経て昭和九年の『蜜柑の皮』にいたるあくなき尾崎の追求慾は、処女作『獄中より』や処女長篇『逃避行』の作者の閲歴からすれば一応当然ともいえる。しかし、問題はそのような尾崎士郎の作家的道ゆき全体の再評価ということもある

が、『伝説』から『蜜柑の皮』への文学的深まりを、私どもはどう評価したらいいか、という一点である。『明治叛臣伝』における奥宮健之の人物評などとは比較を絶した尾崎の人間解釈の深まりは、誰の眼にも一応あきらかだろう。しかし、それが深化しているだけに、その作家的眼光は大逆事件の政治的意味づけを次第にはなれて、私流にいえば「危機における人間の表現」という一般的命題にしぼられてきている。これに対する私どもの評価の基準はまだ必ずしも一定していない。たとえば、ひとしくメーデー事件に取材した田所泉の『出廷拒否』と永松習次郎の『附和随行』とのどちらを高く評価すべきか、についての批評の混乱と、それはアナロギッシュな問題ともいえるのである。

そのような問題もふくめて、大逆事件の文学的反映というテーマは、近代日本文学の可能と挫折の道ゆきを再検討するための好個の試金石といえるだろう。

しかし、事情は大逆事件だけに限定されるものではない。鉱毒事件の文学的反映たる志賀直哉の『山形』と伊藤野枝の『転機』（第一巻所収）との比較についても同様のことがいえるだろう。達成した結果から逆照明を与えて論理的に辻褄をあわせる文学史など、やさしいだけにツマラヌことだ。一歩一歩手探りで歴史をきりひらいてきたその可能と挫折の道ゆきを丸ごとリアライズするという困難な方法によってのみ、近代日本文学史全体の歴史も、したがってプロレタリア文学運動の歴史も、歩一歩とあきらかになってゆくだろう。

大逆事件の文学的反映とならんで、半封建的な農村をうつしだしたさまざまな作品や、厭戦非戦的な作品や新しく芽ばえた都市のプロレタリアートに取材した作品などを中心に、既成の文学流派にかかわらず、本巻の第二部を編んでみた所以である。しかし、さきに断ったように、紙幅と時間の制約から予定しただけの作品さえも収められなかった。その根本には私どもの文学史的探求の不充分という弱点があるが、最初の試みとして、切に大方の寛恕と批判を乞いたい。

一八九五年（明治二八年）

作品（『　』内は発表誌・紙、刊は単行本）

詩・霜夜の月（残月楼主人）『国民之友』1
たけくらべ（樋口一葉）『文学界』1
鶴が無事（宮崎湖処子）『国民之友』1
大盃（川上眉山）『文芸倶楽部』1
脚本人柱築島由来（藤野古白）『早稲田文学』1
国民文学と世界文学（金子馬治）〃
書記官（川上眉山）『太陽』2
変目伝（広津柳浪）『読売新聞』2
文界の冬（田岡嶺雲）『青年文』2
命耶非命（山路愛山）『国民新聞』3
国民詩人（田岡嶺雲）『青年文』3
阿千代（山田美妙）『文芸倶楽部』4
蝗うり（前田曙山）〃
夜行巡査（泉鏡花）〃
悲劇の快感（田岡嶺雲）『青年文』4

文学運動および関係事件

一月『太陽』・『帝国文学』・『文芸倶楽部』が創刊された。
二月、田岡嶺雲が山県五十雄と雑誌『青年文』を創刊した。若き世代を結集し、二〇年代の宿命をたたきやぶるためであった。そして、それは人民的文学（後のプロレタリア文学）へのコースを開いた最初の雑誌となった—終刊は三〇年一月。なお、彼は『たけくらべ』を高く評価した。
四月七日、藤野古白、ピストル自殺した。
同月、安部磯雄が『社会問題と慈善事業』（六合雑誌）を発表した。
五月、田岡嶺雲が北村透谷・藤野古白の自殺に同情をそそぎ、『国民新聞』の抹殺的評価に抗した。
七月、悲惨小説、ようやく盛んとな

政治的および社会的事件

一月、伊藤博文首相の施政方針演説あり、各政黨挙国一致を決議した。
四月一七日、日清講和条約を締結した。償金三億円、新領土台湾・勢力範囲朝鮮を新に獲得した。
一一月、自由黨、伊藤博文の政友会と合併した。
一二月、ペテルブルグにおいてレーニン等によって『ペテルブルグ労働者解放闘争同盟』が創立された。
※この年、フランス労働組合及職業団体全国連合会中のサンジカリスト分子は社会主義分子と分離してリモージュに大会を開いて『労働総同盟』（C・G・T）を組織した。

黒蜴蜓（広津柳浪）『文芸倶楽部』5
奔馬（三宅青軒）〃
戦争（藤野古白）『早稲田文学』5
『ユーゴー』（人見一太郎）民友社刊5
『戦後の文学』（内田魯庵）5
青年文学者の自殺（田岡嶺雲）『青年文』5
社会の観察（横山源之助）『毎日新聞』5以降
How I Become A Christian（内村鑑三）警醒社5
外科室（泉鏡花）『文芸倶楽部』6
人鬼（乙羽庵主人）〃
新袈裟物語（三昧道人）『太陽』6
左褄（川上眉山）『四つの緒』7
女喰い（欠伸居士）『都』7
門三味線（斎藤緑雨）『読売』7
貧民倶楽部（泉鏡花）『北海道毎日』7
日本文学の新光彩（田岡嶺雲）『日本人』7
「文学界」の変調（田岡嶺雲）『青年文』7
うらおもて（川上眉山）『国民之友』
覿面（斎藤緑雨）〃
人間（うらおもてをよみて）（横山源

り、田岡嶺雲がこれを「日本文学の新光彩」と規定した。

八月、『文庫』が創刊された。

九月、堺枯川が田川大吉郎の『実業新聞』に入った。堀紫山・永嶋永洲・小林蹴月たちと親交した。

同月、田岡嶺雲が人民的国民文学展開への記念碑的評論を発表した。すなわち、悲惨小説の転回をはかった。

同月、安部磯雄が『国家社会主義とは何ぞや』（六合雑誌）を公表した。

一二月、『明治評論』が創刊された。—終刊は三〇年一〇月。

※この年、北岡朔助の『社会革命論』ジョン・レー著吉田巳之助訳『国家社会主義及び人民の権利を論ず』が出版された。

之助）『毎日新聞』 8

にごりえ（樋口一葉）『文芸倶楽部』9

小説と社会の隠微（田岡嶺雲）『青年文』 9

下流の細民と文士（田岡嶺雲）〃

東洋的の新美学を造れよ(田岡嶺雲)『日本人』 9

女房殺し（江見水蔭）『文芸倶楽部』10

如何にして大文学を得ん乎（内村鑑三）『国民之友』10

逍遥遺稿（中野重太郎）11

暗潮（川上眉山）『読売』11

独造の見識と歴史的発達(田岡嶺雲)『青年文』11

亀さん（広津柳浪）『五調子』12

文学者と貧民の関係（桜所居士）『早稲田文学』12

近世美学思想の一班（大西祝）〃

今の文学社会に対する所望の一ヵ条(矢野文雄)『帝国文学』12

境遇と霊性（田岡嶺雲）『青年文』12

多感の詩人中野逍遥(田岡嶺雲)『日本人』 12

都会の半面（横山源之助）『毎日新聞』12

一八九六年（明治二九年）

琵琶伝（泉鏡花）『国民之友』1
炭焼の煙（江見水蔭）〃
わかれ道（樋口一葉）〃
海城発電（泉鏡花）『太陽』1
『破れ羽織』（堺枯川）駸々堂刊1
ヒューマニチー（田岡嶺雲）『青年文』1
鳰の浮巣（三昧道人）2
化銀杏（泉鏡花）『文芸倶楽部』2
段だら染（広津柳浪）『万朝報』2
野分（田山花袋）『新文壇』3
詩人と人道（田岡嶺雲）『日本人』3
暗黒面と操觚者（田岡嶺雲）『青年文』3
嗚呼文士涙なき歟（田岡嶺雲）『青年文』4
『大村小尉』（川上眉山）春陽堂刊5
『シルレル』（緒方流水）民友社刊5
想化とは何ぞ（田岡嶺雲）『青年文』5
機業地の側面（横山源之助）『毎日新聞』5以降
文学と民心（田岡嶺雲）『青年文』6
今戸心中（広津柳浪）**『文芸倶楽部』**

一月、片山潜が米国から帰朝して早稲田専門学校の教師となった。
同月、『めざまし草』が創刊された。—終刊三五年二月。
同月、第二期『早稲田文学』が創刊された。
同月、黒田清輝などによって白馬会が結成された。
三月、田岡嶺雲が横山源之助たちの下層社会ルポを高く評価した。横山源之助は『毎日新聞』記者として翌月にかけて桐生・足利方面の機業界にやや本格的な視察に赴いた。
五月、幸徳秋水、小泉三申の紹介によって『中央新聞』に入社し、海外記事を担当した。
六月、田岡嶺雲が岡山県津山中学に赴任した。
七月、『新小説』が創刊された。
同月、『新声』が創刊された。—終刊は四三年三月。
同月、『世界之日本』が創刊された。—終刊は三三年三月。
一〇月、『国民之友』が「社会、人

二月、高橋幸吉、斎藤房次郎等は『船大工組合』を組織したが、やがて資本家の反間策で解体した。横山源之助がそのことで『毎日新聞』紙上、秀英舎社長佐久間貞一と対話を行った。
三月、進歩黨の結成が行われた。
五月、片山潜が『六合雑誌』に『米国に於ける社会学の進歩』を発表した。
七月、社会主義者ロンドン大会ひらかれ、労働者階級の教育問題、婦人問題、植民地政策、農民問題が討議された。
同月、この月より工場閉鎖事業縮小のため争議頻発した。一二月まで件数三二、参加人員三五〇〇人となった。
一〇月、片山潜が小西増太郎と共に『六合雑誌』の編集に従事するようになり、この頃よりこの雑誌が濃厚に社会主義的色彩を帯び始めることになった。

7『東西南北』(与謝野鉄幹) 明治書院刊7
職工問題雑話 (佐久間貞一)『毎日新聞』7
藪柑子 (徳田秋声)『文芸倶楽部』8
死刑前の六時間 (ユーゴー、森田思軒訳)『国民之友』8
時勢の観察 (内村鑑三)『国民之友』8
偉人出でよ (田岡嶺雲)『日本人』8
寝白粉 (**小栗風葉**)『**文芸倶楽部**』9
断末魔 (桐生悠々) 〃
河内屋 (**広津柳浪**)『**新小説**』9
負傷兵 (山田美妙) 〃
人才の壅塞 (田岡嶺雲)『日本人』9
偉人の追想 (田岡嶺雲)『青年文』9
照葉狂言 (泉鏡花)『読売』10
闇のうつつ (後藤宙外)『新小説』10
地方の下層社会 (横山源之助)『毎日新聞』10以降
村の鍛冶屋 (松井松葉)『太陽』11
『片恋』(ツルゲーネフ・二葉亭四迷訳) 春陽堂刊11
社会主義の必要(**大西祝**)『**六合雑誌**』11
X蟷螂鰒鉄道 (泉鏡花)『江湖文学』

間、生活、時勢といえる題目に着眼」**してそのような**小説を『社会小説』**と規定して**「**第一斎藤緑雨、第二広津柳浪、第三幸田露伴、第四後藤宙外、第五嵯峨のや主人、第六尾崎紅葉其他**」**の**『**社会小説出版予告**』**を出してより、社会小説の議論が沸騰してくるようになった。**

一一月、田岡嶺雲は笹川臨風・白河鯉洋らと革命的機運を起すために、『江湖文学』を創刊した。―終刊は三〇年六月。

一二月、『帝国文学』記者が時評に『社会小説』を取り上げて、文学は政治に関係すべきでないと主張した。

一一月、片山潜が『鉄道新論』を出版した。

一二月、米国サンフランシスコで、『職工義友会』を組織していた城常太郎、沢田半之助たちが日本労働運動の機至れりとして帰朝した。

同月、片山潜が『六合雑誌』に『独逸社会共和党の創立者フェルジナンド・ラサル』を発表した。

12

『網代木』（川上眉山）春陽堂刊12

龜甲鶴（小栗風葉）『新小説』12

『警世雜著』（内村鑑三）民友社刊12

一八九七年（明治三十年）

肖像画（ゴーゴリ作 二葉亭訳）『太陽』1
金色夜叉前編（紅葉山人）『読売新聞』1
『天地玄黄』（与謝野鉄幹）明治書院刊1
忘れえぬ人々（国木田独歩）**『国民之友』**2
堕落（三宅青軒）『文芸倶楽部』3
『英国今日之社会』（片山潜）警醒社刊3
うき草（ツルゲーネフ作 二葉亭四迷訳）**『太陽』**4
『抒情詩』（嵯峨の屋・独歩・花袋・国男・湖処子）民友社刊4
『あま蛙』（斎藤緑雨）春陽堂刊5
島守（江見水蔭）『新小説』5
九十三年（ユーゴー作 卯の花庵訳）『文芸倶楽部』5
あにき（広津柳浪）『新著月刊』5
『奥様』（川上眉山）5
『古白遺稿』（正岡子規編）5
『松むし寿々虫』（三木天遊・天来共著）河合文港堂5
新潮来曲（江見水蔭）『文芸倶楽部』

一月、『ホトトギス』が創刊した。
一月、『青年文』が終刊となった。
三月、丸善から『学燈』が創刊された。
四月、『新著月刊』が創刊された。編輯は後藤宙外で、同人が、水谷不倒・小杉天外・島村抱月など。
四月、沢田半之助及城常太郎両氏が、東京麹町区内幸町に職工義友会を起し、『職工諸君に寄す』という印刷物を各工場に配布し、労働組合の組織に着手し始めた。
五月、『日本主義』が創刊された。
六月、『江湖文学』が終刊となった。
六月二五日夜、日本最初の労働演説会が開かれた。当日の弁士は次の如し。
城常太郎（開会の辞）、高野房太郎（日本の職工と米国の職工）、松村介石（希望の曙）、佐久間貞一（水火夫問題）、片山潜（労働者団結の必要）講演終了後、高野が労働組合期成会設立の必要を説いて来会を求め

一月二日、瑞西との修交通商条約調印。
一月九日、秘露との通商条約批准公布。
一月二六日、葡萄牙との通商航海条約調印。
二月六日、八幡製鉄所設置。
二月二八日、新自由党結成。
この月「ジャパン・タイムス」社設立。
三月二三日、足尾銅山鉱毒被害四県民大挙上京陳情。
三月二四日、蚕種検査法公布。
三月二九日、貨幣法（金本位制十・一）貨幣整理資金の特別会計法を各公布す。
三月、キングスレー館が片山潜の発起で植村正久、松村介石、綱島佳吉、横井時雄らの助力をえて設立された。
六月一〇日、古社寺保存法公布。
六月二二日、帝国大学を東京帝国大学と改称し東京京都両帝国大学官制を公布す。

6
誰が罪（後藤宙外）『新著月刊』7
『悲哀の詩人』（無名氏）福島書店刊
7
源叔父（**国木田独歩**）**『文芸倶楽部』**
8
売国奴の児（江見水蔭）『太陽』8
『若菜集』（**島崎藤村**）**春陽堂刊**8
畜生腹（広津柳浪）『太陽』10
弦声（川上眉山）『文芸倶楽部』10
啓蒙時代の精神を論ず（大西祝）『国民之友』10
『労働者之良友喇撒伝』（片山潜）労働世界発売所刊12

たところ、四七人の賛成者があった。
七月五日、労働組合期成会が誕生した。
七月下旬、期成会第二回演説会が千余名の聴衆を集めて行われた。
八月一日、期成会第一回月次大会が開かれた。それ以後東京各区に頻繁に演説会が催おされた。
一二月一日、期成会メンバーの努力で鉄工一一八四人の鉄工組合発会式が神田青年会館にひらかれた。
同月同日、片山潜主筆の『労働世界』が創刊された。

八月二日、日本勧業銀行開業。
八月二五日、チリーとの修好通商航海条約に調印。
一〇月一日、新貨幣法の金本位制実施。この月朝鮮国号を大韓と改め王を皇帝と称す。

一八九八年（明治三十一年）

『山高水長』（石橋愚仙編）文学同志会刊1
わが演劇の前途（坪内逍遙）『早稲田文学』1
辰巳巷談（泉鏡花）『新小説』2
都おち（徳田秋声）『新著月刊』2
歌よみに与うる書（正岡子規）『新聞日本』2
所謂社会小説（金子筑水）『早稲田文学』2
社会問題（田岡嶺雲）『万朝報』2
暮の二十八日（内田不知庵）『新著月刊』3
『青山白雲』（徳富蘆花）3
『宗教と文学』（内村鑑三）警醒社刊3
あばら家（桐生悠々）『文芸倶楽部』4
鉄道心中（井上笠園）『文芸倶楽部』4
かこい者（小杉天外）『新小説』5
応募兵（生田葵山）『家庭雑誌』5
ワルト・ホイットマン（高山樗牛）『太陽』5

一月、『文学界』が廃刊した。
一月、『中外時論』が『明治評論』と改題として精神社から創刊された。
二月、佐佐木信綱編集の『心の華』が創刊された。
二月、日本鉄道機関手八百余名が労働条件改善のためのストライキを行った。その要求完遂の後矯正会が結成された。田岡嶺雲がこれを非常に高く評価した。
四月三日、労働組合期成会の運動会が禁止された。
四月一〇日、奠都三〇年祭を兼ねて期成会は片山潜の指揮の下に陛下万才を三唱したのち、隊伍を組んで上野に向った。
六月、『東京独立評論』が創刊された。
六月、『よしあし草』が創刊された。
七月、岡倉覚三等日本美術院創立。
七月二三日、労働組合期成会は地方遊説を行うことを決定し、片山潜、高野房太郎たちが東北地方を巡遊し

三月三〇日、本所深川区の活版工百余名が活版工同志懇話会を結成した。
四月二五日、韓国の主権確認に関する日露新協商調印。
六月二二日、進歩自由両党合同し憲政党を組織す。
六月二五日、保安条令廃止。
七月一一日、日本人が外国人を養子又は入夫となす件につき公布。
八月、政府が工場法案を議会に提出する意志を表明した。
九月九日、京釜鉄道敷設日韓条約調印。
この月憲政党分裂憲政党（旧自由党）成りついで憲政本党（旧進歩党）成る。
九月二三日、労働組合期成会は工場法案反対運動について会議をひらき、陳情委員を選出した。

女教師（徳田秋声）『新小説』6
『ユーゴー小品』（ユーゴー作 森田思軒訳）民友社刊6
『一葉集』（島崎藤村）春陽堂刊6
破島台（内田魯庵）『新小説』7
鉄道工夫（小栗風葉）『国民之友』7
髑髏盃（烏水）『万朝報』7
裸体画問題を論ず（綱島梁川）7
福翁自伝（福沢諭吉）『時事』7
埋れ井戸（三島霜川）『新小説』8
河霧（国木田独歩）『国民之友』8
湯女（内田魯庵）『国民之友』8
悪態（塚原渋柿）『天地人』8
鹿がり（国木田独歩）『家庭雑誌』8
老車夫（内田魯庵）『太陽』9
政治小説を作るべき好時機（内田魯庵）『国民之友』9
ひかえ帖（斎藤緑雨）『太陽』10
わかれ（国木田独歩）『文芸倶楽部』10
『小憤慨録』（内村鑑三）内外出版協会刊10
うき枕（内田魯庵）『新小説』11
くされ縁（二葉亭四迷訳）『文芸倶楽部』11
不如帰（徳富蘆花）『国民新聞』11

た。
八月、『国民之友』が廃刊した。
一〇月、片山潜・幸徳秋水・安部磯雄らが社会主義研究会を設立した。
一一月、『早稲田文学』が廃刊となった。

政治小説を論ず（後藤宙外）『新小説』11

『新機軸』（後藤宙外）春陽堂刊12

『夏草』（島崎藤村）春陽堂刊12

『あられ酒』（斎藤緑雨）博文館刊12

一八九九年（明治三十二年）

夕霧（川上眉山）『新小説』1
縁不縁（後藤宙外）『新小説』1
酒袋（二葉亭訳）『文芸倶楽部』1
おぼろ夜（斎藤緑雨）『文芸倶楽部』1
骨ぬすみ（広津柳浪）『文芸倶楽部』1
納豆売（広津柳浪）『少年世界』1
あたら夜（内田魯庵）『天地人』1
除夜（三島霜川）『人民新聞』1
黄金窟（三島霜川）『人民新聞』1
『きみ子』（川上眉山）春陽堂刊 1
時代の精神と大文学（高山樗牛）『太陽』2
落紅（内田魯庵）『太陽』3
要塞砲兵（前田曙山）『学窓餘談』3
鰌声（佐野天声）『万朝報』3
『嶺雲揺曳』（田岡嶺雲）新声社刊3
かた鶉（内田不知庵）『文芸倶楽部』4
亡国論（松居松葉）『万朝報』4
『日本之下層社会』（横山源之助）内外出版協会刊4
霜くずれ（内田魯庵）『新小説』5

一月、北隆館出版部から『学生団』が創刊された。
一月、新声社から『青年機関新声』が創刊された。
一月、『反省会雑誌』が『中央公論』と改題された。
六月、『大帝国』が創刊された。
六月、大日本労働協会が大井憲太郎たちによって設立の計画が進められた。
七月一〇日、片山潜は労働組合期成会東北遊説員として単独で遊説に出発した。期成会と矯正会を合同させることが目的の一つであった。
七月二〇日、高野房太郎もまた関西に向って遊説を開始した。
一〇月、『伽羅文庫』が創刊された。
一二月、新声社から『文芸新聞』が創刊された。

一月、鉄工組合の第一回創立記念日祝賀会が上野でひらかれたが、不当な弾圧をうけた。
一月七日、中学校令、高等女学校令実業学校令公布。
一月二三日、鉄道国有調査会規則公布。
一月二四日、不動産発起法公布。
二月二日、北海道旧土人保護法公布
同　四日、著作権法公布。
同　十日、印紙税法公布。
同　十六日、国籍法公布。
三月一八日、国有土地森林原野下戻法公布。
同　二二日、専売局官制公布。
四月十八日、オランダにて万国平和会議開かれる。上原勇作等を参加せしめる。
五月一六日、安田銀行設立。
同　三〇日、改正条約実施の勅諭渙発。
六月三日、三井銀行設立。
同　五日、帝国党結成。
同　一五日、軍機保護法要塞地帯法

露西亜人（松居松葉）『太陽』5
腐肉団（**後藤宙外**）『**時事新報**』**6**
朝茶の子（**内田魯庵**）『**新小説**』**6**
『風月万象』（児玉花外他）文学同志会刊6
罪の果（嵯峨の舎）『文芸倶楽部』8
黒暗々（堺枯川）『文芸倶楽部』8
血ざくら（内田魯庵）『**新小説**』**8**
渡守（江見水蔭）『よしあし草』8
政黨（**小栗風葉**）『**新小説**』**9**
脱走兵（塚原渋柿）『文芸倶楽部』9
電影（内田魯庵）『太陽』9
村の**鍛冶屋**（三島霜川）『世界之日本』9
看護**婦**（広津柳浪）『伽羅文庫』9
寝乱髪（緑雨）『読売新聞』9
美人画（三宅青軒）『東京朝日』9
千枚張（前田曙山）『東京朝日』9
『**螢下地**』（小栗風葉）春陽堂刊9
『あおと』（トルストイ作 内田魯庵訳）博文館刊9
女盗賊（三島霜川）『煙草倶楽部』10
『湯島詣』（泉鏡花）春陽堂刊**11**
『**第二嶺雲揺曳**』（**田岡嶺雲**）**新声社刊11**

各公布。
同　一七日、外国人の内地雑居実施
同　二九日、万国平和会議条約に調印す。
六月、九州豊国炭坑で二〇七人の坑夫生き埋め事件が起きた。
七月三日、私立学校法公布。
八月、東京馬車鉄道馭者車掌の解雇者によって『市内鉄道馬車車掌組合期成会』が結成された。
一〇月、大日本労働協会が設立され、機関雑誌として『**大阪週報**』が創刊された。

一九〇〇年（明治三十三年）

売節奴（後藤宙外）『ふた葉』2
乱菊物語（広津柳浪）『二六新報』2
雪どもり（内田魯庵）『二六新報』2
思い出の記（徳富蘆花）『国民新聞』
3
灰燼（徳富蘆花）『国民新聞』3
『鉄道工夫』（小栗風葉）雪裡野梅3
『照葉狂言』（泉鏡花）春陽堂刊4
『雲のちぎれ』（田岡嶺雲）春陽堂刊
4
五十年（川上眉山）『新小説』5
背理想（内田魯庵）『新小説』5
鉄道国有（内田魯庵）『太陽』5
新囚人（寒川鼠骨）『ホトトギス』5
『わか草』（小島烏水）新声社刊5
目黒小町（広津柳浪）『新小説』6
放免（寒川鼠骨）『ホトトギス』6
『金字塔』（高安月郊）文淵堂刊6
隣同志（内田魯庵）『新小説』7
『木蘭集』（小島烏水）新声社刊7
『銀河』（小島烏水）内外出版協会刊
8
『自然と人生』（徳富蘆花）**民友社刊**
8

一月、三木竹二主筆の『歌舞伎』が創刊された。
一月、博文館から『太平洋』が創刊された。
この頃河野広中、福本誠、片山潜、中村太八郎らによって普通選挙期成会が誕生した。
三月、『文章世界』が創刊された。
四月、『明星』が新詩社から創刊された。
五月、田岡嶺雲が北清事変に従軍し、反戦的ルポルタージュを『九州日報』に発表した。
七月、キリスト雑誌『新人』が創刊された。
七月、『新仏教』が創刊された。
八月、『関西文学』が『よしあし草』『わか紫』を合同してあらたに創刊された。
九月、内村鑑三編輯の『聖書の研究』が創刊された。
一〇月、『小天地』が薄田泣菫、平尾不孤、角田浩々客らによって創刊された。

一月一五日、耕地整理法施行。
同　一六日、銀行合併法廃止公布。
同　二一日、政府案宗教法に反対して仏教徒大会開催。
三月七日、未成年者喫煙禁止法及び土地収用法産業組合法等を公布。
三月、第一六回帝国議会で治安警察法が通過した。
五月二九日、義和団暴動により北京日本公使館等の保護のため軍艦笠置を大沽に派遣す。所謂『北清事変』。
六月一七日、英、米、仏等連合軍大沽占領。
八月一四日、日本及び列国連合軍北京に入る。
同　二〇日、改正小学校法令公布。
九月一五日、伊藤博文政友会を組織し、其総裁となる。
一〇月二六日、清国義和団事件に関する講和会議を北京に開く。
一一月三日、憲政本党結成。

『わすれ貝』（斎藤緑雨）博文館刊8
夜汽車（内田魯庵）『新声』9
鐘楼（ダンヌンチオ作 みおつくし訳）『帝国文学』9
『文芸小品』（内田魯庵）博文館刊9
『侠文章』（田岡嶺雲・宮崎来城）大学館9
『日本と露西亜』（島田三郎）警醒社刊9
召喚状（生田葵山）『文芸倶楽部』10
『亡国星』（松居松葉）春陽堂刊10
『武兄弟』（小栗風葉）春陽堂刊10
秘密結社（生田葵山）『新小説』11
猟官（内田魯庵）『太陽』11
革命来（山本露葉）『小天地』11
監房（寒川鼠骨）『ホトトギス』11
置土産（国木田独歩）『太陽』12
死刑囚の懺悔（山田美妙）『太陽』12
『夜濤集』（高安月郊）金尾文淵堂刊12
『貧乏朋友』（宮崎滔天編）内外出版協会刊12
※この年、
『廃娼の急務』（木下尚江・島田三郎）博文館刊。

一〇月、松村介石主筆の『警世』が創刊された。
一〇月、『東京評論』が西川光次郎らによって発刊された。児玉花外・小塚空谷たちがこれに詩を執筆し始めた。

一九〇一年（明治三十四年）

破垣禁止（内田魯庵）『文芸倶楽部』1
老壮士（内田魯庵）『太陽』1
思い出の記後篇（徳冨蘆花）『国民新聞』1
『陽炎集』（後藤宙外）春陽堂刊1
『社会と文学』（荒木鷲泉・今井緑泉）鳴皐書院刊2
『新四人』（寒川鼠骨）ホトトギス発行所刊2
政治狂（二十三階堂）『新小説』3
丸ノ内（内田魯庵）『太陽』3
貧世帯（寒川鼠骨）『ホトトギス』3
面影草（斎藤緑雨）『明星』3
『**武蔵野**』（**国木田独歩**）**民友社刊3**
『塵影録』（緒方流水）新声社刊4
『**廿世紀の怪物帝国主義**』（**幸徳秋水**）**警醒社刊4**
さめたる女（小栗風葉）『新小説』5
投機（内田魯庵）『太陽』5
辻占売（前田曙山）『時事新報』5
無花果（中村春雨）『大阪毎日』5
『**日本の労働運動**』（**片山潜・西川光次郎共著**）**労働新聞社刊5**
続さめたる女（小栗風葉）『新小説』6

一月、『新文芸』が創刊された。
四月三日、向島公園に三万人余の労働者を集めて懇親会が開かれた。三万人の労働者の前には警察も如何ともしえなかった。
四月、田岡嶺雲が『中国民報』紙上県知事を攻撃し投獄された。
五月二日、幸徳秋水・安部磯雄・木下尚江・河上清・西川光次郎たちが社会民主党を創立した。
六月、『白虹』が創刊された。
一〇月、『秀才文壇』が創刊された。

二月三日、福沢諭吉歿。
三月三日、日本鉄道労働組合矯正会の年次大会が開かれ、社会主義が労働問題解決の唯一の方法であることを確認し、普通選挙運動を訴えた。
四月二〇日、日本女子大学開学。
一二月一〇日、田中正造、足尾鉱毒事件直訴を企てる。
同　一二日、中江篤介（兆民）歿（五五）。

応募兵（生田葵山 小栗風葉）『新文芸』6
『下獄記』（田岡嶺雲）文武堂刊7
『落梅集』（島崎藤村）春陽堂刊8
『みだれ髪』（与謝野晶子）東京新詩社刊8
古物家（内田魯庵）『太陽』9
変哲家（内田魯庵）『太平洋』9
宗教家（内田魯庵）『太平洋』9
学生監督（内田魯庵）『太平洋』9
獅子檻（中村春雨）『小天地』9
『ふところ日記』（川上眉山）新声社刊9
『血ざくら』（内田魯庵）春陽堂刊9
左巻（川上眉山）『太陽』10
『嗚呼売淫国』（正岡芸陽）新声社刊10
『世界の大問題社会主義概評』（島田三郎）警醒社刊10
『イブセン社会劇』（高安月郊）東京専門学校出版部刊10
人間物語（小川煙村）『新小説』11
渡頭（三島霜川）『半面』11
牛肉と馬鈴薯（国木田独歩）『小天地』11
この年、
『普通選挙』（片山潜）信州普通選挙同盟会刊。

一九〇二年（明治三十五年）

覚醒（小栗風葉）『新小説』1
『人道の戦士田中正造』（正岡芸陽）鳴皐書院刊1
『文明主義』（斉木仙酔）文明堂刊1
黒潮（徳冨蘆花）『国民』1以降
巡査（国木田独歩）『小柴舟』2
『悲史活史録』（緒方流水）広文堂刊2
『長広舌』（幸徳秋水）人文社刊2
貴婦人（内田魯庵）『太陽』3
鎌倉日記（国木田独歩）『明星』3
『革命党員』（斎藤弔花）3
温泉場の一日（内田魯庵）『新小説』4
一火夫（国木田独歩）『小柴舟』4
旧知己（ゴルキー作 金子紫草訳）『国民新聞』4
社会詩人（内田魯庵）『文芸界』5
『重右衛門の最後』（田山花袋）新声社刊5
『英雄主義』（正岡芸陽）新声社刊5
『めぐる泡』（後藤宙外）春陽堂刊5
『如是所歓』（島田三郎）警醒社刊5
『兆民先生』（幸徳秋水）博文館刊5
栄華の塵（内田魯庵）『文芸倶楽部』

一月、『新天地』が創刊された。
二月、田岡嶺雲が出獄した。
三月、上田敏主筆の『芸苑』が創刊された。
三月、佐々醒雪の『文芸界』が創刊された。
五月、『詩文』が創刊された。
五月、『山比古』が創刊された。
六月、『芸文』が創刊された。

一月三〇日、日英同盟成る。
二月二七日、日本興業銀行設立。
三月二五日、商業会議所法公布。
六月一四日、台湾糖業奨励規則公布
七月九日、文部大臣学校騒動につき訓令を発す。
十一月一日、専売局官制公布。
十二月一日、帝国版図内国勢調査を十ヵ年毎に施行の件を公布す

6
非凡人（国木田独歩）『小天地』6
『社会百面相』（内田魯庵）博文館刊
6
『霜くずれ』（内田魯庵）春陽堂刊7
『地獄の花』（永井荷風）金港堂7
『バイロン・文界の大魔王』（木村鷹太郎）大学館刊7
『新社会』（矢野龍渓）大日本図書刊
7
『偽善百方面』（正岡芸陽）新声社刊
8
『三十三年の夢』（宮崎滔天）国光書房刊8
盗賊伝（二十三階堂）『文芸倶楽部』
9
秋の一夜（ゴルキー作 馬場孤蝶訳）『明星』9
富岡先生（国木田独歩）『教育界』9
『社会詩人』（内田魯庵）金港堂刊9
『比律賓独立戦話あぎなるど』（山田美妙）内外出版協会9
『狂人譚』（宮崎滔天）国光書房刊9
黄金世界（松居松葉）『文芸倶楽部』
10
すねもの（内田魯庵）『太陽』10
『魔詩人』禁止（田口掬汀）新声社10

旧主人 禁止（島崎藤村）『新小説』11
酒中日記（国木田独歩）『文芸界』11
藁草履（**島崎藤村**）『**明星**』**11**
運命論者（国木田独歩）『山比古』12
玉匣両浦島（森鷗外）『歌舞伎』12
馬鹿ものイワン（内田魯庵訳）『学燈』12
『うもれ木』（与謝野寛）博文館刊12
『大塩平八郎』（**高安月郊**）**金港堂刊12**
この年、
『社会講談』（安部磯雄・矢野文雄）労働新聞社刊

一九〇三年（明治三十六年）

公民（後藤宙外）『新小説』1
政治家（黒岩涙香）『文芸界』1
地獄組（塚原渋柿園）『文芸界』1
革命の花（三木天遊）『青年界』1
従軍記者（国木田独歩）『軍事界』1
翁（**島崎藤村**）『小天地』1
労働問題（**小川煙村**）『**読売新聞**』1
むしろ旗（小林蹴月）『中央新聞』1
思想問題（島村抱月）『新小説』1
桎梏（徳田秋声）『新小説』2
鳥部山（小川煙村）『新春文芸』2
魔風恋風（小杉天外）『読売新聞』2
『二重帯』（川上眉山）左久良書房刊2
飢饉（三島霜川）『太平洋』3
非凡なる凡人（国木田独歩）『中学世界』3
社会主義勃興の歌（**小塚空谷**）『**社会主義**』3
選挙日の貧乏選挙者（小塚空谷）3
壁一重（児玉花外）3
社会主義（松居松葉）『新小説』4
愛と正義—四月三日の歌（小塚空谷）『社会主義』4

一月、『卯杖』が創刊された。
一〇月八日、社会主義者の反戦大会が東京のキリスト教青年会館でひらかれた。
一一月、幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三たちが『万朝報』を去った。
一一月三日、田岡嶺雲が上京して幸徳たちに会い援助を約束した。一方、その平和革命論的方法に深い疑惑を抱いていた。
一一月一五日、週刊『平民新聞』が幸徳秋水・堺枯川たちの平民社から創刊された。援助者は次の如し。
伊藤銀月、西川光次郎、細野猪太郎、片山潜、金子喜一、田岡嶺雲、村井知至、野上啓之助、小泉三申、安倍磯雄、斎藤緑雨、木下尚江、斯波貞吉、平福百穂。
一二月、片山潜はアムステルダムにおける第二インタナショナル大会に出席するため渡米した。

一月、片山潜・西川光次郎たちが、全国にわたって社会主義の伝道旅行を行った。
二月、陸軍管区法が改正された。
四月、大阪の土佐堀青年会館で大阪社会主義大会が開かれた。
五月、片岡健吉が衆院議長となった。
五月二一日、藤村操が投身自殺した。
六月、日比谷公園が開設された。
六月、ロシヤ陸軍大臣クロパトキンが入京した。
八月、対露同志会発会式が行われた。
八月、満韓問題につき日本政府がロシヤ政府に協商議案を提出した。
一〇月三日、ロシヤが日本の満韓問題協商提議に応じ対案を致す。
一一月、片山潜が夕張炭坑に伝道を行った。
一二月、第一九回帝国議会がひらかれた。
一二月一六日、対露同志会が上奏文

幸か不幸か、四月三日（児玉花外）4
解決なき創作物（長谷川天溪）『太陽』4
噫四月三日！（**小塚空谷**）**4**
『**都市社会主義**』（片山潜）社会主義図書部刊4
苦衷（前田曙山）『新小説』5
婆さん（三島霜川）『婦人界』5
大塩中斎先生の霊に告ぐる歌（**児玉花外**）『**社会主義**』**5**
野趣（小塚空谷）5
労働軍歌（小塚空谷）5
花間の椿事（白羊）5
銅山王（児玉星人）5
江戸城明渡（**高安月郊**）**博文館刊5**
『みだれ箱』（斎藤緑雨）博文館刊5
反抗（田口掬汀）『文芸界』6
老嬢（島崎藤村）『太陽』6
三つの声（**松岡荒村**）『**社会主義**』**6**
『通俗新社会』（矢野竜溪）大日本図書刊6
『**社会主義真髄**』（**幸徳秋水**）**万朝報社刊7**
『我社会主義』（片山潜）社会主義図書刊7

を捧呈した。
一二月二一日、外務大臣小村寿太郎がロシヤ公使ローゼン大使に会見し、ロシヤに最後の考慮を要求した。
一二月二八日、軍備会議を開催した。

片山夫人を失いて（小塚空谷）『社会主義』7
火の車（山口孤剣）7
起て労働者（不倒生）7
巨碑（児玉星人）7
御用商人（内田魯庵）『太平洋』8
明治国姓爺（宮崎滔天）『二六』8以降
本能寺の跡に立ちて（児玉花外）『社会主義』8
涙花集（児玉星人）8
進め自由の友（小塚空谷）8
社会講談・大塩平八郎（小塚空谷）8
『社会主義詩集』（児玉花外）社会主義図書部刊8
家庭難（内田魯庵）『文芸倶楽部』9
ストライキ（小栗風葉）『文芸倶楽部』9
『女優ナナ』（永井荷風）新声社刊9
社会主義歓迎の歌（小塚空谷）『社会主義』9
浅草公園の歌（児玉星人）9
長屋の朝顔（児玉花外）9
自由の使命者（野口雨情）9
山上憶良が貧窮問答を読む（松岡荒村）9

『社会主義全集』（矢野竜渓）現代社刊9
正直者（国木田独歩）『新著文芸』10
迫害（児玉花外）『社会主義』10
惰民を呪う（野口雨情）10
鼠会談（児玉星人）10
神の怒（児玉花外）10
惰眠の国の貧民よ（野口雨情）10
廃人（川上眉山）『文芸界』11
女壮士（福地桜痴）『文華』11
君主観（木下尚江）『週刊平民新聞』11
亡是公咄々語（田岡嶺雲）11
夕陽（児玉花外）『社会主義』11
来れ迫害（吉田笠雨）11
神の恵み（野口雨情）11
月けぶる上野の歌（松岡荒村）11
良判事（中島孤島）『新小説』12
虚無党（田口掬汀）『文芸倶楽部』12
女難（国木田独歩）『文芸界』21
『百年後の社会』（エドワード・ベラミー作 平井慶五郎訳）警醒社刊12
我村の今昔（柏木班鳩）『週刊平民』12
貧窮を励ます歌（小塚空谷）『社会主義』12
薄命児（吉田笠雨）12
自由の歌（小塚空谷）12

一九〇四年（明治三十七年）

水彩画家（島崎藤村）『新小説』1
前科者（中村春雨）『新小説』1
暦売（レオバルザー作 小川煙村訳）『太陽』1
火の柱（木下尚江）『毎日新聞』1
東京の木賃宿（幸徳秋水）『週刊平民』1以降
罪人論（西川光次郎）1
吾人は飽くまで戦争を否認す（幸徳秋水）1
観獄記（原霞外）『直言』1
可憐の少年（白柳秀湖）1
予は直言す（幸徳秋水）1
英雄の碑（児玉花外）『社会主義』1
我等の味方（小塚空谷）1
現代の青年（白柳秀湖）1
主義の楽園（吉田笠雨）1
四人共産団（ポターペンコー作 二葉亭四迷訳）『文芸界』2
『王党民党』（ユーゴー作 小川煙村訳）新声社刊2
紡績工女の実状（深谷蒼茫）『週刊平民』2
兵士の謬想（幸徳秋水）2
社会百方面（白柳秀湖）『直言』2

一月五日、加藤時次郎、原霞外、白柳秀湖、山田滴海、小野有香たちによって月刊『直言』が創刊された。直行団の機関紙であったが、後、週刊『平民新聞』の後継紙となる。——終刊は明治三八年一月五日。

三月二〇日、平民社はロシヤの同志たちに同志的交情を送ることを決議し、幸徳が執筆した。その返答が『イスクラ』に発表された。それは協同の強い意志と信頼に充ちたものであったが、また一方では日本の社会主義者の平和革命論的方法への批評の響きが感じられた。

四月一三日、斎藤緑雨が死去した。享年三八歳。

五月、石川三四郎、斎藤兼次郎ら、『週刊社会新聞』の発行届を警視庁に出したが、許可されなかった。

九月、雑誌『信州青年』が創刊された。社会主義青年の手になるもの。

一〇月、樋口配天が月刊『ハタラケ』を創刊した。

二月三日、首相官邸で最後の元老会議が開催された。

二月四日、宮中において最後の御前会議が行われた。

二月六日、ロシヤとの国交が断絶した。

二月一〇日、ロシヤに対する宣言の詔勅が発せられた。

二月一一日、大本営が宮中に置かれた。

二月二三日、日韓議定書（攻守軍事同盟）が調印された。

二月二四日、第一回旅順口閉塞が決行された。

三月二〇日、第二〇回帝国議会が開かれた。

三月二六日、第二回旅順港閉塞が行われ、福井丸指揮官広瀬武夫中佐が戦死した。

四月一日、非常時特別法が公布され、煙草専売法が公布された。

五月一日、大阪商船学校が創立された。

五月五、六日、第二軍、第三軍が塩

芸妓問題（白柳秀湖）2
塁堤の歌（児玉星人）2
ストライキ（小塚空谷）『社会主義』2
予備兵（小栗風葉）『文芸倶楽部』3
与露国社会党書（幸徳秋水）『週刊平民』3
国債応募の虚勢（大石誠之助）3
兵営の裏面（栗田東洲）3
戦争と労働者（野沢重吉）3
嗚呼圧税ー（幸徳秋水）3 発禁
貧しき少女（ドストイエフスキイ作 夏葉女史訳）『文芸倶楽部』4
社会主義と売淫婦（山口孤剣）『週刊平民』4
飢えたるものに道徳を強うる勿れ（山口孤剣）4
恋愛と教育（木下尚江）4
社会主義と家族制度（山口孤剣）『直言』4
噫殺人的教育（白柳秀湖）4
狂女（児玉花外）4
今の所謂文筆の士（白柳秀湖）『社会主義』4
ものの種の歌（松岡荒村）4
嗚呼ヴェレスチャギン（中里介山）

大連に上陸した。
五月一〇日、イギリス・ロンドンに公債募集額二〇倍に上った。
五月一九日、独立第十師団が大孤山に上陸した。
六月二日、満洲軍総司令部を設置し、元帥大山巌を総司令官に任命した。
八月一〇日、連合艦隊ロシヤ旅順艦隊を黄海に破った。
八月一四日、上村艦隊がロシヤ・ウラジオ艦隊を蔚山沖で破った。
八月一九日、第三軍が第一回旅順総攻撃を開始した。
九月、第三軍が遼陽を占領した。
九月、愛国婦人会が創立された。
一〇月一〇日、沙河合戦が日露両軍で戦われた。
一二月六日、第三軍が二〇三高地を占領した。

『週刊平民』5
廃村の記（西川光次郎）5
井上哲次郎君の終焉（磯部検三、白柳秀湖）『直言』5
別れ路（児玉花外）5
『地上之理想国瑞西』（安部磯雄）平民社刊5
敵屍（小栗風葉）『太陽』6
敬愛なる朝鮮（幸徳秋水）『週刊平民』6
教誨師（原霞外）『直言』6
『ゴーゴリ』（昇曙夢）春陽堂刊6
四日間（ガルシン作 二葉亭四迷訳）『新小説』7
夫婦（国木田独歩）『太陽』7
獄中の音楽（堺枯川）『週刊平民』7
乞食的結婚（山口孤剣）7
革命の序幕（白柳秀湖）『直言』7
機織歌（原霞外）7
少き罪人を鞭つ勿れ（山口孤剣）7
陣中詩篇（**小杉未醒**）**嵩山房刊7**
乱調激韵（中里介山）『週刊平民』8
トルストイ翁の非戦論を評す（**幸徳秋水**）**8**
血祭（詩・原霞外）8
与愛国婦人会書（白柳秀湖）『直言』8

社会主義の讃美歌（山口孤剣）8

松岡悟君に哭す（山口孤剣）8

松岡悟君を憶う（白柳秀湖）『週刊平民』8

柳小島（泉鏡花）『文芸倶楽部』9

奴隷（白柳秀湖）『新声』9

運命（徳田秋声）『読売新聞』9

『虚無黨奇談』（松居松葉訳）警醒社刊9

彼の基督教徒を憫む（山口孤剣）『週刊平民』9

クエーカー信徒の信念を憶う（新体詩・高浜長江）9

労働者諸君自覚せざる乎（山口孤剣）9

加藤直士君の卜翁観（白柳秀湖）『直言』9

『ラサール』（幸徳秋水）平民社刊9

馬賊（小川煙村）『文芸界』10

婦人の警鐘（中里介山）『週刊平民』10

スチルネル（久津見蕨村）10

谷中村（笹川臨風）10

小児と自然（白柳秀湖）『直言』10

良人の自白（木下尚江）『毎日新聞』11

共産党宣言(マルクス＝エンゲルス、幸徳・堺訳)『週刊平民』11発禁
水火の賦(中里介山)11
萩の下露(山田滴海)『直言』11
戦死者の妻(内田魯庵)『太陽』12
『理想郷』(モリス作 堺枯川訳)平民社刊12
革命潮(孫逸仙)『週刊平民』12
トルストイとクラポトキン(金子喜一)12
革命時代と文学(白柳秀湖)12
「妾の半生涯」を読む(白柳秀湖)『直言』12
『虚無党』(塚原渋柿園)国民書院刊12

一九〇五年（明治三十八年）

炭坑夫（小川煙村）『文芸界』1
我輩は猫である（夏目漱石）『ホトトギス』1
倫敦塔（夏目漱石）『帝国文学』1
鬼子母神（小川未明）『読売新聞』1
吾が建つる愛の旗（山口孤剣）『週刊平民』1
マザージョーンズ（山口孤剣）1
「良人の自白」を読む（堺枯川）1
近松に現れたる心中（田岡嶺雲）『天鼓』2
万国労働者団結せよ（詩・山口孤剣）『直言』2
結婚とは何ぞや（白柳秀湖）2
女囚を憐れむ（山口孤剣）2
社会主義の歌（詩・山口孤剣）2
富者天国に入るべき乎（山口孤剣）2
白熊兄に（詩・児玉花外）2
局促する莫れ、桂月対晶子、悲惨に泣け、革命の血滴（田岡嶺雲）『天鼓』2
戦の罪（詩・小杉未醒）『天鼓』2
『世界に於ける日本の将来』（矢野竜

一月、週刊『平民新聞』が廃刊した。
二月、田岡嶺雲・徳田秋声・小杉未醒らの雑誌『天鼓』が創刊された。
二月、堺利彦・幸徳秋水・西川光次郎たちによって週刊『直言』が発刊された。
二月、山路愛山が月刊『独立評論』を創刊した。
三月、茅原華山が雑誌『向上主義』を創刊した。
四月、週刊『直言』が与謝野晶子の『君死に給うこと勿れ』を転載した。
五月、野口寧斎が死去した。享年三九歳。
五月、南助松・瀬川大作たちが北海道夕張炭山鉱夫機関紙『新同胞』を創刊した。
六月、樋口配天によって半月刊雑誌『青春』が創刊された。
九月、週刊『直言』が廃刊した。
九月、白柳秀湖・山口孤剣・中里介山・安成貞雄・小野有香などによって『火鞭』が創刊された。賛助者は次の如し、

一月一日、旅順が開城された。
一月二五日、黒溝台会戦が行われた。
一月、潜水艦隊が創設された。なおロンドンの邦債が騰貴した。
二月六日、旅順鎮守府が設けられた。
三月一〇日、日本軍が奉天を占領した。
五月二七日、連合艦隊がロシヤの「バルチック」艦隊を日本海に撃滅した。
六月一日、塩専売制度が実施された。
六月九日、アメリカ大統領セオドール・ルーズベルトが講和勧告書を日露両国に渡した。
七月七日、樺太派遣軍第一三師団が上陸を始めた。
七月八日、講和特命全権委員小村寿太郎らがアメリカに向った。
七月二四日、樺太全島が日本軍によって占領された。
八月一〇日、日露講和全権委員始め

渓）近事画報社刊2
思想の革命（小田頼造）『直言』3
「文士」と社会主義（梁田生）『直言』3
啇生恋（白柳秀湖）3
源氏物語に於ける女性（管谷岩子）3
写実主義の由来と末路（田岡嶺雲）『天鼓』3
非難主義非か（田岡嶺雲）3
『壺中観』（田岡嶺雲）嵩山房刊4発禁
生活（三島霜川）『文芸界』4
天うつ浪（幸田露伴）『読売新聞』4
労働に生きよ（詩・小野有香）『直言』4
鮫が橋の貧民窟（原子草水）4
さくら宗吾（そろり）4
梭の音（詩・樋口配天）4
恋愛中心の社会問題（木下尚江）4
新聞の堕落、軍国と美術（田岡嶺雲）『天鼓』4
労働の赤旗（詩・山口孤剣）『直言』5
女性犯罪の両面（白柳秀湖）5
芸術の神聖を如何（山口孤剣）5

児玉花外・内田魯庵・山路愛山・田岡嶺雲・幸徳秋水・木下尚江・久津見蕨村・堺枯川ら。
一一月、木下尚江、安部磯雄らによって『新紀元』が創刊された。
――終刊は明治三九年一一月。
一一月、『火鞭』が孤剣・有香の『木下尚江に与う』を掲載し、その教会へ帰る退歩を批判した。
一一月、山口孤剣・西川光次郎らによって半月刊『光』が創刊された。
――終刊は明治三九年一二月。

て米国ニュー・ハムプシャ州ポーツマスに会見した。
八月一二日、日英同盟拡張協約が調印された。
八月二八日、樺太民政本署が設置された。
九月一日、日露休戦協定書が調印された。
九月五日、日露講和条約が調印された。
九月六日、屈辱講和反対国民大会が日比谷でひらかれ暴動化した。
一〇月一六日、平和克復の詔勅が発せられた。
一〇月二二日、東郷平八郎が凱旋した。
一一月、韓国一進会が日本の保護に服すべきことを宣言した。
一一月二三日、臨時国債整理局官制が公布された。
一一月二三日、京城に統監府が設置された。
一二月一二日、大本営が閉鎖された。
一二月二一日、伊藤博文が韓国統監に任命された。
一二月二二日、満洲に関する日清条

眼（中里介山）5
彼は牢獄に在り（渋谷夕照）5
百姓嘆（細江釣士）5
作家ならざる二小説家＝夏目漱石と
木下尚江＝（田岡嶺雲）『天鼓』5
縛馬筈か（田岡嶺雲）5
『脚本 目黒巷談』（広津柳浪）6
永久の淵月（堺枯川）『直言』6
吉原見物の記（西川文子）6
科学の進歩何する者ぞ（山口孤剣）
6
予が本能主義（田岡嶺雲）『天鼓』6
燃ゆる心臓（ゴルキー、大島蘭秀訳）
6
『うろこ雲』（田岡嶺雲）嵩山房刊6
『独歩集』（国木田独歩）近事画報社
刊7
謀殺的労働（山口孤剣）『直言』7
下谷区万年町貧民窟の状態（斎藤兼
次郎）7
講談・慈善心（原霞外）7
紳士閥飼養の文学者（山口孤剣）7
嗚呼娼妓（荒畑寒村）7
忘れられたる谷中村（荒畑寒村）7
風葉の『青春』、戦慄すべき文明の結
果（田岡嶺雲）『天鼓』7

約が調印された。

童謡と口碑（田岡嶺雲）7
野口家の奇寃に関し新聞紙の徳義を論ず（田岡嶺雲）『天鼓』7
『荒村遺稿』（松岡荒村）平民社刊7
田園の頽廃（山口孤剣）『直言』8
罪なきものあるか（山口孤剣）8
悲歌一曲（山口孤剣）8
顕れたる名、隠れたる功（田岡嶺雲）『天鼓』8
万朝報と黒岩周六（田岡嶺雲）8
断雲片雲二三章（田岡嶺雲）8
社会主義と愛国心（大杉栄訳）8以降
帝国主義を呪うの歌（山口孤剣）8
社会主義の上より見たる俚諺（無逸生）8
『半生の墓』（堺枯川）平民書房刊8
落葉朽葉（曽呂利）『直言』9
社会劇を起すべし（吉田笠雨）9
人面鬼槙本とう（田岡嶺雲）『天鼓』9
断雲片雲（田岡嶺雲）『天鼓』9
火鞭を掲げて陣頭に宣す（白柳秀湖）『火鞭』9
火の柱（詩・山口孤剣）9
ニイチェとショッペンハウエル（久

津見蕨村）9
家兄の出征を送る（小野有香）9
国民新聞と蘇峯（田岡嶺雲）『天鼓』
10
静雲動雲（田岡嶺雲）『天鼓』10
現実の醇化（白柳秀湖）『火鞭』10
亜文明論（山口孤剣）10
上帝の怒、清怨、鉄の鎖も今し解け
（詩・山口孤剣）10
労働の神聖とは何ぞや（島中翠湖）
10
新講談について（原霞外）10
わが徒の人生観（白柳秀湖）『火鞭』
11
文学の権威を侮辱するもの（白柳秀
湖）11
科学万能主義を排す（山口孤剣）11
抒情詩人プシキン（白柳秀湖）11
新ライン新聞を懐う（小野有香）11
日本国民の使命（木下尚江）『新紀元』11
11
乱調二篇（山口孤剣）11
心身両面より見たる犯罪者（白柳秀
湖）『光』11
社会主義と吾が関係（宮崎湖処子）
11

黒潮第二篇（徳富蘆花）『新紀元』12

呉の都より（田岡嶺雲）『天鼓』12

火たらん、焰たらん（田岡嶺雲）12

動雲静雲（田岡嶺雲）12

わが徒の芸術観（白柳秀湖）『火鞭』12

エミール・ゾラ（山口孤剣）12

与小杉天外君（白柳秀湖）12

妖僧（安成貞雄）12

新国民の熱望の声を聴け（木下尚江）『新紀元』12

痛憤（山口孤剣）12

目黒の秋夕（白柳秀湖）12

凡人主義とは何ぞや（山口孤剣）『光』12

立て万国の労働者（山口孤剣）12

一九〇六年（明治三十九年）

海異記（泉鏡花）『新小説』1
乞食（小川未明）『早稲田文学』1
野菊の墓（伊藤左千夫）『ホトトギス』1
新曙光（木下尚江）『東京毎日』1
『イワンの馬鹿』（トルストイ作 内田魯庵訳）火鞭会刊1
一、年賀状の事、神秘主義を論ず、呉山蘇水（田岡嶺雲）『天鼓』1
砲兵工廠人夫の一日（一人夫）『新紀元』1
乱絃（土屋窓外）『光』1
思想界覚醒の曙光（白柳秀湖）『火鞭』1
露国詩人レールモントフ（白柳秀湖）1
与河上肇君書（白柳秀湖）1
囚われたる文芸（島村抱月）『早稲田文学』1
文芸協会に餞す（白柳秀湖）『火鞭』2
基督教的社会主義を評す（白柳秀湖）2
亡盟（安成貞雄）2

一月四日、福地桜痴が死去した。享年六七歳。
二月、文芸協会が設立した。
二月、日本社会党が結成された。
三月、『天鼓』が休刊した。
一一月、『新紀元』が廃刊した。
一二月、『光』が終刊した。

一月七日、第一次西園寺内閣が成立した。
一月三一日、カナダとの修交通商条約が結ばれた。
三月二八日、韓国統監府が開庁された。
三月三一日、鉄道国有法及び京釜鉄道買収法が公布された。
三月、日本社会党によって東京市電値上げ反対大会が東京の日比谷でひらかれた。
四月、青山練兵場にて陸軍凱旋大観兵式が挙行された。
五月一〇日、韓国政府が鎮海湾を軍港とした。
五月二〇日、鉄道五千哩祝賀会が名古屋市でひらかれた。
六月一日、ロシヤより樺太北緯五〇度以南を受領した。
六月一二日、大杉栄・黒板勝美たちによって日本エスペラント協会が創立された。
八月一日、関東都督府官制が公布された。

宮崎湖処子に与う（島中翠湖）2
日かげの女王（木下尚江）『新紀元』
2
求業者と正月の生活（一人夫）2
榛名山上より（徳富蘆花）2
ああ韓国（小野有香）2
窮迫と犯罪（白柳秀湖）『光』2
田舎教師（国木田独歩）『新古文林』
3
人生（小川未明）『早稲田文芸』3
『破戒』（**島崎藤村**）**上田屋刊3**
『運命』（国木田独歩）左久良書房刊
3
『壷中我観』（田岡嶺雲）嵩山房3 発禁
風濤記（田岡嶺雲）『天鼓』3 発禁
旅人前程を望む（白柳秀湖）『火鞭』
3
上帝暴虐論（山口孤剣）3
嗚呼三月十一日（木下尚江）『新紀元』
4
科学的人生論（山田霊泉）4
火夫の運命（金子喜一）4
去勢道徳論（山口孤剣）『光』3
炎の心臓（山口孤剣）3
『碧潮』（樋口竜峡）嵩山房刊3
脚本 殉教者（小川煙村）『文芸倶楽部』
4

一〇月一日、北海道炭礦鉄道、甲武鉄道、日本鉄道が政府に買収された。鉄道国有着手の嚆矢。
一〇月一二日、アメリカ・サンフランシスコにおいて日本学童が排斥された。
一一月二六日、南満洲鉄道株式会社が設立された。
一一月二八日、韓国拓殖株式会社が設立された。

二人画工（内田魯庵）『新潮』4

坊っちゃん（夏目漱石）『ホトトギス』4

『労働問題』禁止（ゾラ作 堺枯川訳）春陽堂刊4

露国文壇の大勢（白柳秀湖）『火鞭』4

文学者としてのトルストイ（白柳秀湖）4

囚われたる芸術（吉田白鳩）4

『旅ごろも』（高浜長江）中庸堂刊4

脚本 此処も浮世（木下尚江）『新紀元』5

人生（ゴルキー作 国木田独歩訳）『近事画報』5

天草一揆（塚原渋柿園）『東京日日』5

『漾虚集』（夏目漱石）大倉書店刊5

急進主義の論理（白柳秀湖）『火鞭』5

家庭主義排斥論（大石誠之助）5

安部磯雄君に与う（奥山登助）5

『今人古人』（中里介山）隆文館刊5

岡本の手紙（国木田独歩）『中央公論』6

谷中の廃村を訪うの記（赤羽一）『新紀元』6

『社会主義管見』（山路愛山）文淵堂

刊6
世界革命運動の清流(幸徳秋水)『光』7
口吐火(山口孤剣)7
獄裡の冥想(西川光次郎)7
出版の自由を回復せよ(木下尚江)『新紀元』7
凶作地の児童に寄す(高浜長江)『新紀元』7
号外(国木田独歩)『新古文林』8
慈善夫人(内田魯庵)『太陽』8
三日の旅(石川三四郎)『新紀元』8
ルーテルを懐う(山口孤剣)『光』8
紅熱花(山口孤剣)8
噫露国の同志よ(荒畑寒村)8
草まくら(夏目漱石)『新小説』9
わかれ水(川上眉山)『趣味』9
懺悔の苦痛(木下尚江)『新紀元』9
革命調(リープクネヒトの死)(蘆谷蘆村)9
暴風雨裡の鶯(ゴルキー、山口孤剣訳)9
インパネス物語(荒畑寒村)9
自由の健児(谷村鉤雪)9
家畜(島崎藤村)『中央公論』10
其面影(長谷川二葉亭)『東京朝日』10

ゴルキーの見たる米国（金子喜一）『光』10
社会主義を中途で止める人（大石誠之助）10
殺されつつある同胞（荒畑寒村）10
幻滅時代の芸術（長谷川天溪）『太陽』10
『理想の人』（安部磯雄）文淵堂刊10
鉄道線路（小川未明）『新小説』11
『懺悔』（木下尚江）文淵堂11
労働者の詩（蘆谷蘆村）『新紀元』11
社会は洞穴だ（山口孤剣）『光』11
新兵諸君に与う（大杉栄訳）11
ルジンと現代の青年（白柳秀湖）『読売』11
若主人（原田譲二）『新古文林』12
感慨断片（大石誠之助）『光』12
光の埋棺式に歌える（山口孤剣）『光』12

一九〇七年（明治四〇年）

焚火（徳田秋声）『趣味』1
野分（夏目漱石）『ホトトギス』1
ひとりもの（長谷川如是閑）『日本及日本人』1
権謀（メー、白柳秀湖訳）『読売』1
『鶉籠』（夏目漱石）春陽堂刊1
『霊か肉か』（木下尚江）梁江堂刊1
十人画伝（小杉未醒）『新古文林』1
舞姫（荒畑寒村）『日刊平民』1
勝利の悲哀（徳富蘆花）『黒潮』1
新派講談・船来乞食（原霞外）『日刊平民』1
日本社会主義史（石川三四郎・幸徳秋水補）『日刊平民』1
帯剣囚徒（看守生活の実状）（赤絆天）1
誰が為の芸術？（木下尚江）『世界婦人』1
吹雪（小川未明）『読売』2
昼と夜（原田譲二）2
戦闘（斎藤弔花）『東京日日』2
大塩平八郎を懐う（詩・高浜長江）『日刊平民』2
ツルゲネフ（白柳秀湖）『新声』2

一月一五日、日刊『平民新聞』が石川三四郎、西川光次郎、武内兼七、幸徳秋水、堺枯川たちによって京橋平民社から発刊された。

二月、幸徳秋水は『余が思想の変化（普通選挙について）』で始めて、平和革命論を自己批判し、直接行動の提起の中に暴力革命論を主張した。大杉栄もまた『欧州社会党運動大勢』の中でそれに応じた。

二月一七日、徳富蘆花や奥宮健之たちが日本社会党第二回大会を傍聴した。

三月、帝国議会、福田英子、管野須賀子、西川文子たちの運動によって婦人の政談演説会に出席するを禁止する治安警察法改正の請願委員会を設く。

三月、福田英子が教会から破門された。

三月、一労働者が『片山先生に告ぐ』（日刊平民）と題してその平和革命論を批判した。

三月、日刊『平民』は社説に『人民の中に』を掲げた。

二月四日、足尾銅山坑夫三六〇〇名が争議を起し、電線を切断し、爆撃し、工場・住宅を襲撃し、警察・支配人たちのなすところを知らず。遂に高崎聯隊が出動した。

二月一七日、日本社会党第二回大会が神田錦町、錦輝館で開かれた。日本社会党は綱領から「国法の下に……」をけずった。幸徳と田添との間に、議会政策と直接行動論とがたたかわされた。この論争は革命の本質観の対立であったので、この後分派が形成されることになった。

二月二二日、日本社会党が禁止された。

同月、三菱造船所労働者五〇〇名ストライキをおこし、紛擾となった。なお、長崎、郵便夫とストライキ頻発す。

三月、遊泉寺、端島炭坑、福井鉱山、高根銀山、岩淵町、生野銀山、新宮、夕張鉱山、石切、兵士、漁夫、横浜船工その他にストライキあり、また百姓一揆頻発す。

塵埃（正宗白鳥）『趣味』2
余が思想の変化（幸徳秋水）『日刊平民』2
欧州社会黨運動大勢（大杉栄）2
高等奴隷論（山口孤剣）2
平民文学の解義（吉田碧寥）2
嗚呼奴隷議会（赤羽一）2
波のしぶき（田岡嶺雲）2
棗林（原田譲二）『新古文林』3
泣き笑い（国木田独歩）3
悪人論（山口孤剣）『日刊平民』3
雛祭（白柳秀湖）3
教会を去れ（山口孤剣）3
直接行動の意義（白柳秀湖）3
革命の友よ（山口孤剣）3
労働階級の戦術（赤羽一）3
父母を蹴れ（山口孤剣）3発禁
旧知己（佐藤緑葉）『新潮』4
白眼黨（小川未明）『文章世界』4
借家人（与謝野晶子）『趣味』4
谷中村の一日（石川三四郎）『日刊平民』4
文士としての兆民先生（幸徳秋水）『文章世界』4
君よ泣くこと勿れ（山口孤剣）『日刊平民』4
牢獄と兵営（荒畑寒村）4

三月、早稲田詩社が結成された。
四月一四日、日刊『平民新聞』が廃刊した。終刊は第七五号。
四月、大杉栄が日刊『平民』に訳したクロポトキンの『青年に訴う』のために起訴された。また、『新兵事件』の控訴公判が行われた。
四月、山口孤剣の『父母を蹴れ』公判が行われた。
五月、『方寸』が創刊された。
六月一日、半月刊『大阪平民新聞』が森近運平、武田九平らによって創刊された。幸徳・堺・大杉・山川たちがこれに執筆した。
六月二日、西川光次郎、片山潜、田添鉄二たちは『社会新聞』を創刊した。
六月二〇日、『熊本評論』が松尾卯一太によって創刊された。――終刊は明治四一年九月二〇日まで第三一号。
六月、西園寺公望が雨声会に文士を招待した。夏目漱石ら拒絶した。
六月、河井酔茗らの『詩人』が創刊された。
八月一日から一〇日まで九段坂下のユニバーサリスト教会で社会主義夏

四月、ロンドンにおいてロシヤ社会民主党第五回大会がひらかれた。民族諸党（ポーランド人、インド人）の代表者が参加した。非プロレタリア的諸党及び国会に対する態度を検討した。
四月一五日、奉天新民屯線及び長春吉林線に関する日清鉄道協約が調印された。
五月、華族令が公布された。
六月四日、足尾銅山に大騒擾が起った。善通寺第一一師団が出動して始めて鎮圧された。
六月二五日、片山潜・田添鉄二たち「議会政策派」が「憲法の範囲内において社会主義を主張する」という日本平民党の結社届を出したが、ただちに禁止された。
七月六日、韓国皇帝の密使と称する李鍋がオランダ、ヘーグの平和会議に出席し、日本政府の暴政を批判し、韓国独立を要求した。日本政府大いに狼狽し、これを機に韓国の軍事外交をその手中に収めた。
七月二一日、東京の社会主義者有志は、朝鮮人民の自由と独立を要求する旨の声明を発した。

『平民主義』（幸徳秋水）隆文館4
『飢渇』（木下尚江）昭文堂刊4
南小泉村（真山青果）『新潮』5
呪咀（小川未明）『家庭文芸』5
小軋轢（徳田秋声）『中央公論』5
独立心（正宗白鳥）『新小説』5
少年行（中村星湖）『早稲田文学』5
『回光録』（綱島梁川）金尾文淵堂刊5
北村透谷を懐う（山路愛山）『文章世界』5
芸術家の態度（岩野泡鳴）『太陽』5
『文学論』（夏目漱石）大倉書店刊5
『霊か肉か』（木下尚江）文淵堂刊5
並木（島崎藤村）『文芸倶楽部』6
窮死（国木田独歩）6
疲労（国木田独歩）『趣味』6
夏帽子（原田譲二）『文庫』6
虞美人草（夏目漱石）『東京朝日』6
『濤声』（国木田独歩）彩雲閣刊6
批評の基準（金子築）『趣味』6
平民講談・大塩平八郎（李花生）『大阪平民新聞』6
煽動論（大石誠之助）6
恐怖（白柳秀湖）『趣味』7
土曜日（原田譲二）7
貧児（生田葵山）『中央公論』7

季講習会が催された。田添『社会主義』、幸徳『法律論、道徳論』、片山『労働組合論』などの講座が数十名を集めて熱心に聴かれた。

八月三一日、片山潜・西川光次郎・田添鉄二たちは社会主義同志会を組織し、それ以後日曜毎に研究会をもよおした。

九月六日、幸徳秋水・堺利彦たちは金曜講演会を催おし、以後毎週金曜日の夜それを開いた。

九月、『東西南北』が創刊された。

九月、陸羯南死去。享年五一歳。

九月、綱島梁川が死去した。享年三五歳。

一〇月、小山内薫編輯の『新思潮』が創刊された。

一一月、『大阪平民新聞』が『日本平民新聞』と改称された。

一一月、田岡嶺雲は笹川潔たちと共に『東亜新報』をおこした。

一一月、幸徳秋水が養病のために高知県中村に帰った。

一二月、岩野泡鳴が『読売』に『国家人生論』を発表した。

八月、第二インタナショナル、スッットガルト大会がひらかれた。二十数カ国より八〇〇余名の代表者が参加し、世界戦争防止に関する決議案が採用された。（戦争反対を表明したが、戦争防止の具体的手段については明示しなかった。）

八月二一日、英国労働党の首領ハーディ翁が来日した。歓迎会が神田錦輝館でひらかれた。ハーディは平和革命論の主張を行い、幸徳たちに冷笑された。

八月二五日、万国無政府党大会がアムステルダムに開かれ組織運動の問題が提起された。

八月三一日、支那革命党員張継、章炳麟たちが社会主義講習会を開いた。その発会式に幸徳は「自由社会主義」についての講演を行った。

八月、関東大水害。

九月、陸軍管轄区域を改正し一二師団を一九師団とした。

一〇月一五日、西川光次郎が、爾来平民新聞の広告を社会新聞に掲載することを拒否すると森近運平に通告した。

一〇月一八日、万国平和会議議定書

留さん（中里介山）『新公論』7
漂泊（石川啄木）『紅苜宿』7
『大農』（佐野天声）文淵堂刊7
『愁人』（小川未明）隆文館刊7
更に一歩を進めよ（森近運平）『日刊平民』7
憲法遵守の拒絶（森近運平）7
『神愁鬼哭』（ドイッチ、幸徳秋水訳）隆文館刊8
よごれ男（白柳秀湖）『日刊平民』8
平民の娘（三島霜川）『文芸倶楽部』8
短夜（原田譲二）『早稲田文学』8
暴風（国木田独歩）『日本新聞』8
長田村にて（田岡嶺雲）8
蒲団（田山花袋）『新小説』9
座布団（荒畑寒村）『新声』9
節操（国木田独歩）『太陽』9
『紅塵』（正宗白鳥）彩雲閣刊9
無解決の文学（片上伸）『早稲田文学』9
社会主義鄙見（片山潜）『社会新聞』9
読緑蔭漫語（田添評）（大石誠之助）『日刊平民』9
下婢（田山花袋）『新潮』10
生（原田譲二）『文庫』10

がオランダ・ヘーグにおいて調印された。
一一月一七日、『社会新聞』は幸徳・堺・森近たちが東京市電に買収されたとのデマ記事を掲げた。
一一月二二日、在京社会主義者四〇余名は金曜会講演会終了後、分派問題を検討、さきの片山たちの態度を「分派問題を私怨の渦中に葬むる」ものとして非難した。山手平民クラブもこれに応じた。
一二月、片山潜・鈴木楯夫らは、「国家産業の基礎を固むる……」という平民協会の結社届を提出した。
一二月、日本人を官吏に任用する韓国新官制が施行された。

暗流（三島霜川）『新婦人』10
平凡（二葉亭四迷）『東京日日』10
『蒲団』合評（小栗風葉・徳田秋江・正宗白鳥・島村抱月・片上伸・相馬御風等）『早稲田文学』10
象徴主義（生田長江）『新潮』10
『離愁』（白柳秀湖）隆文館10
『霹靂鞭』（田岡嶺雲）有倫堂10発禁
東京評論（幸徳秋水）『日刊平民』10
論理的遊戯を排す（長谷川天渓）『太陽』10
余と自然主義（国木田独歩）『日本』10
工場日記（岡野活石）『日刊平民』10
飯屋（荒畑寒村）10
食後（徳田秋江）『早稲田文学』11
秋（佐藤緑葉）『新声』11
生（原田譲二）『文庫』11
親と子（原田譲二）『新婦人』11
平凡（二葉亭四迷）『朝日』11
近時の小説に就て（内田魯庵）『太陽』11
所謂自然主義の態度（平出修）『明星』11
ストライキ論（大石誠之助）『日刊平民』11
「太陽」記者長谷川天渓氏に問う（木

下杢太郎）『明星』11
自然主義（上田敏）『新小説』11
渚（国木田独歩）『文章世界』12
駅夫日記（白柳秀湖）『新小説』12
虚無（三島霜川）『中央公論』12
『青果集』（眞山青果）新潮社刊12
『緑髪』（小川未明）隆文館12
人生観上の自然主義（片上伸）『早稲田文学』12
『其面影』合評（徳田秋声、秋田雨雀等）12
詩人ウイトマン（野口米次郎）『慶応義塾学報』12
自然主義と虚無的思想（白柳秀湖）『新声』12
獄中より一筆啓上（守田有秋）『日刊平民』11

一九〇八年（明治四一年）

ドブ（三島霜川）『新小説』1
紅足袋（原田譲二）『文庫』1
演奏会（安成二郎）『新声』1
断頭台（ツルゲーネフ、馬場孤蝶訳）1
一兵卒（田山花袋）『早稲田文学』1
何処へ（正宗白鳥）1
二老人（国木田独歩）『文章世界』1
竹の木戸（国木田独歩）『中央公論』1
坑夫（夏目漱石）『東京朝日』1
『鶏頭』（高浜虚子）春陽堂刊1
自然主義と文明問題（金子筑水）『太陽』
現実暴露の悲哀（長谷川天渓）1
ゴルキー作『同志』（堺枯川）『秋声』1
霜夜（荒畑寒村）『日刊平民』1
海南評論（幸徳秋水）1
運命（小川未明）『趣味』2
病衰（小川未明）『文庫』2
落日（佐藤緑葉）2
何故に現代我国の文芸は国民的ならざる乎（斎藤信策）『太陽』2

一月三日夜、金曜講演会が神田吉田屋で新年会を催した。出席者八〇名。余興の活人画があった。堺利彦扮するトレポフ将軍と山川均扮するザスリッチ嬢の『革命婦人』、**堺ため子、守田有秋らがそれぞれ扮したサシエンカ、パヴェルなどのゴルキーの小説『母』の一節『メーデーの示威運動』など。**
一月一七日夜、金曜講演会がひらかれ、守田有秋の講演『トーマス・ムーアのユートピア』が中止解散された。また、茶話会も中止解散となった。それに憤激した堺利彦・大杉栄・山川均・坂本清馬たちが街頭の群集に向って演説し、所謂『金曜会屋上演説事件』がおきた。
二月、三井甲之の『アカネ』が創刊した。
三月一五日、西川光次郎、松崎源吉、吉川守邦、渡辺政太郎、赤羽一らが『社会新聞』とは別に月三回の『東京社会新聞』を始めた。
三月、児玉花外・高浜長江たちの詩

一月一八日、尾張亀崎町相生座で宮下太吉らの友愛義団と片山潜・鈴木楯夫らの『社会新聞』派との演説会がひらかれた。この時、宮下は片山に皇室問題の処理を聞いた。片山は議会で多数を取れば憲法改正できるといって問題をそらせた。
二月一六日、西川光次郎宅に集った社会主義同志会員有志は片山潜を同志より除名した。
三月、田添鉄二が死去した。享年三四歳。
四月一日、軍人恩給法改正が公布された。
五月五日、日米仲裁裁判条約が調印された。
五月二七日、森近運平が『日本平民新聞』第二三号の附録『労働者』によって拘引された。
七月、西園寺内閣が『赤旗事件』の責任をとって倒壊し、第二次桂内閣に交替した。
七月、幸徳秋水が、中村を出て、紀州新宮に大石誠之助らにあい、また

文壇を警醒す（二葉亭四迷）2
私は懐疑派だ（二葉亭四迷）『文章世界』2
非軍備主義運動（大杉栄）『日刊平民』2
未解決の人生と自然主義（片上伸）『早稲田文学』2
芋掘り（長塚節）『ホトトギス』3
繋縛（三島霜川）『文芸倶楽部』3
四作夫婦（土岐哀果）『文庫』3
予と彼（原田譲二）3
味（秋田雨雀）3
自然主義論（生田長江）『趣味』3
新興文学の意義（片上伸）『太陽』3
所謂余裕派小説の価値（長谷川天渓）3
文芸と社会（上田敏）『東亜の光』3
自然主義と神（木下尚江）『太陽』3
牢獄哲学（幸徳秋水）『日刊平民』3
爾の敵を憎め（大石誠之助）3
駅夫（三島霜川）『文章世界』4
何時までも（佐藤緑葉）『ホノオ』4
生（田山花袋）『読売新聞』4
春（島崎藤村）『東京朝日』4
田山花袋氏の自然主義（片上伸）『早稲田文学』4
文壇の自滅的傾向（中島孤島）『キヌ

誌『火柱』が創刊された。
四月、『キヌタ』が創刊された。
五月二〇日、『日本平民新聞』が号外を出し、東京移転を計画したが、やがて廃刊となってしまった。
五月、髙畠素之、長加部寅吉などによって髙崎から『東北評論』が発刊された。ただちに発禁となった。
六月、国木田独歩が死去した。享年三八歳。
六月、川上眉山が自殺した。享年四〇歳。
六月、島中翠湖たちによって京都から社会主義文学雑誌『新社会』が発刊され即時禁止となった。
六月二六日、山口孤剣出獄歓迎会が神田錦輝館で開かれ、所謂『赤旗事件』おおき、大杉栄・荒畑寒村・村木源次郎・百瀬晋などが拘引され、投獄された。
八月、『東北評論』が復活した。
八月、都会詩社が結成された。
九月、『東京社会新聞』が廃刊した。
一〇月、『アララギ』が創刊した。伊藤左千夫經営。
一二月、『パンの会』が誕生した。

箱根に内山愚童をたずねた。
七月二一日、長崎のロシヤ革命党ウオリヤ新聞社が当局の捜査を受けた。
八月、幸徳上京して巣鴨に新しい構想をもって平民社を再建しはじめた。
同月、『赤旗事件』の公判が行われた。
八月一五日、社会主義取締の方針が桂内閣から公表された。
一〇月、戊申詔書が宣布された。
一〇月、台湾縦貫鉄道全通式が挙行された。
一〇月、清国徳宗死去し、宣統帝践祚し、父醇親、摂政に就任す。次で西太后も亦死去し、支那革命の気運たかまる。
一一月一〇日、宮下太吉が東海道線大府駅の天皇拝観の群集に『無政府共産』のパンフレットを配布した。
一一月、文学的美術的著作物保護修正「ベルヌ」条約に調印した。
一一月、香港市街の日貨取扱の清国商店が破壊掠奪され、以後三ヵ月に渉った。
一二月、鉄道院官制が公布された。

タ』4
自然主義論（樋口竜峡）『明星』4
マクシム・ゴルキー（馬場孤蝶）『慶応義塾学報』4
個性の自由解放（幸徳秋水）『日刊平民』4
競馬場（覓牛）4
五月幟（正宗白鳥）『中央公論』5
朝鮮行（原田譲二）『秀才文壇』5
時代思潮の変調（樋口竜峡）『太陽』5
芸術は果して真を求むるか（田岡嶺雲）『江湖』5
無解決か解決か（長谷川天渓）5
自然主義の価値（島村抱月）『早稲田文学』5
運動狂（原田譲二）『運動世界』6
塵影（川上眉山）『文芸倶楽部』6
『灰燼』（上司小剣）春陽堂刊6
戦話（岩野泡鳴）『新小説』6
社会主義的文学（堺利彦）『二六』6
思潮問題としての自然主義（生田長江）6
芸術の真（田中喜一）『中央公論』6
チエホフ論（安成貞雄）『文庫』6
反逆論（島中翠湖）『新社会』6
『自白』（宮崎湖処子）如山堂刊7

ポール・ブルジェ（安成貞雄）『新声』7
文学者と生活問題（中島孤島）『東西南北』7
『自然主義』（長谷川天渓）博文館刊7
『鉄火石火』（白柳秀湖）隆文館刊7
『乞食』（木下尚江）昭文堂刊7
無窮（国木田独歩）『趣味』8
欺かざるの記（国木田独歩）『新声』8
夢十夜（夏目漱石）『東京朝日』8
『独歩集』（国木田独歩）彩雲閣刊8
『窓』（短篇集、小山内薫）春陽堂刊8
血笑記と象徴主義（素堂）『万朝報』8
獄中作「病囚苦語」（山口孤剣）『東京社会』8
書置（木下尚江）『東京社会』9
数奇（徳田秋声）『趣味』9
養育院（真山青果）『新潮』9
三四郎（夏目漱石）『東京朝日』9
二家族（正宗白鳥）『早稲田文学』9
個人主義の盛衰（金子筑水）『太陽』9
メレジコウスキーのイブセン論（安

成貞雄）『中央公論』9
人生に触るるとは何ぞや（内田魯庵）『文章世界』9
文学界の未来（内田魯庵）『未来記』9
『非自然主義』（後藤宙外）春陽堂刊9
南小泉村（真山青果）『中央公論』10
新世帯（徳田秋声）『国民新聞』10
『欺かざるの記』（国木田独歩）隆文館刊0
『新自然主義』（岩野泡鳴）有倫堂刊10
寂寥（佐藤緑葉）『新声』11
老婆（小川未明）『新天地』11
鳥影（**石川啄木**）**『東京朝日』11**
文芸の取締に就いて（長谷川天渓）『太陽』11
自己存在の要求（木下尚江）『文章世界』11
新愁（江連沙村）『文芸倶楽部』12
慈善事業（秋田雨雀）『新天地』12
『墓場』（**木下尚江**）**昭文堂刊12**

一九〇九年（明治四十二年）

赤痢（**石川啄木**）**『スバル』1**
開業医（**長塚節**）**『ホトトギス』1**
高原より（土岐哀果）『新文学』1
鉄片（小川未明）『新声』1
煤煙（**森田草平**）**『東京朝日』1**
民衆の自覚（中沢臨川）『趣味』1
海へ（白柳秀湖）『文章世界』1
人形（**上司小剣**）**『文章世界』2**
耽溺（岩野泡鳴）『新小説』2
足跡（**石川啄木**）**『スバル』2**
脚本南蛮寺門前（**木下杢太郎**）**2**
死街（小川未明）『秀才文壇』2
脚本銅山王（佐野天声）『太陽』2
露西亜の女（安成貞雄）『新潮』2
社会主義と国家（樋口竜峡）日高有倫堂刊3
時代と文芸（樋口竜峡）博文館刊3
烏金（小川未明）『趣味』3
監獄署の裏（永井荷風）『早稲田文学』3
『ふらんす物語』（永井荷風）博文館刊3発禁
芸陽に復す（**田岡嶺雲**）**『中央公論』3**

一月、『スバル』が平野万里、石川啄木、吉井勇などの編集によって創刊された。――終刊は大正二年一二月。
二月、田岡嶺雲が修善寺温泉から雑司ガ谷に移り、雑誌『黒白』を創刊した。幸徳秋水との密接な交友が始まった。また、嶺雲獄問文集『嶺雲』が発刊された。
二月一三日、宮下太吉が幸徳を訪れ天皇暗殺の話を持ちかけた。更に森近運平を訪うた。
三月、幸徳秋水によって『平民評論』が創刊された。発禁となった。――終刊は第二号。
四月、社会評論雑誌『無名通信』が創刊された。――終刊は大正二年七月。
四月、後藤宙外、樋口竜峡、笹川臨風らの手により文芸革新会が組織された。
四月、山川登美子が死去した。享年三一歳。
五月、『平民評論』第二号が発行さ

二月、非政友派合同して「立憲国民党」が組織された。
四月、種痘法が公布された。
四月、日糖疑獄事件が起きた。
五月、新聞紙条例が公布された。
六月一四日、伊藤博文が枢府議長となった。また曽弥荒助が韓国統監に任命された。
七月、大阪に大火があった。
八月、近江・美濃地方に大地震があった。
一〇月二六日、伊藤博文が訪露の途ハルビンにおいて朝鮮人安重根に狙撃されて死んだ。
一二月、枢府議長に山県有朋が就任した。

眼界を大ならしめよ（後藤宙外）『新小説』3
民衆的空気の圧迫と小説の主人公（白柳秀湖）『読売』3
自己改革者の心事（片上伸）『読売』3
『文学評論』（夏目漱石）春陽堂刊3
工女部屋（尾知山静波）『文章世界』4
鼬鼠（青木健作）『帝国文学』4
媒介者（徳田秋声）『東亜文芸』4発禁
文芸批評と人生批評（片上伸）『早稲田文学』4
現代米国社会主義の青年作家（金子喜一）『帝国文学』4
オプロモブィスム（馬場孤蝶）『スバル』4
社会に対する文学者の覚悟（後藤宙外）『文章世界』4
半島の人（真山青果）『趣味』5
『白鳥集』（正宗白鳥）左久良書房刊5
『イカモノ』（内田魯庵）金尾文淵堂刊5
『黄昏』（白柳秀湖）如山堂刊5
宵暗（白柳秀湖）『読売』5

れた。
五月、自由誌社が結成された。
五月、二葉亭四迷が印度洋上で死んだ。享年四五歳。
六月、幸徳秋水・菅野須賀子たちによって『自由思想』を創刊した。ただちに発禁となった。田岡嶺雲がこれに援助をあたえた。これは第三号で廃刊。
一〇月、『屋上庭園』が創刊された。第二号発禁のまま廃刊した。
一一月、自由劇場が設立され第一回公演『ボルクマン』が上演された。
※この年次のごとき革命的文書が発禁となった。『貧乏人の福音』、『暴力と無政府主義』、『原始共産主義（坂本清馬）』、『来るべき革命は無政府共産（内山愚童）』、『無政府主義道徳非認論』、『真に人類の幸福をはかるものは何か』、『帝国軍人座右の銘』など。

オブローモフィズム（中島孤島）『新小説』5

問題文芸論（生田長江）『新潮』5

『労働』（木下尚江）昭文堂刊6

姉の妹（小栗風葉）『中央公論』6発禁

おふさ（長塚節）『ホトトギス』6

それから（夏目漱石）『東京朝日』6

『近代文芸の研究』（島村抱月）早大出版部刊6

現実と文芸（樋口竜峡）『帝国文学』6

二葉亭君と僕（坪内逍遙）『早稲田文学』6

二葉亭四迷を論ず（内田魯庵）6

近代文学と社会主義（生方敏郎）『読売』6

恋愛の近代的色調を論ず（白柳秀湖）『新声』6

歓楽（永井荷風）『新小説』7発禁

キタ・セクスアリス（森鷗外）『スバル』7発禁

文芸の階級的観念（相馬御風）『新声』7

『三人』（ゴルキー、田岡嶺雲訳）黒白社刊7

自然主義論最後の試練（相馬御風）

芽生（島崎藤村）10

『明治叛臣伝』（田岡嶺雲）日高有倫堂刊10

孤独と忍従の生活（長谷川天渓）『太陽』10

異常の場合を描く芸術（小川未明）『国民』10

冷笑（永井荷風）『東京朝日』10

『荒野』（木下尚江）昭文堂刊10

食後（**白柳秀湖**）**『文章世界』**11

落伍者（三島霜川）『文芸倶楽部』11

二人画工（センキキッチ、内田魯庵訳）文淵堂刊11

功利主義の文芸（長谷川天渓）『太陽』11

口と眼と耳のみの時代（木下尚江）『新声』11

食うべき詩（**石川啄木**）**『東京毎日』**11

畜生（上司小剣）『中央公論』12

すみだ川（永井荷風）『新小説』12

『寄生木』（徳冨蘆花）警醒社刊12

現実を離れんとする文芸（本間久雄）『早稲田文学』12

バザロフと其作者（中沢臨川）12

文学と政治の進歩（戸川秋骨）『国民』12

一九一〇年（明治四十三年）

越後の冬（小川未明）『新小説』1
家（島崎藤村）『読売新聞』1
『独り歌える』（若山牧水）八少女会刊1
自己の問題として見たる自然主義
(安倍能成)『ホトトギス』1
強者の文芸（長谷川天渓）『太陽』1
悲痛の哲理（岩野泡鳴）『文章世界』1
新しい戦い（相馬御風）『読売』1
『秀湖小品』（白柳秀湖）隆文館刊1
酉中の人（上司小剣）『文章世界』2
樗の樹蔭（佐藤緑葉）『早稲田文学』2
刑余の人（白柳秀湖）『秀才文壇』2
山鳴（青木健作）『帝国文学』2
太十と其犬（**長塚節**）『**ホトトギス**』2
性急な思想（**石川啄木**）『**東京毎日**』2
覚めたる者の行方（相馬御風）『秀才文壇』2
発売禁止について（内田魯庵）『東京毎日』2

二月、荒畑寒村が千葉監獄から出獄した。
二月、石川啄木が、『性急な思想』の中で、自然主義の窮極は当然国家権力の批判解剖に及ぶべきことを力説す。
二月、雑誌『雄弁』が創刊した。
三月、幸徳秋水は菅野須賀子を連れて歴史編纂のために湯河原に赴いた。
三月、雑誌『創作』が若山牧水・土岐善麿・佐藤緑葉らの執筆をえて東雲堂から創刊された。
四月、京都帝大文学部編集の『芸文』が発行された。
四月、『白樺』が創刊された。
五月、『三田文学』が創刊した。
五月九日、荒畑寒村がピストルを抱いて幸徳と菅野を一撃の下に葬るつもりで湯河原に向ったが、二人が数日前に上京したのを知って茫然とした。
五月、田岡嶺雲が湯河原に赴き、同宿した。

一月、伊藤博文遭難韓国謝罪使が来朝した。
一月、アメリカの満洲鉄道中立提議に日本政府が不同意の回答を送った。
三月、大浦兼武らの中央倶楽部が発会式を挙げた。
四月、第六潜水艇広島湾に沈没し艇長佐久間勉ら殉職す。
四月、予約出版法が公布された。
六月、荒畑は労働者生活に入らんとして大日本印刷の職工となったが、やがて警察に知れ解雇されてしまった。
六月、拓殖局が設置された。
八月、韓国併合条約を締結し、朝鮮と改称し日本領となった。
八月、朝鮮貴族令が公布された。
九月二二日、堺枯川が千葉監獄から出獄した。
一〇月、農商務省工場法案を発表した。
一一月、大杉栄が千葉監獄から出獄した。

青年（森鷗外）『スバル』3
潮沫（佐藤緑葉）『新声』3
脚本世の終り（仲木貞一）『万朝報』3
縁（田山花袋）『毎日電報』3
門（夏目漱石）『東京朝日』3
覚めたる歌（金子薫園）春陽堂刊3
政治と文芸（長谷川天渓）『時事』3
虹（青木健作）『ホトトギス』4
網走まで（志賀直哉）『白樺』4
道（石川啄木）『新小説』4
兇器（上司小剣）『新文芸』4
渡り鳥（佐藤緑葉）『秀才文壇』4
『別離』（若山牧水）東雲堂刊4
『Nakiwarai』（土岐哀果）ローマ字ひろめ会刊4
芸術上の真に就て（阿部次郎）『スバル』4
実験告白及び想像の文学（戸川秋骨）『新小説』4
自然主義の主観的要素（片上伸）『早稲田文学』4
木像（上司小剣）『読売新聞』5
自然主義に於ける主観の位置（安倍能成）『ホトトギス』5
緑蔭文話（田岡嶺雲）『秀才文壇』5
工場より帰る群集（佐藤緑葉）『文章

五月、文部省に文芸委員会が設置された。

六月、所謂『大逆事件』検挙が始まった。宮下太吉、新村忠雄、古河力作、幸徳秋水、奥宮健之、菅野須賀子、大石誠之助、森近運平が検挙された。これより『冬の時代』が始まる。

六月、木下尚江が『中央公論』誌上に『徳富君の革命期に於ける書簡』を発表した。

七月、荒畑は今やピストルを抱いて桂を一撃の下に倒そうとする身となり、これ以後二カ月程そのことに全情熱を傾けた。

八月、大逆事件を動機として著しく思想の転化を味った石川啄木が『時代閉塞の現状』を起草した。

九月、『新思潮』（第二次）が小山内薫編輯で創刊された。

一〇月、石川啄木が西川光次郎と旧交を温め、社会主義者藤田四郎から社会主義の資料を借りうけた。

一〇月、『劇と詩』が発刊された。
――終刊は明治四五年一月。

一〇月、山田美妙が死去した。享年四二歳。

一一月、欧文会大会において「欧文工には欧文会員を当つ」とのクローズショップ制(東京)が承認された。

一二月、東北帝国大学、九州帝国大学に官制が公布された。

一二月、堺枯川が大杉栄、荒畑寒村らと四谷南寺町に売文社を設立した。

一二月、幸徳秋水が獄中から弁護士にあてて『暴力革命について』を書いた。

一二月、朝鮮鎮海に第五海軍区軍港を設立した。

世界』5
剃刀（志賀直哉）『白樺』6
千歳村（伊庭孝）『溪水』6
土（長塚節）『**東京朝日**』6
『**火宅**』（木下尚江）弘学館刊6
『**弱者**』（桂木伴水・持原血山編）6
逃避か徹底か（本間久雄）『読売』6
脚本老船長の幻覚(有島武郎)『白樺』7
『**放浪**』（岩野泡鳴）東雲堂刊7
自己と分裂生活（島村抱月）『早稲田文学』7
『**病中放浪**』（田岡嶺雲）玄黄社刊7発禁
巣鴨から（守田有秋）『新小説』8
第一日（青木健作）『ホトトギス』8
足跡（徳田秋声）『読売新聞』8
反古（小山内薫）『新思潮』9発禁
『**路傍の花**』（川路柳虹）東雲堂刊9
権三の死（秋田雨雀）『劇と詩』10
かんかん蟲（**有島武郎**）『**白樺**』10
微光（正宗白鳥）『中央公論』10
沈黙の塔（**森鷗外**）『**三田文学**』11
『**闇**』（小川未明）新潮社刊11
赤褐の一点（小川未明）『新小説』12
門前の家（与謝野晶子）『新思潮』12
『**一握の砂**』（**石川啄木**）**東雲堂刊12**

一一月、大塚楠緒子が病歿した。享年三五歳。
一二月、山路愛山主筆の『国民雑誌』が創刊された。――終刊は大正元年一二月。

一九一一年（明治四十四年）

俊寛（小山内薫）『新小説』1
枷（真山青果）1
犠牲（島崎藤村）『中央公論』1
或る女のグリンプス（有島武郎）『白樺』1
踏切番（岩野泡鳴）『秀才文壇』1
断橋（岩野泡鳴）『毎日電報』1
『明治百傑伝』（山口孤剣）洛陽堂刊1
『春泥集』（与謝野晶子）金尾文淵堂刊1
血の色（白柳秀湖）『秀才文壇』2
危険人物（正宗白鳥）『中央公論』2
悪熱（佐藤緑葉）『創作』2
病みながら（江連沙村）『早稲田文学』2
『おめでたき人』（武者小路実篤）洛陽堂刊2
妄想（森鷗外）『三田文学』3
和泉屋染物店（木下杢太郎）『スバル』3
都会で死んだ**雀**（小川未明）『読売』4
七死刑囚物語（アンドレーフ、相馬

一月、帝国議会で沢来太郎が木下尚江・田岡嶺雲・片山潜・西川光太郎ら社会主義者の出版著述の発禁処分について非難した。

一月、石川啄木が幸徳事件の弁護人より同事件に関する幸徳の陳弁書を借りた。また自己を「社会主義者」とよんだ。

同月、石川啄木がクロポトキンの『青年に訴う』を読んで感動し、土岐哀果と文芸思想誌『樹木と果実』を創刊することを相談した。更に『日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現状』を書いた。

二月、幸徳秋水の『基督抹殺論』が丙午出版社から出版された。田岡嶺雲・三宅雪嶺たちが序文を送ったが削除されてしまった。

二月、恩賜財団済生会が森鷗外らの奔走もあって設立された。

四月、石川啄木は雑誌『樹木と果実』の発行を断念した。

四月、前田夕暮の『詩歌』が創刊された。

一月二二日、堺利彦・大杉栄・石川三四郎・吉川守邦たちが市ヶ谷監獄で幸徳秋水と面会した。

一月二四日、幸徳秋水ら死刑に処せらる。

一月末、堺利彦たちは大逆事件「逆徒」死刑の後始末に奔走した。

三月、堺利彦は西部日本を巡遊して逆徒の遺族を歴訪した。

三月、帝国劇場開場式が行われた。

五月、維新史料編纂会官制が公布された。

五月、スウェーデンとの通商航海条約が調印された。

六月、ノルウェイとの通商航海条約が調印された。またドイツともむすばれた。

七月、日英同盟が改訂された。

七月、高等中学校令が公布された。

八月、朝鮮教育令が公布された。

八月、第二次西園寺内閣が成立した。

一〇月、国家社会主義的な『社会党』が片山潜たちによって組織された

御風訳）『早稲田文学』4
描写論（田山花袋）『早稲田文学』4
少年と発砲（仲木貞一）『劇と詩』6
『楽天囚人』（堺利彦）丙午出版社刊
6
『幻影と夜曲』（秋田雨雀）新陽堂刊
6
累（正宗白鳥）『太陽』7
未定稿（平出修）『スバル』7
医者の子（平出修）『新彩』7
**数奇伝（田岡嶺雲）『中央公論』7
以降**
ロマンチシズムの意義（片上伸）『文章世界』7
呼子と口笛（石川啄木）『創作』7
『野人語』第一（木下尚江）文淵堂刊
7
紅茶の後（永井荷風）『三田文学』8
母親（仲木貞一）『劇と詩』8
椿山にて（秋田雨雀）8
病める人（守田有秋）『文芸倶楽部』
8
寂しき朝（佐藤緑葉）『創作』8
長者町（平出修）『スバル』8
黴（徳田秋声）『東京日日』8
大川端（小山内薫）『読売』8
雁（森鴎外）『スバル』9

五月、'V NAROD' SERIES'を石川啄木が書いた。
五月、河東碧梧桐、荻原井泉水共編の『層雲』が創刊された。
五月、『ローマ字世界』がローマ字拡め会から創刊された。
六月、石川啄木が『はてしなき議論の後』などの数篇を書きあげた。
九月、平塚雷鳥らによって雑誌『青鞜』が創刊された。
一一月、『朱欒』(ザムボア)が北原白秋の手で創刊された。(『創作』の後身である。)
この前後のころ佐藤春夫に傾向詩の諸作品あり。

が、禁止された。
一〇月、黎元洪が武昌に挙兵した。次で各省に革命軍が蜂起した。
一二月、東京市電運転手車掌六千余人歳末よりストライキを始む。

塩ばな（平出修）9
物言わぬ顔（小川未明）『新小説』9
宣言書（土岐哀果）『早稲田文学』9
鳩豆（青木健作）『読売』9
『路上』（若山牧水）博信堂刊9
現実主義の分化と新及深（島村抱月）『早稲田文学』9
ルソー自伝赤裸の人（堺利彦）『二六』9
元始女性は太陽であった（平塚雷鳥）『青鞜』9
毒（正宗白鳥）『国民』9
灰炉（森鴎外）『三田文学』10
世間（中村吉蔵）『早稲田文学』10
生別離（生方敏郎）『やまと新聞』10
露西亜文壇における新写実主義（昇曙夢）『新潮』10
「青い鳥」に現われたる象徴主義（仲田勝之助）『創作』10
サーニンに関するノート（土岐哀果）『秀才文壇』10
血（小川未明）『文章世界』11
脚本夜行軍（紫魂）『歌舞伎』11
発展（岩野泡鳴）『大阪新報』12

一九一二年（大正元年）

喜劇 旧藩主と火事（秋田雨雀）『早稲田文学』1
白い墓（佐藤緑葉）『劇と詩』1
脱獄の朝（仲木貞一）『劇と詩』1
莚（平出修）『ホトトギス』1
『夜雨集』（横瀬夜雨）女子文壇社刊1
『紅噴随筆』（児玉花外）岡村盛花堂1
『哲人カアペンター』（石川三四郎）東雲堂刊1
四十四年文壇の記憶（片上伸）『文章世界』1
脚本 ストライキの後（中村吉蔵）『読売新聞』2
戯曲 十字架を負えるシモン（秋田雨雀）『読売新聞』2
『創造』（木下尚江）金尾文淵堂刊2
『現代人面鋒』（久津見蕨村）丙午出版社2
『黄昏に』（土岐善麿）東雲堂刊2
脚本 争（中村吉蔵）『文芸倶楽部』3
戯曲 蝮のような女（仲木貞一）『劇と

一月一日、片山潜が晦日から四日にかけて東京市電従業員六〇〇〇名を指導、ストライキを行ったが、ストライキ幹部と共々投獄された。石川啄木がこの市電ストに強い関心を示した。
三月、片山潜が獄中で自伝を書き初めた。
厨川白村『近代文学十講』出る（大日本図書株式会社）
四月、小川未明の主幹によって『北方文学』が創刊された。
同月一三日、石川啄木が肺患のため死去した。享年二八歳。
六月二八日夕、三宅雪嶺の発案でルソウ誕生二百年記念会が堺枯川・高島米峰との発起として神田多賀羅亭において晩餐会が開かれた。
出席者は伊藤痴遊、福本日南、内田魯庵、三宅雪嶺、生田長江、上司小剣、片上伸、白河鯉洋、田中我観、野依秀市、福田英子、西川光二郎、山口孤剣、樋口伝、荒畑寒村、安成貞雄、守田有秋、大杉栄、高畠素之、

一月、プラーグに全ロシヤ・ボリシェヴィキ会議がひらかれ、メンシェヴィキ、『清算派』その他を除名し、社会民主党新中央委員会が選出され、進歩的な労働者の結集と大衆的宣伝の方法を決定した。
同月、中国において、孫文が臨時共和政府の大総統に就任した。
一月、京浜間石炭回漕船頭スト
二月、清朝が退位し、中華民国が誕生した。
三月呉海軍工廠スト
四月、ロシヤ・レナ金鉱において罷業労働者の射殺事件がおきた。
七月三〇日、大正と改元された。
このころ米価上る。
八月、中国国民党が成立し、中国同盟会が解体した。
九月、中国社会党が成立した。
一一月、第二インターナショナル・バーゼル大会があった。後の排外主義への転向の傾斜の濃厚な戦争反対宣言が決議された。
一二月、クラコフにボリシェヴィキ

詩』3
生活の芸術化（金子筑水）『太陽』3
生の要求と芸術（片上伸）『太陽』3
接吻（禁止）（伊庭孝）『演劇評論』4
魯鈍な猫（小川未明）『読売新聞』4
『物言わぬ顔』（小川未明）『春陽堂』刊4
実感と芸術（中島孤島）『国民新聞』4
『少年の笛』（小川未明）『新潮社』刊5
『土』（長塚節）春陽堂刊5
『数奇伝』（田岡嶺雲）『玄黄社』刊5
『売文集』（堺利彦）丙午出版社刊5
内容は序（売文社の記）。巻頭の飾（六二名家寄稿）、第一篇として剣と針、第二篇として露と雫。第三篇として谷川の水（シヨー）、第四篇未来と過去――小説クレンクビユ（フランス、大杉訳）、小説告白（ゴリキイ、荒畑訳）、愛国的徴兵人耶蘇（高畠素之）、新磯多村（大杉栄）など。
近頃の傾向（金子筑水）『太陽』5
老後（脚本）（中村吉蔵）『演芸倶楽部』6
指輪（脚本）（伊庭孝）『演劇評論』6
『悲しき玩具』（石川啄木）東雲堂刊6
我等の一団と彼（石川啄木）『読売新聞』8

吉川守邦、岡野辰之助たちであった。控室の一室には英独仏日のルソー著書数十冊が陳列してあった。中に河野広中の蔵書印の『民約論』もあり、「大逆文庫」の印が押さったのもあった。
その後神田青年会館で記念講演が行われた。講師は高島、福本、三宅、樋口、堺で、堺は「二十世紀のルソウは果して誰か」と云って降壇した。最初の大逆事件に対する組織的プロテストであった。
八月、中村吉蔵が『西洋演劇史』を脱稿した。
同月、大杉栄が日光避暑の間、田岡嶺雲を訪問した。
九月六日、田岡嶺雲が脊髄病で日光で死去した。享年四三歳。
同月、片山潜が明治天皇死亡の大赦令によって千葉監獄を出た。
志賀直哉『大津順吉』出る（『中央公論』9）
一〇月、大逆事件後の堅氷をたたき破らんとして大杉栄・荒畑寒村が『近代思想』を創刊した。――終刊は大正三年九月で全二三冊

中央委員会拡大会議が開かれ、大衆罷業、非合法組織の堅牢化に関する決議を行った。
一二月、憲政擁護連合大会
同　　第三次桂内閣成立
※この年、イタリーに『イタリー・サンジカリスト同盟』が誕生した。また、アメリカ社会党は暴力否認の宣言を発表し、I・W・Wと絶縁した。同月、内大臣兼侍従長桂太郎が内閣を組織し、これ以後護憲運動が起った。

戯曲 支払日（田代倫）『東洋時論』8
血塊（小川未明）『新小説』9
畜生道（平出修）『スバル』9
『黎明期の文学』（相馬御風）新潮社
9
芸術の生活化（相馬御風）『早稲田文学』9
現代文学の社会的影響（田岡嶺雲）『文章世界』9
計画（平出修）『スバル』10
脚本 真夏（中村吉蔵）『新小説』10
怠惰者（荒畑寒村）『近代思想』10
薔薇と蝦蟇（ガルシン作 安成貞雄訳）『黒耀』10
モーセの父（エデキント作 佐藤緑葉訳）『劇と詩』10
戯曲 緑の兜（イエーツ作 仲木貞一訳）『劇と詩』10
林檎園（秋田雨雀）『早稲田文学』10
近代劇論（エンマ・ゴールドセン 寒村訳）『近代思想』10
新しい戯作者（山本飼山）10
本能と創造（大杉栄）『近代思想』10
乳母の死（舟木重信）『奇蹟』11
インキ壺（田山花袋）『文章世界』11
青い道化（ベリング作 和気律次郎訳）『早稲田文学』11
12
夕空遠く（西村陽吉）『黒耀』12

同月、二五日より三日間近代劇協会の第一回興行が有楽座で開演された。イプセン作『ヘッダ・ガァブレル』（千葉掬香訳）を上演した。この席上、土岐哀果が始めて大杉栄と交を通じた。
一一月、一六日より二五日まで文芸協会第四回公演が有楽座にて行われ、バァナアド・ショウ『二十世紀』（松居松翁訳）が上演された。
同月、長谷川天溪が帰朝した。
同月、二九日三〇日両日、有楽座にて小山内薫外遊送別演劇が土曜劇場の人々によって行われた。
同月、雑誌『奇蹟』が舟木重信・広津和郎・谷崎精二たちによって創刊された。宮地嘉六が舟木から同人加入の勧告をうけた。彼が依然舟木たちと『稲風』同人であったためであった。

ゴオホの死（舟木重信）『奇蹟』12
狂者の詩（高村光太郎）『白樺』12
『千曲川のスケッチ』（島崎藤村）佐久良書房刊12
廊下にて（土岐哀果）『近代思想』12
工場へ工場へ（詩）（飄風）『近代思想』12

一九一三年（大正二年）

脚本 雀鷹（武林無想庵）『モザイク』1
殺害（小川未明）『早稲田文学』1
未亡人（平出修）『スバル』1
小刑吏（江口渙）『スバル』1
夢二つ（馬場孤蝶）『黒耀』1
戯曲 宝玉に包まれたる女（ワイルド作 仲木貞一訳）『秀才文壇』1
戯曲 犬の子（仲木貞一）『劇と詩』1
人と超人（バーナード・ショウ作 堺枯川訳）『近代思想』1
近代仏文学一面観（大杉栄）『近代思想』1
アンドレイエフの描きたる恐怖（山本飼山）『近代思想』1
ダビデ神の檻（秋田雨雀）『早稲田文学』2
改宗（荒畑寒村）『近代思想』2
共和祭（大杉栄）『近代思想』2
はな道（西村陽吉）『朱欒』2
無宿者（小川未明）『劇と詩』2
Kと私（平塚らいちょう）『青踏』2
旅役者の日記（和気律次郎）『雄弁』2

一月四日夜、近代思想第一回小集が鎧橋際のメーゾン鴻の巣にて、本誌寄稿家十三名の外に馬場孤蝶、生田長江氏招待して開かれた。大杉たちはこうして文壇の進歩と提携して行こうとした。
同月、大杉栄は、大逆事件で無期徒刑となった坂本清馬に会うため秋田に旅行した。
二月九日、近代思想第二回小集がひらかれた。
　出席者は内田魯庵、岩野泡鳴の他寄稿家五名、社員二名が参加した。
同月、島崎藤村の外遊送別会が柳橋柳光亭に催された。
二月、片上伸『生の要求と文学』刊行。
三月二二日、近代思想社第三回小集が島村抱月、相馬御風を招待して行われた。相馬御風の『科学の人生化』（ヨミウリ）をめぐって安成貞雄が議論をし始めた。
同月、宮崎光子、西川文子、木村駒

三月、支那国会選挙が行われて中国国民党が勝利し、袁世凱と対立した。ためにこれ以後袁の恐怖政治が行われた。
五月、アメリカ・カルフォルニヤ州議会は日本人土地所有禁止法案を可決した。
同月、片山潜が山本農商務大臣及び安東警視総監にあてて『自己が議会主義であるが……』云云の改良陳情書を送った。
六月、神奈川県川崎、日本蓄音器商会争議が友愛会の指導の下に行われた。友愛会の最初の事業。
同月、軍部大臣現役制廃止。
七月、袁の専制に対して中国第二革命が勃発した。
八月、中国第二革命が失敗し、南京は陥落し、中国国民党が敗北した。
九月、ロシヤ、ガリシヤ・ボロニノにおいてボリシェヴィキ中央委員会拡大会議がひらかれ、議会及び民族問題に関する決議を行った。
一〇月、満鉄が満蒙五鉄道敷設権を

『みみずのたわごと』(徳富芦花) 新橋堂刊2
『社会と自分』(夏目漱石) 実業之日本社刊2
ヲイルドの社会観(山本飼山)『近代思想』2
金策(平出修)『スバル』3
歩けぬ日(小川未明)『早稲田文学』3
猫(西村陽吉)『朱欒』3
一年間(平塚らいちょう)『青踏』3
街の荒野(佐藤緑葉)『秀才文壇』3
『白癡』(小川未明) 文影堂3
芸術か戦闘か(荒畑寒村)『近代思想』3
脚本 解放の喜劇(秋田雨雀)『早稲田文学』4
かくれんぼ(山川亮)『奇蹟』4 禁止
『畜生道』(平出修) 籾山書店4
嘘(小川未明)『新小説』5
脚本 寂しけれども(舟木重信)『奇蹟』5
響の影(マッコア作 伊藤野枝訳)『青踏』5
脚本 富(トルストイ作 土岐哀果訳)『大国民』5
幼き春(西村陽吉)『朱欒』5

子たちによって「新真婦人会」が発足した。
同月、島崎藤村が新橋駅より外遊の途についた。
同月、柴田柴庵が『文芸評論』社を設立した。
四月十三日、故石川啄木一週忌追悼茶話会が、浅草善光寺にて、発起人与謝野寛、白秋、京助、陽吉、哀果佐藤真一によってひらかれた。
同月一九日夜、近代思想社第四回小集が久津見蕨村、平出修、堺利彦、佐藤緑葉、仲木貞一、小原慎三、大杉栄、荒畑寒村、片山潜、和気律次郎たちによってひらかれた。ショウ論、ガルスワージ論、メーテルリンク論が話題となった。
同月一六日、日比谷公園茶屋で、堺利彦、野沢重吉の発起で平民会がもよおされた。来会者四〇名。
五月、日本に絶望して亡命した石川三四郎はブルュセルに到着し、『新仏教』に『亡命記』を連載しはじめた。
同月、土岐哀果が満鮮旅行の途に就いた。

獲得した。
※この年、アイルランド・ダブリンに大ストライキがあり、労働者は武装したアイルランド市民軍と衝突した。

脚本ジャンダーク（仲木貞一）『趣味』5

島の上（秋田雨雀）『秀才文壇』5

夜の岡（荒畑寒村）『近代思想』5

『啄木遺稿』（石川啄木）東雲堂刊5

『七死刑囚物語』（相馬御風訳、アンドレーフ）海外文芸社刊5

ファウスト（荒畑寒村）『近代思想』5

小さき破壊（小川未明）『早稲田文学』6

レ・ニュアンス・フュイヤント（武林無想庵）『モザイク』6

眼の挑戦（和気律次郎）『近代思想』6

四種の人（島村抱月）『文章世界』6

征服の事実（大杉栄）『近代思想』6

絶交（平出修）『スバル』7

べらどにあ（加藤一夫）『六合雑誌』7

悲鳴（和気律次郎）『近代思想』7

『不平なく』（土岐善麿）春陽堂刊

緑蔭の家（荒畑寒村）『近代思想』7

生の拡充（大杉栄）『近代思想』7

溝の底（藤井真澄）『第三文明と劇場』8

六月八日夜、近代思想社第五回小集が馬場孤蝶、和気律次郎、哀果、上山草人、伊庭孝、高畠素之、江渡幸三郎、久板卯之助、堺利彦、大杉栄、荒畑寒村、片山潜、安成二郎、安成貞雄、久津見蕨村、小原慎三の一六名でひらかれた。

七月、平塚らいちょう『円窓より』刊行。

同月、近代思想社第六回小集が、長谷川天渓を客として堺利彦、高畠素之、小原慎三、土岐哀果、和気律次郎、久津見蕨村、片山潜、安成貞雄、安成二郎、伊庭孝、荒畑寒村、大杉栄などによってひらかれた。

同月、坪内逍遥を会長としていた文芸協会は会長辞任と共に、シーザー劇を名残りとして解散した。当協会を脱退した島村抱月が松井須磨子及協会第二期生をもって芸術座を組織した。

同月三〇日、伊藤左千夫が脳溢血のために死去した。享年五〇才。

同月、これ以後大杉栄は荒畑と共に毎月一回ずつ、『センディカリスム研究会』を開いて実際運動の研究を

人間屠殺所（紹介・佐藤緑葉）『近代思想』8
逃避者（荒畑寒村）『生活と芸術』9
逆徒（禁止）（平出修）**『太陽』9**
眼前の犠牲（小川未明）『早稲田文学』9
二十二本の針（山川亮）『創造』9
稚い芽（佐藤緑葉）**『近代思想』9**
ひなたれ（詩）（徳永保之助）『近代思想』9
或る男の影（荒畑寒村）『近代思想』9
（戯曲）**街上の夜**（藤井真澄）『第三文明と劇場』9
都市居住者の手帖（土岐哀果）『生活と芸術』9
若き商人の日記（西村陽吉）『生活と芸術』9
鎖工場（大杉栄）『近代思想』9
われらの芸術（土岐哀果）『生活と芸術』9
孤独の自我と評論（長谷川天渓）『生活と芸術』9
10 （戯曲）日の入る頃（ゼロオモ作 和気律次郎訳）『新小説』
美しい眼（武林無想庵）『文章世界』

始めた。斉藤兼次郎、吉川守邦、百瀬晋、**橋浦時雄たちや近代思想社小集に集った文学青年たちがそれに加わった。**
八月、藤井真澄が国枝史郎と『第三文明と劇場』を創刊した。——九月第二号で廢刊する。
同月、小山内薫が帰朝した。
九月、小川未明が始めて大杉栄と接触を持った。
同月、土岐哀果、西村陽吉たちが、『生活と芸術』を創刊した。——終刊は大正五年六月。
同月、『劇と詩』が『創造』と改題した。
同月二〇日、売文社茶話会が神田豊生軒でひらかれた。出席者は三〇名。片山潜、堺利彦、高畠素之、小原慎三などでベーベル談話に耽った。
一〇月一一日、夜近代思想社第七回小集が京橋の富嘉川でひらかれた。
出席者は安成貞雄、二郎、和気律次郎、片山潜、荒畑、大杉、原田譲二、柴田柴庵、赤堀建吉、鈴木

10
戯曲 **飢渇**（**秋田雨雀**）『**文章世界**』10
光の底（佐藤緑葉）『早稲田文学』10
殺人の動機（小川未明）『早稲田文学』10
虐待（小川未明）『新日本』10
暴風雨（**荒畑寒村**）『**近代思想**』10
ある男の死（佐藤緑葉）『生活と芸術』10
餌食（江馬修）『早稲田文学』10
ホリア（シルヴァ作 安成二郎訳）『婦人評論』10
ある日（筒井吉久）『近代思想』10
胡麻塩頭（渋六）『近代思想』10
「出発前半時間」の人生観（伊庭孝）『近代思想』10
戯曲 死の方へ（仲木貞一）『創造』11
戯曲 夜鳥（平出修）『文章世界』11
戯曲 その朝（仲木貞一）『生活と芸術』11
脚本 金持の心配（平出修）『スバル』11
狼（徳永保之助）『近代思想』11
虐殺の朝（荒畑寒村）『近代思想』11
広い国（佐藤緑葉）『エニグマ』11
ある夜（安成二郎）『読売新聞』11
小川巡査（△〇生）『近代思想』11

長次郎、堺利彦、佐藤緑葉、久津見蕨村、小原慎三、徳永保之助などであった。
同月、大野酒竹が脳腫瘍のために逝去した。
一〇月、斎藤茂吉『赤光』刊行。
一一月七日、山本飼山の葬式が行われた。大杉、堺、橋浦時雄、荒畑、安成二郎たちが出席した。
同月、雑誌『仮面』が創刊された。
同月、北原白秋を中心とする「巡礼社」が創立された。

独歩詩集（三木露風編）東雲堂刊11

人間性の為の戦い（相馬御風）『読売新聞』11

端的な要求（相馬御風）『生活と芸術』11

伊庭孝一座（荒畑寒村）『近代思想』11

科学的理想「生みの力」を読む（安成貞雄）『近代思想』11

わがまま（伊藤野枝）『青鞜』12

瘢痕（平出修）『大国民』12

日没と旅人（加藤一夫）『六合雑誌』12

罷業の宣言（荒畑寒村訳）『近代思想』12

脚本 窓に倚れる女（ホフマン・シュタイル作 伊庭孝訳）『現代社』単行本12

波濤の歌（荒畑寒村）『近代思想』（散文詩）12

必然から自由へ（大杉栄）『近代思想』12

山本飼山の死（利彦時雄）『近代思想』12

洪水のように（詩）（徳永保之助）『近代思想』12

人生の傍観者と人生の奮闘者（佐野袈裟美）『早稲田文学』12

一九一四年（大正三年）

底の社会へ（**小川未明**）『**早稲田文学**』1
夜のきこえ（細田民樹）『早稲田文学』1
脚本 **若い逆徒**（**秋田雨雀**）『**早稲田文学**』1
人間屠殺所（**佐藤緑葉**）『**近代思想**』1以降
冬（荒畑寒村）『近代思想』1
寂しき家にて（加藤一夫）『六合雑誌』1
夜の街にて（小川未明）岡村書店1
鰌の皮（上司小剣）『ホトトギス』1
わしも知らない（武者小路実篤）『中央公論』1
現代の問題（相馬御風）『新潮』1
生の創造（**大杉栄**）『**近代思想**』1
獄裡の詩（**荒畑寒村**）『**生活と芸術**』1
時が来たのだ—御風に与う（**大杉栄**）『**近代思想**』1
文壇と社会との交渉（**長谷川天渓**）『**時事**』1
出奔（伊藤野枝）『青鞜』2

一月六日、三宅青軒が死去した。
同月、文芸雑誌『我等』が創刊された。
同月、石井柏亭が『太陽』に『生の芸術の主張に対する反感』を掲げた。高村光太郎・本間久雄がこれに反対した。
同月、堺利彦、百瀬晋、白柳秀湖、山口孤剣ら売文社同人たちが月刊文学雑誌『へちまの花』を創刊した。
—終刊は大正四年六月で全一七冊。
同月、徳田秋声が読売新聞に入社した。
二月、文芸雑誌『塔』が創刊された。
同月、『巷に出でよ』をめぐって大杉栄と相馬御風との間に論争が行われた。
同月、加藤時次郎・白柳秀湖たちの手で実費診療所機関紙月刊（後半月刊）『生活（くらし）の力』が創刊された。
同月、久米正雄、芥川竜之介らによ

一月、ドイツ・シーメンス会社の日本海軍への贈賄が暴露された所謂シーメンス事件が起きた。
二月、憲政擁護大会。
五月、これ以後七月頃までロシヤでは全国的な罷業運動が起き、或るところでは暴動・武装闘争にまで発展した。
六月、東洋モス争議。
七月、第一次世界大戦が勃発した。
同月、ドイツ社会民主党は迫り来る世界戦争に反対して飛檄した。
八月、ドイツがロシヤに宣戦布告し、全ドイツ軍がただちに動員体制に入った。
同月、ドイツ社会民主党が軍事公債を承認した。
同月、フランス統一社会党の大多数は祖国主義に変節した。また、C・G・Tの中の改良主義的サンジカリストの力によって、C・G・Tは『祖国擁護』に向った。
同月、イタリー社会党はミラノ大会でイタリーの参戦反対を決議した。

神様が人間に殺された話(安成二郎)『近代思想』2
一青年の手記(荒川義英)『生活と芸術』2
脚本 ブラント(イプセン作 中村吉蔵訳)東亜社2
三人(ゴーリキー作 吉江孤雁訳)『早稲田大学出版部』2
地上(土岐哀果)『生活と芸術』2
第一歩(相馬御風)新潮社刊 2
巷に出でよ(相馬御風)『早稲田文学』2
大杉栄君に答う(相馬御風)『近代思想』2
再び相馬君に与う(大杉栄)『近代思想』2
僕自身(荒畑寒村)『近代思想』2
脚本 嘲笑(中村吉蔵)『早稲田文学』3
脚本 屍体の来るまで(仲木貞一)『早稲田文学』3
脚本 復活(トルストイ作 島村抱月訳)『早稲田文学』3
脚本 放火犯の死(荒川義英)『近代思想』3
腐肉(江口渙)『我等』3
文壇与太話(安成貞雄)『へちまの花』3

った第三次『新思潮』が創刊された。
三月、雑誌『新日本』及び『美の廃墟』が秩序紊乱によって発売禁止された。
同月、平出修が脳膜炎で死去した。享年三七。
同月、『復活』の「カチューシャの唄」が中山晋平の作曲で全国に流行した。
同月、西村陽吉の編輯によって月刊文学雑誌『青テーブル』が創刊された。——終刊は大正五年五月。
同月、森田草平、生田長江らの主宰する文芸雑誌『反響』発刊の披露会が神田橋外三河屋で行われた。
四月一七日、神田青年会館で早稲田大学基督教青年会主催の思想問題演説会が催された。
同月、雑誌『反響』『自画像』『水甕』が創刊された。
同月、さきに『火鞭会』運動に惹かれていた宮島資夫がこの頃、『近代思想』古本を露店で手に入れ、『センディカリスム研究会』に参加しようと思って、大久保百人町の大杉の

同月、ロシヤ、セルビア、イタリーを除く第二インタナショナルの諸党は『祖国防衛』を声明し、政府の軍事費に賛成した。ここにおいて、第二インタナショナルは完全に死滅した。
同月、日本が対独宣戦布告して、青島に出兵し、次で南洋群島を占領した。
一一月、ロシヤのボリシェヴィキはレーニンの『戦争に関するテーゼ』を発表し、戦争を内乱に転化すべきことを宣言した。また、ボリシェヴィキ中央委員会は第二インタナショナルと完全に絶縁し、戦争を内乱に転化せよというスローガンの下にあつまる真に闘争能力ある革命的国際同盟の創設の必要を宣言した。
同月、二個師団増設案が成立せず、軍部大臣が辞職し、内閣が倒壊した。

自我の確立と実生活(平出修)『読売』3
寄居蟹文明の破壊と文芸（長谷川天渓）『文章世界』3
婦人開放の悲劇（伊藤野枝訳）東雲堂刊3
叛逆者の心理（大杉栄）『近代思想』3
思想上の民衆主義と貴族主義（朝永十三郎）『大阪朝日』3
白い壁（上司小剣）『文章世界』4
惑い（伊藤野枝）『青鞜』4
主の家にて（荒畑寒村訳）『近代思想』4
嬰児と恋と南瓜（佐野袈裟美）『創造』4
永久の良人（ドストイエフスキイ作 中村吉蔵訳）『反響』4
処女地（ツルゲネーフ作 相馬御風訳）博文館4
死人の家（ドストイエフスキイ作 片上伸訳）博文館4
児を盗む話（志賀直哉）『白樺』4
『太陽の子』（福士幸次郎）洛陽堂刊4
生活態度としての未来主義（仲間勝之助）『生活と芸術』4

家を訪ねた。そこで、彼は荒川義英や林倭衛と会った。林はまだ活版工であった。
五月、この頃市会議員の選挙があって、その選挙事務所に働いていた宮島資夫は偶然宮地嘉六と会った。嘉六は呉工廠ストの時及川鼎寿を知り、更に及川の関係で山口孤剣・白柳秀湖と知るようになっていた。以後二人は共同生活を送った。宮島はこの頃より『坑夫』を書き始めた。
六月、『反響』六月号が安寧秩序・風俗紊乱の廉をもって発売禁止された。
同月、室生犀星、萩原朔太郎、山村暮鳥等が詩・音楽・宗教の研究を目的とする「人魚詩社」を創立した。
九月、一七日より有楽座にて新時代劇協会によって木下杢太郎の『和泉屋染物店』が上演された。
同月、雑誌『第三帝国』が秩序紊乱で発売禁止となった。
同月九日、片山潜が「逆境にたえない……」としてアメリカ亡命の途に就いた。
同月、大杉栄・荒畑寒村らが「知識

求楽か回避か戦闘か（長谷川天渓）
『文章世界』4
『平民詩人』（内村鑑三）警醒社刊4
『ニーチェ』（久津見蕨村）丙午出版
社刊4
主観的歴史論（大杉栄）『近代思想』
4
アーグヴァッドの仕事（佐藤緑葉）『近
代思想』5
喧嘩（徳永保之助）『近代思想』5
塑像（佐藤緑葉）春陽堂5
日記より（荒川義英）『へちまの花』
5
『沈黙の饒舌』（内田魯庵）丙午出版
社刊5
争闘の芸術（内藤濯）『帝国文学』5
籐椅子の上にて（**大杉栄**）『**生活と芸
術**』5
正気の狂人（大杉栄）『近代思想』5
知識的手淫（**大杉栄**）『**近代思想**』5
若葉の頃（荒川義英）『生活と芸術』
6
黎明（山川亮）『仮面』6
一挿話（荒畑寒村）『近代思想』6
嘘（徳永保之助）『近代思想』6
『自我生活と文学』（相馬御風）新潮社

**的手淫」にもあきたりず、また堺・
片山たちの日和見主義にもあきたり
ず、『近代思想』を廃刊し、新たな
労働雑誌創刊の準備にかかった。**
一〇月、『中央文学』が廃刊した。
同月、大杉栄・荒畑寒村は月刊『平
民新聞』を創刊し、労働運動に着手
し始めた。創刊号は発売禁止され
た。
一一月、永井荷風が小説『歓楽』を
非売品として出版した。
同月、広津和郎のモウパッサン『女
の一生』訳、梗概『女の一生』、二
冊とも発売を禁止された。
同月、月刊『平民新聞』第二号が発
禁となった。
一二月、月刊『平民新聞』第三号が
発禁となった。

刊6
賛（和気律次郎）『新小説』7
夜前（小川未明）『中央文学』7
癈兵救慰会（荒川義英）『近代思想』
7
脚本 芸者屋街（伊庭孝）『生活と芸術』
7
経済的文学史観（セリグマン、安成
貞雄訳）『早稲田文学』7
賭博本能論（大杉栄）『近代思想』7
剃刀（中村吉蔵）『中央公論』8
林檎の実の熟する頃（秋田雨雀）『中
央公論』8
無籍者（上司小剣）『中央公論』8
戯曲 ラオ屋の亀公（上司小剣）『新日本』
8
脚本 入れ代り（荒川義英）『反響』8
底の社会へ（小川未明）岡村書店9
夏（荒畑寒村）『近代思想』9
母詩（徳永保之助）『近代思想』9
街上不平（土岐哀果）『生活と芸術』
9
暇つぶし（荒川義英）『へちまの花』
9
『近代文芸の解剖』（馬場孤蝶）広文
堂刊9

人間主義（相馬御風）『近代思想』9
文壇の唯一者（大杉栄）『近代思想』9
大杉氏等への忠告（岩野泡鳴）『近代思想』9
『道程』（高村光太郎）抒情詩社刊10
10
道程（高村光太郎）抒情詩社刊10
労働者の自覚（大杉栄）『平民新聞』10
『ベルグソン』（中沢臨川）春陽堂刊10

生の吏政と新芸術（内藤濯）刊10
私の芸術と演劇と（伊庭孝）『生活と芸術』10
『生の闘争』（大杉栄）新潮社刊10
汽車（荒川義英）『早稲田文学』11
破壊の要求（相馬御風）『早稲田文学』11
思想か実行か（中沢臨川）『新潮』11
黒い目と茶色の目（徳富芦花）『早稲田文学』12
新事実の獲得（大杉栄）『新潮』12
ベルグソンから（仲木貞一）『三田文学』12

一九一五年（大正四年）

路上の一人（小川未明）『新小説』1
父親（荒畑寒村）『新潮』1
不良少年の日記（**荒川義英**）『**新潮**』1
黒い血の果（加藤一夫）『創造』1
十月の一夜（荒川義英）『反響』1
戯曲 飯（中村吉蔵）『太陽』1
戦争と平和（トルストイ作 相馬御風訳）教文館1
婦人の解放（馬場孤蝶）『へちまの花』1
傀儡の死（江口渙）『新小説』1
地獄（山川亮）『仮面』2
佐吉（**宮地嘉六**）『**新公論**』2
あらくれ（徳田秋声）『読売新聞』2
貧乏道場から（江渡狄嶺）『へちまの花』2
文士と報酬（内村鑑三）〃
「労働者セキリオフ」を読んで（荒畑寒村）『読売』2
汽車の中で（上司小剣）『文章世界』3
白い石の上にて（フランス作 土岐哀果訳）『生活と芸術』3

一月、徳田秋声が読売新聞社を退社した。
同月、月刊『平民新聞』第四号は紙面を転載記事で埋めたので発禁をまぬがれた。
同月、大杉栄たちの『センディカリスム研究会』が『平民講演』と改称され、実際運動に次第に転化し始めた。
一月『新傾向句集』（河東碧梧桐編）刊行。
二月、『生活と芸術』が秩序紊乱の廉をもって発禁の処分を受けた。
同月、長塚節が肺患のため福島医科大学病院にて逝去した。享年三七歳。
同月、月刊『平民新聞』第五号は発禁となった。
三月、馬場孤蝶代議士立候補記念の『現代文集』が出版された。
同月、『平民新聞』第六号が発禁となった。大杉たちはやむなく同誌を廃刊した。
四月、厨川白村が関節炎のために右

二月、在日本支那学生が対支二一カ条要求反対運動を起した。
同月、シンガポールのインド人八〇〇名が反英・独立の示威・暴動を起した。
三月、ベルンにおいて、在外ボリシェヴィキ諸機関の会議が行われ、第三インタナショナル設置について決議した。
同月、ドイツ社会民主党が三たび軍事公債に同意を表した。
同月、ドイツ、国会前庭において反戦の最初の政治的デモが遂行された。
五月、ドイツ国会前庭において休戦要求のデモが行われた。
同月、イタリーがオーストリー・ハンガリーに対して宣戦した。だが、イタリー社会党は依然非戦論を主張しつづけた。
同月、日本政府が、袁世凱政府に最後通牒を発した。二一カ条条約がやがて締結された。
六月、日本労働代表鈴木文治、吉松

『街上不平』（土岐善麿）東雲堂刊3
高等帮間を志願するの書（安成貞雄）『へちまの花』3
山の郷より（岩佐作太郎）〃
荒畑寒村に与う（楠山正雄）『生活と芸術』3
文芸家と政治運動（田中五堂）『中央公論』3
生活否定者の遺書（仲木貞一）『生活と芸術』4
戯曲 二個の生物（秋田雨雀）『文章世界』4
お光壮吉（**上司小剣**）『**中央公論**』4
沈黙（加藤一夫）『創造』4
『雪の線路を歩いて』（小川未明）岡村書店刊4
母の力（ゴルキイ作 土岐哀果訳）『処女』4
入江のほとり（正宗白鳥）『太陽』4
個人主義と社会運動（**大杉栄**）『**早稲田文学**』4
新戦場（徳永保之助）『新評論』5
意気地無し（荒川義英）『反響』5
黒烟の下（小川未明）『第三帝国』5
戯曲 マリアナ（仲木貞一）『生活と芸術』5

足を切断した。
同月、大杉栄は『早稲田文学』誌上で馬場孤蝶立候補問題をとらえて議会運動の分析を行った。
五月、森田草平が『カラマゾフ兄弟』を翻訳出版した。
六月、『へちまの花』が廃刊した。
同月、大杉栄が宮島資夫、青山菊栄神近市子などを生徒として仏蘭西文学研究会を開いた。
七月、雑誌『仮面』が廃刊した。
同月、小島烏水が渡米した。
八月、この頃大杉栄・久津村蕨村・荒畑寒村・山川均らの執筆する『政治と社会』及び労働者に頒布する目的で吉川守邦が発行している『労働者』などの雑誌が多数発刊されるに至った。
九月、加藤一夫が西村伊作を金主として雑誌『科学と文芸』を創刊した。
同月、堺枯川（後山川均参加）、高畠素之、白柳秀湖、山口孤剣たちが雑誌『新社会』を新たに創刊した。『へちまの花』の後継であった。
一〇月、片上伸がウラジオを経てモスコーに赴いた。

貞弥は、子爵渋沢、添田らの勧めによって、カリフォルニヤ労働者大会及び全米労働者大会に出席し、東洋人排斥緩和諒解を求めるために渡米した。
九月、イタリー社会党左翼の提唱によって、スイス・チムメルワルドで国際会議が開かれ、『国際社会主義委員会』を設置し、新インタナショナル創立運動の中心となった。
同月、フランス・統一党内の少数派は革命的サンジカリストと共にチムメルワルド国際会議に参加した。
一一月、ベルリンにおいて休戦要求のデモが行われた。
一二月、ドイツ社会民主党は五たび軍事公債に同意を表した。

峠（平塚らいちょう）『時事新報』5
暗い事件（小川未明）『新潮』6
エンマ・ゴルドマンのイプセン観（本間久雄）『早稲田文学』6
『トルストイ人道主義』（加藤一夫）春秋社刊6
我も亦民衆の一人である（中村星湖）『読売新聞』6
脚本 罪と罰（ドストイエフスキイ作 坪内士行訳）『早稲田文学』7
日々の苦痛（小川未明）『文章世界』7
白い路（西村陽吉）『生活と芸術』7
町裏の生活（小川未明）『中央公論』8
爆発（中村吉蔵）『中央公論』8
袷（荒畑寒村）『新潮』8
『鴉と雨』（与謝野寛）東京・新詩社刊8
夜の白むまで（小川未明）『新日本』9
夜の食堂車（荒川義英）『新潮』9
未来主義の社会的意義（堺枯川）『反響』9
農奴解放を中心として見たる露国の文化（昇曙夢）『科学と文芸』9

同月、牛込芸術クラブに早稲田文学講演会が開かれた。野口米次郎、中村星湖、相馬御風らが講演した。

同月、『近代思想』が大杉栄・荒畑寒村たちの手によって復刊された。名は『近代思想』で復活だったが、実質は『平民新聞』の延長であった。

一一月、『早稲田文学』『近代思想』共に発売を禁止された。共に大杉栄の論文のためであった。

同月五日、売文社楼上で社会主義座談会が開かれた。出席者は伊藤孝、百瀬晋、斎藤兼次郎、添田平吉、吉川守邦、西村陽吉、和気律次郎、宮島資夫、高畠素之など。テーマは『新しい女の将来』であった。

一二月、『近代思想』第三号が発売禁止された。

同月、長田秋濤・平木白星とが逝去した。

同月、今井潤寿美（藤井真澄）『新社会』に投書し、社会主義との接触を深む。

同月五日、売文社楼上にて社会主義座談会がひらかれた。高畠素之の『社会主義と個人主義』のテーマを

漂うがままに（荒川義英）『早稲田文学』10
帰途（宮地嘉六）『新公論』10
予算表（沖野岩三郎）『科学と文芸』10
『本然生活』（加藤一夫）春秋社刊10
『旧き文明より新しき文明へ』（中沢臨川）春陽堂刊10
文芸思潮評論（安成貞雄）『新社会』10
所謂問題文芸と理想と（木下杢太郎）『太陽』10
種族の精神と個体の精神（加藤一夫）『科学と文芸』10
労働運動とプラグマチズム（大杉栄）『近代思想』10
死顔の群より（小川未明）『早稲田文学』11
無明（加藤一夫）『科学と文芸』11
二大思想闘争の事実と意義（相馬御風）『早稲田文学』11
近代個人主義の諸相（大杉栄）『早稲田文学』11
戯曲 赤い鍵（高倉輝）『科学と文芸』12
本間久雄君及び他の諸君を攻撃する理由（安成貞雄）『新潮』12

めぐって、添田平吉、斎藤兼次郎、土岐哀果、西村陽吉たちが参加した。

『社会的近代文芸』（馬場孤蝶）東雲堂刊12
我等如何に生くべきか（相馬御風）単行本12
砲声を聞きつつ（石川三四郎）単行本12
万物は俺にとって無だ（辻潤）『生活と芸術』12
労働運動と個人主義（大杉栄）『近代思想』12
相互扶助論（大杉栄）12

日本プロレタリア文学大系　序　　定価一二〇〇円

一九五五年三月三十一日　第一版発行
一九六八年十二月　五　日　第三刷発行

編者代表　野間　宏
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三二三一～五
振替東京　八四一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

全9巻　第1回配本

★維新の変革を生きた人間たち

明治の群像　全10巻

毎月一冊刊・四六判・各680円

幕末から明治にかけての転換期を生きぬいたさまざまな階層の人びと——志士、知識人、商人、農民、芸人など——の情念をとおして、彼らの体験した歴史の昂揚と挫折を追体験し、人＜もう一つの明治＞の栄光と悲惨を明らかにしたい。＜明治＞のイメージが、もし「負の意味」をもっているとすれば、あえて、その「負の原点」に激突することによって、日本における変革の視点を獲得しようとするものです＝刊行のことば・より

1 開国の苦しみ　市井三郎編

黒船来航、幕藩体制の腐朽、内外の危機を孕んで激動する時代に、明日の日本をめざして、それぞれの立場と心情を賭けた行動が展開される。さまざまな議論の錯雑するなかで、維新の代表的知性たちは、なにを構想し、いかに生きたか。自力で日本を根本的に変革しようとした者たちの負わねばならなかった十字架の苦しみが、激しく訴えかける。

2 戊辰戦争　村上一郎編　11月刊

賊軍として葬りさられた東北諸藩の運命は、明治以降、日本帝国主義下の民衆の姿を象徴したた。日本近代史から＜東日本＞の姿が抹殺され、明治の栄光のかげに埋もれて、その悲惨は長く忘却されてきた。＜勝てば官軍＞の戦争の論理からこぼれ落ちた人間たちの遺恨は、維新の傷痕として、今なお疼きつづけている。

3 明治の内乱　谷川健一編　12月刊

維新の地揺れは、明治政府の成立にもかかわらず、止まなかった。御一新の期待をつぎつぎと裏切られた下級士族、農民の不安と不満は百姓一揆、士族蜂起となって、近代の開幕を血で染めた。古いものと新しいもの、保守的なものと革命的なものとをないまぜながら、神風連、佐賀、萩の乱から西南戦争へと爆発するダイナミズムのなかの人間模様。

4 権力の素顔　後藤総一郎編

日本という統一国家をどのように創りあげるかは、維新をめぐる最大の課題の一つであった。数知れぬ屍の上に、権力の座を占めた明治の顕官、権力から疎外されていった公家、大名、そして、軍隊、教育、警察など、権力機構を思想的、制度的に準備した官僚などを追求して、天皇制創出の政治過程を明らかにする。

5 自由と民権　見田宗介編

発売中

明治の革命の終幕を飾る自由民権の運動は、夕映えのように美しい。国会開設を要求して全国的規模で立ち上がった人びとの胸裡には維新体験が力強く脈うっていた。ここでは、民権運動を根元で支えていた地方在地の民権家に焦点をあて、〃草の根〃に息づく民衆の自由と民権への希求をうたう。

6 アジアへの夢　判沢弘編

欧米帝国主義による植民地化の危機を脱した明治人たちの世界——アジア認識の眼には、民権と国権が微妙に混在していた。民権運動の挫折をアジアの民衆解放に求めて、中国、朝鮮、シベリア、南方に渡っていった日本人たちの悲劇は、ナショナリズムとインターナショナリズムの問題を考える上で、われわれに大きな示唆を与えるであろう。

7 産業の開発　筑波常治編

三百年の鎖国の開放で、最も大きな影響を受けたのは、産業であった。政府の富国強兵政策とは無関係に、民間で、独自の視野から、さまざまな近代産業開発の試みがくりかえされた。ある者は私財を傾けつくし、ある者は不遇のうちに倒れ、そのうちのごく少数者が創業者の栄誉に輝いた。

8 開拓と探検　高倉新一郎編

近代日本の夜明けとのたたかいのなかできりひらいていった探検家、開拓者たちの苦闘の歴史は、明治を彩どるもう一つの栄光であった。沖縄、北海道、樺太など辺境不毛の地に悪疫と飢餓にさいなまれながら挑んだ先人たちの大きな夢と不屈の闘魂の記録は深い衝撃を与えるにちがいない。

9 明治のおんな　紀田順一郎編

社会的・性的二重の奴隷であった女性たちにとって明治の変革は何をもたらしたのだろうか。また、この激動期をどのように生きぬいたのだろうか。芸妓、女医、教育家、女流作家など多彩な群像をとらえ、個我の発揚を求めて身もだえする女性たちの喜びと悲しみをうたう。

10 乱世の庶民　尾崎秀樹編

歴史のなかの庶民の姿については、口にはされるが、その具体像はあまり描かれていない。幕末から明治の乱世を市井の庶民たちは、どう受けとめたのであろうか。歴史的諸事件に参与しながらも、やがてはそれを離れ、陋巷に埋没していった諸人物をとりあげ、庶民的生活の倫理と哀歓をさぐる。

日本
プロレタリア
文学大系
序
三一書房

日本プロレタリア文学大系（全９巻）序　￥1200